

熊本県文化財調査報告 第90集

狸谷遺跡

九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設に伴う埋蔵文化財調査



1987. 3

熊本県教育委員会

狸谷遺跡

—熊本県球磨郡山江村大字山田字狸谷所在の遺跡—



1987. 3

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設に伴う埋蔵文化財の調査を進めております。

ここに報告する球磨郡山江村狸谷遺跡は、昭和59年度に発掘調査を実施したもので、先土器時代から弥生時代にかけての遺構・遺物を検出し、山間部における遺跡の性格を知るうえで、貴重な資料を得ることができました。この報告書が文化財の保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたりましては、日本道路公団人吉工事事務所をはじめ、山江村教育委員会のご協力、並びに専門調査員の先生方の多大のご指導、ご助言を賜りました。ここに心から厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月31日

熊本県教育長 伴 正 善

例 言

1. 本書は、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代～人吉）建設計画に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は、熊本県球磨郡山江村大字山田字狸谷に所在する狸谷遺跡で、日本道路公団福岡建設局からの委託を受けて、熊本県教育委員会文化課が行った。
3. 当遺跡の発掘調査は、昭和59年度に実施し、その整理・報告は、昭和61年度に行った。
なお、出土資料は、熊本県教育庁文化課で一括保管している。
4. 本書は、層序に従って古い時代から順に報告している。
5. 本書に使用した地形図は、日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から提供をうけたものを基礎にしている。
6. 現地調査に関する実測及び写真撮影は調査員で行った。また、遺構の整図は六田育子・本田まゆみが行った。遺物の実測は、主として木崎康弘がこれにあたり、一部中原由子が行った。整図は木崎・中原・六田・加来恭子が行った。
7. 本書の執筆は、主として木崎がこれにあたり、一部を隈昭志（第I章第1節、第III章3）が担当した。
8. 英文要旨は、九州女学院短期大学の高木信之先生に翻訳、トーマス G ネルソン先生に校閲をおねがいをした。ただし、本文における責は、すべて木崎にあることを付記しておく。
9. 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、木崎が担当した。

本文目次

序文	
例言	
第I章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	4
第II章 遺跡の概要	7
第1節 遺跡の環境	7
第2節 遺跡の概要	14
第3節 遺跡の層位と包含層	15
第III章 調査の成果	19
第1節 狸谷I石器文化の遺物	19
1. 遺物の出土層位とその分布	19
2. 出土石器とその分布	20
3. まとめ	104
第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物	105
1. 遺構とその分布	105
2. 石器組成と分布の構成	109
3. 出土石器とその分布	112
4. まとめ	153
第3節 細石器文化の遺物	154
1. 出土遺物とその分布	154
2. まとめ	157
第4節 縄文時代早期の遺構と遺物	158
1. 遺構とその分布	158
2. 遺物とその分布	176
3. まとめ	283
第IV章 総括	287
1. 縄文時代早期の集落について	287
2. 先土器時代について	290
3. 総括	293
SUMMARY	295
参考文献	297
図版	

挿 図 目 次

第1図 地形図……………4	第30図 石器実測図……………55
第2図 球磨川流域の石器石材分布……………8	第31図 石器実測図……………56
第3図 遺跡分布図……………9	第32図 石器実測図……………57
第4図 地形断面図……………14	第33図 石器実測図……………58
第5図 土層図……………15	第34図 石器実測図……………59
第6図 試料の分析結果……………17	第35図 石器実測図……………60
第7図 狸谷Ⅰ石器文化調査区域図……………19	第36図 石器実測図……………61
第8図 遺物分布図……………21	第37図 石器実測図……………62
第9図 遺物分布図(ナイフ形石器) ……22	第38図 石器実測図……………63
第10図 ナイフ形石器の長幅比……………23	第39図 石器実測図……………64
第11図 石器実測図……………25	第40図 石器実測図……………65
第12図 石器実測図……………26	第41図 石器実測図……………66
第13図 石器実測図……………27	第42図 石器実測図……………67
第14図 石器実測図……………28	第43図 遺物分布図 (二次加工ある不定形石器) ……71
第15図 石器実測図……………29	第44図 石器実測図……………72
第16図 石器実測図……………30	第45図 石器実測図……………73
第17図 石器実測図……………31	第46図 遺物分布図(使用痕ある剥片) ……75
第18図 石器実測図……………32	第47図 石器実測図……………77
第19図 石器実測図……………33	第48図 石器実測図……………78
第20図 遺物分布図(搔器) ……38	第49図 石器実測図……………79
第21図 石器実測図……………39	第50図 石器実測図……………80
第22図 石器実測図……………40	第51図 石器実測図……………81
第23図 遺物分布図(削器・挟入石器) ……42	第52図 石器実測図……………82
第24図 石器実測図……………44	第53図 石器実測図……………83
第25図 石器実測図……………45	第54図 石器実測図……………84
第26図 石器実測図……………47	第55図 使用痕ある剥片の長幅比……………87
第27図 遺物分布図 (彫器・揉錐器・礫器) ……50	第56図 遺物分布図(石核) ……88
第28図 石器実測図……………51	第57図 石器実測図……………90
第29図 遺物分布図 (磨石・敲石・石皿・台石) ……53	第58図 石器実測図……………91
	第59図 石器実測図……………92

第60図	石器実測図	93	第91図	石器実測図	137
第61図	石器実測図	94	第92図	遺物分布図（使用痕ある剥片）	139
第62図	遺物分布図（接合資料）	97	第93図	石器実測図	141
第63図	石器実測図	99	第94図	石器実測図	142
第64図	石器実測図	100	第95図	遺物分布図（石核・原石）	145
第65図	石器実測図	101	第96図	石器実測図	146
第66図	石器実測図	102	第97図	石器実測図	147
第67図	石器実測図	103	第98図	石器実測図	148
第68図	配石遺構実測図	105	第99図	遺物分布図（接合資料）	151
第69図	遺物分布図（礫）	106	第100図	石器実測図	152
第70図	礫の重量別傾向	107	第101図	遺物分布図（細石器文化）	155
第71図	遺物分布図（石器）	108	第102図	遺物実測図	156
第72図	遺物分布図 I	110	第103図	遺構配置図	159
第73図	遺物分布図 II	111	第104図	竪穴式住居跡実測図	160
第74図	遺物分布図（ナイフ形石器）	113	第105図	竪穴式住居跡実測図	161
第75図	ナイフ形石器の長幅比	114	第106図	竪穴式住居跡実測図	162
第76図	石器実測図	116	第107図	竪穴式住居跡実測図	164
第77図	石器実測図	117	第108図	集石（石組炉）実測図	165
第78図	石器実測図	118	第109図	集石（石組炉）実測図	166
第79図	石器実測図	119	第110図	集石（石組炉）実測図	169
第80図	石器実測図	120	第111図	配石土坑実測図	171
第81図	石器実測図	121	第112図	配石土坑実測図	172
第82図	石器実測図	122	第113図	土坑実測図	173
第83図	石器実測図	123	第114図	土坑実測図	174
第84図	遺物分布図（三稜尖頭器）	126	第115図	土坑実測図	175
第85図	石器実測図	127	第116図	遺物分布図（土器）	177
第86図	遺物分布図（搔器・削器・彫器・ 楔形石器）	129	第117図	遺物分布図（押型文土器、 楕円文・格子目文）	179
第87図	石器実測図	131	第118図	遺物分布図（押型文土器、 山形文）	180
第88図	遺物分布図（磨石・敲石）	133	第119図	縄文式土器実測図	181
第89図	石器実測図	134	第120図	縄文式土器実測図	182
第90図	遺物分布図（二次加工ある不定形 石器・不明石器）	136	第121図	縄文式土器実測図	183

第122図	縄文式土器実測図	184	第152図	石器実測図	223
第123図	縄文式土器実測図	185	第153図	石器実測図	224
第124図	遺物分布図 (円筒形条痕文土器)	186	第154図	石器実測図	225
第125図	縄文式土器実測図	188	第155図	石器実測図	226
第126図	縄文式土器実測図	189	第156図	遺物分布図(尖頭器)	231
第127図	縄文式土器実測図	190	第157図	石器実測図	233
第128図	遺物分布図(石坂式土器・ 前平式土器・条痕土器)	191	第158図	遺物分布図(削器・抉入石器・ 石匙)	235
第129図	縄文式土器実測図	192	第159図	遺物分布図(石錐)	236
第130図	縄文式土器実測図	193	第160図	石器実測図	237
第131図	遺物分布図(手向山式土器)	194	第161図	石器実測図	238
第132図	縄文式土器実測図	196	第162図	石器実測図	239
第133図	縄文式土器実測図	197	第163図	石器実測図	242
第134図	遺物分布図(塞ノ神式土器)	199	第164図	石器実測図	243
第135図	縄文式土器実測図	200	第165図	遺物分布図(打製石斧・ 磨製石斧・楔形石器・礫器)	245
第136図	縄文式土器実測図	202	第166図	石器実測図	246
第137図	縄文式土器実測図	203	第167図	石器実測図	247
第138図	縄文式土器実測図	204	第168図	石器実測図	249
第139図	遺物分布図(撚糸文土器・ 縄文土器・平椀式土器)	206	第169図	遺物分布図(磨石・敲石)	251
第140図	遺物分布図(その他の土器)	207	第170図	石器実測図	252
第141図	縄文式土器実測図	208	第171図	石器実測図	253
第142図	遺物分布図(無文土器)	210	第172図	石器実測図	254
第143図	遺物分布図(底部)	211	第173図	石器実測図	255
第144図	縄文式土器実測図	212	第174図	石器実測図	256
第145図	遺物分布図(石器)	214	第175図	石器実測図	257
第146図	遺物分布図(石鏃)	215	第176図	石器実測図	258
第147図	石器実測図	218	第177図	石器実測図	259
第148図	石器実測図	219	第178図	石器実測図	260
第149図	石器実測図	220	第179図	石器実測図	261
第150図	石器実測図	221	第180図	遺物分布図(石皿・台石)	265
第151図	石器実測図	222	第181図	石器実測図	266
			第182図	石器実測図	267

第183図	遺物分布図 (使用痕ある剥片) ……………	269	第191図	石器実測図……………	280
第184図	石器実測図……………	270	第192図	遺物分布図 (石製品・土製品) ……………	281
第185図	石器実測図……………	271	第193図	石製品・土製品実測図……………	282
第186図	石器実測図……………	272	第194図	遺物分布図……………	284
第187図	石器実測図……………	273	第195図	遺物実測図……………	285
第188図	石器実測図……………	274	第196図	縄文時代早期集落概念図……………	288
第189図	遺物分布図(石核) ……………	277	第197図	編年図……………	291
第190図	石器実測図……………	279			

表 目 次

第1表	九州自動車道建設地遺跡一覧 (八代～えびの間) ……………	2	第17表	石器計測表 ……………	135
第2表	調査の行程……………	6	第18表	石器計測表 ……………	138
第3表	遺跡地名表……………	11	第19表	石器計測表 ……………	143
第4表	狸谷I石器文化石器組成表……………	20	第20表	石器計測表 ……………	149
第5表	石器計測表……………	34～36	第21表	細石器文化石器組成表 ……………	154
第6表	石器計測表……………	41	第22表	石器計測表 ……………	157
第7表	石器計測表……………	48	第23表	縄文時代早期石器組成表 ……………	216
第8表	石器計測表……………	52	第24表	石器計測表 ……………	227～230
第9表	石器計測表……………	68・69	第25表	石器計測表 ……………	232
第10表	石器計測表……………	74	第26表	石器計測表 ……………	240
第11表	石器計測表……………	85～87	第27表	石器計測表 ……………	244
第12表	石器計測表……………	95・96	第28表	石器計測表 ……………	248
第13表	狸谷II石器文化石器組成表 ……………	109	第29表	石器計測表 ……………	262・263
第14表	石器計測表 ……………	124・125	第30表	石器計測表 ……………	268
第15表	石器計測表 ……………	128	第31表	石器計測表 ……………	275・276
第16表	石器計測表 ……………	132	第32表	石製品・土製品計測表 ……………	283

図版目次

- 図版1 遠景・近景
1. 全景（南方より）
2. 遠景（東方より）
3. 近景（東方より）
- 図版2 土層
- 図版3 狸谷I石器文化の遺物
ナイフ形石器
- 図版4 狸谷I石器文化の遺物
ナイフ形石器
- 図版5 狸谷I石器文化の遺物
1. 搔器
2. 彫器・揉錐器・礫器
- 図版6 狸谷I石器文化の遺物
1. 磨石・敲石・台石
2. 磨石・敲石
- 図版7 狸谷I石器文化の遺物
磨石・敲石
- 図版8 狸谷II石器文化の遺構
配石土坑
- 図版9 狸谷II石器文化の遺物
ナイフ形石器
- 図版10 狸谷II石器文化の遺物
1. ナイフ形石器
2. 三稜尖頭器・搔器
- 図版11 狸谷II石器文化の遺物
削器・彫器・楔形石器・刃器
- 図版12 細石器文化の遺物
- 図版13 縄文時代早期の遺構
1. 1～8号竪穴式住居跡と土坑（東より）
2. 1号竪穴式住居跡（東より）
- 図版14 縄文時代早期の遺構
1. 2号竪穴式住居跡（西より）
2. 3号竪穴式住居跡（西より）
- 図版15 縄文時代早期の遺構
1. 4号竪穴式住居跡（西より）
2. 5号竪穴式住居跡（西より）
- 図版16 縄文時代早期の遺構
1. 6・7号竪穴式住居跡（西より）
2. 8号竪穴式住居跡（北より）
- 図版17 縄文時代早期の遺構
1. 1号集石（東より）
2. 2号集石（南より）
- 図版18 縄文時代早期の遺構
1. 3号集石（東より）
2. 3号集石（北西より）
- 図版19 縄文時代早期の遺構
1. 4号集石（南より）
2. 5号集石（東より）
- 図版20 縄文時代早期の遺構
1. 6号集石（東より）
2. 7号集石（北より）
- 図版21 縄文時代早期の遺構
1. 8号集石（西より）
2. 9号集石（北より）
- 図版22 縄文時代早期の遺構
1. 1号配石土坑（西より）
2. 2号配石土坑（南より）
- 図版23 縄文時代早期の遺構
1. 3号配石土坑（南より）
2. 4号配石土坑（北より）
- 図版24 縄文時代早期の遺構

1. 1号土坑（北より）

2. 2号土坑（東より）

図版25 縄文時代早期の遺構

1. 3号土坑（西より）

2. 4号土坑（西より）

図版26 縄文時代早期の遺構

1. 5号土坑（東より）

2. 6号土坑（東より）

図版27 縄文時代早期の遺構

1. 7号土坑（西より）

2. 8号土坑（南西より）

図版28 縄文時代早期の遺構

1. 9号土坑（西より）

2. 10号土坑（北東より）

図版29 縄文時代早期の遺物

1. 押型文土器（楕円文・格子目文）

2. 押型文土器（楕円文）

3. 押型文土器（山形文）

4. 押型文土器（山形文）

図版30 縄文時代早期の遺物

1. 円筒形条痕文土器

2. 円筒形条痕文土器

3. 条痕土器

4. 手向山式土器

図版31 縄文時代早期の遺物

1. 手向山式土器

2. 塞ノ神式土器

3. 塞ノ神式土器

4. 縄文・捺糸文土器

図版32 縄文時代早期の遺物

1. 無文・刺突文土器

2. 尖頭器・抉入石器

3. 打製・磨製石斧

4. 石製品・土製品

第I章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

昭和52年3月29日付けで日本道路公団福岡建設局から熊本県教育委員会に対し、九州縦貫自動車道（八代～えびの間）の分布調査依頼があり、同年8月4～6日と8月10～12日の2回にわたる分布調査を実施した。その結果、

八代市（東片町古墳群、上片町条里遺構）、球磨郡山江村（淡島遺跡、狸谷遺跡、本城遺跡、高城跡、大丸遺跡）、人吉市（笹栗山遺跡、梢山遺跡、佐無田狩所遺跡、石清水遺跡、七地条里遺構、尾丸横穴群、原城跡、尾丸古塔碑群、七地遺跡、人我胸遺跡、昼子遺跡）

以上、18ヶ所の遺跡が確認された。

狸谷遺跡は、後半の調査でチェックした遺跡の一つである。その際の調査者は隈昭志・杉村彰一、島津義昭、田添夏喜の4名であった。分布調査時の所見は「県道坂本一人吉線、小森集落の西側に台地があり、現在畑地になっている。この台地一帯には縄文時代早期の押型文土器片が散布しており、またこの時期の石器や石材片（黒曜石、玄武岩）が散布しており、縄文時代早期の住居址の可能性がある。」となっている。

この結果を昭和52年9月9日付けで日本道路公団福岡建設局へ回答し、その後日本道路公団から昭和53年4月11日付けで文化庁長官あて協議書が提出され、熊本県教育委員会の意見を付けて同年5月19日付けで文化庁長官あてに発送した。文化庁からは、昭和53年6月12日付けで「熊本県教育委員会と協議の上事前に発掘調査を実施すること。なお、調査の結果、重要な遺構等が発見されたときは、設計変更等によるその保存に配慮すること。」という通知があった。

昭和56年度から熊本県教育委員会は日本道路公団の依頼を受け、各遺跡の試掘を行い、狸谷遺跡については昭和56年1月23日～3月4日に行い、文化課技師木崎康弘、古森政次が担当した。試掘の結果は全面に縄文時代早期の遺構が広がり、弥生時代の遺物も包含され、その下層に先土器時代の遺物を包含していることがわかった。日本道路公団と協議のうえ、本格的な発掘調査は昭和59年度に実施することになり、文化課技師木崎康弘と嘱託宮坂孝宏が担当することになった。

（隈 昭志）

分類番号 遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	要調査面積 (分市面積)	教育委員会の意見
1	栗片町古墳群	八代市栗片町	微高地上に立地する古墳群及び古墳時代の住居址群が想定される。	1,050(28,000)	発掘調査が必要である。
2	上片町条里遺構	八代市上片町	八代平野の栗片町、西片町、中片町、上片町に条里型地割が残っている。その一部に路線が予定されている。	10,000(30,000)	全 上
3	淡島遺跡	山江村 万江字淡島	淡島神社の西側丘陵上に、石器や石材片が散布しており、縄文時代の住居址が存在すると予想される。	800(1,500)	全 上
4	狸谷遺跡	山江村 山田字狸谷	小森集落の西側丘陵のサーブスエリヤ予定地内に、縄文時代早期の押型文土器片、石器や石材片が散布し、住居址が予想される。	2,800(12,500)	全 上
5	本城遺跡	山江村 山田乙、本城	山田川を眼下に望む台地上に土師器片が一面に散布し、生活址が予想される。	3,200(6,000)	全 上
6	高城遺跡	山江村 山田乙、本城	山田川左岸の本城遺跡の奥に、段違いの平坦地と掘り切り状の凹道が残る中世城跡と考えられる。	2,800(4,000)	全 上
7	大丸遺跡	山江村 山田乙、大丸	鬼木川と水田を一望できる独立丘陵で、周辺は切り落とし状の急斜面で城跡の可能性もある。また台地上に古墳時代の住居址が考えられる。	2,700(6,000)	全 上
8	笹栗山遺跡	人吉市 願成寺町笹栗山	笹栗山東の丘陵の西斜面に弥生式土器片、土師器片が散布し、住居址と水田址の可能性もある。	12,000(28,000)	全 上
9	楢山遺跡	人吉市願成寺町	火葬場西側の丘陵上に土師器片が散布し、古代の生活址の存在が考えられる。	2,500(4,000)	全 上
10	佐無田狩所遺跡	人吉市 願成寺町狩所	佐無田の丘陵上に土師器片が散布するほか、相良氏第四代頼後の居館関連の遺構が存在すると予想される。	10,000(54,000)	全 上
11	石清水遺跡	人吉市 願成寺町岩清水	人吉市北部球磨川右岸の丘陵上に、縄文式土器(市来系)、石器や石材片が散布する。縄文時代の住居址が考えられる。	10,000(25,000)	全 上
12	七地条里遺構	人吉市 七地町後菜園	球磨川左岸に広がる条里遺構で、付近に「大坪」の地名が残っている。	3,000(50,000)	全 上
13	尾丸横穴群	人吉市 七地町尾丸	尾丸台地の北側崖面に凝灰岩の露頭があり、ここに古墳時代後期の横穴(6基以上)が存在する。	800(4,000)	発掘調査が必要である。なお装飾構が出現した場合、原状保存が必要である。
14	原城跡	人吉市 七地町尾丸	人吉城関連の原原城の一部をなす城跡と推定され、空堀が残る。また多量の土師質土器片が散布している。	11,000(52,000)	発掘調査が必要である。重要な遺構については保存措置を必要とする。
15	尾丸古塔碑群	人吉市 七地町尾丸	尾丸台地のくびれ部付近に板碑や五輪塔の残欠が積んであり、付近に中世～近世の墓地があったと考えられる。	2,000(2,000)	発掘調査が必要である。古塔碑群は移動保存が必要である。
16	七地遺跡	人吉市 七地町七地	国道219の北、肥後線の東にある丘陵上に、縄文・弥生・古墳時代の土器、中世の土器、陶磁器が散布し、重複した生活址が予想される。	12,000(94,800)	発掘調査が必要である。
17	人我胸遺跡	人吉市赤地 水無町人我胸	人我胸川右岸の小扇状地上に、弥生式土器片、土師器片が散布し、この期の住居址の可能性もある。	1,500(4,400)	全 上
18	屋子遺跡	人吉市 上漆田町屋子	鳩胸川の西の河岸段丘上で、微細な土器片が散布する。	8,000(23,000)	試掘調査を行い、発掘の要、不要を判断する。

（尾へび～八代）第一号発掘調査遺跡自動車道九十九号線 表1

調査の組織

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 岩崎辰喜（昭和57年度文化課長） 米村嘉人（昭和58年度文化課長）

森 一則（昭和59・60年度文化課長） 丸木保賢（昭和61年度文化課長）

調査総括 隈 昭志（課長補佐）

調査・報告書担当 木崎康弘（文化財保護主事、調査・報告書） 古森政次（嘱託、試掘調査）

宮坂孝宏（嘱託、本調査） 中原由子（嘱託、報告書）

専門調査員 三島 格（肥後考古学会会長） 田辺哲夫（日本考古学協会員）

白木原和美（熊本大学教授） 橘 昌信（別府大学助教授、現教授）

甲元眞之（熊本大学助教授） 安蒜政雄（明治大学講師、現助教授）

調査指導及び協力者（敬称略、順不同）

鎌木義昌，小林博昭，堀川 純，亀田修一（岡山理科大学）、上村俊雄（鹿児島大学）、木村幾太郎（佐賀大学）、松藤和人（同志社大学）、安斎正人（東京大学）、柳田康雄（郡山女子大学短期大学部）、高木信之，トーマス G. ネルソン（九州女学院短期大学）、長崎潤一（早稲田大学）、平 俊隆（熊本大学）、松沢垂生（奈良国立文化財研究所）、西田茂（北海道埋蔵文化財センター）、竹尾 進，佐藤宏之（東京都埋蔵文化財センター）、白石浩之，鈴木次郎，御堂島 正（神奈川県立埋蔵文化財センター）、小林広和（山梨県立考古博物館）、麻柄一志（富山県魚津市教育委員会）、佐藤良二（奈良県香芝町教育委員会）、山崎純男，山口讓治，下村 智，杉山富雄，小畑弘己（福岡市教育委員会）、松尾吉高（佐賀県教育委員会）、下川達彌（長崎県立美術博物館）、新東晃一，中村耕治，長野真一（鹿児島県教育委員会）、富田紘一（熊本市立熊本博物館）、高木恭二（熊本県宇土市教育委員会）、高田素次，渋谷 敦（熊本県文化財保護指導員）、椎葉文雄（熊本県人吉市教育委員会）、堀 伎美子（人吉市図書館）、尾里道子，原田史教（人吉市市役所）、溝下昌美（熊本県湯前町中央公民館）、松舟博満，菖蒲和弘，高場一郎，永田 満，和田好史（求麻地方史研究会）、人吉市教育委員会、山江村教育委員会、免田郷土研究会、求麻地方史研究会

調査事務局 林田茂一（昭和57、58年度課長補佐） 佐々木正典（昭和59、60年度課長補佐）

林田敏嗣（昭和61年度課長補佐） 大塚正信（昭和57、58年度主幹・経理係長）

柴田和馬（昭和59、60、61年度主幹・経理係長） 松崎厚生（昭和57、58年度参事）

花田隆二（昭和59年度参事） 森 貴史（昭和60、61年度参事）

谷 喜美子（主任主事）

道路公団 坂巻持千男（人吉工事事務所所長） 古賀文男（人吉工事事務所庶務課長）

村田文敏（人吉工事事務所工務課長） 豊永盛喜 渡久地政樹（担当）

第2節 調査の方法と経過

九州縦貫自動車道は、遺跡が立地する丘陵をほぼ南北に横ぎって、建設される計画である。調査区画の設定は、この自動車道の二つの中心杭を使用しておこなった。

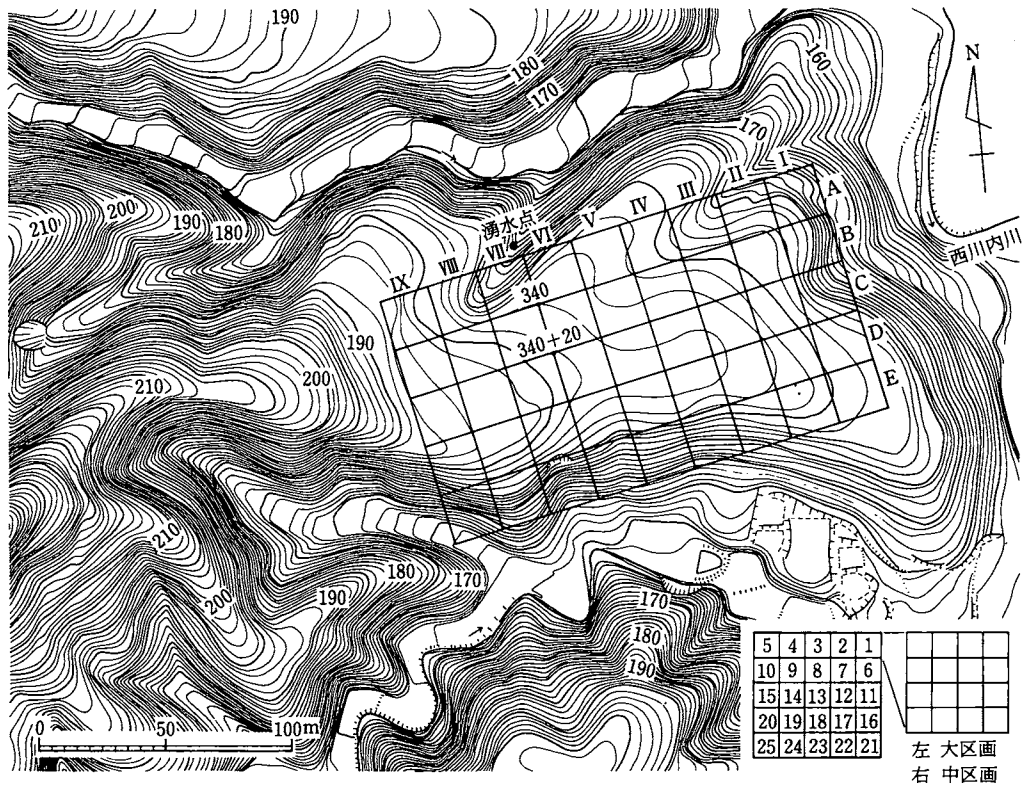
まず、STA340とSTA340+20を結ぶ線を基準とし、20m×20mの大区画を設定した。この大区画の指定は、北東隅から西方へ、I～IX、南方へ、A～Eという呼称によっておこなった(第1図)。さらに、この大区画は、4m×4mの25個の中区画に分割し、1～25という番号を付した。調査の基本単位は、この大区画と中区画である。

調査の手順と方法は、以下の通りである。

まず、重機による表土除去を行い、その清掃の後、トランシットを使用して、4m×4mの中区画を設定した。その際、大区画表示の杭は、所在を明確にするために丸太杭を使用した。この調査区画の設定が終了すれば、本格的な調査の開始である。

調査は、遺構の検出と遺物の検出を中心にして実施した。

遺構は、平面形の確認をおこなった後に、土層観察のための土手を残し、掘り下げた。そしてその観察後、土手を取り除いて全体像を確認する。その間に作製される資料には、 $\frac{1}{10}$ (場合



第1図 地形図

第2節 調査の方法と経過

によっては $\frac{1}{5}$)に縮尺して作る、平面図、土層断面図、断面図などがある。

遺物の検出は、上記した遺構調査の完了後に実施した。検出遺物は、すべて大区画別、基本土層別、遺物の種類別に台帳を作り、遺物番号(註)を付した。この台帳に記載する事項には、土器型式、文様、石器器種、石質、遺物の位置などがある。

こうした発掘調査作業のほか、関連調査として、周辺に分布する遺跡の所在確認調査をおこなった。その成果は、第II章第1節の歴史的環境の項に示している。

次に、調査の経過を月別に示しておこう。

4月 発掘調査の準備および調査の開始。調査事務所の建設。表土剥ぎ作業。調査区画の設定。遺構確認作業。以上が、主な作業内容である。

5月 本格的な調査の開始である。調査は、主にVI BC区とVII BC区から始めた。アカホヤ層を除去し、縄文時代早期の遺構確認をおこなった。しかし、確認面での埋土の状態がとらえにくく、確認作業は、ほとんど進まず。試掘調査時に確認されていた竪穴式住居跡3基と土坑2基を確認した。この他、遺構がみられない部分での包含層の掘り下げもおこなった。

6月 ようやく埋土の状態がつかめるようになる。包含層の掘り下げ中、新たに5基の竪穴式住居跡が姿をあらわした。また、この頃から、先土器時代の遺物が顔を出すようになってくる。

7月 竪穴式住居跡や土坑の実測が完了し、その部分の包含層の掘り下げを開始した。縄文時代の遺物や先土器時代の遺物にまじって、細刃器と細石核も出土する。

8月 雨の多い7月から一変して、強い日ざしの季節となる。調査の主体は、徐々にIX CD区へと移行していった。石組炉・集石・配石土坑が次々に検出され、竪穴式住居跡を遺構の中心となすVII B区との違いが明らかとなった。

9月 調査は、8月に引き続き、IX CD区とVIII CD区を中心におこなった。縄文時代の他、先土器時代の遺物も多く出土する。

10月 4月の表土剥ぎの対象外であった、調査区東側の表土削除を実施した。調査は、VI BC区・V BC区が中心となる。

11月 先月と同様、VI BC区とV BC区が調査の中心となるが、IX CD区での、シラス直下の包含層も調査対象となった。

12月 シラス上位の調査は、V D区、VI D区そしてVII D区へと移り、シラス下位は、10月に引き続いて、IX CD区が対象となる。シラス下位の調査では、ますます遺物量も増加し、安定した石器組成を持つことが明らかとなり、内外から注目される。

1月 調査は、シラス上位でIV D区が調査の対象になり、シラス下位ではVIII CD区へと移った。IV D区では、縄文時代早期の遺物が、予想外に多く出土した。また、遺構もIV D区、III D区、II E区で、土坑や集石を中心に検出された。

第I章 調査の概要

2月 シラス上位ではIII D区が、シラス下位ではVIII CD区が、調査の対象となる。III D区において、縄文時代早期に属する、尖頭器、小型異形石器が出土する。また、調査も終盤に近づき、整理段階となって、土層図などの作成を開始した。

3月 調査終了の月である。II E区とその他掘り残しの部分の発掘を進める一方で、土層図や地形図など、必要な図面の作成や補充をおこなった。また、遺跡遠望などの写真撮影や周辺遺跡の踏査も、あわせて実施した。

以上の経過を踏んで、調査は、3月下旬に無事終了した。関係諸機関への調査終了の報告の後、機材の撤収をおこない、一年に及ぶ調査を閉じることになる。

註 遺物番号には、大区画の表示と、P（土器）、JL（縄文時代石器）、PL（先土器時代A.T.上位石器）、M（同AT下位石器）という略記号を付した。

第2表 調査の行程

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
調査対象時代													
備考	○表土剥ぎ	○縄文時代早期竪穴式住居跡確認			○石組炉確認		○表土剥ぎ	○シラス下位調査開始	○専門調査員 田辺哲夫先生来跡	○専門調査員 橘 昌信先生来跡	○専門調査員 三島 格先生来跡	○専門調査員 安蒜政雄先生来跡	○専門調査員 甲元眞之先生来跡 白木原和美先生来跡

第II章 遺跡の概要

第1節 遺跡の環境

1. 地理的環境

九州島は、地形的に大きく四つに区分される。すなわち、福岡県・佐賀県及び長崎県北半の北部山地、大分県・熊本県北半と長崎県南半の中部火山地域、宮崎県・熊本県南半の中部山地、そして鹿児島県を中心とした南部火山地域の四地域である。その中で、中部山地は、一般に九州山地とも呼ばれ、祖母・国見・市房などの1,700m級の山々が連なる高山地帯である。狸谷遺跡がある人吉盆地は、この中部山地内に大きく口を開けた、標高100m～200mを測る断層盆地である。

盆地の中央部には、東西に貫流する球磨川があり、その流れは、日本三急流に数えられる。そして、この球磨川は、人吉盆地を抜けると、急激に流れを北方に変え、中部山地の谷間を蛇行しながら、八代海へと注ぎ込んでいる。その間の支流は、80本を数え、流域面積は、1,880km²に及び、熊本県総面積の25%を占めている。こうした県下最大の規模を持つ球磨川は、さらに、人吉盆地とその周辺での地形展開の中心を成している。すなわち、球磨川を中心としての沖積地→台地・丘陵地→山地という一連の展開である。こうした地形の展開ではあるが、人吉盆地での地形上の中心を成すものは、台地・丘陵地で、沖積地（細粒質・中粗粒質灰色低地土）の広がり、球磨川とその支流の流路に沿ってみられる。

球磨川南岸の台地・丘陵地の中心は、白髪岳山地の麓に形成された、複合扇状地である。この扇状地には、その中央部（扇央部）で、水流が潜流化するという性質があり、遺跡の分布はこうした地形の性質によっても左右されて、主に、扇頂・扇端部を中心にみられる。こうした地域の他に、下球磨、すなわち人吉市周辺には、始良火山起源の入戸火砕流（シラス）を基盤とする、台地・丘陵地が分布している。一方、北岸には、川辺川によって形成された盆地中央部に広がる広大な扇状地と、それ以外の地域の阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵地がある。このように、球磨川の両岸の台地・丘陵地には、基本的に生成の違いがあることがわかる。

次に、目を山地に移してみよう。球磨・人吉地方では、盆地部に平地がみられるのみで、そのほとんどは、球磨山地が占めている。そして、この山地には、多くの種類の岩石・岩層がみられる。石器時代にあつては、道具の主流が石器であつて、その石器に使用された岩石が、当地産のものかそうでないものかが、問題の一つである。そこで、当地での石器石材にかかわる

岩石・岩層の分布を示しておきたい（第2図）。

狸谷遺跡出土の石器の中で、最も多いのは、黒曜石・珩岩・安山岩である。

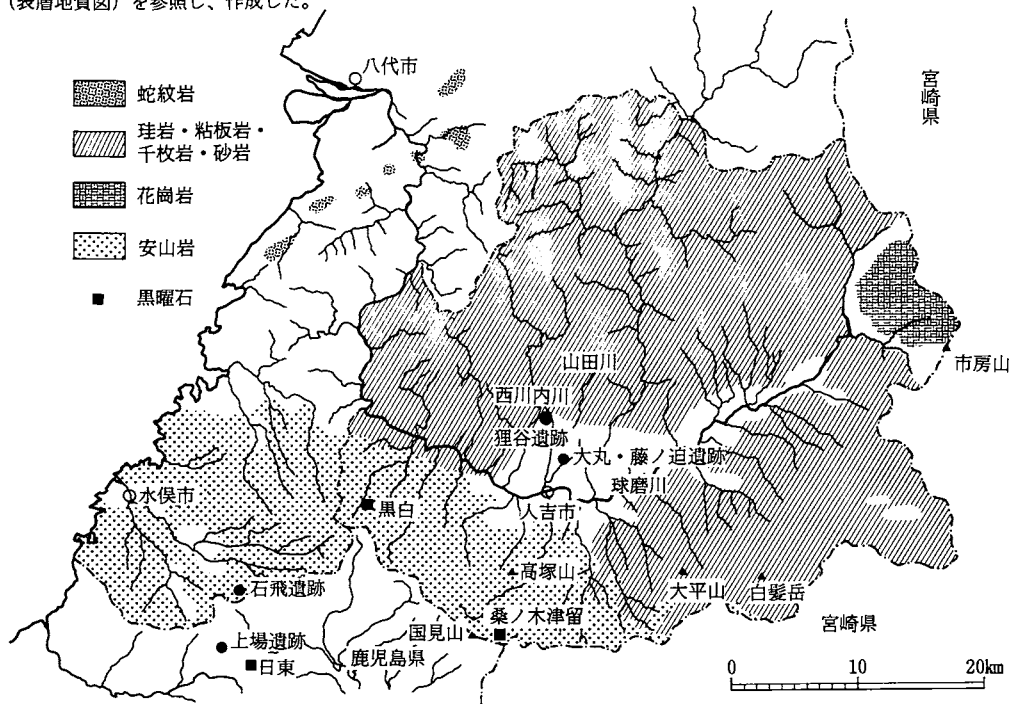
黒曜石は、人吉市桑ノ木津留と球磨村黒白で産出が確認されている。また、鹿児島県大口市日東の産出地も近距離にある。珩岩は、人吉盆地の北側の山地に岩脈があり、その山地を流れる河川や川辺川の扇状地の礫層中にも転石があり、入手が容易である。また、安山岩も同様に入手が容易で、盆地南西に広がる山地の表層を成しており、河川には、多くの転石がみられる。これらの石材の他、石器として利用されている砂岩・千枚岩・花崗岩（盆地東側の市房山周辺）も球磨山地中にみられる。

このように、遺跡の周辺には、多種の石材の産出地が分布し、しかも本流である球磨川には、転石として、すべての種類の岩石が流入している（第2図）。

2. 歴史的環境

狸谷遺跡は、球磨川の支流である山田川のそのまた支流である西川内川の流域にあり、その流域内に点在、分布している遺跡の中の一つにすぎない（第3図）。したがって、遺跡を取り

熊本県発行の『球磨川流域地域環境利用ガイド』（表層地質図）を参照し、作成した。



第2図 球磨川流域の石器石材分布

第1節 遺跡の環境



第3図 遺跡分布図

巻く歴史的な環境は、遺跡に残されたものが、それぞれの時代の中でどのような役割を持って、どのような位置を占めていたのかを考える上での一つの材料となるはずである。

(1) 先土器時代

今日までに確認されている先土器時代の遺跡は、人吉・球磨地方に24箇所あり、その中のほとんどが人吉市や山江村を中心とする地域にある。その所属時期は、ナイフ形石器文化に属するもの15遺跡、細石器文化のもの5遺跡、不明5遺跡である。しかし、ほとんどのものが、表面採集によって確認された遺跡であり、その全体像については、不明な点が多く残されている。

ナイフ形石器文化の中で、もっとも古い石器文化は、3遺跡のものがあり、始良火山の噴火以前にあたる。この中で、本書で報告する狸谷遺跡(5)は、その様相が最も良くわかるもので、ナイフ形石器・搔器・削器・彫器・磨石・敲石等の多くの石器群が検出されている。次に始良火山噴火以後の石器文化は、包含層が比較的浅い部分にあり、15遺跡が確認されている。検出された資料は、ほとんどがナイフ形石器であるが、その中でも、国府型類似のナイフ形石器を出土した鼓ヶ峰遺跡(70)、剝片尖頭器を主体とする石器文化が検出された大丸・藤ノ迫遺跡(48)、およびそこに隣接する高城遺跡(44)、剝片尖頭器が表面採集されている射場ノ本遺跡(106)(松舟・木崎 1981)は、球磨・人吉地方の先土器時代を考える上で、特に、注目される遺跡であろう。

(2) 縄文時代

縄文時代の狸谷遺跡では、早期に属する遺物が、多く出土した。

早期の遺跡としては、大丸・藤ノ迫遺跡、大村遺跡(58)、石清水遺跡(69)、射場ノ本遺跡がある。大丸・藤ノ迫遺跡は、塞ノ神式土器を中心に、多様な土器群が検出され、それに伴って、土坑・小穴を有する土坑・集石・炉穴などの遺構群が確認された。当時の集落の構成と、縄文時代早期の社会での位置を知る上での重要遺跡である。大村遺跡は、押型文土器を中心とした時期の遺跡であるが、その調査によって集石・炉穴などの遺構とともに、押型文土器の他、捺糸文土器・手向山式土器・平椀式土器・捺糸文系の塞ノ神式土器が出土した(赤瀬・椎葉 1979)。この遺跡は、大丸・藤ノ迫遺跡と同じように、球磨川を前面に控えた台地上にあり、山地を背後に擁した遺跡(狸谷遺跡)との比較検討の資料として重要である。このほかに、比較のための遺跡として大量の黒曜石の剝片・碎片が採集されている射場ノ本遺跡がある。また、このほか、狸谷遺跡の周辺には、庚申洞穴を含む多くの縄文時代早期の遺跡があり、これらの遺跡相互の比較は、極めて興味深い。

前期以降の遺跡の中で、その内容が安定・充実してくるのは、後期ないし晩期に属するものである。そうした中で、鼓ヶ峰遺跡では、曾畑式土器・船元式土器が、射場ノ本遺跡では、中期前半の並木式土器が、僅かではあるが出土している。一方、後期の遺跡としては、矢黒神社前遺跡(102)がある。この遺跡からは、縄文時代後期後半に属する土器・石器の他に、石

第1節 遺跡の環境

第3表 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	典拠地	番号	遺跡名	所在地	時代	典拠地
1	平山	山江村大字万江字平山	縄	①	54	牛塚古塚	人吉市上原町牛塚	古墳	⑤
2	光畑	〃 〃 〃 〃 光畑	縄	②	55	六地藏	〃 〃 (宮蒲)字六地藏	古墳	⑧
3	山洪谷	〃 〃 〃 〃 山洪谷	先・縄	①	56	牛塚	〃 〃 牛塚	縄・弥	⑤
4	中山・狸谷	〃 〃 〃 〃 中山・狸谷	先・縄	③	57	村山	〃 城本町村山	縄	⑨
5	狸谷	〃 〃 〃 〃 狸谷	先・縄	④・⑥	58	村山D	〃 〃 〃	縄	⑨
6	庚申	〃 〃 〃 〃 庚申	縄	③	59	〃 C	〃 〃 〃	縄	⑨
7	山洪	〃 〃 〃 〃 山洪	縄	③	60	〃 B	〃 〃 〃	縄	⑨
8	鍋ノ平	〃 〃 〃 〃 鍋ノ平	縄	③	61	〃 A	〃 〃 〃	縄	⑨
9	段岡A	〃 〃 〃 〃 段岡	縄	③	62	城本	〃 城本町字城本	縄	⑩
10	〃 B	〃 〃 〃 〃 同上	縄	③	63	村山城跡	〃 〃 〃 〃	歴	⑧
11	〃 C	〃 〃 〃 〃 同上	縄	③	64	大村横穴群	〃 〃 〃 〃 鳥岡・城本	古墳	⑤
12	又ヶ野	山江村大字山田字又ヶ野	縄	③	65	鬼木古墳	〃 鬼木町字(芦原)	古墳	⑤
13	中野	〃 〃 〃 〃 中野	縄	③	66	人吉高校校庭	〃 北願成寺町字	弥	⑤
14	庚申洞穴	〃 〃 〃 〃 庚申	縄	③	67	佐無田の館	〃 〃 〃 前田	歴	⑧
15	丸岡	〃 〃 〃 〃 丸岡	縄	⑤	68	大村平家城跡	〃 〃 〃 上の寺	歴	⑤
16	万江の城	〃 大字万江字城内	歴	⑤	69	石清水	〃 〃 〃 石清水	縄	⑤
17	中山	〃 大字山田字中山	縄	⑤	70	鼓ヶ峯	〃 〃 〃 鼓ヶ峯	先・歴	⑥
18	山田城A	〃 〃 〃 〃 城山	歴	⑤	71	一本松	〃 〃 〃 一本松	先	⑪
19	〃 B	〃 〃 〃 〃 下城子	歴	⑤	72	平家城原跡	相良村大字柳瀬中原	歴	⑤
20	〃 C	〃 〃 〃 〃 大王谷	縄・歴	⑤	73	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃	弥	③
21	大王神社裏	〃 〃 〃 〃 味園	縄	①	74	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃	縄	③
22	毘沙門堂前	山江村大字山田字寺山	縄	①	75	覚井古墳	〃 〃 〃 〃 覚井	古墳	⑤
23	城(ツカロウ)	〃 〃 〃 〃 寺ノ下	古墳?	①	76	蔵城跡	〃 〃 〃 〃 蔵城	歴	⑤
24	林田	〃 〃 〃 〃 林田	縄	①	77	十島	〃 〃 〃 〃 十島	縄	⑤
25	味園	〃 〃 〃 〃 味園	縄	①	78	人吉ゴルフクラブ	〃 〃 〃 〃	縄	③
26	山江中学校	〃 〃 〃 〃 辻・中辻	縄	①	79	陣の内横穴群	〃 〃 〃 〃 陣の内	古墳	⑤
27	内角	〃 〃 〃 〃 内角	縄	③	80	三石	〃 〃 〃 〃 三石	縄・弥	⑤
28	東中原	〃 〃 〃 〃 東中原	縄	③	81	三石横穴群	〃 〃 〃 〃	古墳	⑤
29	一丸	〃 〃 〃 〃 一丸	縄	⑤	82	井深権現社遺跡	川辺村井沢	先	⑦
30	湯ノ原(古墳群)	〃 〃 〃 〃 湯ノ原	縄・古墳	⑤	83	京ヶ峯横穴群	錦町大字西字京ヶ峯	古墳	⑤
31	油免(古墳群)	〃 〃 〃 〃 油免	縄・古墳	⑤	84	京ヶ峯	〃 〃 〃 〃 同上	縄	⑤
32	東浦(古墳群)	〃 〃 〃 〃 東浦	縄・古墳	⑤	85	一丸	錦町大字西字一丸	縄	⑤
33	京塚	〃 〃 〃 〃 京塚	縄	③	86	迫田・大塚	人吉市七地町字迫田・大塚	古墳	⑤
34	京塚古墳	〃 〃 〃 〃 同上	古墳?	③	87	七地	〃 〃 〃 〃	縄・歴	⑥
35	屋敷下	山江村大字山田字屋敷下	縄	③	88	尾丸横穴群	〃 〃 〃 〃 尾丸	古墳	⑤
36	手石方	〃 〃 〃 〃 手石方	縄	③	89	天道ヶ尾	〃 〃 〃 〃 天道ヶ尾	先～歴	⑥
37	長ヶ峯	〃 〃 〃 〃 長ヶ峯	縄	③	90	原城跡	〃 原城町字原城	歴	⑤
38	別府	〃 〃 〃 〃 別府	縄	③	91	麗	〃 麗町字麗	縄	⑫
39	塚原	〃 〃 〃 〃 塚原	縄	③	92	赤池原	〃 赤池原町赤池原	縄	⑤
40	別府古墳群	〃 〃 〃 〃 別府	古墳	⑤	93	東間	〃 東間上町	縄	⑤
41	鳥越	相良村大字深水字鳥越	縄	⑤	94	白鳥平	〃 がつくり町字白鳥平	縄	⑤・⑫
42	蓑原	山江村大字山田蓑原	縄	③	95	道場原	〃 赤池水内町字道場原	縄	⑤
43		人吉市蓑原町	縄	③	96	唐野	〃 蓑野町蓑町	歴	④
44	高城(跡)	山江村大字山田字高城・本城	先・縄・歴	③	97	人我胸	人吉市赤池水無町字人我胸	縄・弥	⑤
45	城下	〃 〃 〃 〃 城下	弥	⑥	98	昼子	〃 下漆町字昼子	縄	⑤
46	合戦峯A	〃 〃 〃 〃 合戦峯	弥	①	99	茂田	〃 西間上町字茂田	縄	⑤
47	〃 B	〃 〃 〃 〃 同上	弥	⑤	100	岩川内	〃 西間下町字岩川内	縄	⑤
48	大丸・藤ノ迫	山江村大字山田字大丸・藤ノ迫	先・縄・歴	⑬	101	北野	〃 〃 〃 〃 北野	縄	⑤
49	濱谷	〃 〃 〃 〃 濱谷	縄	⑦	102	矢黒神社前	〃 矢黒町字矢黒	縄	③
50	下原	〃 〃 〃 〃 下原	縄	⑦	103	矢黒城	〃 〃 〃 〃 西ノ園	歴	⑤
51	一本松	〃 〃 〃 〃 一本松	縄	①	104	戸越	〃 下戸越町下大坪	縄	⑤
52	下ノ段	〃 大字万江字下の段	縄	⑧	105	戸越坂	〃 〃 〃 〃 字唐渡神	縄	⑤
53	後田	人吉上原町(馬草野)字後田	縄	⑤	106	射場ノ本	〃 上永野町射場ノ本	先・縄	④

① 郡真賢氏の御教示による。

② 松舟博満「消失される遺跡地」『郷土』第11号 1983

③ 木崎菅見

④ 松舟博満・木崎康弘「熊本県球磨・人吉地方の先土器時代資料について」『肥後考古』第2号 1982

⑤ 文化庁文化財保護部「全国遺跡地図 熊本県」1981

⑥ 熊本県教育委員会発掘調査

⑦ 松舟博満氏の御教示による。

⑧ 宮浦和弘氏の御教示による。

⑨ 赤瀬恵・椎葉文雄「松山遺跡調査報告書」1979

⑩ 高橋一郎氏の御教示による。

⑪ 松舟博満「シラスの下の文化層」『くまもと』第3号 1983

⑫ 人吉市教育委員会 発掘調査

⑬ 木崎康弘「大丸・藤ノ迫遺跡」熊本県文化財調査報告第80集 1986

刀の柄部が、採集されている。晩期の遺跡には、立地上で二つの種類の遺跡、すなわち、台地・丘陵地上の遺跡（アンモン山遺跡・天道ヶ尾遺跡）（89）と、それに付属する低地部上の遺跡（アンモン山遺跡・七地遺跡）（87）があり、その二つが一体となって、集落の領域を構成しているようでもある。

（3）弥生時代

球磨・人吉地方の弥生時代は、後期に特徴がみられ、独特な文様を持つ免田式土器が多く出土している。球磨・人吉地方には、この免田式土器を出す遺跡が30ヶ所あり（肥後考古学会1984）、それらが、人吉盆地中央部に集中している。

狸谷遺跡は、この分布域の西端部にあたり、この周辺では、本目遺跡・市房隠遺跡のような有力な遺跡はあまりみられず、大丸・藤ノ迫遺跡や荒毛遺跡、合戦峯遺跡（47）のような小規模遺跡のみである。こうしたことは、球磨・人吉地方の弥生時代後期の中心を成す地域が、広大な沖積地を前面に擁する盆地の中央部にあり、人吉市・山江村に分布する遺跡を中心とした一帯は、その周辺部にあたっていたことを示している。

（4）古墳時代

古墳時代に至っても、その中心舞台は、人吉盆地の中央部にあった。そのことは、前方後円墳である亀塚古墳群、大型の円墳がみられる四塚古墳群・才園四塚古墳群・そして、鬼ノ釜古墳のような有力古墳が、この一帯に広がっていることから伺われる。これに対して、狸谷遺跡周辺は、湯の原古墳群（30）・湯免古墳群（31）・東浦古墳群（32）・別府古墳群（40）のような、小型石室を持つ小円墳群や、大村横穴群（64）・京ヶ峯横穴群（83）等の横穴群のような、盆地中央部に点在する大型古墳とは比較にならないほどの、小規模な墳墓群が分布するという、周辺地域の状態を呈している。

こうした小規模な古墳の他に、人吉市アンモン山遺跡では、南九州系の土器を伴った、古墳時代後期の住居跡2基が確認されている（椎葉他 1985）。こうした事実は、出土した土器に象徴されるような、南九州の文化を基盤とする古墳時代の社会が、狸谷遺跡の付近一帯に存在していたことを表わしているのかもしれない。さらに、大和朝廷による隼人政策の前線基地でもある球磨・人吉地方が、隼人社会を基盤にして成立していたことを示す資料としても注目される。

（5）歴史時代

古代における球磨・人吉地方の中心地域は、依然として、盆地中央部にあったと考えられる。このことは、須恵器や瓦の古窯跡（高山古窯跡・下り山古窯跡等）、古瓦出土遺跡（久鹿寺田遺跡）、蔵骨器出土遺跡（廻り迫遺跡、他4遺跡）、墓誌板出土遺跡（黒田遺跡）のような、有力遺跡のほとんどが、この地域に多く分布していることからわかる。ただ、一方で、人吉周辺もまた、時代が下るにしたがって次第に中心的な地域の一つとなっていったようである。そ

第1節 遺跡の環境

のことを示すものが、『和名抄』に記載されている「人吉郷」の存在であり、平安時代末期の作風を示す仏像の存在（高寺院毘沙門天立像）、そして、中世における人吉の優位であろう。しかしながら、こうした、断片的な資料の他には、古代の人吉周辺の状況を知ることのできるものはほとんど無く、わずかに、凝灰岩製の蔵骨器を出土している塘野遺跡（96）があるのみである。これに対して、中世に入ると、人吉周辺が中心地域となったという資料が、古文書や神社仏閣・中世城跡を中心として、急速に増加するようになる。

しかし、いずれにしても、一般の生活状態を示す遺跡の資料は少なく、この種の資料の発見が期待されている。

註 人吉市鼓ヶ峯遺跡（昭和59～60年度）と同市天道ヶ尾遺跡（昭和60～61年度）、そして、山江村高城遺跡（昭和59年度）は、熊本県教育委員会が調査し、その結果、入戸火砕流直上に包含層がみられる、先土器時代の石器文化が検出された。

第2節 遺跡の概要

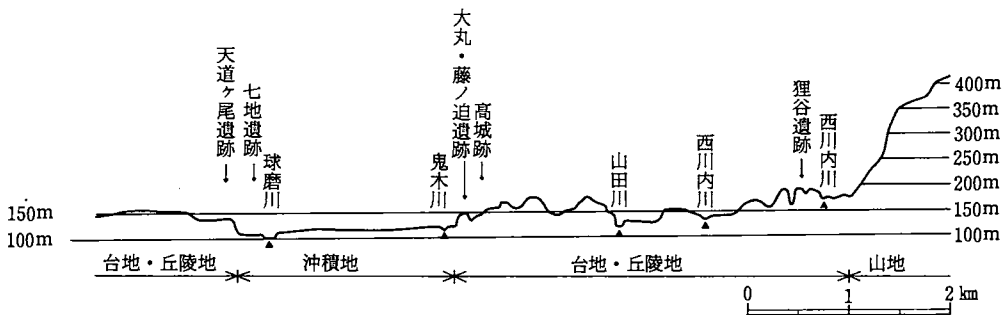
遺跡は、熊本県球磨郡山江村大字山田字狸谷に所在し、山田川の支流である西川内川の右岸の丘陵に立地している。標高は、179m～189mを測る。人吉盆地における位置は、山地と丘陵地・台地との境部分で、視界の狭い山麓にあっている。(第4図)。

当地は、深く入り込む二つの小さな谷にはさまれた狭い丘陵で、西側に急勾配の山部を擁している。遺跡は、この山部が標高189m付近で急に傾斜を緩くして平坦な地形に至る、その平坦部にある。そして、その後、この平坦部は、標高178m付近でまた傾斜を強くして、沖積低地へ至る。この沖積地との比高は、24mである。

平坦部の地形は、北東方向へ走る1本の尾根と、そこから発する3本の支脈、そしてその支脈によってはさまれた谷部によって構成されている(第1図)。特に、丘陵中央の南北にみられる谷部は、丘陵を東西に分ち、当地の地形展開やそれにかかわる人々の生活に大きな影響を与えている。そこで、この谷部周辺を中央部、そして、その東西を西側丘陵、東側丘陵と呼称しておきたい。

遺跡からは、三稜尖頭器や多量の縄文時代早期の遺物がすでに採集され、その一部が報告されてもいる(松舟・木崎 1982)。

先土器時代では、ナイフ形石器文化に属する二つの石器文化が確認された。この二つの文化は、入戸火砕流(シラス)によって、明確に分離されており、その間の混入は考えられない。縄文時代では、細石器を伴う隆起線文土器、早期の集落と多量の遺物が検出された。特に、隆起線文土器は、熊本県下では初めての出土例であり、注目される。また、早期の集落は、その景観を含めた状態で検出されており、当時の集落を考える上での重要な資料となろう。なお、単独出土であるが、縄文時代後期の市来式土器と弥生時代の磨製石鏟が検出された。



第4図 地形断面図

第3節 遺跡の層位と包含層

遺跡では、始良カルデラ起源の入戸火砕流（シラス）をVIII層として、8枚の土層が確認できた。そこで、以下、各層別に、その状態を示していきたい。

第I層 表土層（耕作土）

第II層 黒色土層

この層は、ほとんどが耕作などによって削られており、遺跡の谷部を中心として、わずかに残存しているだけである。しまりが無く、全体的に軟弱な状態を示し、黒ボク土に混じって、わずかにアカホヤのブロックを含む土層である。この層の形成時期は、大丸・藤ノ迫遺跡の調査結果から、歴史時代以降であることが判明している。

第III層 黄褐色土層

アカホヤ火山灰の土層である。この層は、土の性質によって、二つの亜層に分層できる。すなわち、III a層とIII b層である。

第III a層は、遺跡の谷部を中心に分布しているが、その残存範囲は狭い。この層の成因は、土壌化したアカホヤ火山灰の、二次的な堆積によるものと考えられる。そして、その堆積は、火山灰降下直後に始まっている。

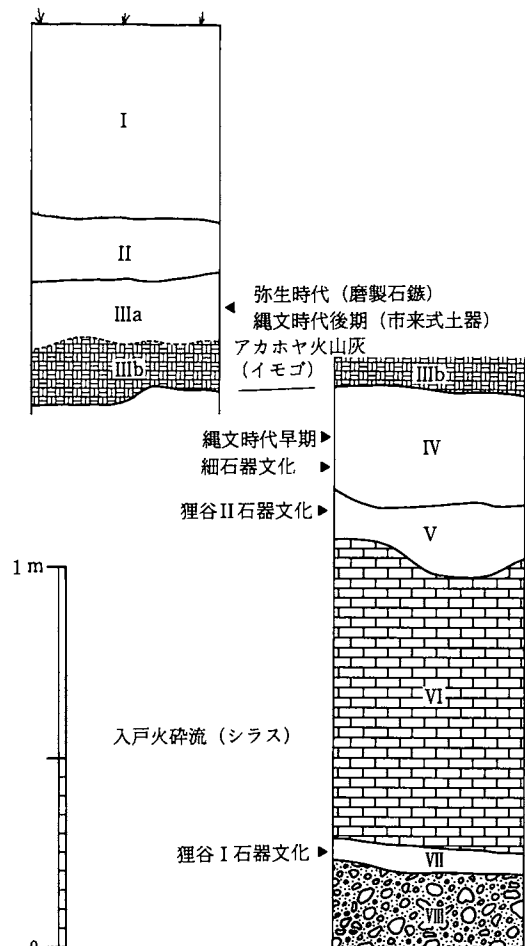
第III b層は、遺跡のほぼ全域に分布・残存し非常に硬くしまった、アカホヤ火山灰の一次堆積層である。無遺物層である。

第IV層 褐色土層

縄文時代早期の遺物を包含する土層である。分布は、遺跡全域に広がっている。土質としては、しまりがあり、粒子も比較的細かい。縄文時代早期の遺物の包含状態は、この層の中で、数型式の土器が混在したかたちでみられ、その層位的な分離は不可能である。

第V層 褐色土層

シラスが土壌化して、二次的に堆積した土層で、わずかに粘性を帯びる。土層の分布は、遺跡の全面で確認できた。先土器時代の包含層で



第5図 土層図

ある。

第VI層 黄色火山灰層

狸谷II石器文化の基底層を成すもので、入戸火砕流（シラス）の二次堆積層で、粒子が荒く極めてしまりがある土層である。上部にはクラックが走る。無遺物層である。

第VII層 暗褐色粘質土層

粒子は細かく、粘性を帯びる層である。狸谷I石器文化の包含層をなす。

第VIII層 礫層

調査に関連して、地質調査も実施した。この結果については、すでに、専門調査員である柴田喜太郎氏により、熊本県文化財調査報告 第61集『曲野遺跡II』において公表されている。以下、その結果を抜粋して示す。

狸谷遺跡の堆積物の分析

試料の採取方法

狸谷遺跡の試料は、深掘溝の壁面より採取した。試料は壁面に附着する崩落土を除去した後、上位より下位へ全層を厚さ10cmに区分して、全ての層準の試料を採取した。

分析方法

採取した試料について、火山ガラス含有率（粒数%）、重鉍物含有率（重量%）、火山ガラス附着重鉍物含有率（粒数%）、重鉍物組成（粒数%）、火山ガラスと輝石類の屈折率を検討した。各々の分析方法は次のとおりである。

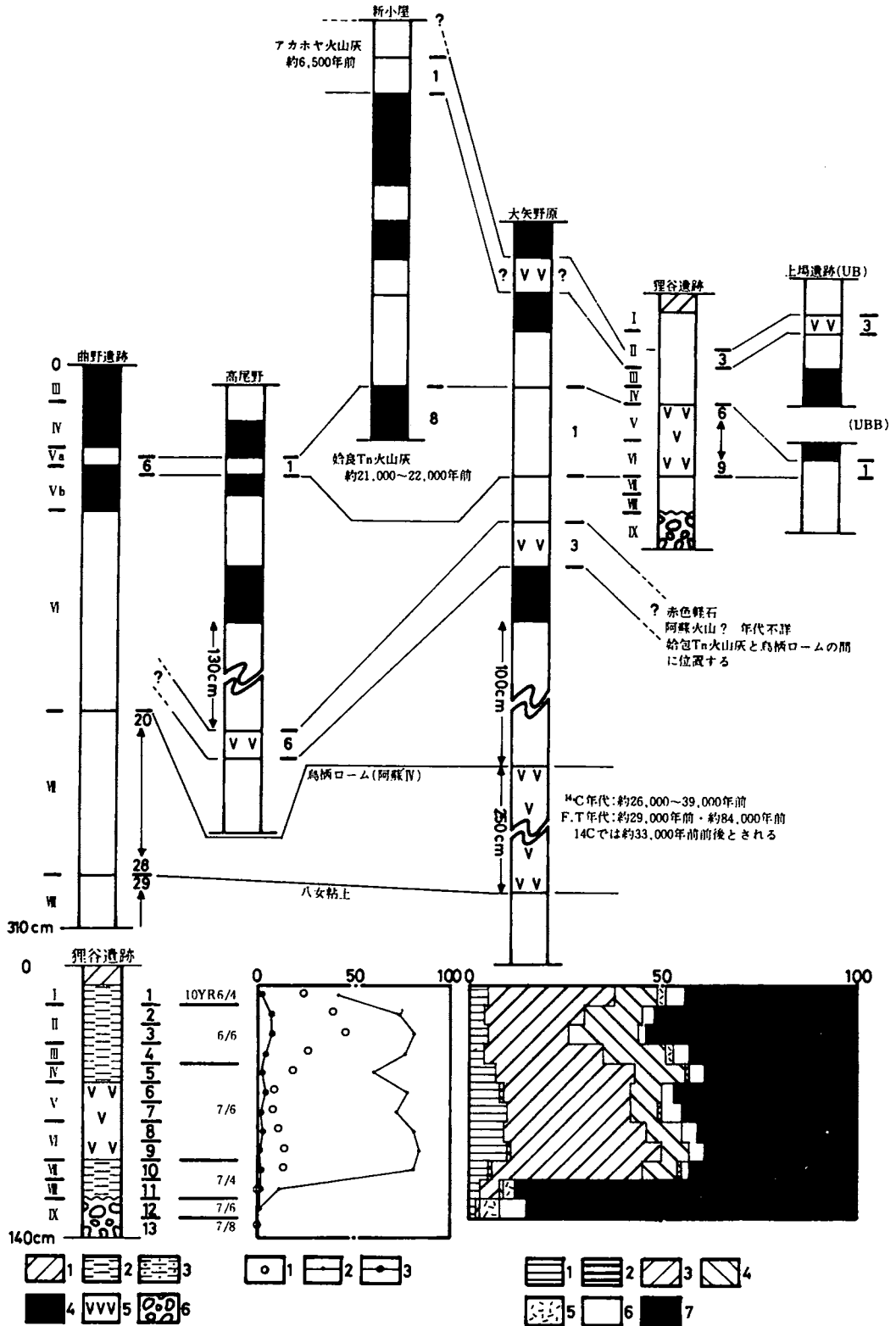
火山ガラス含有率：乾燥試料約50gを取り、115#（0.125mm）と250#（0.0625mm）の標準篩を用いて篩分し、115#～250#篩の間に残る微細砂（粒径0.125mm～0.0625mm）を分離する。次にこの微細砂を用いてプレパラートを作り、偏光顕微鏡下で鉍物粒子250～300粒中に占める火山ガラスの粒数%を求めた。集計に際して稲科植物に起源をもつ植物珪酸体は除外した。

重鉍物含有率：微細砂3～5gを四臭化エタン（比重2.965）を用いて処理し、微細砂中の重鉍物を分離した。次に重鉍物の重量を求め、原試料中の重鉍物重量%を算出した。

火山ガラス附着重鉍物含有率：分離した重鉍物を用いてプレパラートを作り、偏光顕微鏡下で重鉍物250～300粒の火山ガラス附着重鉍物の粒数%を求めた。

重鉍物組成：火山ガラス附着重鉍物含有率を求める際に使用したプレパラートを用い、偏光顕微鏡下で重鉍物250～300粒中の各種鉍物種の粒数%を求めた。各試料の重鉍物組成は、普通角閃石、酸化角閃石、斜方輝石、単斜輝石、雲母類、その他（ジルコン+変質鉍物+不明）、不透明鉄鉍物に区分して組成比を求めた。

第3節 遺跡の層位と包含層



第6図 試料の分析結果

第II章 遺跡の概要

火山ガラス・斜方輝石の屈折率：火山ガラス含有率、火山ガラス附着重鋳物含有率、重鋳物組成の検討を基礎にして、火山噴出物が含まれていると判断された試料について、浸液法により火山ガラスと斜方輝石の屈折率を測定した。

狸谷遺跡の分析結果

火山ガラス含有率は、I層～III層とV層～VII層の範囲に顕著な増加があり、各々80粒数%を超えるが、VIII層IX層では15粒数%以下になり、IX層では1粒数%以下になる。重鋳物含有率はII層の範囲で7重量%を示すが、下位に向って減少する傾向を示す。火山ガラス附着重鋳物含有率は、I層～IV層、V層～VII層、VIII層～IX層に3区分できる。I層～IV層では最大45粒数%を超える含有率を示し、V層～VII層では8粒数%～14粒数%、VIII層～IX層では3粒数%以下になる。重鋳物組成では、重鋳物含有率と同様に3層準に区分できる。I層～III層は角閃石類がやや増加し単斜輝石が減少する。VIII層～IX層では不透明鉄鋳物が急増し、各閃石類と輝石類は激減する。雲母類はわずかに増加する。

(広島大学理学部地鋳教室 柴田喜太郎)

註

- 柱状図凡例 1：埋土 2：シルト 3：砂まじりシルト 4：有機質シルト(暗色帯)
5：軽石(露頭で識別可能なもののみ示す) 6：段丘礫
- 分析値凡例 1：火山ガラス附着重鋳物含有率(粒数%) 2：火山ガラス含有率(粒数%)
3：重鋳物含有率(重量%)
- 重鋳物組成凡例 1：普通角閃石 2：酸化角閃石 3：斜方輝石 4：単斜輝石
5：雲母類 6：その他 7：不透明鉄鋳物

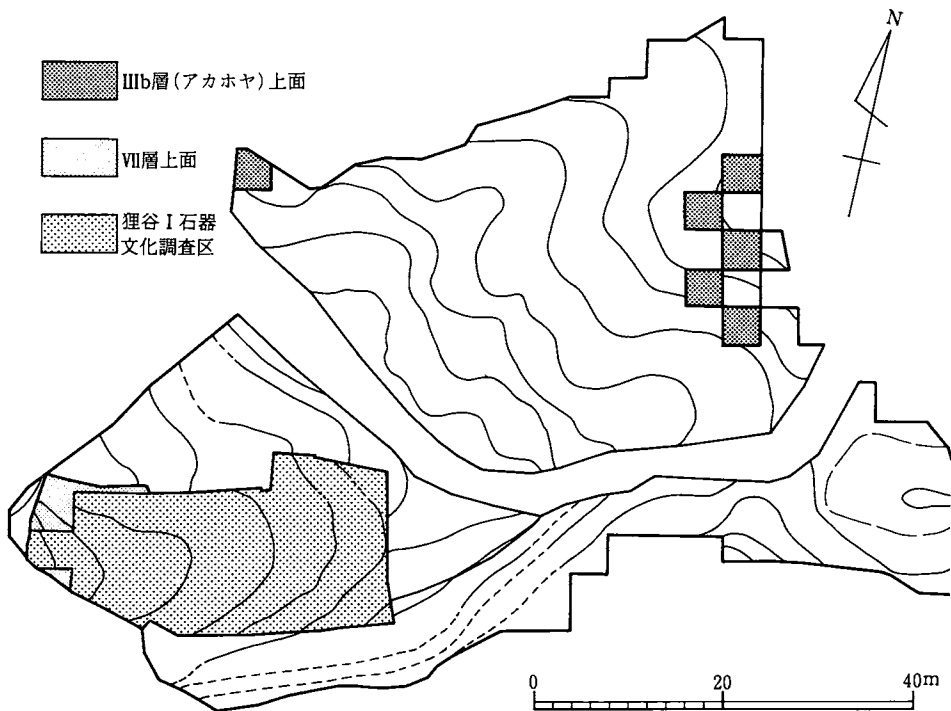
第III章 調査の成果

第1節 狸谷 I 石器文化の遺物

1. 遺物の出土層位とその分布

狸谷 I 石器文化の調査は、遺跡西側の山つき部、調査区名ではⅧC 16～18・21～25、ⅧD 1～15、ⅨC 21～23、ⅨD 1～8・11～13において実施した（第7図）。その調査対象面積は、約530m²である。

遺物の出土層位は、遺跡の基本土層の中で、第Ⅶ層、すなわち、始良火山灰（AT）の第Ⅵ層と、砂礫層である第Ⅷ層とにはさまれた部分にあっている。包含層であるこの層は、第Ⅱ章でも触れたように、茶褐色に近い、暗褐色の極めて粘性に富んだ土層である。層厚は、10～15cmと、比較的薄く、遺物は、この薄い層にほぼまんべんなく包含されている。その包含状態は、地下水の流路（臨時）と僅かな攪乱があるが、60～130cmの厚さを持った無遺物層の第Ⅵ層に覆われ、極めて良好であった。



第7図 狸谷 I 石器文化調査区域図

第三章 調査の成果

遺物は、東北東に走る尾根線（傾き6%）を中心にして、調査区のほぼ全域にわたって出土している（第8図）。その分布域の規模は、すべて完全に把握はできないが、調査区西側で遺物分布が切れ、東側でも遺物量が少なくなって、分布の周辺部に近い状態を示していることから、東西40m前後と推定できる。また、調査区北側に谷部を擁していることから、南北の広がりが20mを大きく越えることはないであろう。したがって、この分布域は、約700㎡に広がる楕円形を呈するものと推定される。この他、この分布の丘陵における占地の状態をみれば、谷部に沿うという特徴があり、このことから、谷部を介して調査区域外の対岸にも、遺物分布域の存在が想定できそうである。

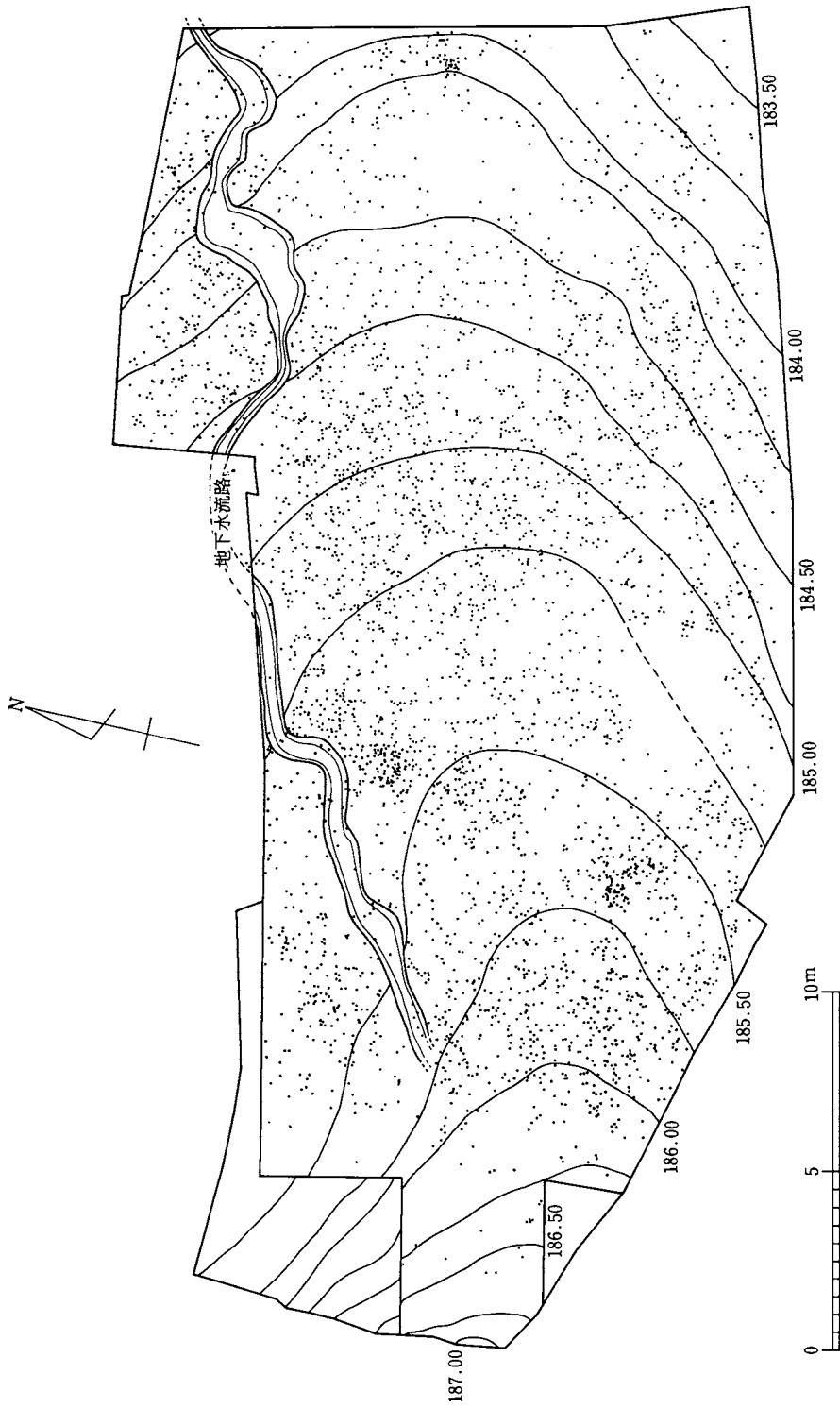
2. 出土石器とその分布

出土した遺物は、すべて石器関係の資料であり、その総数は、3783点である（第4表）。その内訳は、ナイフ形石器105点、搔器14点、削器23点、抉入石器15点、彫器3点、揉錐器1点、礫器2点、磨石・敲石71点、石皿・台石12点、二次加工ある不定形石器26点、使用痕ある剥片112点、石核56点、剥片・碎片3343点である。石材は、珪岩が2207点、そして黒曜石が1130点と、この2種類で遺物全体の9割近くを占め、これに付属して、安山岩（357点）、砂岩（85点）、頁岩（8点）がみられる。

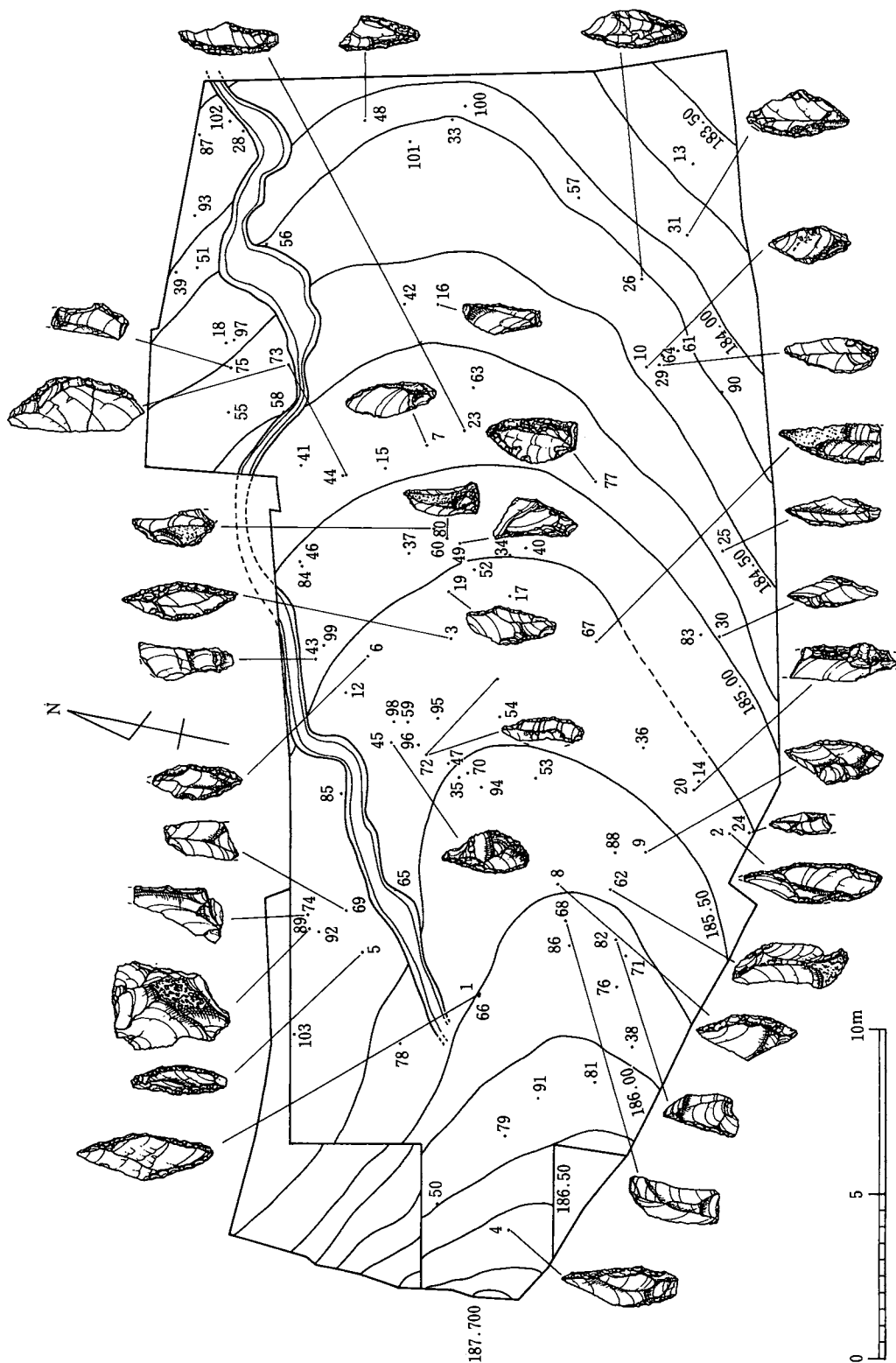
第4表 狸谷1石器文化石器組成表

器種	計(%)	珪岩	黒曜石	安山岩	砂岩	頁岩
ナイフ形石器	105 (27)	46 (44)	54 (51)	5 (5)	—	—
搔器	14 (4)	10 (71)	3 (21)	—	—	1 (8)
削器	23 (6)	17 (74)	4 (17)	1 (4.5)	—	1 (4.5)
抉入石器	15 (4)	13 (87)	2 (13)	—	—	—
彫器	3 (0.55)	2 (67)	1 (33)	—	—	—
揉錐器	1 (0.15)	1	—	—	—	—
礫器	2 (0.3)	1 (50)	—	1 (50)	—	—
磨石・敲石	71 (19)	—	—	2 (3)	69 (97)	—
石皿・台石	12 (3)	—	—	—	12	—
二次加工ある不定形石器	26 (7)	15 (57)	9 (35)	1 (4)	—	1 (4)
使用痕ある剥片	112 (29)	77 (69)	31 (27.6)	1 (0.7)	—	3 (2.7)
石器総計	384 (10)	182 (47)	104 (27)	11 (3)	81 (21)	6 (2)
石核	56 (2)	37 (66)	14 (25)	3 (5)	—	2 (4)
剥片・碎片	3343 (88)	1988 (59)	1012 (30)	343 (11)	—	—
総計	3783	2207 (58)	1130 (30)	357 (9)	81 (2)	8 (1)

第1節 狸谷 I 石器文化の遺物



第8図 遺物分布図



第9図 遺物分布図 (ナイフ形石器)

ナイフ形石器 (第11図 1～第19図103)

ナイフ形石器は、105点出土したが、その内、欠損品 2 例の接合 (72・73) があったため、実質の資料点数は、103点である。石材ごとの内訳は、黒曜石54点、珪岩46点、安山岩 5 点で、黒曜石と珪岩の占める割合が圧倒的に高い。

分布は、そこに粗密の差はあるにしても、調査区にほぼまんべんなくみられ、なんらかの偏在の傾向を指摘することは、ほとんど意味のないことかもしれない。ただ、現象面だけをとりえれば、尾根頂部の標高185.50mの等高線付近から、尾根線に沿って北東方向に延びる分布と、それを取り巻くように広がる二つの分布があるようであり、それぞれの分布域の間は、2～3mの空白部があるようでもある。

103点のナイフ形石器は、さらに、刃潰し加工の部位によって第 1 類と第 2 類とに分類できる。以下類ごとに示していこう。

第 1 類 (1～56)

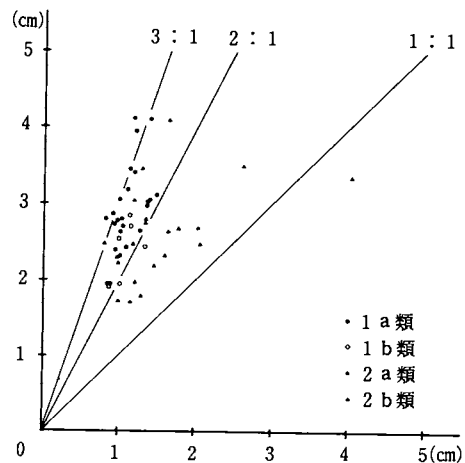
第 1 類のナイフ形石器は、石器本体の二側縁に刃潰し加工がみられるもので、その側縁部と刃部とによる、鋭い先端部に特徴がある。さらに、この第 1 類は、茂呂 (九州) 型ナイフ形石器と呼称されるもの a (1～15・17～31・34～42・46・50・52) と切出し状のナイフ形石器 b (16・32・33・43～45・47～49・51・53～56) との二つに細分されるようである。

1 a 類のナイフ形石器は、狸谷 I 石器文化を特徴付けるものの一つで、形状の推定可能なもので42点が検出された。石器本体の形状は、片側縁ないし両側縁がやや丸みを持った柳葉形をとるものを基本とするが、20のような、茎を持つ例外もある。大きさは、長さ1.95～4.1cm、幅0.7～1.5cmで、その長幅比は、3.4:1～2:1にあり、特に3:1前後に集中するようである (第10図)、強い規格性が伺われる。

1 b 類のナイフ形石器は、14点が検出されている。石器本体の形状は、両側縁が直線的で、切出し状をとっている。大きさは、長さ1.92～2.85cm、幅0.85～1.35cmで、その長幅比は、2.5:1～1.8:1と、2:1付近に偏り (第10図)、1 a 類とは傾向を異にした規格性が認められる。

第 2 類 (57～90・92)

第 2 類のナイフ形石器は、一つの側縁ないし縁辺の一部に刃潰し加工がみられるもので、35点出土した。1 a 類のナイフ形石器と同様に、狸谷 I 石器文化を特徴付けるものである。この石器は、さらに加工の度合によって、側縁全体にわたって



第10図 ナイフ形石器の長幅比

加工がみられるもの a (72・82・84・88・90) と、縁辺の一部のみに限られるもの b (57・71・83・89・92) に細分される。

2 a 類ナイフ形石器は、側縁全体にわたって、曲線的ないし直線的な刃潰し加工がみられるもので、17点検出された。石器の形状は、素材となる剥片の形状に大きく左右されるため、不揃いである。大きさは、長さ1.75～4.1cmで、幅0.78～1.79cmで、長幅比は、3 : 1～1.4 : 1 にあたり、その中でも、特に1.5 : 1 付近のものが、もっとも多い(第10図)。

2 b 類ナイフ形石器は、素材となる剥片の縁辺の一部に刃潰し加工がみられるもので、18点が出土した。この18点のナイフ形石器は、さらに加工の状態により、素材となる剥片の一端を斜めに折り取っているものや、縁辺のほんの一部に加工がみられるものなどがある。石器の形状は、2 a 類と同様に不揃いであり、そのことを示すように、2.6 : 1～0.8 : 1 と長幅比の範囲がさらに広くなり、しかも偏りの傾向を示さず散在的である(第10図)。

所属不明のナイフ形石器片 (91・93～103)

所属不明のナイフ形石器が12点あった。その中で、しいて所属を挙げれば、101～103が1 a 類に、93と96が1 b 類に、99が2 類に属する可能性が高い。

ナイフ形石器の製作

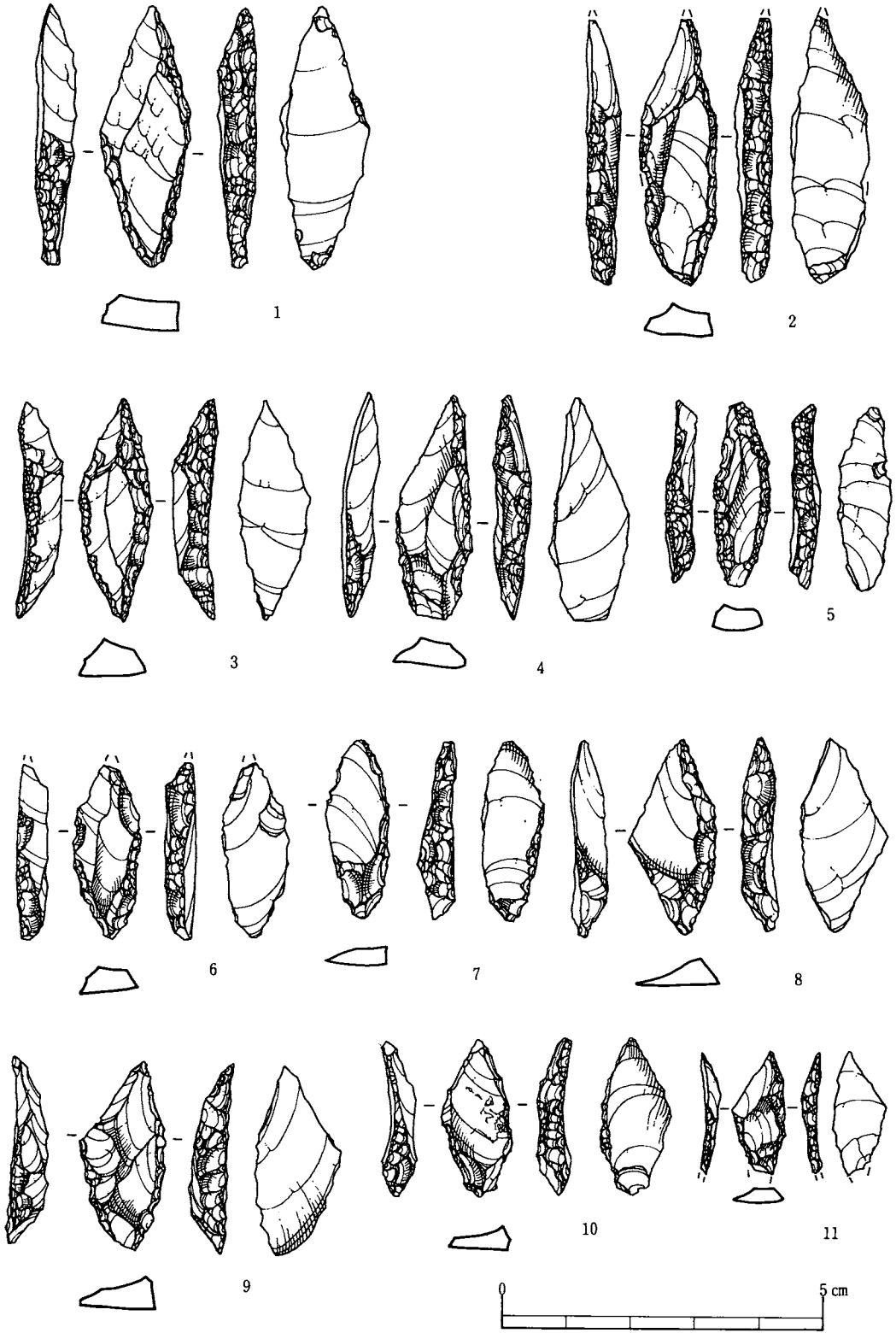
ナイフ形石器の製作について、素材となる剥片とその使い方、そして、それに加えられる調整加工を中心にして、みていこう。

1 a 類のナイフ形石器の素材は、15・27で横長剥片が使用されてはいるが、ほとんどのものは、縦長剥片である。ただ、縦長剥片では、刃器状剥片のような形状の整ったもの(20・22・29・37など)は少なく、寸詰りで、幅広のものが多く使用されている。剥片の表面に残された剝離痕と裏面との関係では、すべて同一の剝離方向のもの14点、対向するもの7点、直行するもの16点がある。

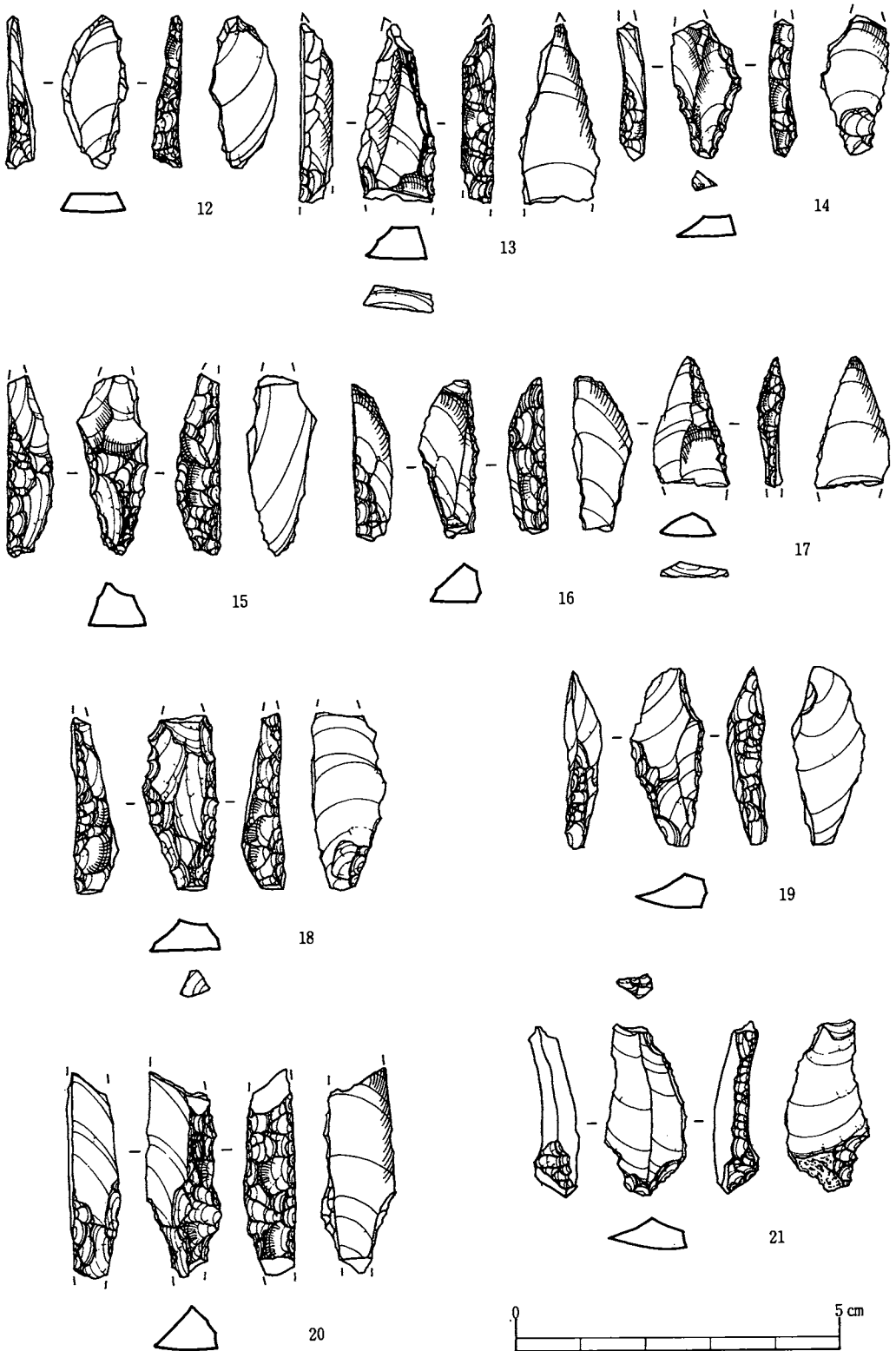
石器本体の中での剥片の打面部の位置では、上位のもの5点、下位に置かれているもの18点(内、打面残置6点)、側縁上部右位11点、同左位2点、側縁中部右位1点、同左位1点、側縁下部右位2点、同左位2点があり、下位に置かれているものが最も多い。このことを整理すれば、剥片と石器との主軸がほぼ同一のもの23点、やや傾斜するもの17点、直行するもの2点という素材利用のあり方の傾向が指摘できる。

次に、調整加工についてみてみよう。ナイフ形石器に特徴的な調整加工は、急角度の刃潰し加工である。この加工は、主に、石器本体の裏面側から表面側に向けて、加圧されるものが中心である。ただ、場合によって、表面側からのものが観察されることも多い。狸谷 I 石器文化のナイフ形石器では、対象資料数34点中17点にみられる。その加工部位は、先端部が最も多く12点、胴部が4点、そして基部が1点で、石器先端部の稜調整が、この種の加工の中心となっていることを示しているといえる。この他に、裏面基部加工がみられるものが9点ある。また、

第1節 狸谷 I 石器文化の遺物

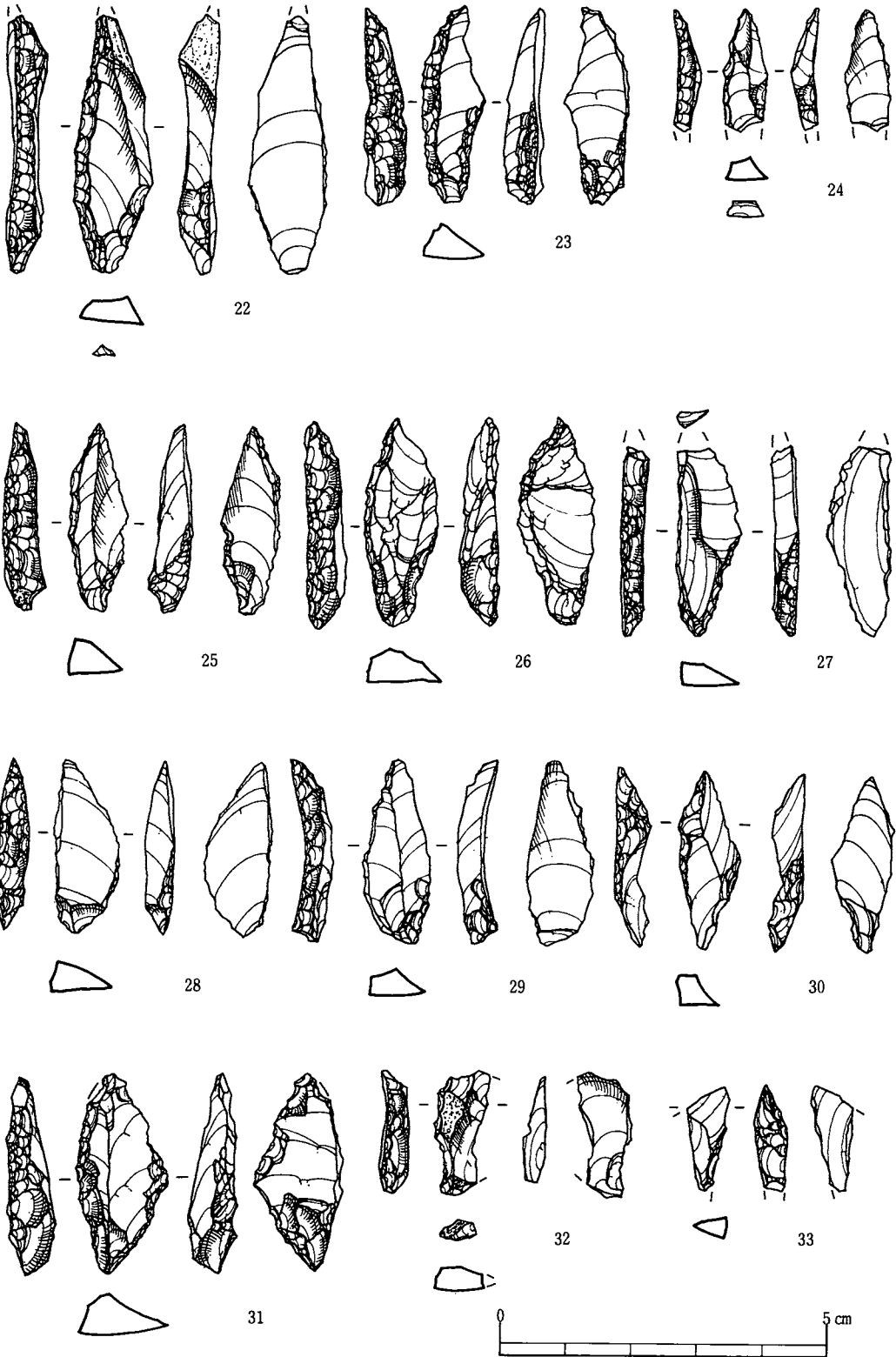


第11図 石器実測図

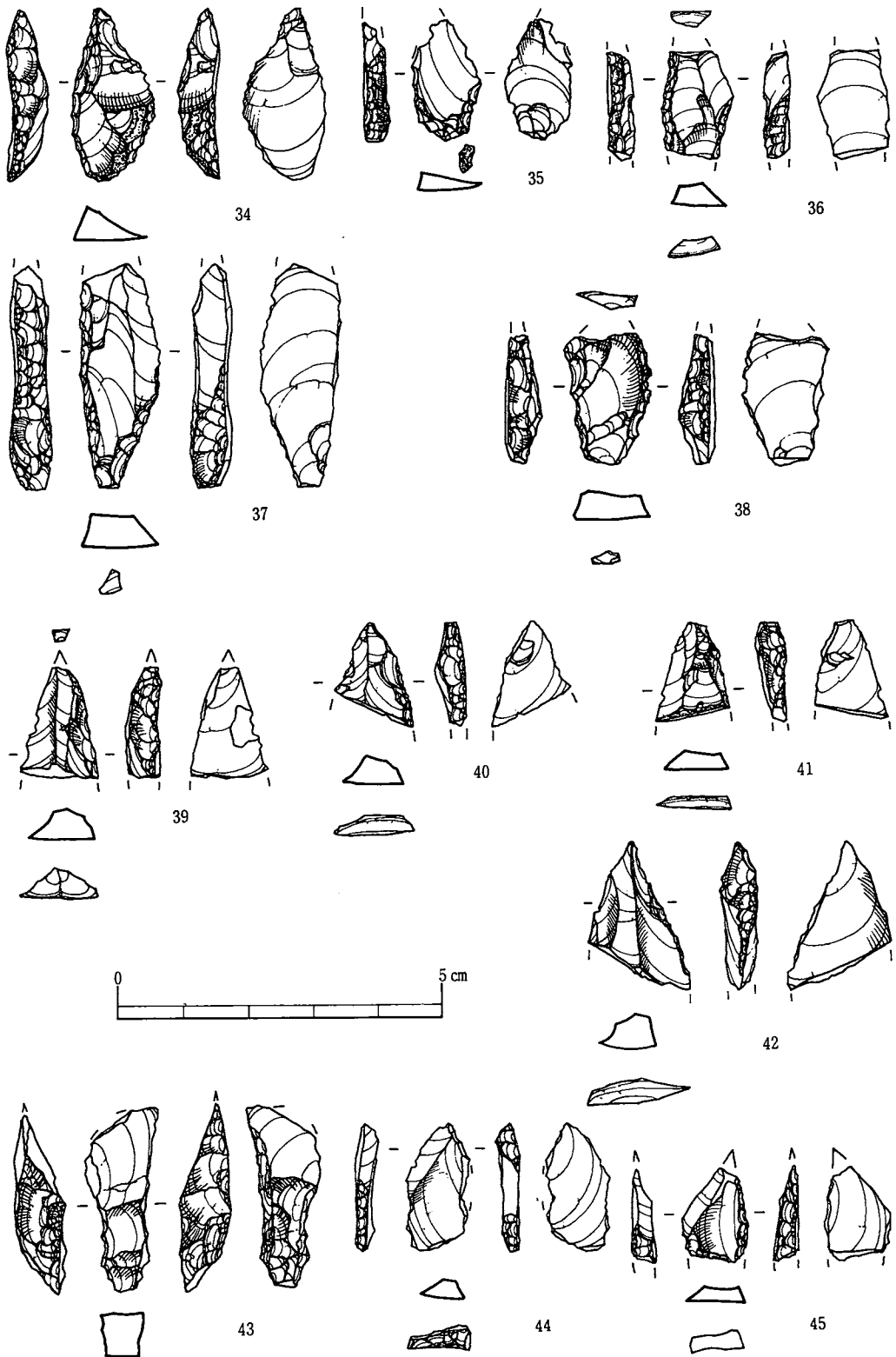


第12図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物

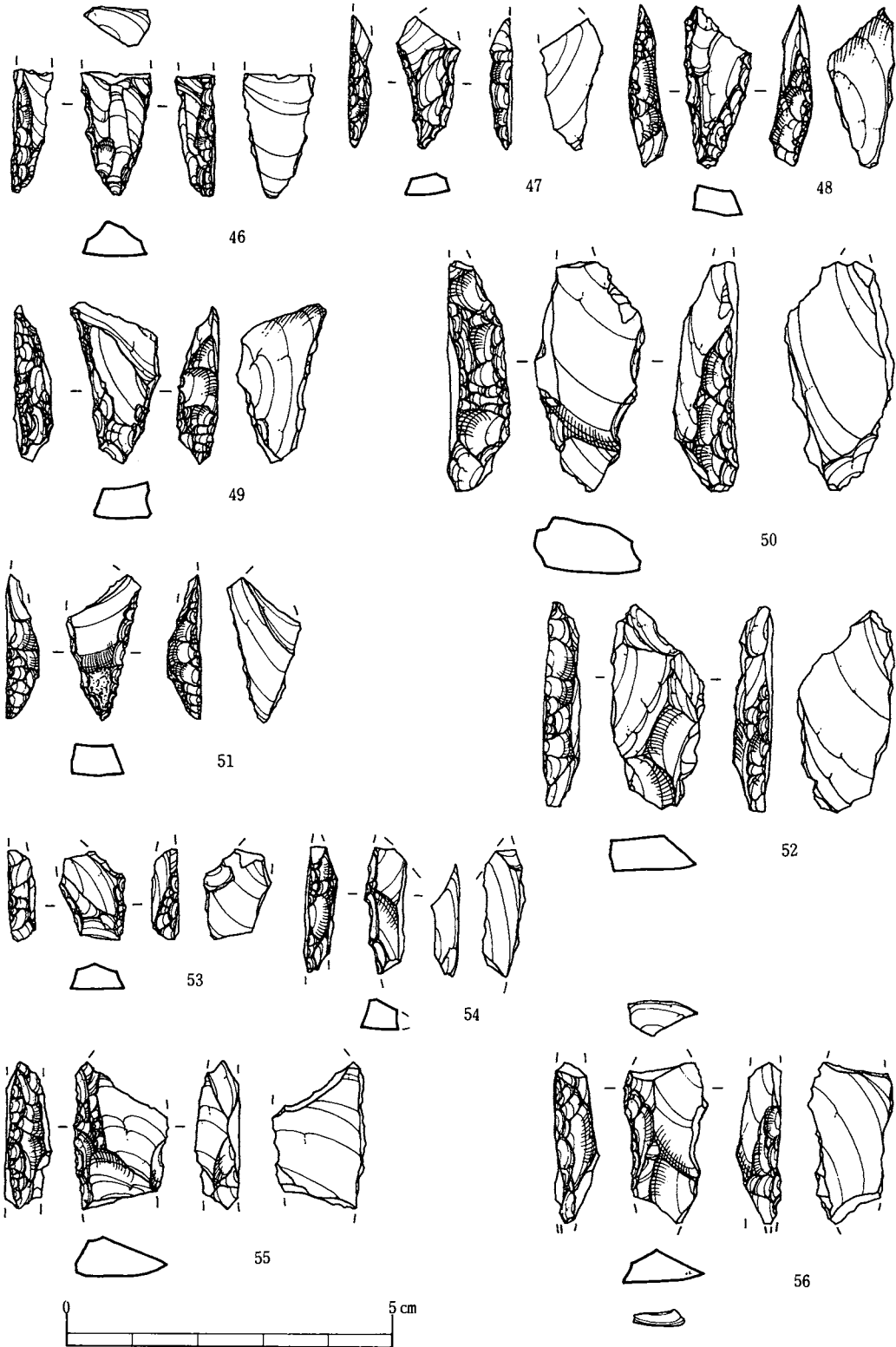


第13図 石器実測図

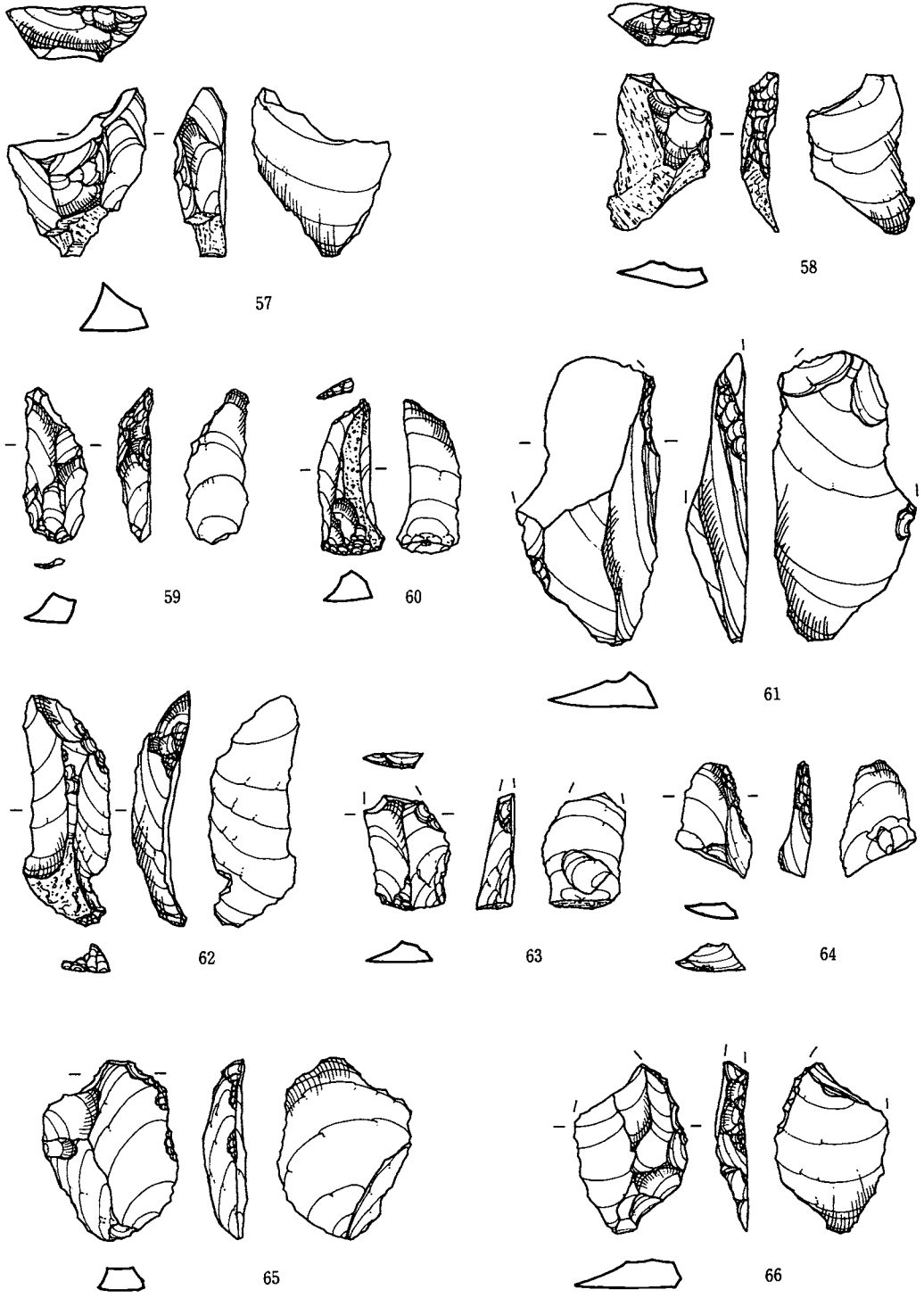


第14図 石器実測図

第1節 狸谷 I 石器文化の遺物

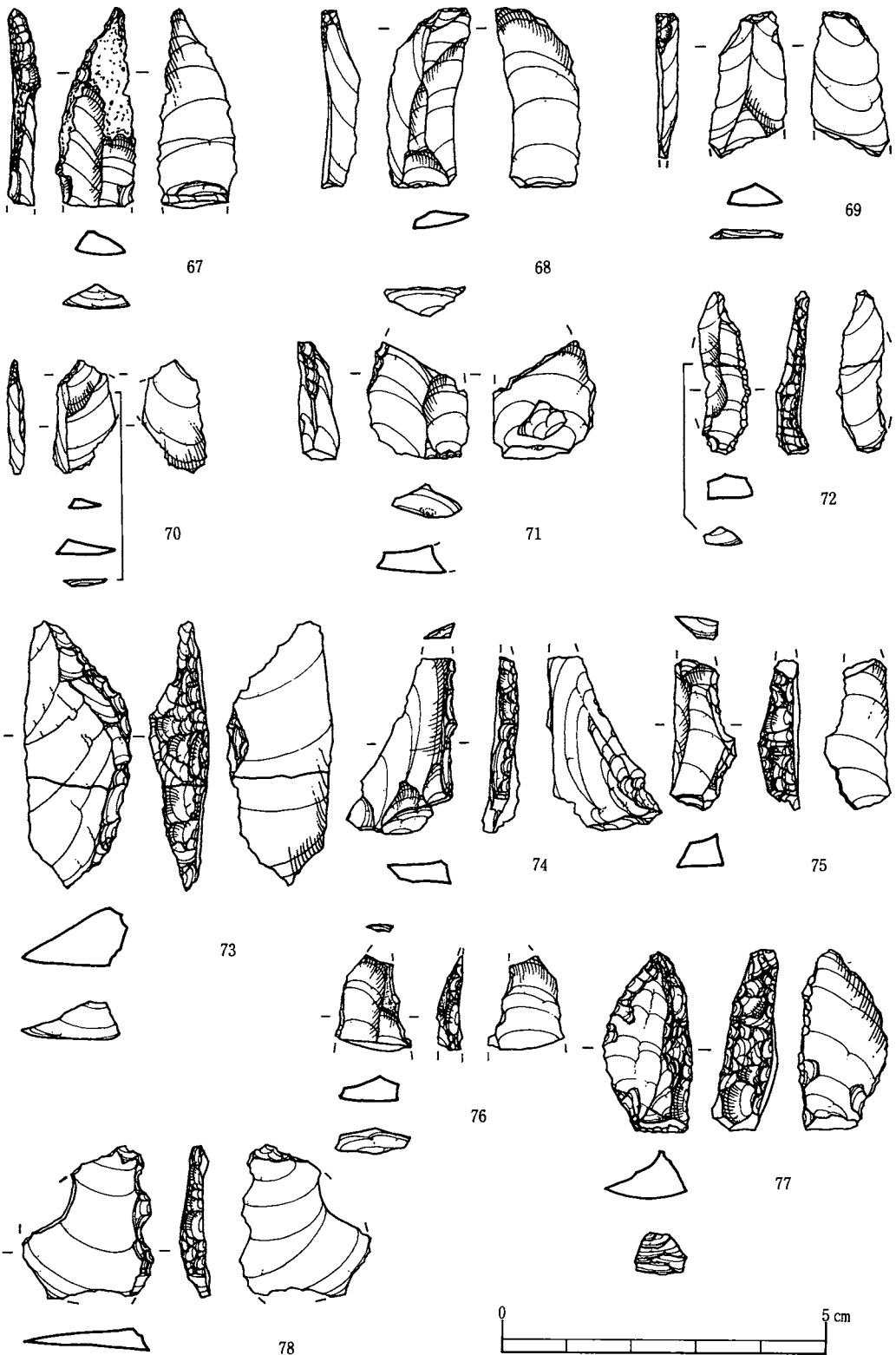


第15図 石器実測図



第16図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物

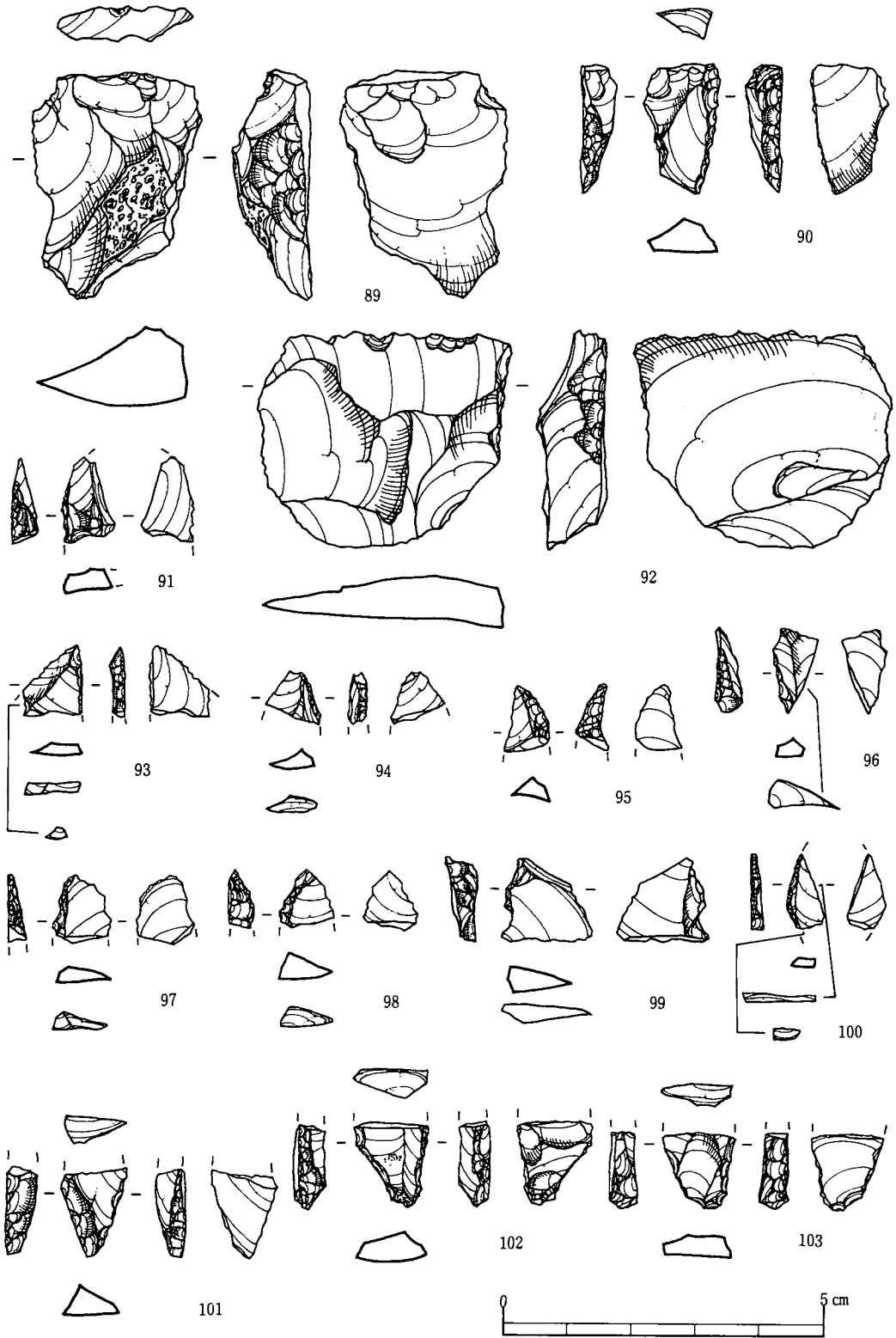


第17図 石器実測図



第18図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物



第19図 石器実測図

第三章 調査の成果

第5表 石器計測表

No.	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
1	ナイフ形石器	珪岩	4.1	1.4	0.6	3.6	IXD M 232
2	〃	珪岩	4.12	1.2	0.55	2.57	IXD M 976
3	〃	珪岩	3.45	1.15	0.7	1.875	VIII M 154
4	〃	珪岩	3.4	1.2	0.6	2.1	IXD M 1028
5	〃	黒曜石	2.8	0.82	0.45	1.0	IXC M 302
6	〃	黒曜石	(2.7)	1.04	0.5	(1.25)	VIII C M 128
7	〃	珪岩	2.78	1.00	0.62	1.35	VIII D M 1049
8	〃	珪岩	3.03	1.38	0.55	1.55	IXD M 621
9	〃	黒曜石	2.98	1.35	0.65	2.1	IXD M 448
10	〃	黒曜石	2.44	1.1	0.55	1.1	VIII D M 698
11	〃	珪岩	(1.95)	0.85	0.3	(0.2)	表 採
12	〃	珪岩	2.32	1.0	0.45	0.9	VIII C M 233
13	〃	黒曜石	(2.74)	1.25	0.5	(1.75)	VIII D M 832
14	〃	黒曜石	(2.1)	1.05	0.4	(0.85)	IXD M 922
15	〃	珪岩	(2.78)	1.1	0.7	(1.85)	VIII C M 915
16	〃	安山岩	2.4	0.94	0.6	1.25	VIII D M 1129
17	〃	黒曜石	2.0	1.15	0.4	0.6	VIII D M 35
18	〃	珪岩	(2.69)	1.15	0.7	(2.1)	VIII C M 683
19	〃	珪岩	2.7	1.13	0.6	1.5	VIII D M 61
20	〃	安山岩	(3.16)	1.15	0.8	(2.85)	IXD M 975
21	〃	珪岩	2.65	1.28	0.7	1.95	表 採
22	〃	珪岩	(3.93)	1.2	0.6	(2.7)	VIII D AT-下
23	〃	黒曜石	3.05	1.0	0.65	1.25	VIII D M 1126
24	〃	黒曜石	(1.86)	0.7	0.4	(0.45)	IXD M 932
25	〃	黒曜石	2.86	0.9	0.69	1.2	VIII D M 1202
26	〃	珪岩	3.2	1.12	0.6	1.8	VIII D M 646
27	〃	黒曜石	(2.9)	1.0	0.47	(1.15)	表 採
28	〃	珪岩	2.64	1.01	0.47	1.05	VIII C M 1021
29	〃	黒曜石	2.8	1.05	0.65	1.3	VIII D M 724
30	〃	珪岩	2.73	0.93	0.55	0.9	VIII D M 386
31	〃	黒曜石	3.05	1.4	0.7	1.9	VIII D M 839
32	〃	黒曜石	1.92	(0.85)	0.48	(0.75)	表 採
33	〃	珪岩	(1.63)	(0.64)	(0.5)	(0.5)	VIII D M 513
34	〃	黒曜石	2.6	1.26	0.68	1.57	VIII D M 27
35	〃	黒曜石	(1.84)	1.04	0.41	(0.6)	IXD M 29
36	〃	珪岩	(1.65)	1.1	0.4	(0.95)	IXD M 496
37	〃	珪岩	(3.39)	1.25	0.65	(2.95)	VIII C M 1038
38	〃	珪岩	(2.0)	1.34	0.58	(1.5)	IXD M 858
39	〃	黒曜石	(1.67)	(1.2)	(0.55)	(0.9)	VIII C M 749
40	〃	黒曜石	(1.59)	(1.23)	(0.48)	(0.7)	VIII D M 42
41	〃	黒曜石	(1.5)	(1.14)	(0.48)	(0.6)	VIII C M 443
42	〃	黒曜石	(2.24)	(1.6)	(0.67)	(1.15)	VIII C M 886
43	〃	珪岩	2.85	1.15	0.75	(2.0)	VIII C M 155

第1節 狸谷I石器文化の遺物

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
44	ナイフ形石器	黒曜石	1.98	1.0	0.4	(0.7)	VIII M 312
45	〃	黒曜石	(1.46)	1.03	0.4	(0.5)	IXC M 27
46	〃	珩岩	(1.88)	(1.1)	(0.6)	(1.2)	VIII M 78
47	〃	黒曜石	(2.0)	1.0	0.38	(0.55)	IXD M 6
48	〃	珩岩	2.55	1.0	0.55	0.85	VIII M 963
49	〃	珩岩	2.45	1.35	0.6	1.65	VIII M 70
50	〃	黒曜石	(3.5)	1.7	1.0	(5.0)	IXD M 1026
51	〃	黒曜石	(2.24)	1.1	0.5	(0.9)	VIII M 761
52	〃	珩岩	3.1	1.47	0.52	3.05	VIII M 67
53	〃	黒曜石	(1.4)	1.05	0.4	(0.6)	IXD M 56
54	〃	珩岩	(1.94)	(0.67)	(0.5)	(0.65)	VIII M 978
55	〃	黒曜石	(2.29)	(1.45)	(0.7)	(2.15)	VIII M 624
56	〃	珩岩	(2.5)	1.3	0.7	(2.35)	VIII M 854
57	〃	珩岩	2.5	2.08	0.8	2.95	VIII M 565
58	〃	黒曜石	2.35	1.61	0.58	1.45	VIII M 602
59	〃	珩岩	2.3	0.97	0.55	0.95	VIII M 1040
60	〃	黒曜石	2.25	1.0	0.5	0.85	VIII M 1122
61	〃	黒曜石	(2.47)	(1.18)	(0.53)	(1.05)	VIII M 4
62	〃	珩岩	3.45	1.3	0.85	2.23	IXD M 690
63	〃	黒曜石	(1.73)	1.28	0.6	(1.0)	VIII M 1065
64	〃	珩岩	1.73	1.16	0.5	0.7	VIII M 795
65	〃	珩岩	2.7	2.03	0.65	2.9	IXC M 276
66	〃	珩岩	(2.52)	1.7	0.5	(1.85)	IXD M 231
67	〃	黒曜石	(3.05)	1.2	0.4	(1.05)	VIII M 278
68	〃	珩岩	2.74	1.32	0.6	1.55	IXD M 623
69	〃	珩岩	(2.2)	1.2	0.35	(0.8)	IXC M 293
70	〃	黒曜石	1.75	(1.0)	0.3	(0.45)	IXD M 33
71	〃	黒曜石	(1.8)	1.6	0.67	(1.55)	IXD M 591
72	〃	黒曜石	2.5	(0.78)	0.5	(0.85)	IXD M 1(上) VIII M 145(下)
73	〃	安山岩	4.1	1.65	0.9	4.2	VIII M 1097(上) VIII M 1055(下)
74	〃	珩岩	(2.69)	1.79	0.57	(1.65)	IXC M 215
75	〃	黒曜石	(2.3)	1.0	0.6	(1.15)	VIII M 621
76	〃	黒曜石	(1.45)	(1.2)	(0.4)	(0.7)	IXD M 578
77	〃	黒曜石	2.8	1.35	1.0	2.35	VIII M 410
78	〃	黒曜石	(2.38)	2.05	0.45	(1.45)	IXC M 335
79	〃	珩岩	(2.6)	1.72	0.9	(3.7)	IXD M 399
80	〃	黒曜石	(2.47)	1.18	0.53	(1.05)	VIII M 4
81	〃	黒曜石	(1.85)	1.0	0.5	(0.8)	IXD M 773
82	〃	珩岩	2.22	1.43	0.43	1.0	IXD M 679
83	〃	珩岩	2.64	1.66	0.7	2.7	VIII M 384
84	〃	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.6	VIII M 1071
85	〃	黒曜石	(1.57)	1.18	0.3	(0.5)	IXC M 9
86	〃	珩岩	(2.75)	2.5	1.2	(6.05)	IXD M 742
87	〃	珩岩	(2.42)	1.65	0.94	(2.1)	VIII M 999

第三章 調査の成果

No.	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
88	ナイフ形石器	珪岩	(3.2)	(2.2)	0.6	(4.75)	IXD M 1001
89	〃	黒曜石	3.5	2.64	1.25	9.3	IXC M 176
90	〃	黒曜石	2.0	1.2	0.58	1.25	VIII D M 1125
91	〃	珪岩	(1.31)	(0.85)	(0.4)	(0.45)	IXD M 402
92	〃	珪岩	3.35	4.03	1.1	13.2	IXC M 283
93	〃	黒曜石	(1.1)	(0.94)	(0.23)	(0.35)	VIII C M 818
94	〃	黒曜石	(0.8)	(0.85)	(0.3)	(0.2)	IXD M 31
95	〃	黒曜石	(1.01)	(0.7)	(0.47)	(0.25)	VIII D M 126
96	〃	黒曜石	(1.3)	(0.7)	(0.4)	(0.2)	IXC M 29
97	〃	黒曜石	(1.05)	(0.9)	(0.3)	(0.25)	VIII C M 1091
98	〃	黒曜石	(0.9)	(0.85)	(0.4)	(0.25)	VIII C M 138
99	〃	黒曜石	(1.3)	(1.44)	(0.5)	(0.7)	VIII C M 375
100	〃	珪岩	(1.19)	(0.6)	(0.2)	(0.2)	VIII D M 536
101	〃	珪岩	(1.37)	(1.0)	(0.5)	(0.55)	VIII C M 968
102	〃	黒曜石	(1.36)	(1.18)	(0.5)	(0.8)	VIII C M 992
103	〃	黒曜石	(1.18)	(1.12)	(0.45)	(0.6)	IXC M 317

調整加工前の剥片の折断面が残されている資料(4)があり、刃潰し加工前での「剥片折断」の存在を伺わせる。

こうした石器製作時の痕跡の他、石器使用の際のものと考えられる痕跡も、肉眼で観察された。13に認められる刃部の薄い剥落痕と、10や102にみられる着柄痕と考えられる石器表面の痕跡である。

1 b類ナイフ形石器は、横長剥片を素材としたものと、1 a類ナイフ形石器の素材と同様の縦長剥片のものがあるが、中心となるものは、横長剥片である。剥片の剥離痕の方向では、同一方向のもの5点と、直行するもの9点がある。

石器本体での剥片の打面部の位置は、下位2点(内、1点打面残置)、側縁上部右位2点、同左位1点、側縁中部右位4点、同左位2点、側縁下部右位2点という内訳である。剥片利用のあり方からすれば、剥片と石器の主軸が直行するものが6点で、傾斜しているもの5点、そして同一のもの2点という1 a類とは逆の関係が指摘される。

調整加工では、二つの異なった状態の石器がある。すなわち、通常の石器裏面から表面への刃潰し加工があるものと、右側縁と左側縁とで加工方向が異なるもの(43)である。しかも、後者の形状は、他の1 b類のものとは異なっている。このように、43の資料は、石器製作上でも形状の点でも、狸谷I石器文化の中では特異なものといえよう。また、裏面基部加工も43の資料にのみみとめられる。

2 a類ナイフ形石器の素材は、縦長剥片と横長剥片の二つがあるが、中心となるものは、縦長剥片である。剥片の剥離の状態は、同一方向のものが11点と最も多く、対向するもの1点、直行するもの5点である。

第1節 狸谷I石器文化の遺物

石器本体での打面部の位置は、下位5点（内、打面残置2点）、上位1点、側縁上部右位3点、側縁中部左位4点（内、打面残置1点）、側縁下部左位3点である。剥片利用のあり方は、同一のもの6点、傾斜するもの6点、直行するもの4点と、剥片と石器の主軸の関係では、差は無いようである。調整加工では、これまでと同様、表裏面それぞれからの対向する刃潰し加工が観察されるものが3例ある。その石器本体での部位は、全側縁と中部そして基部よりである。

2b類ナイフ形石器は、ほとんどが縦長剥片で、やや横広の剥片が1点あるのみである。この縦長剥片の中には、刃器状剥片に似たもの（59・60・62・67・68・69）もある。剥片剥離の状態は、同一方向のもの8点、対向するもの3点、直行するもの6点がある。なお、石器本体での打面部の位置は、ほとんどのものが上位・下位であり、石器と剥片との主軸の関係は、同一である。

搔器（第21図104～第22図118）

搔器は、14点検出された。出土石器に占める割合は、4%とわずかである。石質は、珪岩製のもので10点で最も多く、その他は、黒曜石3点、頁岩1点である。

分布は、資料数が少なく、はっきりとした傾向が捉えにくい点がある。ただ、その出土のあり方は、散在的ではなく、尾根頂部の185.75～186.00mの等高線の付近に4点、それより北へ6mの部分に2点、尾根頂部やや南よりの184.75～185.25mの等高線付近に4点、そして、調査区北東隅に近い184.50mの等高線付近に2点と、数点づつのまとまりが調査区に点在している（第20図）。

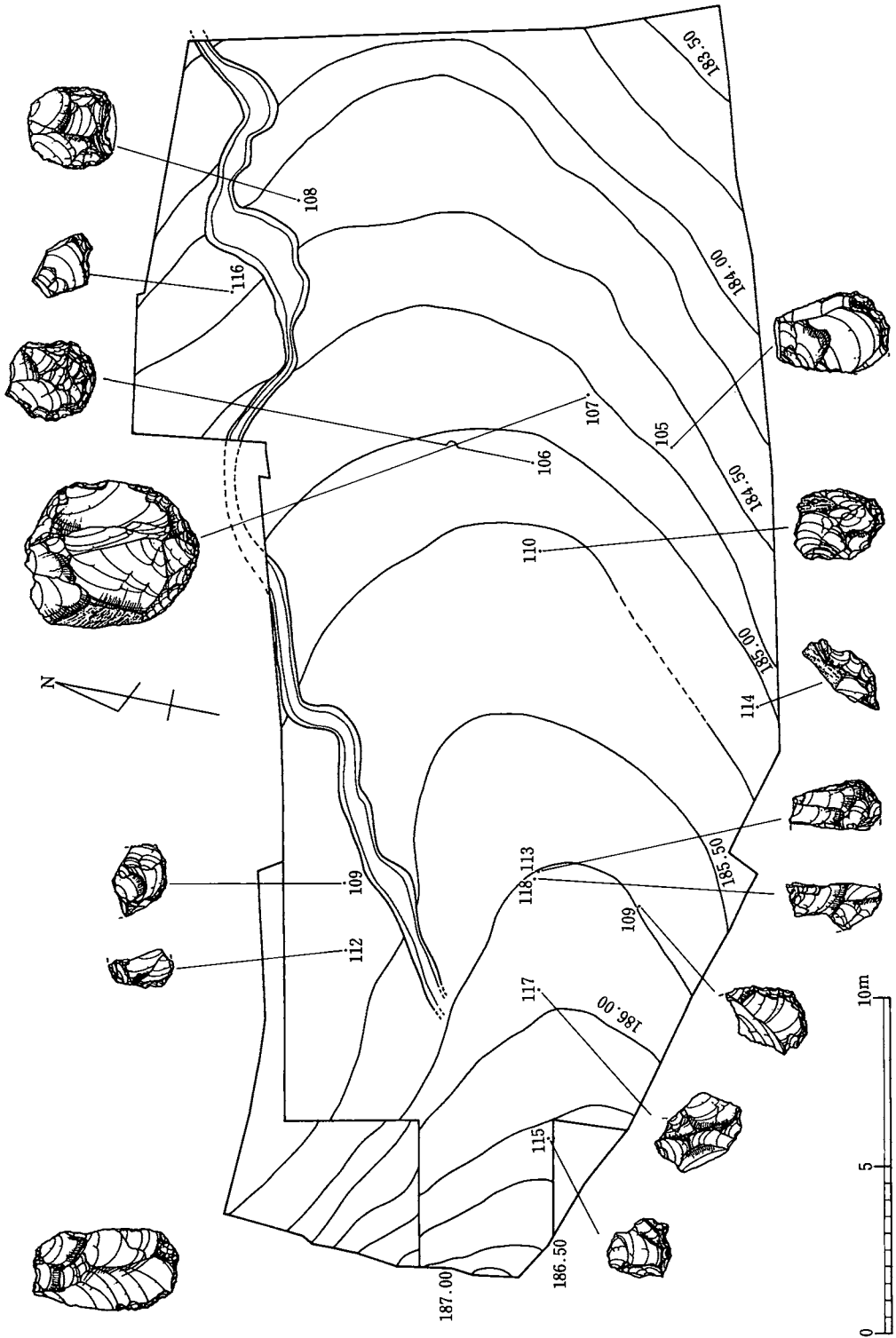
出土した搔器は、その刃部の作り出し方によって、三つに細分できる。以下、類ごとに記述していこう。

第1類（106・108）

搔器本体において、両側縁部の半分以上にわたって、刃部作り出しのための調整が加えられるものである。素材は、寸詰りの分厚な縦長剥片が使用され、左右側縁の刃部端を結ぶ線は、石器の主軸に対して直行している。刃部は、108では大きく欠損しているが、106と同様に、弧状を呈している。なお、素材となる剥片の打面は、ともに複剥離面で、その中で、108には打面調整が観察される。

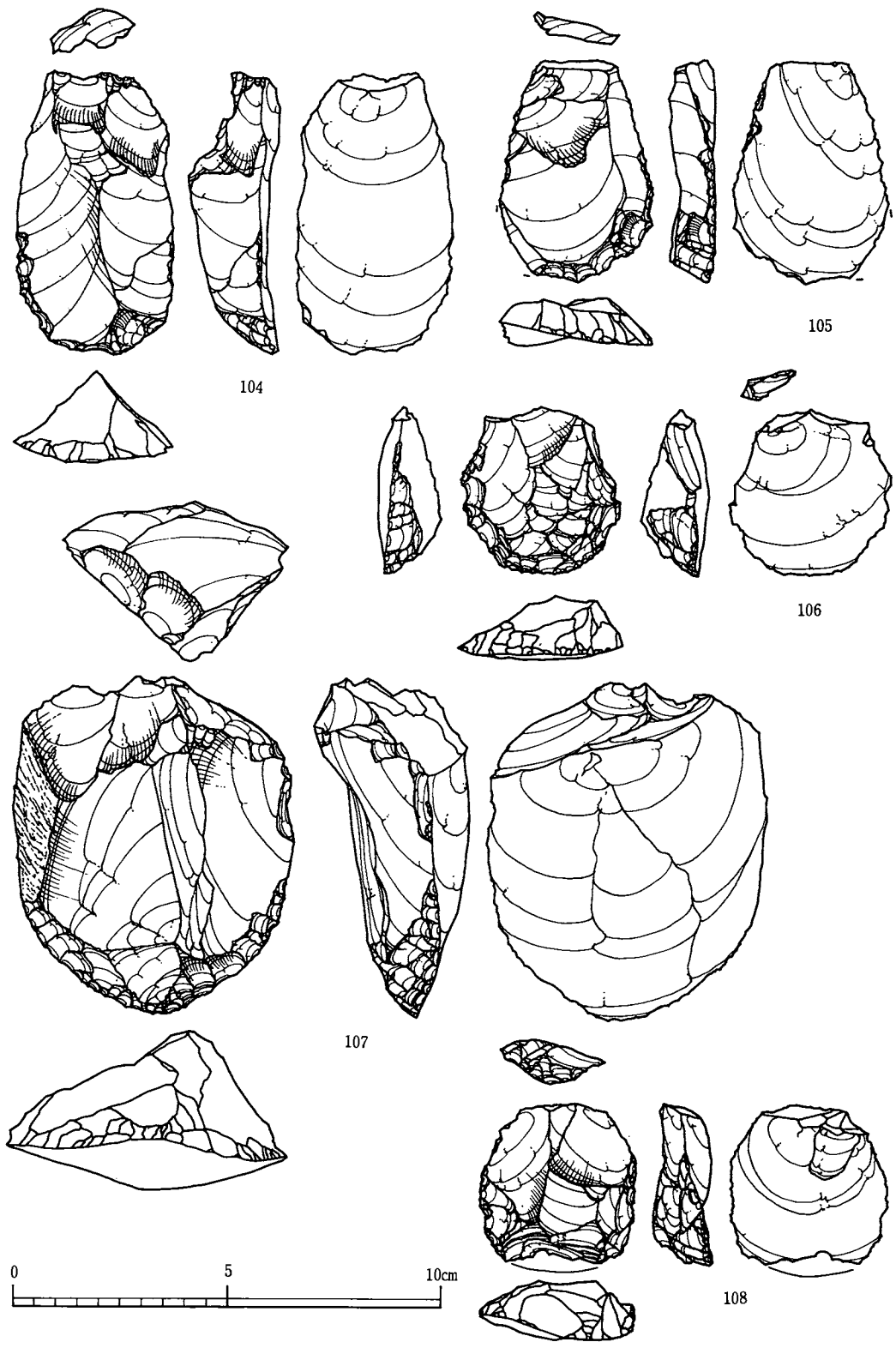
第2類（104・105・107・109～113）

2類に分類される搔器は、石器本体において、両側縁部にまで刃部形成の調整剥離が及んでいるが、その範囲は側縁の半分以下のものである。素材は、分厚な縦長剥片が多いが（112だけは、横長剥片のもの）、その打面は、単剥離面のもの1点、複剥離面のもの4点である。石器本体における打面の位置は、上位7点、側縁中部右位1点である。また、左右側縁の刃部端を結ぶ線と石器の主軸との関係には、直行するもの（107）右側縁側に傾斜するもの（105・110）、左側縁側に傾斜するもの（104・111）の三種がある。

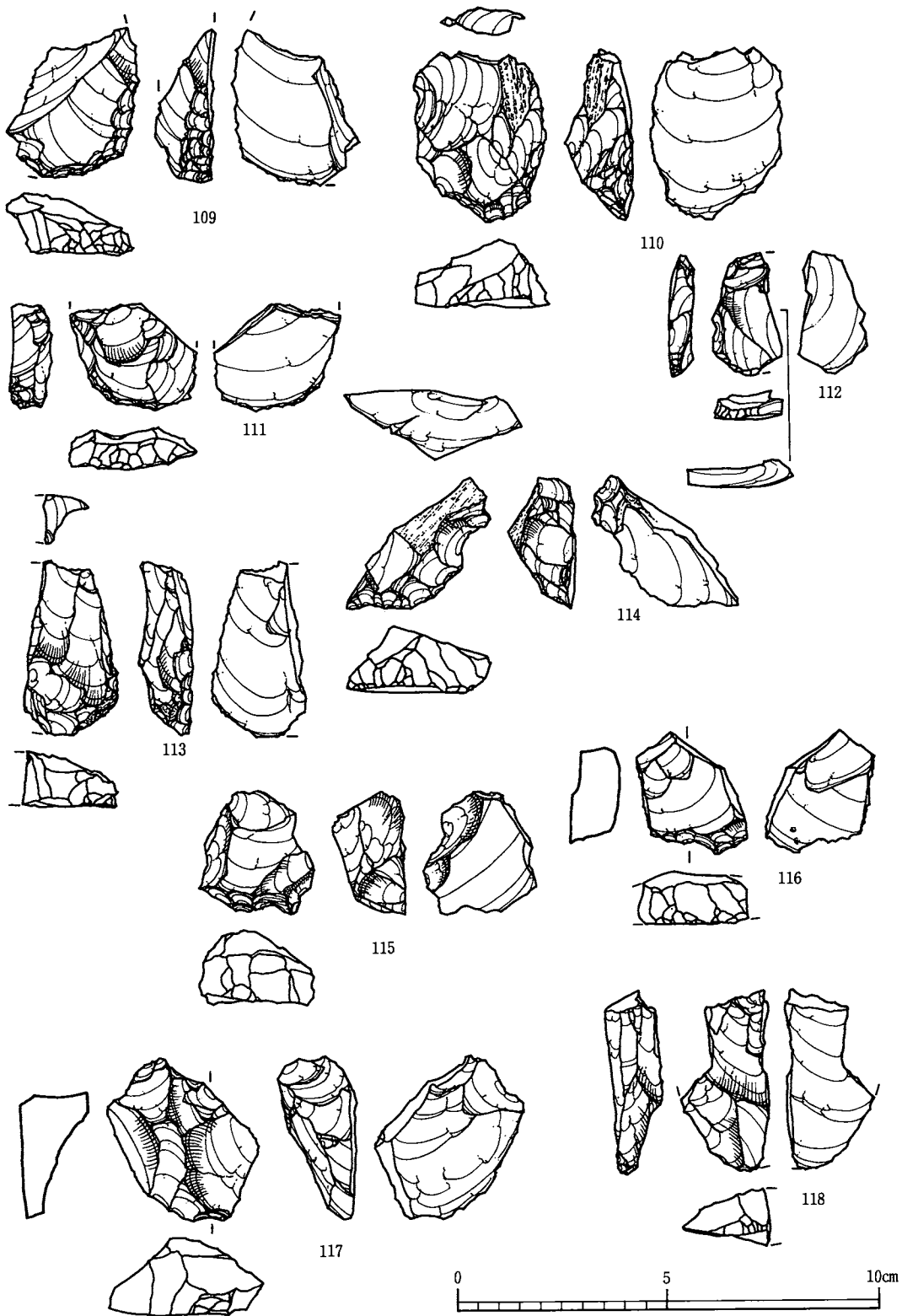


第20図 遺物分布図 (石器)

第1節 狸谷I石器文化の遺物



第21図 石器実測図



第22図 石器実測図

第6表 石器計測表

No.	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
104	搔器	珪石	6.52	3.7	2.1	36.9	VIII C M 293
105	〃	頁岩	5.18	3.6	1.1	18.15	VIII D M 269
106	〃	珪石	3.9	3.75	1.45	20.29	VIII D M 451
107	〃	珪石	7.8	6.55	3.7	137.25	VIII D M 413
108	〃	珪石	(3.73)	3.65	1.4	(20.15)	VIII C M 892
109	〃	黒曜石	(3.6)	(3.1)	1.4	(11.0)	IX D M 588
110	〃	珪石	4.3	3.2	1.6	18.8	VIII D M 94
111	〃	黒曜石	(2.55)	(3.0)	1.0	(6.5)	IX C M 193
112	〃	珪石	(2.89)	(1.62)	0.68	(3.3)	IX C M 287
113	〃	珪石	4.12	(2.27)	1.33	(11.95)	IX D M 302
114	〃	珪石	(3.08)	(3.45)	(1.65)	(9.1)	VIII D M 408
115	〃	黒曜石	2.91	2.7	1.77	12.1	IX D M 1018
116	〃	珪石	2.9	(2.6)	1.28	(11.05)	VIII C M 840
117	〃	珪石	3.9	3.6	1.85	19.1	IX D M 420
118	〃	珪石	(4.31)	(2.1)	(1.38)	(9.3)	IX D M 294

第3類 (115~118)

3類の搔器は、石器本体において、刃部作出の調整剝離が端部のみにみられるもので、刃部端を結ぶ線と石器の主軸との関係は、すべて直行である。ただ、この3類は、1類や2類のような本格的なものではない。例えば、117と118は、わずかな刃部しかみられないし、115・116では、石核の可能性も高い。

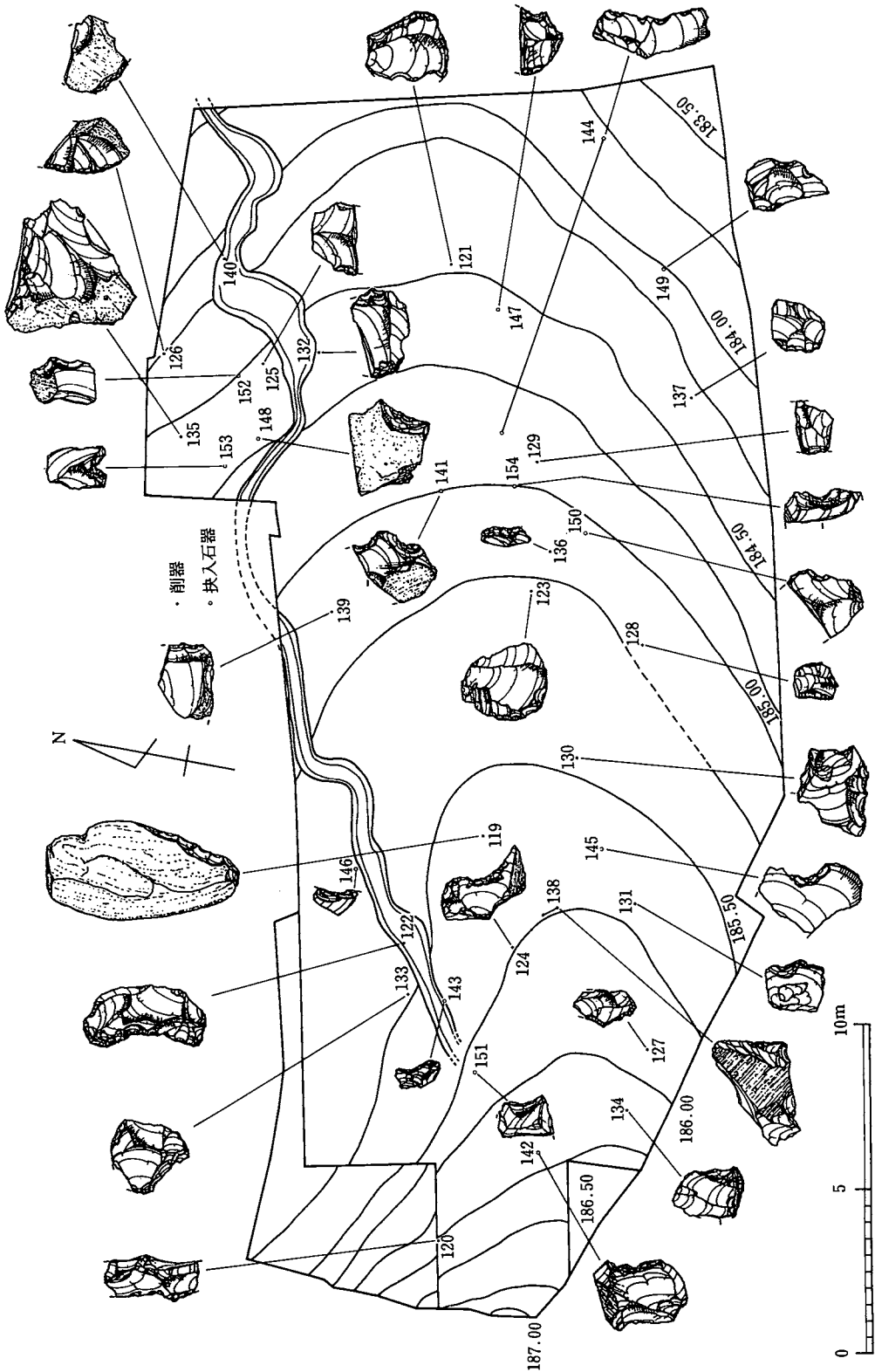
所属不明の搔器 (114)

114は、刃部のみを残して大きく欠損しているため、所属不明である。横長剝片を素材とし、その打面を側縁中部右位に置き、刃部形成のための調整加工で取り除いている。

搔器の素材

狸谷I石器文化において、搔器に使用される素材は、主に分厚い縦長剝片であり、わずかに横広の剝片も見受けられる。さらに、この縦長剝片には、長さが幅に対して約1.5倍前後あるという、比較的縦に長いもの(104・105)と、ほとんど変わらない寸詰りのもの(106・107・108・110)がある。

さて、これらの搔器を観察すると、基部に打面ないし側縁側からの数枚の剝離痕があることに気付く。その剝離の方向には、裏面の剝離方向に対して、同一のもの(104・107・108)と直行するもの(105・110)とがある。おそらく、この剝離は、104のように薄い基部が作り出されていたり、107のように剝離の無い部分が大きく盛り上がっていたりする状況から、石器基部の厚みを取り除くためのものであろう。



第23図 遺物分布図 (削器・挟入石器)

削器 (第24図119～第25図140)

削器は、23点出土した(内、2点接合で、資料実数22点)。石器組成に占める割合は、6%である。石材の内訳は、珩岩17点、黒曜石4点、安山岩1点、頁岩1点である。

分布域は、調査区のほぼ全域に広がりを持っているが、その分布域の中央部に、まったく削器のみられない部分があるという特徴がある。その部分は、尾根頂部の184.50～185.50mの等高線付近にあたり、その範囲は、東西16m、南北6mと広い(第23図)。このように、削器の分布を細かく観察すれば、広い空白部を取り巻くように広がった分布のあり方を知ることができる。

狸谷I石器文化に属する削器は、刃部の状態によって、大きく、第1類～第3類に分類することができる。以下、類別に記述していこう。

第1類 (119・120・122～124・126・129・130・131・133・135・137～139)

1類に分類される削器は、素材となる縦長剝片や横長剝片の一側縁に刃部が作られているものである。剝片の打面には、自然面のもの3点、単剝離面2点、複剝離面4点があり、打面調整も観察される。

これらの石器は、さらに剝片の打面と石器の刃部との位置関係で、二つに分類される。一つは、打面と刃部とが対向するもの(130・131・138)で、剝片の先端部に刃部がみられる。素材は、横長ないし横広の剝片である。刃部形成は、剝片の大きさに対して、大きく荒い調整と細かい調整とによる。さらにもう一つの削器は、縦長剝片が主として素材となるもので、刃部ないし刃部のある側縁部と素材の打面とが隣合わせの関係にある。つまり、縦長剝片の側縁部に刃部が形成されたものである。刃部は、比較的細かい調整によって作り出されている。

第2類 (125・127・128・132・134)

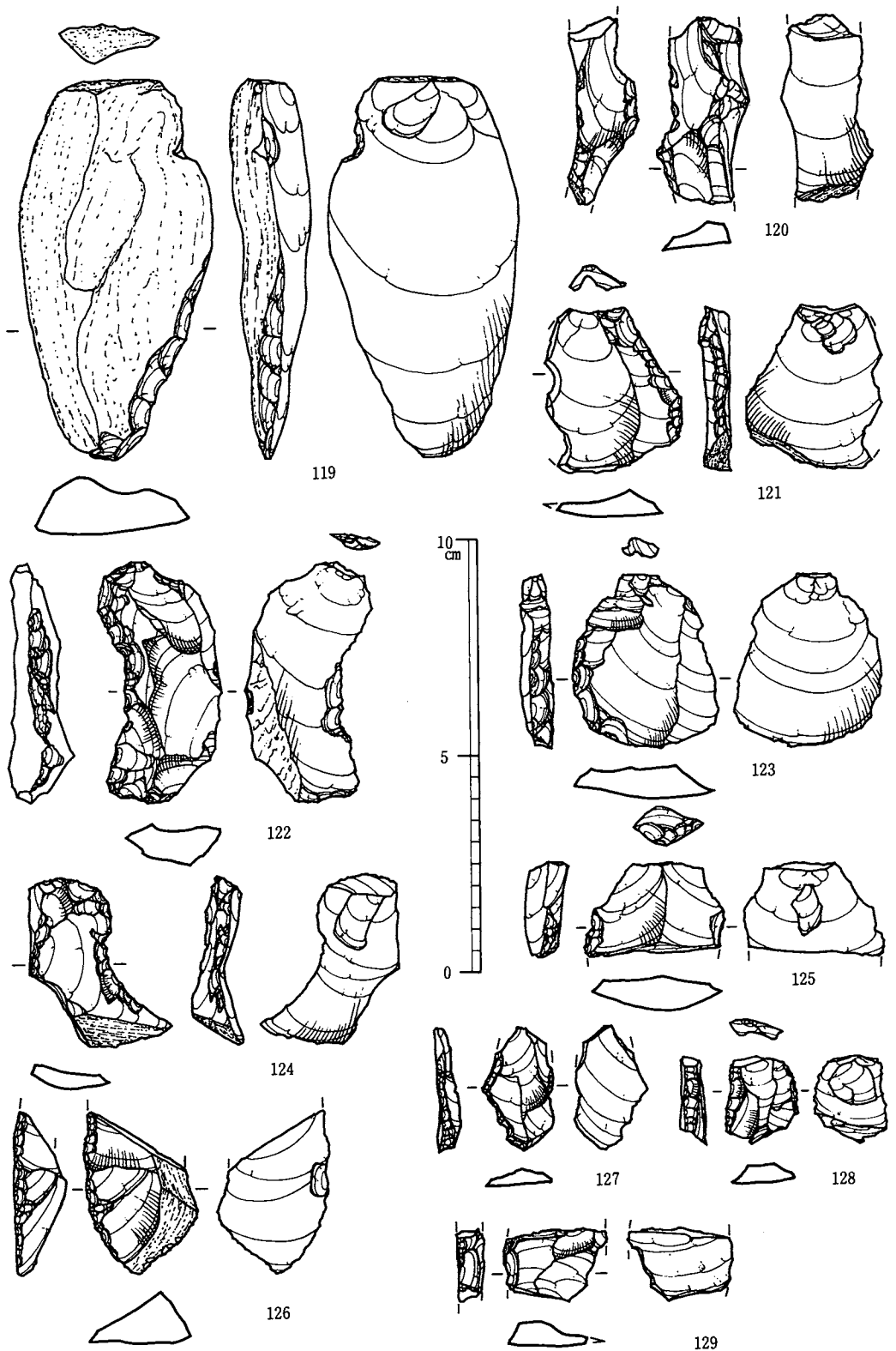
2類の削器は、素材となる剝片の二つの側縁に、刃部がみられるものである。剝片の打面は、複剝離面で、打面調整も観察される。刃部は、ほとんどのものが、剝片の両側縁に設けられて対向した位置関係にあるが、隣合わせの関係にあるものも1例みられる(134)。また、刃部の状態では、132のように左側縁の刃部は片刃で、右側縁のものは両刃という同じ石器の中での異なった形状の刃部が併設された例も、特異なものとして注意したい。

第3類 (140)

3類の削器としたものは、同じ刃部で、上位が表面からの加工、下位が裏面からのものという、方向の異なる二つの加工で一つの刃部が形成されるものである。刃部の数からすれば、第1類の削器に含めることもできよう。素材は、横広の剝片を素材として、その左側縁に刃部がみられる。

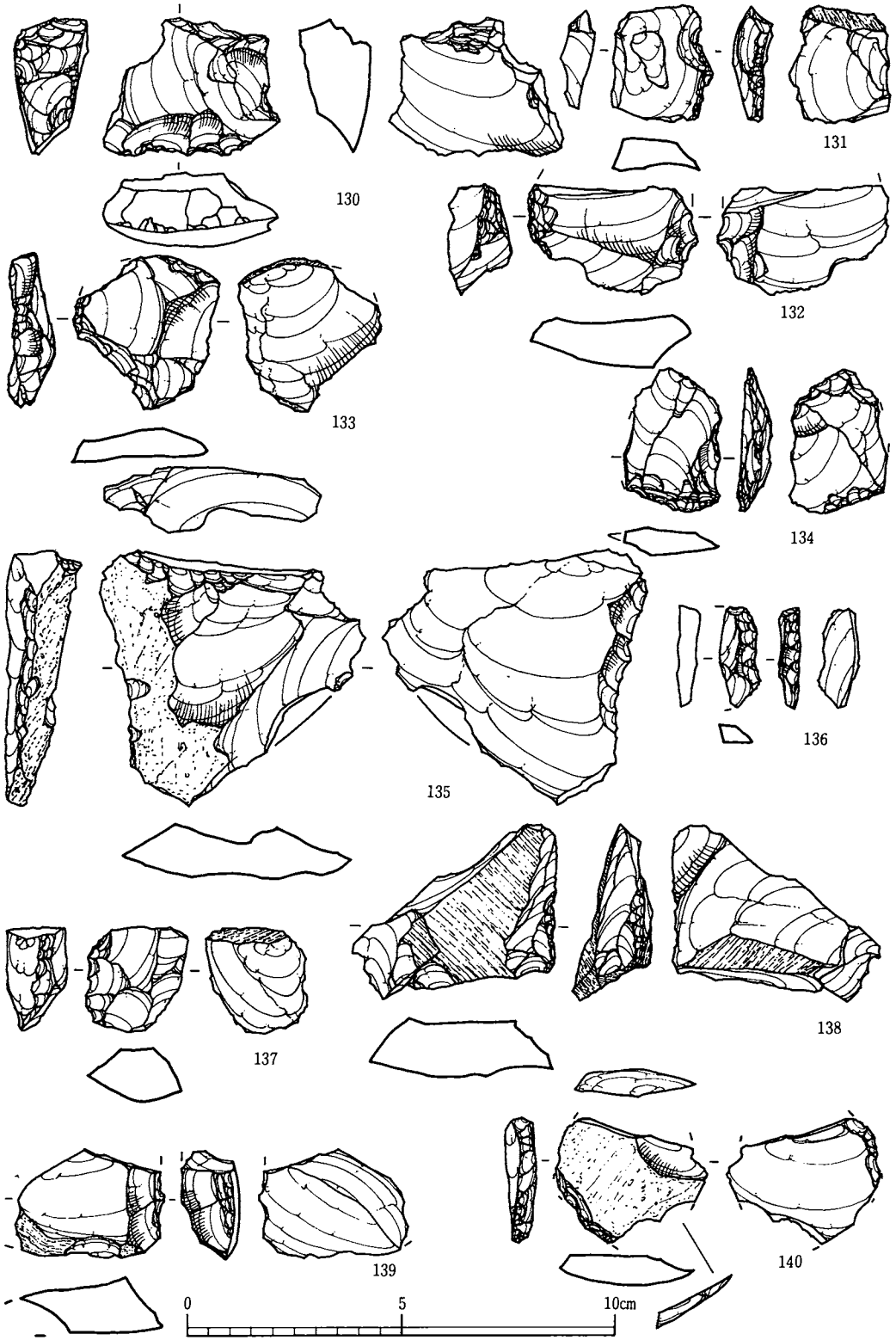
所属不明の削器 (121・136)

121は、単剝離面による打面を持った、縦長剝片を素材としたもので、右側縁に刃部がみら



第24図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物



第25図 石器実測図

れる。ただ、左側縁はすべて欠損しており、認定することができなかった。また、136は、裏面の剝離方向に対して刃部が直行しており、第1類の130や131などに近いものと考えられる。しかし、刃部のみの残存で、決定的ではない。

削器の素材

削器の素材となる剝片には、これまでみてきたように、縦長剝片、寸詰りの縦長剝片、横長剝片などがあるが、その形状、大きさには統一性がない。また、その剝離面の構成の状態には、同一方向のもの、対向するもの、直行するものなどがあり、この他に、求心的に剝片剝離が進むものもある。137は、その片鱗を伺わせるものであるが、123は、440の剝片との接合関係によって判明した。詳しくは、後述する。

このように、削器に利用される剝片は、剝片の形状、大きさなどにも統一性が無く、素材獲得では、かなり多様なものがあると考えられる。

挟入石器（第26図141～154）

剝片の縁辺の一部に、調整加工によって、刃部としての挟入部が作られるもので、15点（内、2点接合で、資料実数14点）を確認した。石器組成に占める割合は、搔器とほぼ同じ、4%である。石材ごとの内訳は、珪岩13点、黒曜石2点である。

石器の分布は、資料数が少ないために、的確な傾向を捉えることができないが、前記した削器の傾向に近似している。すなわち、尾根頂部の185.00～185.50mの等高線周辺を空白部として、その周辺に点在するというあり方である（第23図）。

14点の石器は、その刃部の状態で大きく二つに分類される。すなわち、挟入部のみの刃部のものと、削器の刃部と併設されるものである。そこで、以下、記述していこう。

第1類（144・145・149・152・153）

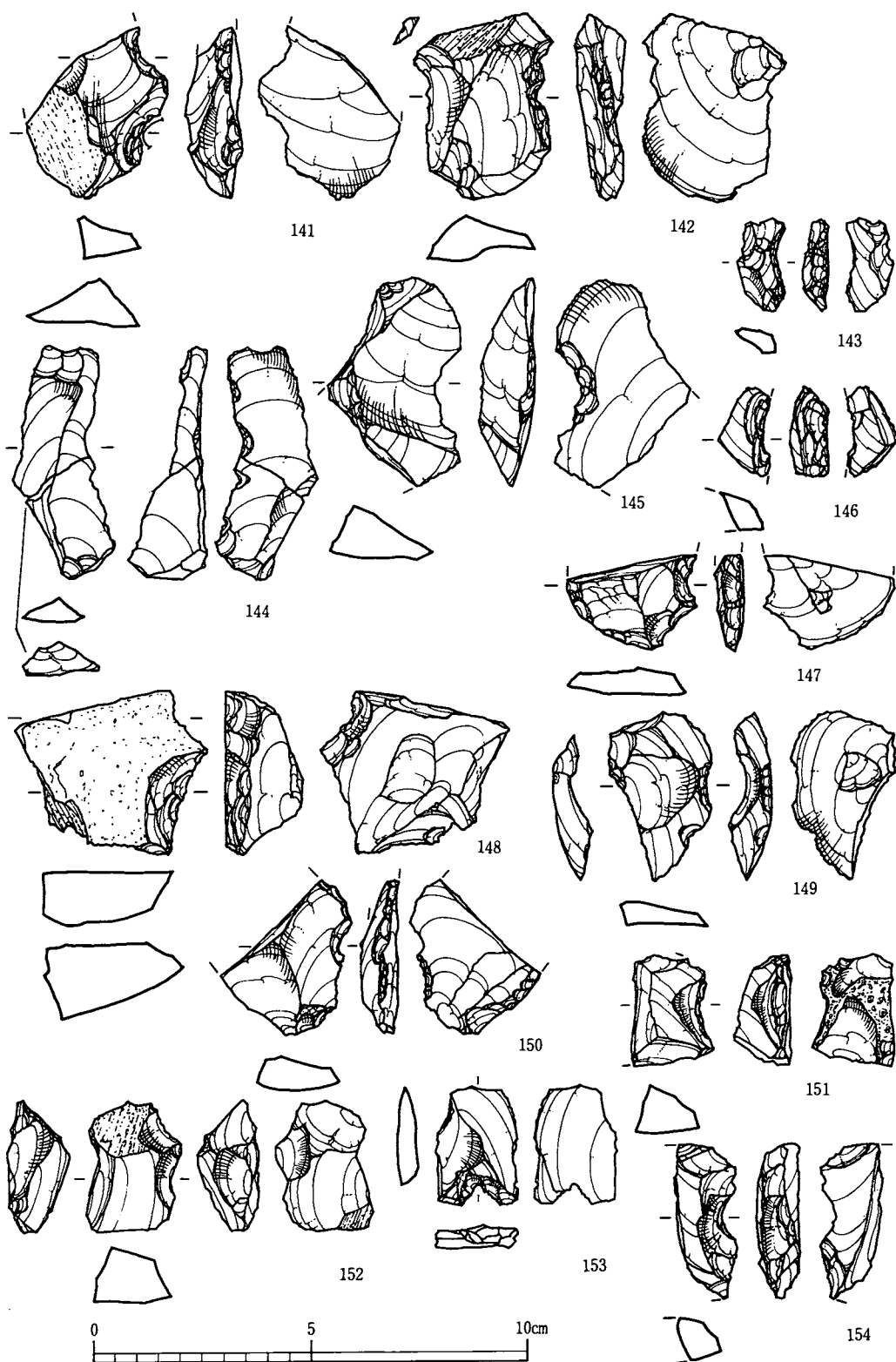
1類の挟入石器は、挟入部のみによって刃部をなすものである。素材となる剝片は、横長剝片ないし、横広の剝片がほとんどで、縦長剝片は、1例（144）のみである。石器の刃部の位置については、二つのあり方がある。素材上の打面部と隣合わせの側縁部に挟入部があるものと、打面部と対向する縁辺、すなわち、剝片の先端部にあるものである。

第2類（142・147・148・150）

2類の挟入石器は、挟入部と削器の刃部とをあわせ持っているもので、素材となる剝片には、横長剝片や、寸詰りの縦長剝片などを利用している。刃部は、こうした剝片の打面と隣合わせの側縁部に設けられるものが多いが、147にあっては、残存している縁辺部の全域に、刃部がみられる。

この石器は、さらに刃部の作出のあり方で、二つの種類がある。すなわち、すべての刃部の加工が、同一の加工方向によっているもの（142・147）と、二つの加工方向によっているもの（148・150）である。この中で、後者は、削器の第3類に分類された資料と共通するところが

第1節 狸谷I石器文化の遺物



第26図 石器実測図

第三章 調査の成果

第7表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
119	削器	安山岩	8.8	4.5	1.85	64.2	IXD M 122
120	〃	珪岩	(4.33)	2.17	1.63	(9.45)	IXD M 1032
121	〃	珪岩	3.82	(3.2)	0.74	(8.25)	VIII D M 1093
122	〃	珪岩	5.55	2.9	1.5	16.95	IXC M 272
123	〃	珪岩	4.0	3.4	0.77	11.6	VIII D M 98
124	〃	珪岩	3.94	3.3	1.24	8.2	IXD M 252
125	〃	珪岩	(2.17)	(3.3)	(1.0)	(6.6)	VIII C M 847
126	〃	珪岩	(3.8)	2.67	1.23	(8.85)	VIII C M 795
127	〃	黒曜石	(2.9)	1.73	0.63	(2.05)	IXD M 806
128	〃	黒曜石	(2.02)	1.7	(0.6)	(2.0)	VIII D M 280
129	〃	黒曜石	(1.72)	(2.45)	(6.7)	(2.85)	VIII D M 988
130	〃	珪岩	3.18	4.1	1.69	19.05	VIII D M 322
131	〃	珪岩	2.7	2.35	0.9	5.25	IXD M 706
132	〃	珪岩	(2.54)	3.96	1.5	(12.95)	VIII C M 897
133	〃	珪岩	3.56	3.4	1.1	(11.0)	IXC M 269
134	〃	黒曜石	3.34	2.27	0.8	5.1	IXD M 774
135	〃	珪岩	5.87	(6.2)	1.8	(44.6)	VIII C M 736
136	〃	珪岩	(2.31)	(0.98)	(0.5)	(1.15)	VIII D M 108
137	〃	珪岩	2.45	2.35	1.4		VIII D M 893
138	〃	珪岩	4.1	4.8	1.85		IXD M 307(上) IXD M 305(下)
139	〃	頁岩	(2.55)	(3.5)	(1.37)	(10.85)	VIII C M 85
140	〃	珪岩	(2.9)	3.5	0.75	(7.0)	VIII C M 829
141	抉入石器	珪岩	(3.92)	(3.26)	(1.32)	(12.4)	VIII D M 1044
142	〃	珪岩	4.28	3.27	1.22	10.25	IXD M 401
143	〃	黒曜石	(2.12)	(1.1)	(0.6)	(1.15)	IXD M 886
144	〃	珪岩	5.37	2.35	1.8	10.0	VIII D M 1017(上) VIII D M 567(下)
145	〃	珪岩	(4.78)	(3.1)	1.3	(12.6)	IXD M 486
146	〃	珪岩	(2.08)	(1.2)	(0.9)	(1.8)	IXC M 41
147	〃	珪岩	(2.18)	(3.0)	(0.7)	(4.4)	VIII D M 1081
148	〃	珪岩	3.73	4.4	1.8	26.55	VIII C M 716
149	〃	珪岩	3.88	2.4	1.0	5.6	VIII D M 665
150	〃	珪岩	(3.55)	(3.05)	(0.9)	(7.15)	VIII D M 229
151	〃	黒曜石	(2.56)	(1.88)	(1.31)	(5.0)	IXD M 339
152	〃	珪岩	3.0	2.26	1.4	8.35	VIII C M 691
153	〃	珪岩	2.75	1.9	0.5	2.65	VIII C M 699
154	〃	珪岩	(3.6)	(1.45)	(1.0)	(4.65)	VIII D M 1136

あり注意される。

所属不明の石器 (141・143・146・151・154)

抉入部のみの残存で、所属不明のものが4点あった。4点中3点は、抉入部分のみであるが、その中で、141は2ヶ所の抉入部を含め、残りが良く、全体の形状をある程度類推することができる。

抉入部の半径

抉入石器の抉入部の大きさとして、その半径を計測した。それによると、その大きさのばらつきは、0.3cmから1.15cmまでの中で連続しており、目にみえる傾向は、割り出せなかった。ただ、その中にあっても、0.4cm前後(0.3~0.5cm)は、7例(141・142・147・150・151~153)と極端に多くなっている。

彫器 (第28図155~157)

彫器は、3点出土した。その石器組成に占める割合は、1%にも満たない。出土地点は、3点とも、一定の距離を置いて点在している(第27図)。以下、資料ごとに説明していきたい。

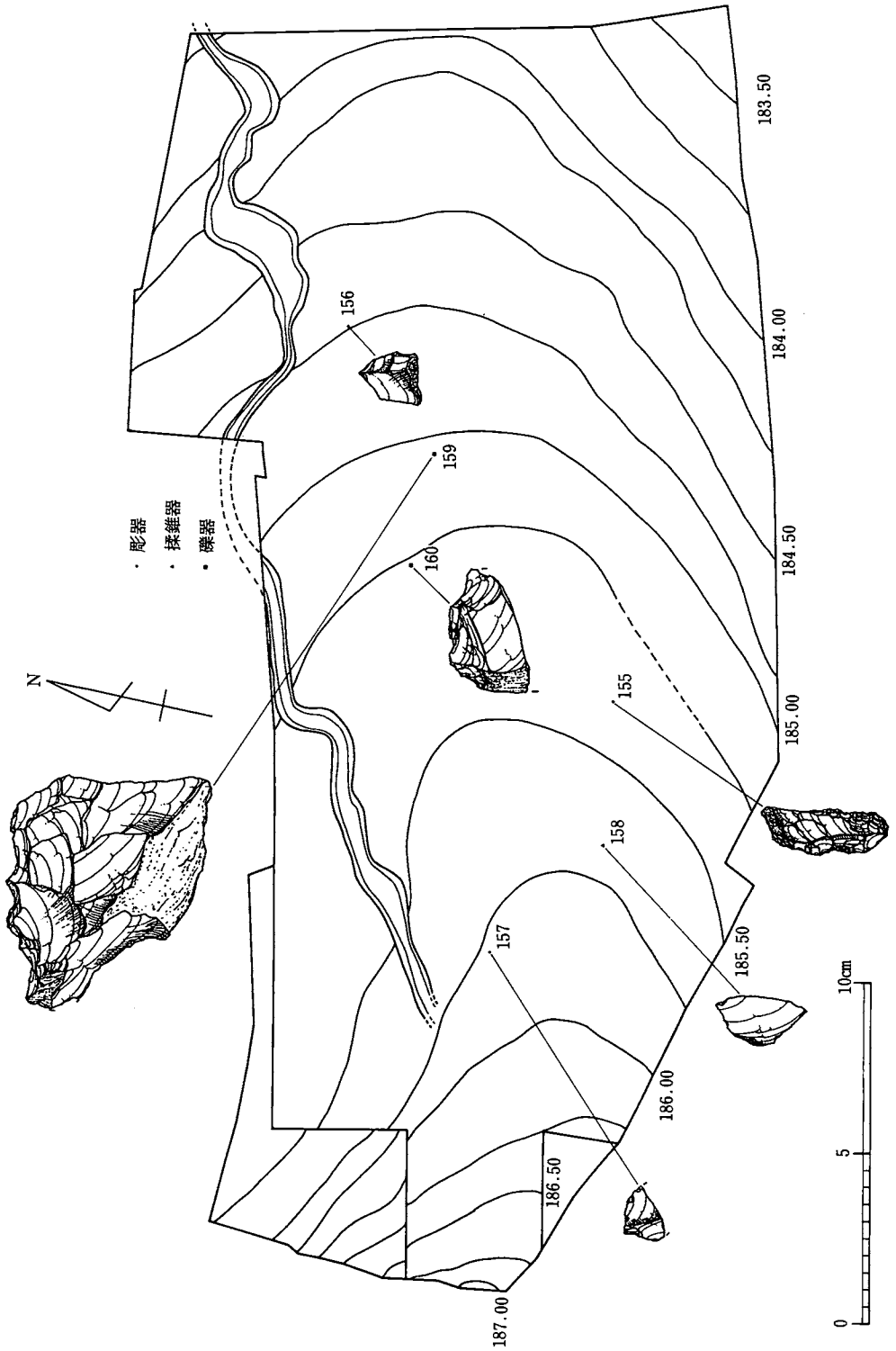
155は、細長い縦長剥片を素材とし、その打面部を、石器本体の下位に置き、その先端部から側縁に沿うように、彫刀面を作出しているものである。側縁部の調整は、すべて裏面から表面に向けてのもので、右側縁の上部では、彫刀面によって切られてはいるが、両側縁の全縁でおこなわれていたと考えられる。彫刀面の作出は、剥片の先端部を裏面側から折り取り、その面を打面として2回の打撃によって作られている。石材は、珪岩である。

156では、縦長剥片を素材とし、その剥片を斜めに断ち割るような方向で、6回の打撃によって、彫刀面が作出されている。その際、素材の打面部は、石器本体の上位に置かれていたため、失われている。側縁部では、右側縁の下部のみに調整加工があり、左側縁には、刃こぼれ状の微細な剥離が観察されるのみである。彫刀面は、裏面からの折断面を打面として、作られている。石材は、黒曜石である。

157は、素材となる横長の剥片の打面を、調整加工によって切り取った後、その調整面を打面として、彫刀面を作り出したものである。彫刀面の作出は、4回の打撃によっている。また、側縁部の調整は、石器の下半部を欠損しているために不明であるが、石器右側縁において、調整面から側縁部へ調整加工がそのまま続いているようでもある。石材は、珪岩である。

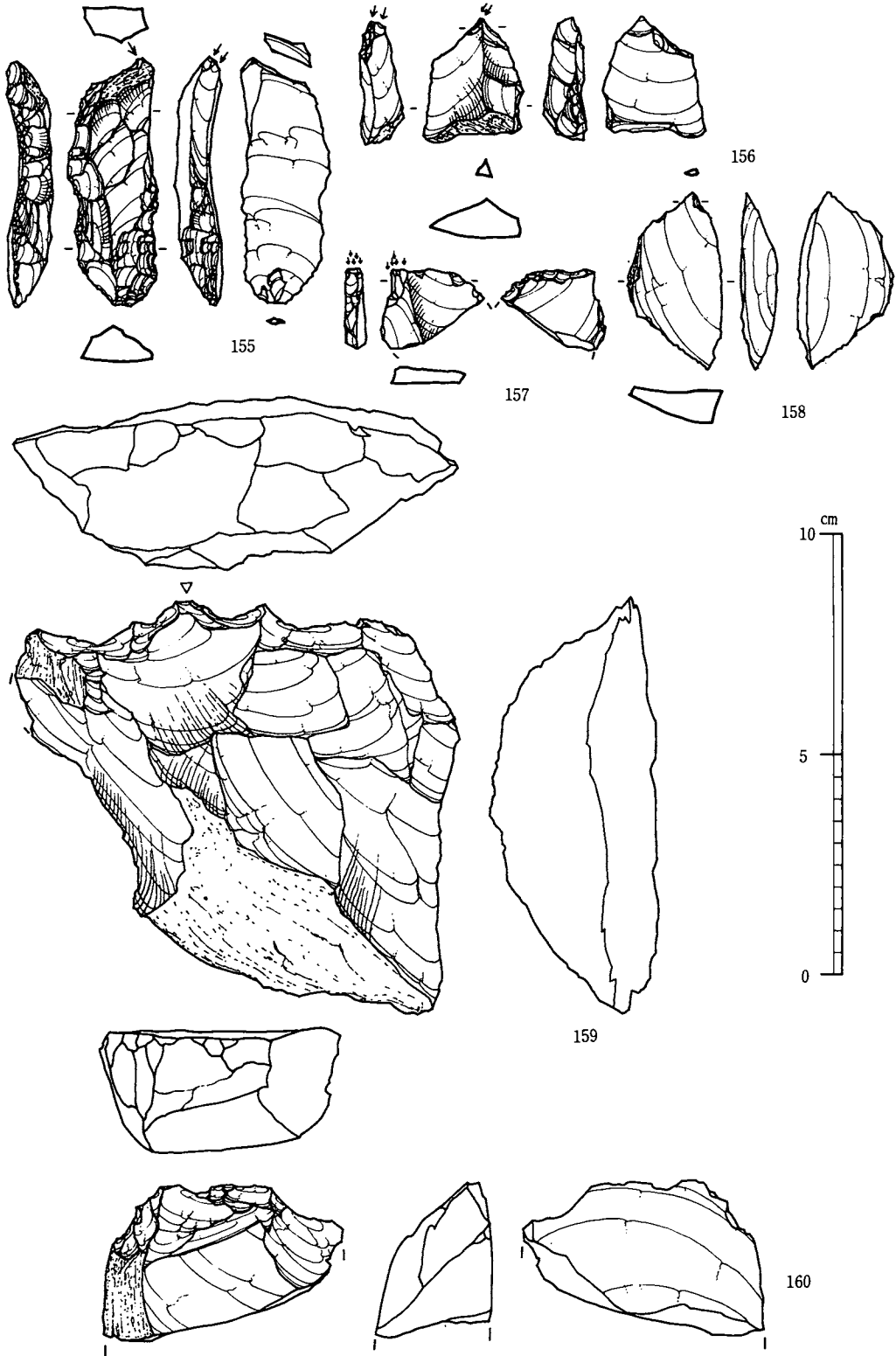
揉錐器 (第28図158)

158が、揉錐器で、尾根頂部の185.75mの等高線近くから1点のみ出土した(第27図)。珪岩製の横長剥片を素材とし、その打面部を裏面方向から折り取り、その折断面と剥片の左側縁部とが交わる部分を刃部としている。刃部の調整は表面右側に一部みられる。また、基部側の縁辺には、刃こぼれ状の微細な剥離がみられる。



第27図 遺物分布図 (彫器・採錐器・礫器)

第1節 狸谷I石器文化の遺物



第28図 石器実測図

第8表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
155	彫器	珪石	5.7	2.05	1.02	12.0	VIID M 302
156	〃	黒曜石	2.8	2.35	0.9	4.3	VIII C M 464
157	〃	珪石	(1.82)	(2.5)	(0.5)	(2.25)	IXD M 258
158	揉錐器	珪石	4.02	2.2	0.8	4.65	IXD M 457
159	礫器	珪石	9.45	10.2	3.85	307.6	VIID M 1128
160	〃	安山岩	(3.55)	(5.47)	(2.65)	(49.0)	VIII C M 90

礫器 (第28図159・160)

礫器は、2点出土している。その出土地点は、尾根頂部の185.00～185.25mの等高線付近にあり、おたがい近接している(第27図)。以下、石器ごとにみていこう。

159は、珪岩製の大型の剝片を素材とし、素材となる剝片の打面部に、裏面からの打撃を加えて作られた片刃礫器である。刃部は、直刃である。

160も、剝片を素材とした片刃の礫器である。159とは異なり、剝片の打面部は、下位に置かれている。刃部は、数枚の大きな剝離と、その後の細かい剝離によって作られ、孤刃をなしている。石材は、安山岩である。

磨石・敲石 (第30図161～第38図222)

磨石・敲石は、71点(内、2点の接合が5例、4点の接合が1例あり、資料実数62点)が出土した。石器組成に占める割合は、18%である。石材は、二種類があり、砂岩69点、安山岩2点という内訳である。

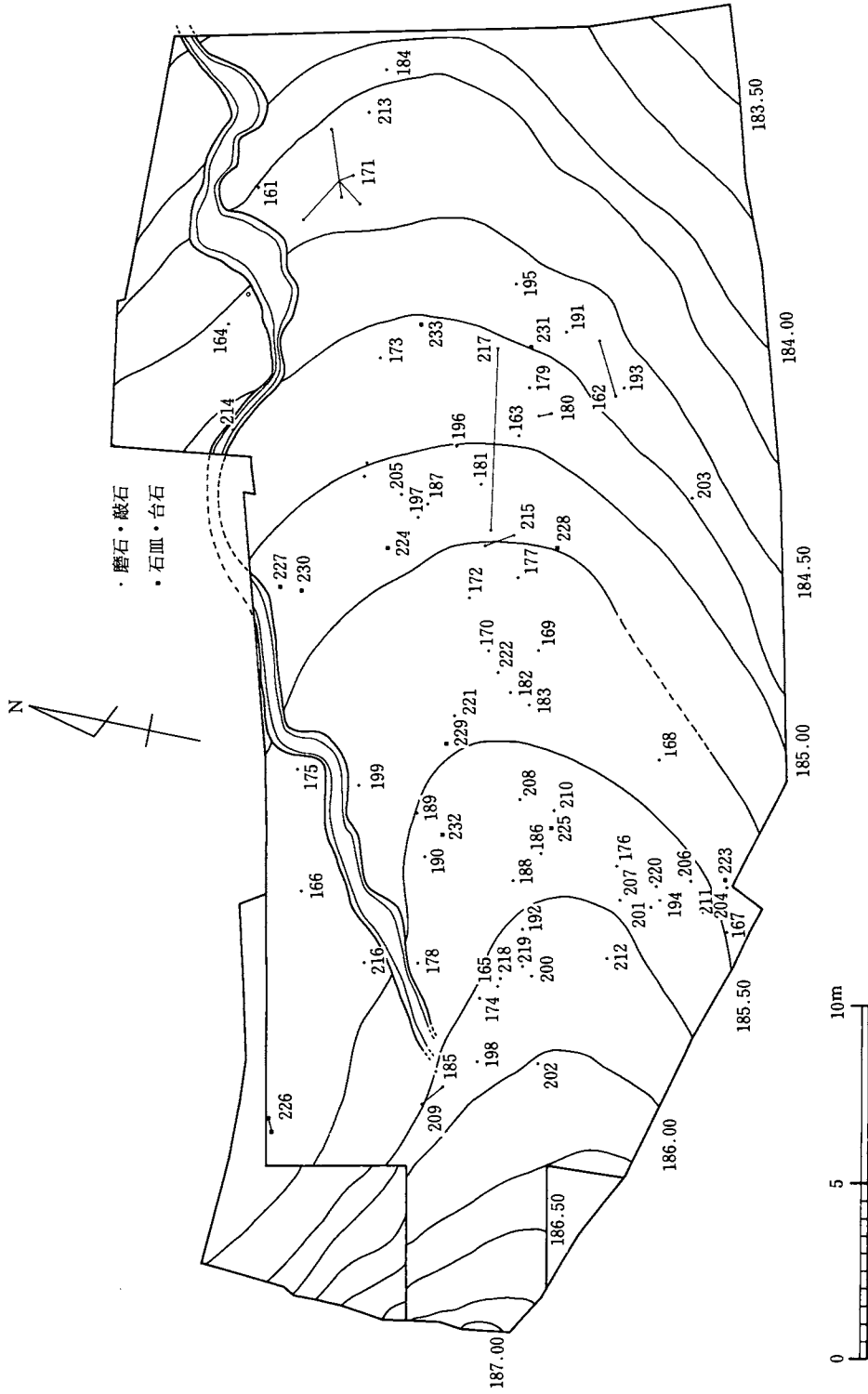
分布は、尾根線を中心として、東西に隣接した二つの群にまとまる傾向がある。西側の群は、等高線185.25mと185.50mとの間から186.00mにかけての範囲にまとまり、直径14mのほぼ円形を呈する分布域で、東側のものは、等高線185.25m前後より低い部分にまとまる長軸16m、短軸8mの楕円形を呈する分布域である。これらの二つの分布域は、数個から10個前後の磨石・敲石によってまとまり、さらに細かい単位に分けることも可能である(第29図)。

62点の磨石・敲石は、さらにその縁辺や表面の状態によって、大きく四つに分類できる。以下、分類ごとに記述していこう。

第1類 (167・169～171・173・178～183・186・194～199・215～220)

1類の磨石・敲石は、円礫の一端や両端に、あばた状に表面が荒れた状態の敲打痕が認められるものにあたる。円礫の形状は、楕円形、円形、棒状、不整形と様々である。この類の石器には、石器の表面にも、敲打痕がみられるもの(173・183・197・198・220)が、わずかながらみうけられる。

第1節 狸谷I石器文化の遺物



第29図 遺物分布図（磨石・敲石・石皿・台石）

第2類 (161・166・168・177・185・188・189・191・192・199・214)

2類の磨石・敲石は、円礫の側縁部に、敲打痕がみられるものにあたる。円礫の形状は、楕円形・円形などが中心で、161や162のような大型のものと、中・小型のものという大きさの差はあるが、1類に比べれば、それぞれ近似している。この類の石器は、敲打痕の状態で、さらに二つに細分が可能である。それは、敲打痕が激しい状態で、側縁部の広い範囲に認められるもの（163・165・190・193）と側縁の表面の荒れが少ないものである。おそらく、この両者の差は、使用頻度の差ないしは、使用対象の違いによって、あらわれるものと考えられる。このほか、半数のもの（161・162・163・166・189・193・214）には、表面にも、敲打痕が観察される。

なお、162は、接合例であるが、石器欠損後も使用に給されている。

第3類 (201～212・222)

3類の磨石・敲石では、はっきりとした磨痕部分が、円礫の一部で面を形成しているところに特徴がある。しかし、石器の使用による痕跡は、この磨痕の面と同時に、敲打痕をあわせ持っているものがほとんどで、敲打痕がみられないものは、203と206の2例にすぎない。円礫の形状は、球形、楕円形、棒状、不定形というように多様である。

第4類 (213)

4類に分類されるものは、213の1例のみである。偏平な円礫が使用され、石器縁辺を半周する範囲の、表裏両面に磨痕による面が観察されるという特徴を持っている。その部分の側面観は、あたかも磨製石斧の両刃のようでもある。この石器は、局部磨製礫と呼称されるものに相当すると考えられるが、九州における初出の資料として注目される。このほか、側縁の一部には敲打痕も観察される。

所属不明の磨石・敲石 (176・221)

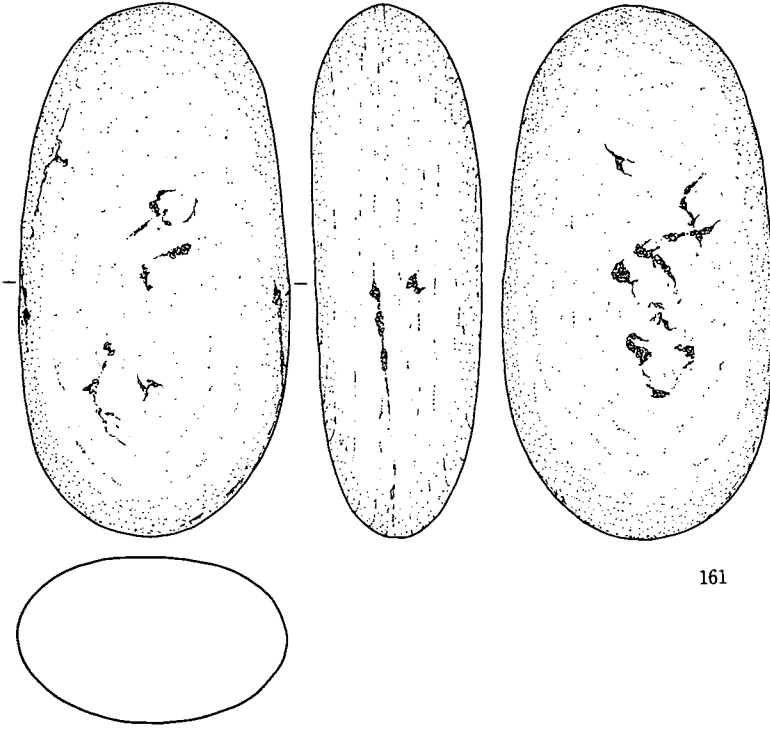
2点の資料が、所属不明である。176は、楕円形の円礫を使用したものと考えられるが、側縁部を含めて大きく破損しているために、不明である。ただ、その特徴からして、1類ないし2類に所属する可能性が強い。221は、棒状の円礫を使用したもので、その両端を失っている。形状の特徴から考えて、3類に属する可能性がある。

石皿・台石 (第39図223～第42図233)

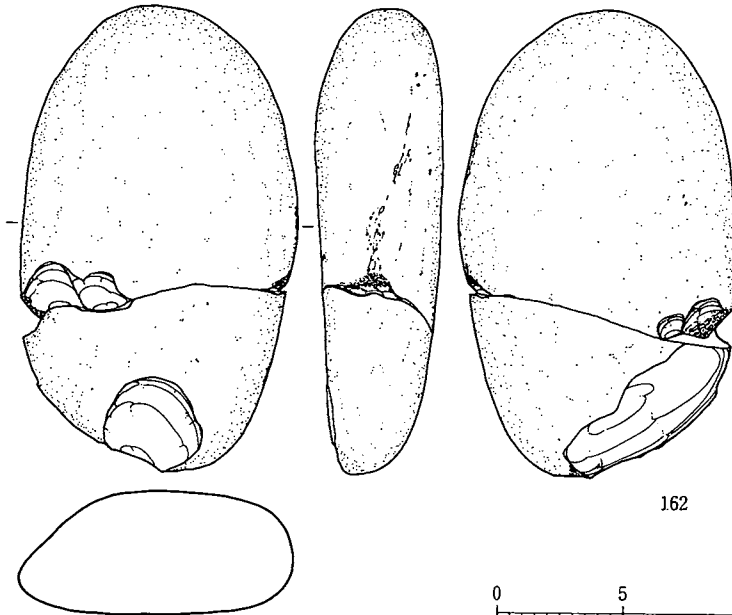
石皿・台石は、12点出土した（内、接合例1例で、資料実数11点）。その石器組成に占める割合は、3%にあたり、石材は、すべて砂岩である。なお、石皿・台石と磨石・敲石との数量の関係をみると、1:5.6の割合にあり、単純には磨石・敲石の5個ないし6個に対して石皿・台石1個という関係が割り出せる。

石器は、調査区のほぼ中央部に、それほど近接することなく散在している。ただ、その散在のあり方にも偏在の傾向がみられ、調査区中央部を境に西側に点在するものと、間を置いて東

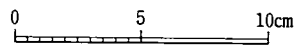
第1節 狸谷 I 石器文化の遺物

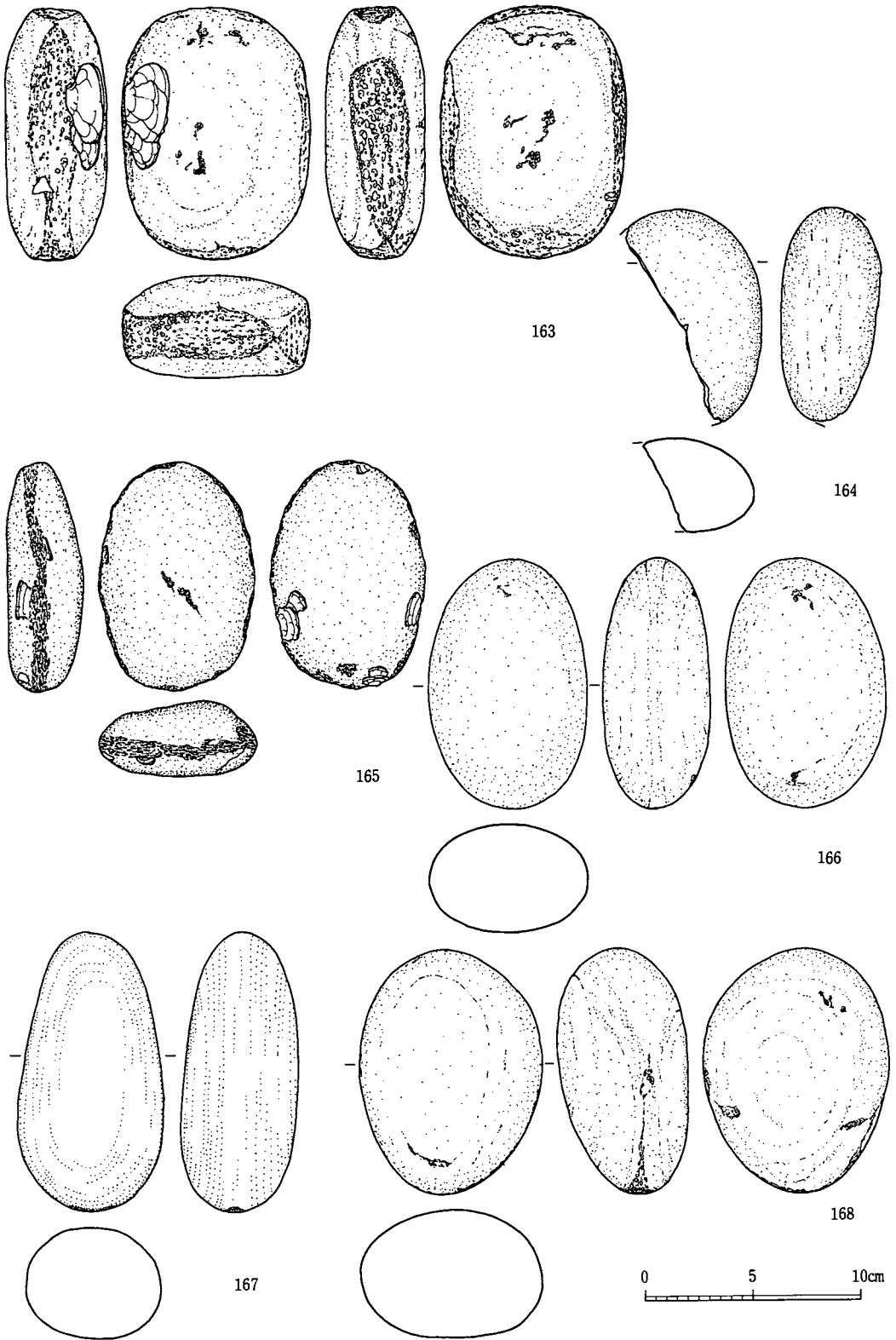


161



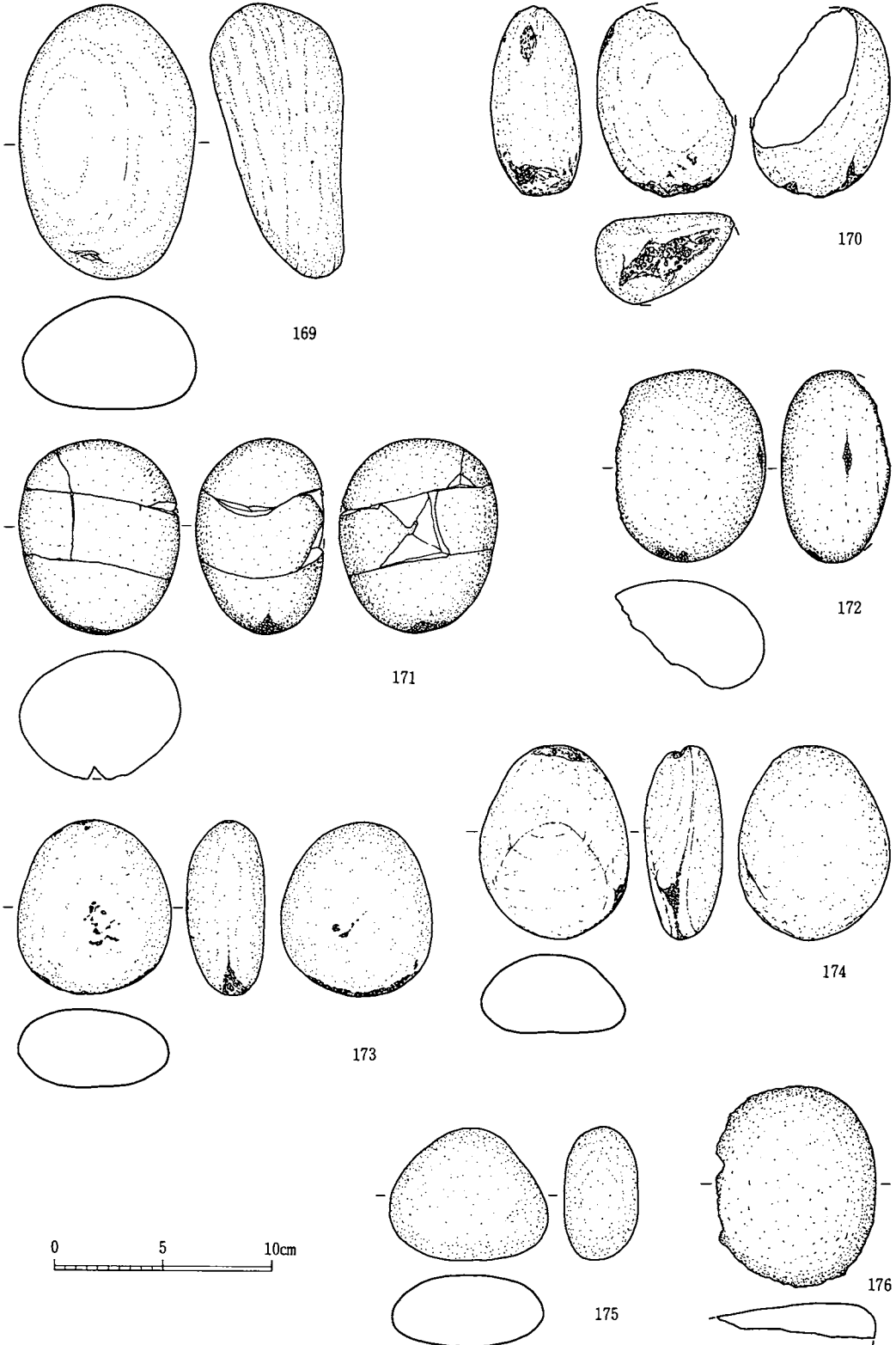
162



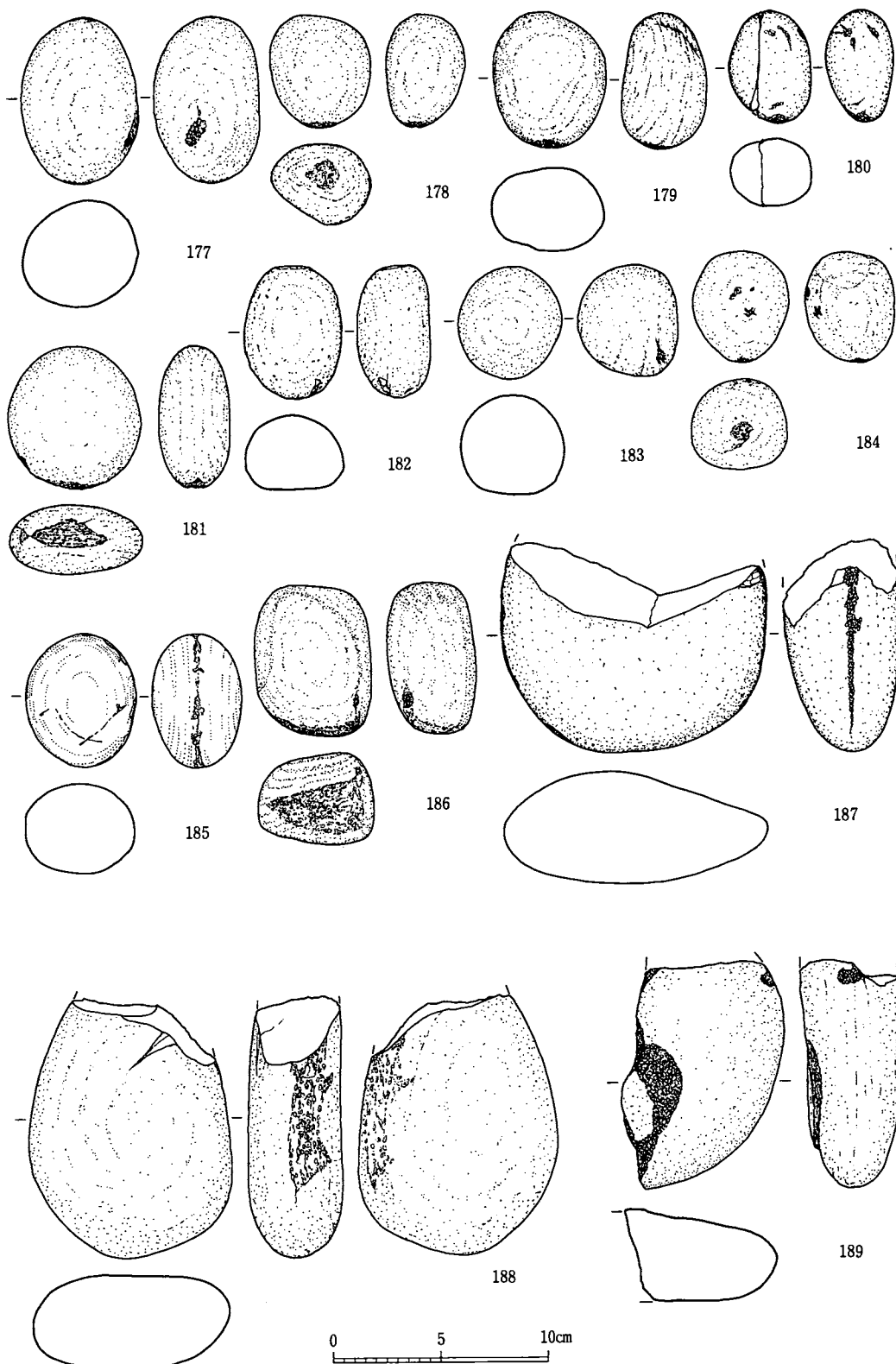


第31図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物

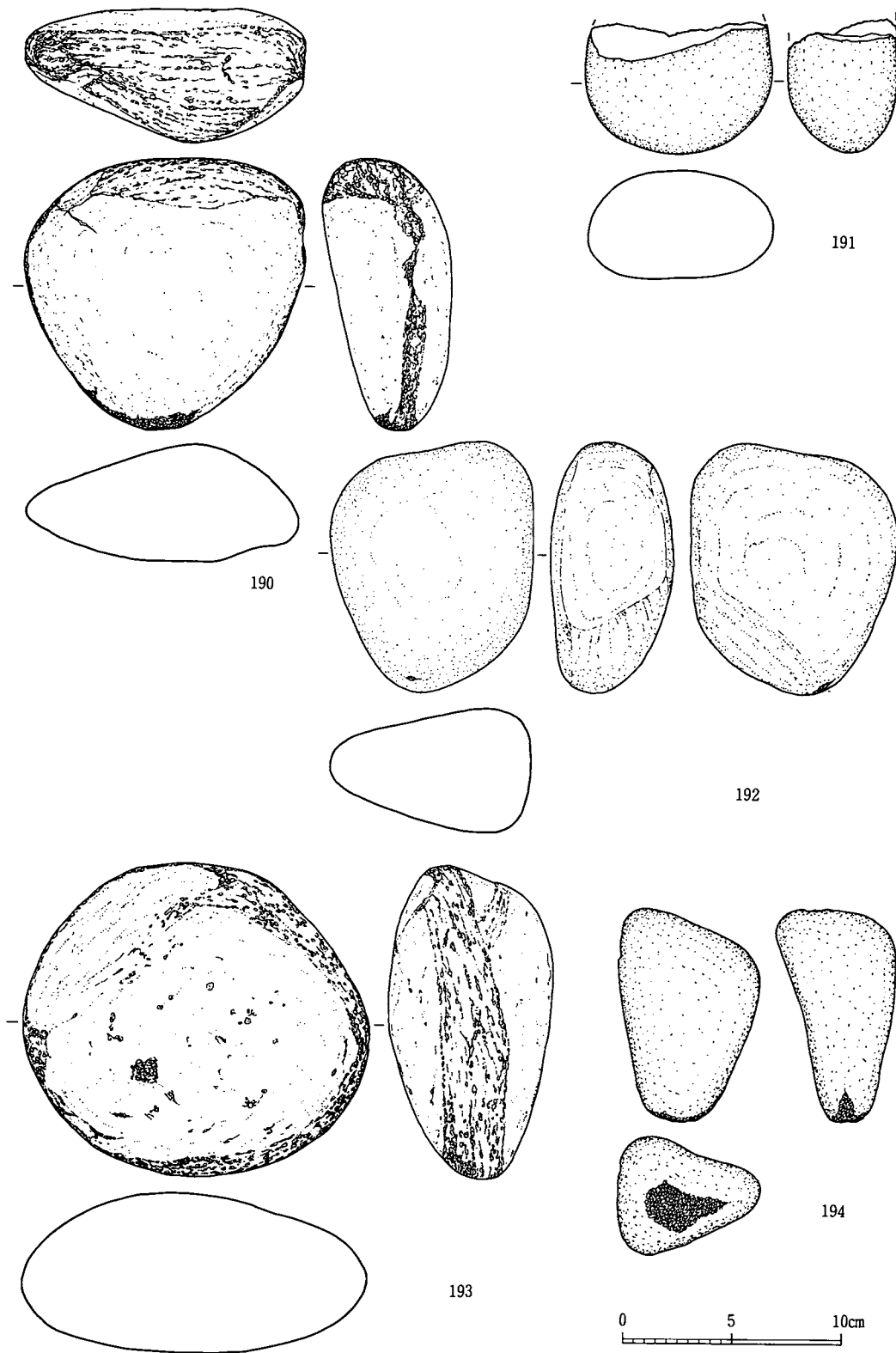


第32図 石器実測図

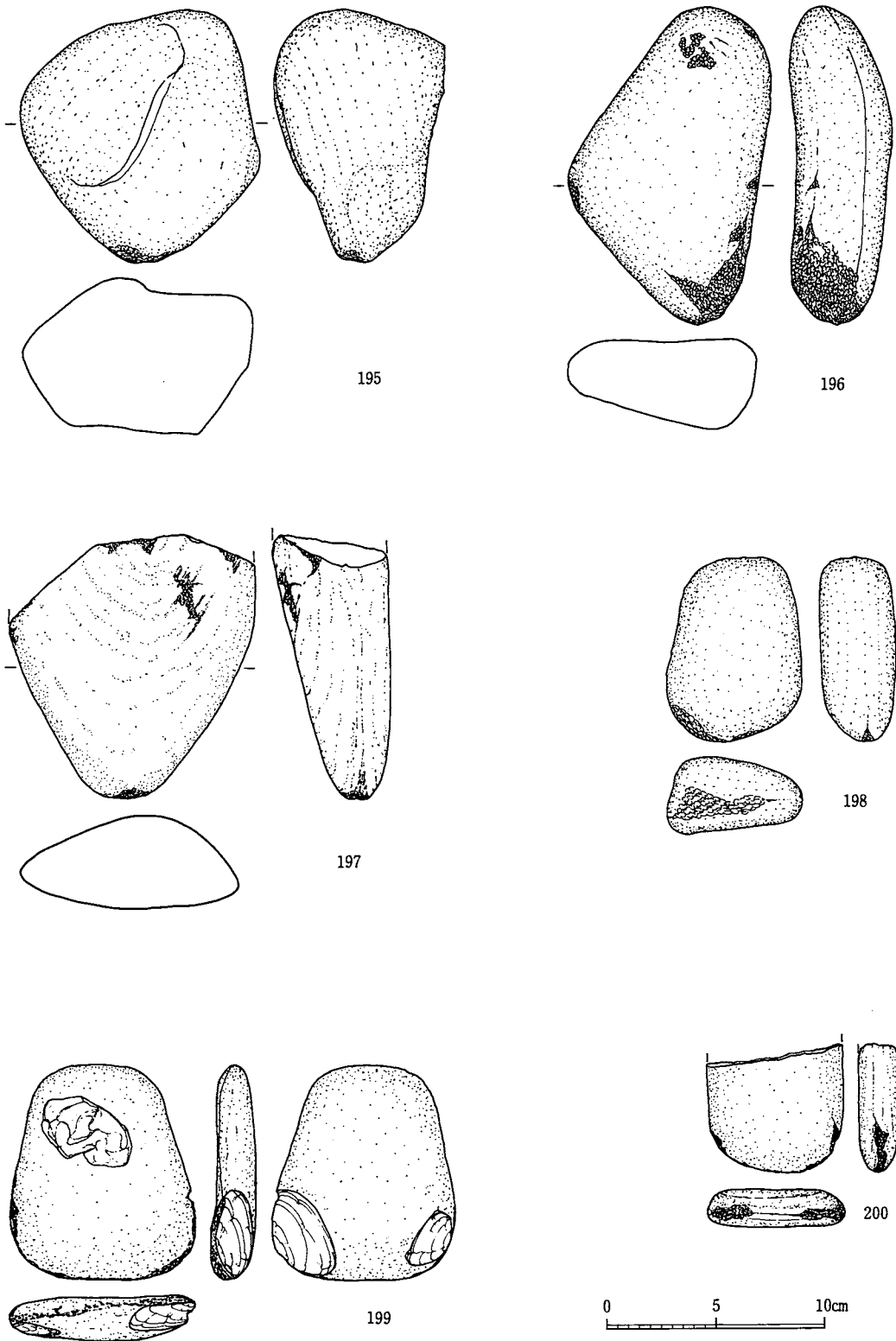


第33図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物

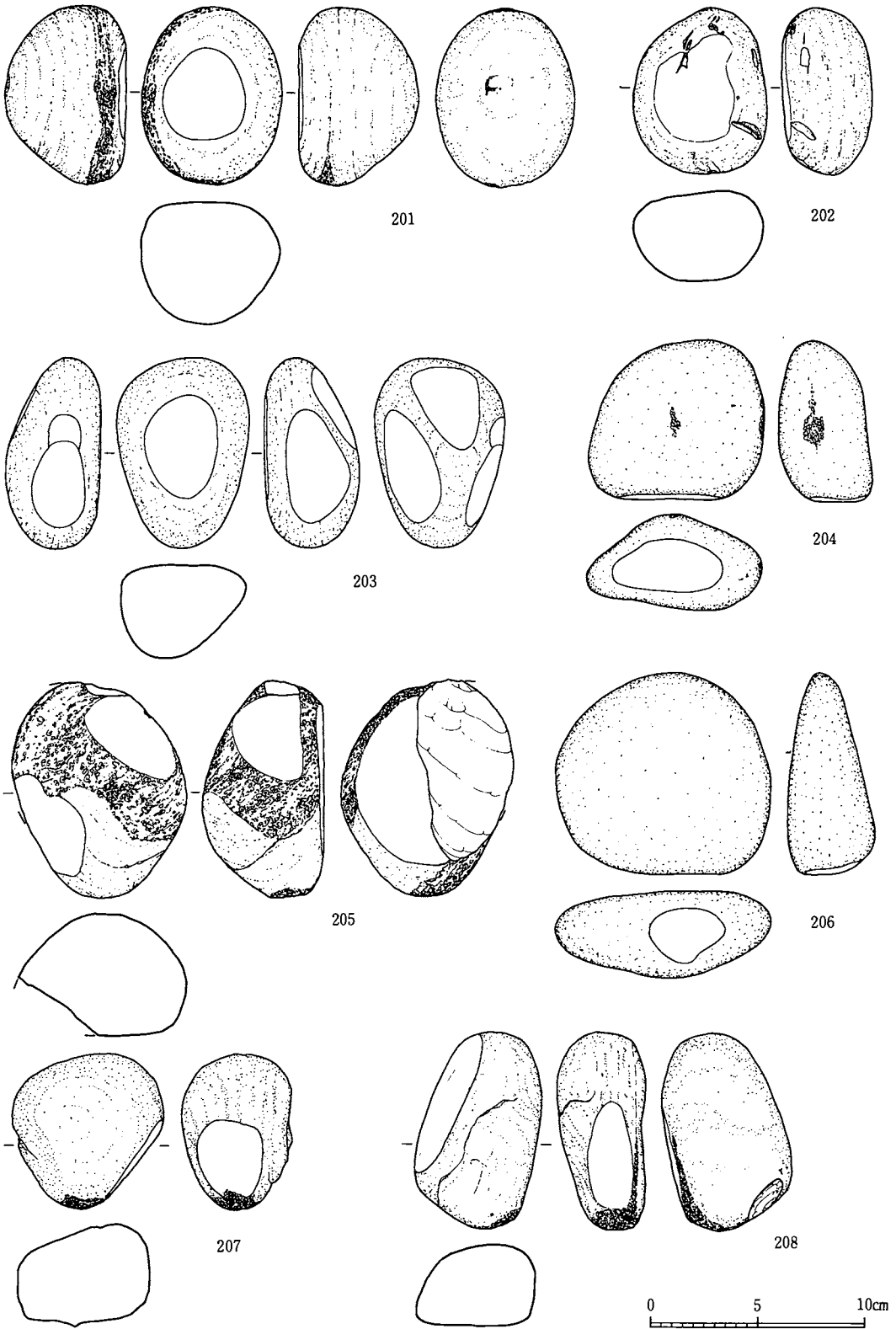


第34図 石器実測図



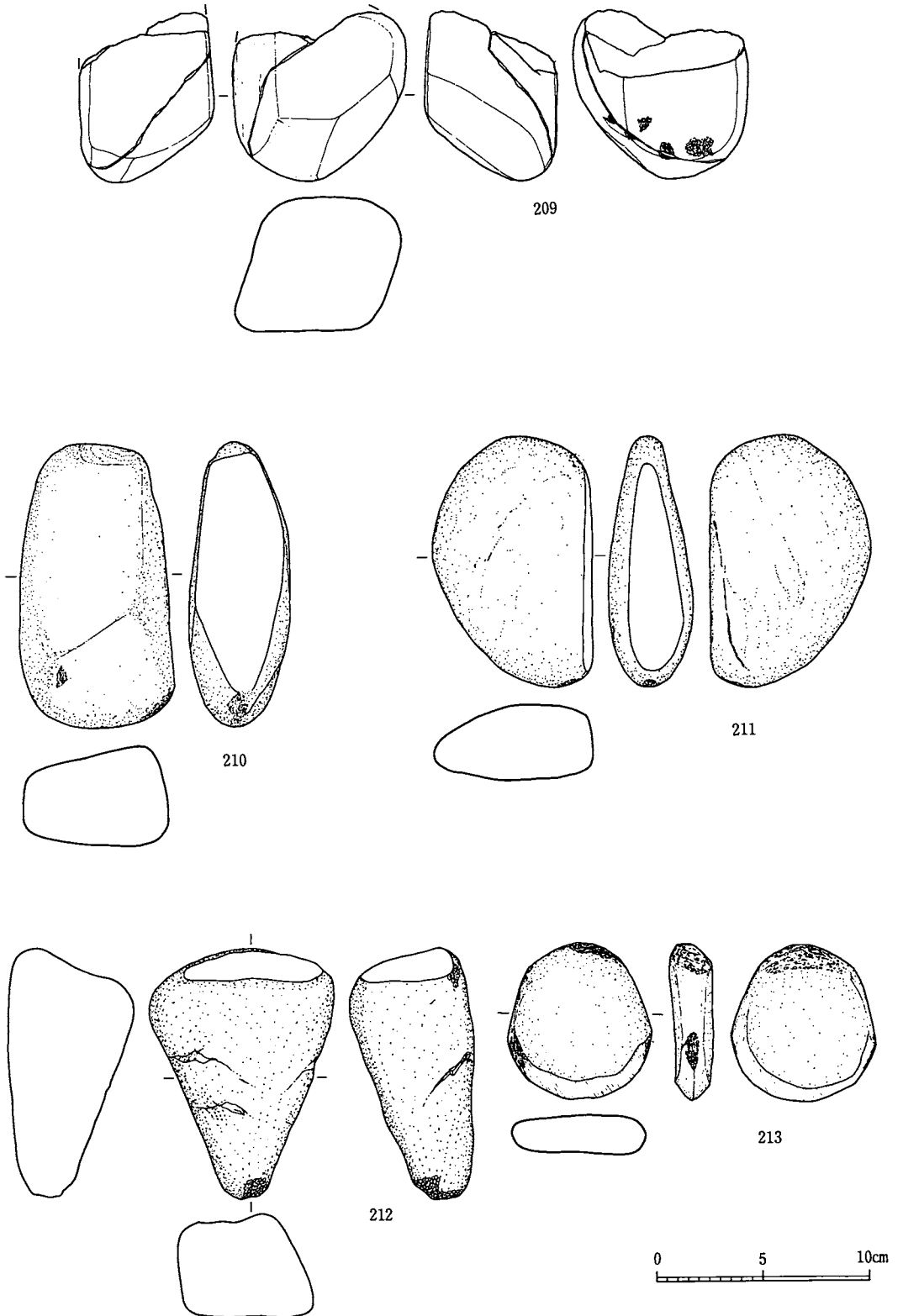
第35図 石器実測図

第1節 狸谷 I 石器文化の遺物



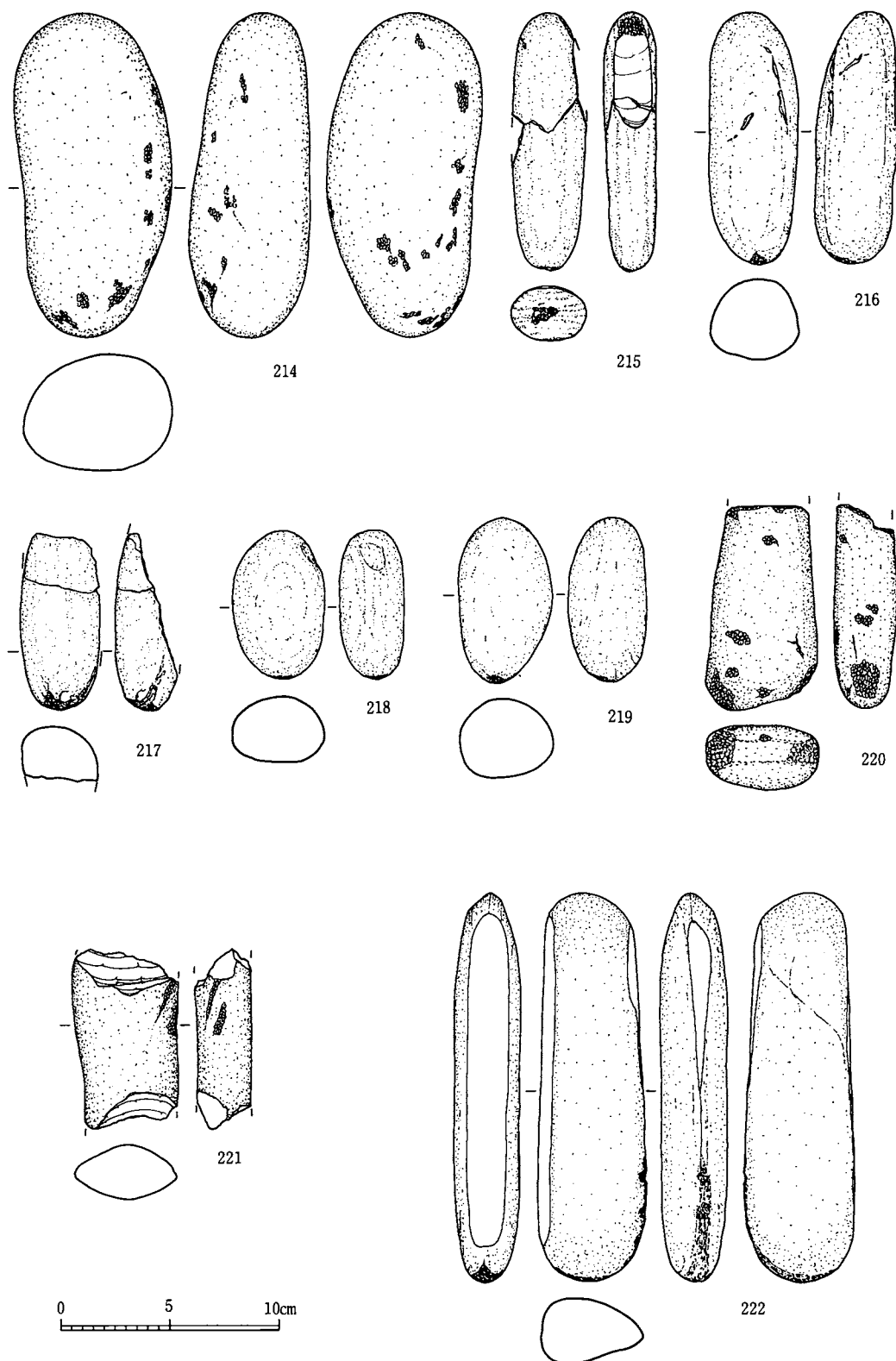
第36図 石器実測図

第三章 調査の成果

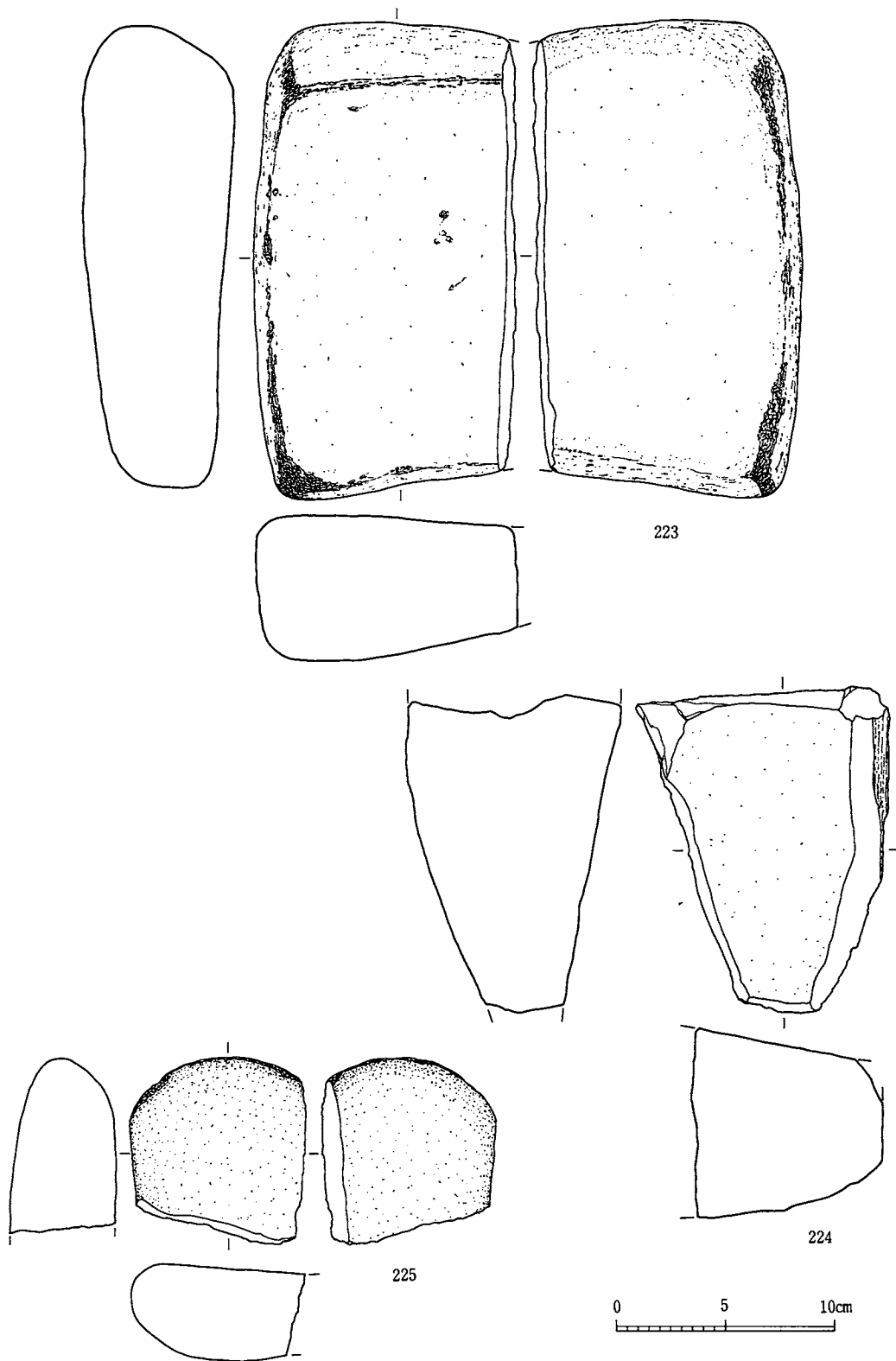


第37図 石器実測図

第1節 狸谷 I 石器文化の遺物

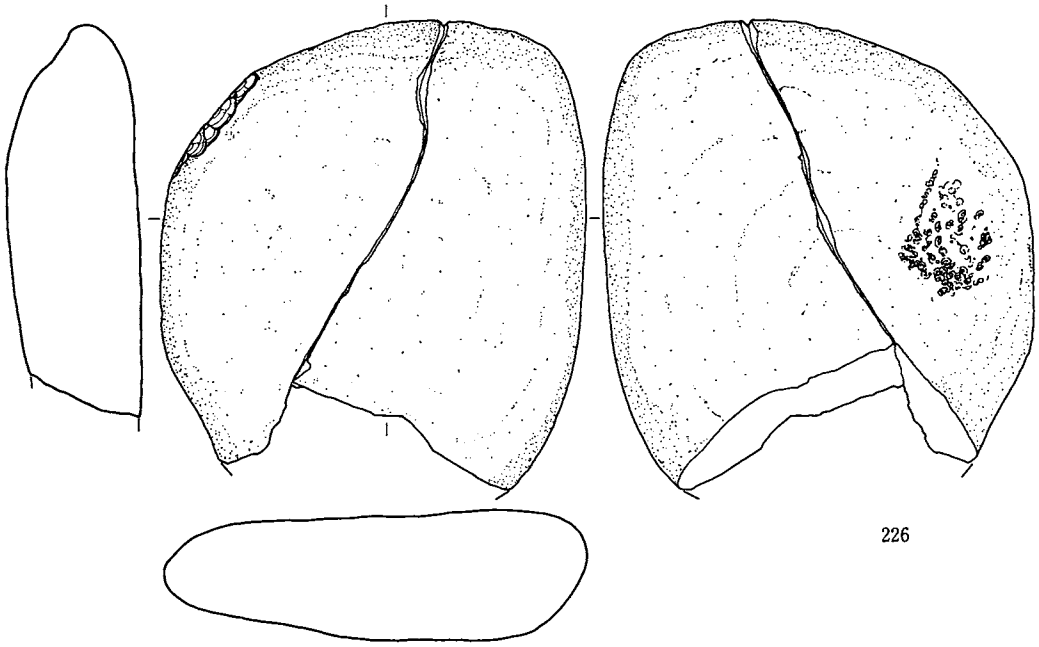


第38図 石器実測図

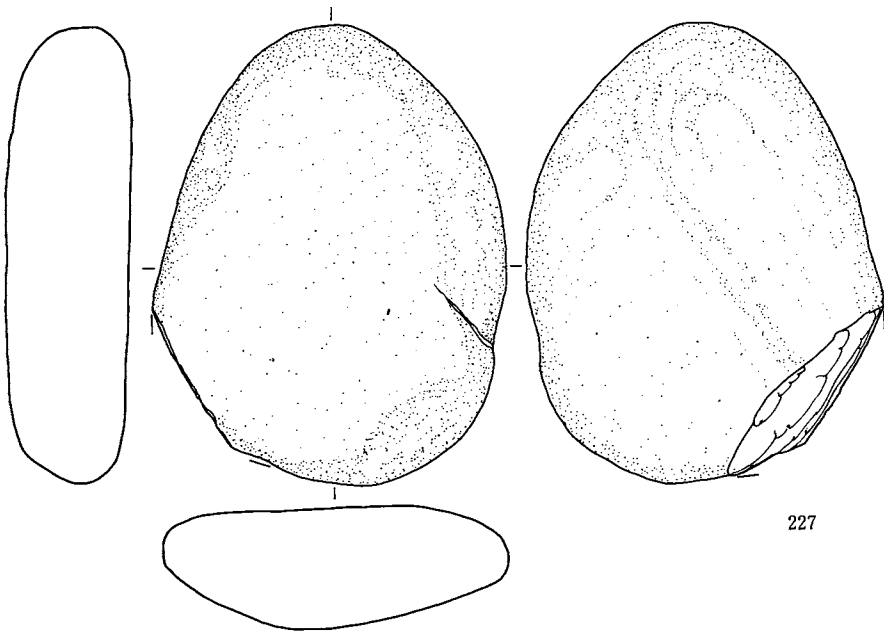


第39図 石器実測図

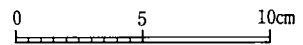
第1節 狸谷 I 石器文化の遺物



226

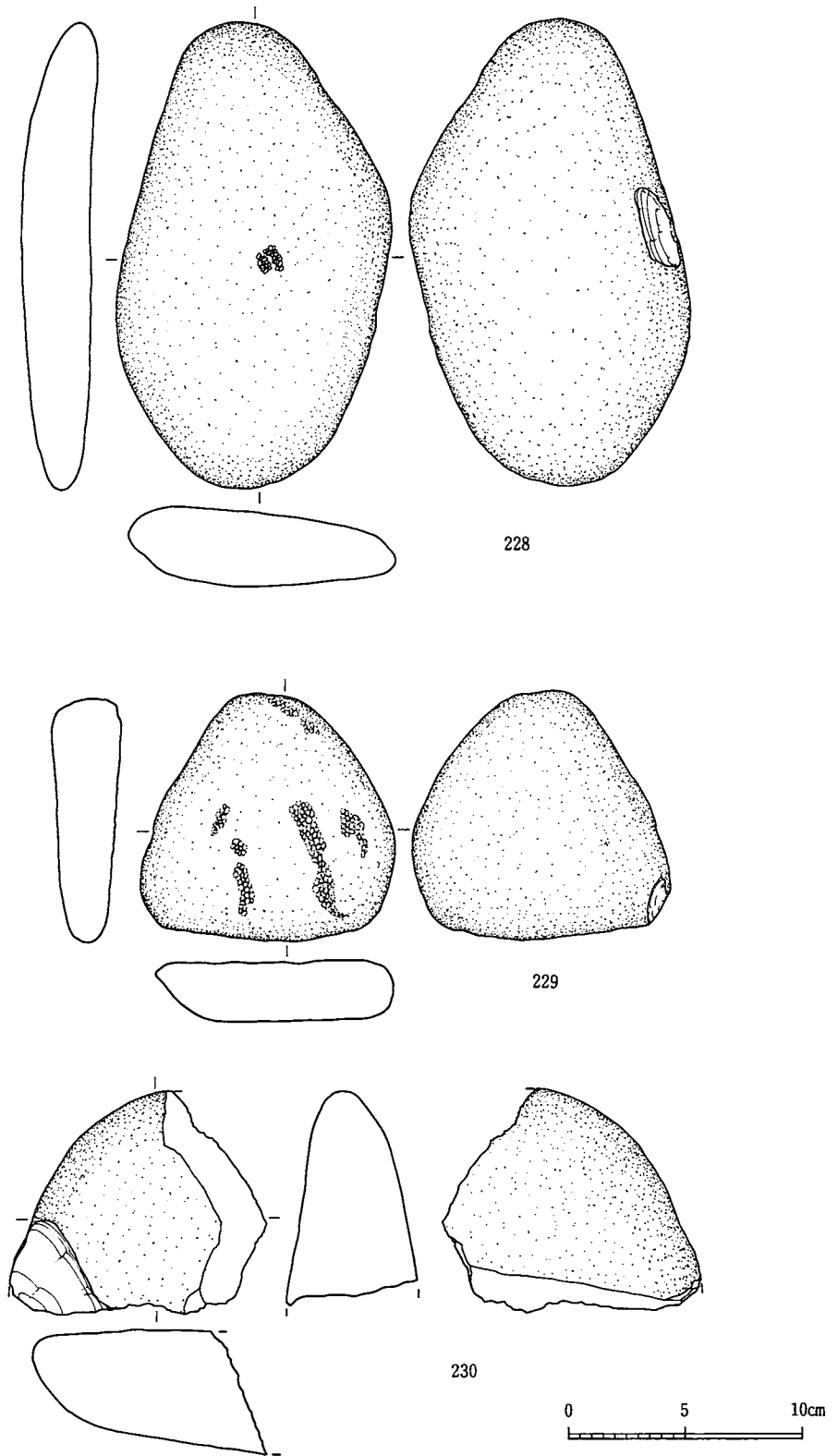


227



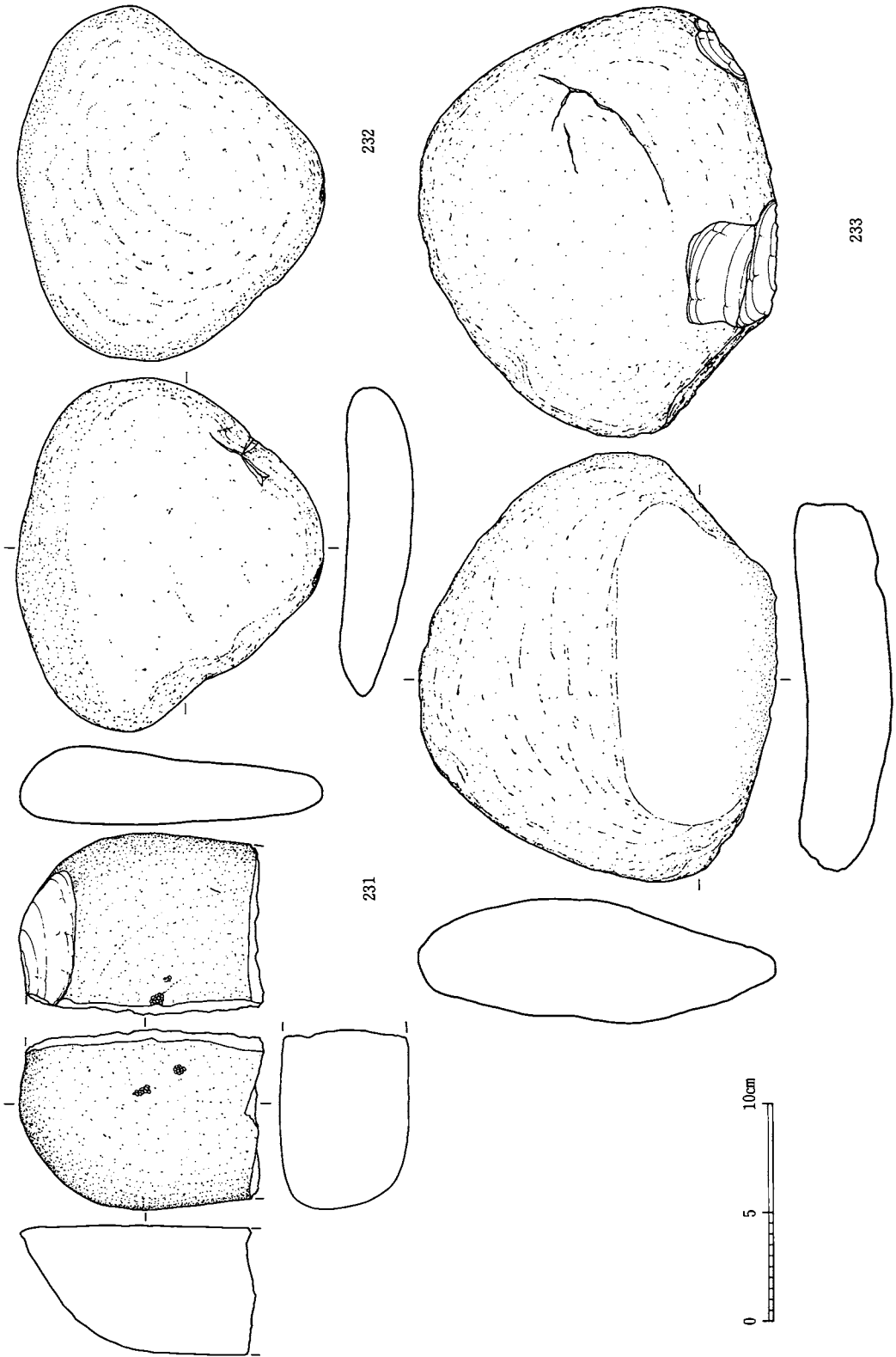
第40図 石器実測図

第三章 調査の成果



第41図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物



第42図 石器実測図

第三章 調査の成果

第9表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
161	磨石・敲石	砂岩	21.02	10.7	6.9	2350	VMC M 860
162	〃	砂岩	18.4	11.0	4.9	(1449)	VMD M 827(上)
		砂岩					VMD M 825(下)
163	〃	砂岩	11.7	8.68	4.71	645	VMD M 416
164	〃	砂岩	(9.9)	(6.28)	(4.4)	(250)	VMC M 1093
165	〃	砂岩	10.55	7.2	3.55	385	IXD M 315
166	〃	砂岩	11.55	7.46	5.0	610	IXC M 294
167	〃	砂岩	13.04	6.85	5.5	690	IXD M 917
168	〃	砂岩	11.4	8.62	6.1	790	IXD M 566
169	〃	砂岩	12.65	8.1	6.1	770	VMD M 1147
170	〃	砂岩	(8.78)	(6.33)	(4.2)	(225)	VMD M 201
171	〃	砂岩	9.0	7.35	5.85	(483)	VMC M 923 A
							〃 B
							〃 C
							〃 D
							〃 E
172	〃	砂岩	(8.8)	(6.8)	(5.0)	(320)	VMD M 1148
173	〃	砂岩	8.0	7.05	3.6	275	VMC M 590
174	〃	砂岩	8.9	6.9	3.6	290	IXD M 318
175	〃	安山岩	6.17	7.35	3.37	220	IXC M 139
176	〃	砂岩	(9.3)	(7.28)	(1.62)	(120)	IXD M 1002
177	〃	砂岩	7.6	5.4	4.9	245	VMD M 118
178	〃	砂岩	5.2	4.65	3.73	110	IXD M 309
179	〃	砂岩	6.24	5.27	3.9	165	VMD M 1067
180	〃	砂岩	5.2	3.75	3.15	70	VMD M 828
							VMD M 824
181	〃	砂岩	6.51	6.08	3.3	160	VMD M 412
182	〃	安山岩	6.08	4.5	3.4	115	VMD M 216
183	〃	砂岩	5.1	4.85	4.6	145	VMD M 1188
184	〃	砂岩	5.05	4.42	4.15	115	VMC M 964
185	〃	砂岩	6.14	5.06	4.1	160	IXD M 367
186	〃	砂岩	6.98	5.4	4.2	220	IXD M 1037
187	〃	砂岩	(9.6)	12.2	(5.2)	(670)	VMD M レキ1
188	〃	砂岩	(12.0)	9.32	4.36	(689)	IXD M 329
189	〃	砂岩	(10.43)	(7.5)	(4.3)	(410)	IXD M 117
190	〃	砂岩	12.47	12.95	6.1	1190	IXD M レキ69
191	〃	砂岩	(6.1)	8.65	(5.05)	(357)	VMD M 823
192	〃	砂岩	11.53	9.47	5.72	790	IXD M 327
193	〃	砂岩	14.35	15.96	7.45	2280	VMD M 826
194	〃	砂岩	9.7	6.47	5.47	330	IXD M 750
195	〃	砂岩	11.52	10.9	7.18	1065	VMD M 1121
196	〃	砂岩	14.46	9.3	4.7	640	VMD M 1066
197	〃	砂岩	(12.1)	(11.25)	(5.5)	(785)	VMD M 1146
198	〃	砂岩	8.42	6.16	3.5	230	IXD M 1052

第1節 狸谷I石器文化の遺物

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
199	磨石・敲石	砂岩	9.9	8.47	2.1	(180)	IXC M 151
200	〃	砂岩	(5.95)	6.27	1.8	(110)	IXD M 322
201	〃	砂岩	8.35	6.59	5.7	415	IXD M 749
202	〃	砂岩	7.8	6.3	4.2	290	IXD M 430
203	〃	砂岩	8.9	6.2	4.5	300	VIII D M 939
204	〃	砂岩	7.5	8.2	4.4	360	IXD M 980
205	〃	砂岩	10.15	(8.23)	5.78	(510)	VIII C M 1067
206	〃	砂岩	9.4	10.05	4.08	490	IXD M 914
207	〃	砂岩	7.34	5.2	4.9	290	IXD M 1061
208	〃	砂岩	9.24	6.1	4.2	275	IXD M 1038
209	〃	砂岩	(7.93)	(8.28)	6.32	(465)	IXD M 1045 IXD M 1044
210	〃	砂岩	13.43	7.25	4.8	670	IXD M 1035
211	〃	砂岩	11.8	7.65	3.58	425	IXD M 980
212	〃	砂岩	11.8	8.7	5.9	570	IXD M 1040
213	〃	砂岩	7.35	6.85	2.1	145	VIII C M 977
214	〃	砂岩	14.7	7.2	5.55	750	VIII C M 744
215	〃	砂岩	11.78	3.47	2.5	(125)	VIII D M 487(上) VIII D M 116(下)
216	〃	砂岩	11.53	4.1	3.7	265	IXC M 296
217	〃	砂岩	(8.05)	(3.7)	(2.54)	(90)	VIII D M 1242 VIII D M 115
218	〃	砂岩	6.78	4.24	3.07	125	IXD M 314
219	〃	砂岩	7.52	11.4	3.6	156	IXD M 323
220	〃	砂岩	9.28	5.1	3.0	195	IXD M 751
221	〃	砂岩	(8.2)	(4.88)	(2.55)	(125)	VIII D M 1149
222	〃	砂岩	17.8	5.0	3.1	400	VIII D M 202
223	石皿・台石	砂岩	21.67	(12.3)	7.0	(3130)	IXD M 979
224	〃	砂岩	(14.85)	(11.6)	(8.7)	(2020)	VIII C M レキ42
225	〃	砂岩	(8.58)	(8.1)	(4.9)	(470)	IXD M 994
226	〃	砂岩	(18.4)	17.0	5.12	(2335)	IXC M レキ3 IXC M レキ4
227	〃	砂岩	18.5	14.1	(5.1)	1735	VIII C M レキ10
228	〃	砂岩	19.8	12.0	3.4	955	VIII D M 1197
229	〃	砂岩	10.6	11.0	3.0	390	IXD M 1034
230	〃	砂岩	(9.6)	(11.0)	(5.6)	(615)	VIII C M レキ12
231	〃	砂岩	(11.25)	(8.3)	(6.0)	(89.0)	VIII D M 1241
232	〃	砂岩	14.12	16.2	3.4	1010	IXD M レキ73
233	〃	砂岩	16.6	19.7	5.74	2160	VIII D M 1178

側に点在するものがある。こうした分布の傾向は、先に示した磨石・敲石でも同様で、そのあり方は、磨石・敲石の分布に呼応し、それを縫うようでもあり（第29図）、上記した数量関係とも、ある程度は関連するかもしれない。

石皿・台石は、その素材や形状を観察してみると、ほとんどのものが、楕円形ないし円形の偏平な円礫を、そのまま使用したもの（225～233）である。こうした中であって、223の例は、敲打等を加えて形状を修正しており、特異なものといえる。

また、作業面には、三つの状態がみられる。すなわち、敲打痕のみが観察されるもの1点（229）、磨痕のみのも2点（227・233）、そしてこの両者が観察されるもの5点（223・226・228・231・233）である。このように、敲打痕と磨痕とをあわせ持つものが、狸谷I石器文化に属する石皿・台石の中心をなすものといえる。

二次加工ある不定形石器（第44図234～第45図259）

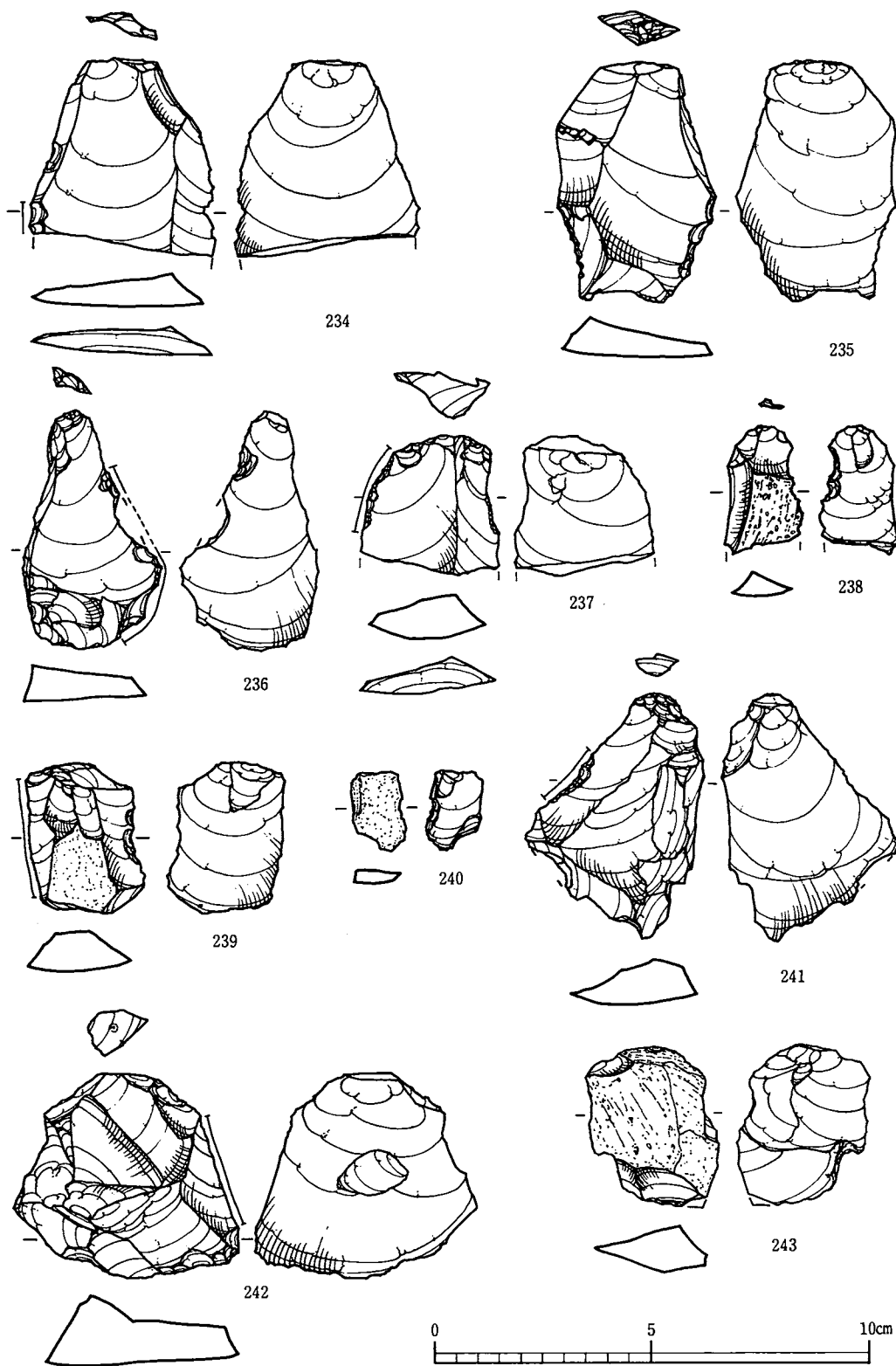
狸谷I石器文化の石器組成の中には、これまでみてきたような、法則的な調整加工によって、作られる石器の他に、剥片の縁辺の一部に、連続しない二次加工が観察される石器が少なからずみられる。その石器は、法則的な調整加工によっていないために素材となる剥片の形に、大きく左右され、共通した一定の形状を示さない。

この二次加工ある不定形石器は、26点出土した。石器組成に占める割合は、7%と、比較的高い頻度を示している。石材ごとの内訳は、珩岩15点、黒曜石9点、安山岩1点、頁岩1点である。

石器の分布域は、調査区の東側に偏ってはいるが、かなり広範囲にわたっている。その出土した石器量からすれば、かなり点在した分布の状況である。このような点在した分布は、さらにその偏在の傾向から、二つに分けられる。その二つの群とは、184.50～185.50mの等高線の尾根頂部に分布するものと、調査区の南東隅に分布するものである（第43図）。

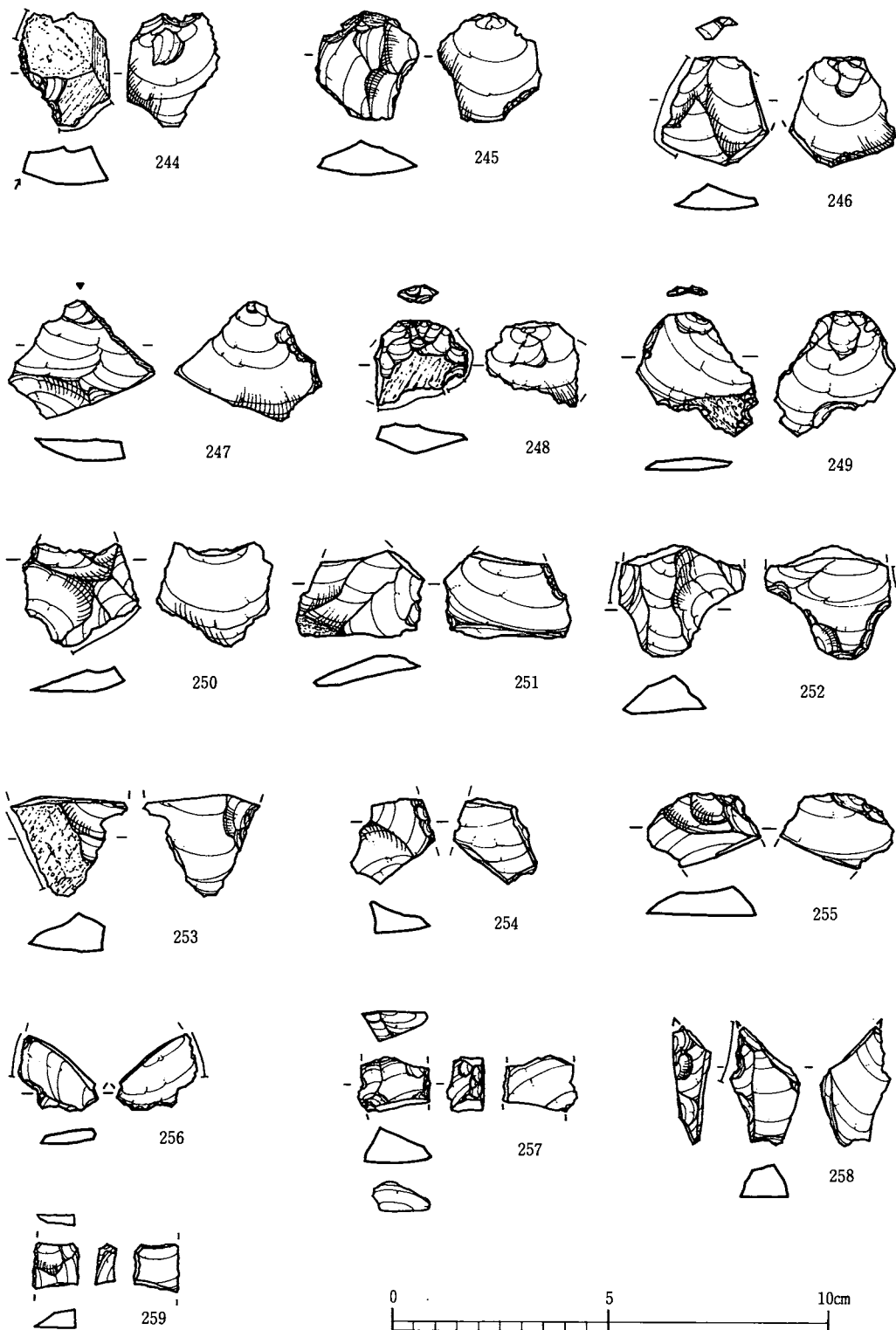
以下、石器ごとにみていきたい。

234は、頁岩製の縦長剥片の左側縁下部に二次加工がみられるものだが、その全体像は、胴部以下を欠損しているために、不明である。打面は、複剝離打面をなしている。235は、縦長剥片の両側縁下部に二次加工がみられるもので、安山岩製である。打面調整が観察される。236は、二次加工が縦長剥片の右側縁にみられるものである。その加工の方向は、剥片の頭部に近い部分では表面から、それ以下は裏面からのものである。打面は、複剝離面である。珩岩製である。237は、下半分を大きく欠損しているが、二次加工は、左側縁の頭部のみにみられる。珩岩製の縦長剥片で、打面は複剝離面である。238は、小型の珩岩製縦長剥片で、その頭部から胴部にかけて二次加工がみられる。その加工の状態はやや内湾している。打面は、単剝離面である。239は、寸詰りの珩岩製縦長剥片の右側縁胴部に二次加工がみられるもので、左側面には、使用痕と思われる微細な剝落が観察される。打面は、複剝離面である。240は、



第44図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物



第45図 石器実測図

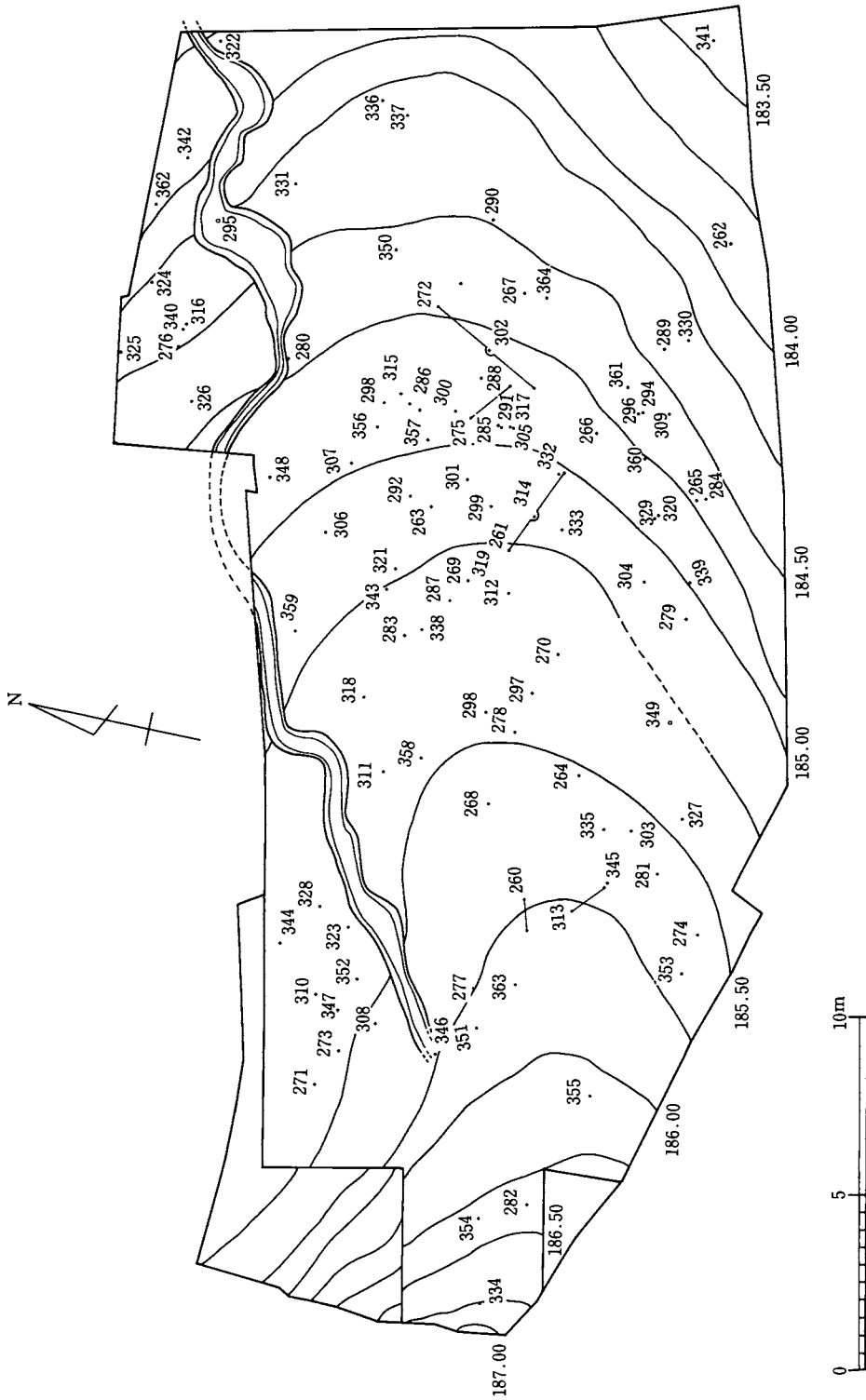
第三章 調査の成果

黒曜石の小型の剥片であり、その胴部に二次加工がみられる。表面および打面は、自然面である。241は、形状が三角形を呈する珪岩製縦長剥片で、その左側縁の胴部に二次加工が観察される。打面は、単剥離面である。頭部調整がみられる。242は、先端部が大きく開いた厚手の剥片であり、その先端部の右側隅に加工がみられる。また、右側縁部には、微細な剥落もある。珪岩製で、打面は、単剥離面である。243は、寸詰りの珪岩製縦長剥片の先端部に加工がみられる。打面は、自然面である。244は、黒曜石製の小型の剥片である。二次加工は、左側縁部に断続的に観察される。その他の部分には、微細な剥落がみられるところもある。複剥離面である。245は、黒曜石の小型の剥片で、その左側先端部に加工がみられるものである。打面は、自然面である。246は、複剥離面を打面に持つ、黒曜石製の剥片で、その先端部に二次加工、そして左側縁に微細な剥落が観察される。247は、台形を呈する珪岩製剥片で、その左側縁部に、二次加工が観察される。打面は、単剥離面である。248は、複剥離面を打面とする黒曜石

第10表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
234	二次加工ある不定形石器	頁岩	(4.5)	(4.3)	(0.9)	(15.0)	VIII C M 288
235	〃	安山岩	5.45	3.65	1.2	18.45	VIII D M 204
236	〃	珪岩	5.4	3.15	1.05	(12.7)	VIII D M 566
237	〃	珪岩	(3.18)	(3.2)	(1.3)	(11.2)	VIII D M 1126
238	〃	珪岩	(2.95)	1.8	(0.6)	(2.5)	VIII D M 838
239	〃	珪岩	3.43	2.74	1.0	8.75	VIII C M 532
240	〃	黒曜石	1.8	1.38	0.4	0.97	VIII C M 143
241	〃	珪岩	5.6	4.1	1.3	17.6	VIII D M 594
242	〃	珪岩	4.7	5.15	2.15	46.8	VIII C M 1055
243	〃	珪岩	3.68	3.1	1.35	13.7	VIII D M 1098
244	〃	黒曜石	2.6	2.1	0.75	3.55	VIII D M 693
245	〃	黒曜石	2.46	2.4	0.75	3.1	VIII C M 983
246	〃	黒曜石	2.49	2.43	0.6	2.9	VIII D M 716
247	〃	珪岩	2.7	3.35	0.6	3.7	VIII D M 64
248	〃	黒曜石	1.93	(2.18)	0.68	(1.85)	IX C M 201
249	〃	黒曜石	2.84	2.77	0.8	2.6	IX C M 172
250	〃	珪岩	(2.36)	2.67	0.7	(2.9)	VIII C M 523
251	〃	珪岩	(1.98)	2.95	0.9	(4.25)	VIII D M 669
252	〃	珪岩	(2.6)	2.9	1.0	(5.65)	VIII D M 937
253	〃	珪岩	(2.28)	(2.66)	(1.0)	(3.65)	VIII C M 56
254	〃	珪岩	(1.94)	(1.97)	(0.73)	(2.35)	VIII C M 275
255	〃	珪岩	(1.7)	(2.6)	(0.7)	(2.5)	IX D M 857
256	〃	黒曜石	(3.67)	(1.85)	(0.45)	(0.8)	VIII D M 602
257	〃	黒曜石	(1.25)	(1.67)	(0.85)	(1.8)	VIII D M 150
258	〃	珪岩	(2.7)	(1.6)	(0.9)	(3.0)	IX C M 309
259	〃	黒曜石	(1.07)	(1.03)	(0.42)	(0.6)	VIII C M 993

第1節 狸谷 I 石器文化の遺物



第46図 遺物分布図（使用痕ある剣片）

製の剥片で、その右側縁部に加工がみられる。また、先端部には、微細な剥落が認められる。頭部調整が観察される。249は、複剥離面を打面とする黒曜石製の剥片で、その右側縁の先端部側に、二次加工が認められる。250は、珪岩製の剥片で、この左側縁の頭部側に、二次加工がある。打面は、欠損のために不明である。251は、250と同じ部位に加工があるが、その方向は異なり、表面側からの加圧によるものである。石材は、珪岩である。252は、胴部上半を欠損した珪岩製の剥片で、表面からの加圧による二次加工を、先端部に断続的に施したものである。253は、252と同じ部位の欠損品であるが、剥片の胴部に、表面からの二次加工がみられる。石材は、珪岩である。254は、珪岩製剥片の右側縁に加工がみられるものであるが、その全容は、不明である。255は、剥片の頭部を、二次加工によって折り取ったもので、二次加工ある不定形石器の中では、剥片の形状修正の度合がもっとも激しいものである。珪岩製である。256は、黒曜石製の剥片で、その左側縁部に、断続的な二次加工がみられる。257には、剥片の右側縁に、刃潰し加工状のものが観察される。しかし、加工の規模が、石器本体に対して、かなり小さく、ナイフ形石器に分類することは、難しいと判断した。しかも胴部のみの残存であり、全体像は不明である。石材は、珪岩である。258は、255と同じように、珪岩製の剥片の打面部を、二次加工によって、折り取っている。259では、右側縁に比較的小さい二次加工が観察されるが、石器のほとんどの部分が欠損しているために、全体像を知ることはできない。

使用痕ある剥片（第47図260～第54図417）

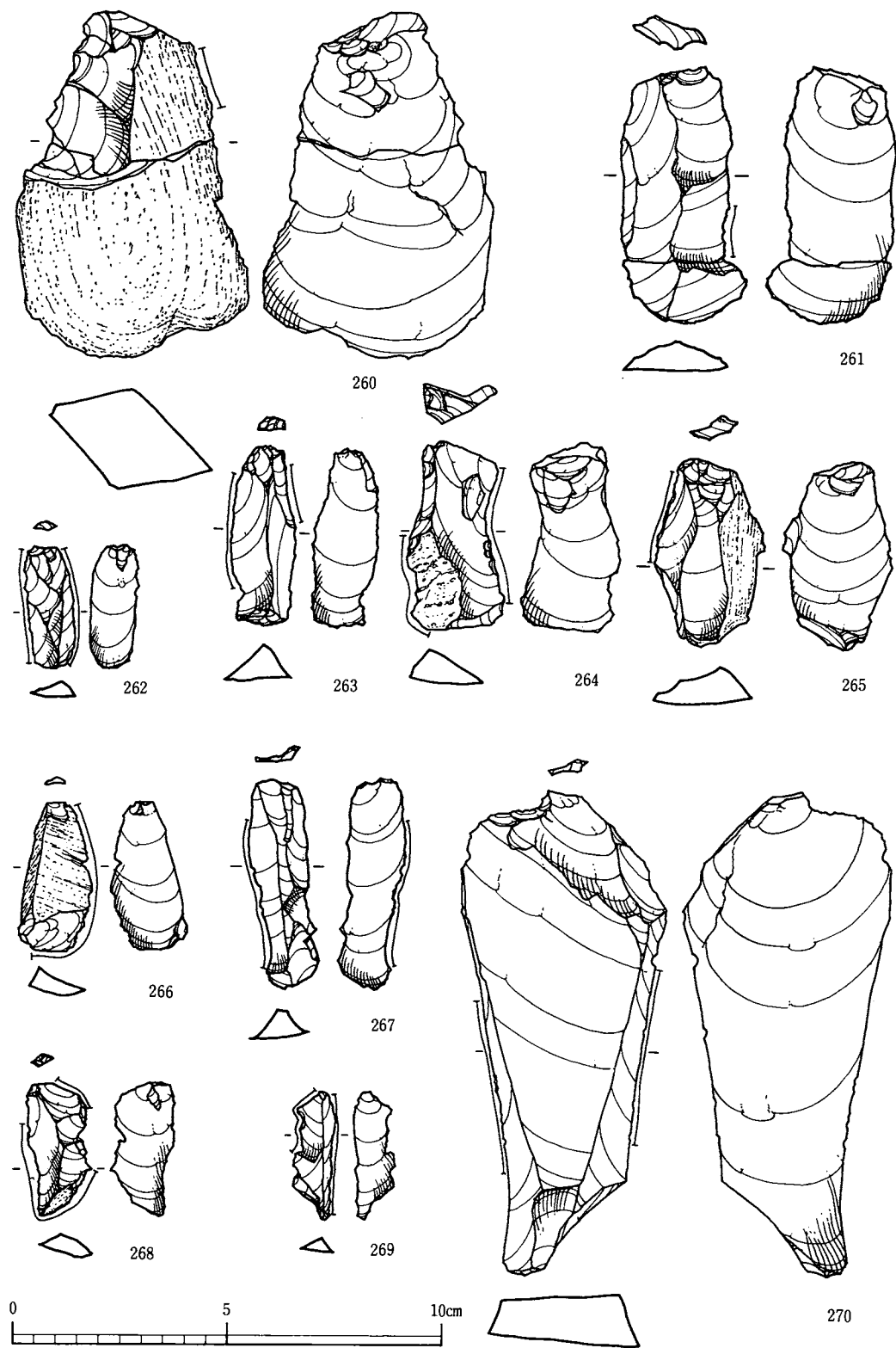
狸谷 I 石器文化に属する剥片の中には、その縁辺に、使用の際についたと考えられる刃こぼれ状の微細な剥落のあるものが、わずかながら存在している。これらを使用痕ある剥片として一括し、提示しよう。

この使用痕ある剥片は、112点（内、接合関係が5例あり、資料実数107点）検出された。石器組成の中で占める割合は29%と、石器の中で最も高い。石材別の内訳は、珪岩77点、黒曜石31点、頁岩3点、安山岩1点である。

石器は、丘陵の尾根上にあたる、調査区の中央部を中心とした、東西24m、南北12mの楕円形を呈する範囲からもっとも多く出土している。分布には、あまり偏在もみられず、それぞれの石器は点状的であるが、強いてその傾向を挙げれば、分布域の中でも東側に多く集まっているという特徴があるようだ（第46図）。

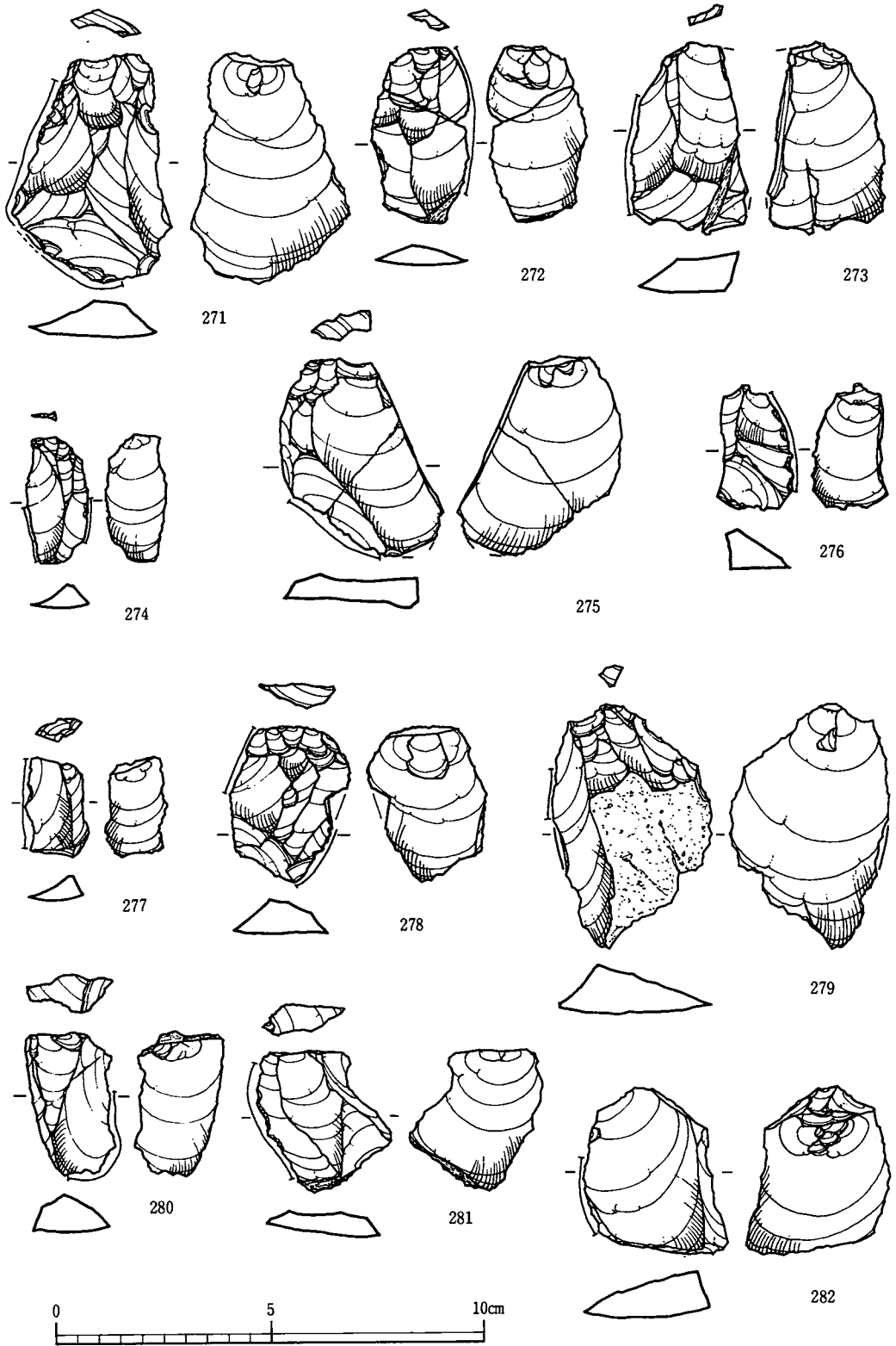
石器として使用されている剥片は、長さが11cmを越える大型のもの（270）から、2cm以下の小型のものまで、様々である。しかし、そのほとんどは長さ2cm前後～5cm以下で、中でも2cm台のものが最も多い。また、幅は、すべて6cm未満のものである。そこで、こうした長さとは幅について、その長幅の関係を示して、その傾向をみることにしたい。

第1節 狸谷I石器文化の遺物



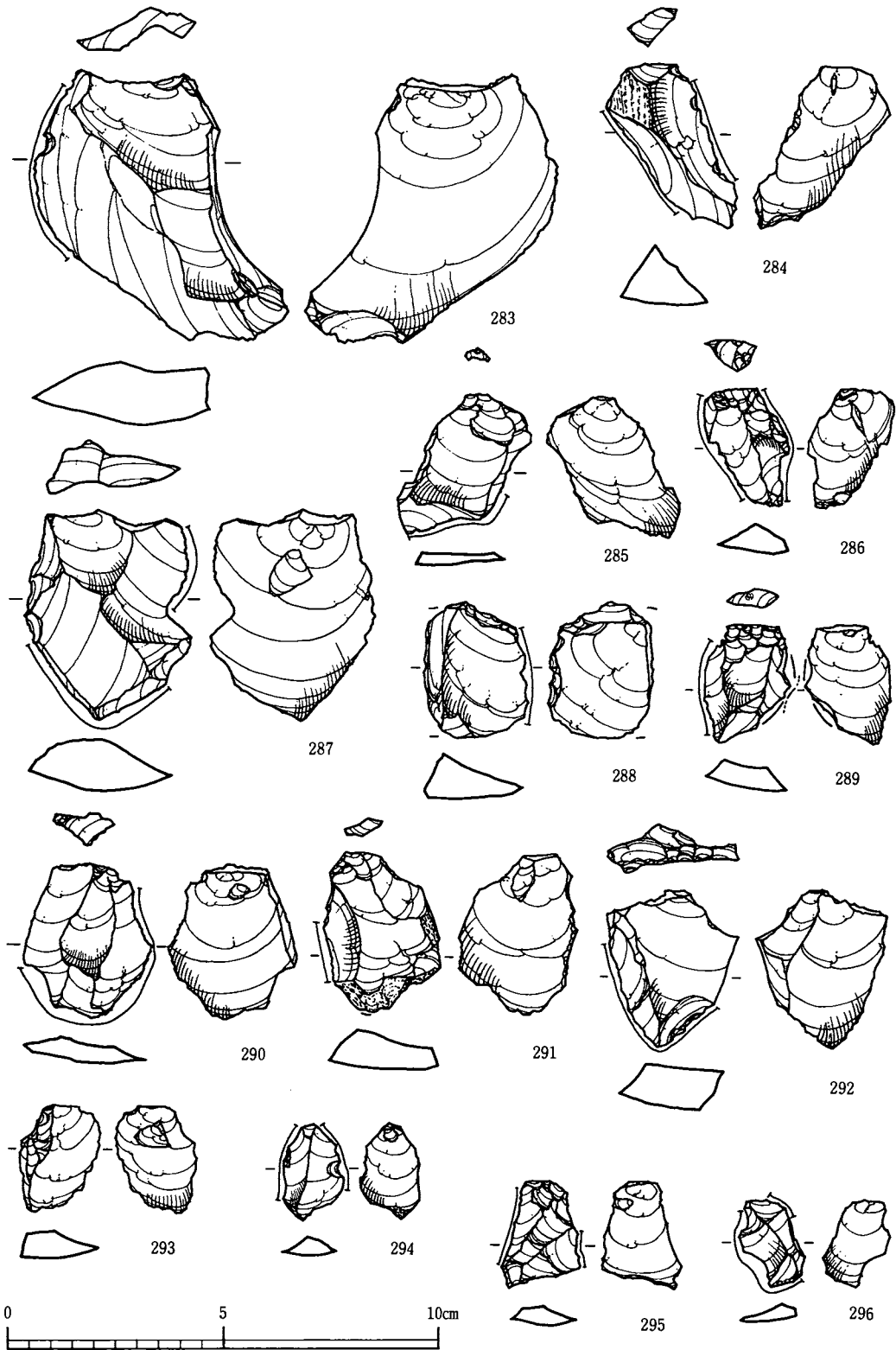
第47図 石器実測図

第三章 調査の成果

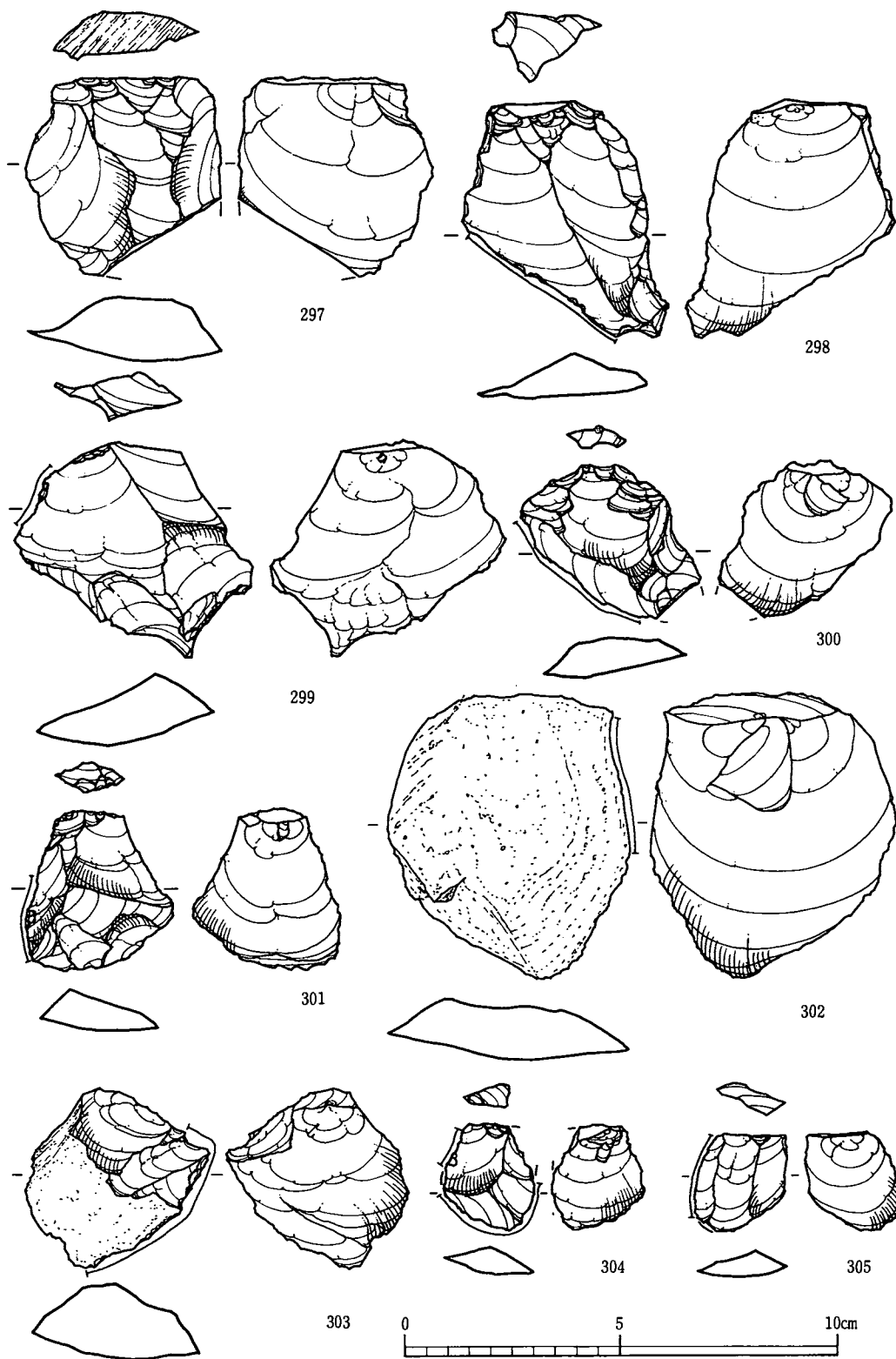


第48図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物

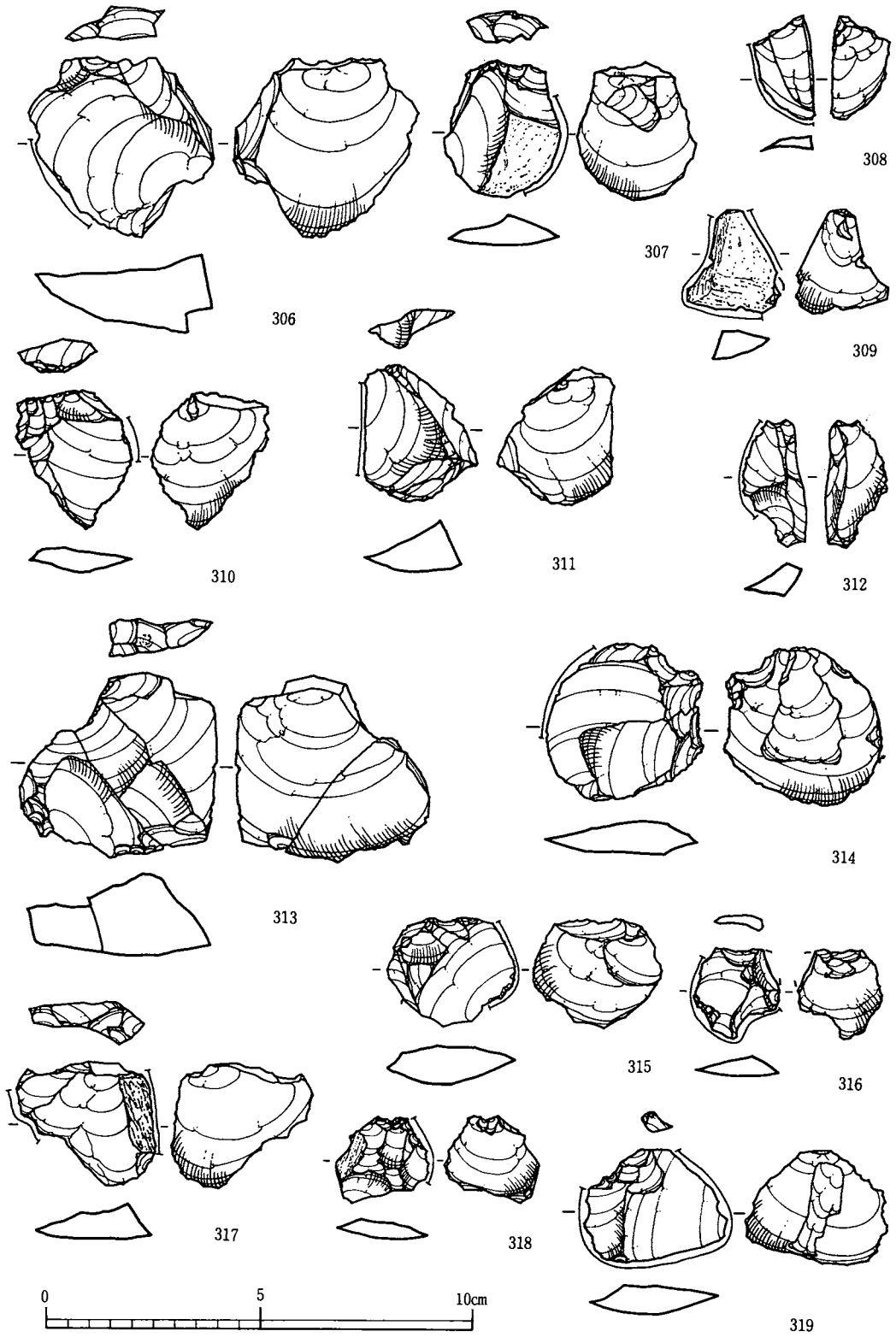


第49図 石器実測図



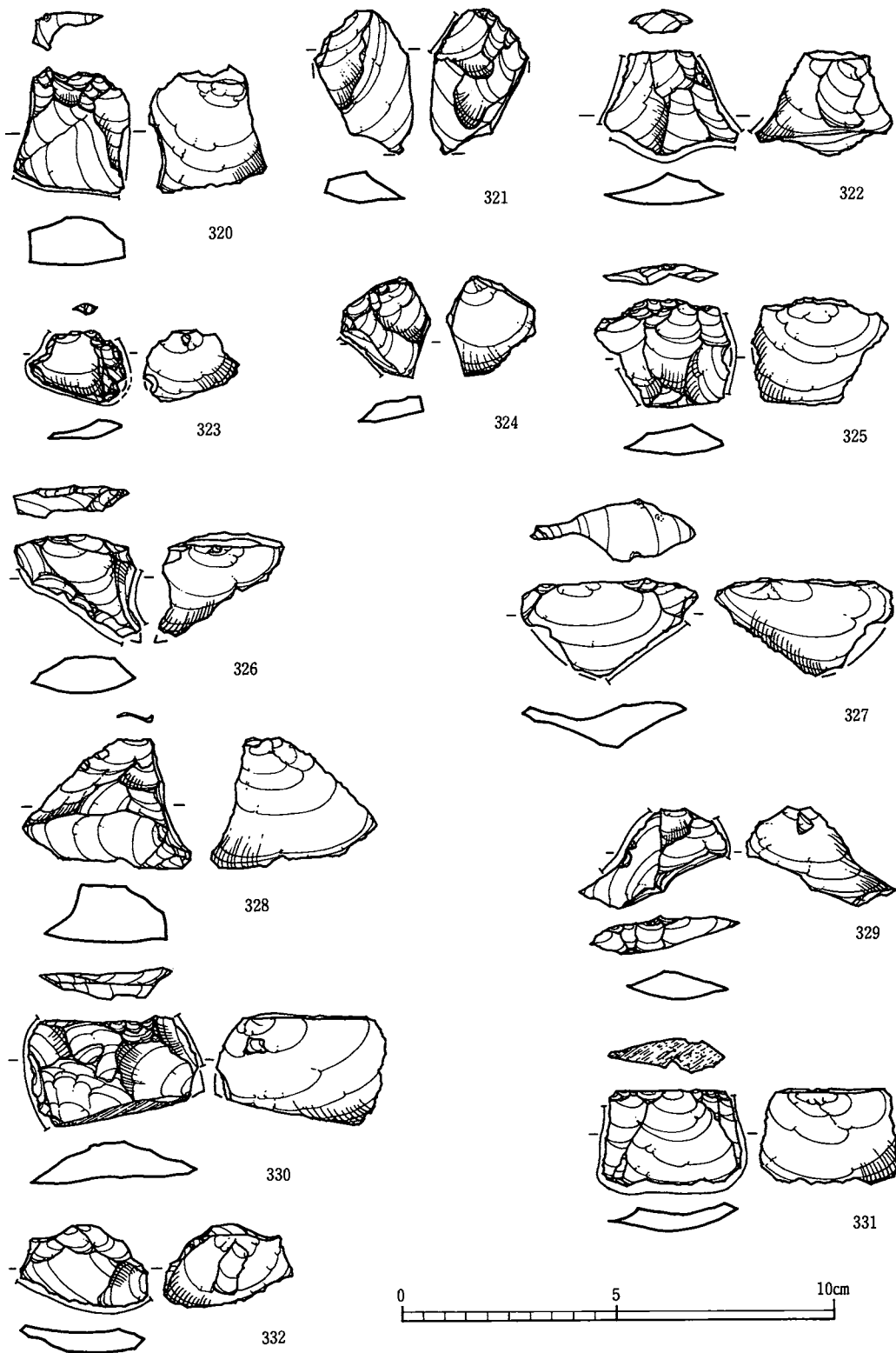
第50図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物



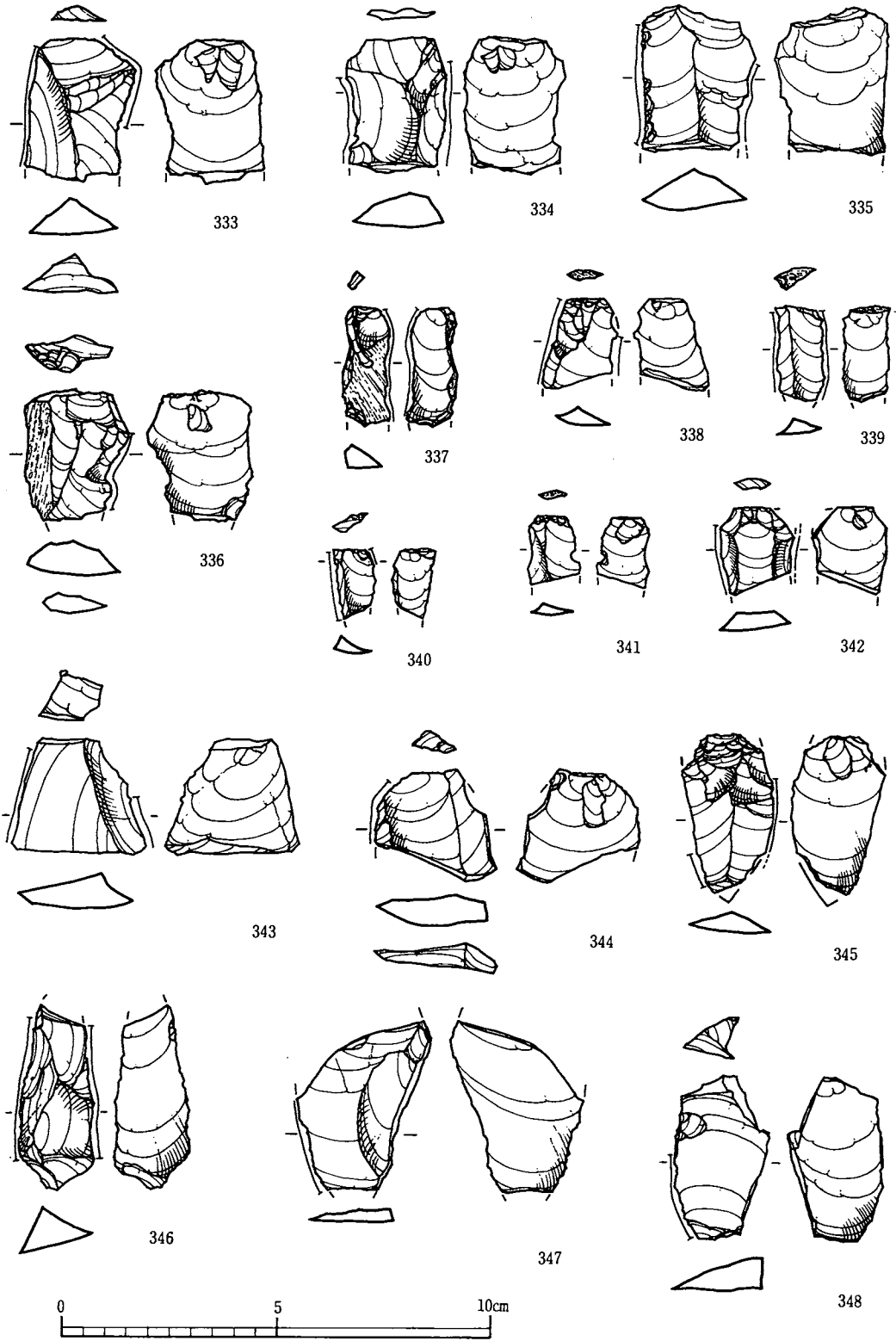
第51図 石器実測図

第三章 調査の成果



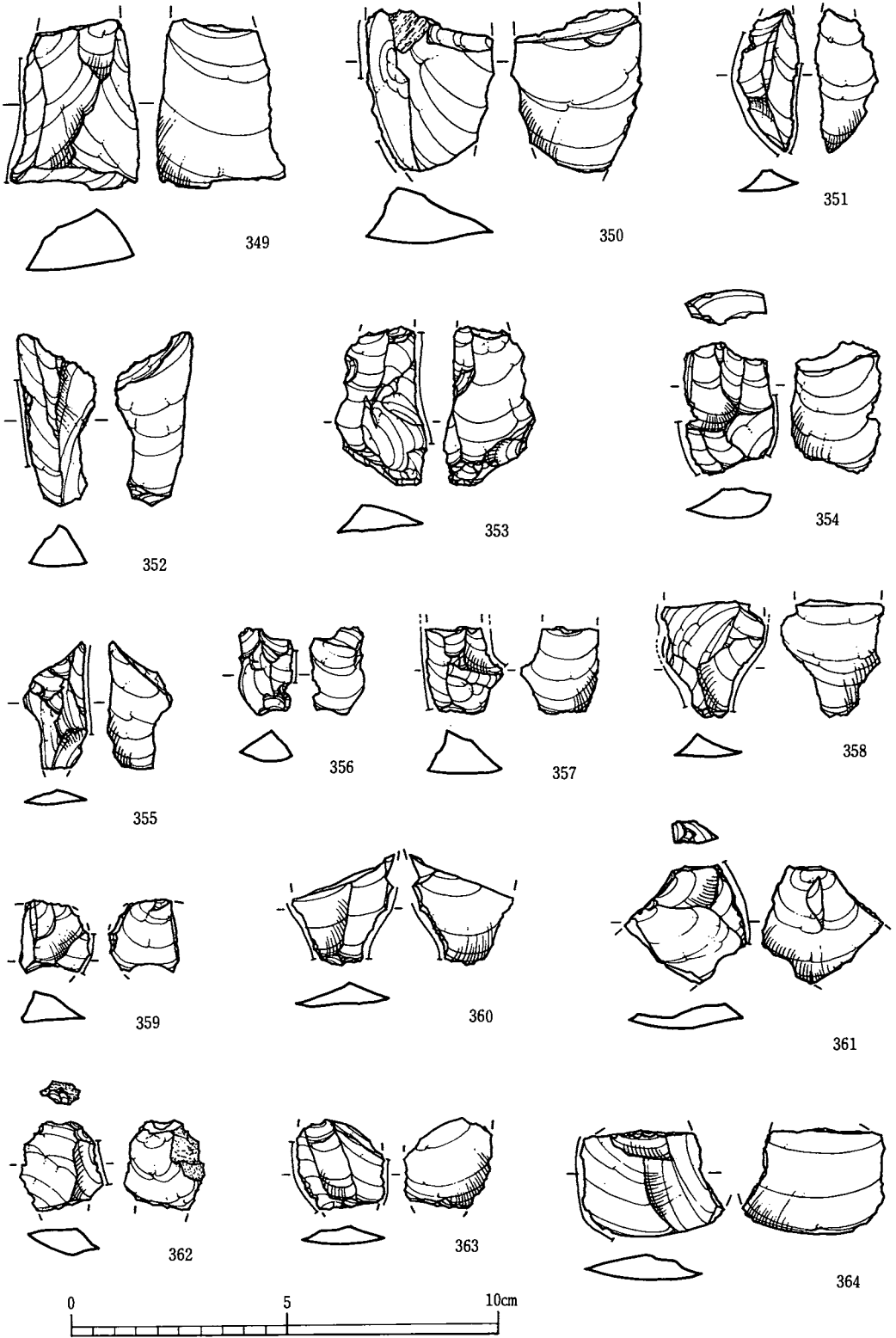
第52図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物



第53図 石器実測図

第三章 調査の成果



第54図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物

第11表 石器計測表

No.	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
260	使用痕ある剥片	珩岩	8.8	5.45	3.0		IXD M 301(上) IXD M 291(下)
261	〃	珩岩	5.98	3.0	0.9	14.1	VIII M 88(上) VIII M 466(下)
262	〃	黒曜石	2.8	1.14	0.5	1.15	VIII M 851
263	〃	珩岩	4.15	1.53	0.8	5.4	VIII M 52
264	〃	黒曜石	4.39	2.3	1.0	6.4	IXD M 432
265	〃	珩岩	4.38	2.55	0.9	9.1	VIII M 345
266	〃	黒曜石	3.43	1.8	0.5	2.6	VIII M 690
267	〃	珩岩	4.87	1.63	0.8	5.1	VIII M 1177
268	〃	黒曜石	3.1	1.5	0.75	1.8	IXD M 43
269	〃	黒曜石	3.0	1.0	0.6	1.0	VIII M 11
270	〃	頁岩	11.22	4.8	2.3	74.55	VIII M 987
271	〃	珩岩	5.3	3.7	1.2	(16.65)	IXC M 344
272	〃	珩岩	4.09	2.36	0.7	4.9	VIII M 1094(上) VIII M 1067(下)
273	〃	珩岩	4.43	2.75	0.9	10.3	IXC M 348
274	〃	珩岩	2.94	1.45	0.6	2.0	IXD M 937
275	〃	珩岩	4.59	3.8	0.9	(13.0)	VIII M 1039(上) VIII M 1016(下)
276	〃	珩岩	2.9	1.77	1.0	3.9	VIII M 675
277	〃	珩岩	2.35	1.44	0.6	1.9	IXD M 233
278	〃	珩岩	3.6	2.9	1.1	(9.2)	VIII M 180
279	〃	珩岩	5.63	3.7	1.3	(27.2)	VIII M 311
280	〃	珩岩	3.39	2.09	1.0	6.3	VIII M 492
281	〃	珩岩	3.3	3.13	0.7	6.2	IXD M 539
282	〃	珩岩	3.9	3.3	1.3	12.6	IXD M 1021
283	〃	頁石	6.22	5.9	1.8	43.53	VIII M 277
284	〃	黒曜石	3.78	3.1	1.35	7.5	VIII M 918
285	〃	珩岩	3.23	3.1	0.7	4.2	VIII M 1022
286	〃	黒曜石	2.73	1.98	0.9	2.8	VIII M 997
287	〃	珩岩	4.8	3.87	1.22	21.8	VIII M 167
288	〃	黒曜石	3.12	(2.43)	(1.1)	(6.8)	VIII M 995
289	〃	黒曜石	2.7	2.0	0.72	(3.1)	VIII M 725
290	〃	珩岩	3.58	3.0	0.9	5.8	VIII M 1078
291	〃	黒曜石	3.69	2.75	1.05	9.55	VIII M 990
292	〃	珩岩	3.6	3.0	1.2	10.8	VIII M 78
293	〃	黒曜石	2.47	1.88	0.7	2.35	VIII M 1000
294	〃	黒曜石	2.22	1.4	0.5	1.0	VIII M 707
295	〃	珩岩	2.49	1.85	0.5	1.9	VIII M 1088
296	〃	黒曜石	2.01	1.54	0.4	0.8	VIII M 706
297	〃	安山岩	(4.57)	4.5	1.5	(30.7)	VIII M 215
298	〃	珩岩	5.4	4.8	1.55	27.0	VIII M 205
299	〃	珩岩	4.95	5.5	1.7	29.8	VIII M 960

第三章 調査の成果

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
300	使用痕ある剥片	珪岩	3.55	4.05	1.1	12.0	VIII M 1042
301	〃	珪岩	3.7	3.4	0.9	10.8	VIII M 439
302	〃	頁岩	6.5	5.63	1.6	55.1	VIII M 1243
303	〃	珪岩	4.2	4.25	1.73	25.1	IXD M 547
304	〃	黒曜石	2.44	2.14	0.7	(3.2)	VIII M 226
305	〃	珪岩	2.25	2.15	0.9	3.0	VIII M 1010
306	〃	珪岩	4.2	4.35	1.9	25.3	VIII M 390
307	〃	珪岩	3.22	2.8	1.0	6.5	VIII M 345
308	〃	珪岩	2.45	1.4	0.55	1.3	IXC M 359
309	〃	黒曜石	2.42	2.15	0.67	2.35	VIII M 713
310	〃	珪岩	3.2	2.76	0.8	5.4	IXC M 223
311	〃	珪岩	3.2	2.74	1.3	9.4	IXC M 90
312	〃	黒曜石	2.93	(1.4)	(0.8)	(2.0)	VIII M 36
313	〃	珪岩	4.3	4.6	1.95	33.4	IXD M 686(右) IXD M 622(左)
314	〃	珪岩	3.69	3.7	0.8	10.8	VIII M 109
315	〃	珪岩	2.52	3.0	0.9	7.0	VIII M 581
316	〃	黒曜石	2.1	(1.97)	0.7	(1.6)	VIII M 614
317	〃	珪岩	2.9	3.3	1.0	6.6	VIII M 1025
318	〃	黒曜石	2.02	2.22	0.6	1.7	VIII M 136
319	〃	珪岩	2.73	3.32	0.7	5.6	VIII M 90
320	〃	珪岩	2.9	2.7	1.25	(9.2)	VIII M 261
321	〃	珪岩	(2.32)	(2.3)	0.8	(6.3)	VIII M 1068
322	〃	珪岩	2.4	3.14	0.7	3.9	VIII M 1018
323	〃	黒曜石	1.6	2.21	0.5	1.25	IXC M 197
324	〃	珪岩	2.28	2.06	0.7	2.6	VIII M 794
325	〃	珪岩	2.45	3.14	0.7	5.5	VIII M 651
326	〃	珪岩	2.35	2.9	0.9	(4.6)	VIII M 670
327	〃	珪岩	2.6	4.08	1.43	(5.7)	IXD M 544
328	〃	珪岩	2.98	3.85	1.3	9.9	IXC M 241
329	〃	黒曜石	2.25	3.42	0.9	2.85	VIII M 942
330	〃	珪岩	2.53	3.93	0.93	(9.5)	VIII M 803
331	〃	珪岩	2.2	3.2	0.9	4.3	VIII M 891
332	〃	珪岩	1.94	2.95	0.7	3.1	VIII M 469
333	〃	珪岩	(3.34)	2.58	0.9	(7.3)	VIII M 234
334	〃	黒曜石	(3.15)	2.38	0.85	(6.3)	IXD M 1017
335	〃	珪岩	(3.4)	2.64	1.0	(9.3)	IXD M 491
336	〃	珪岩	(3.04)	2.45	0.9	(6.6)	VIII M 950
337	〃	黒曜石	(2.77)	1.2	0.55	(1.5)	VIII M 935
338	〃	黒曜石	(2.1)	1.75	0.5	(1.2)	VIII M 1151
339	〃	黒曜石	(2.22)	1.1	0.5	(0.9)	VIII M 340
340	〃	黒曜石	(1.63)	1.02	0.5	(0.6)	VIII M 616
341	〃	黒曜石	(1.63)	1.2	0.7	(0.55)	VIII M 830
342	〃	黒曜石	(2.03)	1.73	0.5	(1.7)	VIII M 1086
343	〃	珪岩	(2.7)	(3.13)	1.05	(8.0)	VIII M 1069
344	〃	珪岩	(2.6)	(2.9)	(0.7)	(5.0)	IXC M 214

第1節 狸谷I石器文化の遺物

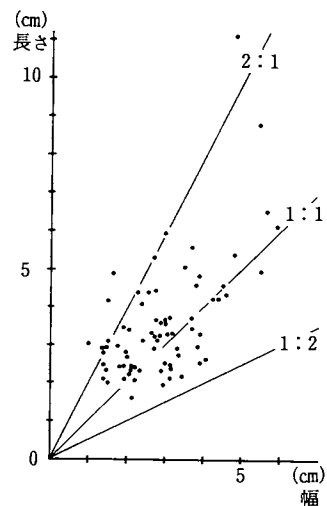
No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
345	使用痕ある剥片	珪岩	(3.65)	2.2	0.65	(3.9)	IX D M 746
346	〃	珪岩	(4.27)	1.75	1.2	(7.3)	IX D M 366
347	〃	珪岩	(4.0)	(3.17)	(0.6)	(4.6)	IX C M 290(右) IX C M 297(左)
348	〃	珪岩	(3.8)	2.2	1.5	(8.7)	VIII C M 1050
349	〃	珪岩	(3.9)	3.0	1.5	(17.8)	VIII D M 1192
350	〃	珪岩	(3.8)	(3.07)	1.3	(12.4)	VIII C M 921
351	〃	珪岩	(3.3)	1.46	0.7	(2.0)	IX D M 389
352	〃	珪岩	(4.0)	1.85	(1.1)	(5.4)	IX C M 257
353	〃	黒曜石	(3.68)	2.14	1.0	(5.45)	IX D M 610
354	〃	珪岩	(3.05)	2.1	0.8	(4.8)	IX D M 1025
355	〃	珪岩	(2.95)	1.55	0.4	(1.5)	IX D M 842
356	〃	珪岩	(2.03)	1.3	0.7	(1.7)	VIII C M 569
357	〃	珪岩	2.0	1.84	1.0	3.0	VIII D M 1045
358	〃	黒曜石	(2.68)	(2.4)	(0.7)	(2.45)	IX D M 981
359	〃	黒曜石	(1.7)	(1.6)	(0.78)	(1.5)	VIII C M 125
360	〃	珪岩	(2.53)	(2.4)	(0.7)	(2.0)	VIII D M 483
361	〃	珪岩	(2.78)	(2.8)	(0.7)	(3.5)	VIII D M 781
362	〃	黒曜石	(2.1)	1.9	0.7	(2.55)	VIII C M 747
363	〃	珪岩	(2.1)	2.1	0.5	(2.1)	IX D M 281
364	〃	珪岩	(2.5)	3.3	0.6	(5.9)	VIII D M 1068

第55図に示しているものが、その長さと幅の関係を、グラフ化したものである。これによると、1:1を中心値として、長幅比2:1~1:1.6の範囲に石器の分布があり、しかも、その範囲の中で、長さや幅が4cmを越えないものが、圧倒的に多いということがわかる。このことは、使用される剥片が、近似した規格を持ちながらも、形状的には、縦長剥片から、比較的幅広な寸詰りの縦長剥片、そして、横広の剥片まで、比較的多様であることをよく示している。

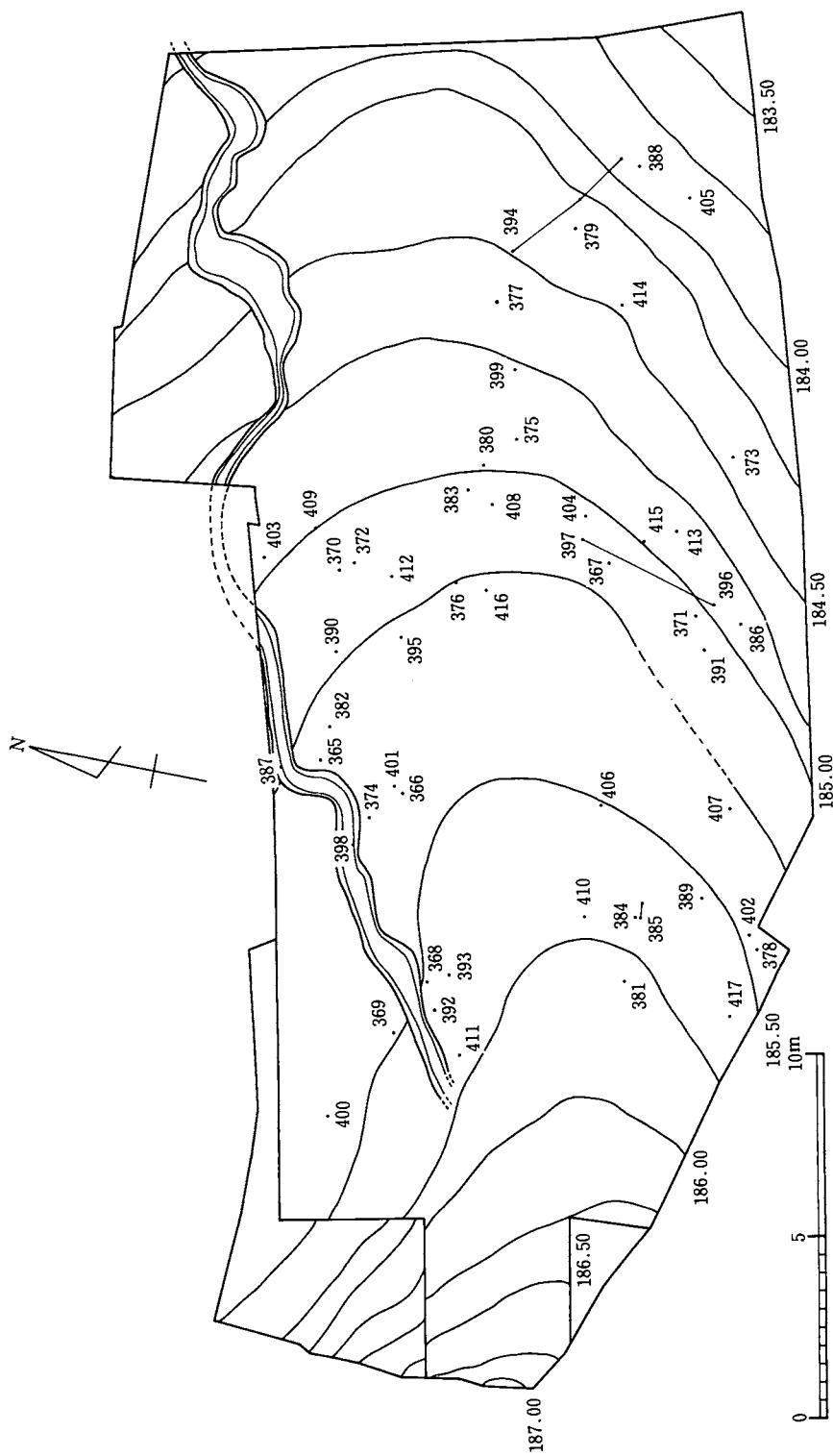
剥片の打面では、自然面、単剝離面、複剝離面と、様々な面の状況が、観察される。そして、そのほとんどは非調整打面で、打面調整が観察されるものは、292、310、336の3点と例外的にみられる。この他、329は、打面再生の剥片と考えられるものである。また、350の資料には、ポジ面が観察される。

石核 (第57図365~第61図417)

56点(内、接合関係として、2点接合1例と3点接合1例があり、資料実数53点)が出土したが、その出土資料総数3783点に占める割合は、1%と少ない。その石質ごとの内訳は、珪岩37点、黒曜石14点、安山岩3点、頁岩2点である。



第55図 使用痕ある剥片の長幅比



第56図 遺物分布図 (石核)

第1節 狸谷 I 石器文化の遺物

石核は、調査区のほぼ中央部を中心とした部分で検出されているが、その広がりには、特徴的な傾向が指摘できる。その傾向とは、環状を呈する分布であるが、調査区においては、東西に隣接した大小二つのものが確認された（第56図）。

調査区のほぼ中央部にみられる大型の環状分布は、さらに細かい群に分離できそうである。ただ、全体としては、外周で直径が15m、内周で8mを測る規模を持っている。また、小型のものは、その大型の分布の東隣にあり、直径8mの規模である。こうした分布で注意されることは、環状に広がる石器の分布と同時に、石核の分布域の中に、空白部がみられることである。調査区では、この空白部が、おたがいに隣接しあって、3ヶ所に認められた。剥片剥離作業など、場の機能に関して、興味ある事実である。

出土した53点の石核では、剥離面の観察から判断する限り、明らかに縦長剥片を剥出したという石核は少なく、わずかに377・378・381の3点のみで、そのほとんどは、幅広の縦長剥片や横広の剥片を剥出したと考えられる石核である。そこで、剥出された剥片の形状とその石核の形状、剥片剥離の状況とを観点にして、石核の分類を試みたいと思う。

第1類 (377・378・381)

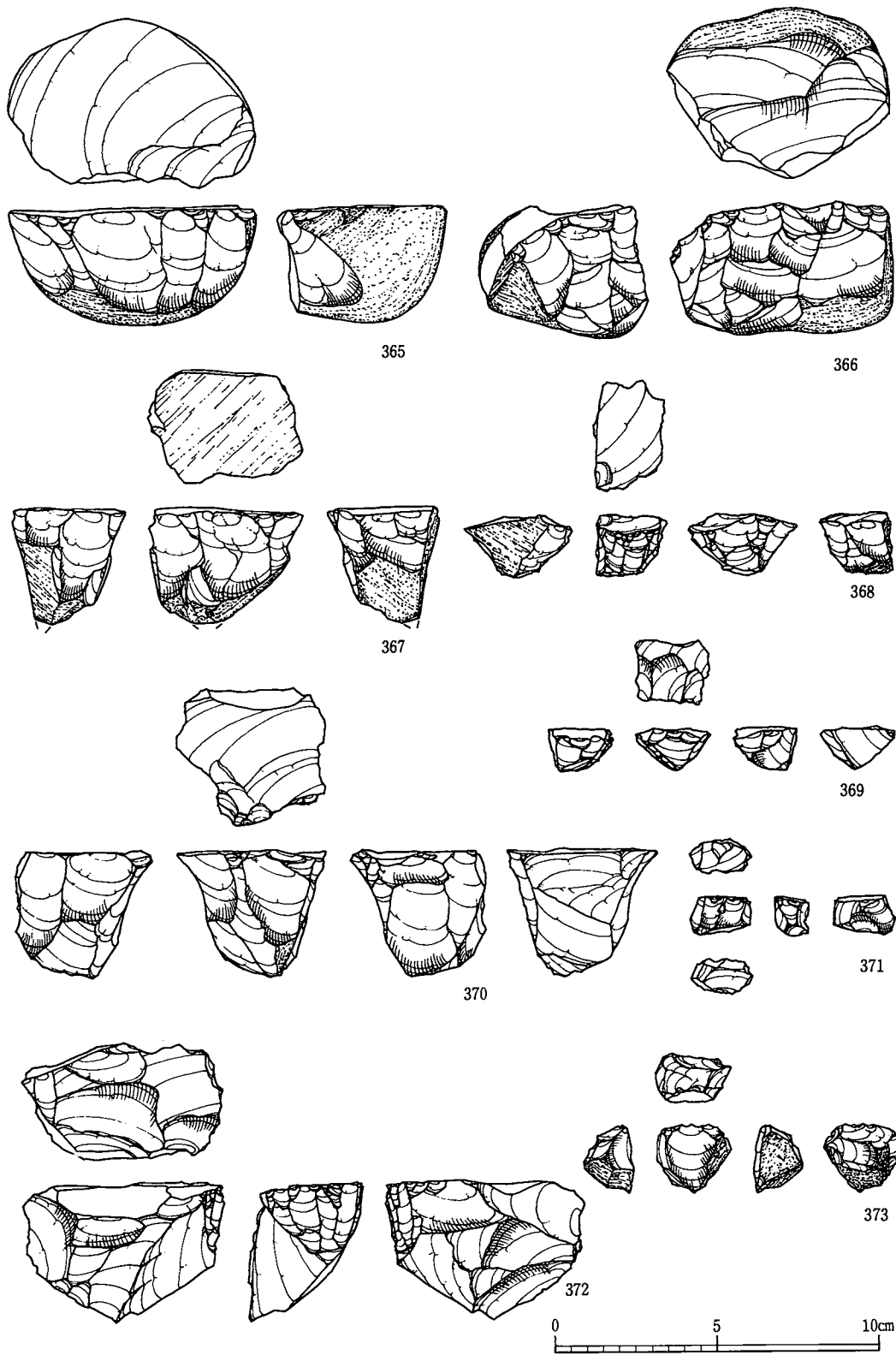
第1類は、縦長剥片を剥出した石核にあたり、すべて小型のものである。打面は、上下両設のもの(377)と単設のもの(378・381)とがある。打面の状況は、377が、調整打面(上位打面)と礫面(下位打面)という、2種類の打面を持ち、378が礫面、381が複剥離面である。石核の素材は、礫ないし分割礫と考えられる。出土例は3点のみであり、狸谷 I 石器文化での石核の中では、あまり一般的なものではなさそうである。

第2類

第2類として分類されるものは、幅広の縦長剥片から横広の剥片までを剥出していると考えられる石核であり、狸谷 I 石器文化に所属するものの中で、最も一般的なものに当たっている。この類の石核は、その石核の形状や剥片剥離の特徴によって、さらにa～eの5種類に細分される。

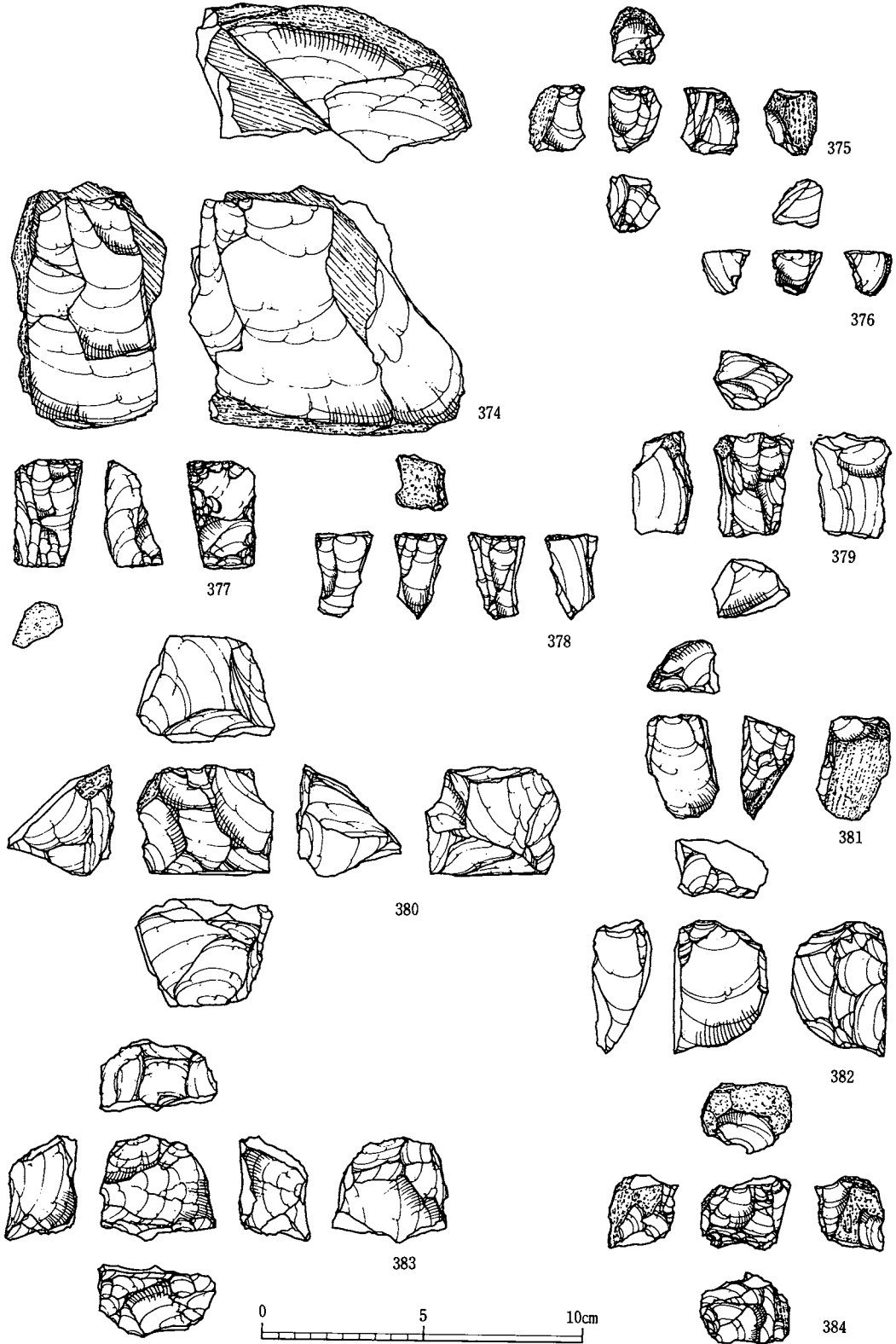
2 a類 (365～371・373・374・376)

2 a類の石核は、単設の打面のものにあたり、その規模から、大型のものと小型のものがある。前者は、珪岩や安山岩が石材となっているもので、後者は、黒曜石と珪岩である。剥片の剥出は、打面の長軸と平行するものも直行するものも、その一端のみでおこなわれ、その結果、石核の裏面には、素材の礫面や節理面が残ることになる。打面は、単剥離面(376・368・370・371・375)、複剥離面(365・366・369・373)、そして節理面(367・374)の3種があり、打面調整は、370においてのみ認められる。石核の素材は、礫ないし分割礫と考えられる。

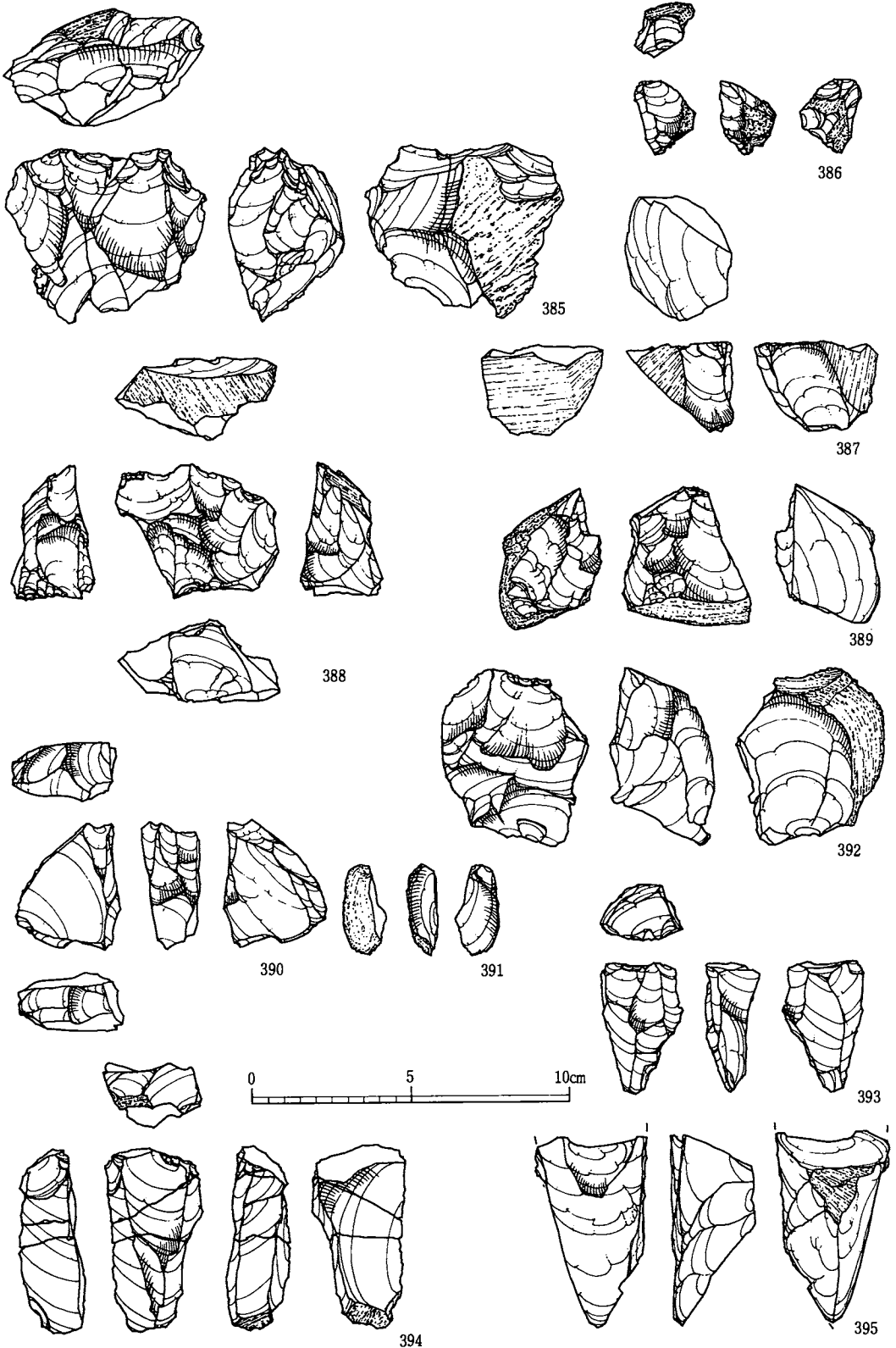


第57図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物

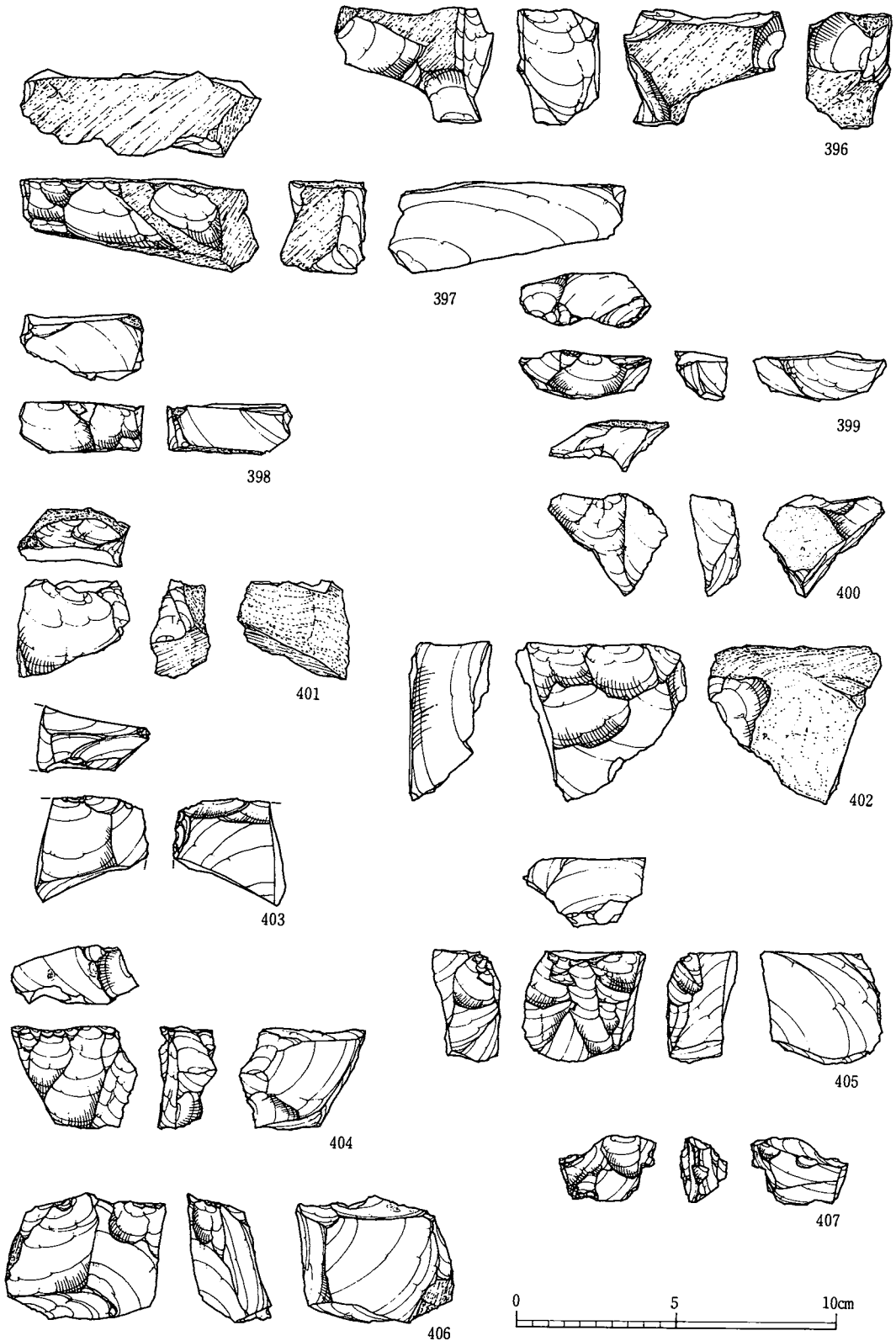


第58図 石器実測図



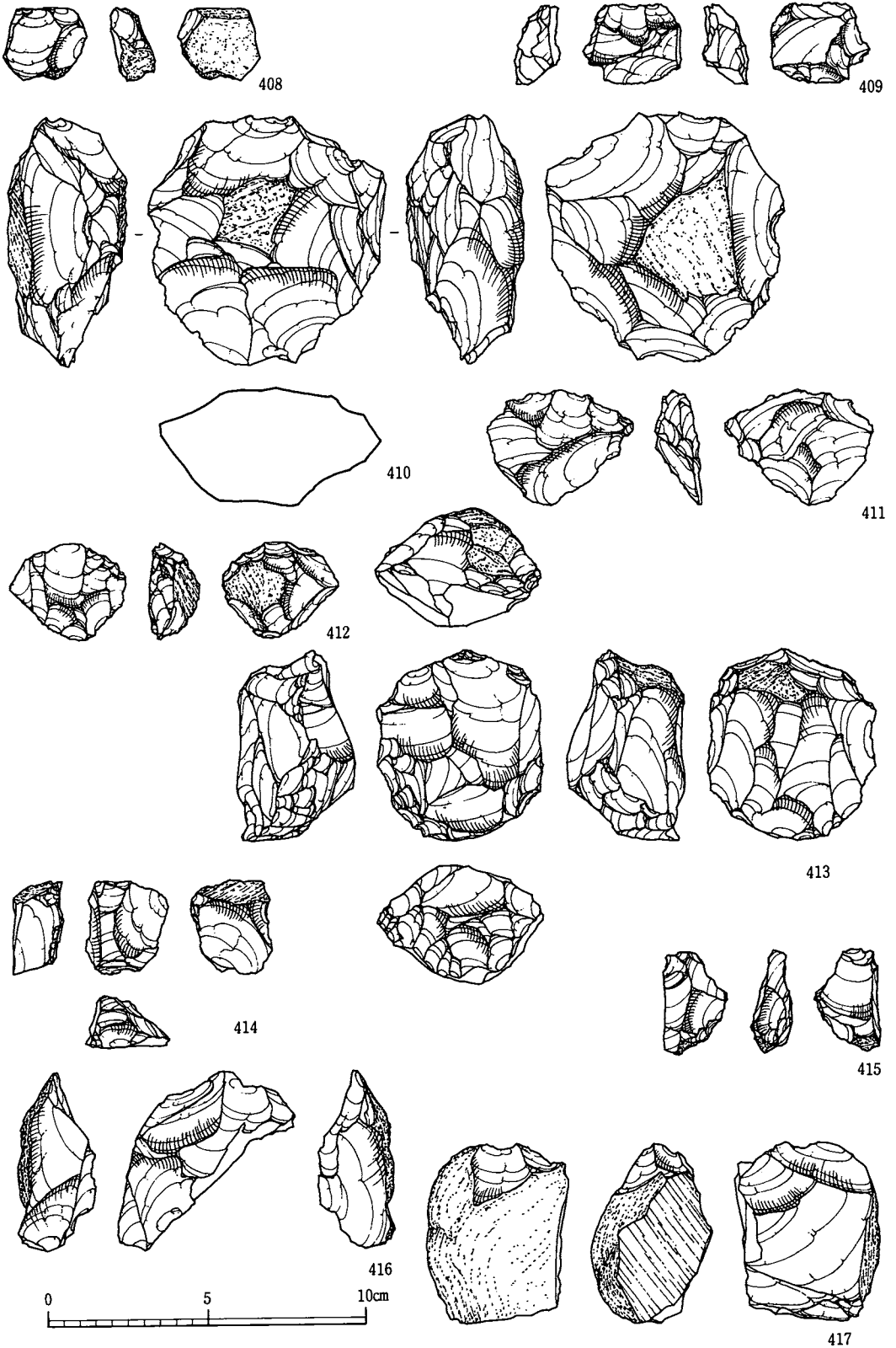
第59図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物



第60図 石器実測図

第三章 調査の成果



第61図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物

第12表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
365	石	核 安山岩	3.6	7.6	5.25	171.65	VIII C M 271
366	〃	安山岩	3.95	6.8	5.2	160.24	IX C M 165
367	〃	珪岩	3.6	4.75	3.5	58.29	VIII D M 265
368	〃	珪岩	1.9	3.35	2.2	14.8	IX D M 207
369	〃	黒曜石	1.3	2.3	2.0	5.82	IX C M 185
370	〃	頁岩	3.9	4.65	4.2	70.9	VIII C M 97
371	〃	黒曜石	1.2	1.9	1.05	2.59	VIII D M 227
372	〃	珪岩	4.3	6.2	3.6	84.75	VIII C M 545
373	〃	黒曜石	2.1	2.3	1.4	6.24	VIII D M 878
374	〃	珪岩	7.6	8.65	4.8		IX C M 70
375	〃	黒曜石	2.05	1.65	1.75	5.52	VIII D M 992
376	〃	黒曜石	1.35	1.55	1.45	2.04	VIII D M 19
377	〃	珪岩	3.3	2.15	1.8	12.84	VIII D M 1083
378	〃	黒曜石	2.65	1.65	1.8	6.82	IX D M 889
379	〃	黒曜石	3.2	2.4	1.85	13.25	VIII D M 597
380	〃	珪岩	3.4	4.2	3.3	46.48	VIII D M 414
381	〃	黒曜石	3.15	2.25	1.6	9.42	IX D M 582
382	〃	珪岩	4.1	2.9	1.9		VIII C M 242
383	〃	珪岩	3.3	3.6	2.2	30.85	VIII D M 411
384	〃	黒曜石	2.3	2.65	2.15	12.99	IX D M 440
385	〃	珪岩	5.35	6.25	3.6	57.71	IX D M 527
							IX D M 525
386	〃	黒曜石	2.3	1.8	1.85	4.8	VIII D M 342
387	〃	珪岩	3.3	3.85	3.3		VIII C M 173
388	〃	珪岩	4.15	5.05	2.6	38.57	VIII D M 576
389	〃	珪岩	4.3	4.0	3.2	60	IX D M 1047
390	〃	珪岩	3.9	3.25	1.8	23.77	VIII C M 430
391	〃	黒曜石	2.8	1.4	0.95		VIII D M 283
392	〃	珪岩	5.5	4.6	3.2	75.9	IX D M 309
393	〃	黒曜石	4.05	1.7	2.6	14.39	IX D M 155
394	〃	珪岩	5.75	3.0	1.95	32.21	VIII D M 564(上)
							VIII D M 1077(中)
							VIII D M 623(下)
395	〃	珪岩	(6.0)	3.5	2.6	41.85	VIII C M 280
396	〃	珪岩	3.6	5.0	2.65		VIII D M 350
397	〃	珪岩	2.9	7.5	2.65		VIII D M 263
398	〃	珪岩	1.6	3.9	2.1	18.0	IX C M 76
399	〃	珪岩	1.5	4.2	1.65	11.42	VIII D M 1233
400	〃	珪岩	3.2	3.8	1.6	11.87	IX C M 343
401	〃	珪岩	3.1	3.5	1.85		IX C M 104
402	〃	珪岩	4.95	5.4	2.6	67.49	IX D M 912
403	〃	安山岩	(3.35)	(3.55)	2.05	(18.94)	VIII C 374
404	〃	珪岩	3.2	3.95	1.8	20.9	VIII D M 228
405	〃	珪岩	3.5	3.85	2.2	33.35	VIII D M 673

第三章 調査の成果

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
406	石	核珪岩	4.0	5.0	2.65	48.22	IXD M 555
407	〃	黒曜石	2.1	1.45	3.05	6.19	IXD M 919
408	〃	黒曜石	2.3	1.4	2.65	7.23	VIII D M 441
409	〃	珪岩	2.5	3.1	1.4	10.8	VIII C M 549
410	〃	頁岩	7.75	7.45	3.7	199.25	IXD M 558
411	〃	珪岩	3.6	4.6	1.45	17.39	IXD M 229
412	〃	珪岩	3.0	3.65	1.6	14.2	VIII C M 577
413	〃	珪岩	5.95	5.25	3.7	115.7	VIII D M 268
414	〃	珪岩	2.9	2.6	1.55		VIII D M 635
415	〃	黒曜石	3.2	1.3	2.05	5.5	VIII D M 940
416	〃	珪岩	5.6	5.65	2.4	44.5	VIII D M 1172
417	〃	珪岩	5.6	4.55	3.8		IXD M 907

2 b類 (372・379・380・382~384・386~389・390・392・396・414)

2 b類に分類される石核は、打面を転移させながら、剥片剥離作業が進行していくものにあたり、この打面の転移には、その仕方によって、上下180°に転移するもの(379・387~389・392)、90°転移のもの(382)、そして、それ以上に転移がおこなわれるもの(372・380・383・384・386・390・396・414)がある。打面には、自然面のもの、単剥離面のもの、複剥離面のものがあり、382には、打面調整が観察される。素材は、分割礫が中心であろう。

2 c類 (393~395)

打面を転移させないものであるが、石核の長さが、幅に対してかなり長いものである。石核の形状は、縦に長い三角錐、または四角柱をとる。打面は、単剥離面と複剥離面とがある。

2 d類 (397~407)

分割礫や剥片による扁平な素材の主軸に平行して、剥片剥離がおこなわれるもので、幅広の剥片が剥出される。打面は、単設のものとして上下両設のもの(407)があり、その面の種類には、礫面(397・402)、単剥離面(398・407)、複剥離面(399~401・403~406)の3種がある。

2 e類 (408~413・415・416)

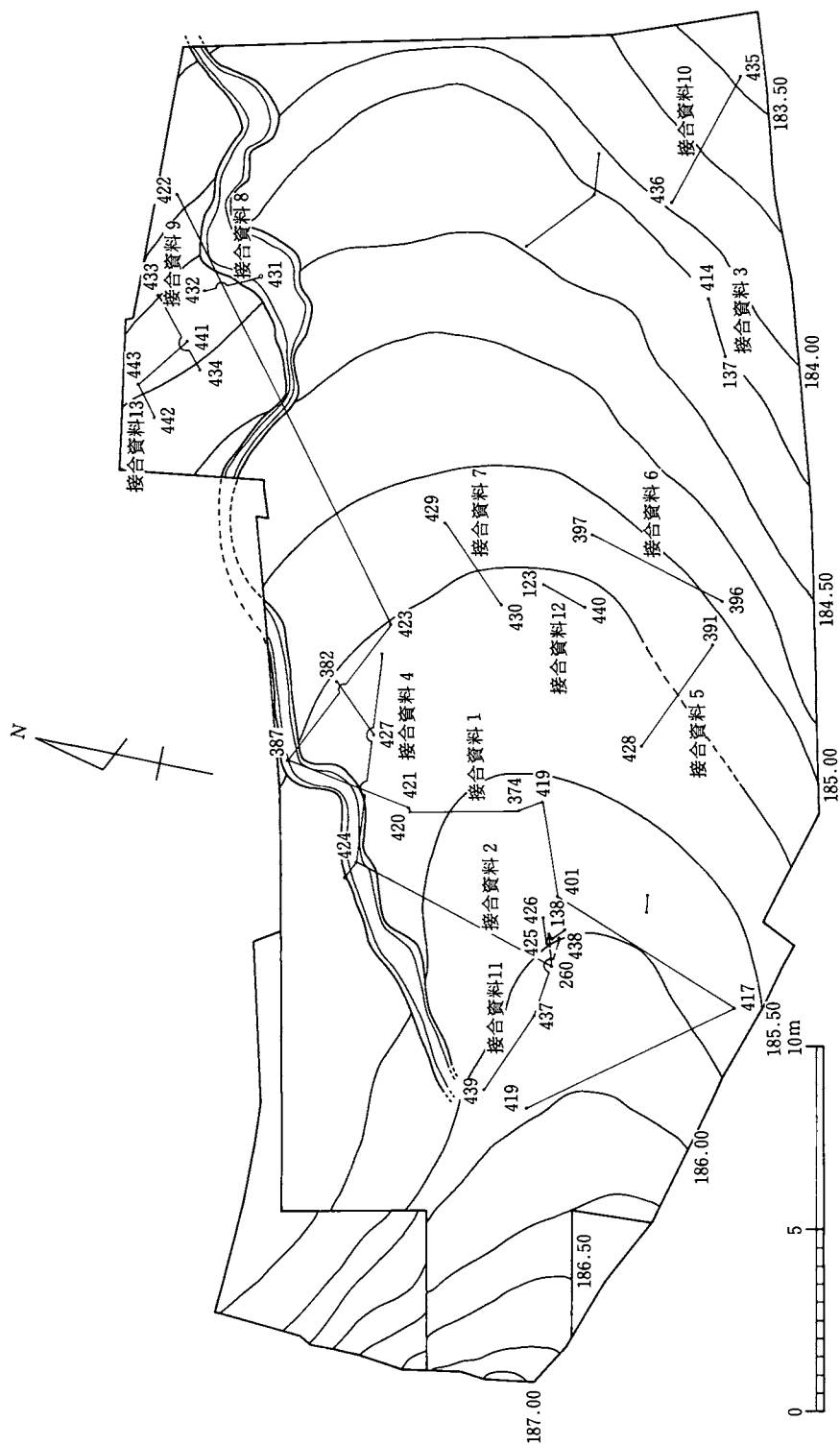
2 e類は、打面が、石核の縁辺に沿って、回りながら移動していくものである。その結果、残核の形状は、求心的な剥片剥離作業によって、円板状をとるか、不整形(415・416)をとっている。石核の素材は、礫と剥片の2種がある。

以上の石核のほか、両刃礫器状に交互剥離をおこなうもの(417)や、391のように、小型の素材のために組織的な剥片剥離がおこなわれず、所属が不明なものもある。なお、372は、石核を搔器に転用した可能性が高い資料である。

接合資料 (第63図~第67図)

接合資料は、13例(資料点数45点)を確認した。したがって、この13例と、これまで示して

第1節 狸谷I石器文化の遺物



第62図 遺物分布図 (接合資料)

きた石器どうしの接合関係の19例（資料点数43点）を合せると、32例（88点）が認められるわけで、全資料に対する接合率は、2%である。この13例の石質は、黒曜石1例で、あとはすべて、珪岩である。

接合資料の分布は、調査区のはほぼ全域でみられるが、その傾向は、先に示した石核に近似した状況を呈している。すなわち、石核の分布における空白部では、接合関係が認められず、それぞれの資料は、その空白部（185.25～185.50mの等高線部分の尾根頂部）を取り巻くように分布するという傾向である（第62図）。石核との関係でも、興味ある事実といえよう。

接合資料1（第63・64図）

資料数が10点を数えるもので、その接合関係は、調査区北東隅から、その調査区を斜めに横切るように広がっている。器種ごとの内訳は、石核4点（2a類・2b類・2e類他）、剝片・碎片6点である。

長軸17cm強の珪岩の円礫を節理に沿って分割し、石核原形のための分割礫を5点以上作出する。そして、その石核原形ごとに、剝片剝離作業を開始している。その際、それぞれの石核は、分割礫の形状がそのまま反映されているためか、個体に共通する技術を持っていないように思われる。なお、421は、分割面を表面に残していることから、失われた石核から、剝ぎ取られた剝片と考えられる。

接合資料2（第65図）

石核片1点、打面作出剝片3点（資料実数1点）、剝片3点（資料実数2点）、削器1点の計8点の資料によるもので、調査区の中央部に広がっている。

長軸が10cmを越えない程、握り拳大の珪岩の円礫が石核原形となっている。まず、打面を作出して、石核の側面に6回程度、石核整形のための加撃をおこなう。そして、その後、打面からの剝片剝離作業を開始している。しかし、この作業は、石核の破碎によって、1枚の剝片（260）の剝出で終了しているようである（425）。ただ、石核片の下部がみられず、その部分がその後、新たな石核原形として利用された可能性も高い。

接合資料3～6（第66図）

接合資料3は、調査区南東隅にある石核1点、削器1点の接合資料である。石質は、珪岩である。

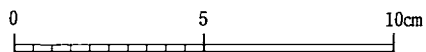
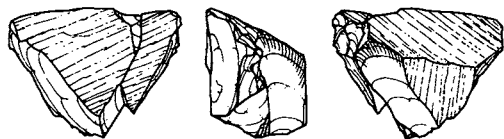
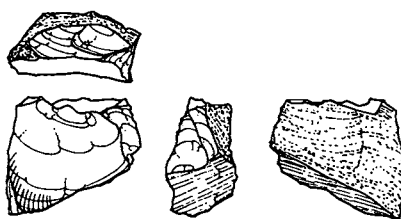
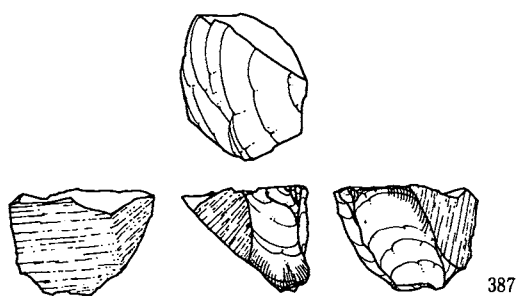
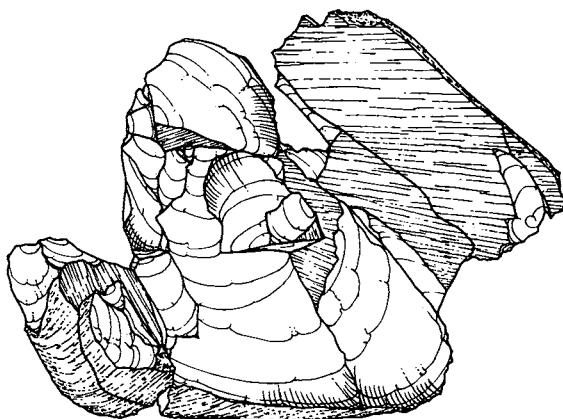
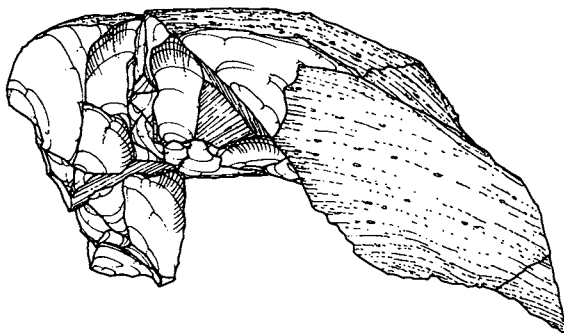
接合資料4は、調査区の北隅にある、石核1点（2b類）、剝片1点の接合例である。石材は、珪岩が使用されている。

接合資料5は、石核1点と剝片1点の接合資料で、唯一の黒曜石である。出土地点は、調査区の南隅にあたっている。

接合資料6は、石核どうし2点（2b類・2d類）の接合例である。出土地点は、接合資料5の近くにあたっている。石質は、珪岩である。

第1節 狸谷I石器文化の遺物

接合資料1

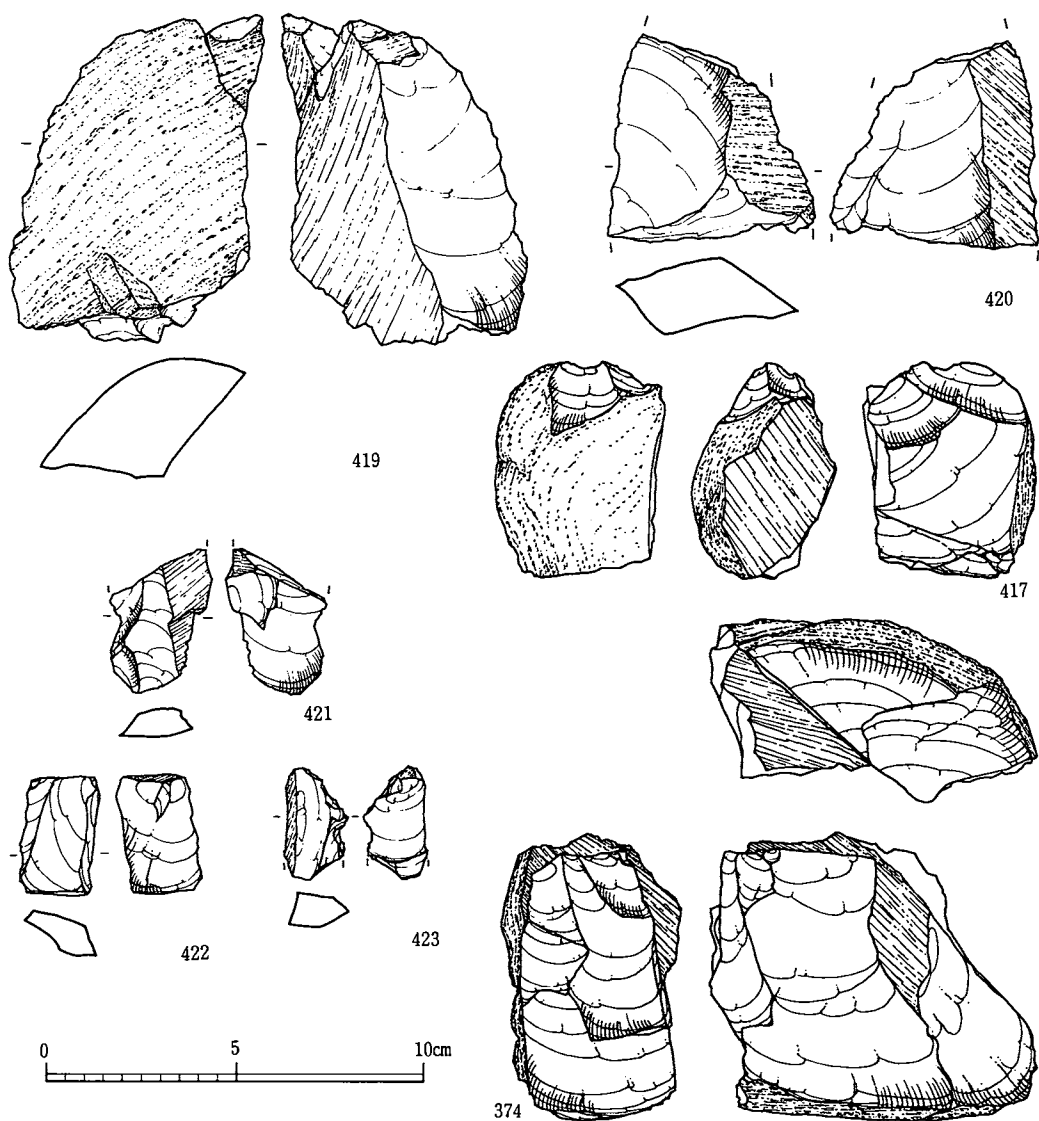


第63図 石器実測図

接合資料7～13 (第67図)

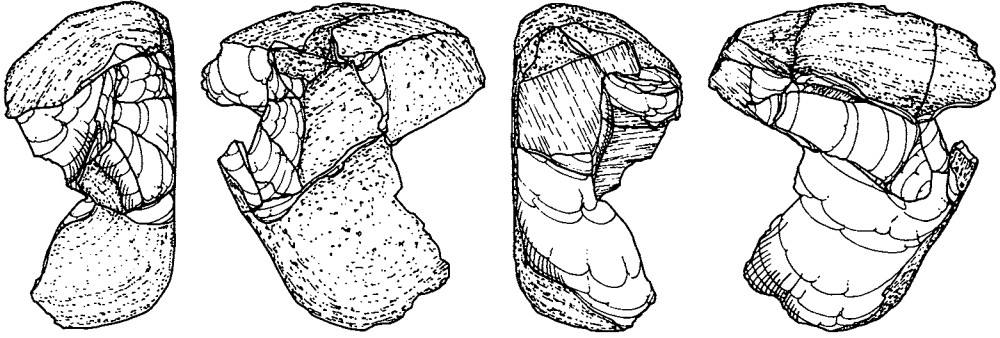
剥片どうしの、接合例をまとめている。7を除けば、その接合の状態からみて、接合例の中でも、最も確に、剥片剥離技術の一端を示している資料といえる。

剥片剥離のあり方からみて、8～13の接合資料は、大きく二つの種類にまとめられる。一つは、打点位置をあまり移動させずに後退させるもの(8～11)であり、他の一つは、打撃方向を求心的にするために、打点位置を頻繁にかえていくもの(12・13)である。さらに、前者は、打点の位置の変え方によって、左右に変えていくもの(8～10)と、ほとんど変えずに後退させていくもの(11)がある。しかしながら、こうした剥片剥離技術によって生産される、剥片

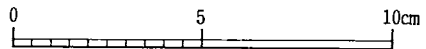
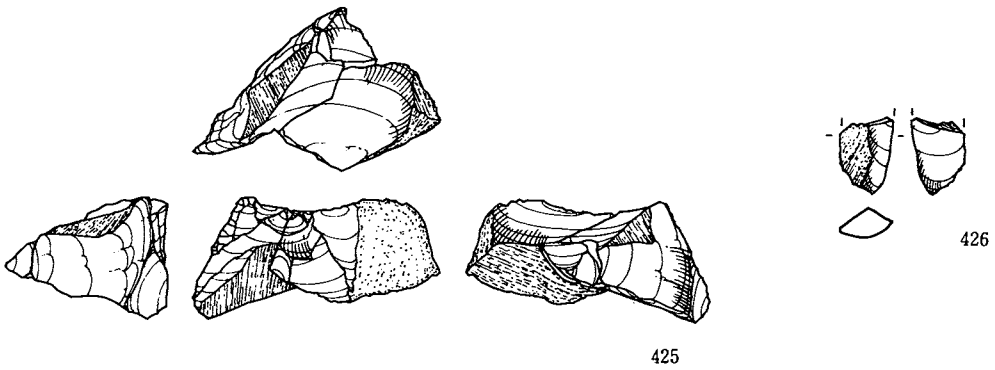
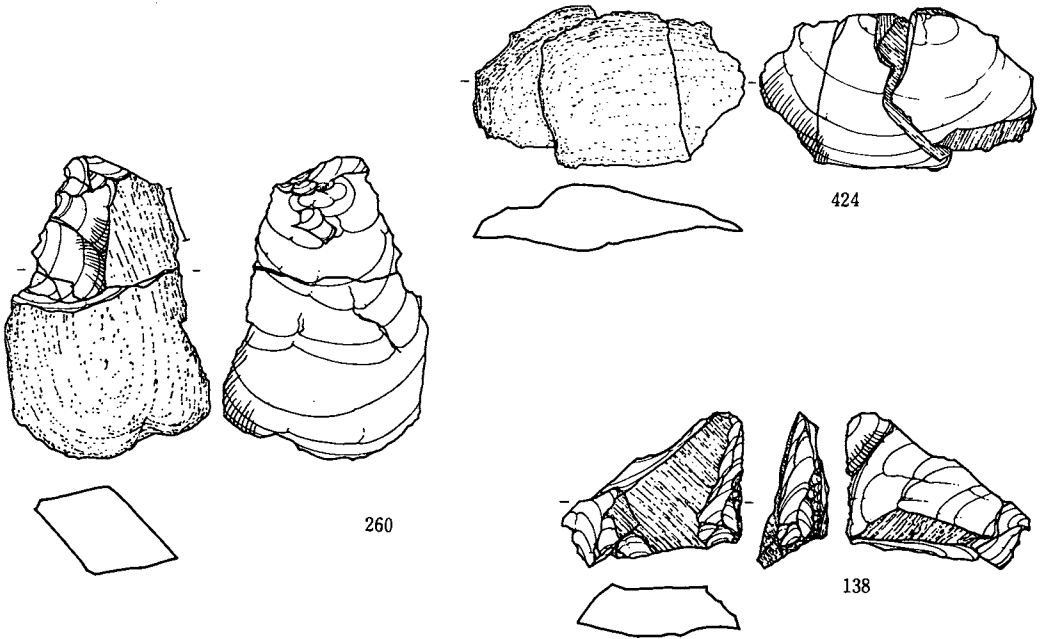


第64図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物

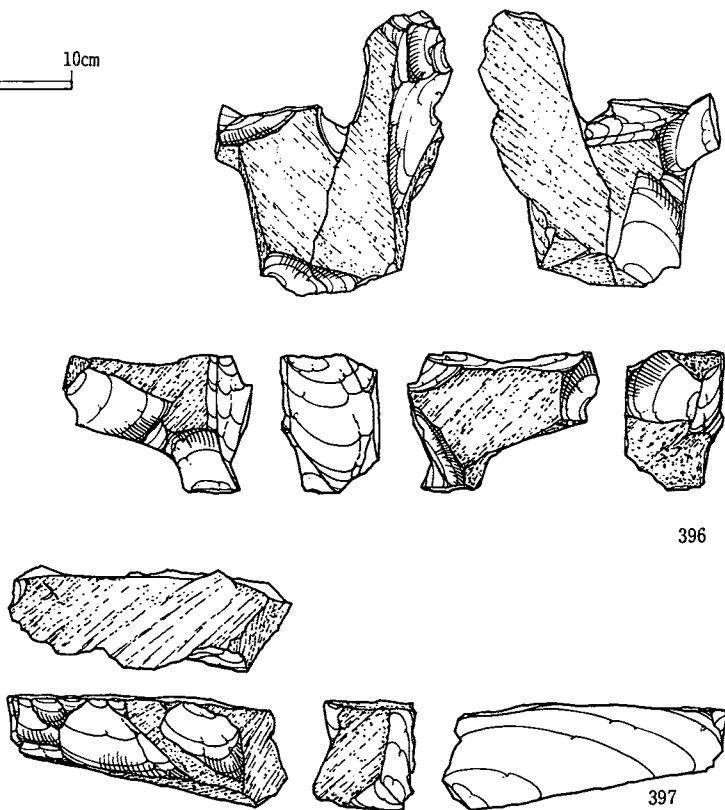
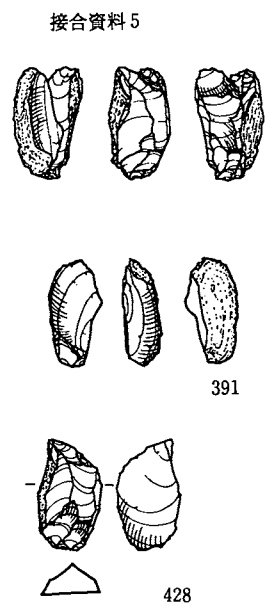
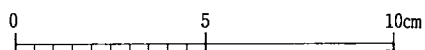
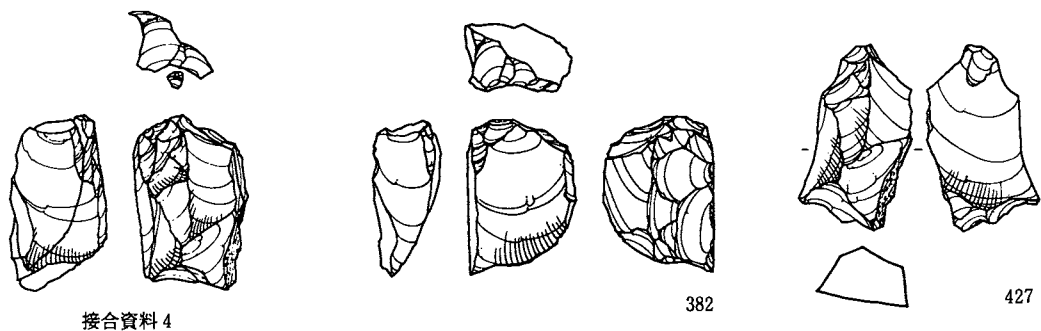
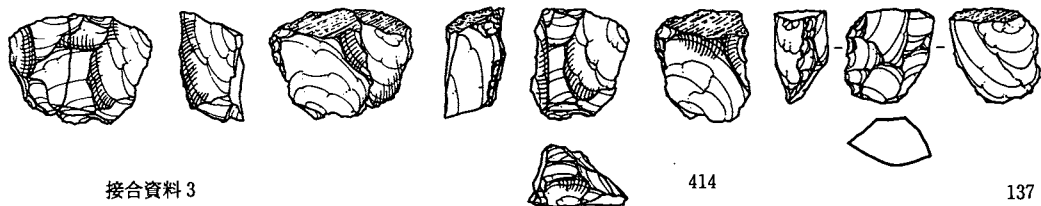


接合資料 2



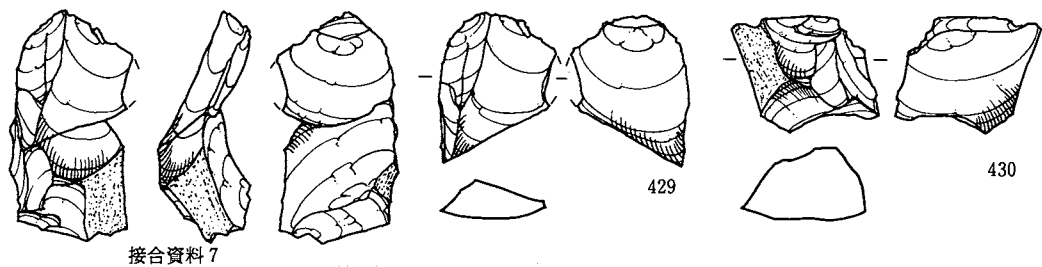
第65図 石器実測図

第III章 調査の成果

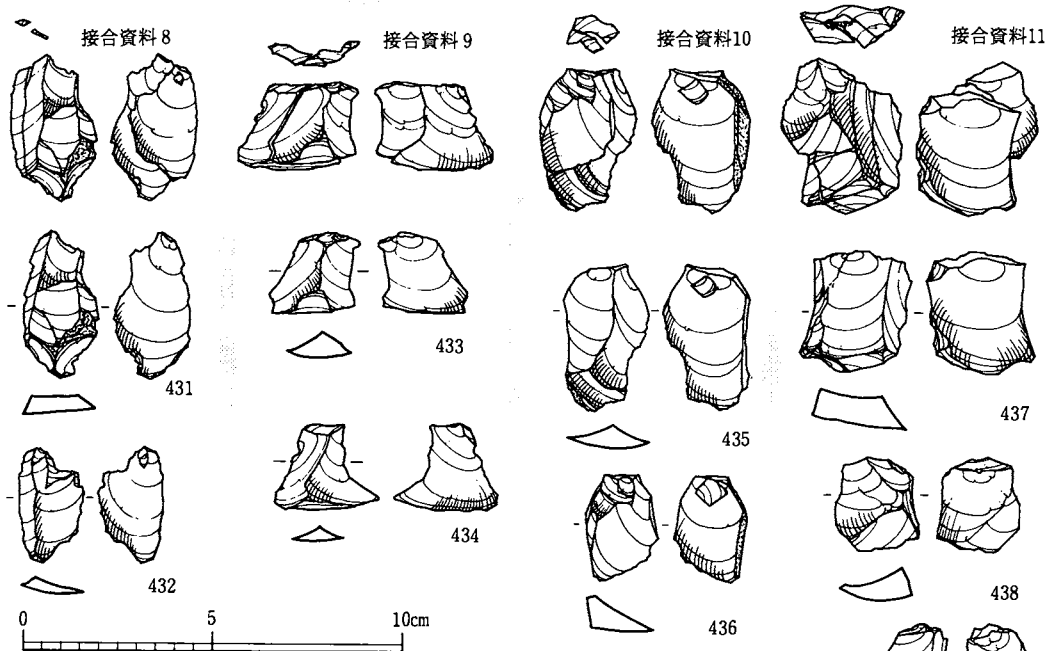


第66図 石器実測図

第1節 狸谷I石器文化の遺物



接合資料7



接合資料8

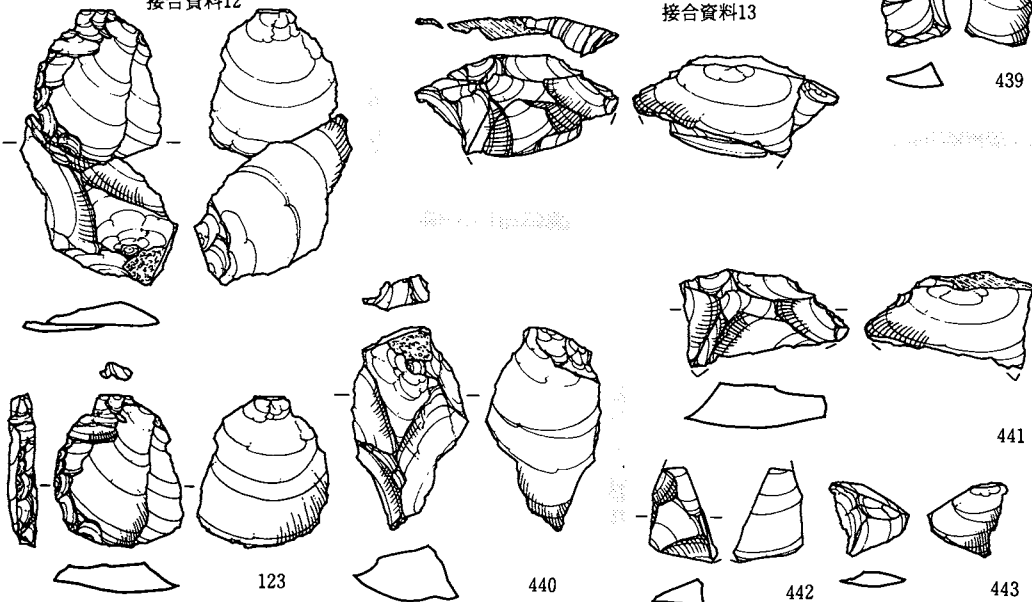
接合資料9

接合資料10

接合資料11

接合資料12

接合資料13



第67図 石器実測図

の形状には、上記した剝離技術の差ほどの違いは認められないようである。

最後に、資料の出土位置を示しておく。8、9、13は、調査区の北東隅に集まり、7と12は、調査区のほぼ中央部で見られる。また、10は調査区の南東隅、そして、11は調査区中央の西寄りの部分で、それぞれ検出されている。

3. まとめ

狸谷 I 石器文化は、遺跡の基本層位では、第VII層を包含層とするものである。第VI層が、入戸火砕流起原のシラスに対比できることから、この石器文化は、広域火山灰の一つである始良 Tn 火山灰よりも下位に位置しているものといえる。

石器組成は、ナイフ形石器、搔器、削器、抉入石器、彫器、揉錐器、礫器、磨石・敲石、石皿・台石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剝片、と充実した内容を持ち、しかも、資料総数3783点（内、石器総数381点）は、九州における先土器時代でも最も安定した石器文化の一つと考えられる。このことから、この石器文化は、遅れている九州の先土器時代の編年研究の上でも、重要な基準資料となるものといえる。

遺物の包含状態は、60～130cmの厚さを持ち、硬く締まった第VI層に覆われていて、極めて良好である。また、遺物の垂直分布も10cm前後と上下差が少なく、かなり原位置に近い状態を示しているものと思われる。

こうした良好な包含状態の下に、遺物分布の検討をおこなった。その結果、そのあり方に、偏在の状態から、散在的な分布（ナイフ形石器、磨石・敲石、石皿・台石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剝片）、点在的な分布（搔器）、環状分布（削器、抉入石器、石核）の三つがあることが判明した。同一の遺物分布の中における、石器ごとの遺物分布の差であり、占地部分での場の利用のあり方、そして、さらには、石器の機能問題についての傍証資料となるものと考えられる。

最後に、この石器文化の編年的位置について考えてみたい。包含層の位置は、すでに前記しているように、始良 Tn 火山灰の下位にあたる。一方、ナイフ形石器の形態組成では茂呂（九州）型のナイフ形石器と、剝片の一部に刃潰し加工が認められるナイフ形石器が、中心となり、これに切出し状のナイフ形石器が加わるという特徴がある。この2点から判断すれば、狸谷 I 石器文化は、相模野編年での第II期後半、武蔵野編年での第I c 期に対比が可能であろう。ただ、剝片剝離技術においては、鈴木遺跡第VI層のような明確な刃器技法は持たず、寸詰りの縦長剝片や横広の剝片が多く生産されている。

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物

狸谷II石器文化の調査は、遺物の分布する遺跡の西半分、調査区名ではVI区列～IX区列において実施した。その結果、第V層という、入戸火砕流の直上の層に包含層を持つナイフ形石器を主体とした狸谷II石器文化が検出された。その石器文化の内容は、配石遺構1基と、多量の礫によって構成される礫群、そして、ナイフ形石器や三稜尖頭器を主なる石器組成とする遺物群である。

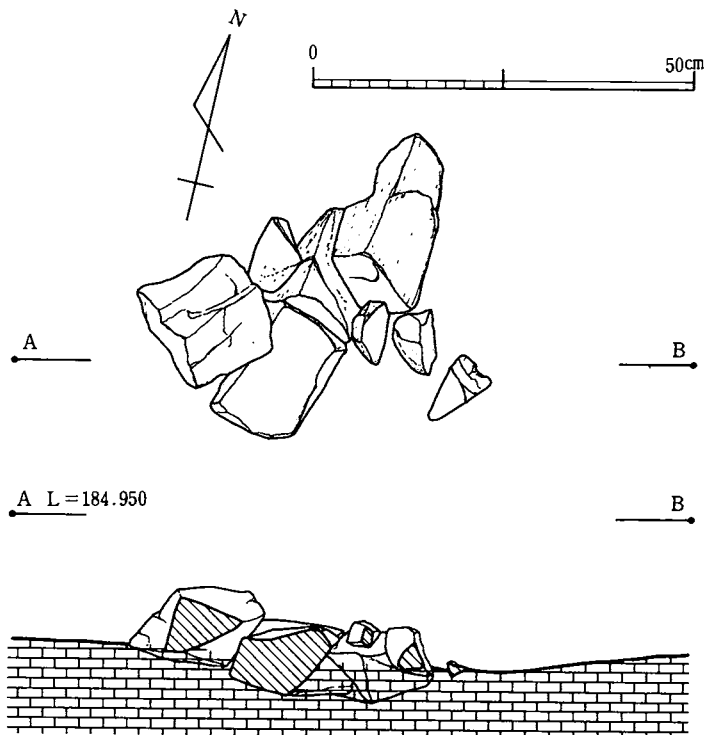
1. 遺構とその分布

遺構は、二つの種類が確認された。つまり、比較的大型の礫が数個並べられた状態の配石遺構と、小型の円礫ないし破碎礫が広範囲に広がっている礫群である。以下、遺構ごとに説明を加えていこう。

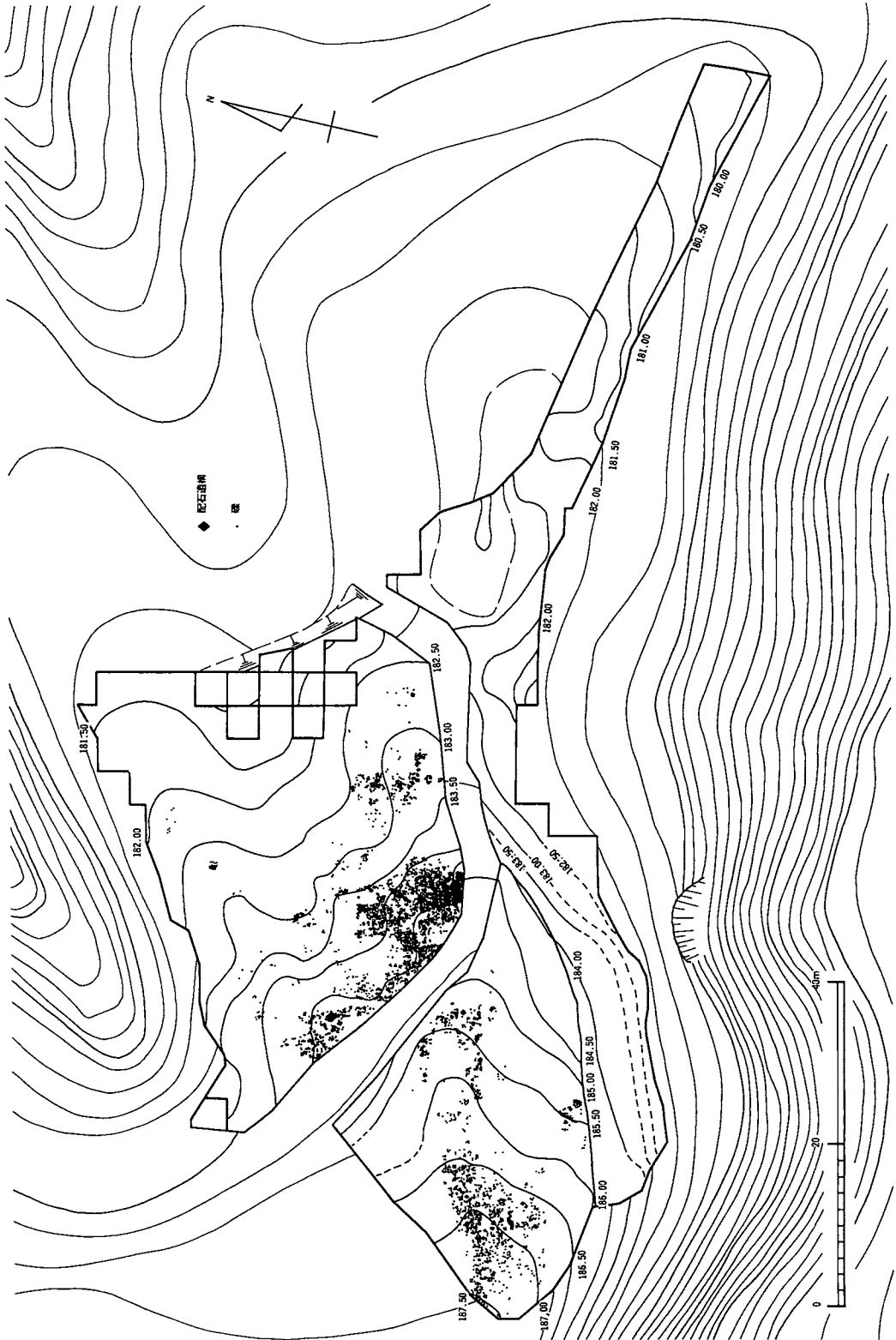
配石遺構（第68図）

遺跡の西端を起点とする尾根は、標高184.50m付近に至ると、二つの尾根に分かれ、その後、並行しながら、北東の方向へ延びていく。配石遺構は、この二つの尾根が分かれ始めた部分、北側の尾根の頂部にある（第69図）。

この配石遺構は、中央に直方体を呈する長さ30cmの大型の礫（現状では、4個に割れているが）を置き、その西側に1辺が12cmの正方形の中型の礫1個、そしてその東側に小型の礫3個を配するという構造をとっている。礫は、いずれも砂岩で、赤変している。基底面は入戸火砕流であり、その基底面を掘り込んだ土坑などの付属遺構や、焼土部



第68図 配石遺構実測図



第69図 遺物分布図（磔）

分などは確認されなかった。したがって、遺構の性格については、不明確である。

礫群 (第69図)

調査の結果、8,252点という多量の赤化した礫が群をなして検出された。この群を礫群と呼んでいる。この礫群は、第69図に示しているように、尾根の頂部を中心に検出されているが、その偏在の傾向によって、大きく第1～6の礫群に分離できる。

第1礫群は、遺跡の西端に広がるもので、約1460点の礫によって構成されている。その分布域は、東西約20m、南北約12mの範囲にある。礫の石材は、珩岩と砂岩である。

第2礫群は、第1礫群の東隣に広がる約700点の礫によって構成されるものである。その分布は環状を呈し、礫は、東西12m、南北8mの範囲に散らばっている。礫の石材は、珩岩と砂岩である。

第3礫群は、第2礫群の東隣にあるもので、約5000点の礫によって構成されている。その分布は、直径13mの円形を呈し、もっとも大規模な礫群である。礫は、珩岩と砂岩である。

第4礫群は、第3礫群の続き、第2礫群の北に広がるもので、約340点の、珩岩と砂岩によって構成されている。その分布域は、長軸10m、短軸5mを測る楕円形を呈している。なお、先に示した配石遺構は、この礫群の一角にある。

第5礫群は、第3礫群の東にあり、約450点の、珩岩と砂岩によって構成されている。その分布域は、長軸10m、短軸5mの範囲にある。

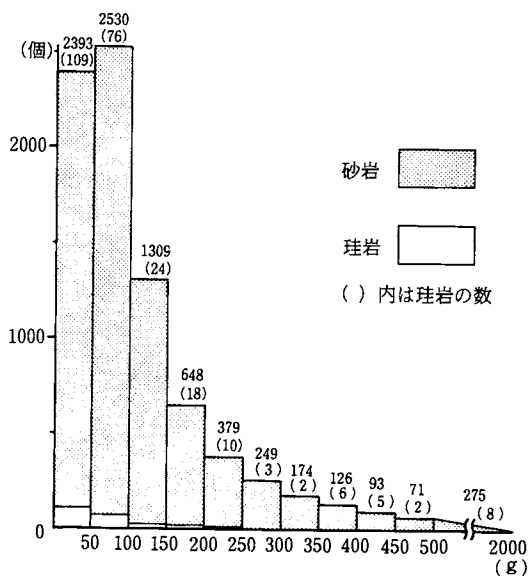
第6礫群は、第2礫群の南に位置している。この礫群は、礫群と認識したものの中では、もっとも小型のもので、珩岩と砂岩の約170点の礫によって構成されている。分布も狭く、直径4mの円形の中にある。

礫の種類と重量 (第70図)

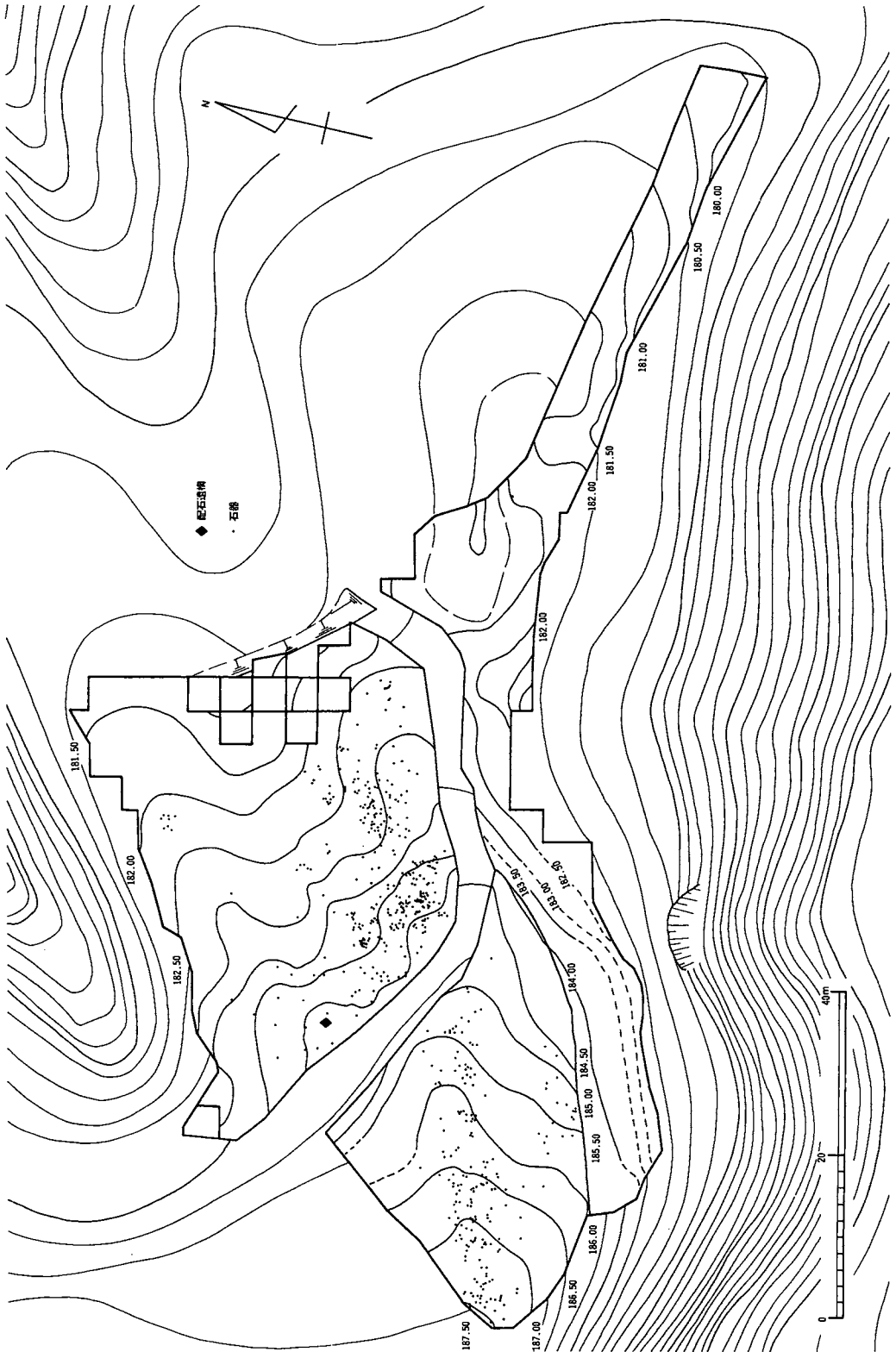
礫群を構成している礫には、砂岩と珩岩とがあるが、その個数では、砂岩7990点に対して、珩岩262点と、砂岩が全体の95%と、圧倒的な数を占めている。ちなみに、こうした砂岩を主体として、それに珩岩を加えた礫群は、人吉盆地での縄文時代の集石の傾向とも共通しているところである。

次に、礫群を構成する礫の重量の構成について見てみたい (第70図)。

出土した礫の中で、最も大型のものは、2000gを越える。しかし、礫の中で、もっとも多いのは、100gまでの破碎礫である。そ



第70図 礫の重量別傾向



第71図 遺物分布図 (石器)

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物

の数は4923点と、全体の約6割を占めている。そして、礫の数は礫の重量が増すに従い、だいにその数を減らしている。このように、比較的 naturally 漸減していく傾向からすれば、これら破砕礫は、人為が加わった意図的破砕ではなく、自然の破砕による可能性がもっとも高いといえる。また、この自然の破砕礫は、礫の表面がもろく赤化した状態にあり、そのほとんどが、焼け石であることを示している。こうした礫の状況と同時に、狸谷II石器文化の石器に使用された石材の中で、礫群を主に構成する砂岩が占める割合は、極めて少ないという事実がある。このことから、礫群を構成する礫については、火を使った行動に直接関係したものであり、それが、一括投棄された後、自然に破砕していったという想定が最も自然であろう。

2. 石器組成と分布の構成

出土した遺物は、すべて石器関係の資料であり、その総数は、547点である（第13表）。その内訳は、ナイフ形石器48点、三稜尖頭器5点、搔器5点、削器5点、彫器1点、楔形石器1点、磨石・敲石6点、二次加工ある不定形石器15点、使用痕ある剝片24点、石核20点、剝片・碎片417点で、特に、ナイフ形石器が多く検出されていることが、目立っている。石材では、ほとんどが珪岩（449点）で、ついで、黒曜石（72点）と安山岩（20点）、そして砂岩（6点）がみられる。

石器の分布は、主として、丘陵西側、しかも、東方へ延びる尾根の頂部を中心に帯状に広がっている（第71図）。この石器の分布は、さらに、その偏在の傾向によって、第1～6

第13表 狸谷II石器文化石器組成表

器種	計(%)	珪岩	黒曜石	安山岩	砂岩	頁岩
ナイフ形石器	48 (43)	43 (90)	2 (4)	3 (6)	—	—
三稜尖頭器	5 (5)	3 (60)	2 (40)	—	—	(1)調査前 の裏採
搔器	5 (5)	5	—	—	—	—
削器	5 (5)	5	—	—	—	—
彫器	1 (1)	1	—	—	—	—
楔形石器	1 (1)	—	1	—	—	—
磨石・敲石	6 (5)	—	—	—	6	—
二次加工ある不定形石器	15 (13)	12 (80)	3 (20)	—	—	—
使用痕ある剝片	24 (22)	24	—	—	—	—
石器総計	110 (20)	93 (85)	8 (7)	3 (3)	6 (5)	—
石核	20 (4)	15 (75)	5 (25)	—	—	—
剝片・碎片	417 (76)	341 (82)	59 (14)	17 (4)	—	—
総計	547	449 (82)	72 (13)	20 (4)	6 (1)	—

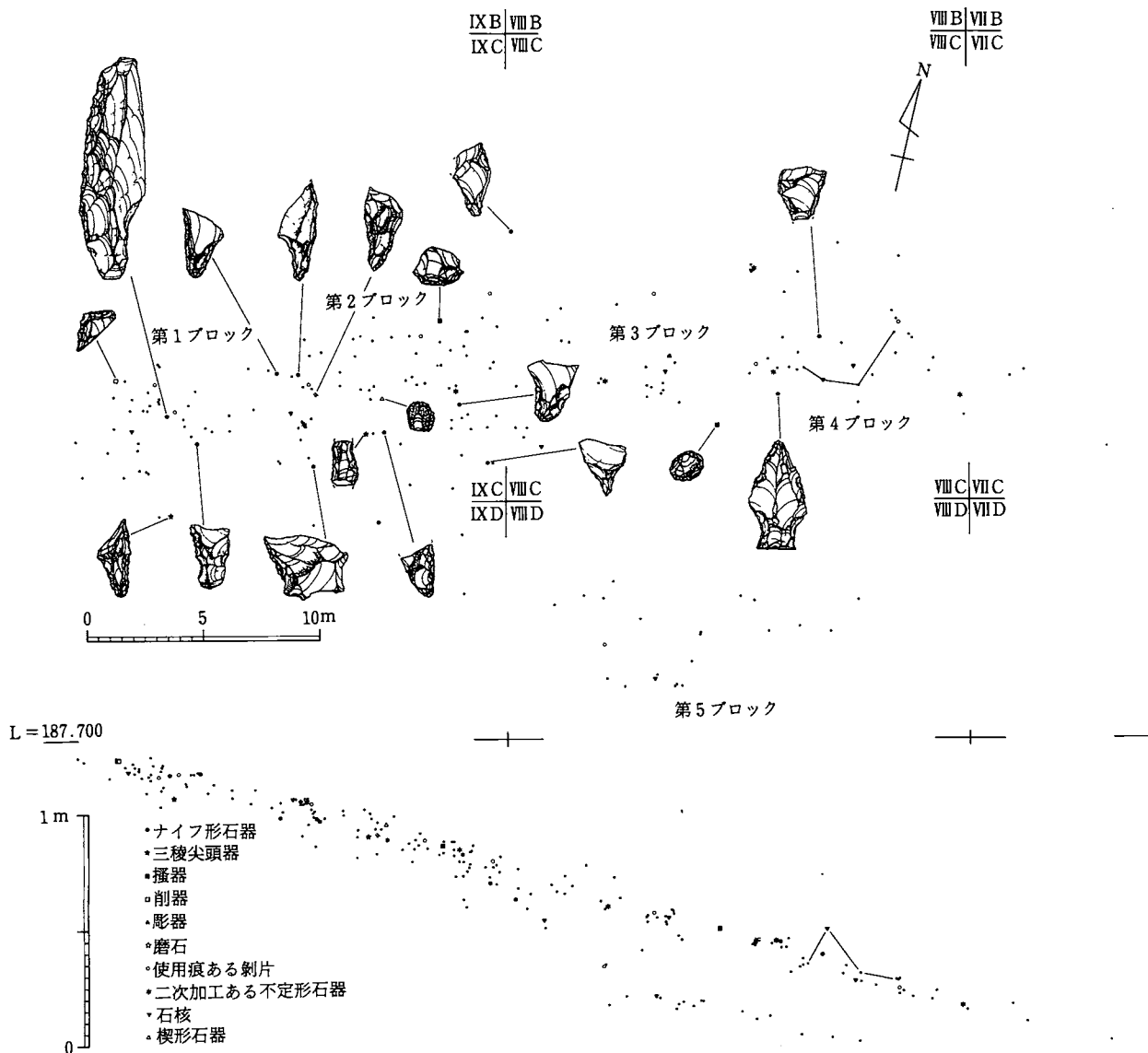
ロックに分離できる。以下、そのブロックごとに説明を加えていきたい。

第1ブロック (第72図)

丘陵の西端に広がる石器分布で、直径7mの範囲に41点の石器が散らばっている。石器組成は、ナイフ形石器2点、三稜尖頭器1点、削器1点、使用痕ある剥片2点、石核1点、剥片・碎片34点で、珩岩33点、黒曜石4点、安山岩3点の石材構成である。

第2ブロック (第72図)

第1ブロックの東隣にある、84点の石器の分布で、その分布域は、長軸12m、短軸8mの楕円形を呈している。石器組成は、ナイフ形石器9点、三稜尖頭器1点、搔器1点、楔形石器1点、二次加工ある不定形石器2点、使用痕ある剥片3点、石核2点、剥片・碎片65点によって構成されている。石材は、珩岩60点、黒曜石17点、安山岩7点である。



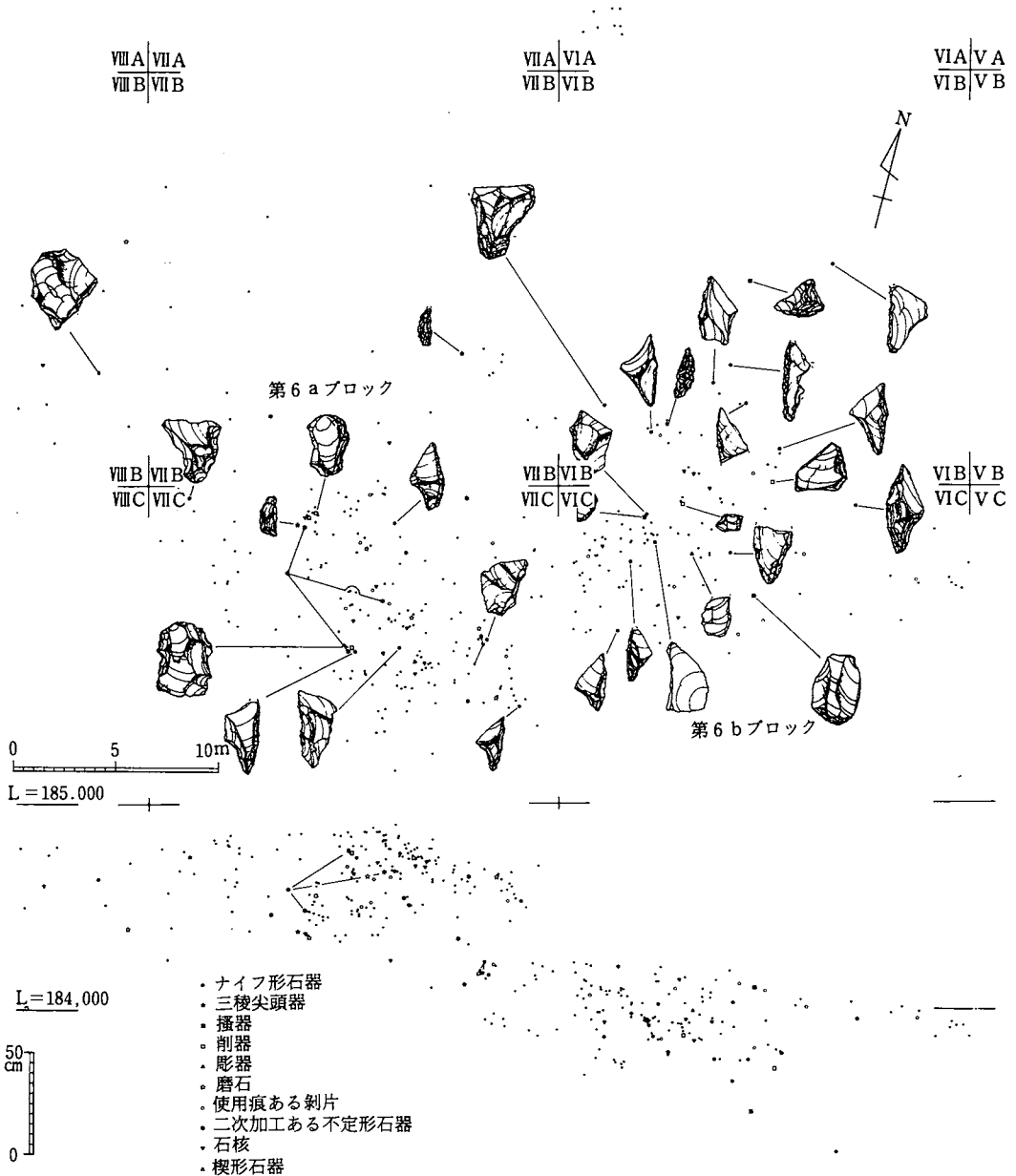
第72図 遺物分布図 I

第3ブロック (第72図)

第2ブロックの東隣にある石器分布である。その分布域は、直径8mの範囲で、19点の石器が出土した。その組成は、搔器1点、二次加工ある不定形石器1点、使用痕ある剥片1点、石核1点、剥片・碎片15点である。石材は、珪岩14点、黒曜石5点である。

第4ブロック (第73図)

第3ブロックの東隣に広がる石器分布で、長軸12m、短軸8mという楕円形を呈する分布域



第73図 遺物分布図II

の中で、34点の石器が出土した。その石器組成は、ナイフ形石器2点、二次加工ある不定形石器3点、使用痕ある剝片2点、石核3点、剝片・碎片24点である。石材は、珩岩29点、黒曜石5点である。

第5ブロック（第73図）

第4ブロックの南側にあり、長軸14m、短軸6mという楕円形の範囲の中に散在した分布の状態をとっている。出土石器は、使用痕ある剝片1点、石核1点、剝片・碎片20点で、総数22点である。石材は、珩岩14点、黒曜石8点である。

第6ブロック（第73図）

丘陵のほぼ中央部に、広範囲に広がる石器の分布で、その平面分布や垂直分布の状態から、さらにaとbに分かれるようである。

第6aブロックは、第6ブロックの西半分の石器分布である。その分布域は、長軸30m、短軸16mの楕円形を呈し、特に、その南東側に多く集中した状態を示している。石器総数191点の内訳は、ナイフ形石器8点、三稜尖頭器1点、削器2点、磨石・敲石6点、二次加工ある不定形石器9点、使用痕ある剝片7点、石核7点、剝片・碎片151点である。また、石材は、珩岩153点、黒曜石26点、安山岩6点、砂岩6点である。

第6bブロックは、第6ブロックの東半分にある石器分布である。その分布域は、直径19mの円形を呈する範囲内にあり、しかも、その南西隅に偏って集中している。石器は総数145点、内訳は、ナイフ形石器21点、三稜尖頭器1点、搔器3点、削器2点、彫器1点、使用痕ある剝片8点、石核5点、剝片・碎片103点である。石材では、珩岩が139点ともっとも多く、黒曜石は4点、安山岩は2点に留まっている。

ブロック外

上記してきた石器のほかに、各ブロックには所属しない、単独出土の石器もある。その数は4点で、ナイフ形石器2点（内、台形石器1点）、剝片・碎片2点であった。また、その石材は、珩岩2点、黒曜石2点である。

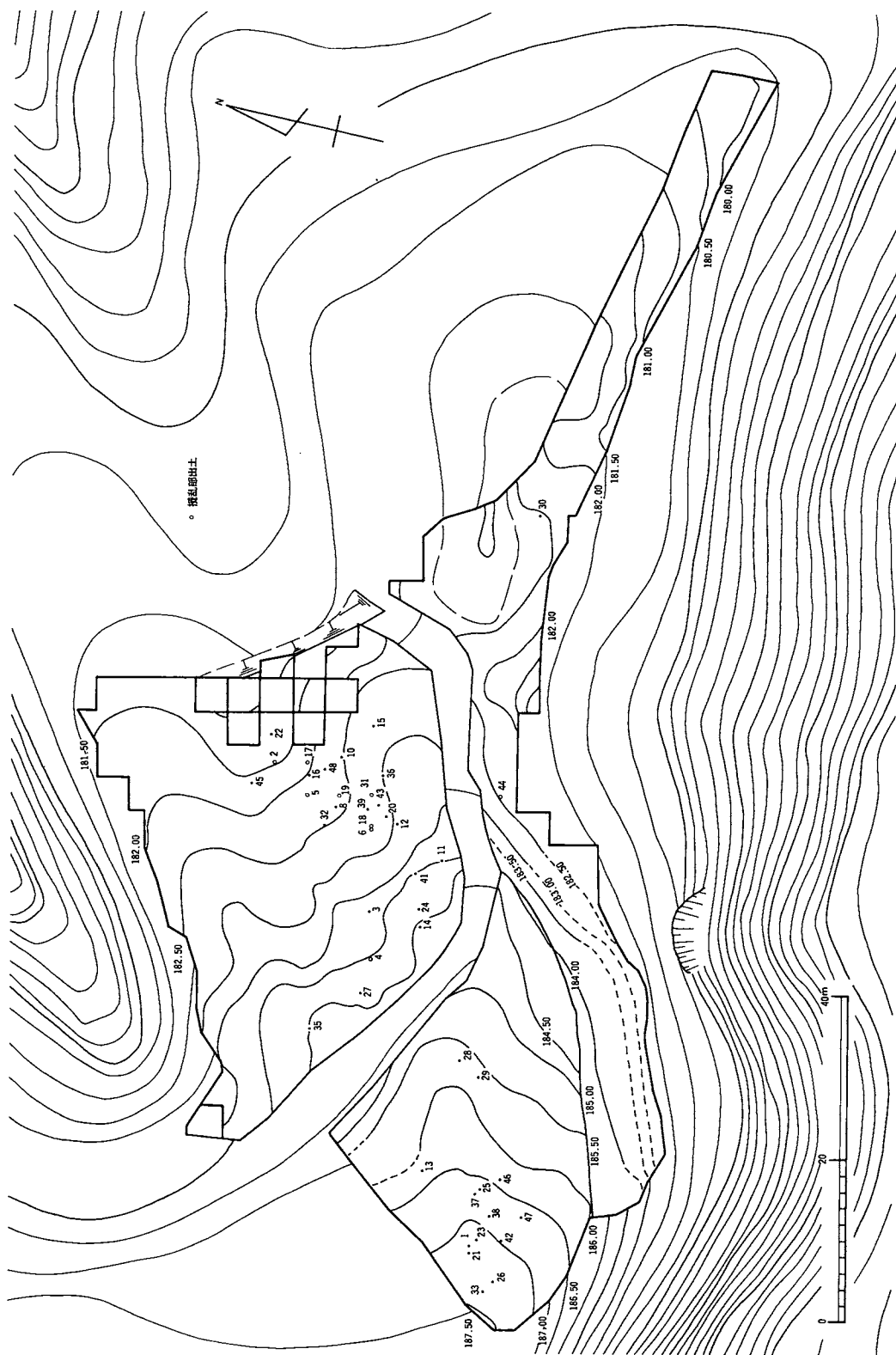
3. 出土石器とその分布

ナイフ形石器（第76図1～第83図48）

ナイフ形石器は48点出土したが、石器組成の中に占める割合は、43%と極めて高い数値を示している。石材の内訳は、珩岩43点、安山岩3点、黒曜石2点である（第13表）。

ナイフ形石器の分布は、丘陵の尾根に沿って帯状に北東方向に広がっている。しかし、その偏在の傾向をさらに詳しくみると、分布が丘陵の西側にみられるもの（第1ブロック・第2ブロック）、丘陵の尾根が二つに分かれる部分（第6aブロック）、そして、その北東側に広

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物



第74図 遺物分布図 (ナイフ形石器)

がる部分（第6 bブロック）の3群と、それぞれの群の周辺に数個づつ点在する石器とによって、構成されていることがわかる。

48点のナイフ形石器は、その刃潰し加工の部位やその形状によって、さらに、第1類～第3類に分類できる。以下、類ごとに説明を加えていこう。

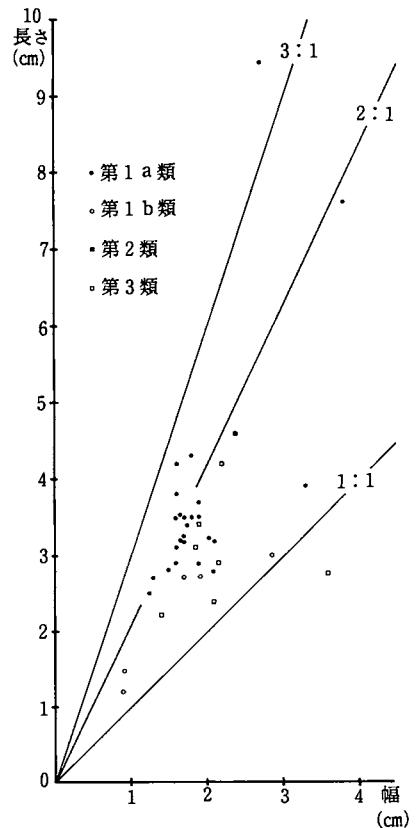
第1類（1～28・30・31・33～35）

第1類のナイフ形石器は、石器本体の二側縁に刃潰し加工がみられるもので、平坦剝離がみられる場合もある（2・22・24・27）。この類型に属するものは、その形状の特徴によって、刃部が斜めに設定され、原則として先端部を持つもの a（1～24）、刃部が石器本体の主軸線に対して直角に設定されるもの b（25～28・30・31）に細分される。

1 a類のナイフ形石器は、切出形石器と呼称されるもので、22点が検出された。石器の形状は、三角形を基本とし、時に、刃部側の側縁に、抉入状の加工がみられる場合もある（1・3・10～12・14・15）。また、この石器では、側縁部と刃部とが作る先端部によって、さらに、二つの状態がみられる。つまり、側縁部と刃部が鋭角に交わることによって鋭い先端部が作られている状態のもの（1～12・15～18・20）と、鈍角に交わり、形状的には、1 a類と1 b類のナイフ形石器との中間に位置するもの（13・14・19・21・22）の二種である。大きさは、長さ2.5～4.3cm、幅1.25～2.1cmで、その長幅比では、2：1付近に最も集中するよう（第75図）、強い規格性が伺われる。また、先に示した二種のナイフ形石器では、2：1付近に集中するものは、鋭い先端部を持つものであり、そうではないものは、1：1の方に、やや偏る傾向がみられる。

1 b類のナイフ形石器は、台形石器と呼ばれるものに相当する。形状は、その名の如く台形が基本であるが、その形状の違いにより、通常台形石器（30・31）と台形様石器とされるもの（25～28）に分けられる。長幅比は、2：1～1：1の間に入り、1 a類に比べれば、やや幅広の傾向が強い。

33～35は、二側縁に刃潰し加工がみられるものであるが、形状的にもそれぞれ独自なものであり、分類外とした。33・34は、安山岩製で、35は、珪岩製である。この中で、33は、横長剝片を素材としたもので、右側基部の抉入状の加工が特徴である。



第75図 ナイフ形石器の長幅比

第2類 (29・32)

第2類のナイフ形石器は、素材となる縦長剥片の打面部を残して、その両側ないし片側に挿入状の刃潰し加工を施したもので、九州においては、剥片尖頭器と呼ばれている。資料数が2点と少ないので、個別に説明しよう。

29は、珪岩の縦長剥片を素材としたもので、基部両側に挿入状の刃潰し加工、そしてその先端部左側に、刃潰し加工が観察される。またこのほか、石器先端部右側には、一面の桶状剝離がみられる。おそらく、彫器に再加工されたのであろう。32は、珪岩製の縦長剥片が素材となっているもので、挿入状の刃潰し加工は、基部右側のみに観察される。この全体像は、左側縁では、挿入状の加工が観察されないことから、二側縁加工の剥片尖頭器になるものであろう。

第3類 (36～46)

第3類のナイフ形石器は、剥片の一つの側縁に刃潰し加工がみられるもので、11点が検出された。この類に属するものには、その石器の状態から、あきらかに完成品とみられるもの(36～38)と、1類ナイフ形石器の未加工品の可能性が高いもの(39～46)がある。したがって、ここでは、前者の3例についてだけ説明を加える。

36は、珪岩製の横長剥片が素材として使われ、その打面の部分に刃潰し加工がみられる、一側縁加工のナイフ形石器である。剥片の形状は、翼状剥片に類似しているが、表面の剝離の状況を観察すれば、その範疇には属さない。37も、珪岩製横長剥片を素材とし、その打面部分に刃潰し加工が施された、一側縁加工のナイフ形石器である。国府型のナイフ形石器に類似したものである。38は、胴部上半を大きく欠いているために、その全体像は不明であるが、横長剥片素材で、その打面部に刃潰し加工を施したナイフ形石器であろう。

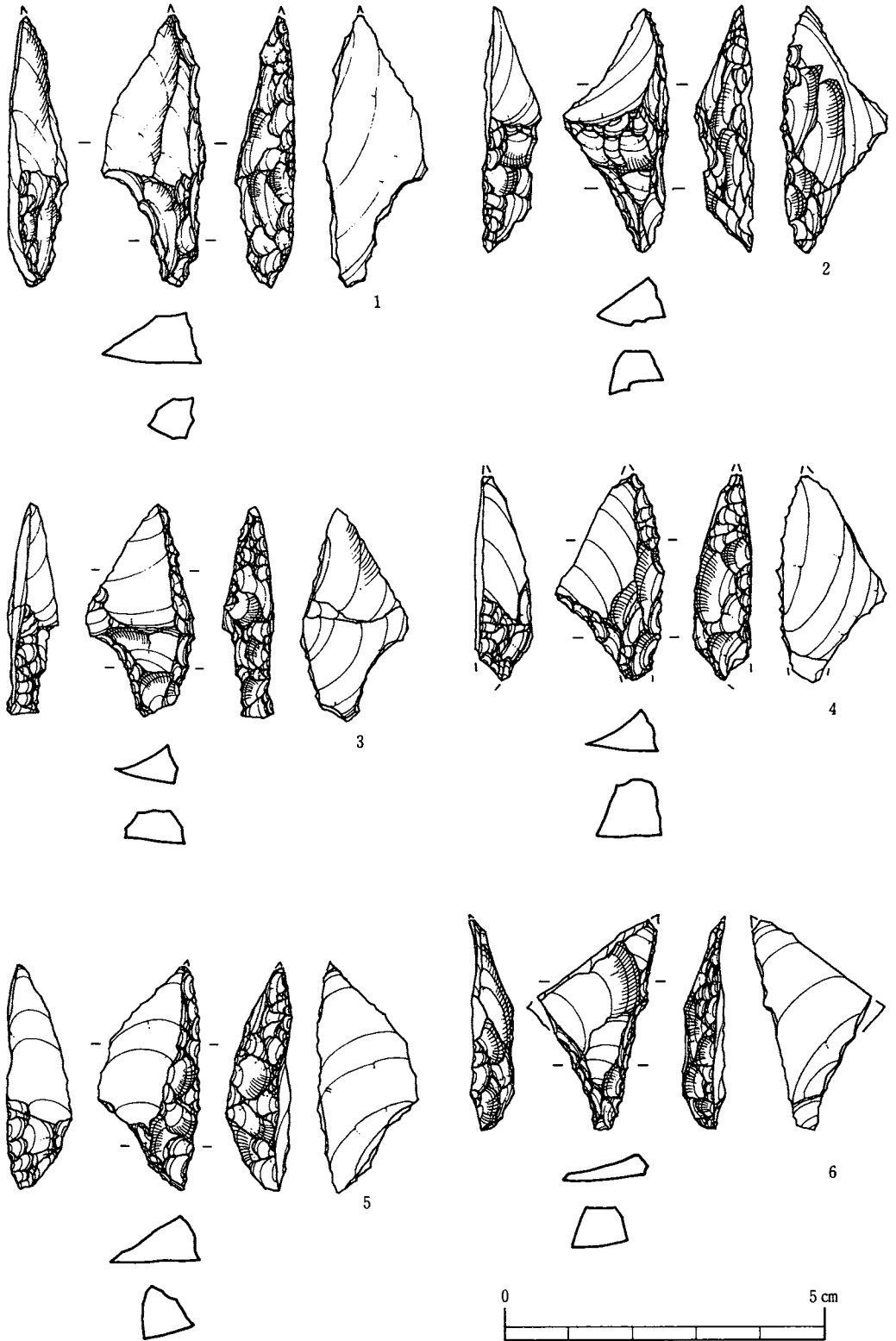
所属不明のナイフ形石器 (47・48)

47・48は、基部欠損のために、その全体像が不明であり、その所属がわからないものである。いずれも、珪岩製である。おそらく、この両者とも、1a類のナイフ形石器の先端部付近のものであろう。

ナイフ形石器の製作

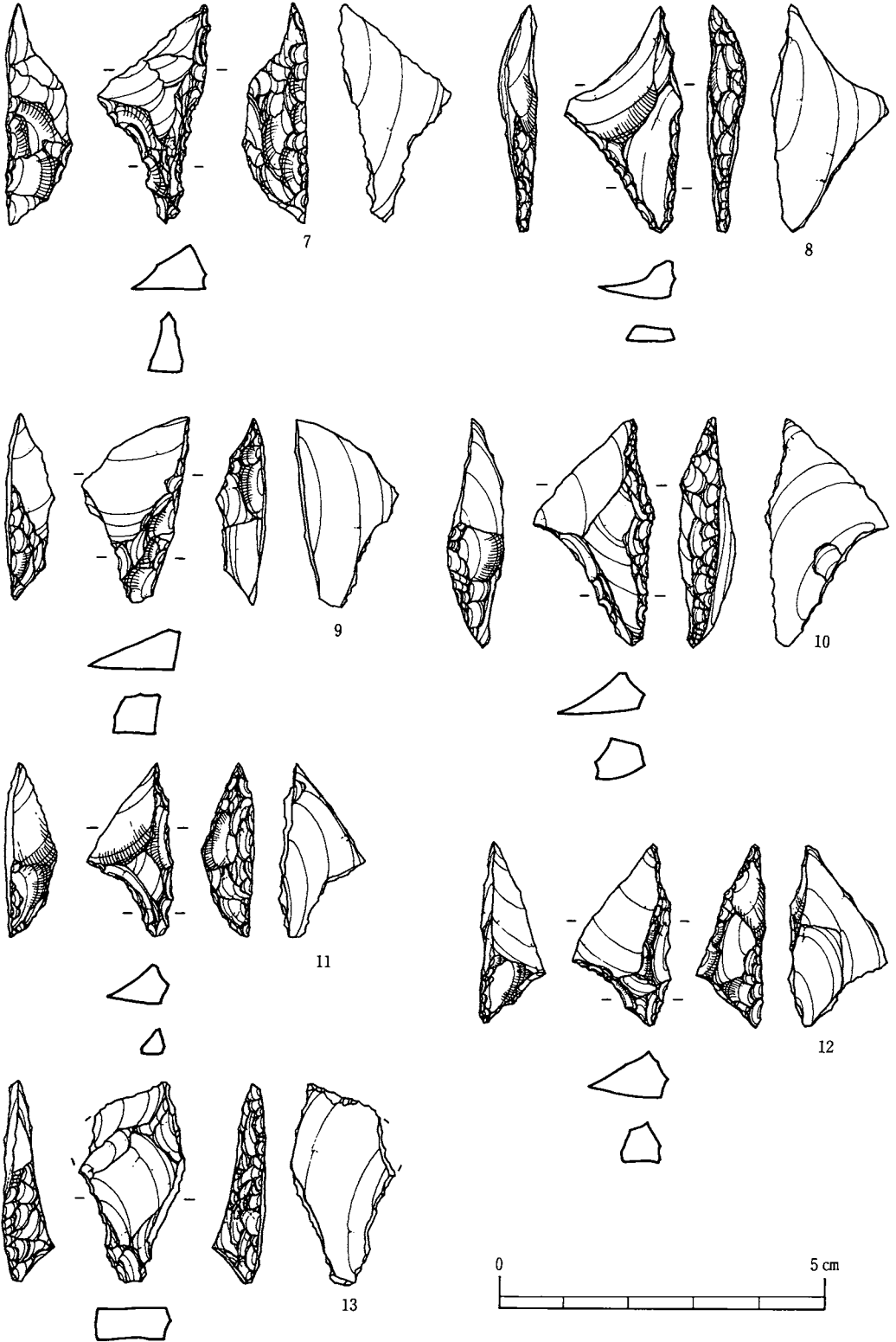
狸谷II石器文化に属するナイフ形石器は、大きく、第1類～第3類に分類される。この中で、2類と3類の一部のナイフ形石器については、その剥片の形状からその調整加工まで、ある程度示してきた。そこで、ここでは、資料が多い、1a類のナイフ形石器の製作を中心にしたい。

1a類のナイフ形石器は、未加工品の可能性が強いナイフ形石器(39～46)の状態から判断して、横長の剥片や寸詰りの縦長剥片が素材となっていると考えられる。表面と裏面との剝離関係は、ほぼ同一方向のもの6点、対向する剝離がみられるもの8点(内、2点は未加工品)、直行する剝離の状態が観察されるもの18点(内、5点は未加工品)である。

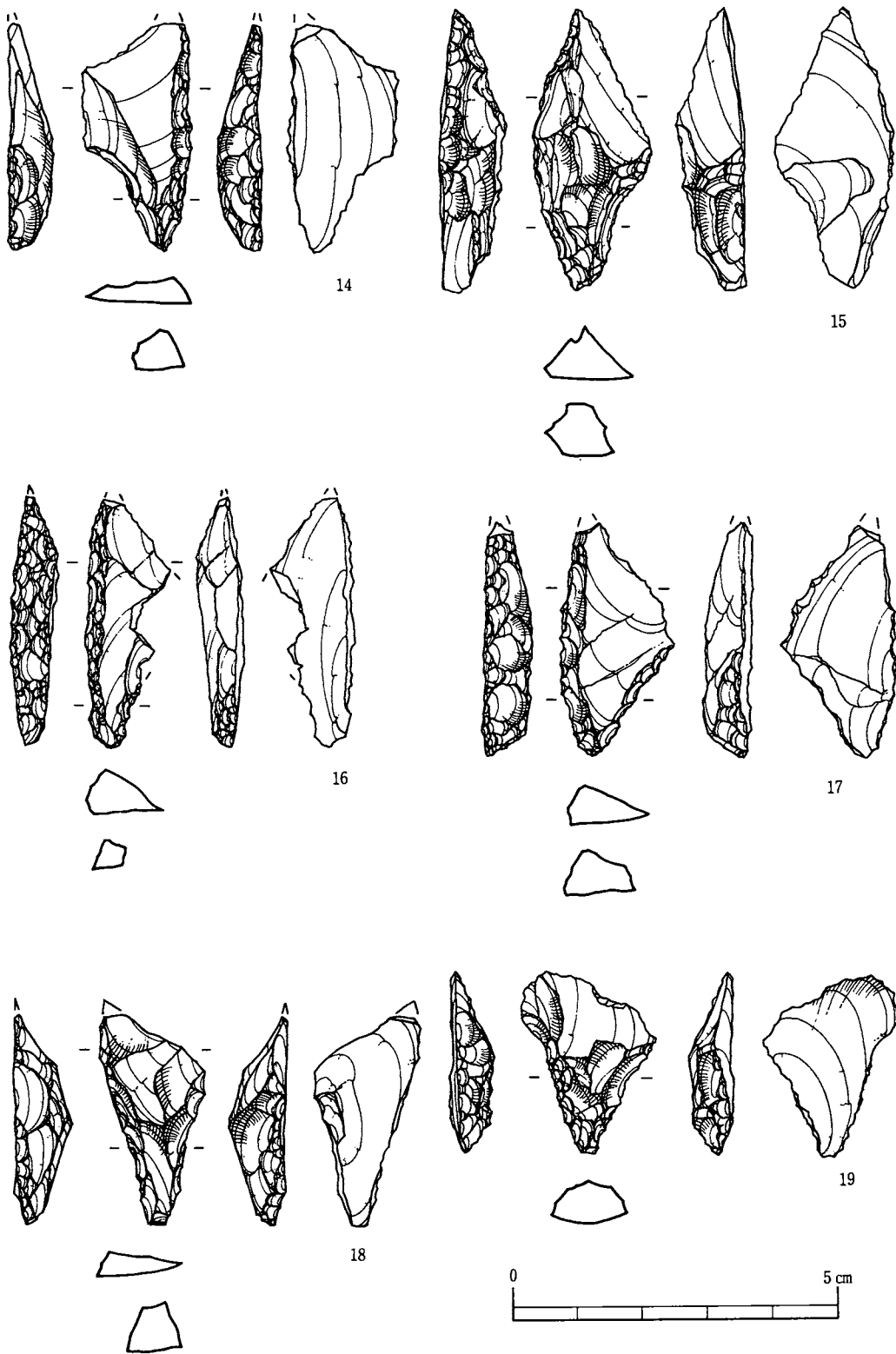


第76図 石器実測図

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物

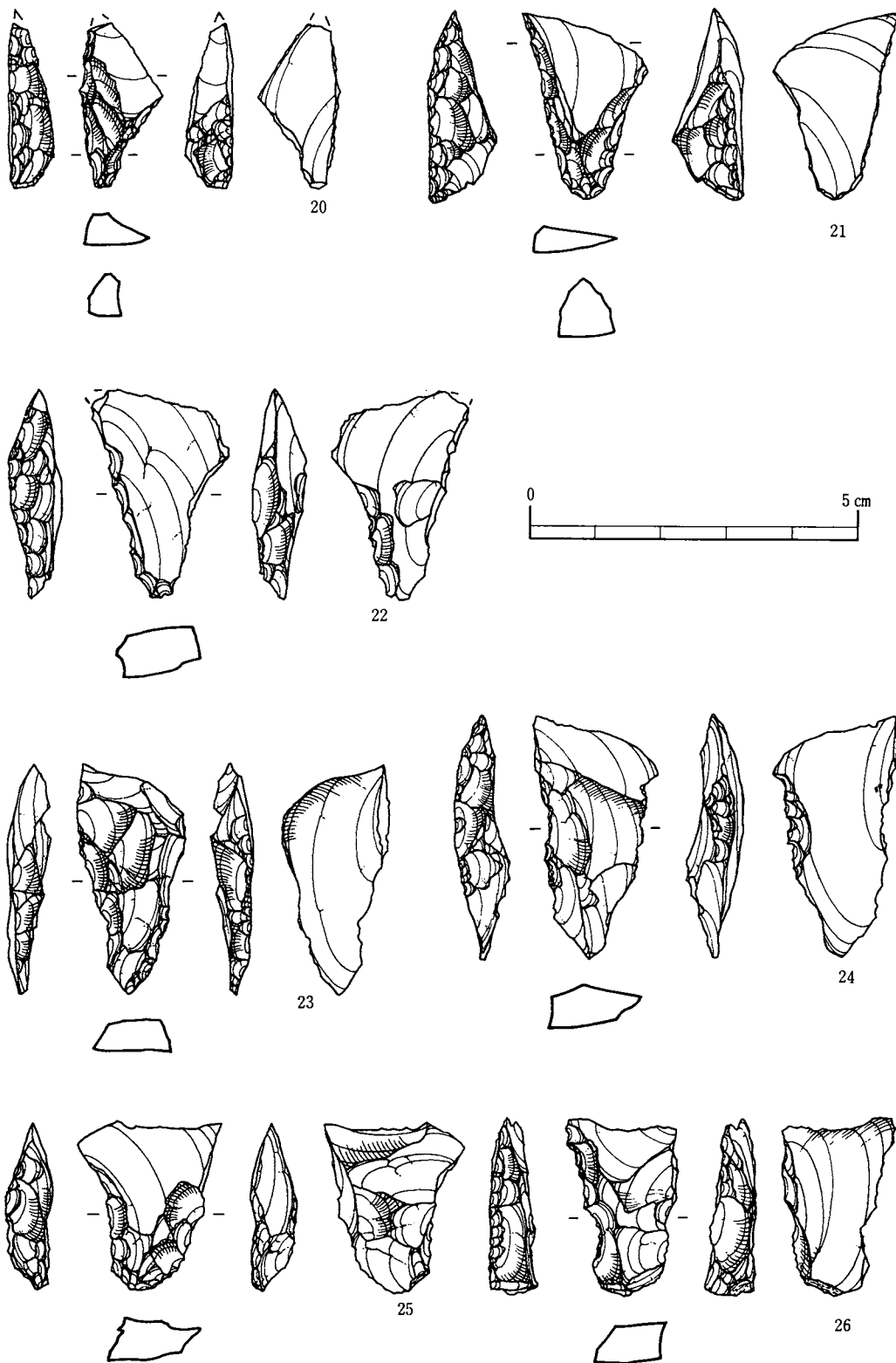


第77図 石器実測図

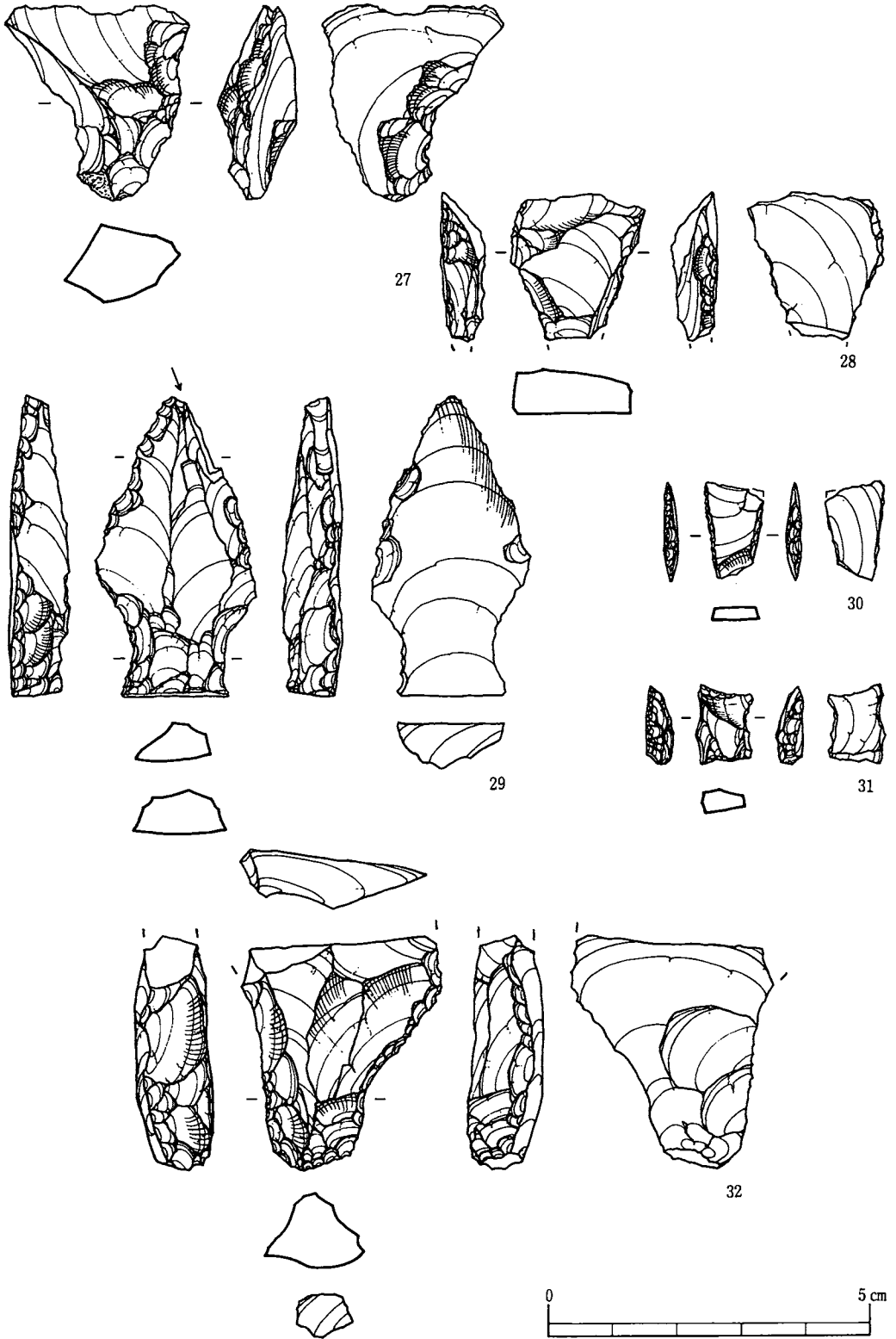


第78図 石器実測図

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物

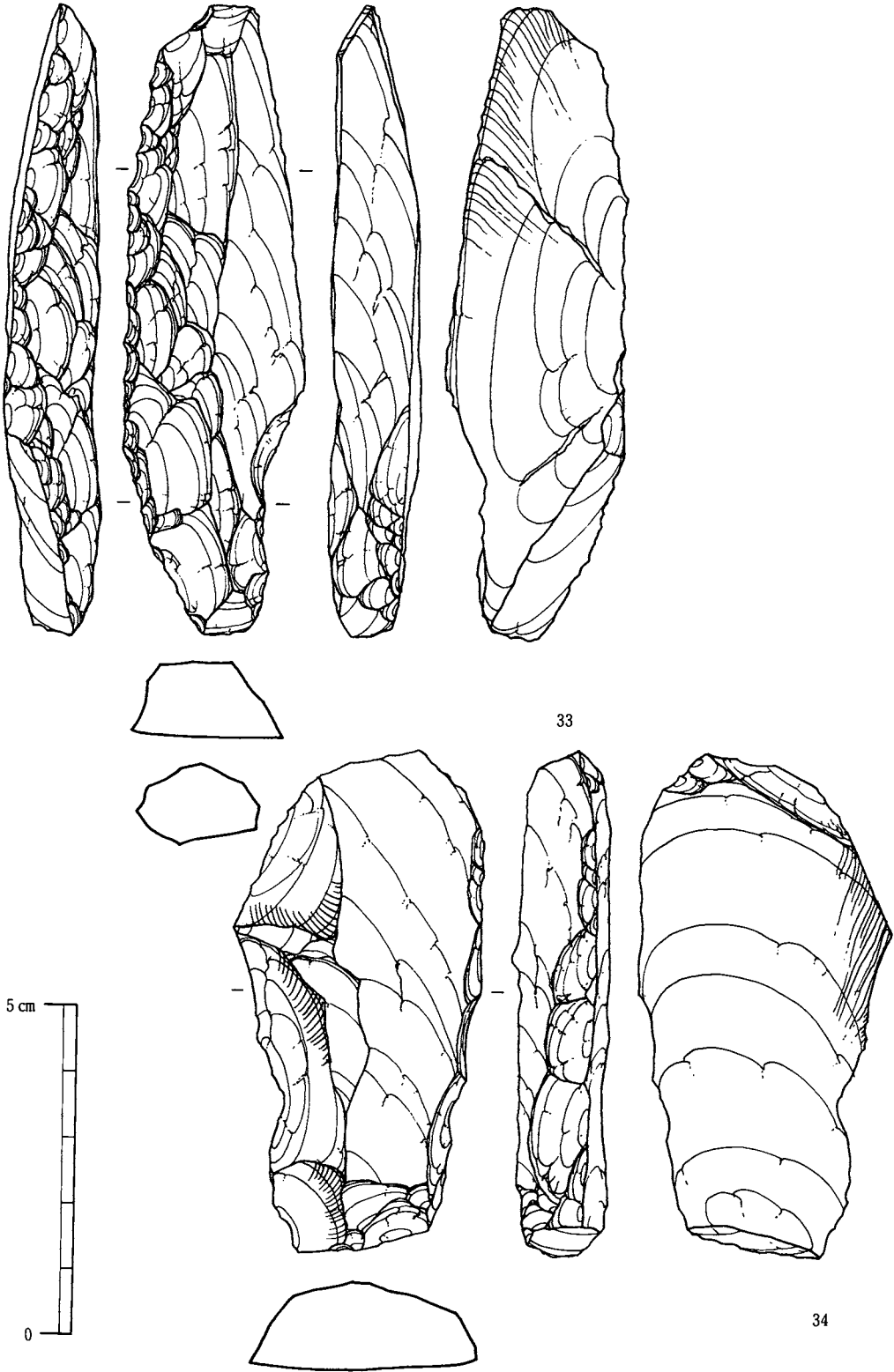


第79図 石器実測図

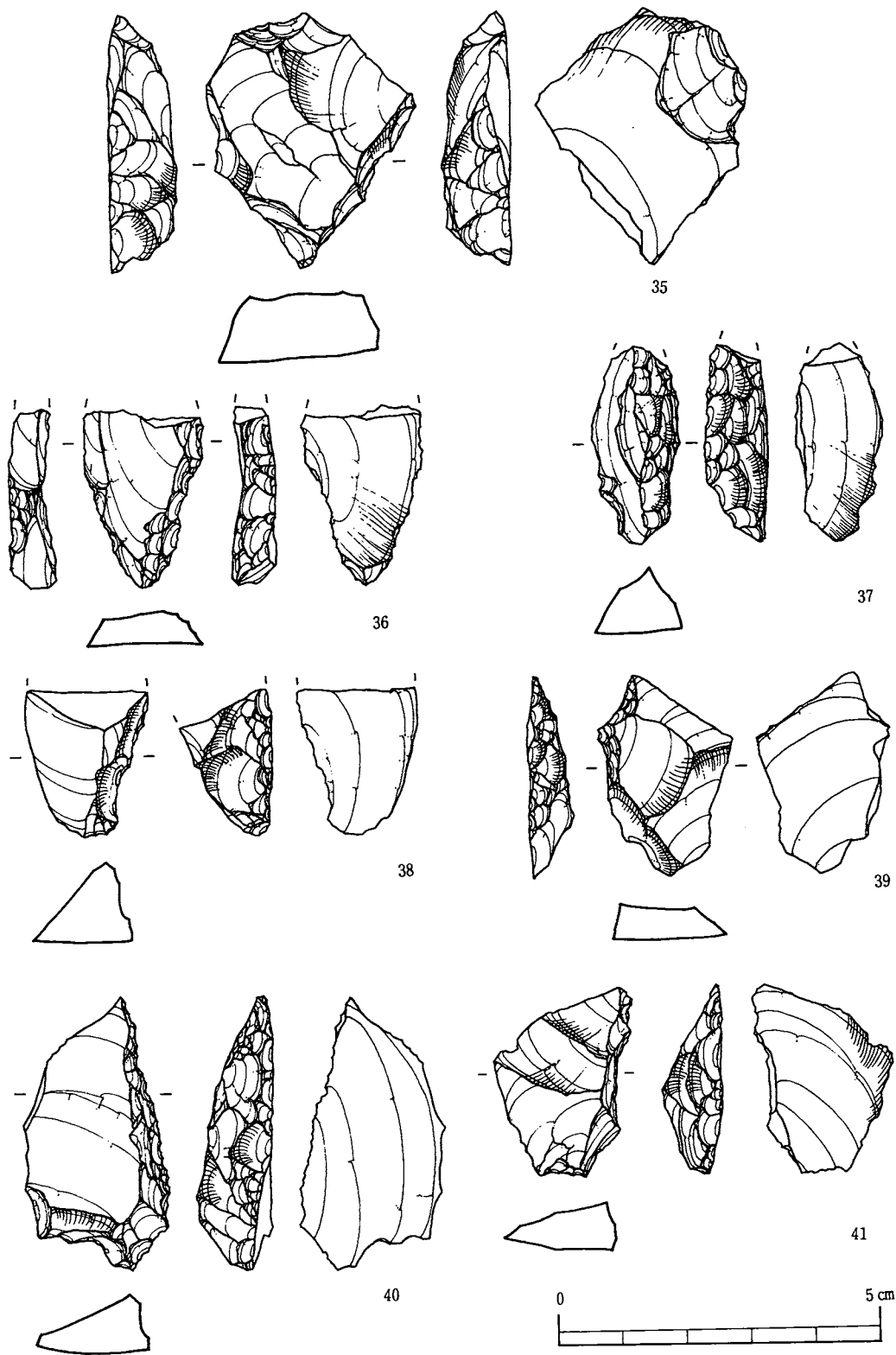


第80図 石器実測図

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物

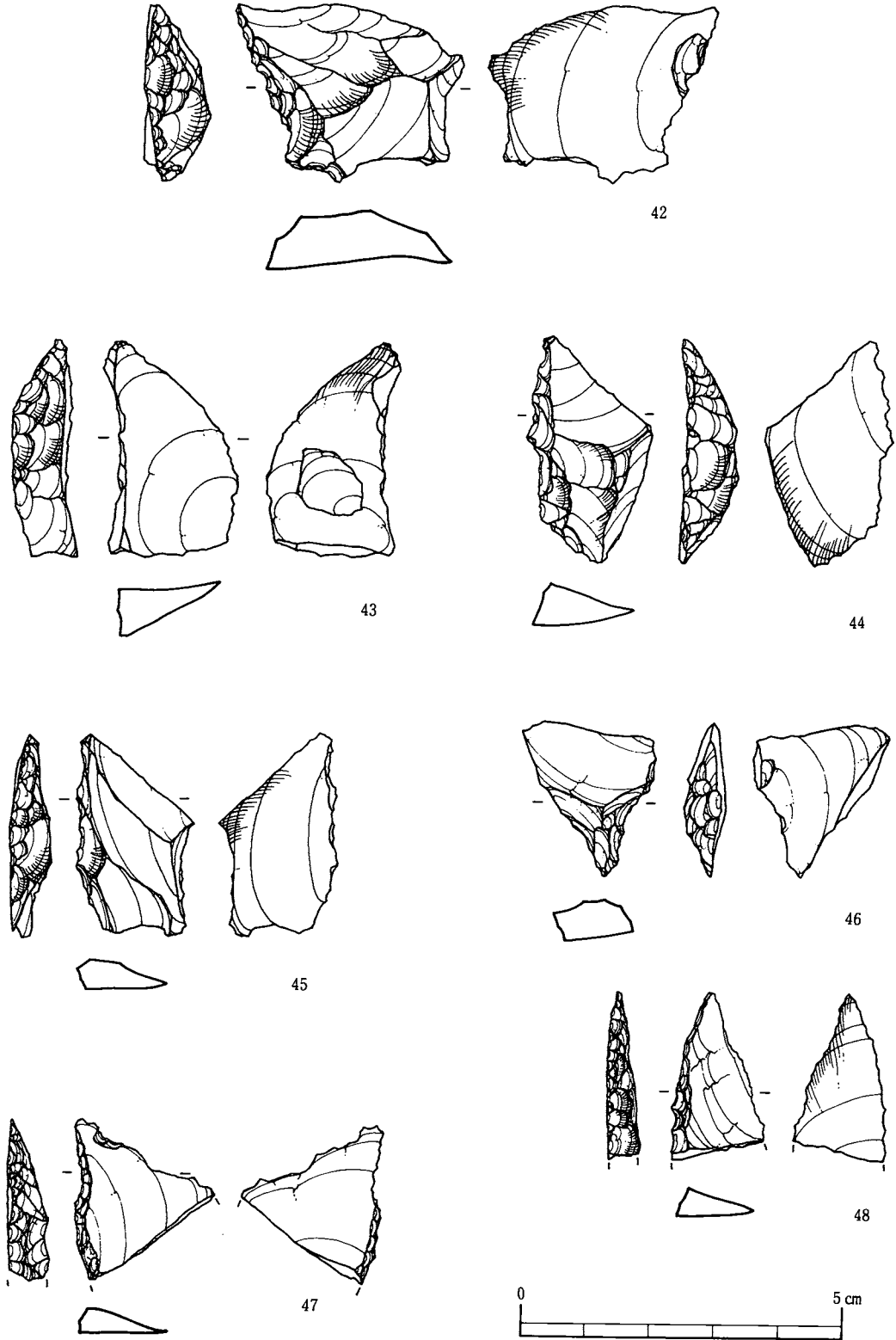


第81図 石器実測図



第82図 石器実測図

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物



第83図 石器実測図

第III章 調査の成果

第14表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
1	ナイフ形石器	安山岩	4.2	1.6	0.9	4.45	IXC PL 36
2	〃	珪岩	3.8	1.62	0.9	3.55	VIB-13カクラン
3	〃	珪岩	3.25	1.7	0.8	2.9	VIC PL 9
4	〃	珪岩	(3.18)	1.7	0.9	(3.42)	VIC-4カクラン
5	〃	珪岩	3.49	1.6	1.0	3.6	VIB-19カクラン
6	〃	珪岩	(3.23)	(2.03)	0.68	(2.25)	VIC-5-2・6G
7	〃	珪岩	3.4	1.75	1.05	3.12	VIC-4表採
8	〃	珪岩	3.5	1.8	0.6	2.45	VIB PL 5
9	〃	珪岩	2.88	1.6	7.5	2.5	表採
10	〃	珪岩	3.5	1.9	0.9	3.35	VIB PL 20
11	〃	珪岩	2.68	1.3	0.8	1.7	VIC PL 30
12	〃	珪岩	2.8	1.5	1.0	2.6	VIC PL 16
13	〃	珪岩	3.1	(1.6)	0.78	(2.7)	VIC PL 30
14	〃	珪岩	(3.5)	1.7	0.7	(3.25)	VIC PL 107
15	〃	珪岩	4.3	1.8	1.05	6.2	VIC PL 72
16	〃	珪岩	(3.8)	(1.3)	0.75	(2.7)	VIB PL 16
17	〃	珪岩	(3.55)	1.3	0.8	(3.55)	VIB-18カクラン
18	〃	珪岩	(3.21)	1.67	0.9	(3.5)	VIC-5-12・6G
19	〃	珪岩	2.8	2.1	0.7	2.65	VIB-24カクラン
20	〃	珪岩	(2.5)	1.25	0.7	(1.8)	VIC PL 8
21	〃	珪岩	2.9	1.9	1.05	3.52	IXC PL 39
22	〃	珪岩	(3.19)	2.1	0.8	(3.7)	VIB PL 25
23	〃	珪岩	3.52	1.65	0.7	3.05	IXC PL 42
24	〃	珪岩	3.7	1.9	0.87	4.2	VIC PL 22
25	〃	珪岩	2.65	2.2	0.7	3.65	IXC PL 14
26	〃	珪岩	2.7	1.7	0.78	2.8	IXC PL 99
27	〃	珪岩	3.0	2.85	1.2	5.75	VIC PL 186
28	〃	珪岩	(2.3)	2.1	0.72	(3.85)	VIC JL 109
29	〃	珪岩	4.6	2.4	0.92	9.4	VIC PL 60
30	〃	黒曜石	1.48	0.92	0.22	(0.2)	IVD JL 2020
31	〃	黒曜石	1.2	0.9	0.41	0.4	VC-13カクラン
32	〃	珪岩	(3.6)	(3.15)	(1.2)	(12.36)	VIB JL 2
33	〃	安山岩	9.45	2.7	1.3	41.2	IXC PL 95
34	〃	安山岩	(7.6)	3.8	1.5	(50.85)	表採
35	〃	珪岩	3.9	3.3	1.12	12.8	VIB PL 1
36	〃	珪岩	(2.71)	1.9	0.7	(3.5)	VIC PL 64
37	〃	珪岩	(3.01)	1.4	1.0	(3.8)	IXC-16
38	〃	珪岩	(2.21)	(1.9)	(1.4)	(4.45)	IXC PL 71
39	〃	珪岩	3.1	2.05	0.77	3.6	VIC PL 38
40	〃	珪岩	4.2	2.2	1.15	8.77	表採
41	〃	珪岩	2.9	2.16	0.95	4.15	VIC PL 98
42	〃	珪岩	2.76	3.58	1.01	7.7	IXC PL 86
43	〃	珪岩	3.31	2.1	1.01	5.5	VIC PL 41
44	〃	珪岩	3.4	1.9	0.9	4.77	VIC-24

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
45	ナイフ形石器	珩岩	3.11	1.84	0.65	3.35	VIB PL 14
46	〃	珩岩	2.37	2.1	0.7	2.0	IXC PL 66
47	〃	珩岩	(2.45)	(2.2)	(0.6)	(2.1)	IXD PL 3
48	〃	珩岩	(2.55)	(1.4)	(0.5)	(1.35)	VIB PL 23

剥片本体の中での剥片の打面の位置では、側縁上部右位4点(左刃)、同左位3点(左刃)、側縁中部右位5点(左刃)、同左位3点(右刃)、側縁下部右位6点(右刃4点、左刃2点)、同4点(右刃1点、左刃3点)という内訳である。こうした位置関係を整理すれば、剥片と石器の主軸どうしが直行しているナイフ形石器が6点で、傾斜しているものが19点という関係にまとめることができる。また、上記した打面の位置からその剥片利用の状況をみると、剥片の先端部やその周辺が、刃部に利用されているもの12点、その側縁が刃部に利用されているもの13点と、ほぼ同数である。このように、剥片の縁辺と石器の刃部との関係に、法則的なものを指摘することはできないようである。なお、この関係を未加工品の中でみると、前者のナイフ形石器に該当するもの4点(39~41・43)、後者に該当するもの3点(42・44・45)である。

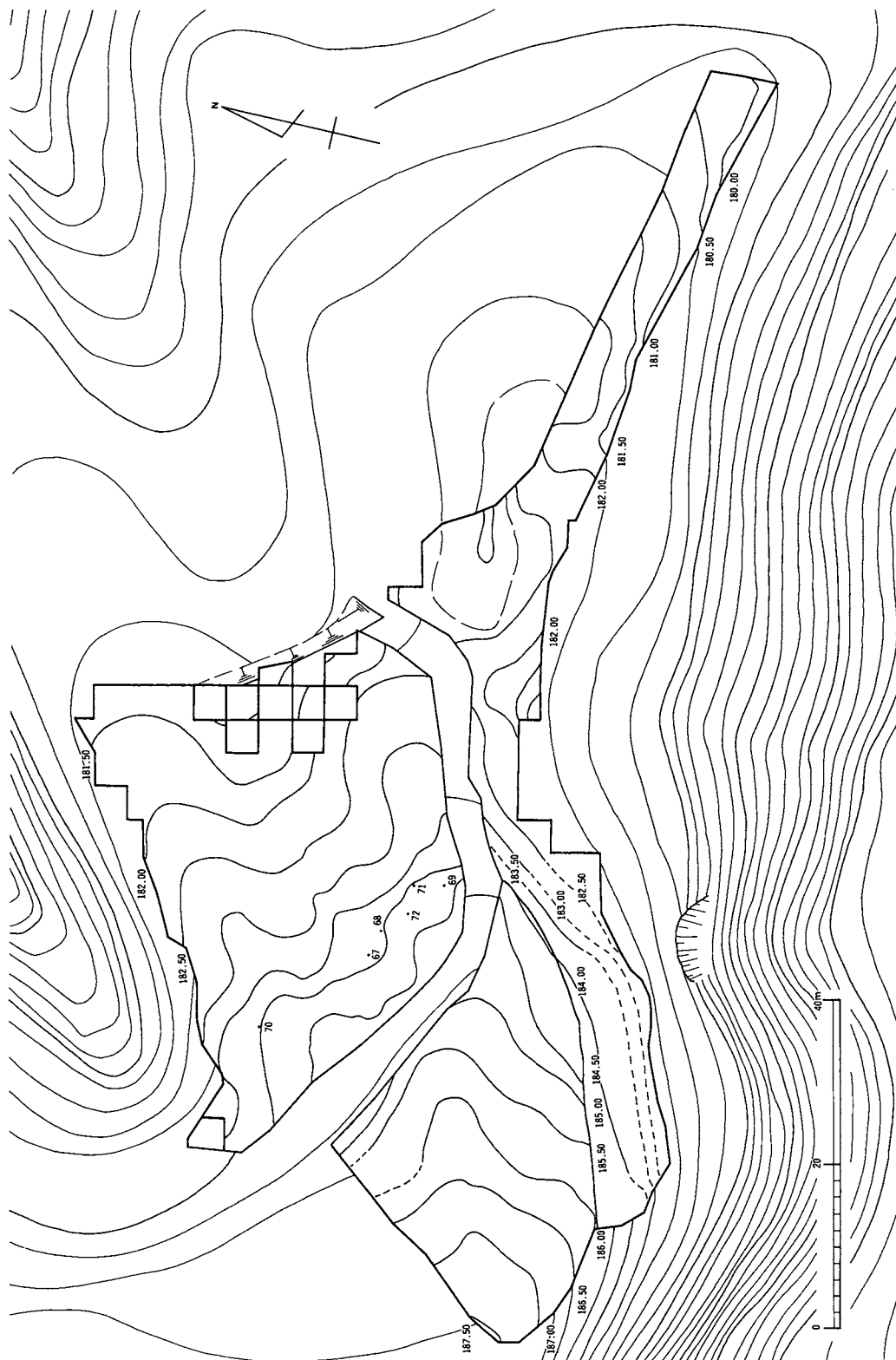
調整加工では、刃潰し加工のあり方に特徴がある。刃潰し加工は、両側縁とも、石器の裏面方向からのものが一般的である。しかし、例外的に、異なる方向のものが石器の両側縁にみられる場合がある(22・24)。また、対向する刃潰し加工が観察されるものが、7例みとめられる。しかし、それが、片側縁の全部にみられるものは1例(16)のみで、そのほとんどは石器先端部に限られている(3・5・10・11・12・15)。このほか、僅かではあるが、表面や裏面に平坦剝離がみられるものもある(2・22・24)。

三稜尖頭器(第85図49~54)

三稜尖頭器は、5点出土した。その石器組成に占める割合は、5%である。石質別では、珩岩製のもの3点と黒曜石製のもの2点であった。

分布については、資料数が少なく、その傾向を捉えることは難しい。しかし、その状況をみれば、遺跡の西端で出土しているもの(第1ブロック・第2ブロック)と、丘陵の中央にある谷部周辺で出土しているもの(第6aブロック・第6bブロック)とははっきりと偏在していることがわかる。

次に、三稜尖頭器そのものについて、みてみることにしたい。5点の石器は、大きく二つに分類されるようである。そこで、以下、それぞれの類、ないし石器ごとに説明を加えよう。



第84図 遺物分布図 (三稜尖頭器)

第1類 (49)

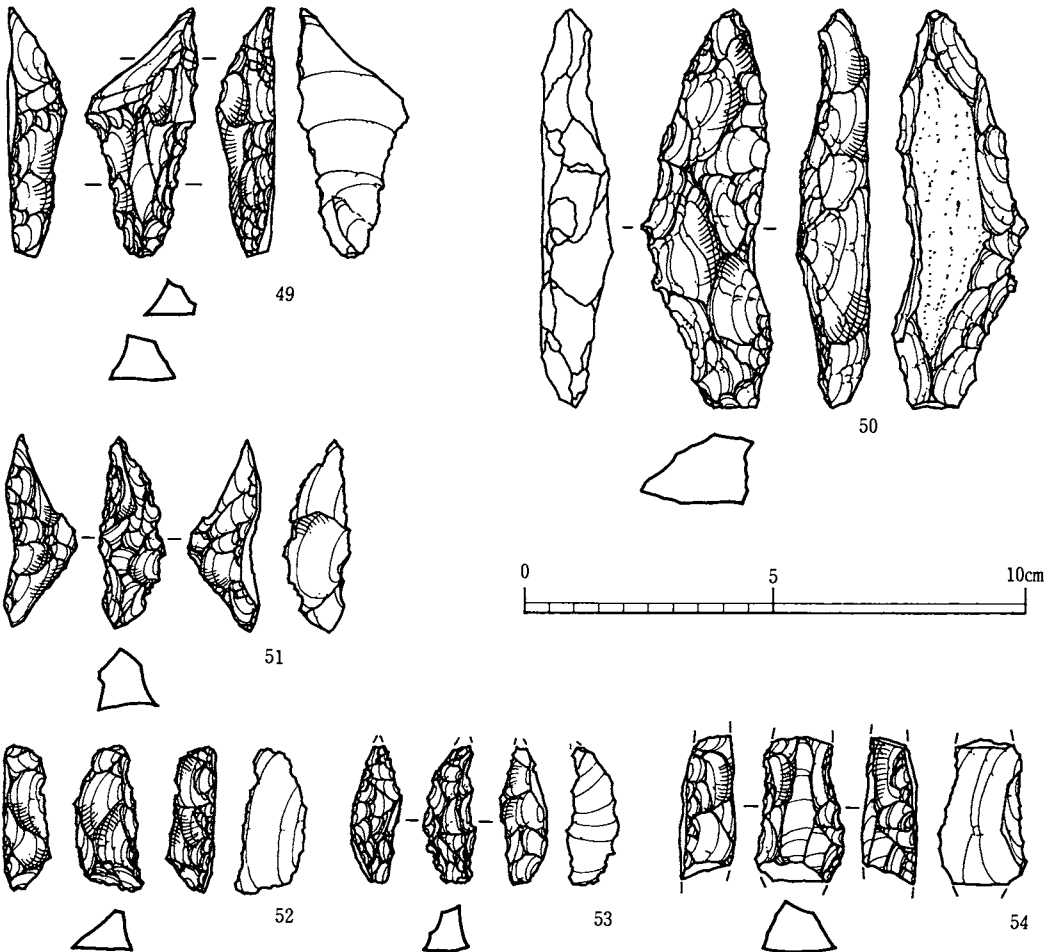
1類の三稜尖頭器は、49の資料1点のみである。この石器は、時に、「関型石器」やナイフ形石器と呼称され、三稜尖頭器や角錐状石器とは、区別されて扱われることもある。

この資料は、珪岩製で、素材となる剝片の打面を下位に置き、その裏面から調整を加えて形を整えているもので、石器先端部では、稜上からの調整も観察される。中でも、左側縁にみられる稜上からの調整は特徴的で、一撃の下に石器本体を斜めに断ち割っている。

第2類 (50~54)

2類として分類したものは、通常の三稜尖頭器である。

50は、調査以前に表面採集されていたもので、黒色の硬質頁岩製である。石器の素材には、



第85図 石器実測図

第15表 石器計測表

No.	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
49	三稜尖頭器	珪岩	4.97	2.2	1.15	9.2	IXD PL 5
50	〃	頁岩	7.9	2.6	1.5		表採
51	〃	珪岩	3.82	1.35	1.45	4.35	VIB PL 10
52	〃	黒曜石	2.92	1.4	0.98	3.15	VIC PL 172
53	〃	黒曜石	(2.77)	1.1	1.0	(2.2)	VIB JL 117
54	〃	珪岩	(2.9)	1.75	1.1	(6.8)	IXC PL 73

その側面の状況から、表面に自然面を持った横長剥片が利用され、石器は、その主要剥離面を表面に置いて製作されていることがわかる。その調整の状態は、両側縁とも同様で、まず石器の表面から調整を加え、さらに、その面を打面として主要剥離面に調整するという形をとっている。

51～54は、調査によって検出されたものである。以下、石器ごとに説明を加えていきたい。

51は、珪岩製の横長剥片を素材として、その主要剥離面から調整を加えて、製作されているもので、断面形は、台形を呈している。剥片の打面は、石器本体において左位に置かれている。52は、黒曜石製の剥片を素材としたもので、右側縁には、裏面から、また、左側縁には、表裏両面からの調整加工が観察される。断面形は、三角形を呈している。剥片の打面は、左位に置かれている。53は、黒曜石の剥片を素材とし、その打面を側縁上部右位に置いて製作されているもので、その調整加工のあり方は、52と同様である。断面形は、台形である。54は、先端部と基部を欠損しているものである。素材は、珪岩製の剥片で、その打面を左位に置き、剥片の主要剥離面から調整加工を加えて製作している。断面形は、台形をとっている。

搔器 (第87図55～59)

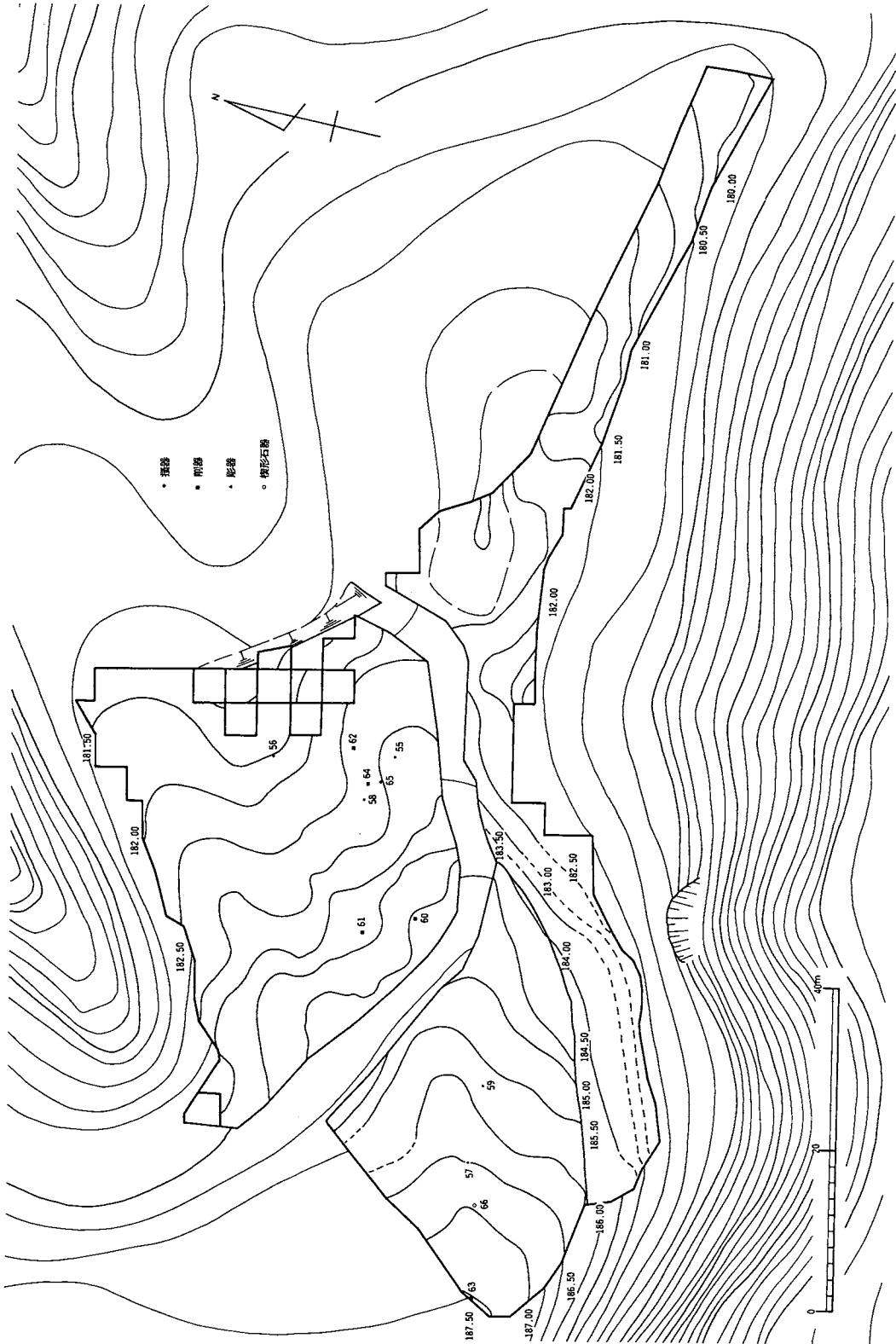
搔器は、5点出土した。その石器組成に占める割合は、5%である。石材は、すべて珪岩である。これらの石器は、丘陵の西側にある2点(第2ブロック・第3ブロック)と、丘陵の中央にある谷部周辺の3点(第6aブロック)とに偏在して分布している(第84図)。

そこで、以下、石器ごとに説明を加えていこう。

55は、縦長剥片の先端部に調整加工を施し、刃部を作り出している石器で、丘陵の中央部で、二つに分かれた尾根の内の、南側の尾根頂部で検出された。刃部の作出は、先端部のみに調整加工を加えて、その刃部端を結ぶ線と石器の主軸とが、直行するようにおこなわれている。剥片の打面は、単剥離面である。

56は、寸詰りの縦長剥片の打面側に、調整加工を加えて刃部を作り出しているものである。出土地点は、丘陵中央部の谷部にあたり、縄文時代早期の包含層である第IV層からの検出であった。刃部は、素材となる剥片を斜めに置き、その打面側に設けられた、僅かな脹らみを持つ直線刃である。石器本体における剥片の打面位置は、刃部右位にあたり、刃部端を結ぶ線と石器の主軸は直行している。

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物



第86図 遺物分布図（環器・削器・彫器・楔形石器）

57は、寸詰りの縦長剥片の打面を、石器本体の下位に置いて、作られている。出土地点は、丘陵の西側の尾根頂部である。刃部は弧状を呈し、その端部を結ぶ線と石器の主軸との関係は直行である。

58は、55の近くで検出された。資料は、刃部のみを残して、すべての部分を欠損しているために、十分な観察はできない。

59は、丘陵西側で検出された、拇指状の搔器である。寸詰りで小型の縦長剥片が素材となり、その周辺に調整加工がみられる。素材となる剥片の打面は、石器本体において、上位に置かれている。したがって、剥片と石器の主軸は、ほぼ同一である。なお、この石器は、上記4例とは形状的にも異なっており、その特徴から考えて、狸谷II石器文化よりは新しい時期の可能性が高い。

削器（第87図60～64）

削器は、5点検出された。その石器組成に占める割合は、5%である。石器石材としては、すべて珪岩が使用されている。石器は、丘陵西側に1点（第1ブロック）、丘陵中央の谷部が始まる部分に2点（第6aブロック）、そしてその東側の尾根頂部に2点（第6bブロック）、計3地点にわかれて検出された（第86図）。

以下、石器ごとに説明していきたい。

60は、出土した削器の中でもっとも大きいもので、三つの出土地点の内、真中の部分の尾根頂部で検出された。素材となる剥片は、幅広の縦長剥片で、その主要剥離面側に刃部を作る荒い調整加工がみられる。刃部は、片刃で、両側縁に設けられているが、左側縁で比較的丁寧な調整が観察される。剥片の打面は、複剥離面である。

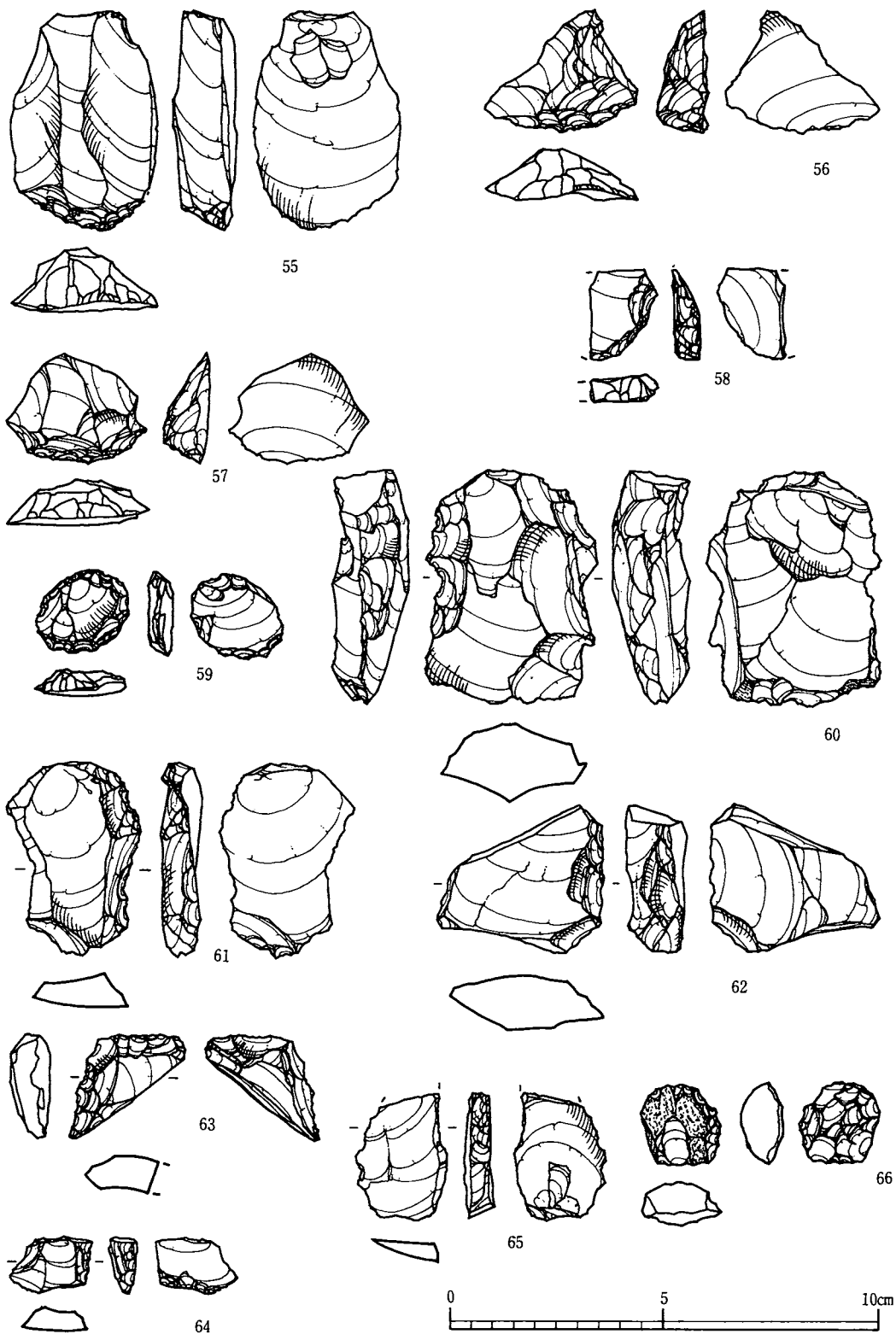
61は、60のやや北側で検出された資料である。素材となる剥片は、幅広の縦長剥片で、その表面に刃部がみられる。刃部は、石器の右側縁にあり、片刃である。剥片の打面は、複剥離面である。

62は、東側の尾根頂部で出土したもので、横広の剥片が素材となっている。刃部は、比較的丁寧な調整加工によって作られていて、剥片の主要剥離面側の一つの縁辺にみられる。片刃である。

63は、丘陵の西端で出土した削器の欠損品である。調整加工は極めて入念で、剥片全体の形状を大きく変える程である。したがって、素材となる剥片の形状や打面の状態については、判らない。刃部を作る調整加工は、欠損部を除けば、すべての縁辺部でみられ、いずれも両刃となっている。

64は、小型の削器で、62の西側に出土地点がみられる。素材となる剥片は、幅広の剥片で、その右側縁と先端部という、二つの縁辺に刃部が作られている。刃部は、いずれも片刃をなしているが、その調整加工が観察される面は両者とも異なり、右側縁では表面、先端部では裏面

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物



第87図 石器実測図

第16表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
55	搔器	珪岩	5.12	3.4	1.5	27.2	VIC PL 67
56	〃	珪岩	2.84	3.6	1.2	7.02	VIB JL 88
57	〃	珪岩	2.6	3.3	1.04	7.12	IXC JL 4
58	〃	珪岩	2.15	(1.6)	(0.64)	(2.0)	VIC PL 39
59	〃	珪岩	1.93	2.15	0.6	2.65	VIC PL 44
60	削器	珪岩	5.5	4.04	1.8	40.9	VIC PL 44
61	〃	珪岩	4.5	3.18	1.0	12.45	VIC PL 169
62	〃	珪岩	(3.45)	(3.9)	(1.42)	(19.9)	VIB PL 24
63	〃	珪岩	(2.42)	(2.7)	(0.94)	(4.3)	IXC PL 56
64	〃	珪岩	(1.33)	1.92	0.75	(1.75)	VIC PL 33
65	彫器	珪岩	(3.0)	2.15	0.75	(3.5)	VIC PL 58
66	楔形石器	黒曜石	1.86	1.85	1.0	3.05	IXC PL 28

にみられる。

彫器 (第87図65)

この資料は、彫刀面を欠損しているが、その加工の状態とその部位から、彫器と判断した。この石器は、第6 bブロックという、遺物分布の中では、もっとも東側に位置する部分で検出された。素材となる剥片は、珪岩製の縦長剥片である。彫器原形は、打面を下位に置き、左側縁に裏面側から、刃潰し加工状の調整を施して作られている。おそらく、この調整面を打面にし、右側縁に向けて、彫刀面の作出がおこなわれたものと思われる。

楔形石器 (第87図66)

66は、丘陵の西側で検出された黒曜石製の石器で、石器の縁辺に微細な剝離痕が観察される。この資料は、第V層から出土しているが、おそらく狸谷II石器文化よりは新しい時期の石器であろう。

磨石・敲石 (第89図67～72)

磨石・敲石は、丘陵の中央部で5点、その北側で1点、計6点が検出された(第88図)。これらの石器は、すべて第6 aブロックに、属するもので、石材は、砂岩が使用されている。石器組成に占める割合は、5%である。

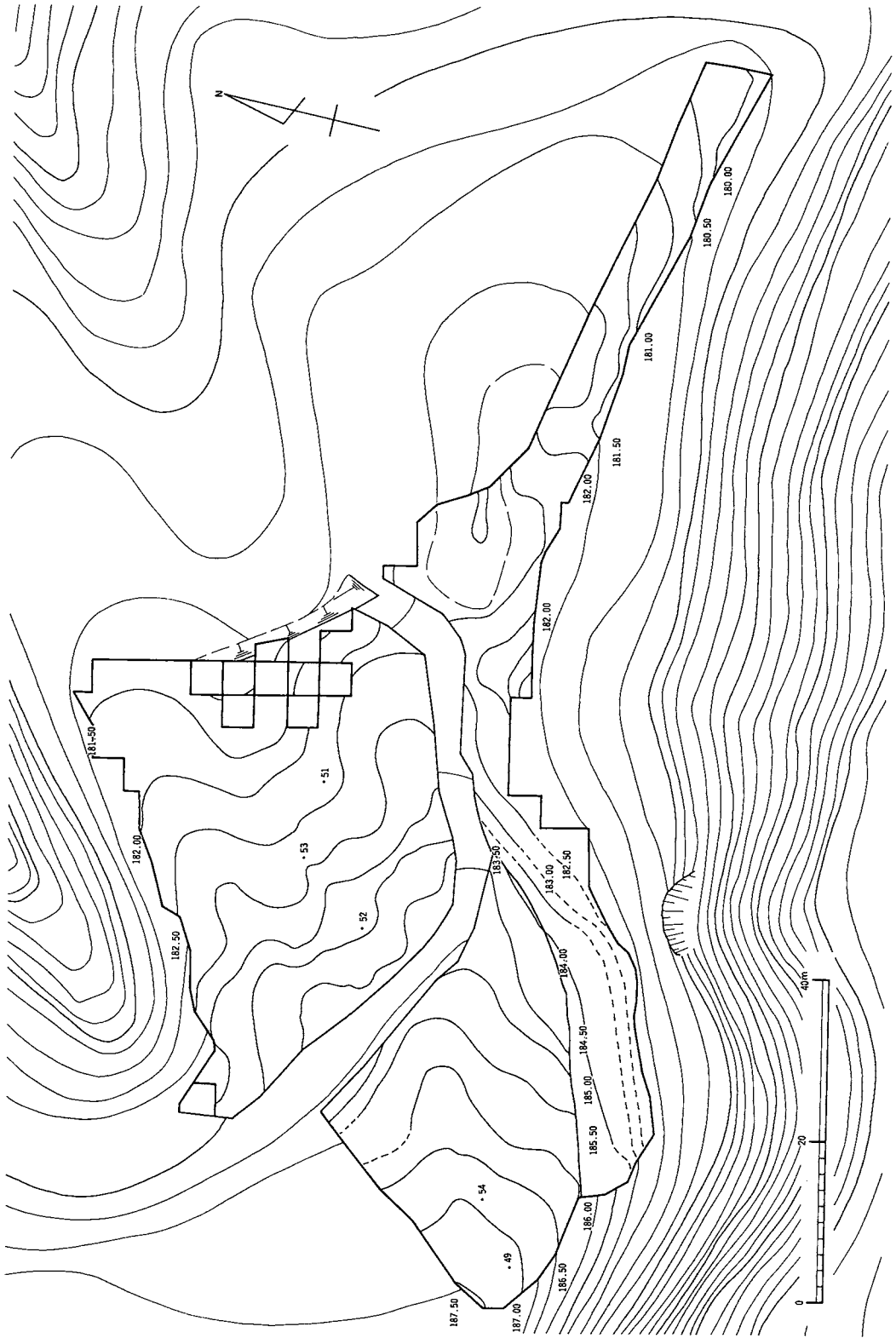
以下、石器ごとに説明していこう。

67は、丘陵中央部で検出されたものの一つで、形状は楕円形を呈している。重量は、1289gと、磨石・敲石の中では一番大型のものである。この資料では、敲打痕は観察されず、全体に浅い磨れの状況があるのみである。

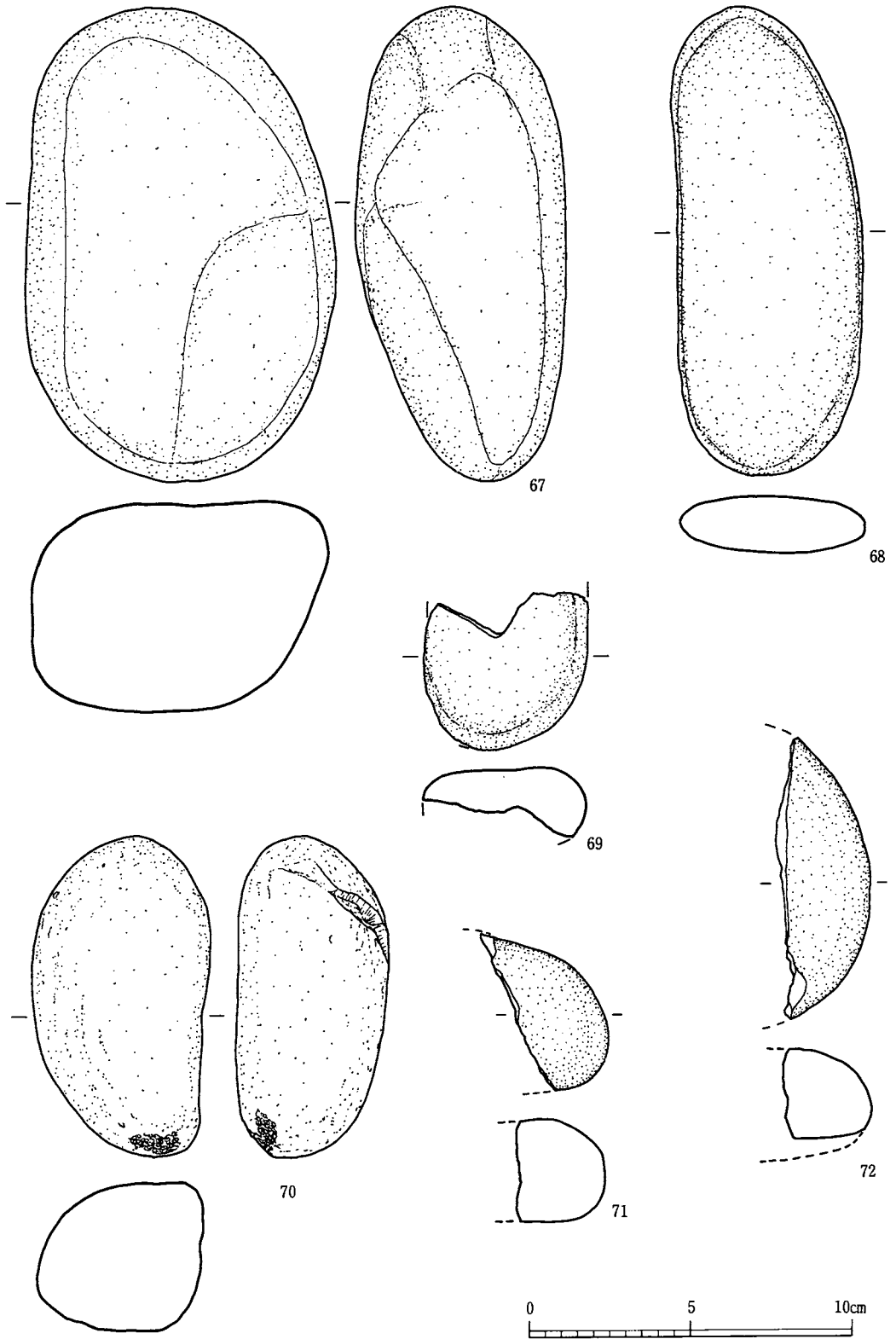
68は、67の西側に出土地点があり、その形状は、偏平な長楕円形を呈している。この石器にも、敲打痕は観察されず、磨痕のみみられるだけである。

69は、磨石・敲石の欠損品で、出土地点は、丘陵の中央部である。石器の痕跡は、欠損品で

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物



第88図 遺物分布図(磨石・敲石)



第89図 石器実測図

第17表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
67	磨石・敲石	砂岩	14.62	9.6	6.5	1289	VIIIC PL 174
68	〃	砂岩	14.47	5.94	1.8	245	VIIIC PL 146
69	〃	砂岩	(4.86)	(5.15)	(2.2)	(50)	VIIIC PL 102
70	〃	砂岩	9.9	5.55	4.8	337	VIIIB PL 9
71	〃	砂岩	(4.84)	(4.0)	(3.2)	(55.33)	VIIIC PL 42
72	〃	砂岩	(8.7)	(2.9)	(2.75)	(82.15)	VIIIC PL 19

全体像がわかりにくく、しかも、火を受けているために不明な点が多いが、磨痕が観察される。

70は、丘陵の北側で出土したもので、全体に卵形を呈している。石器の痕跡では、磨痕は観察されず、下部にみられる敲打痕のみである。

71・72は、共に、石器本体の大部分を欠損した資料である。出土地点は、いずれも、丘陵の中央部にあたっている。石器の痕跡では、残存部分が少なく、敲打痕の有無は判然とせず、表面の磨痕が観察されるだけである。

二次加工ある不定形石器（第91図73～84）

二次加工ある不定形石器は、15点（内、4点の接合が1例あり、資料実数は12点）が出土している。石器組成に占める割合は、14%である。石材としては、珪岩が12点ともっとも多く、黒曜石は、3点のみである。

石器の分布は、丘陵の尾根の頂部を中心として、帯状に広がり、しかも、均等にみられる。そこには、なんらの偏在の傾向も指摘できない。丘陵に点在する各ブロック間に、比較的均等に分布しているのであろう（第90図）。

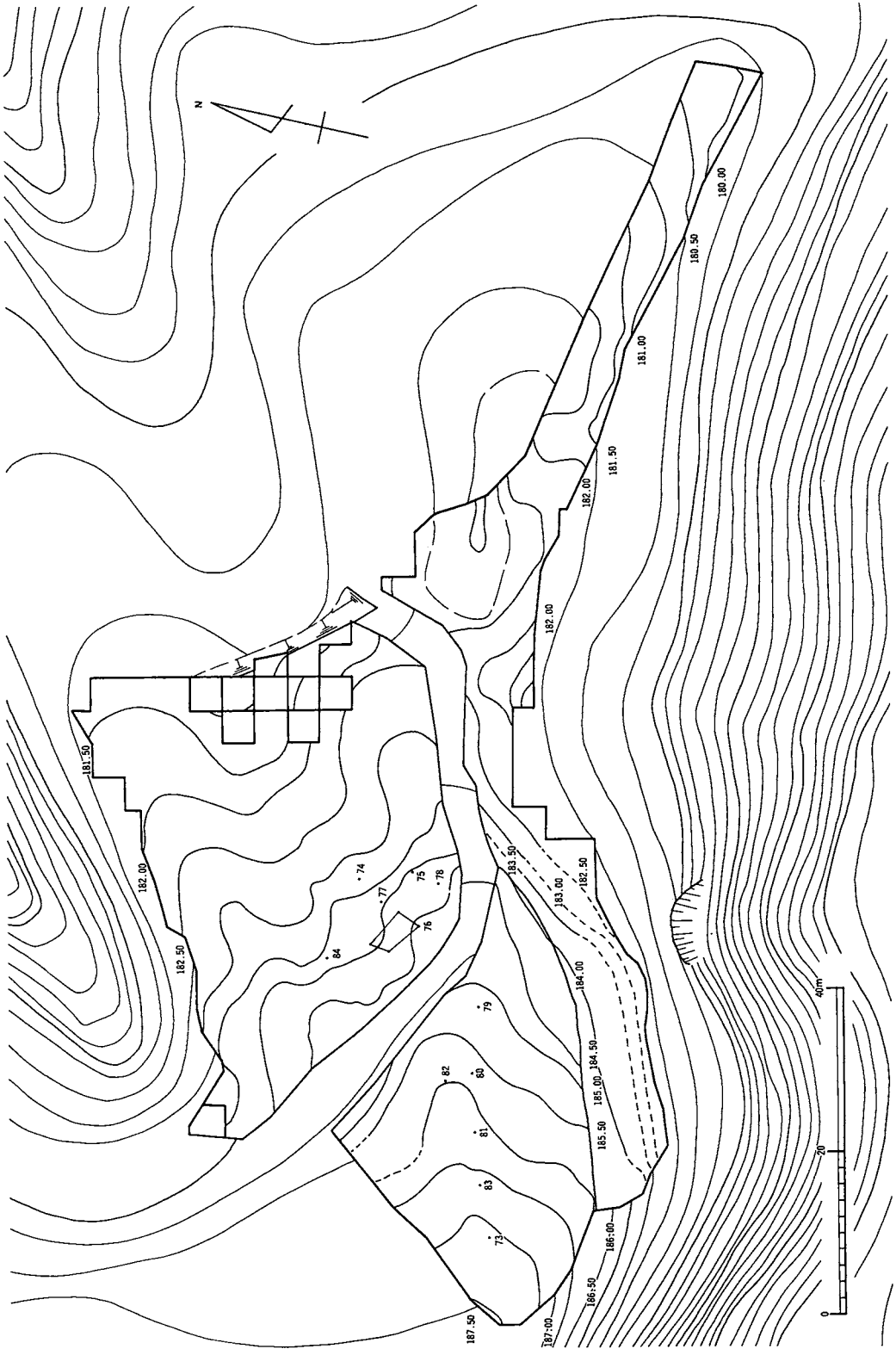
以下、石器ごとに説明していこう。

73は、小型の縦長剥片を素材としているもので、丘陵の西側で検出された。二次加工は比較的細かいものが、剥片の先端部右側にみられる。剥片の打面は、単剥離面である。石質は、珪岩である。

74は、幅広の寸詰りの縦長剥片を素材としているもので、丘陵の中央部で出土している。石器は、欠損品で、その先端部を失っている。二次加工は、右側縁の中程にあり、表面からの加圧によっている。この他、同じ部分には、使用痕と考えられる微細な剥離も観察できる。剥片の打面は、単剥離面で、その石質は、珪岩である。

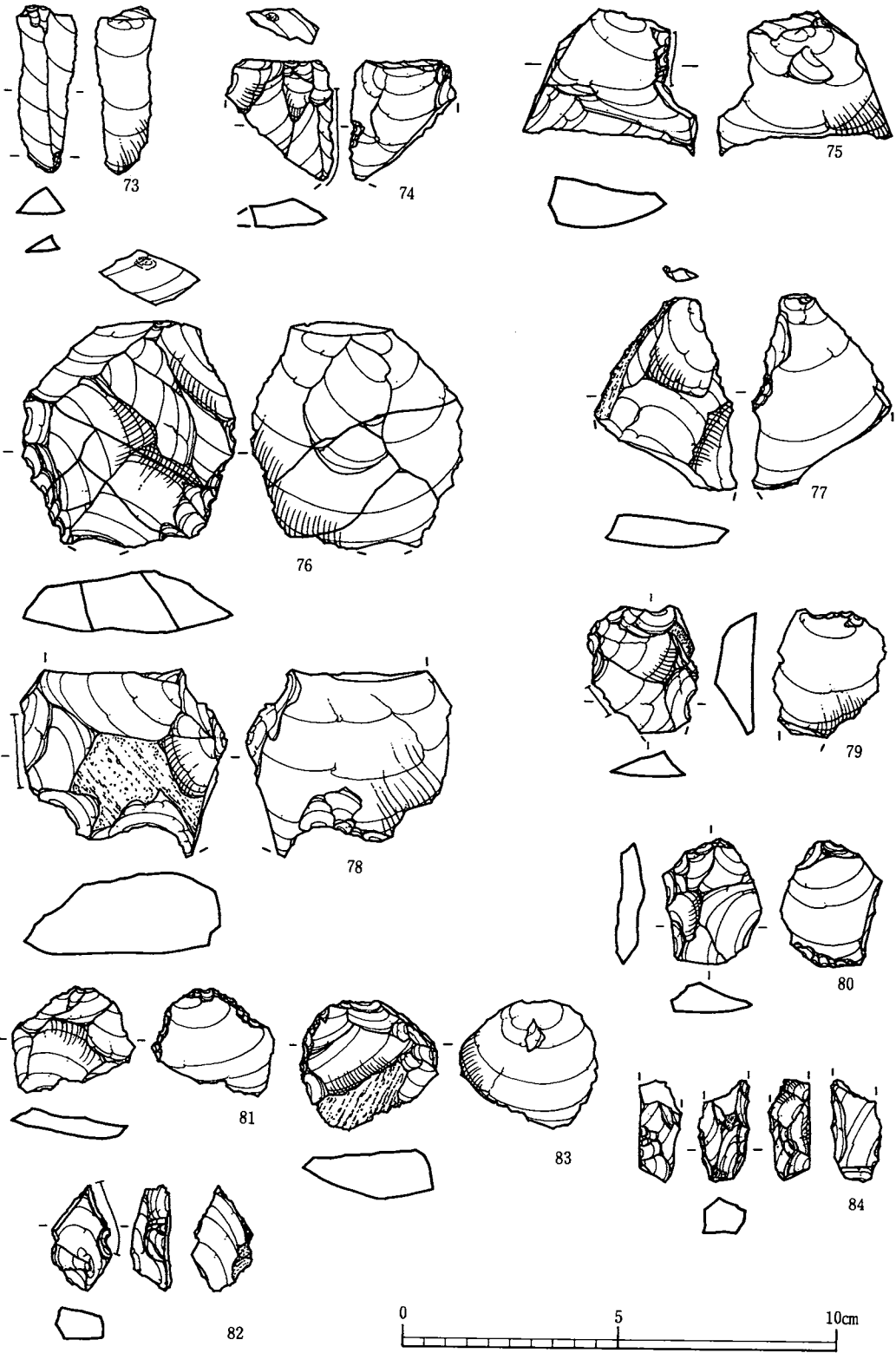
75は、珪岩製の幅広の剥片が素材で、その右側縁に二次加工が観察される。出土地点は、丘陵の中央部である。打面は、複剥離面である。

76は、珪岩製の、幅広の縦長剥片が素材となっているもので、丘陵の中央部で出土している。二次加工は左側縁にあり、その状態は、荒く不安定である。剥片の打面は、単剥離面で、その



第90図 遺物分布図（二次加工ある不定形石器・不明石器）

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物



第91図 石器実測図

第18表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
73	二次加工ある不定形石器	珩岩	3.81	1.4	0.62	3.05	IXC PL 80
74	〃	珩岩	(2.8)	(2.46)	(0.6)	(4.9)	VIC PL 8
75	〃	珩岩	3.39	4.0	1.15	10.92	VIC PL 101
76	〃	珩岩	5.18	4.9	1.4	(41.2)	VIC PL 171 VIC PL 133 VIC PL 108 VIC PL 199
77	〃	珩岩	(4.45)	(3.2)	0.75	(11.15)	VIC PL 170
78	〃	珩岩	(4.3)	(4.77)	1.9	(37.5)	VIC PL 110
79	〃	珩岩	(2.96)	2.6	0.9	(6.6)	VIC PL 34
80	〃	珩岩	2.88	2.3	0.66	4.7	VIC PL 62
81	〃	珩岩	2.45	2.8	0.45	3.85	VIC PL 26
82	〃	黒曜石	2.48	1.4	0.95	2.4	VIC PL 58
83	〃	黒曜石	2.95	3.2	1.17	8.82	IXC PL 17
84	〃	黒曜石	(2.32)	1.2	0.95	(2.32)	VIB PL 8

石質は、珩岩である。

77は、幅広の縦長剥片が素材となり、その右側縁に二次加工がみられるもので、丘陵の中央部から出土した。打面は、単剥離面である。珩岩製である。

78は、幅広の剥片を素材として、その先端部に、二次加工がみられるものである。出土地点は、丘陵の中央部にある。また、この石器には、この二次加工のほか、左側縁に微細な剥離痕も観察される。石材には、珩岩が使用されている。

79は、小型の縦長剥片を素材として、その打面部に調整加工を加えて、作られた石器で、左側縁の一部にも微細な剥離痕が観察される。出土地点は、丘陵西側の尾根頂部にあたる。石質は、珩岩である。

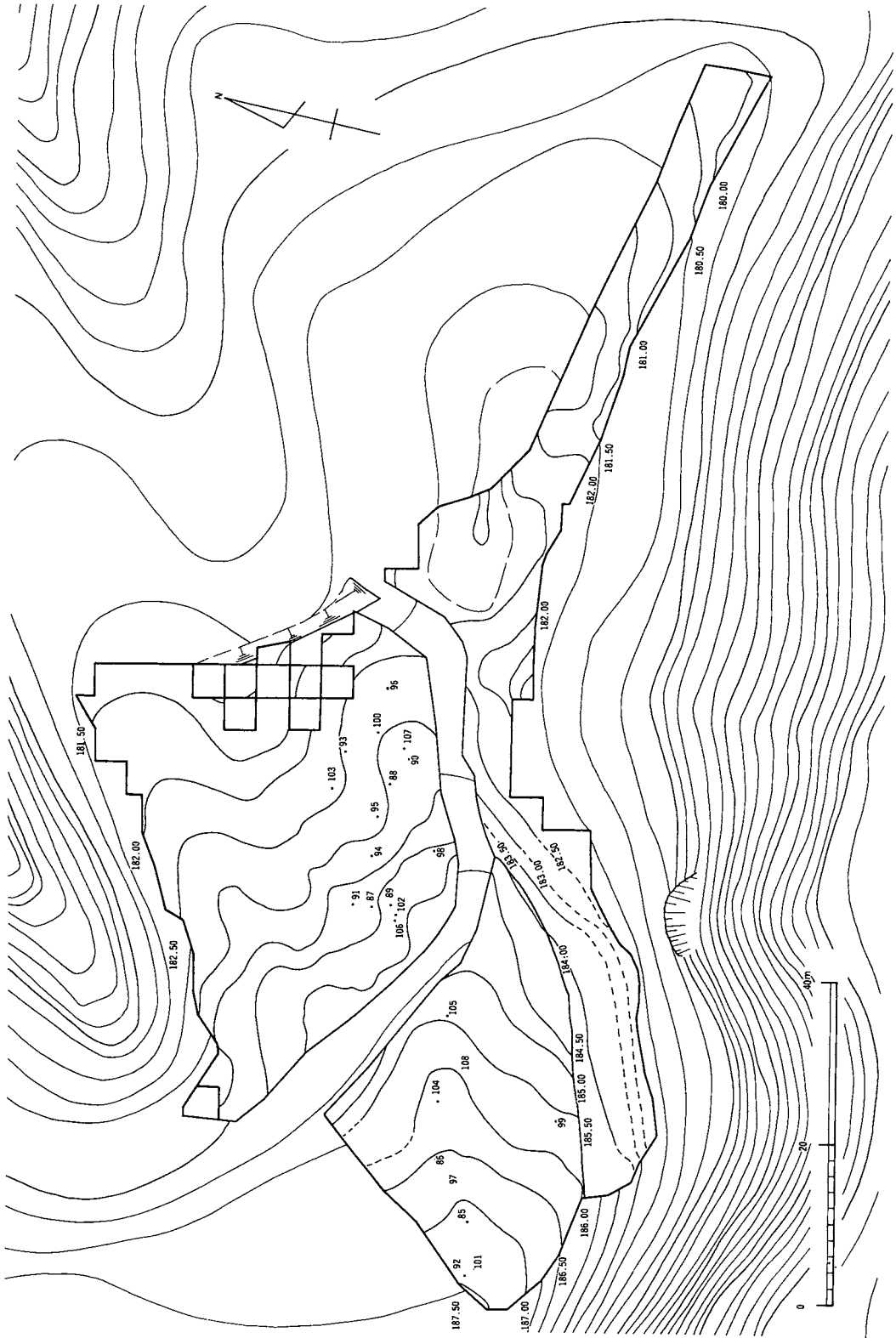
80は、丘陵西側の尾根頂部で出土しているもので、縦長剥片の打面部と先端部に調整加工がみられる。その加工は、打面側では表裏両面から、また、先端部では表面からの加圧によっている。石質は、珩岩である。

81は、丘陵西側の尾根頂部で検出された資料で、剥片の右側縁の一部と、打面から左側縁にかけての部分に、細かい調整加工が観察される。その調整加工は、いずれも、剥片の裏面側にみられる。石質は、珩岩である。

83は、丘陵西側の尾根頂部で検出されたもので、円形を呈する黒曜石製剥片の左側縁に調整加工が観察される。

82と84は、黒曜石製の石器で、出土地点は、82が丘陵中央部、84が丘陵西側の尾根頂部である。調整加工は、上記してきたものよりは明らかにしっかりした状態であり、そのあり方から

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物



第92図 遺物分布図（使用痕ある剣片）

考えて、三稜尖頭器の未加工品の可能性もある。

使用痕ある剥片（第93図85～第94図108）

使用痕ある剥片は、24点出土している。その石器組成に占める割合は、22%である。石器の石材は、すべて珪岩である。遺物の分布は、丘陵の尾根頂部を中心とした部分に帯状に広がる状況を呈し、前記した二次加工ある不定形石器の分布の傾向に、極めて良く類似している。

石器として利用されている剥片には、85のような刃器を思わせる端整な形の縦長剥片から、93や95のような幅広の剥片まで様々な形があり、形状の点で共通した傾向は指摘できず、また、数量的にもグラフ化に耐えるだけの資料数でもない。したがって、それぞれの石器ごとに、説明を加えることにしたい。

85は、打面縁辺に、入念な頭部調整が加えられている資料で、刃器と考えてもさしつかえないものである。打面は、単剥離面である。剥片の縁辺部には、明瞭な使用痕は観察されないが、その形状の点から、ここに取り上げた。

86は、やや幅が広い縦長剥片である。石器縁辺の痕跡は、剥片の自然面が残る側縁を除くすべての部分に、微細な剥離が観察される。剥片の打面は、単剥離面である。

87と88は、共に、小型の縦長剥片が利用されている。石器の痕跡としては、87では左側縁の一部、88では左側縁の全縁辺で、微細な剥離が観察される。打面は、87が複剥離面をとり、88が単剥離面である。

89は、先端部を欠損しているもので、幅の広い縦長剥片が石器として利用されている資料である。剥片の縁辺に残される微細な剥離は、左側縁の中程に観察される。打面は、単剥離面である。

90は、幅広で、先細りの縦長剥片が利用されているものである。剥片で観察される微細な剥離は右側縁にあり、その胴部上半にみられる。打面は、単剥離面である。

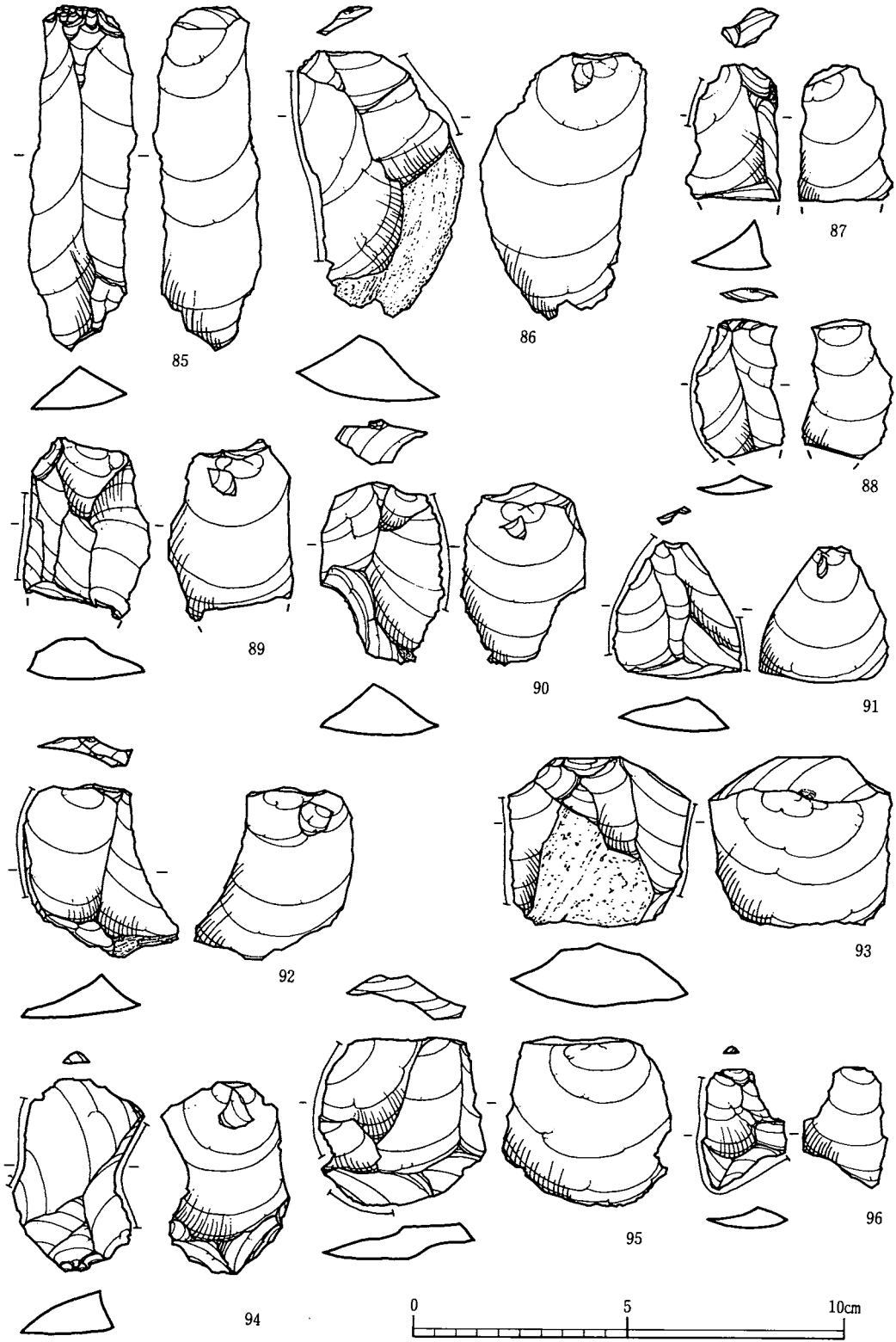
91は、先端部が広くなった、形状が三角形を呈する剥片を利用している資料である。剥片の縁辺の痕跡は、左側縁の全辺と右側縁の下半部に、微細な剥離として残されている。打面は、複剥離面である。

92と94は、右側に流れた先端部を持つ、縦長剥片が利用されている。92は、剥片の左側縁の胴部上半に、微細な剥離が観察される資料で、複剥離面が打面となっている。また、94は、剥片の両側縁に観察されている。打面は、単剥離面である。

93と95は、平面形がほぼ正方形を呈する、幅広の剥片が利用されている。93は、剥片の両側縁に微細な剥離がみられ、95では、左側縁のみにその剥離が観察される。打面は、いずれも単剥離面である。

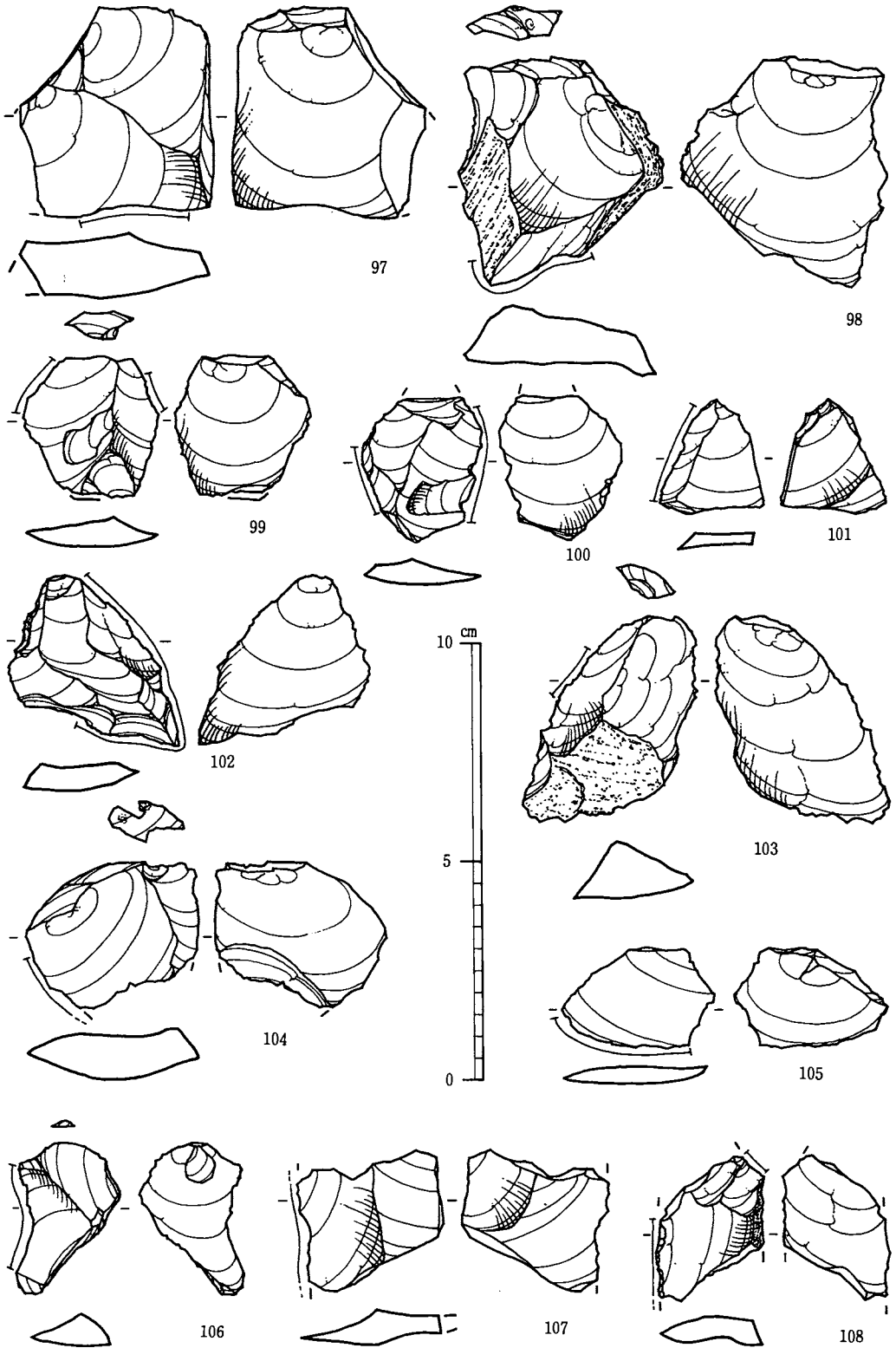
96は、この種の石器の中では、もっとも小型のものにあたり、重さ2.2gを計るだけである。剥片は、胴部が張り出した縦長剥片で、その先端部から左側縁にかけて、使用痕と考えられる

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物



第93図 石器実測図

第三章 調査の成果



第94図 石器実測図

第19表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
85	使用痕ある剥片	珪岩	7.98	2.5	1.01	20.1	IXC PL 37
86	〃	珪岩	6.17	3.9	1.6	29.6	IXC PL 113
87	〃	珪岩	(3.15)	2.19	1.1	(6.7)	VIC PL 150
88	〃	珪岩	(3.2)	2.07	0.55	(2.8)	VIC PL 22
89	〃	珪岩	(4.2)	2.9	0.95	(12.05)	VIC PL 136
90	〃	珪岩	4.23	2.9	1.2	11.6	VIC PL 70
91	〃	珪岩	3.13	2.98	0.75	7.05	VIC PL 160
92	〃	珪岩	4.0	3.63	1.3	11.5	IXC PL 47
93	〃	珪岩	3.93	4.25	1.7	27.85	VIB PL 19
94	〃	珪岩	4.46	3.0	1.5	12.65	VIC PL 90
95	〃	珪岩	3.92	3.9	1.0	15.3	VIC PL 11
96	〃	珪岩	2.77	1.94	0.55	2.2	VIC PL 93
97	〃	珪岩	4.83	(4.5)	1.55	(32.25)	IXC PL 4
98	〃	珪岩	5.27	4.7	1.8	40.4	VIC PL 104
99	〃	珪岩	3.26	3.15	0.75	6.8	VIC PL 8
100	〃	珪岩	(3.3)	2.8	0.7	(4.7)	VIC PL 66
101	〃	珪岩	2.65	2.41	0.5	2.5	IXC PL 94
102	〃	珪岩	3.9	3.95	0.95	8.9	VIC PL 142
103	〃	珪岩	4.75	4.0	1.8	26.65	VIB PL 8
104	〃	珪岩	(3.37)	4.0	1.1	(14.55)	VIC PL 12
105	〃	珪岩	2.33	3.55	0.8	4.8	VIC PL 40
106	〃	珪岩	3.5	2.42	1.0	4.65	VIC PL 132
107	〃	珪岩	(3.26)	(3.43)	(0.95)	(7.9)	VIC PL 69
108	〃	珪岩	(3.35)	(2.5)	(0.8)	(5.6)	VIC PL 64

微細な剥離が観察される。打面は、単剥離面である。

97は、93や95に近似した形状を呈する剥片を利用している資料である。微細な剥離は、この剥片の先端部で観察されている。剥片の打面は、複剥離面である。また、この剥片の剥離方向では、表面と裏面とで、45°のずれが観察される。

98では、剥片の胴部が張る、ほぼ三角形を呈する剥片が利用されている。そして、この先端部を中心として、微細な剥離が観察できる。剥片の打面は、単剥離面である。

99は、寸詰りの縦長剥片が利用されている資料である。使用痕と考えられる微細な剥離は、この剥片の打面部側の両側縁において、観察される。この剥片の打面は、単剥離面である。

100は、打面部を欠損した資料である。剥片の形状は、胴部がやや丸みを帯びる縦長剥片で、その左右の側縁で、微細な剥離が観察された。

101は、小型の石器である。利用されている剥片の形状は、打面部と右側縁を欠いているため不明であるが、微細な剥離は、左側縁で観察される。

102は、平面の形状が、三角形を呈する剥片を利用した資料で、剥片の縁辺の微細な剥離は、左側縁から先端部にかけての広い範囲で観察される。なお、一部、左側縁に、僅かな加工がみ

られるが、その状態は、二次加工とするにはあまりにも貧弱である。剥片の打面は、点状打面である。

103は、断面が三角形を呈する、厚手の縦長剥片を利用した石器である。剥片の先端部には、自然面を残している。使用痕と考えられる微細な剥離は、この剥片の左側縁の一部に観察できる。剥片の打面は、複剥離面である。

104は、横に広い剥片で、その剥片の表面には、ポジ面が残されている。縁辺の微細な剥離は、剥片の左側縁で観察される。打面は、単剥離面である。

105は、小型の横長剥片、その下縁である先端部に、微細な剥離が観察される。剥片の打面は、複剥離面である。

106は、先細りの縦長剥片が利用されているもので、その剥片の左側縁に、使用痕と考えられる微細な剥離が残されている。剥片の打面は、単剥離面である。

107と108は、剥片の打面部と先端部を欠いた資料であり、その全体の形状は、不明である。107は、比較的、幅の広い剥片で、その左側縁に微細な剥離が観察される。なお、右側縁の状態については、欠損のために、不明確である。108は、剥片の右側縁の一部と左側縁で、使用痕と考えられる微細な剥離が観察される。

石核 (第96図109～第98図182)

20点が検出されたが、出土石器総数547点に占めるその割合は、4%にすぎない。石材別の構成は、珪岩15点と黒曜石5点という内訳である。

石核は、丘陵の尾根頂部を中心として、帯状に広がった状況を取りながら、広域に分布している。ただ、その分布は、その偏在の傾向から、さらに、大きく4群にまとめることができる。すなわち、丘陵の西端にみられるもの(第1ブロック・第2ブロック)、その西側に広がるもの(第2ブロック・第3ブロック・第4ブロック)、そして、丘陵の中央部の西側のもの(第6aブロック)と東側のもの(第6bブロック)である。

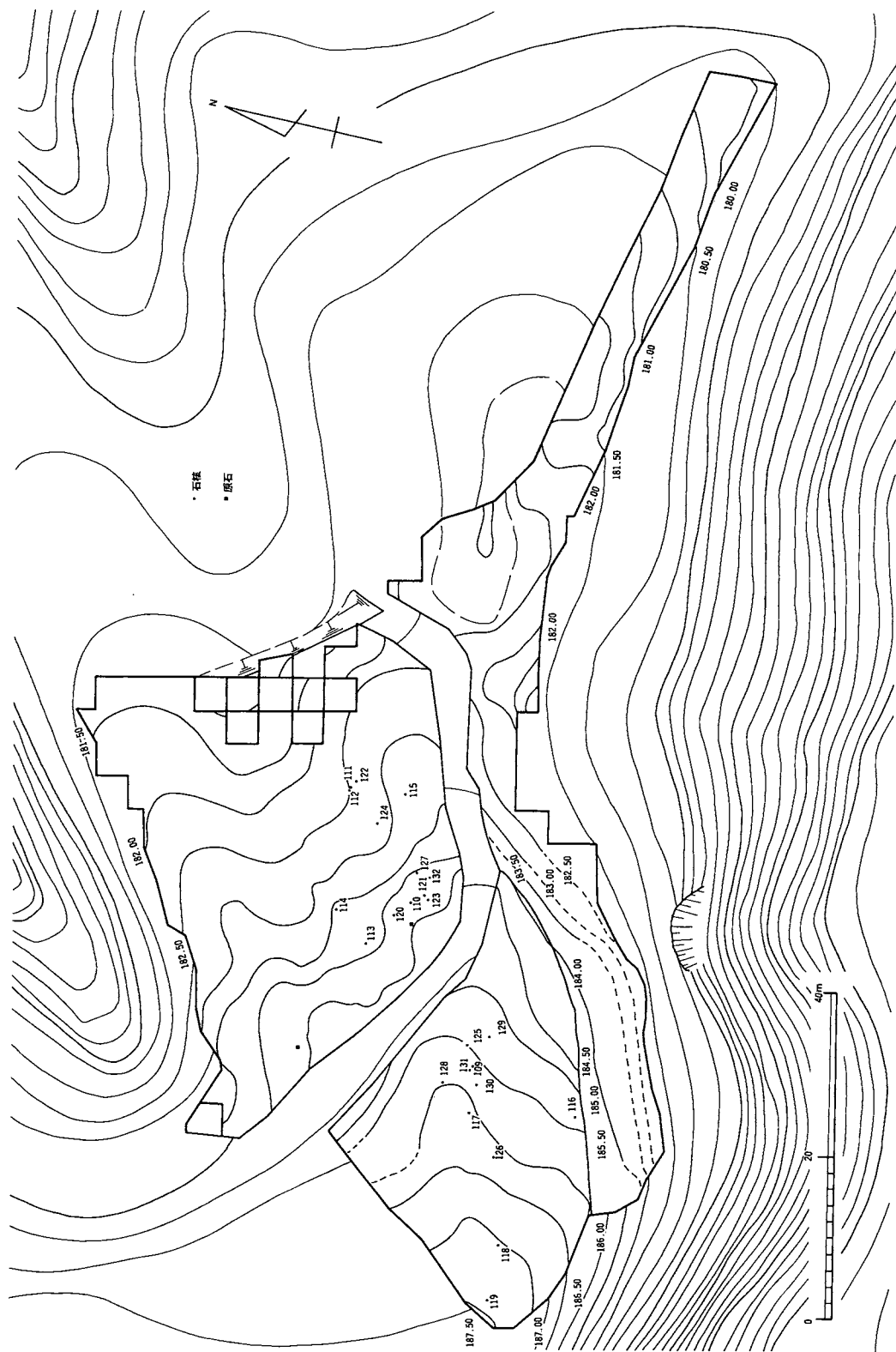
このように分布している20点の石核は、剥離面の観察からする限り、縦長剥片を剥出した、と考えられるものは少なく、ほとんどのものは、幅広の縦長剥片や横広の剥片を取ったものに該当する。そこで以下、これらの石核を、剥出された剥片の形状と、その剥片剥離の状況を基準にして、分類したい。

第1類 (110)

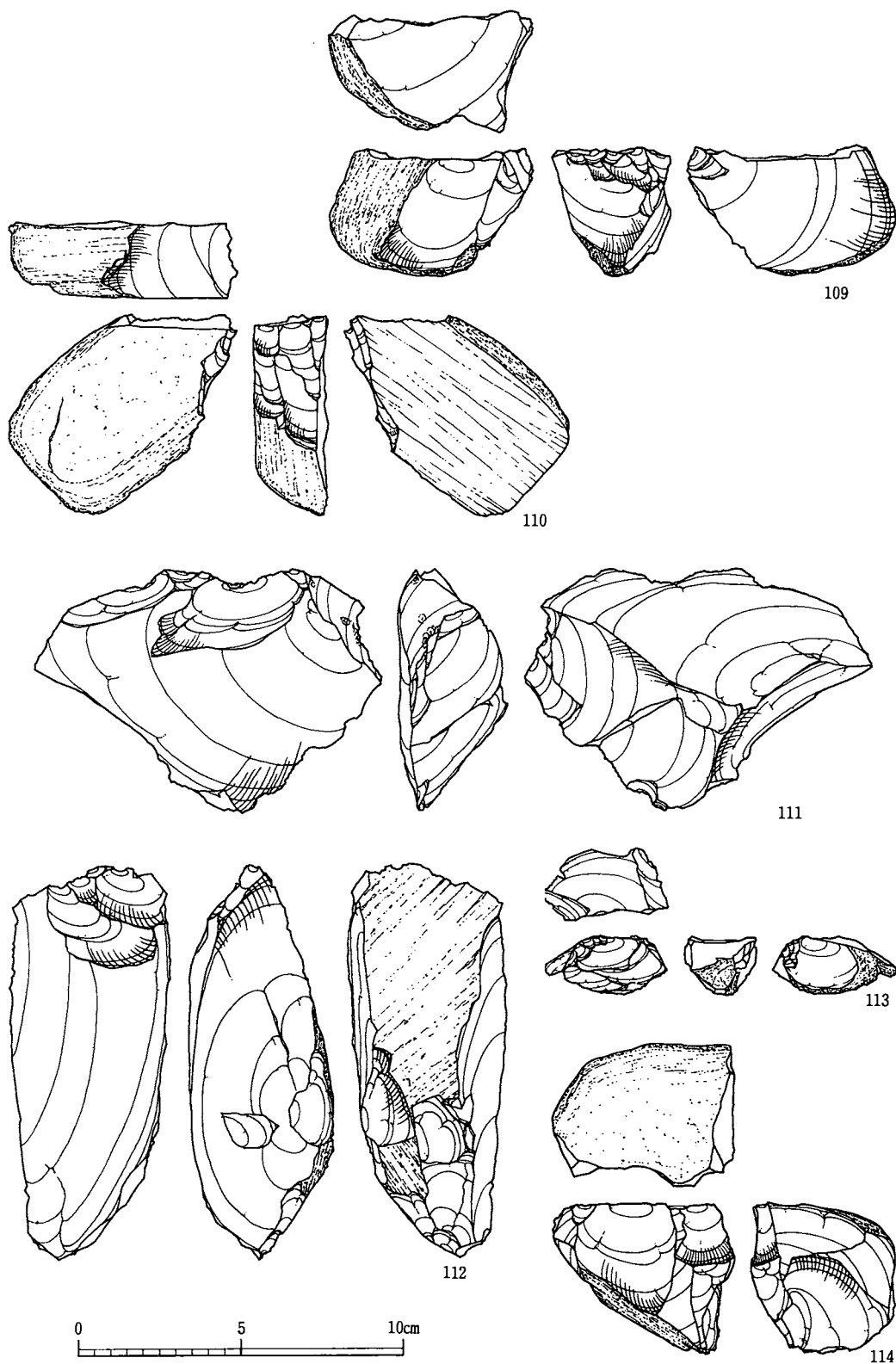
第1類は、縦長剥片を剥出した石核に該当する。なお、剥片の中には、85のような刃器に類似した縦長剥片も、1例ではあるが含まれていることから、刃器技法の存在も否定できないが、少なくとも、その技法を示す石核は、出土していない。

資料は、110の1点のみで、僅かに、右側を欠損している。この石核は、珪岩製で、直方体を呈する円礫を素材としているものである。打面は、剥片剥離作業面側からの一撃によって、

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物

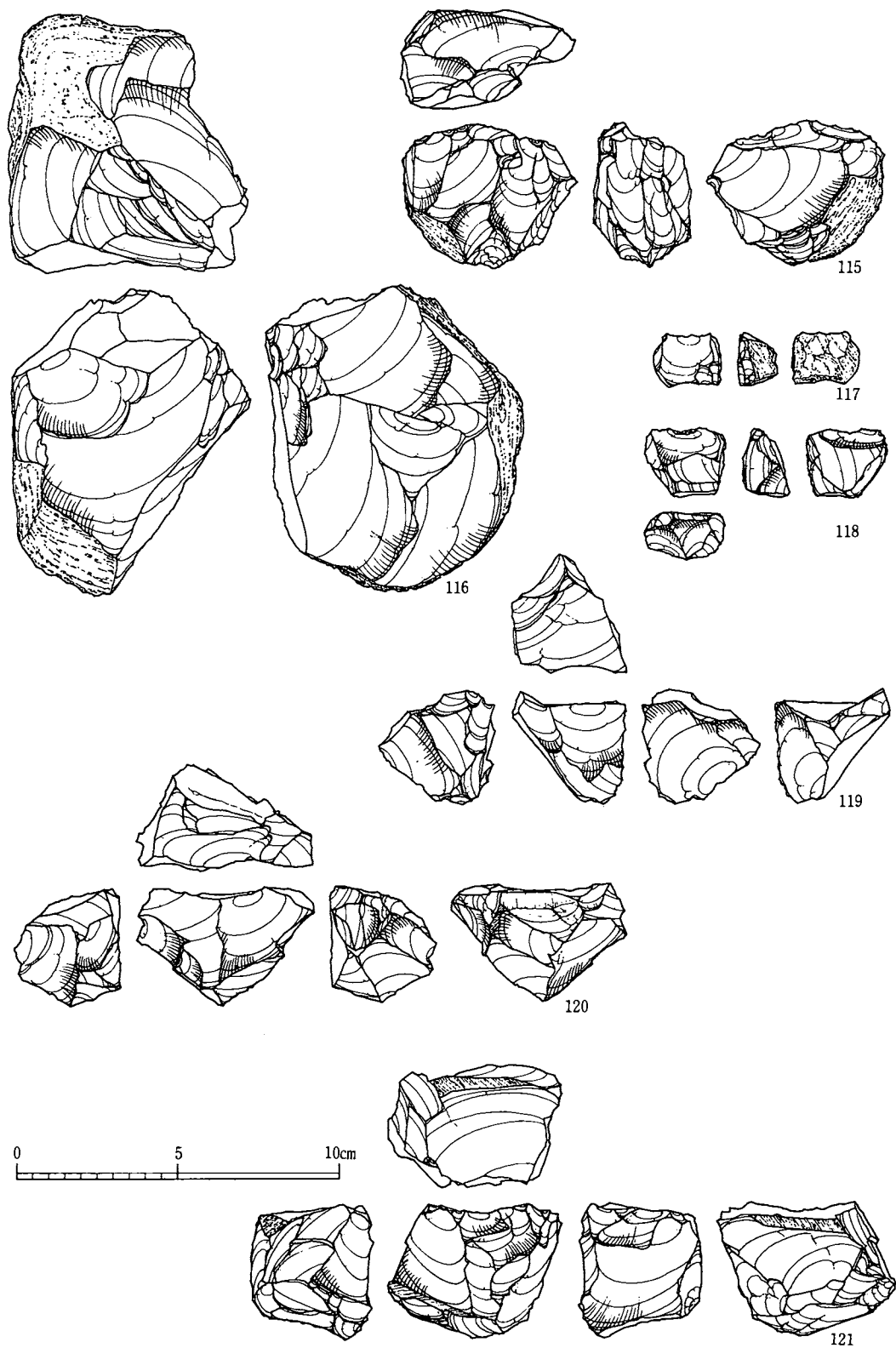


第95図 遺物分布図(石核・原石)



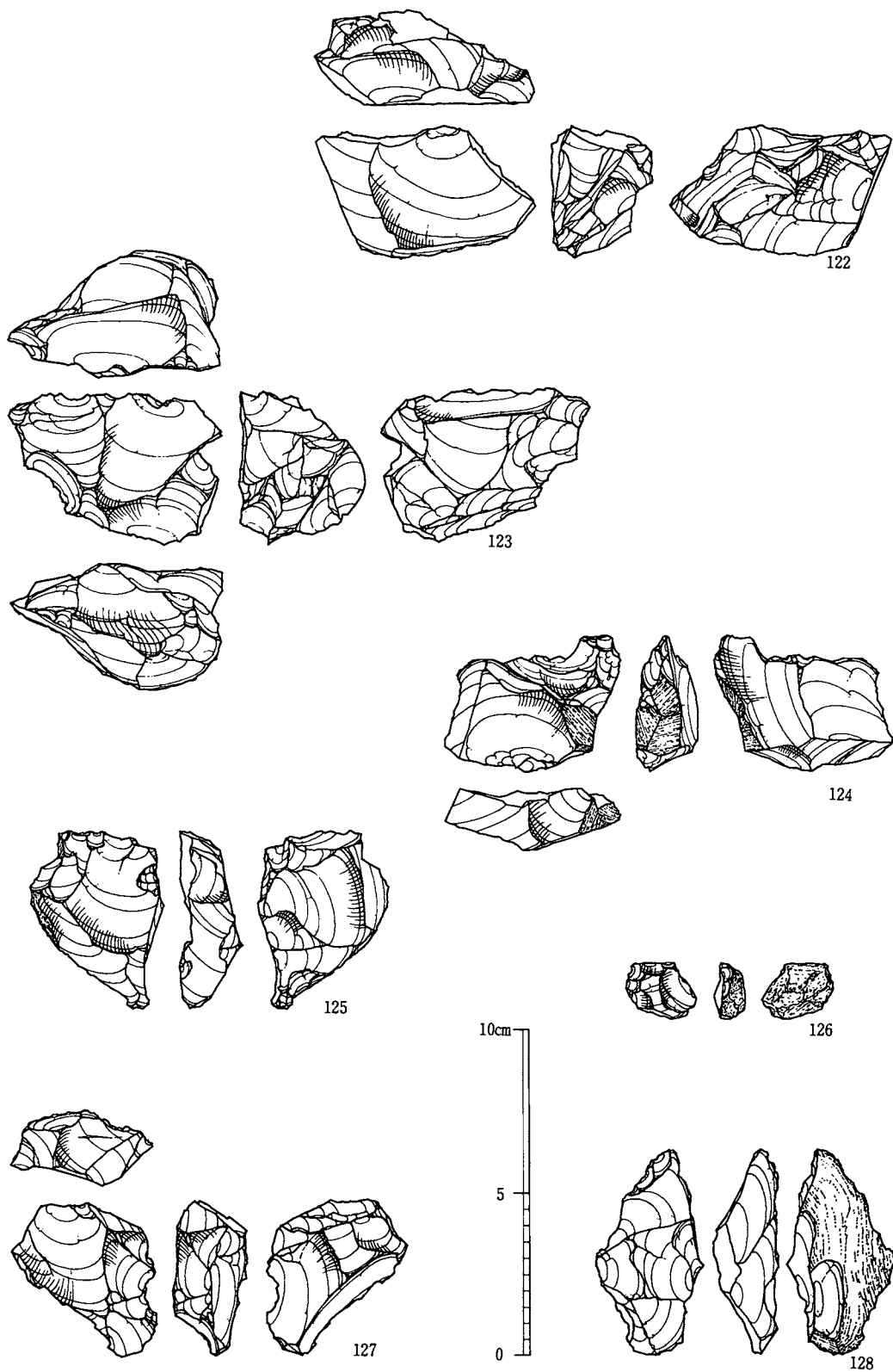
第96図 石器実測図

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物



第97図 石器実測図

第三章 調査の成果



第98図 石器実測図

第20表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
109	石	核珪岩	3.9	6.35	3.65	91.89	VIII PL 48
110	〃	珪岩	6.1	6.98	2.3	115.57	VIII PL 123
111	〃	珪岩	7.4	10.65	3.4	204.1	VIB PL 2
112	〃	珪岩	12.03	4.9	4.4	286.8	VIB PL 1
113	〃	黒曜石	1.8	3.77	2.2	11.75	VIII PL 175
114	〃	珪岩	4.68	5.6	4.4	131.55	VIII PL 5
115	〃	珪岩	4.45	5.5	3.0	72.5	VIC PL 30
116	〃	黒曜石	9.5	7.4	8.0	545	VIII PL 6
117	〃	黒曜石	1.64	2.1	1.2	4.43	VIII PL 24
118	〃	黒曜石	2.1	2.47	1.45	7.58	IXC PL 81
119	〃	珪岩	3.55	3.6	3.63	28.88	IXC PL 106
120	〃	珪岩	3.6	5.5	3.3	50	VIII PL 135
121	〃	珪岩	4.18	5.45	3.8	97.45	VIII PL 116
122	〃	珪岩	4.0	6.8	3.1	79.35	VIC PL 37
123	〃	珪岩	4.67	6.5	3.85	100.55	VIII PL 119
124	〃	珪岩	4.15	5.45	1.9	35.6	VIC PL 2
125	〃	珪岩	5.4	4.1	1.9	34.79	VIII PL 51
126	〃	黒曜石	1.7	2.15	0.96	3.6	VIII PL 2
127	〃	珪岩	4.76	4.4	2.37	34.92	VIII PL 99
128	〃	珪岩	6.35	3.3	2.0	33.5	VIII PL 57

作出されており、単設である。打面調整は、観察できない。

第2類 (109・111～128)

第2類は、幅広の縦長剥片や横広の剥片を剥出したと考えられる一群である。この石核は、さらに、石核の形状や剥片剥離の状況によって、a～eという、5種類の石核に分類できる。

2 a類 (109・111～113・117・121)

2 a類の石核は、単設打面で、打面転移がおこなわれないものである。素材として、二つの種類がある。すなわち、礫ないし分割礫のもの(109・113・117・121)と、厚手で大型の剥片を素材としているもの(111・112)である。石質は、113が黒曜石で、他はすべて、珪岩である。

次に、同一個体の資料として、それぞれの石核が対応する石器類を示しておこう。109には、ナイフ形石器2点(7・12)と6点の剥片とが対応し、121に対応するものとして、ナイフ形石器(41)と剥片1点とがある。また、111と112は、同一個体のもので、これに、ナイフ形石器(40・44)、三稜尖頭器(51)、そして剥片1点に対応している。

2 b類 (114)

90°の打面転移が観察されるものを、2 b類として分類した。この石核に該当するものは、114のみである。この石核は、分割礫を素材としたもので、その打面には、自然面と分割面と

がある。なお、分割の状態は、109に類似している。

2 c類 (115・116)

石核の剥片剥離作業面の形状が両刃礫器状を呈するもので、交互に剥片剥離が繰り返されるものである。115は、珩岩で、116は、鹿児島県大口市日東産の黒曜石である。共に、円礫素材である。

個体別資料として、対応する石器類を検出できたものは、115で、ナイフ形石器 (16)、二次加工ある不定形石器 (77)、使用痕ある剥片 (98・107)、そして剥片 4 点がある。

2 d類 (118～120・122～125・127)

打面転移が頻繁におこなわれるものであるが、その転移の方法には、ほとんど、規則性が見出せない。狸谷II石器文化に属する石核の中でもっとも数が多いものである。石質は、118が黒曜石で、ほかはすべて珩岩である。

2 d類の石核は、その形状の特徴から、さらに、二つの種類に分けられる。それは、礫ないし分割礫が素材となり、比較的厚手のもの (118～120・122・123) と、剥片ないしは、薄手の分割礫が素材となっているもの (124・125・127) である。この中で、後者は、残核の形状が、極めて良く類似している。

個体別資料として、石器との対応関係を認定できたものは、119、120、122、123～125、127の7点の石核であった。以下、石核ごとに示していきたい。119は、使用痕ある剥片 (92) 1点で、120は、ナイフ形石器 (13) と剥片 1点である。122は、16点の石器が対応し、その内訳は、ナイフ形石器 (2・9)、搔器 (58)、使用痕ある剥片 (89)、剥片12点であった。123は、使用痕ある剥片 (105) が対応する。124は、使用痕ある剥片 (87・94・96・106) と剥片 7点の計11点の石器が対応する。125に対応するものは、7点あり、その内、1点はナイフ形石器 (14) で、他は剥片である。127には、ナイフ形石器 (4・11)、搔器 (57)、二次加工ある不定形石器 (75)、使用痕ある剥片 (102)、そして、剥片 9点に対応している。

2 e類 (126)

126のように、石核の縁辺に沿って、打面が移動していくもので、その結果、形状は楕円形をとる。石質は、黒曜石である。

第3類 (128)

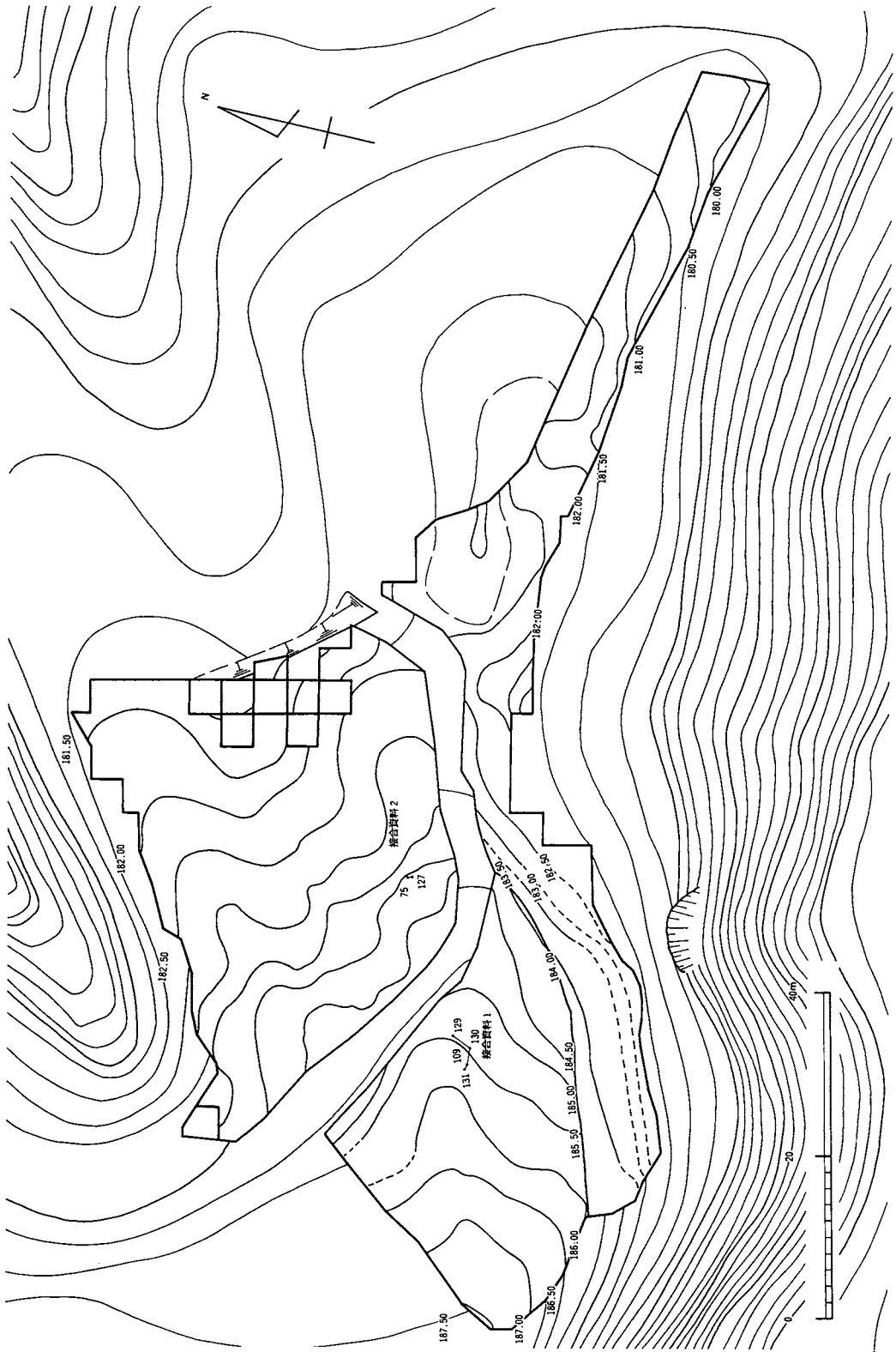
128のように、横長剥片が剥出される石核である。資料としては少ないが、33や36や37のナイフ形石器が、その参考資料となろう。

接合資料 (第100図)

接合資料としては、先に示しておいた欠損品の接合例もあるが、ここでは、異なる個体どうしの接合を紹介しよう。石質は、すべて、珩岩である。

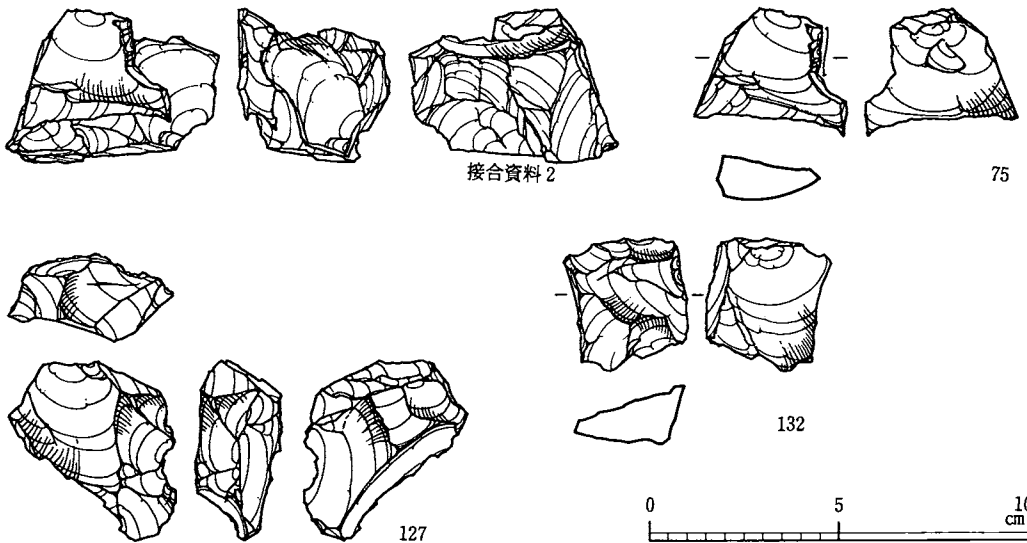
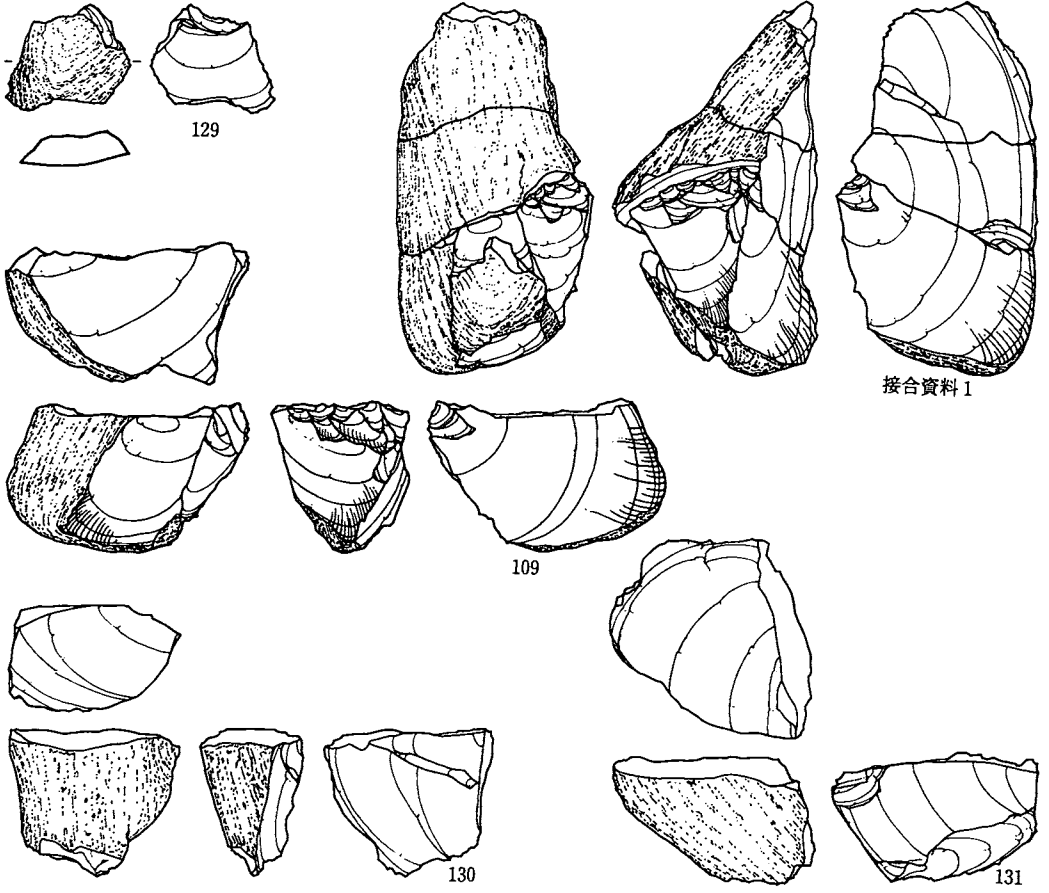
接合資料 1 は、第 4 ブロックから検出されたもので、石核 1 点 (109)、剥片 1 点 (129)、分

第2節 狸谷II石器文化の遺構と遺物



第99図 遺物分布図 (接合資料)

第三章 調査の成果



第100図 石器実測図

割礫2点(130・131)の接合例である。この資料からは、表面に礫面を残す大型の剥片を剥出し、その剥片をさらに三分割して石核の原形を獲得するという手順がわかる。

接合資料2は、第6aブロックで検出された、2d類の石核1点(127)と二次加工ある不定形石器1点(75)、そして、剥片1点(132)の計3点の接合例である。

4. まとめ

狸谷II石器文化は、遺跡の基本層位では、第V層を包含層とするもので、入戸火砕流に対比される第VI層の直上にあっている。

石器は、主として、丘陵の西半分から出土している。しかも、その分布は、東方へ延びる尾根の頂部を中心として、第1～第6ブロックに偏在しながら、帯状に広がる状況である。また、こうした石器分布のほか、配石遺構や8252点の礫によって構成される礫群が検出されている。

石器組成は、ナイフ形石器を主体として、それに三稜尖頭器、搔器、削器、彫器、楔形石器、磨石・敲石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剥片を加えて、構成されている。この石器組成の豊富さから考えて、狸谷II石器文化は、比較的安定した石器文化と考えられ、編年研究の基準資料という評価が与えられよう。なお、資料総数は、547点(内、石器110点)である。

出土した石器の中で、質量共にもっとも充実しているものが、ナイフ形石器である。その総数は、48点で、石器組成の中で、全体の4割を占めている。こうしたナイフ形石器は、その形態的な特徴から、1類(切出形・台形石器)、2類(剥片尖頭器)、3類(一側縁加工)に分類された。この中で、当石器文化を特徴つけるものは、折断剥片(9・15・23のナイフ形石器に折断面を残しているが)が素材となる、1類の切出形のナイフ形石器で、ナイフ形石器の半数を占めている。九州の先土器時代に属する石器文化の中で、この種のナイフ形石器が主体的位置をしめるものはほとんど無く、その編年的な位置が問題とされるであろう。

そこで、この石器文化の編年的位置を示しておきたい。

この石器文化には、上記しているように、ナイフ形石器として、切出形、台形石器、剥片尖頭器などがあり、これに、三稜尖頭器を加えている。こうした石器文化の主要石器の共伴関係からすれば、同様の傾向を持つものとして、相模野編年第三期、武蔵野編年第二期a期に対比が可能である。関連遺跡としては、神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡があり、極めて類似した様相を呈している。

第3節 細石器文化の遺物

狸谷遺跡の細石器文化を特徴づけるものは、細石器とそれに伴う土器である。しかしながら、この石器文化は、明確な包含層というものを持っておらず、狸谷II石器文化の第V層と縄文時代早期の包含層である第IV層との間に介在するといった状況をとっている。したがって、これらの遺物を明確に、石器文化として位置づけることは困難である。

1. 出土遺物とその分布（第102図1～11）

細石器文化に属する遺物には、隆起線文土器と考えられるもの3点（いずれも、同一個体）、細石核2点、細石核関係の資料1点、細刃器7点の計13点がある。これらの分布は丘陵中央部に比較的多く集まり、その周辺では、散在的な状況を呈している（第101図）。

以下、遺物ごとに説明を加えていきたい。

隆起線文土器（1）

土器は、西側丘陵の中央部から、同一個体のもの3点が出土した。しかし、この中で、土器の型式が認定できたものは、図示した資料のみで、残りの2点は、表面が剥落した状態である。

1は、口縁部で、刻み目のついた、2条の隆起線文が観察される。この文様は、粘土帯を張りつけた器面に対して、棒状工具を横に滑らせ施文されたもので、その結果、工具による沈線の下下に、隆起部が作られることになる。

器形は、口縁部が開いた深鉢形を呈し、口唇部は、平坦である。また、口唇部や裏面は、丁寧に撫でられて、荒い表面とは状態を異にする。色調は、表面が黒褐色、裏面が明褐色を呈し、焼成は、良好である。胎土には、僅かに、黒雲母と石英粒が観察される。

細石核（2～4）

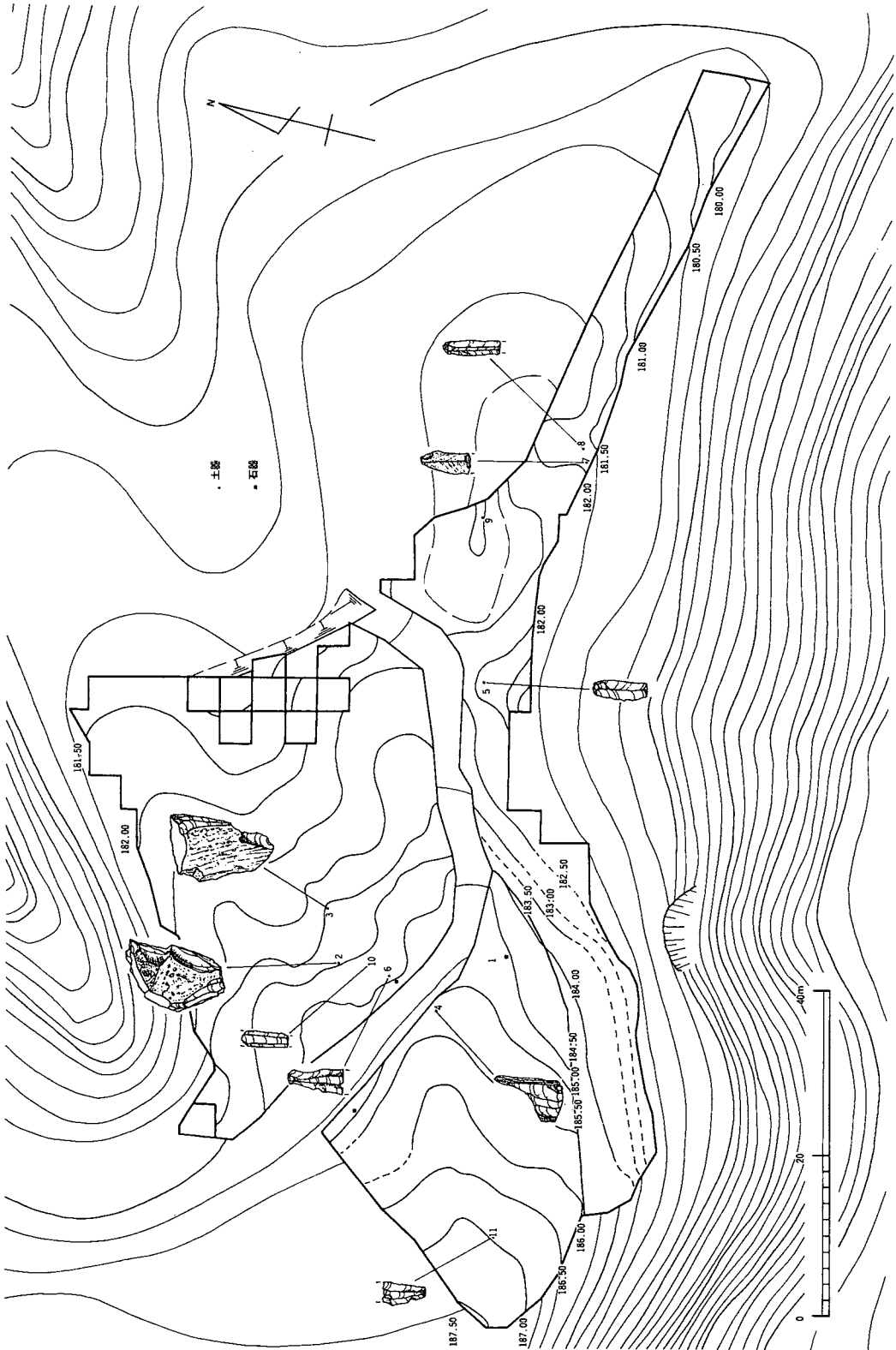
2は、丘陵の中央部から、検出されたものである（第101図）。この細石核では、人吉産黒曜石の扁平礫が、そのまま素材となっている。そして、それに、側面調整を全く加えずに打面が作出され、細刃器の剥出作業が開始されている。面取り端は、細石核の両端に、打面を異にした2面が設けられている。打面は、上位では、正面からの3枚の剝離と打面調整、下位では、正面および側面の方向からの剝離でおのおの作出されている。

3は、2の東側から出土したもの（第101図）で、同様に、人吉産の黒曜石が使用されている。側面調整は全くみられず、打面は、折断面である。面取り端は1面で、下部では、整形の剝離も観察される。

第21表 細石器文化石器組成表

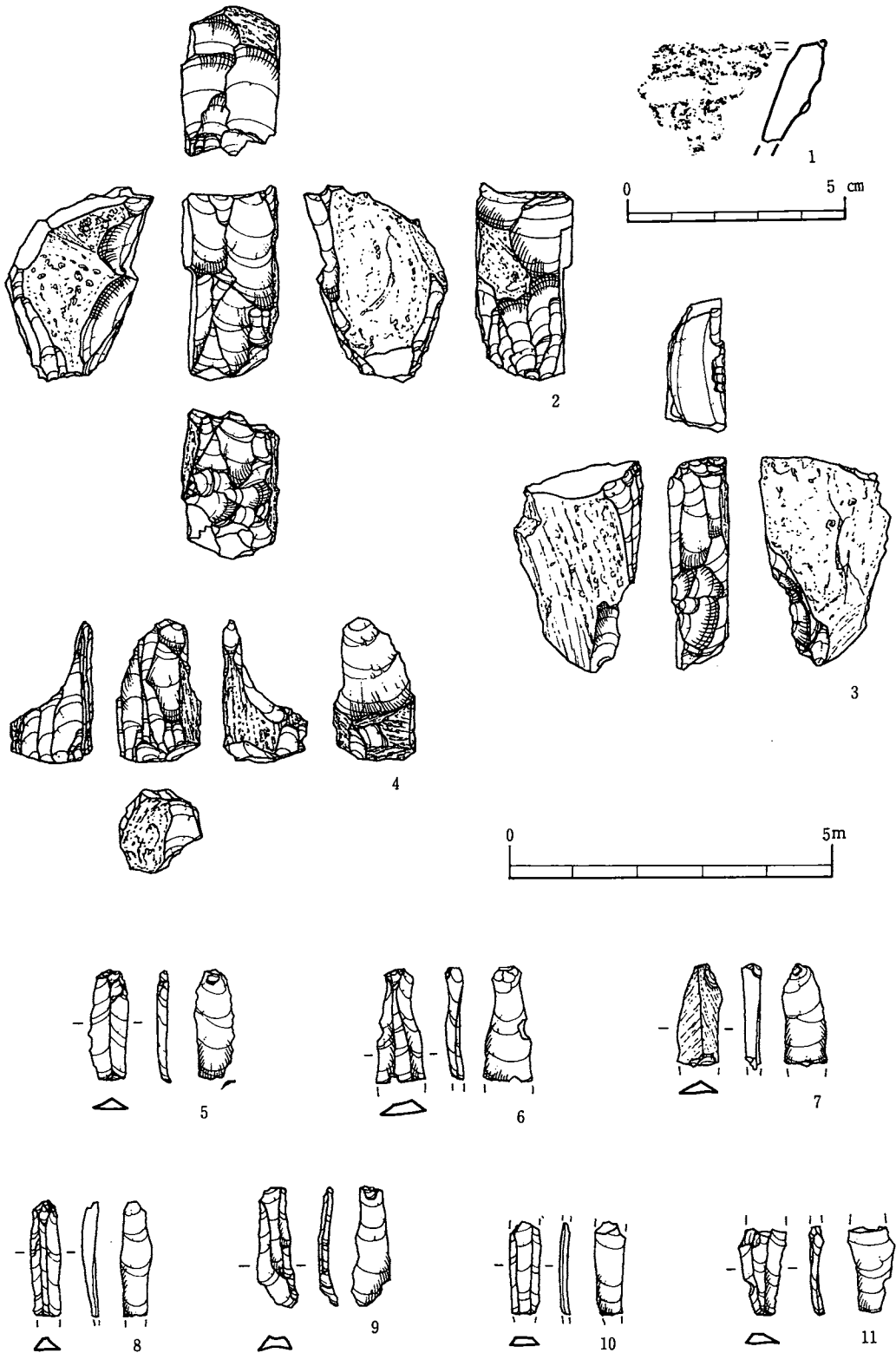
器種	計	珪岩	黒曜石
細石核	3	—	3
細刃器	7	2	5
計	10	2	8

第3節 細石器文化の遺物



第101図 遺物分布図（細石器文化）

第III章 調査の成果



第102図 遺物実測図

第3節 細石器文化の遺物

第22表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
2	細石核	黒曜石	3.0	2.27	1.5	10.65	VII B PL 11
3	〃	黒曜石	3.2	2.0	0.92	6.75	VII B PL 4
4	〃	黒曜石	2.17	1.3	1.3	2.2	VIII C PL 32
5	細刃器	黒曜石	1.68	0.65	0.2	0.2	VIC JL 49
6	〃	黒曜石	(1.73)	0.78	0.3	(0.3)	VIC JL 102
7	〃	黒曜石	(0.7)	0.3	0.4	(0.25)	IVD JL 618
8	〃	黒曜石	(1.8)	0.5	0.3	(0.2)	IVD JL 1534
9	〃	黒曜石	1.85	0.6	0.3	0.2	VC JL 129
10	〃	珪岩	(1.43)	0.5	0.15	(0.15)	VIC PL 180
11	〃	珪岩	(0.75)	0.2	0.3	(0.24)	IXC JL 26

4は、剥出作業面の再生剥片で、その状態から、半周に細刃器の剥出作業面がみられる円筒形を呈した細石核であったと推定できる。石材は、人吉産の黒曜石が使用されている。

細刃器（5～11）

細刃器は、7点検出されたが、石質ごとの内訳では、黒曜石5点（5～9）、珪岩2点（10・11）である。

5は、2の細石核と同一個体のもので、完形のものである。頭部には、細石核における頭部調整が観察される。6は、2の細石核から剥出されたものであり、先端部を欠損している。7は、表面に礫面を残す、細刃器剥出の初期段階の資料であり、先端部を欠損している。8は、先端部を欠損したものである。頭部には、頭部調整が観察される。9は、4の資料と同一個体で、完形である。10は、頭部と先端部を欠損したものである。11は、胴部上半を欠損している。

2. まとめ

細石器文化に属する資料は、土器と細石核、そして細刃器である。この石器文化の資料は極めて少なく、しかも包含状態が悪い。

資料の分布は、丘陵の全体にみられるが、それも、中央部に集まる傾向がある。とくに、3点の隆起線文土器は、すべて、この部分から検出されている。この土器は、その文様や口縁端部の状態から、宮崎県堂地西遺跡出土の資料に酷似しており、縄文時代草創期に属する可能性が高い。一方、共伴している細石核は西海技法によらないもので、これは、南九州にみられる一般的状況である。

このように、この細石器文化の資料は、当該時期の多くの情報を提供してくれるものではないが、熊本県下の初出資料として、その意義は高いといえよう。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構および遺物は、遺跡の基本層位の第Ⅳ層という、褐色土層にその出土層順がある。この第Ⅳ層は、鬼界火山を起原とするアカホヤ火山灰（イモゴ）の下位にあたり、広域火山灰という基準層を基にして、地域を越えた編年対比が可能となってくる。

包含層の状態は、一部、耕作によって攪乱されているとはいえ、この厚いアカホヤ火山灰層に覆われて、良好であった。したがって、縄文時代早期の調査は、このアカホヤ層の削除から開始することになる。

調査は、丘陵の中央部から開始して、その後、丘陵の西側、そして東側へと移行していった。調査の結果、検出された遺構は31基、出土遺物は土器1701点、石器4700点、石製品6点、土製品2点であった。

1. 遺構とその分布

(1) 竪穴式住居跡（第104図～第107図）

遺跡の西端を起点とする尾根は、西側丘陵の中央部に至ると、二つの尾根がわかれて、おたがい並行しながら北西方向へと延びていく。竪穴式住居跡は、この二つの尾根がわかれ始める部分、しかもその浅い谷部を中心に、8基が検出された（第103図）。

1号住居跡（第104図）

1号住居跡は、住居群の北端で検出されたものである（第103図）。北半分を失っていて、詳細は不明であるが、隅丸の長方形の平面形態を呈していたものと考えられる。住居跡の規模は、長辺2.5m以上、短辺2mを測る。

住居跡の床面は、隅丸の長方形を呈し、長辺1.5m以上、短辺1.6mを測る。床面積は、2.4m²以上である。柱穴は、中央部、やや西へ偏った部分で2個検出された。その径は15cm、深さ20cmである。硬化面の発達はほとんど認められない。

埋土は、2層に分層された。上層は、部分的に暗灰色の砂粒の集中部を持つ褐色土で、下層は、上層に比べ、やや明るい褐色土である。

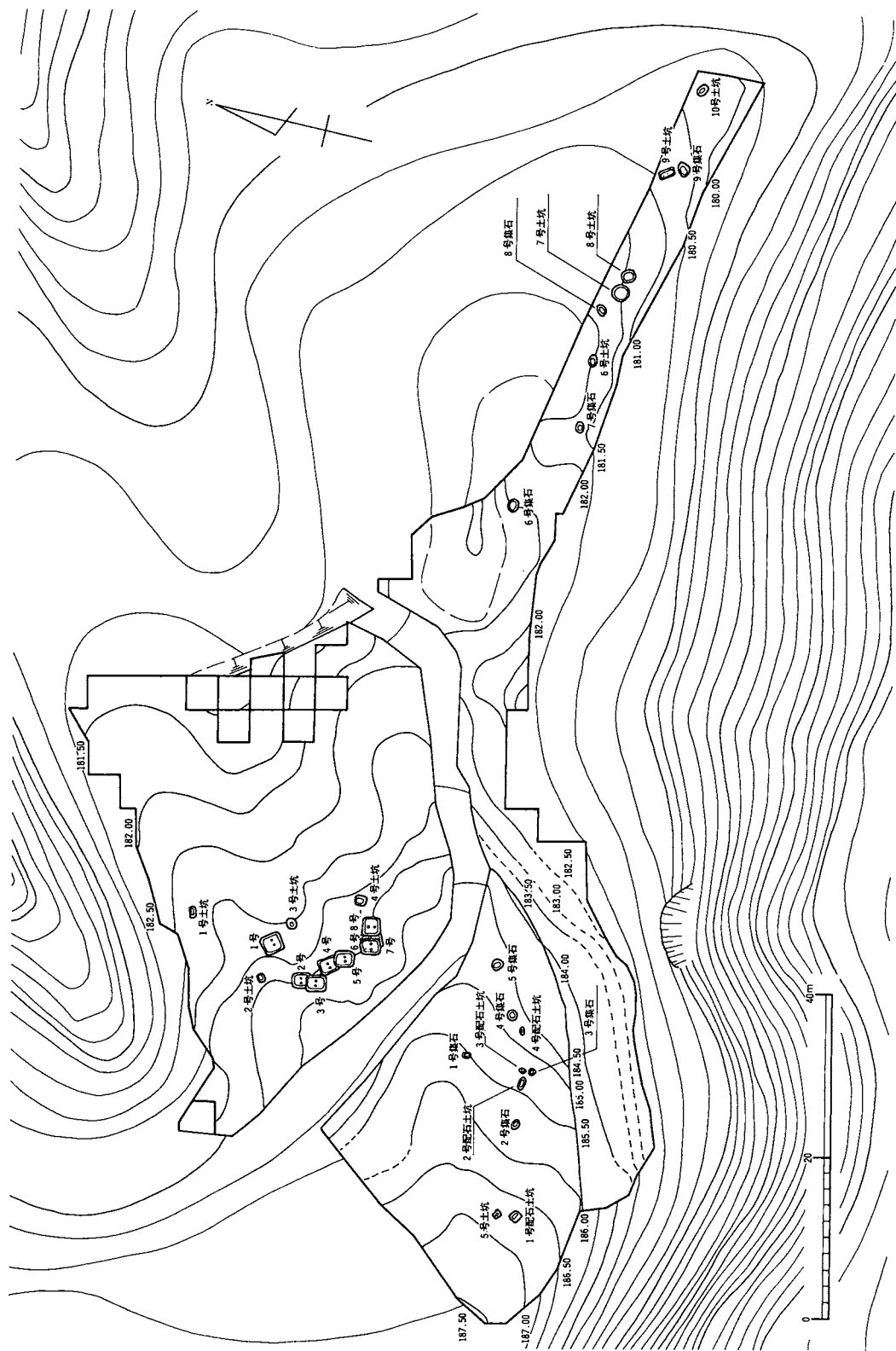
出土遺物としては、床直上から出土した、捺糸文施文の手向山式土器（391）がある。

2号住居跡・3号住居跡（第105図）

2号および3号住居跡は、1号住居跡の南側で検出されたもので（第103図）、この両者には、切り合い関係が認められる。

2号住居跡は、北側にあるもので、3号住居跡によって切られている。平面形態は、隅丸の長方形を呈し、長辺約2m（推定値）、短辺1.7mを測る規模を持っている。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第103図 遺構配置図

住居跡の床面は、同じく隅丸の長方形を呈し、長辺1.7m、短辺1.2mで、その床面積は、約2㎡である。柱穴は、床面の中央部に2個検出され、その径15cm、深さ15cmを測る。硬化面の発達は、ほとんどみられない。

埋土は、褐色土の上層と、やや明るみを帯びた褐色土の下層に分層される。

3号住居跡は、2号住居跡を切っている（第105図）。平面形態は、隅丸の長方形を呈し、長辺2.4m（推定値）、短辺1.75mを測る。

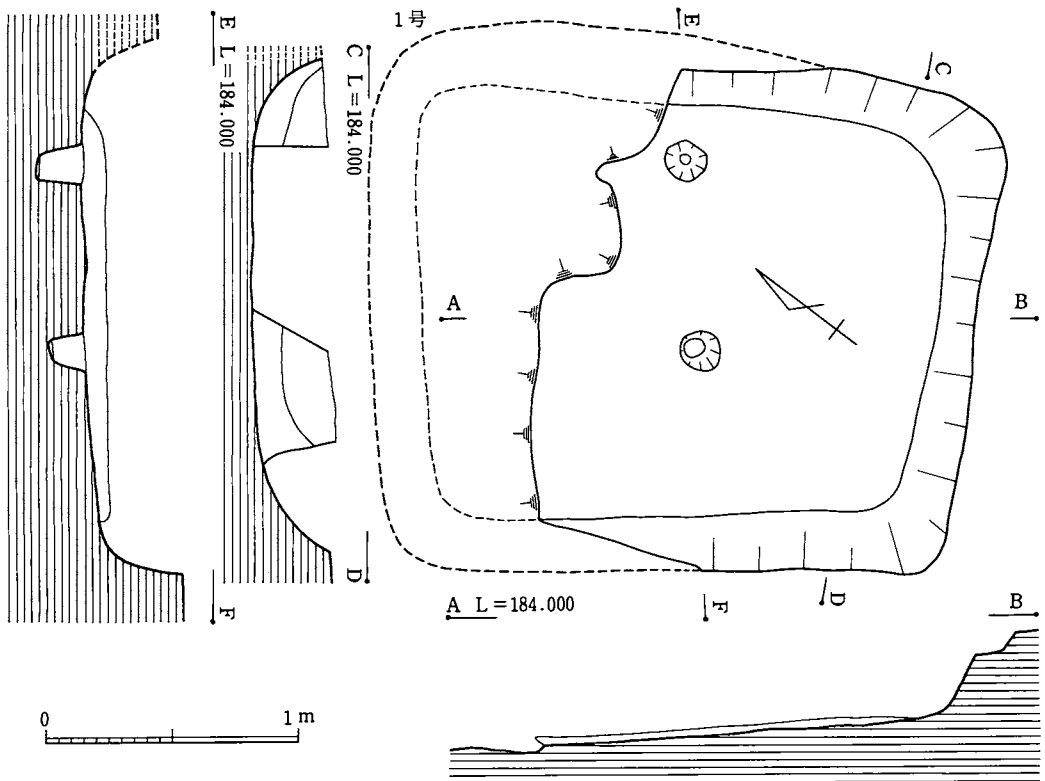
住居跡の床面は、隅丸の長方形を呈し、長辺1.95m、短辺1.3mで、その床面積は、約2.5㎡である。この床面からは、その中央部で、2個の柱穴が検出された。その柱穴は、径15cm、深さ15cmの大きさである。硬化面は、ほとんどみられない。

埋土は、2枚に分層された。上層は、暗褐色の土塊を含む褐色土で、下層は、上層に比べて、やや明るい褐色土である。

4号住居跡・5号住居跡（第106図）

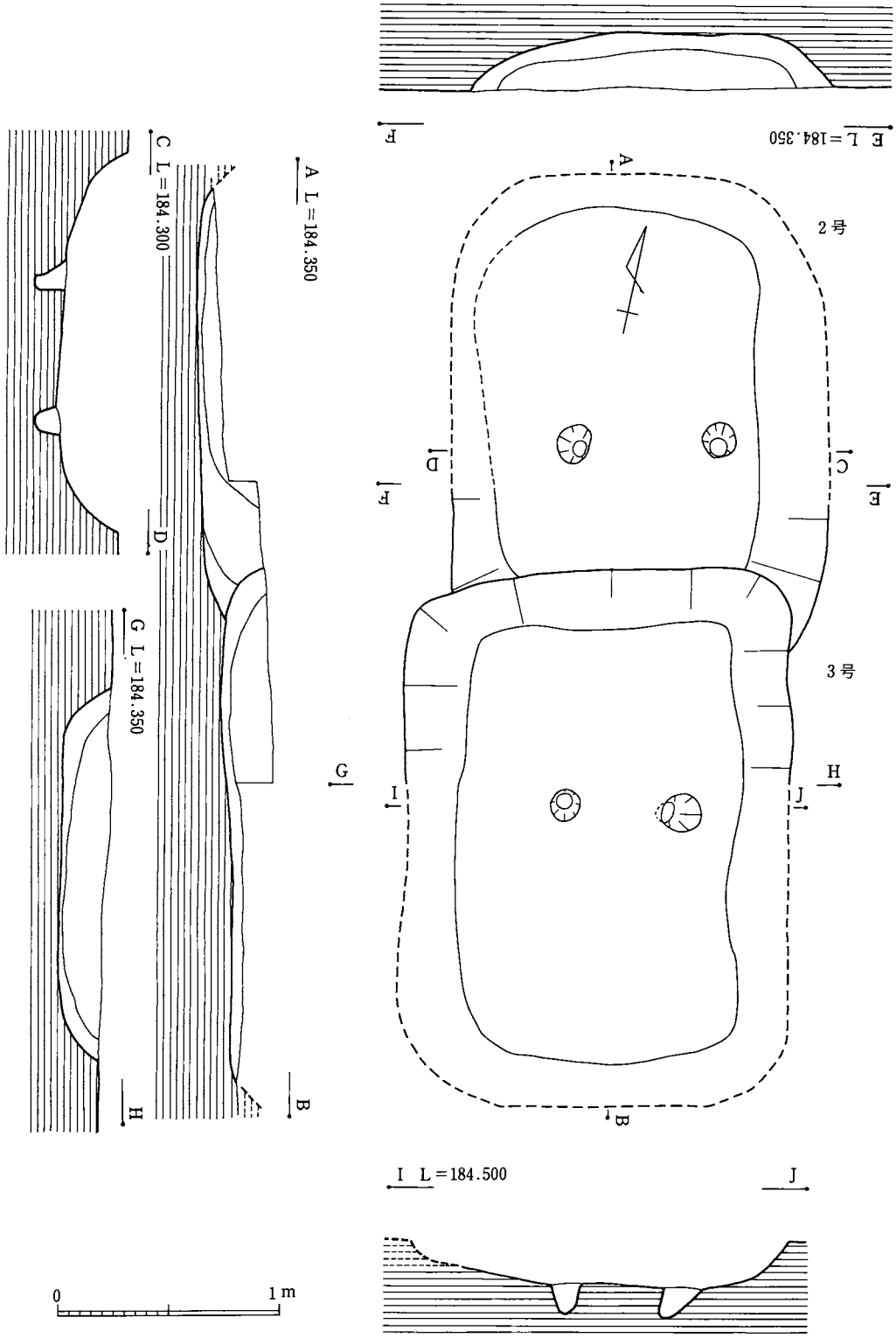
4号住居跡および5号住居跡は、3号住居跡の南側で検出された遺構で（第103図）、二つの遺構には、切り合い関係が認められる。

4号住居跡は、この二つの遺構の中でも、北側にある遺構で（第106図）、5号住居跡によっ

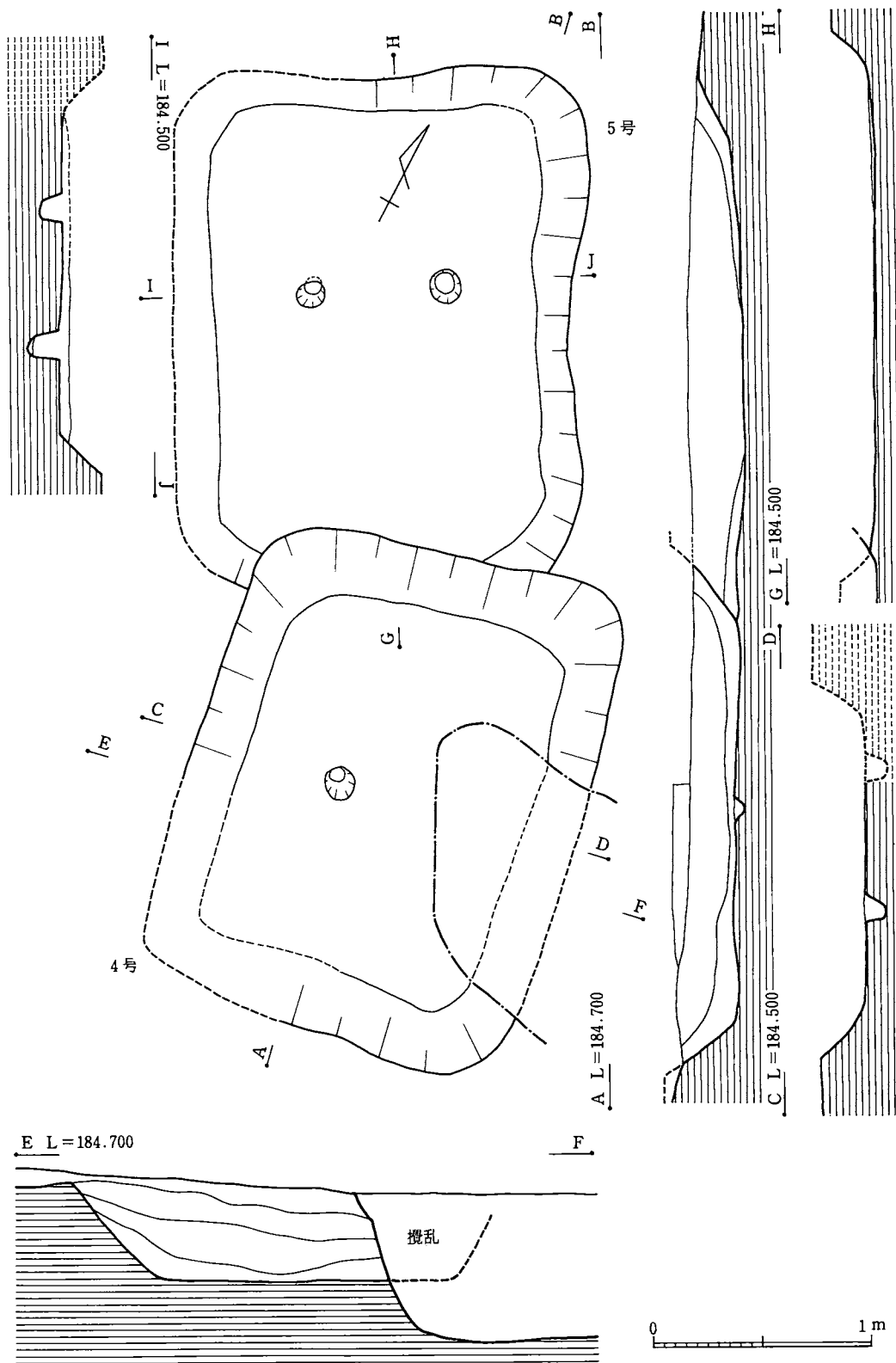


第104図 竪穴式住居跡実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第105図 竪穴式住居跡実測図



第106図 竪穴式住居跡実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

て切られている。この住居跡の平面形態は、隅丸の長方形を呈し、その規模は、長辺約2.4m、短辺約1.8mを測る。

住居跡の床面は、隅丸の長方形を呈し、長辺2.2m、短辺1.5mで、その床面積は、約3.3㎡である。柱穴は、床面の中央から、径15cm、深さ10～15cmの大きさのもの2個が検出された。硬化面の発達は、ほとんどみられない。

埋土は、褐色土の上層と、暗褐色土の下層との2枚の層に分けられた。出土遺物には、山形の押型文土器1点(195)と石鏃1点(21)がある。

5号住居跡は、4号住居跡の南側で、この住居跡を切った状態で、検出された。平面形態は、隅丸の長方形を呈し、長辺2.3m、短辺1.8mの規模を持っている。また、遺構の掘り込みは、基本層位での第IV層の中位から確認でき、それによる壁高は、40cmを測る。

住居跡の床面は、隅丸の長方形を呈し、長辺1.7m、短辺1.3mを測る。その床面積は、約2.2㎡である。柱穴は、径15cm、深さ10cmの大きさのものが1個確認された。しかし、この柱穴の位置関係からすれば、この住居跡は、2本柱の可能性が強く、おそらく、住居跡の東辺を切る大きな攪乱があり、この攪乱によって、残りの1個は失われたものと考えられる。硬化面は、ほとんど発達していない。

住居跡内の埋土は、褐色土であるが、その土質によって、3枚に分層される。中層は、上層に比べてしまりがあり、下層は、上の二層に対して、やや明るい色調を示している。

6号住居跡・7号住居跡・8号住居跡(第107図)

この3基の住居跡は、住居跡群の中で、もっとも南側に位置する遺構で、西側のものから順に、6号、7号、8号とする(第103図)。

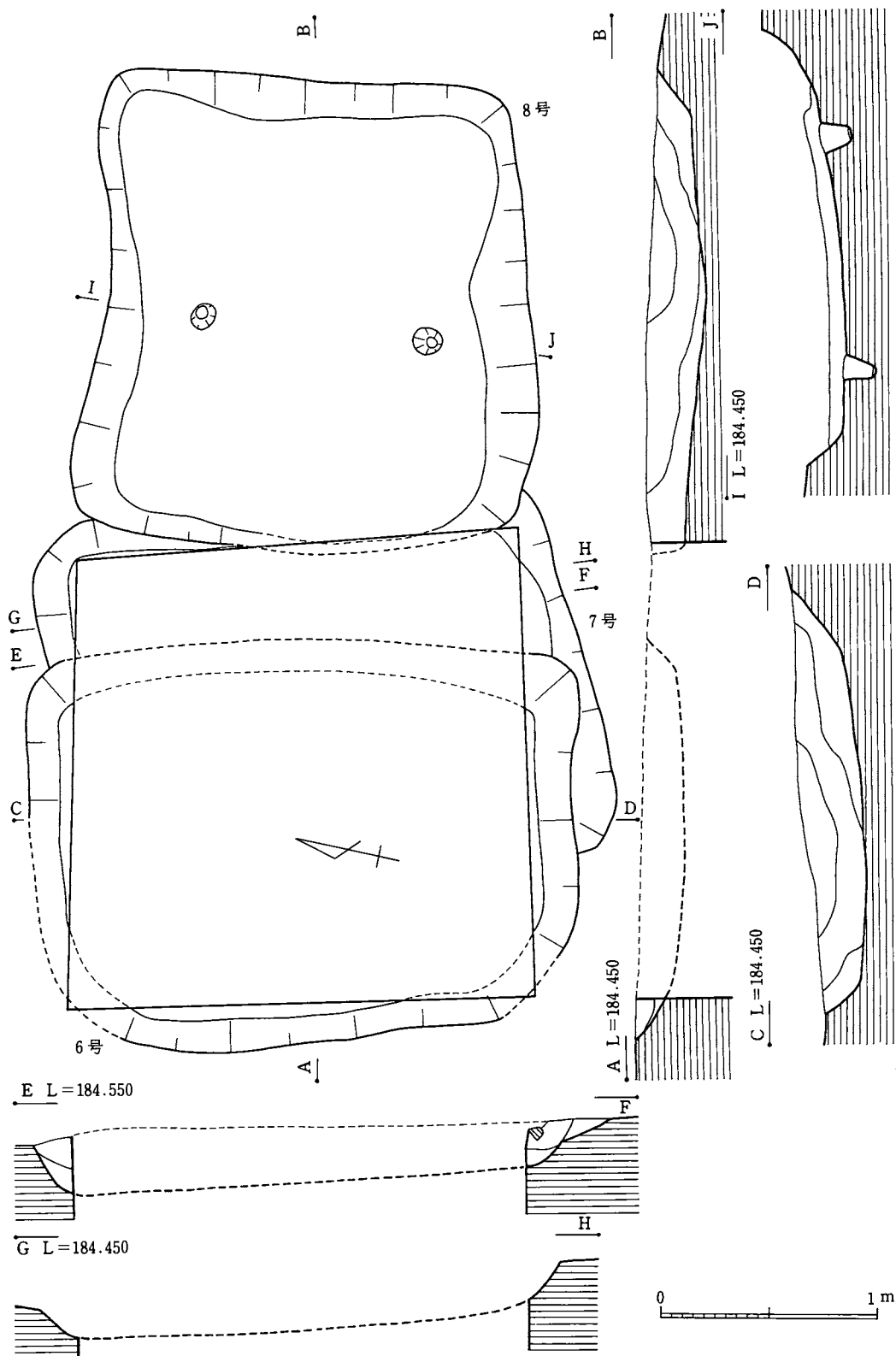
6号住居跡と7号住居跡とは、試掘調査の際に確認された遺構で、その深掘りによって、その大半がこわされており、その全容はつかみきれない。しかし、その残存部から、ある程度の規模の推定は可能である。

6号住居跡は、長辺2.6m、短辺1.8m(推定値)の規模を持ち、隅丸の長方形を呈する遺構である。また、床面は、長辺2.2m、短辺1.6m(推定値)で、その床面積は、3.5㎡前後になるものと推定される。7号住居跡は、長辺2.4m、短辺1.7m以上を測り、その平面形態は、隅丸の長方形を呈していると考えられる。

埋土は、6号住居跡で比較的良く観察される。それによると二つの層に分けられるようで、上層は、褐色土で、下層は、上層に比べてしまりの強い褐色土である。

8号住居跡は、長辺2.15m、短辺1.95mを測る、隅丸の長方形の平面形態を呈する遺構で、試掘の深掘りによって、西壁の一部がこわされている。

この住居跡の床面は、隅丸の長方形を呈し、長辺1.9m、短辺1.5m、その面積は、約3㎡である。柱穴は2個あり、中央部に穿たれている。その大きさは、径10～14cm、深さ15cmである。



第107図 竪穴式住居跡実測図

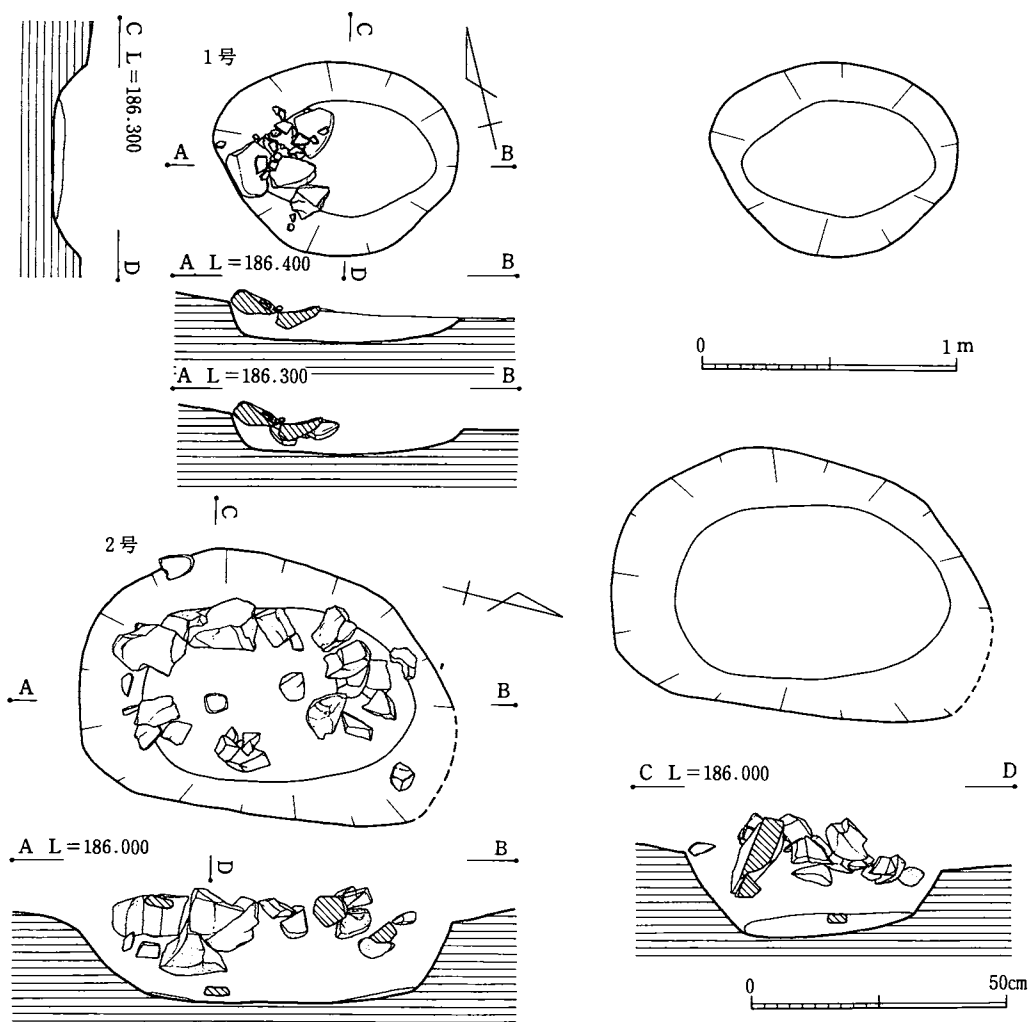
硬化面の発達は、悪い。

埋土は、上層の褐色土、中層の暗褐色土、下層のさらに暗い暗褐色土の三つの層に分層される。

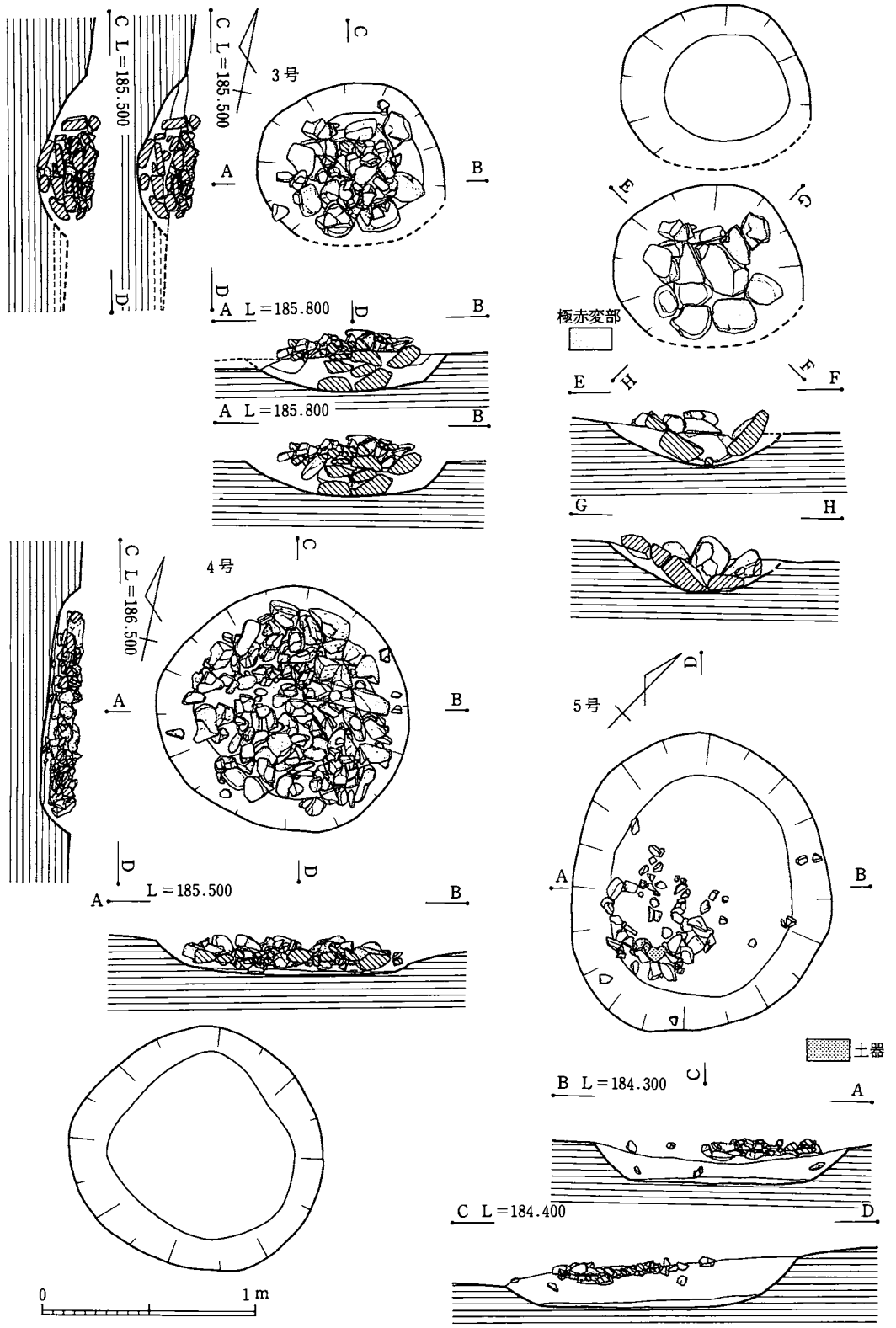
(2) 集石 (石組炉) (第108図～第110図)

集石 (石組炉) は、9基が検出された。その内訳は、石組炉2基 (1号・3号)、集石7基 (2号・4号～9号) である。これらの遺構は、その位置関係で、大きく二つの群に分けることができる。その群とは、丘陵の西側に広がる遺構群 (石組炉2基・集石3基) と丘陵の東側の遺構群 (集石4基) である。この二つの遺構群は、丘陵の中央部で、南側に開口する谷部を介することによって、明確に分離されている (第103図)。

以下、遺構ごとに説明を加えていこう。



第108図 集石 (石組炉) 実測図



第109図 集石(石組炉)実測図

1号集石（石組炉）（第108図）

1号集石（石組炉）は、丘陵西側にみられる遺構群の中にあり、その西端に位置している（第103図）。集石は、20cm前後の比較的大きい石（石皿片も含む）5個と、握り拳大の破碎礫によって構成され、すべて火を受け、赤変している。

土坑は、不整の楕円形を呈し、その規模は、長軸1m、短軸0.75mを測る。また、現状での壁高は、最大15cmである。土坑の埋土は分層できず、しまりのない褐色土である。なお、集石を構成する石は、この土坑の西側で集中的に検出された。また、同じ部分で、手向山式土器2点（338・345）が出土した。

この集石は、土坑の規模や形態、そしてそれを構成する石の状態から、後に述べる3号石組炉に類似している。おそらく、石材の抜取りがおこなわれる以前は、3号石組炉のような形状を呈していたのであろう。

2号集石（第108図）

2号集石は、西側の遺構群に属し、その北端に位置している（第103図）。その位置や集石の形態からすれば、他のものとはやや異なった種類の遺構と考えられる。

この集石は、長軸0.75m、短軸0.5mを測る、不整の楕円形を呈した土坑と、その中位から上位に集中してみられる25個の破碎礫によって、構成されている。現状での壁高は、15cmである。埋土は、しまりのある褐色土で、分層はできなかつた。手向山式土器が、1点（393）出土している。

3号集石（石組炉）（第109図）

3号集石は、石材の配置が構造的であり、石組炉と呼称できる遺構である。西側の遺構群のほぼ中央に位置している（第103図）。

この集石は、径0.8m～0.9mの不整の円形を呈する土坑（壁高14cm）、花卉状に配された石材、そして、その中を埋めている握り拳大の破碎礫によって、構成されている。埋土は、しまりのある褐色土（上層）と、さらにしまりがある褐色土（下層）との2枚に分層された。出土遺物としては、手向山式土器がある。

集石の構築は、土坑掘削の後、その底面に2枚の偏平な石材を置くことから、開始される。その後、その石材を囲むように、同様の石材を斜めに配して、壁体を造っていく。この際、土坑と石材との隙間は、褐色土（下層）によって、一部埋められる。そして、土坑と壁体との隙間が、完全に埋め戻されることによって（上層）、構築の過程は終了する。

この集石では、それぞれの石材の焼け方の状態によって、炉本体の北西部を炉の炊き口部として認定できる。それは、その炊き口部の石材が、底面近くまで焼けて、赤変しているという点と、その炊き口部に対向する石材の上半分が、もっとも激しい焼け方をしている点の2点による。さらに、赤変した部分の状況を観察すれば、炊き口部を除いた炉の底面と壁体の下半分

では、ほとんど赤変部がみられず、その部分が直接火に当たっていないことがわかる。おそらく、この炉は、開放状態での使用ではなく、炉内に石を詰められた状態で使用されたのであろう（第109図）。

4号集石（第109図）

4号集石は、土坑内に、握り拳大の破碎礫が詰め込まれた遺構で、この礫の中には、20cm前後の円礫も僅かに含まれる。この集石の位置は、西側の遺構群の中程にあたる（第103図）。

土坑の平面形態は円形を呈し、その径は1.15m～1.2mを測る。現状での壁高は、15cmである。埋土は、しまりがある褐色土で、分層はできなかった。出土遺物としては、山形の押型文土器の口縁部（96）が1点ある。

5号集石（第109図）

5号集石は、丘陵西側の遺構群の中で、もっとも東側に位置している（第103図）。土坑の平面形態は、長軸1.4m、短軸1.2mの大ききの楕円形を呈している。その規模や形状からすれば、先の4号集石に類似している。土坑内の礫は、すべて、握り拳大以下の大きさで、土坑南隅の中位から上位にかけて、集中している。

埋土は、1枚で、しまりがある褐色土によっている。出土遺物としては、型式不明の土器の底部（613）と石板状の石製品（6）がある。

6号集石（第110図）

6号集石は、丘陵の東側に集まった遺構群の一つで、その西端に位置している（第103図）。土坑の平面形態は、楕円形を呈し、長軸1.76m、短軸1.2mを測る。土坑内の礫は、15cm角の比較的大型のものもあるが、そのほとんどは、握り拳大の破碎礫である。礫の集中は、5号集石と同様に、土坑の中位にみられ、そこに一つの面があるようでもある。しかし、埋土は、褐色土による1枚で、その面を示す線は引けなかった。

出土遺物には、塞ノ神式土器の口縁部1点（421）がある。

7号集石（第110図）

7号集石は、6号集石の南東12mの部分にあり（第103図）、主に、握り拳大の礫が詰め込まれた遺構である。土坑は、長軸0.9m、短軸7.5mの楕円形を呈している。この種の遺構としては小規模なもので、石組炉の規模に近い。埋土は、褐色土の1枚である。

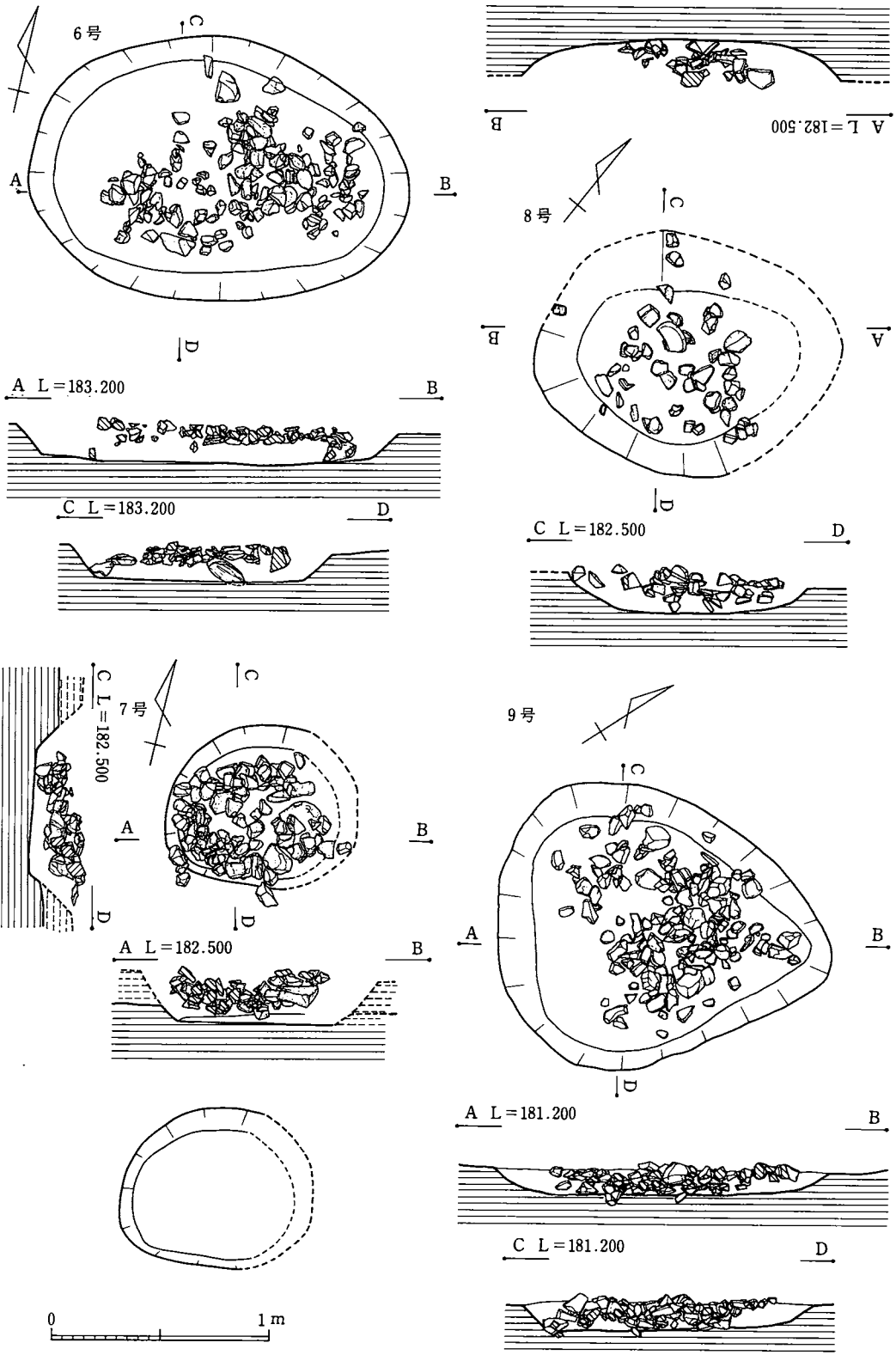
8号集石（第110図）

8号集石は、7号集石の16m東にあり（第103図）、10cm角の大きさの破碎礫が入った遺構である。土坑の平面形態は、楕円形を呈し、その規模は、長軸1.6m、短軸1.1mを測る。埋土は、しまりのある褐色土の1枚である。出土土器には、塞ノ神式土器がある。

9号集石（第110図）

9号集石は、丘陵東側に分布する集石群の中で、もっとも東端に位置している（第103図）。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第110図 集石（石組炉）実測図

その平面形態は、胴張りの三角形を呈し、その規模は、長軸1.5m、短軸1.3mを測る。集石を構成する礫は、ほとんどが破碎礫で、握り拳大を基本として、それに10cm角のものが加わっている。埋土は、しまりのある褐色土である。

(3) 配石土坑 (第111図・第112図)

配石土坑は、胴張りの正方形ないし楕円形の土坑の底面に、大型の石皿・台石が配された遺構で、4基検出された。すべて丘陵の西側に位置している。そして、さらにその位置関係をみれば、西端にある遺構(1号)と集石の周辺にかたまるもの(2号～4号)との、二つの偏りがみられるようである(第103図)。

1号配石土坑 (第111図)

1号配石土坑は、丘陵のもっとも西側に位置する遺構である(第103図)。土坑内には、長軸36cm、短軸24cmの石皿(307)が、作業面を下にして置かれている。

土坑の平面形態は、胴張りの正方形を呈し、その1辺は、1.3mを測る。土坑の底面は貼り床で、その貼り床の厚さは、約20cmである。この貼り床は、掘り方底面の傾斜の矯正を意図したものであろう。また、この貼り床上から、北隅と西隅の2箇所に小穴が掘り込まれている。

土坑の埋土は、硬い黒色の土塊を含む、しまりのある褐色土によっている。また、貼り床は、黒色硬化土を多量に含んだ、シラスと褐色土の混合土で造られ、一部、シラス基調の部分もみられる。出土遺物としては、山形の押型文土器(143・151)、円筒形土器(199・276)、条痕土器(312)、無文土器がある。

2号配石土坑 (第111図)

2号配石土坑は、集石が集まる部分の一角に位置する遺構である(第103図)。土坑内には、底面からやや浮いた状態で配された、4個の石皿と台石(309)がある。

土坑の平面形態は、楕円形を呈し、長軸1.35m、短軸0.75mを測る。埋土は、しまりのある褐色土(上層)と、さらにしまった褐色土(下層)の、二つに分層できる。伴出遺物には、山形の押型文土器(103)がある。

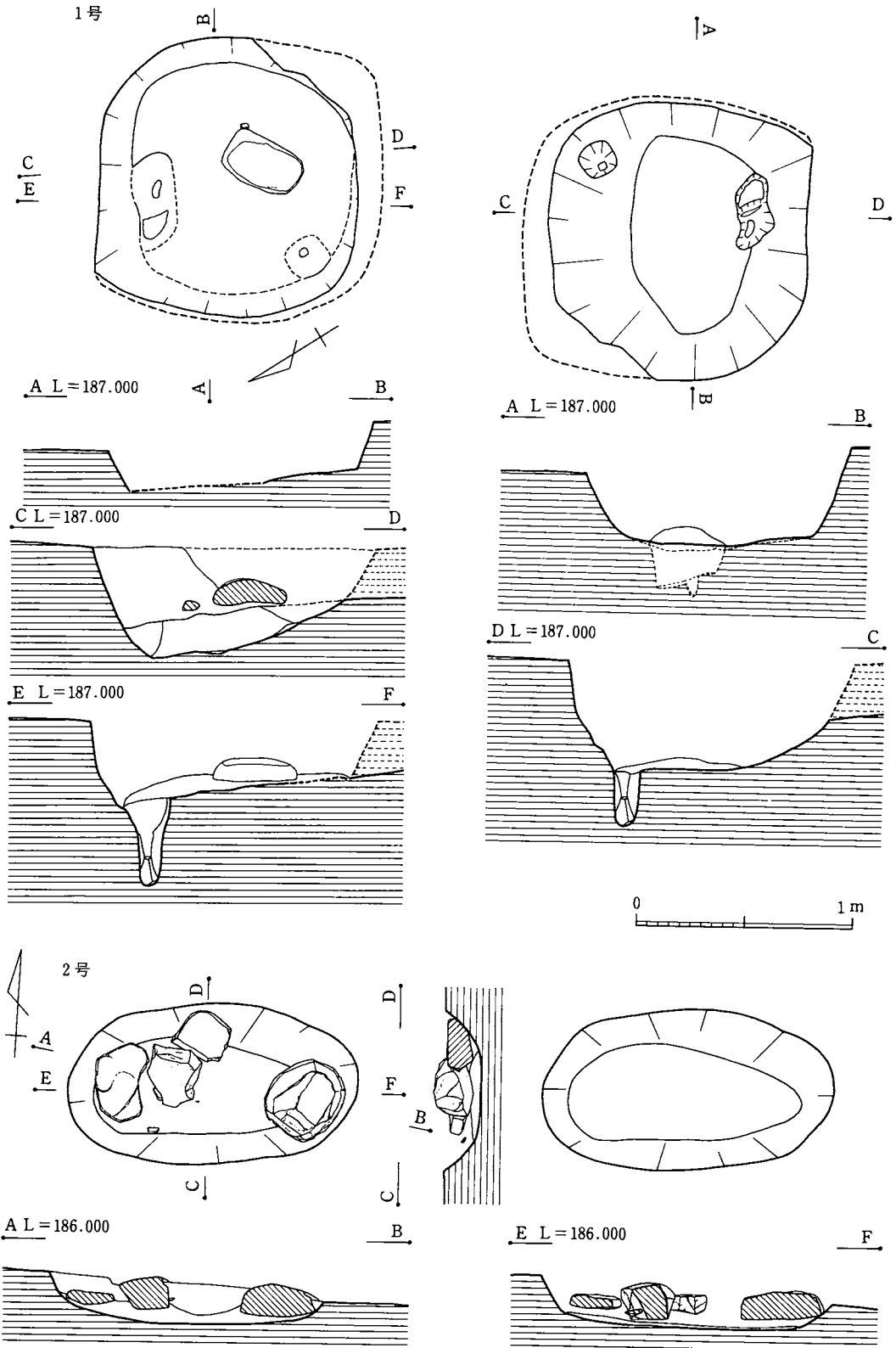
3号配石土坑 (第112図)

3号配石土坑は、2号配石土坑に隣接して検出された(第103図)。土坑内には、30cm前後の大きさの、台形を呈する石皿が置かれている。土坑の平面形態は、隅丸の長方形を呈し、その規模は、長辺0.63m、短辺0.47mを測り、比較的小さい遺構である。埋土は、分層できず、しまりのある褐色土のみが観察された。

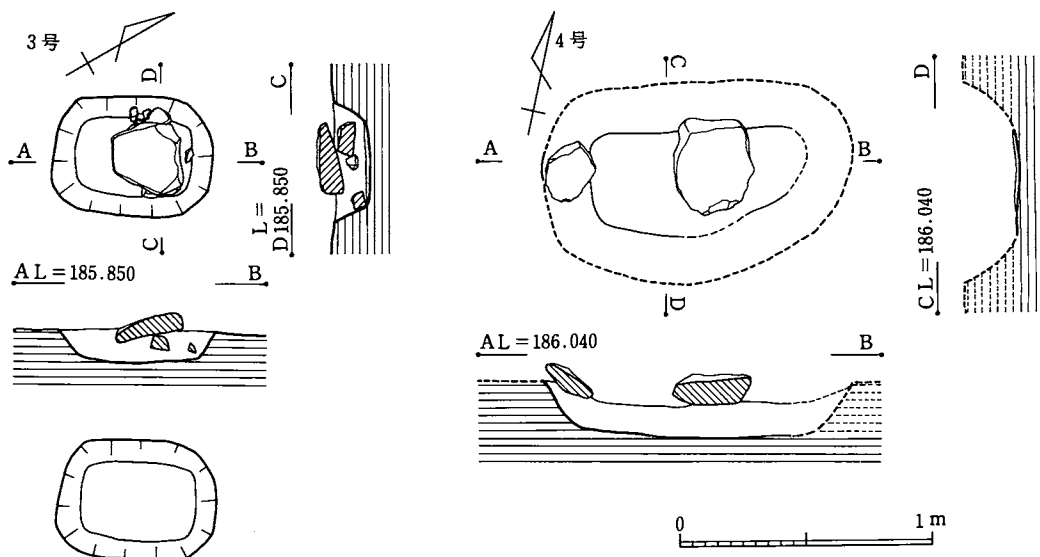
4号配石土坑 (第112図)

4号配石土坑は、2号配石土坑の東側6mの部分で検出された(第103図)。土坑の検出状況はかなり悪く、上端はほとんど残っていない状態であった。したがって、その全容は不明であるが、おそらく、平面形態は、楕円形を呈するものであろう。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第111図 配石土坑実測図



第112図 配石土坑実測図

石皿 (308・312) は、2点出土した。たしかに遺構内の遺物ではあるが、底面から13cm浮いた状態での出土であり、その相伴関係には、やや疑問も残る。埋土は、しまりのある褐色土である。

(4)土坑 (第113図～第115図)

上記してきた遺構に該当しないものを、一括して土坑と呼ぶ。したがって、その形態には、さまざまな種類のものが含まれている。それらの種類を示せば、底面に小穴を持つ土坑 (1号・9号)、深い掘り方の土坑 (2号・5号)、小型の土坑 (3号・4号・6号・10号)、大型の土坑 (7号・8号) である。

以下、遺構ごとに説明を加えていきたい。

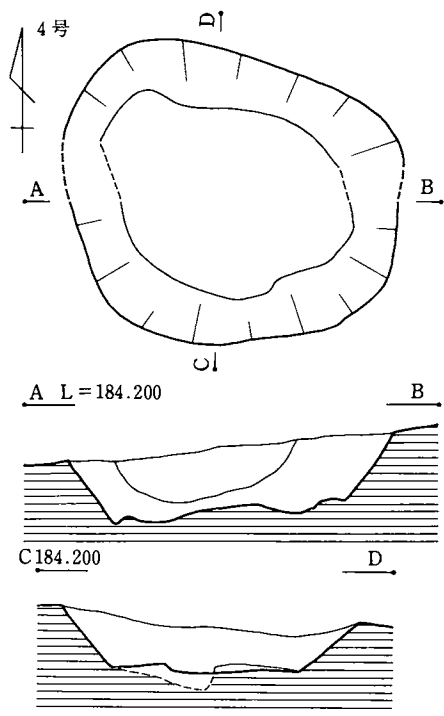
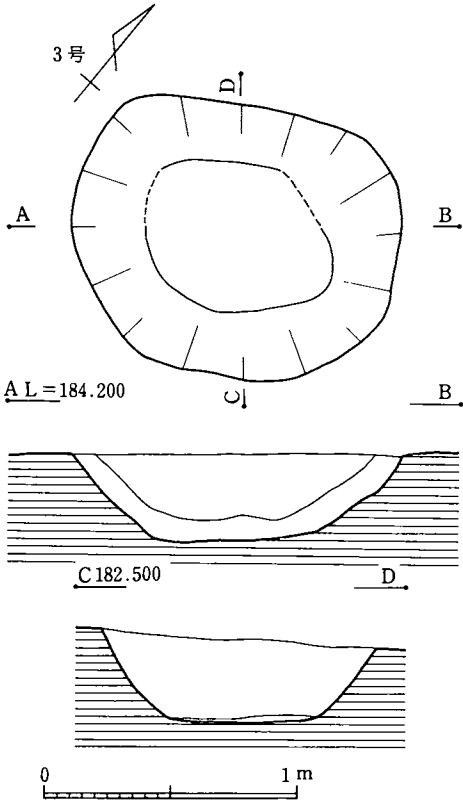
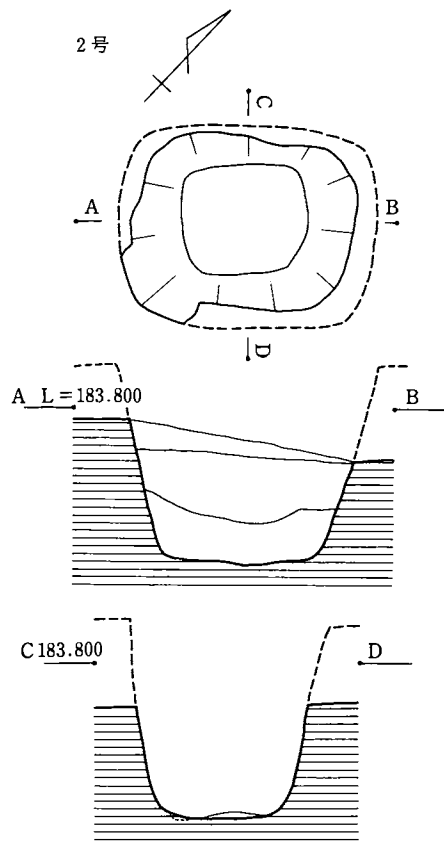
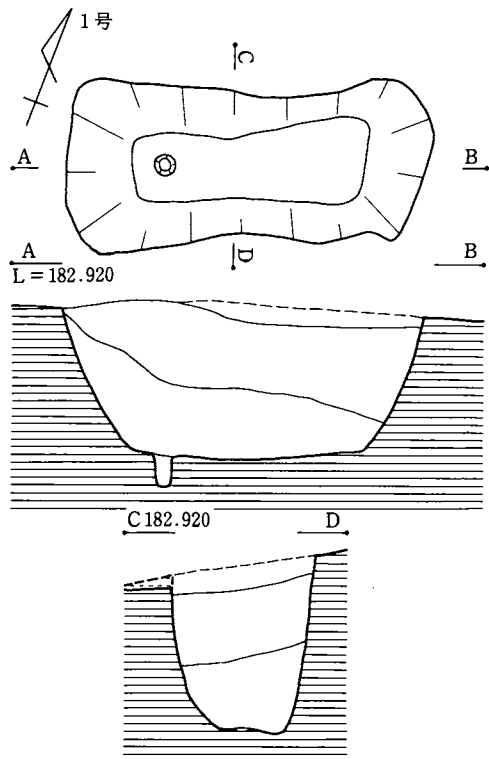
1号土坑 (第113図)

1号土坑は、底面に小穴を持つ土坑で、丘陵の北側で単独で検出された (第103図)。平面形態は、不整の長方形をとり、その規模は、長辺1.4m、短辺0.57m、深さ0.59mを測る。西壁側の底面には、径9cm、深さ12cmの小穴が穿たれている。埋土は、しまりのない褐色土 (上層)、しまった褐色土 (下層)、そして小穴部分の粘性を帯びた褐色土に分層できる。

2号土坑 (第113図)

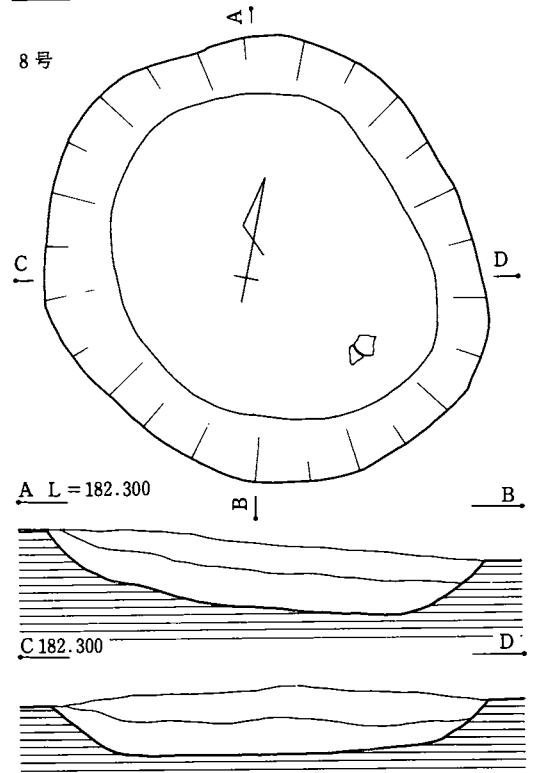
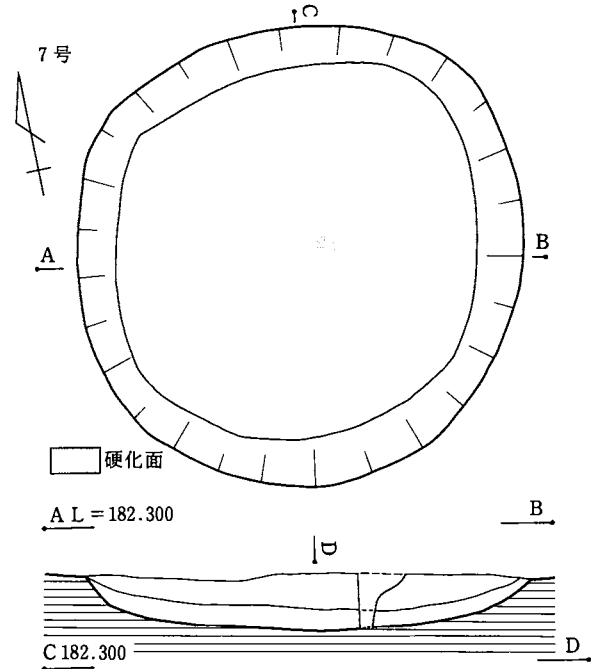
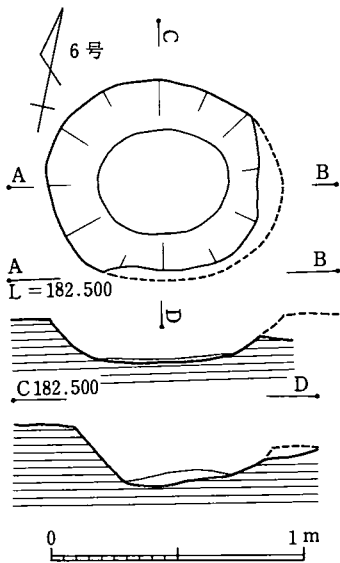
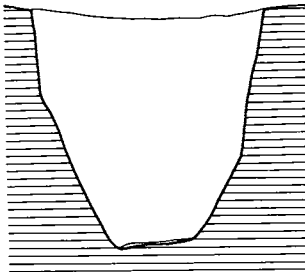
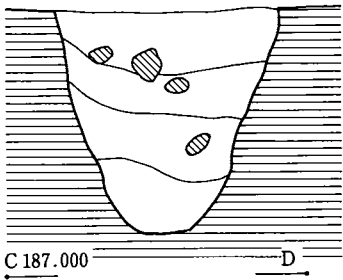
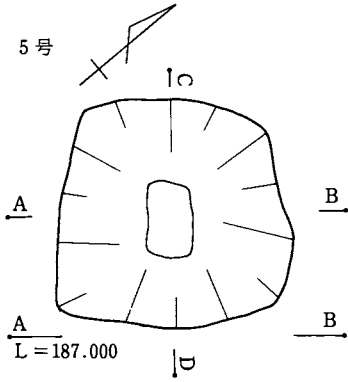
2号土坑は、竪穴式住居跡群の北側で検出された遺構 (第103図) で、その平面形態は、隅丸の長方形を呈する。土坑の大きさは、長辺0.9m (現存値)、短辺0.7m (現存値)、深さ0.6m (現存値) で、深い掘り方の土坑である。埋土は、上層がアカホヤ火山灰の単純層で、下層がシラス塊を包含する褐色土である。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第113図 土坑実測図

第三章 調査の成果



第114図 土坑実測図

3号土坑 (第113図)

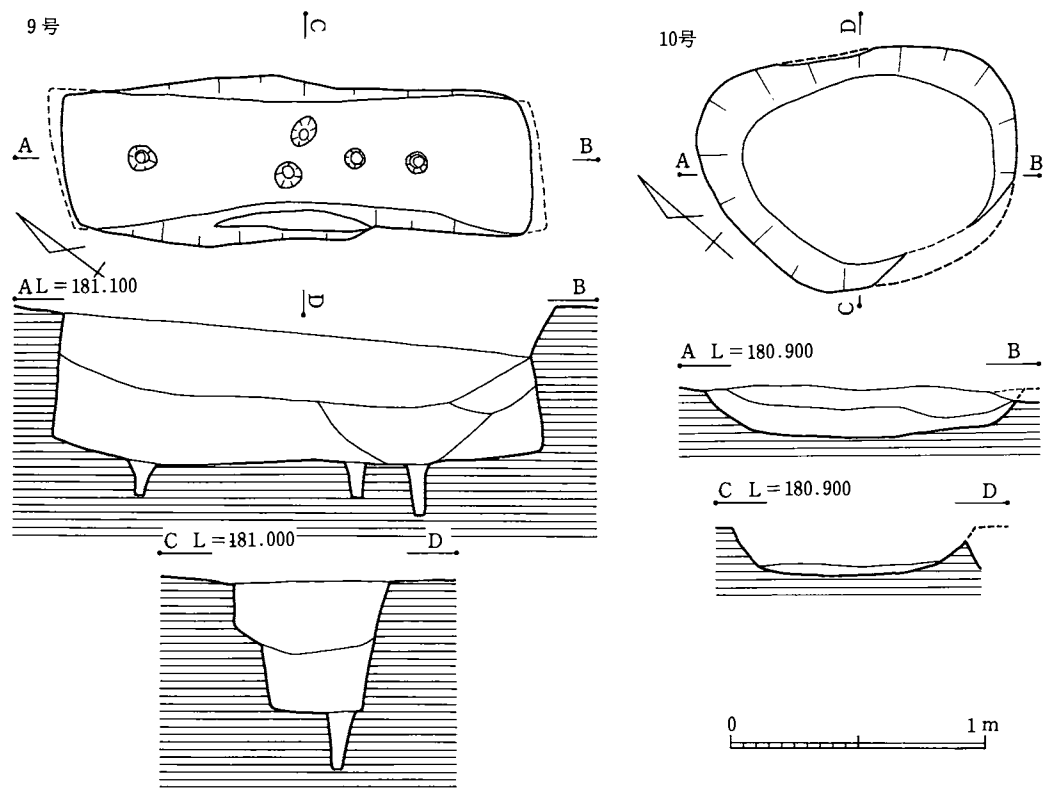
3号土坑は、1号住居跡の南側で検出された遺構である(第103図)。土坑の平面形態は、楕円形を呈している。規模は、長軸1.3m、短軸1.07m、深さ0.34mを測る。埋土は、しまりのない褐色土としまりのある褐色土との、2枚に分層できる。出土遺物には、撚糸文土器と珪岩製の剥片がある。

4号土坑 (第113図)

4号土坑は、8号住居跡の東側で検出された(第103図)。土坑の平面形態は、不整な楕円形を呈し、その底面には、いくらかの起伏がみられる。規模は、長軸1.35m、短軸1.15m、深さ0.28mを測る。埋土の状態は、3号土坑と同様である。

5号土坑 (第114図)

5号土坑は、丘陵の西端に位置している(第103図)。この土坑は、2号土坑と同じ、深い掘り方の遺構である。平面形態は、1辺が0.9mの隅丸の正方形を呈し、深さは、0.9mを測る。埋土は、アカホヤ火山灰の単純層を上層として、順に褐色土、暗褐色土、さらに褐色土が堆積している。出土遺物は、型式不明の土器片である。



第115図 土坑実測図

6号土坑（第114図）

6号土坑は、東側丘陵の調査区の中ほどに位置している（第103図）。その規模は小さく、長軸0.8m以上、短軸0.75m以上、深さ0.18mを測る。平面形態は、楕円形を呈する。埋土は、しまりのない褐色土と、しまりのある褐色土に分層される。出土遺物には、山形の押型文土器（94）と黒曜石製の剝片がある。

7号土坑（第114図）

7号土坑は、6号土坑の東側8mのところにある（第103図）。その平面形態は、径1.77m～1.8mの円形を呈している。その深さは、0.2mである。埋土は、しまりのない褐色土としまりのある褐色土との、二つに分層される。出土遺物には、塞ノ神式土器、円筒形土器（226）、磨石、黒曜石製の剝片や碎片がある。

8号土坑（第114図）

8号土坑は、7号土坑の東隣にあるもの（第103図）で、平面形態は、楕円形を呈している。規模は、長軸1.85m、短軸1.6m、深さ0.25mを測る。埋土は、7号土坑とほとんど同じ状態である。出土遺物には、無文土器（597）と磨石がある。

9号土坑（第115図）

9号土坑は、東側丘陵の東端近くにあり、9号集石に隣接している（第103図）。この土坑は、長方形の平面形態を呈する底面に小穴を持つ土坑で、1号土坑に類似した遺構である。その規模は、長辺1.85m、短辺0.65m、深さ0.6mを測る。小穴は、土坑のほぼ中央部に4個、北壁よりに1個があり、径10cm前後、深さ14cm～23cmの大きさである。埋土は、5枚の層（上層から、アカホヤ火山灰土・しまった褐色土・アカホヤ火山灰土・褐色土・小穴部の褐色土の順）に分層される。

10号土坑（第115図）

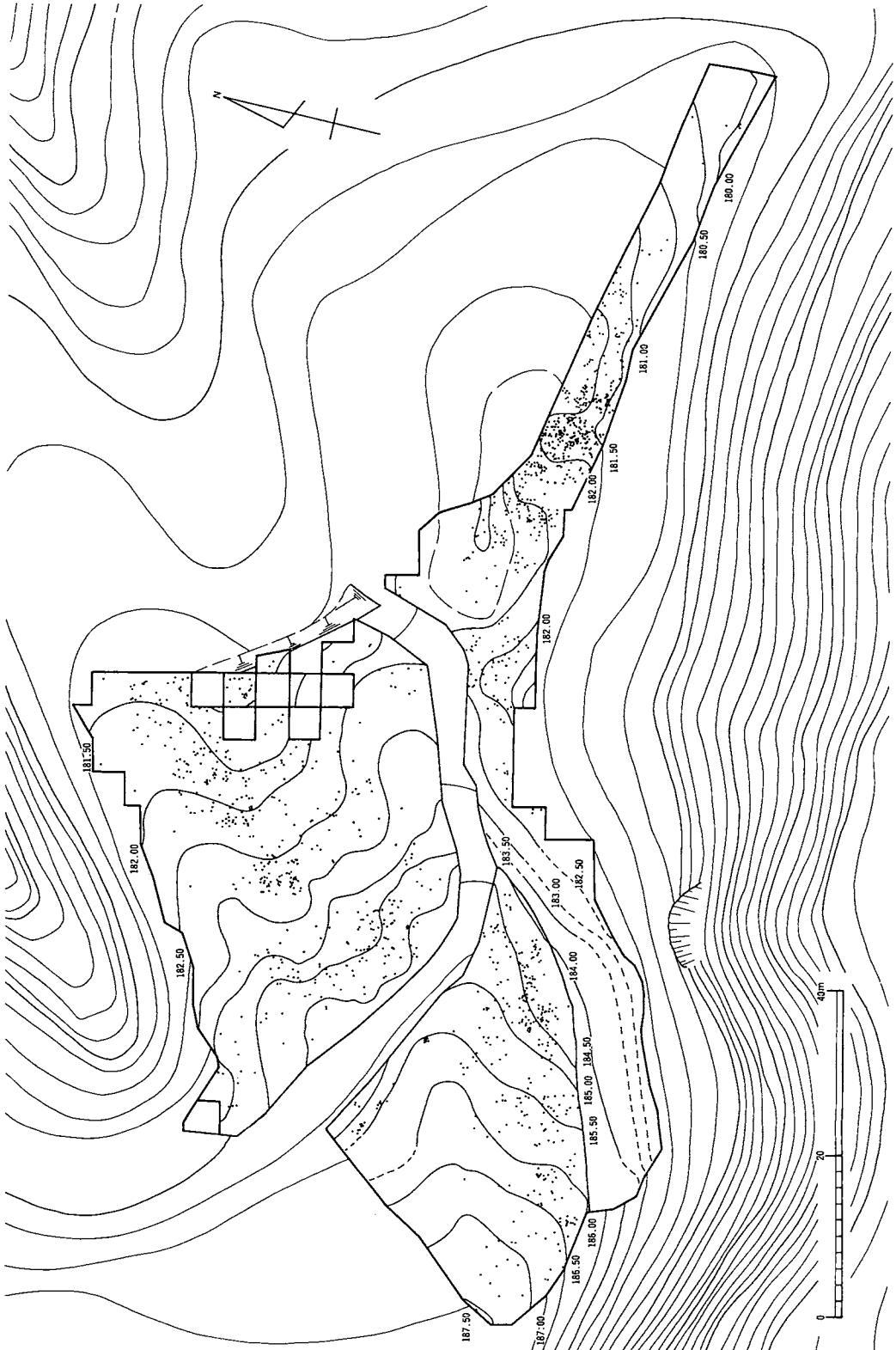
10号土坑は、検出された遺構の中で、もっとも東側でみつかったものである（第103図）。土坑の平面形態は、不整の楕円形を呈し、その規模は、長軸1.25m、短軸0.92mを測る。埋土は、しまりのある褐色土としまりのない褐色土である。

2. 遺物とその分布

(1) 土器

縄文時代早期に属する土器は、1,701点を検出した。その種類には、押型文土器（格子目文・楕円文・山形文）278点、円筒形の条痕文土器140点、石坂式土器2点、前平式土器3点、その他の条痕土器80点、手向山式土器114点、塞ノ神式土器289点、擦糸文・縄文土器（平椀式土器を含む）48点、無文土器230点などがある。このように多種類の土器群の遺存は、早期の

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第116図 遺物分布図（土器）

比較的古い時期から当地が生活場として、継続的に利用されていたことを示している。

出土した土器の分布は、丘陵のほぼ全面にわたって広がっているが、尾根頂部などの平坦部での出土例は少なく、分布の中心は谷部にある。さらに、その谷部での出土の状況をみれば、谷の底面では少なく、尾根部と谷部との間の傾斜面での出土例が目立っている（第116図）。こうした傾向は、おそらく、丘陵内での生活廃棄物の投棄の状況を暗示しているのであろう。

押型文土器（第119図1～第123図180）

押型文土器は、278点が検出された。その文様ごとの内訳は、格子目文2点、楕円文102点、山形文174点である。以下、それぞれの文様ごとに、説明を加えていこう。

格子目文の押型文土器（64・65）

格子目文の土器は、2点検出した。その出土地点は、西側丘陵にある（第117図）。

64は、胴部の破片で、文様の単位や原体の直径は不明である。胎土には、黒雲母や長石の粒子を含む。器面の色調は、外面で褐色、内面で暗褐色をなし、焼成は不良である。器厚は、1.2cmを測る。内面は撫で調整されている。65も同様に、胴部の破片である。胎土中には、黒雲母や長石の粒子がみられる。器面の色調は、外面が黒褐色、内面が明褐色をなし、焼成は極めて良好である。器厚は、1.2cmである。内面は、丁寧な撫で調整である。

楕円文の押型文土器（1～63・66・67）

楕円文の土器は、102点出土した。その分布は、西側丘陵の西端部にはほとんど及ばず、中央部と東側丘陵の谷部を中心にしてみられる（第117図）。

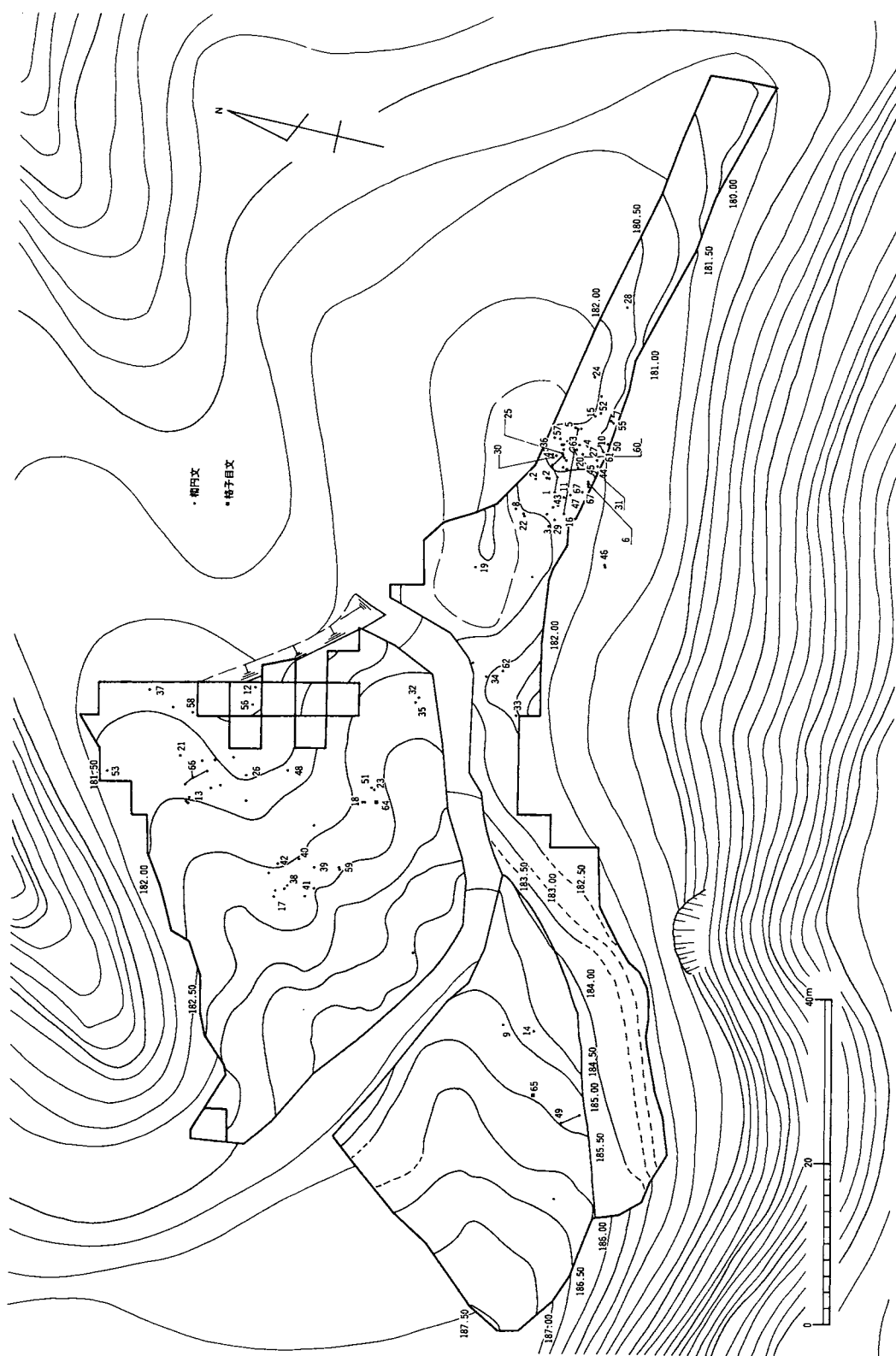
土器の器形は、深鉢形をとっているものと考えられるが、その口縁部の形態には、外反・外傾するもの（1・4）とほぼ直口するもの（2・3・5・6～11）の2種がある。おそらく、前者は、1のように胴部が脹らむ器形に、後者は、2のような胴部から口縁部へそのまま直口する器形に対応するのであろう。また、口縁部の内面の特徴には、押型文が帯状に施文されるもの（1・3・6・12・13）、原体条痕のみのも（5・7・8）、両者が併用されるもの（3・4）、施文がみられないもの（9・10・11）がある。ただ、この口縁内面と器形とは、はっきりした対応関係は認められない。

底部には、丸底（62）と平底（63・66・67）がある。この中で、平底では、上げ底をなすもの（66）となさないもの（63・67）がある。なお、63は、口縁部の1と6と同一個体である。

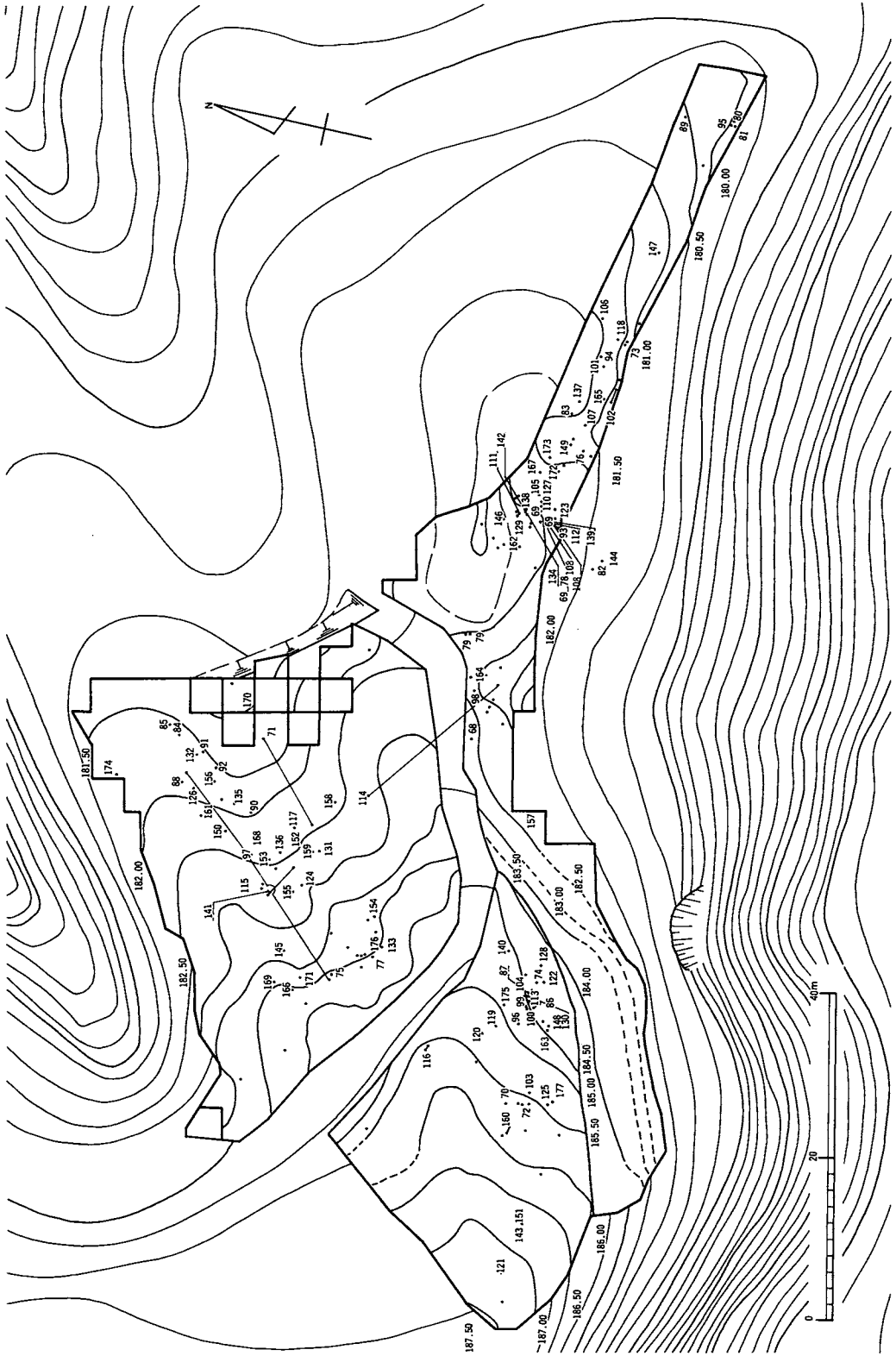
文様の単位には、2単位（2・12・21）と3単位（1・6）がある。さらに、その単位の反復の長さから原体の直径を割り出せば、12が ϕ 0.38cm、21が ϕ 0.48cm、2が ϕ 0.63cm、1と6が ϕ 0.68cmという結果になる。この結果からすると、2単位のものが小さいようである。

胎土中には、黒雲母や長石が混入される。器面の色調は、内面で褐色ないし暗褐色、外面では褐色と明褐色（43～47）のものがある。内面の調整は、すべて荒い撫で調整による。焼成は、不良である。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

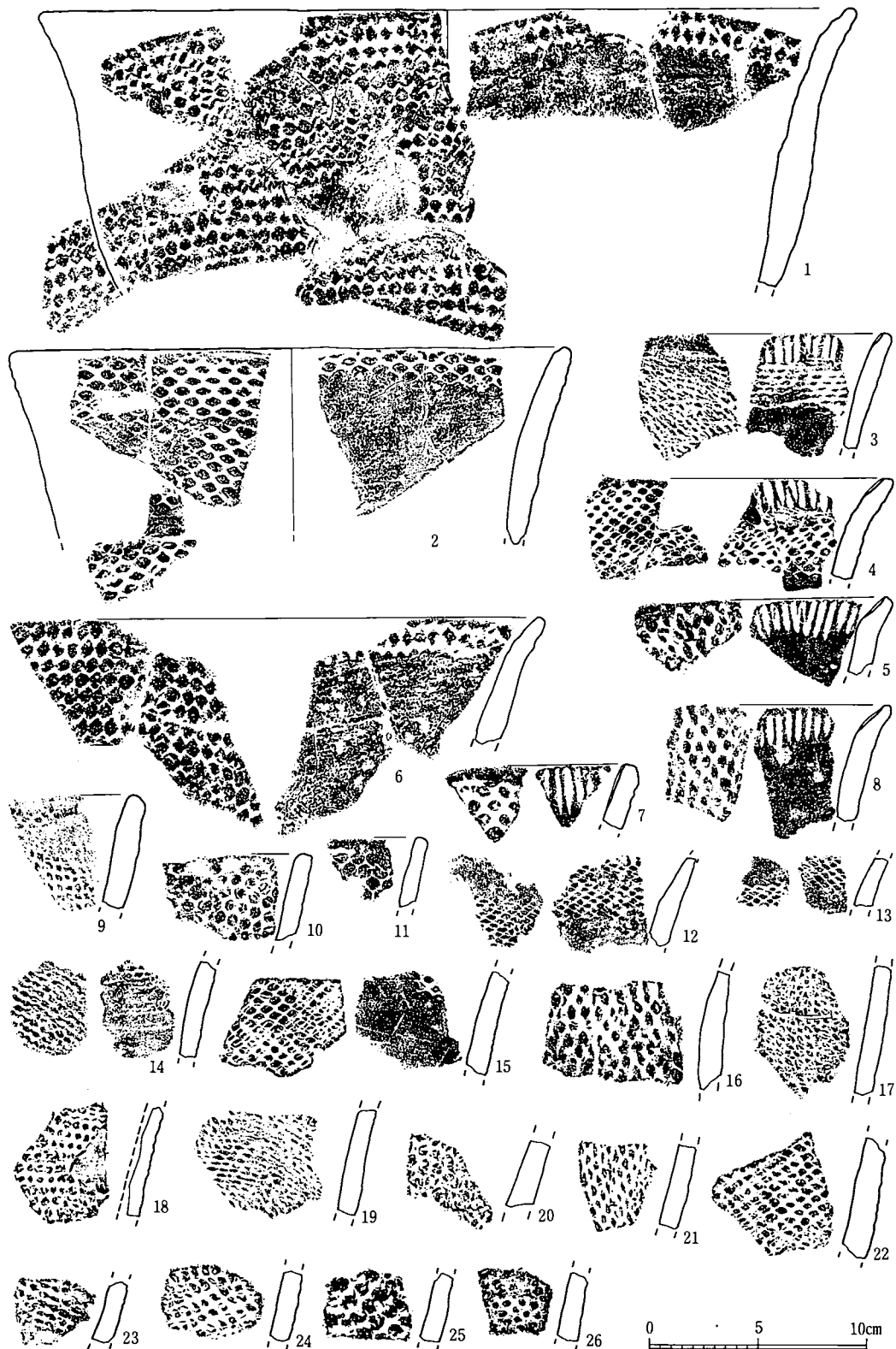


第117図 遺物分布図 (押型土器・橢円文・格子目文)

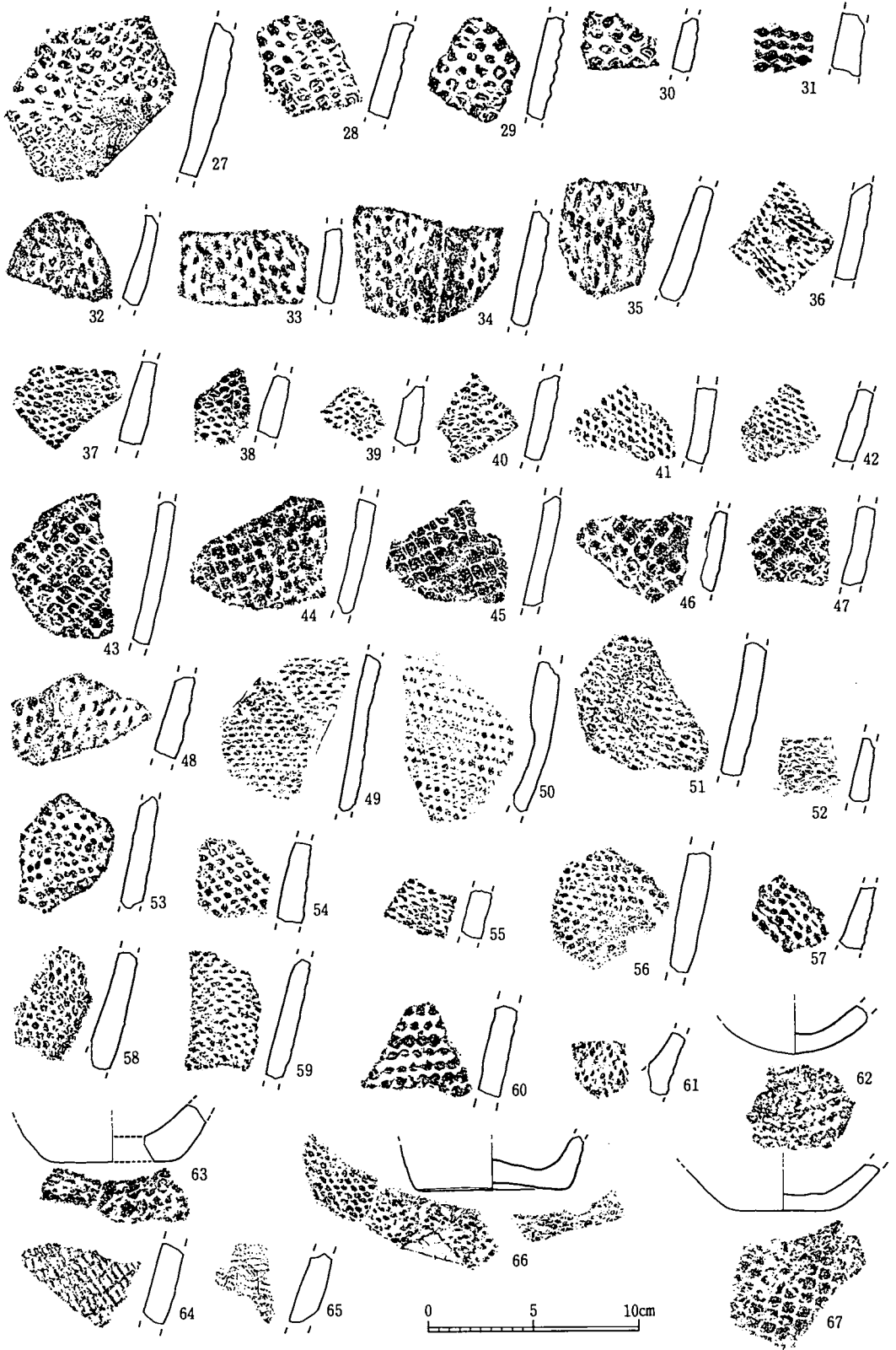


第118図 遺物分布図 (押型土器・山形文)

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

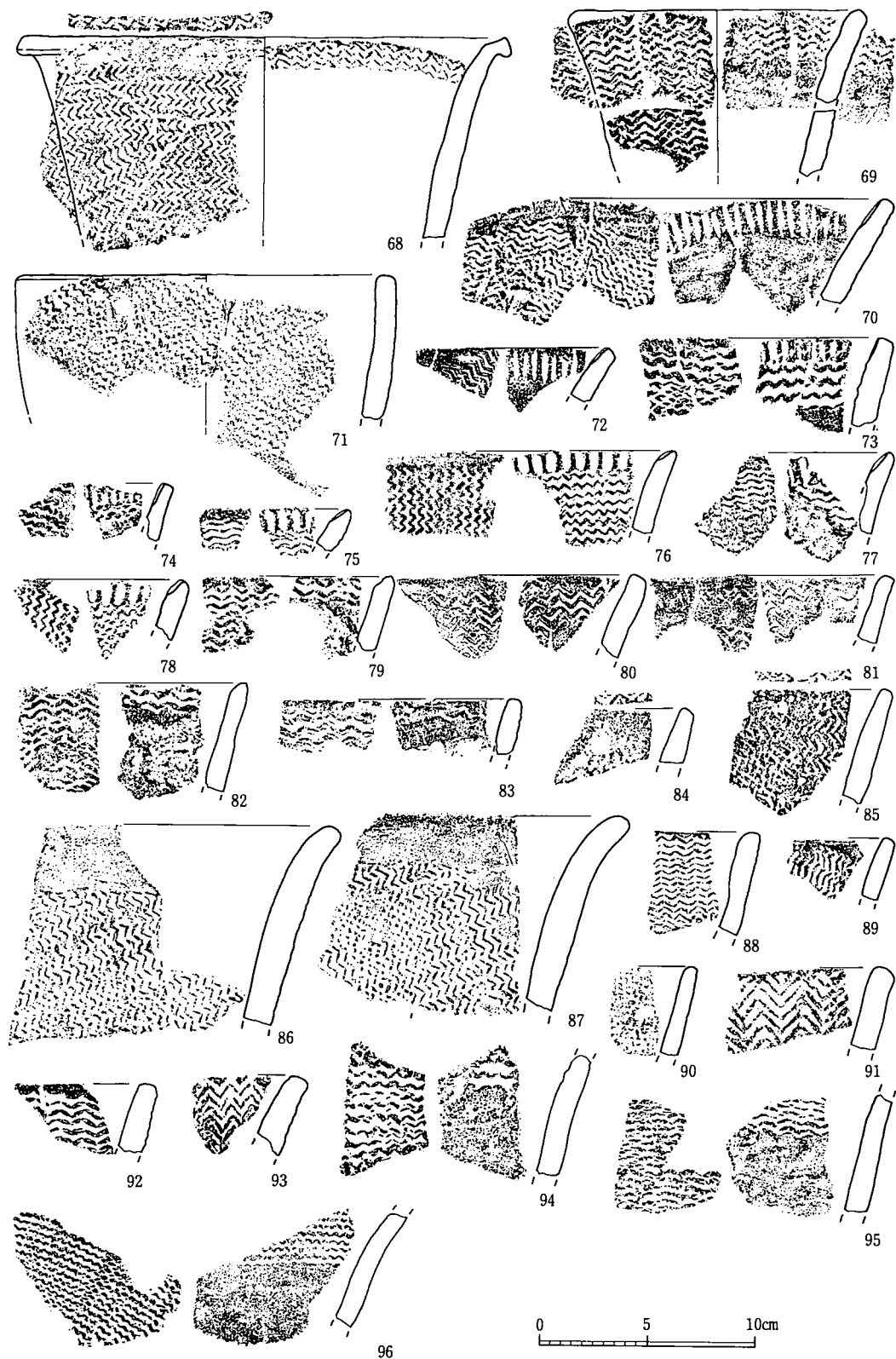


第119図 縄文式土器実測図

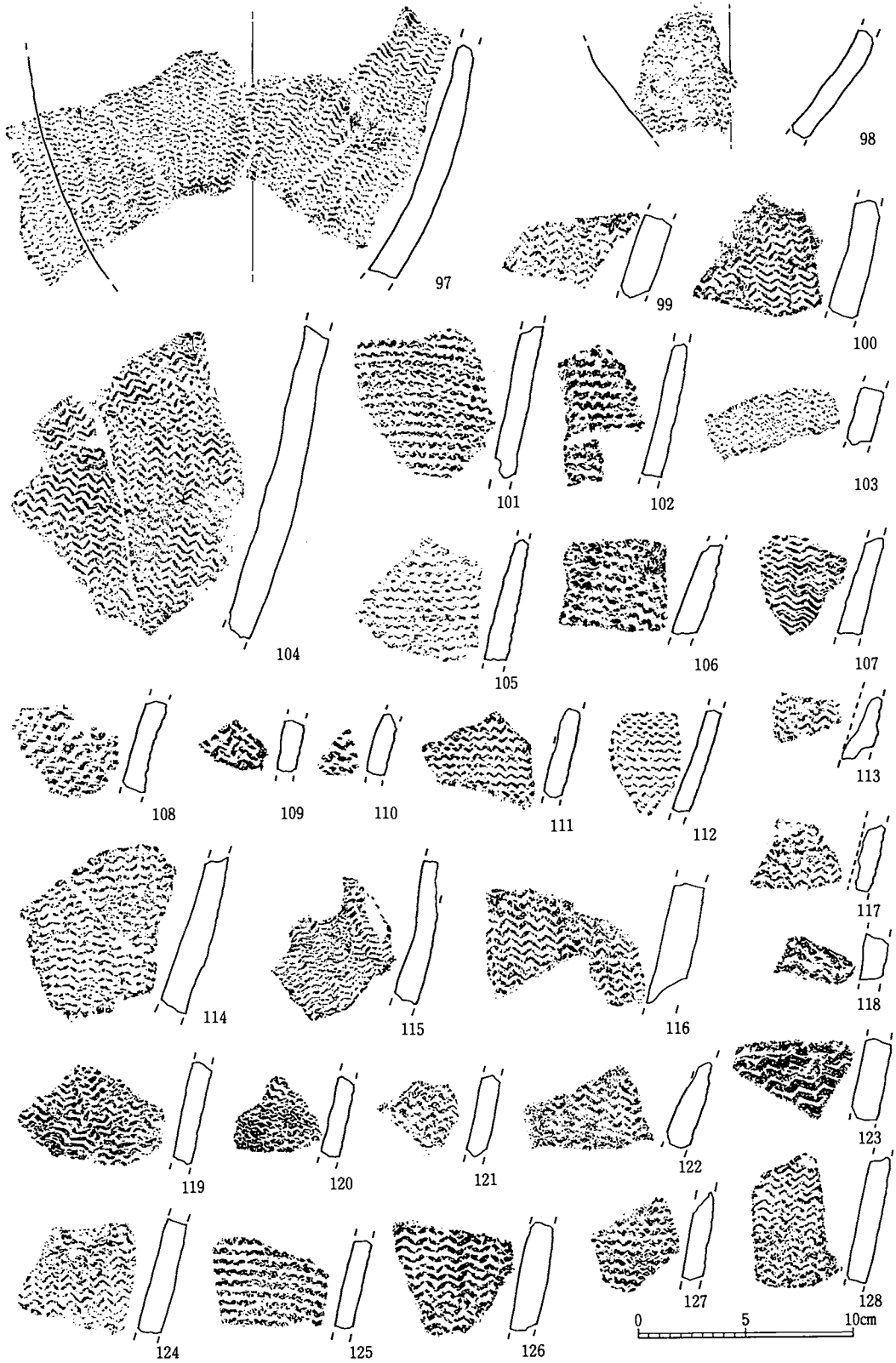


第120図 縄文式土器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

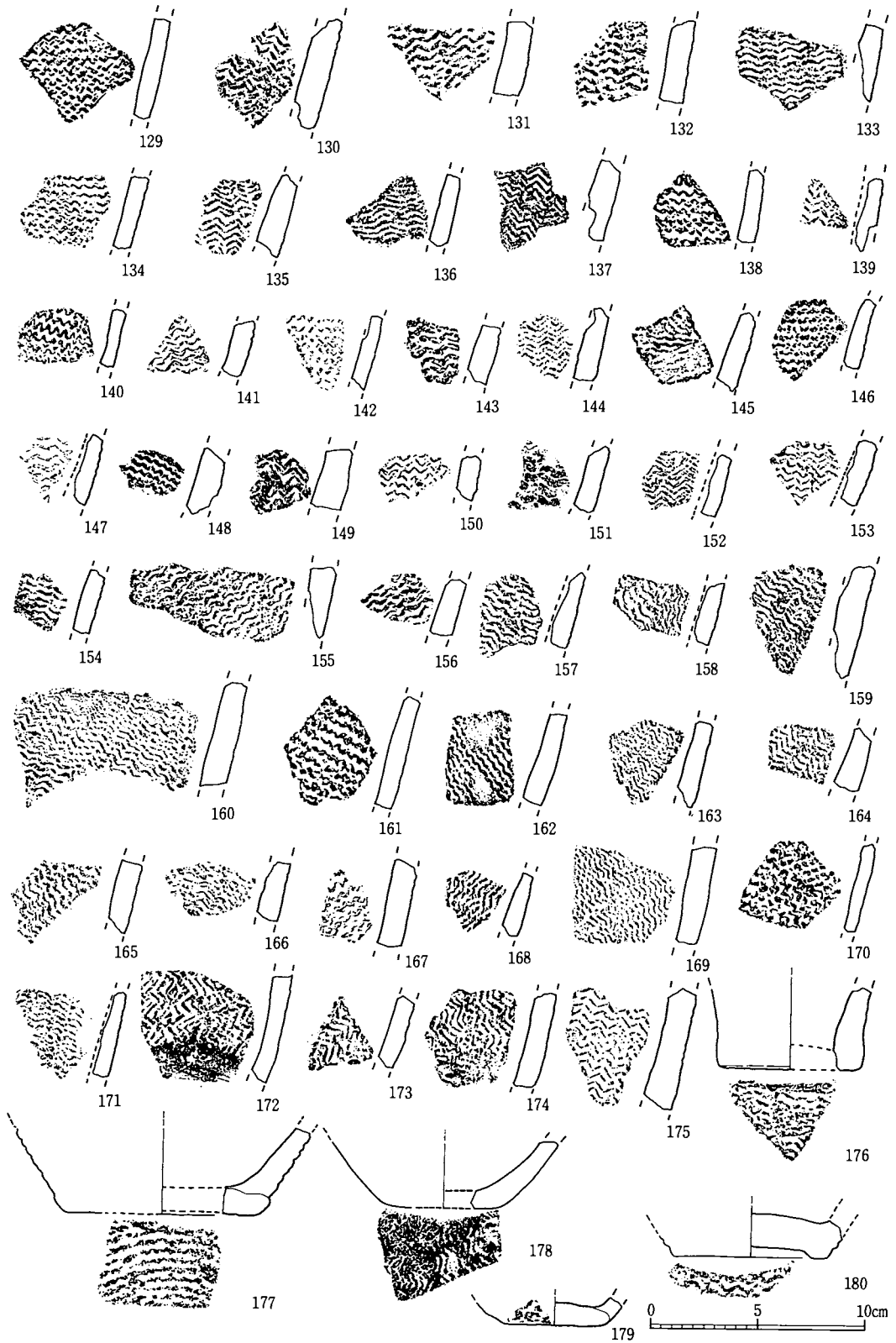


第121図 縄文式土器実測図

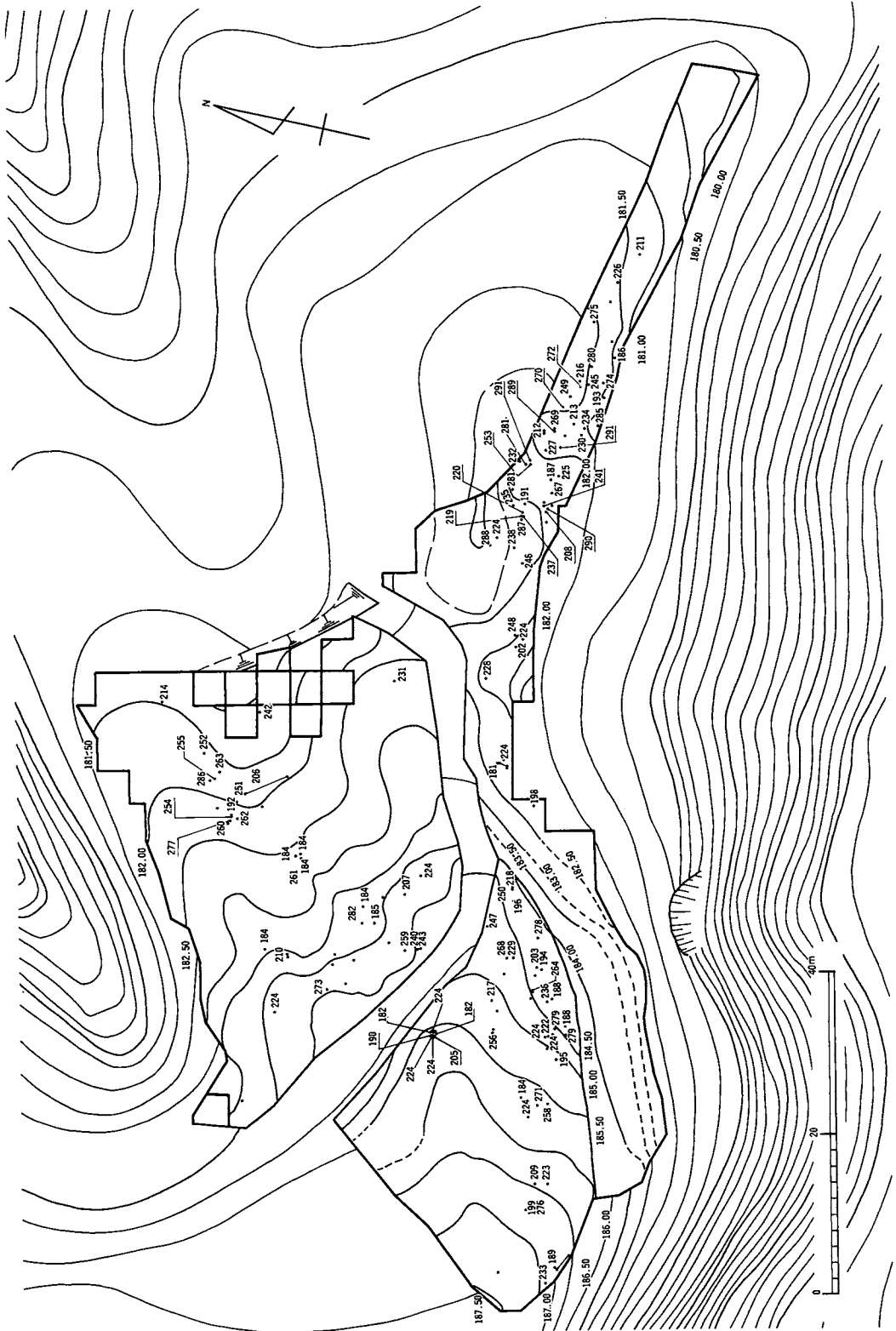


第122図 縄文式土器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第123図 縄文式土器実測図



第124図 遺物分布図 (円筒形条痕土器)

山形文の押型文土器 (68～180)

山形文の土器は、174点が出土した。その分布は、楕円文のそれよりも、さらに広範囲になり、西側丘陵の西半分や、竪穴式住居跡群のある184.00mの等高線付近にまで、分布がみられる(第118図)。

土器の器形は、深鉢形をとるが、大型のもの(68・71)と小型のもの(69)がある。口縁部の形態には、口縁端部が外へ折れるもの(68)、やや内湾気味のもの(71)、やや外反するもの(69・86・87)、直口するもの(70・73・74・76～85・88～93)がある。一方、胴部の形態では、ほとんど胴が張らないもの(104)と胴張りのもの(97)がある。しかし、この口縁部と胴部との対応関係は、わからない。口縁部の内面の文様では、山形文が施文されているもの(68～83)、原体条痕施文のもの(70・71)、両者が併用されるもの(72～79)、施文されないもの(84～93)がある。

底部は、すべて平底であるが、その中で、180は、上げ底をなし、特異である。また、176は、底面がはずれているものである。この資料から、土器の器面の作り出し方には、粘土板の縁辺上から作り上げるもの(177・179)と側面からのものという、2種類の手法があったことがわかる。

文様の単位では、2単位(68・87・97・104)と3単位(71・76・101)がある。また、原体の直径は、97が0.37cm、71が0.4cm、68と76と101が0.48cm、87と104が0.54cmと割り出せた。

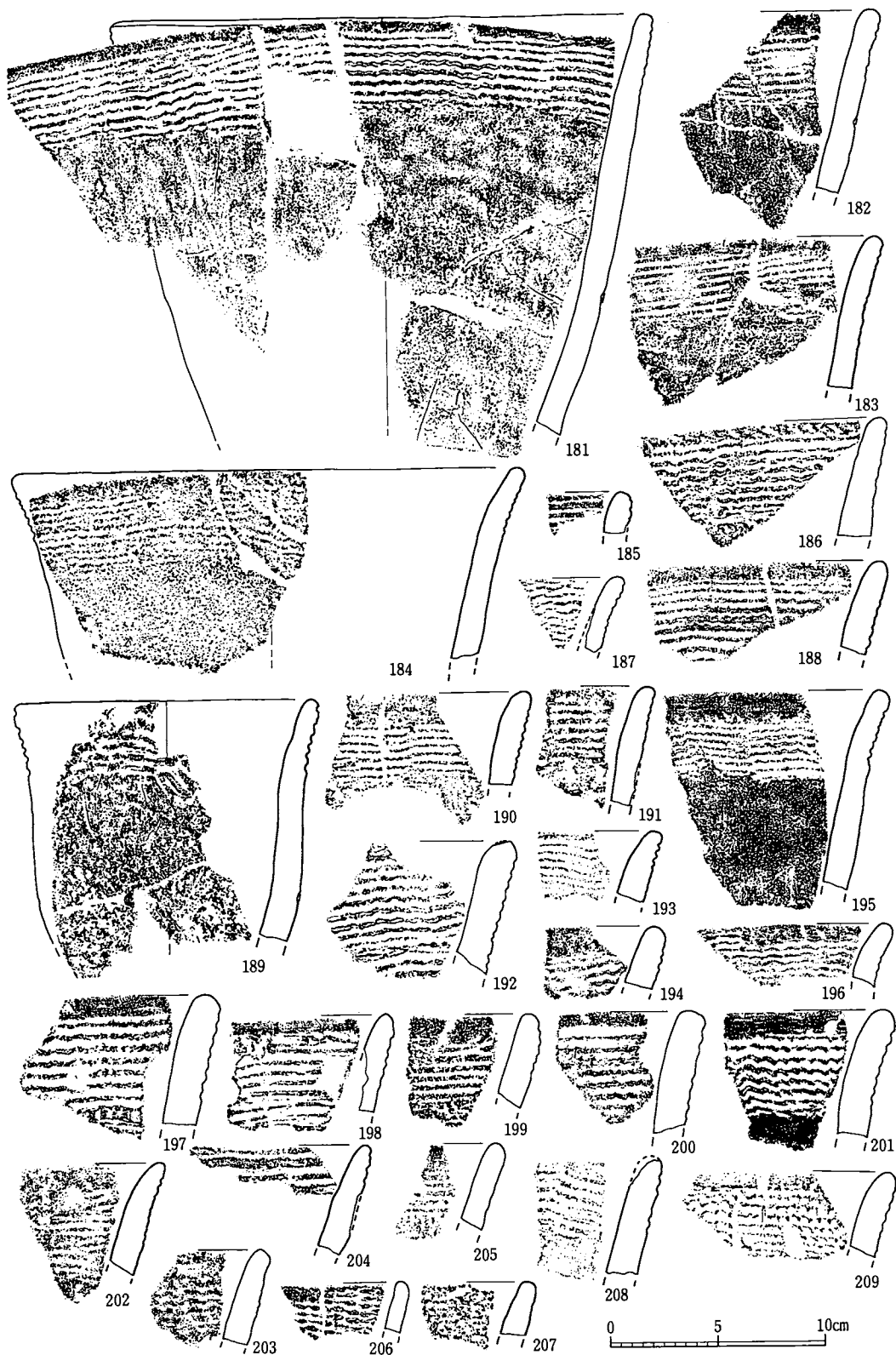
胎土中には、黒雲母や長石の粒子が混入されている。器面の色調は、ほとんどが内外面とも、暗褐色ないし褐色をなしている。内面は、撫で調整によっている。

円筒形条痕文土器 (第125図181～第127図291)

円筒形条痕文土器は、口縁部付近に文様帯を持つ土器で、貝殻による条線文や押し引き文が施文される一群である。調査の結果、この種の土器が、140点検出された。その分布は、遺跡のほぼ全面に広がり、山形文の押型文土器の分布の傾向に類似している(第124図)。

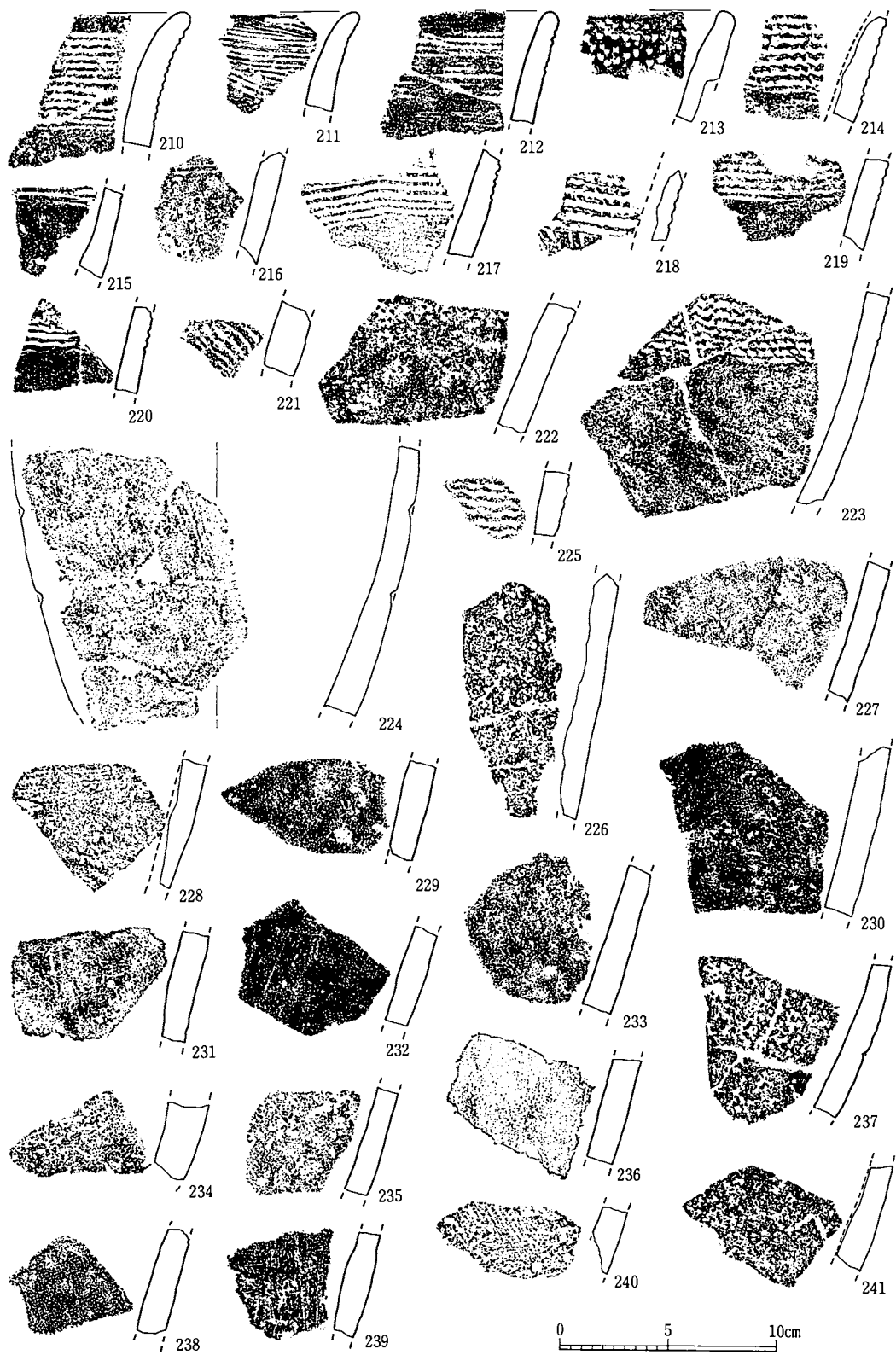
土器は、深鉢形の器形をなすが、大型のもの(181・184)と小型のもの(189)との2種がある。口縁部の形態には、直口するもの(181～183・186・188～195・197～209・212・213)とやや外反気味のもの(184・196・210・211)があり、その端部の状態では、肉厚のもの(197・200・201・208・209)と比較的薄いものがある。しかし、その形状について受ける印象は、かなり斉一的である。このことは、僅かに張りがみられるという胴部(189・224・291)についても言え、全体の器形にかなり類似性があるということを示している。底部は、平底をなし、非常に厚手である(271・191)。また、器壁は厚く、1.5cmを越えるものもある。

文様は、口縁部の文様帯だけにみられ、その施文の仕方によって、三つの種類がある。それは、押し引き文が、単独に近い状態でみられるもの(209・213)、連続した押し引き文によって条線に近い文様となるもの(181・184～188・191～197・200・201・203・205～208・210・



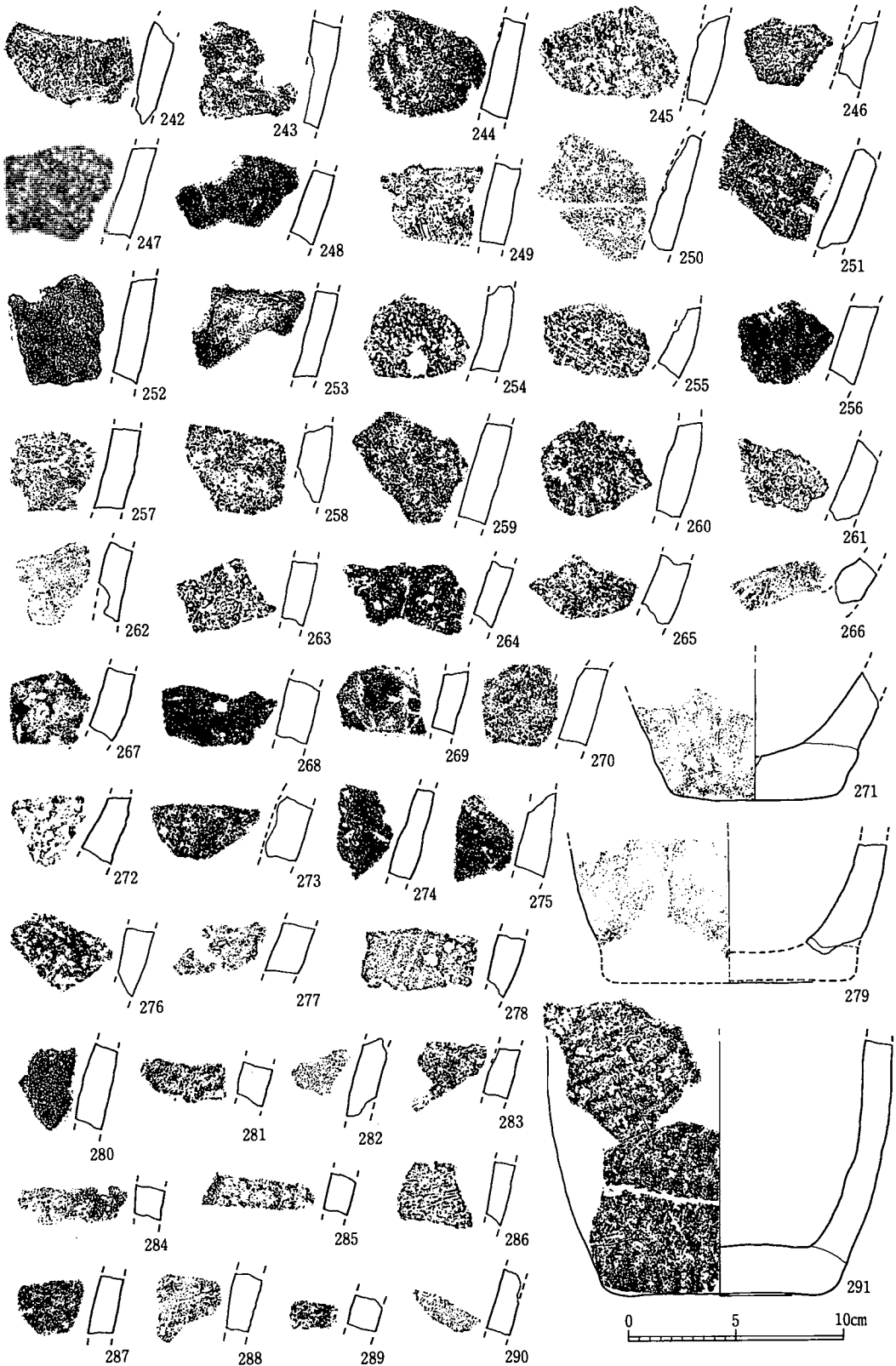
第125図 縄文式土器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



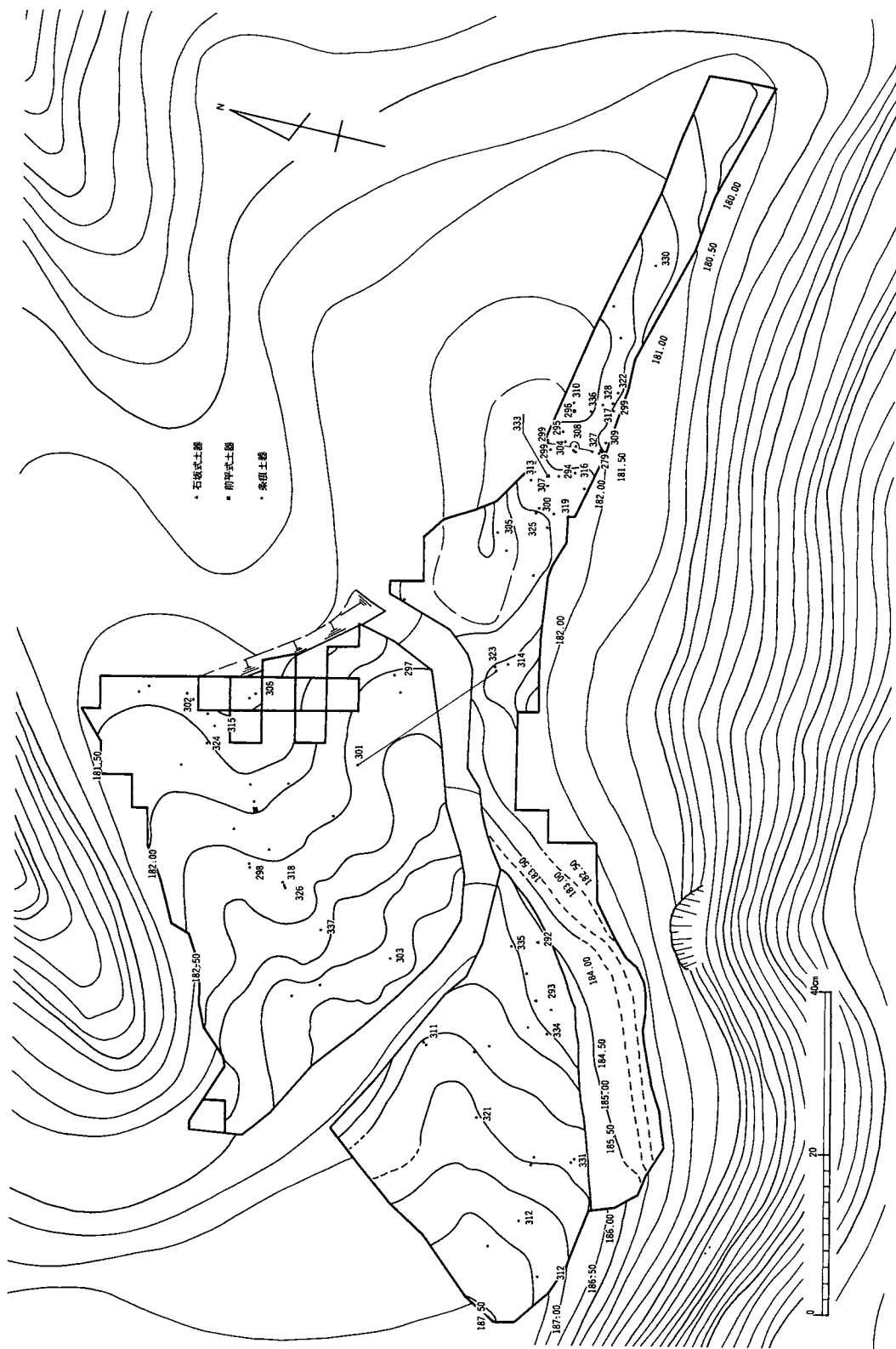
第126図 縄文式土器実測図

第三章 調査の成果



第127図 縄文式土器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第128図 遺物分布図 (石坂式土器・前平式土器・条痕土器)

214・218・221～223・225)、条線文(182・183・189・190・198・199・202・204・211・212・215～217・219・220)である。

胎土は、非常に荒く、黒雲母や長石の粒子の他、1mm大の砂粒を混入させたものが多くみられる。器面の色調は、内外面とも、褐色ないし暗褐色を呈する。また、器面は、内外面とも丁寧に撫でられている。

石坂式土器 (第129図292・293)

石坂式土器と考えられるものが、2点出土している。その出土地点は、両者とも、西側丘陵の南側縁辺部にあり、比較的近接している(第128図)。

292は、土器の胴部である。器面には、石坂式土器に特有な整然と施文された綾杉状の条痕文がみられる。胎土は、比較的均密で、僅かに黒雲母や長石が混入している。器面の色調は、外面が褐色で、内面が暗褐色を呈している。器厚は、0.9～1cmを測る。内面は、丁寧に撫でられている。293は、292と同一個体である。

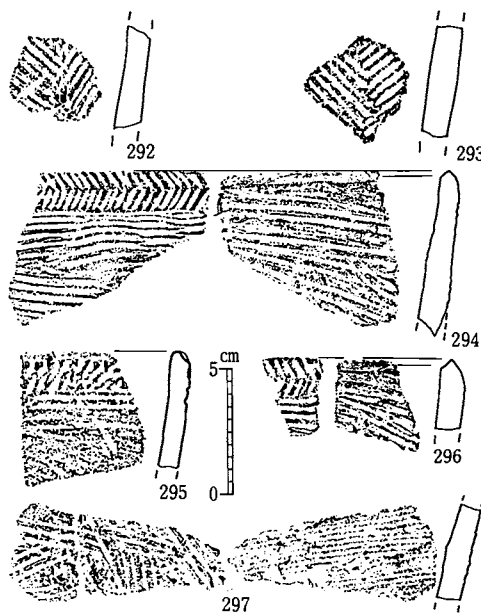
前平式土器 (第129図294～296)

前平式土器は、3点が出土している。その出土地点は、すべて丘陵の東側で、しかも、えぐられるように谷が入り込んだ部分にある(第128図)。

294は、前平式土器の口縁部である。文様帯は、口縁部にみられ、篋状の施文具による綾杉状の刻み目文が施される。そして、それ以外の器面の内外面には、貝殻条痕による調整痕がみられる。胎土は均密で、僅かに黒雲母や石英の粒子が混入している。器面の色調は、内外面とも明褐色を呈し、焼成は、良好である。器厚は、1cmを測る。296は、この土器と同一個体である。295は、口縁部の文様帯に、貝殻の腹縁による刻み目文がみられる。器面には、浅い貝殻条痕がみられ、内面ではさらに、その条痕を弱く撫でている。胎土は、均密で、僅かに黒雲母や石英が混入している。器面の色調は、外面が暗褐色、内面が褐色を呈している。焼成は、295に比べて、悪い。

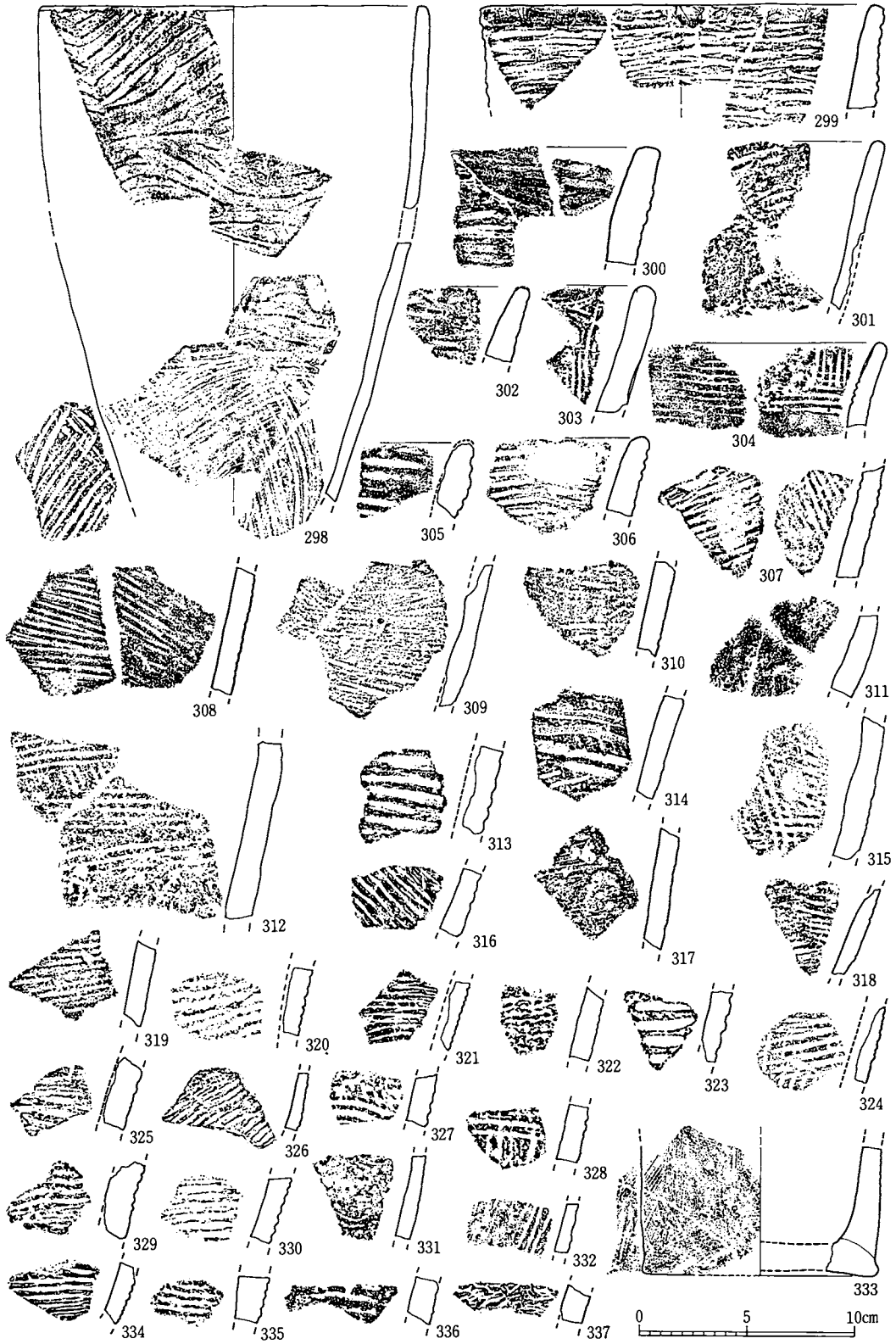
条痕土器 (第129図297～第130図337)

条痕土器は、80点出土した。その分布は、丘陵の中央部や東側丘陵の谷部を中心にして広がりを見せ、楕円文の押型文土器の傾向に類似している(第128図)。

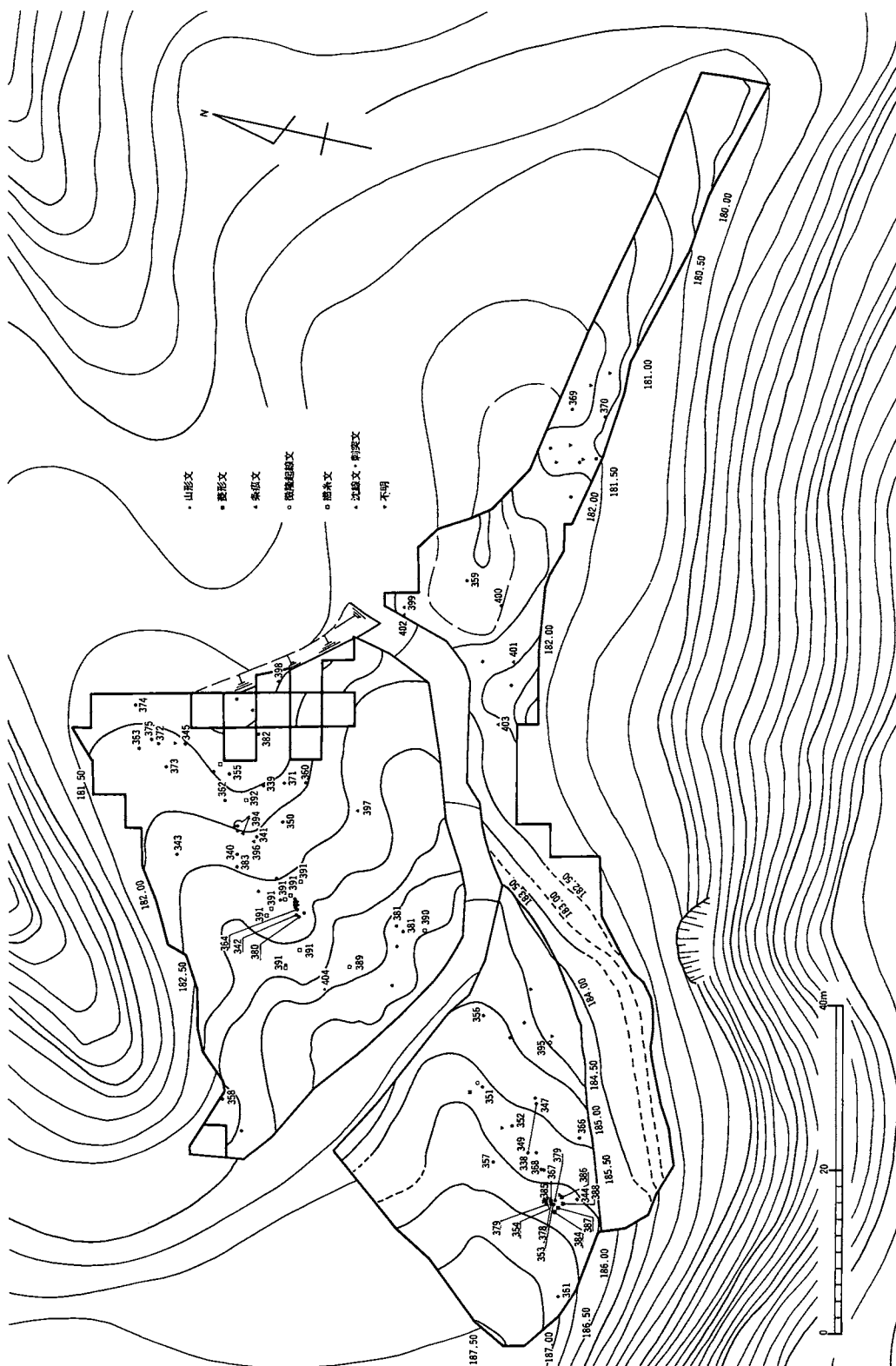


第129図 縄文式土器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第130図 縄文式土器実測図



第131図 遺物分布図 (手向山式土器)

土器の全容を、ある程度示す資料として、298がある。それによると、器形は、口径に対して、器高がやや高く、比較的すなりとした深鉢形を呈している。文様帯は、口縁部から胴部にみられ、文様は、篋状の工具による微隆起線文である。文様の状態には、2種があり、上位の文様帯では綾杉状施文、下位では波状施文である。また、口唇部には、刻み目が施される。また、そのほか、外面では綾杉状の貝殻条痕が残され、内面では不定方向の貝殻条痕の後に、その痕跡が丁寧に撫で消されている。右京西式土器と呼んでおこう。

胎土は均密であり、中に、黒雲母や長石が混入している。器面の色調は、内外面とも暗褐色を呈する。焼成は、極めて良好である。

このほかの土器は、ほとんどが小破片である。口縁部は、すべて直口し、丸みをもった端部である(299~306)。内面は、ほとんど撫でられているが、1例のみに口縁部の裏面に条痕をもつものがある(304)。底部は、平底をなす(333)。条痕の状態では、太く荒いものから削痕状の細かいもの(309・333)まで多様であり、条線をなすものもみられる。

胎土には、黒雲母や長石を多く混入している。焼成は、一部のもの(301・312)を除けば、ほとんどが良好である。器面の色調は、内外面とも褐色を呈するものが多いが、黒褐色を示すものもある(299)。

手向山式土器(第132図338~第133図404)

手向山式土器は、丘陵の谷部を中心に、114点が検出された。分布の傾向は、山形文の押型文土器のそれに類似している(第131図)。さらに、これらの土器は、文様の特徴によって、6種類に分けられる。以下、それぞれの土器についてみていきたい。

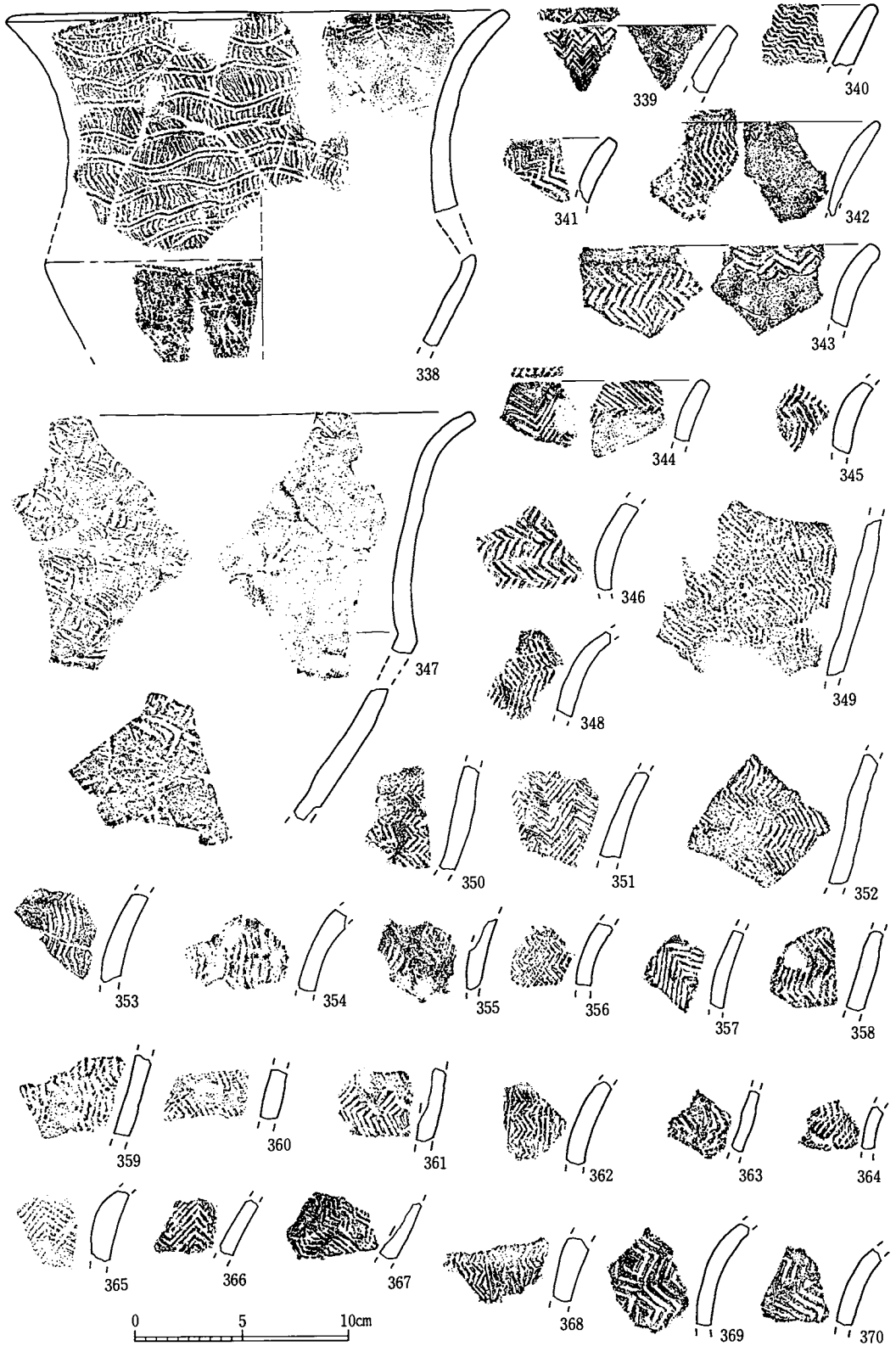
山形押型文の手向山式土器(338~346・348・349・350~303)

山形押型文が施文された土器は、70点が検出された。分布は、先に示しておいた、手向山式土器の分布の基本をなしている(第131図)。

338は、土器の全体像を示す資料である。器形は、胴部が強く屈曲した後、内湾しながら、外反する口縁部へ続くという、手向山式土器の典型的な形状を呈している。文様帯は、胴部屈曲部より上位に限られ、その文様は、地文となる縦位施文の山形押型文と、半裁竹管による9本の波状の沈線文とを組み合わせ、施文されている。この他、口縁裏面にも、横位施文の山形押型文がみられる。また、これ以外の内外面では、撫で調整がみられるが、表面には山形押型文の痕跡が僅かに残されている。

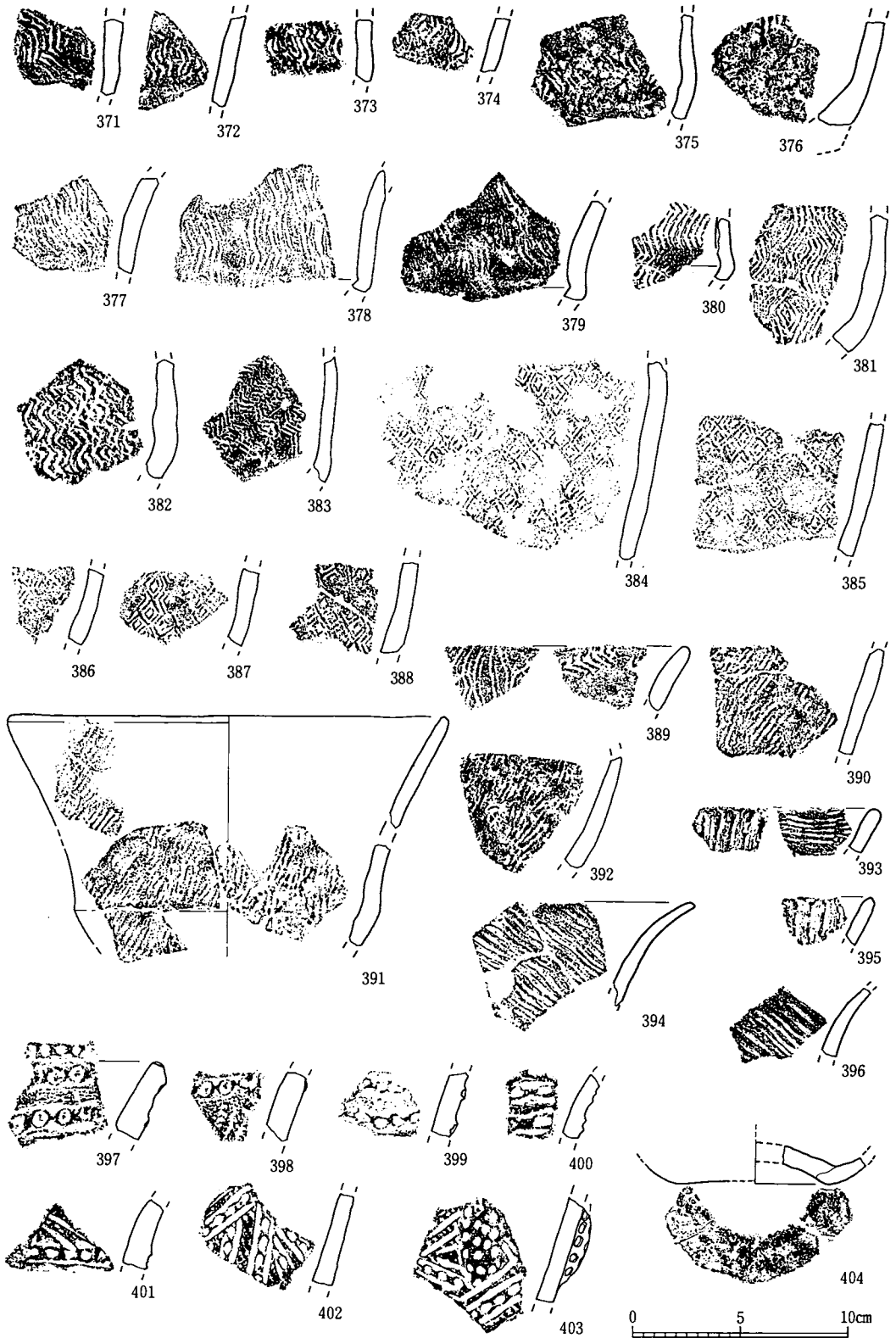
胎土は、黒雲母が混入した、極めて均密な状態を示している。器面の色調は、内外面とも暗褐色を呈している。焼成は、良好である。なお、口縁部の一部には、煤の付着部分も観察される。

このほかの土器は、すべて山形押型文のみの施文である。口縁部(339~344)は、すべて外反している。文様の施文は、内外面の口縁部にみられるもの(399・342~344)と外面のみの



第132図 縄文式土器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第133図 縄文式土器実測図

もの(340・341)とがあり、表面での施文方向には、横位(340・341・351・365366)と縦位がある。また、文様が重なり合って、菱形状になるもの(361・366・367・381)もみられる。この押型文施文の土器の器形も、338と同様と考えられる(378~380)。

菱形押型文の手向山式土器(347・384~388)

菱形押型文の土器は、6点出土した。その出土地点は、西側丘陵にある(第131図)。器形は、山形押型文の土器と同様の形状を呈している(347)。文様には、粗雑で大型のもの(347)と整然とした小型のもの(384~388)がある。

胎土は粗で、黒雲母や石英が混入し、1mm大の砂粒も多い。器面の色調は、明褐色を呈する。焼成は、不良である。また、384には、煤の付着がみられる。

撚糸文の手向山式土器(389~392)

撚糸文の土器は、11点出土した。その出土位置は、丘陵中央部の北側谷部を中心とした部分である(第131図)。器形は、胴部が弱く屈曲し、ほとんど内湾せずに口縁部へ至る形状を呈している。撚糸は、rの撚りである(390・392)。

胎土は、均密で、黒雲母と長石が混入している。器面の色調は、暗褐色を呈する。焼成は、良好である。

微隆起線文の手向山式土器(393・395)

篋状の工具によって作り出された文様を持つもので、口縁部の2点が検出された。出土地点は、西側丘陵にある(第131図)。胎土は、均密で、僅かに黒雲母や石英がみられる。器面の色調は、内外面とも褐色を呈し、焼成は、良好である。393は、裏面に撚糸文の施文がみられる。

沈線文と刺突文の手向山式土器(397~403)

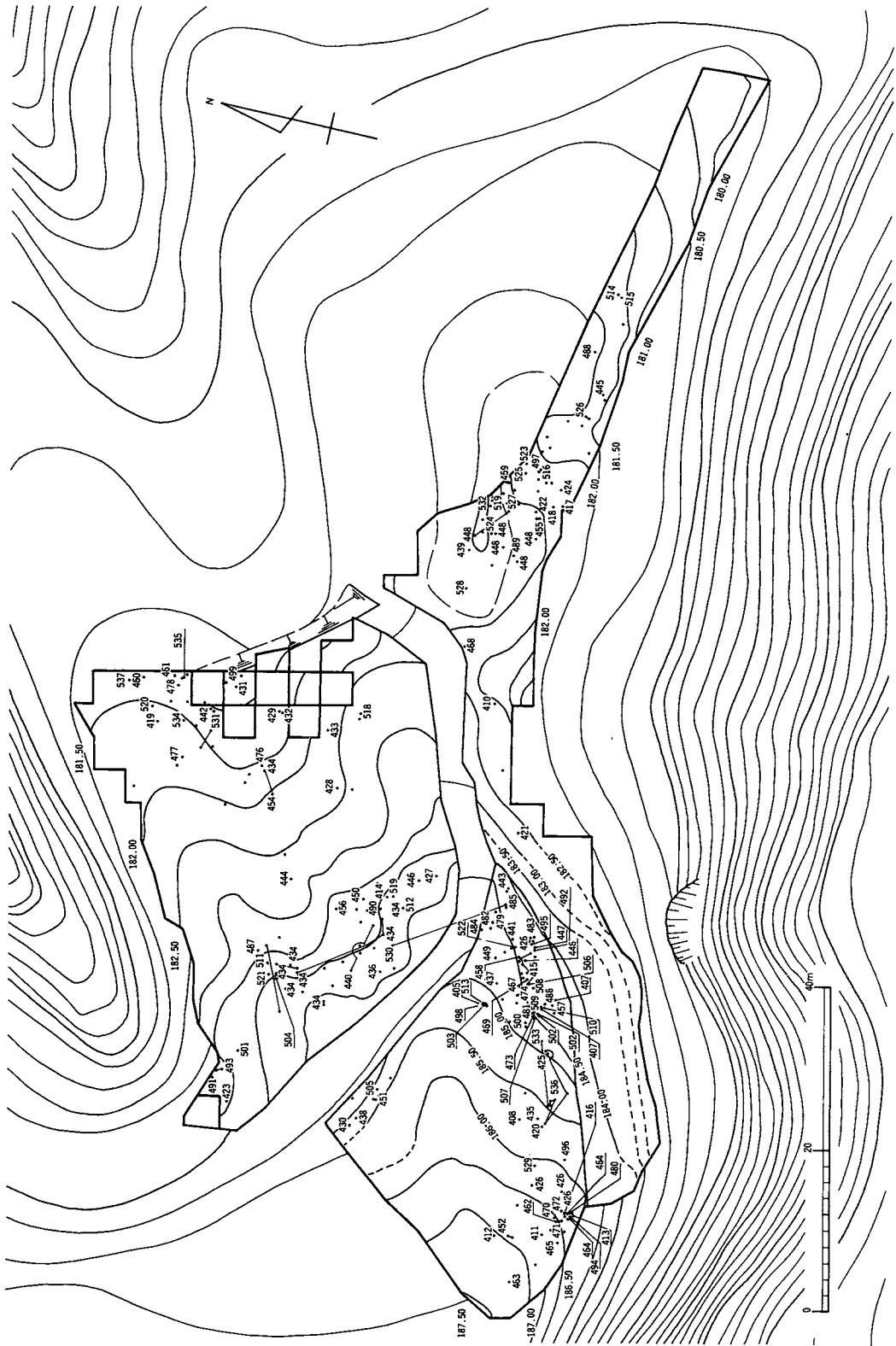
沈線文と刺突文の土器は、7点検出された。その出土地点は、ほとんどが丘陵中央で南へ開口する谷の周辺にあり、散在している。施文具は、竹管(397・398)と棒状工具(399~403)の2種類がある。文様の種類には、隆帯文上の刺突文(398~401)や沈線文と刺突文の併用(402・403)があるが、これらは、401の資料が示すように、施文部位の違いによると考えられる。なお、403の資料は、口縁部近くの部位と考えられるが、こぶ状の隆起部が付く土器である。

胎土は、均密で、黒雲母や石英が混入している。内外面の器面の色調は、明褐色のもの(397・398)と褐色のもの(399~403)がある。焼成は、いずれも良好である。

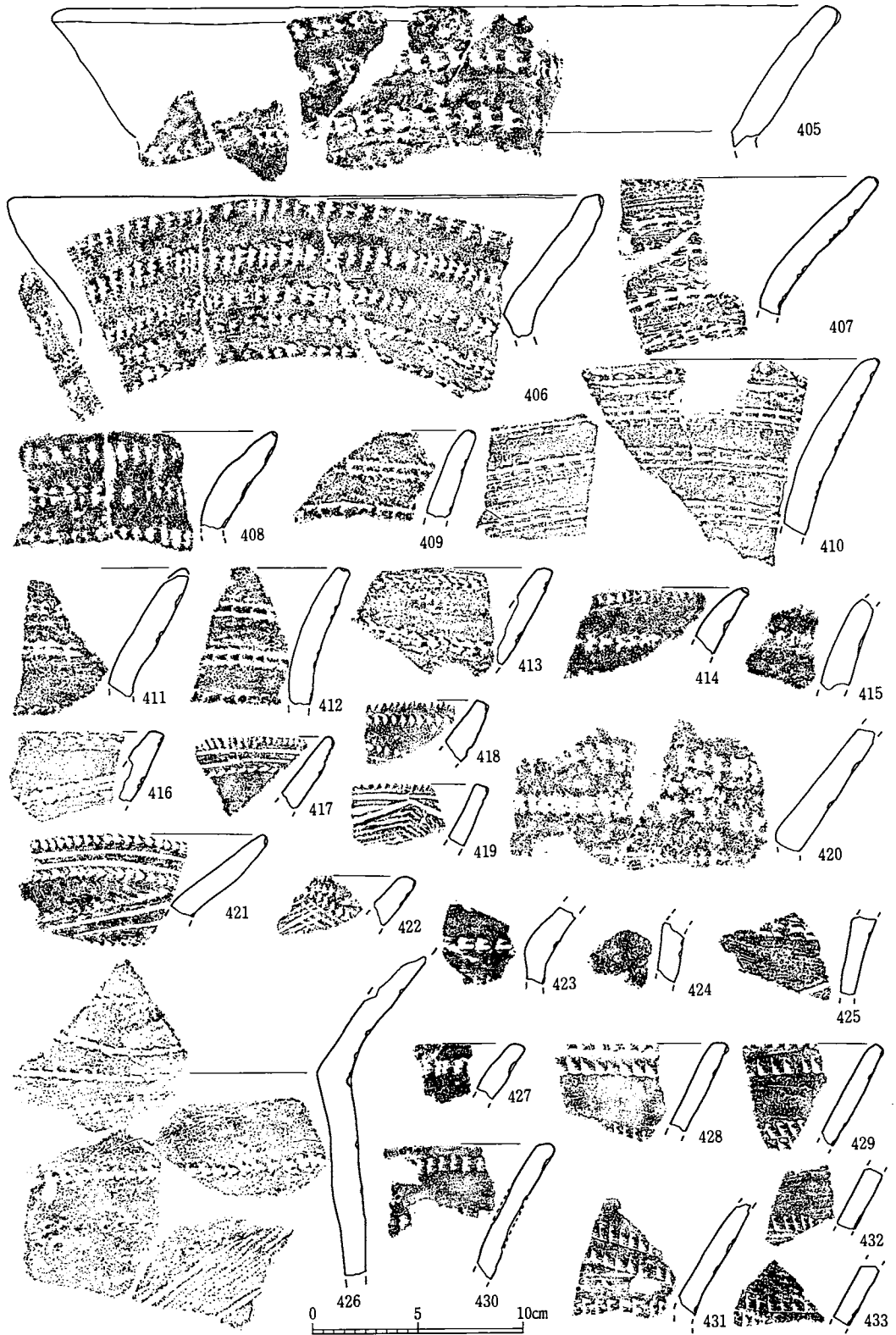
条痕文の手向山式土器(394・396)

条痕文の土器は、4点出土した。いずれも、口縁部かそれに近い部位の破片で、その器形の状況は、不明である。出土地点は、丘陵中央部の北側の谷部にある(第131図)。胎土には、黒雲母や長石の他、1mm大の砂粒も混入し、粗である。器面の色調は、内外面とも暗褐色を呈する。焼成は、不良である。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第134図 遺物分布図 (塞ノ神式土器)



第135図 縄文式土器実測図

所屬不明の土器 (404)

その所屬がわからないものが、14点ある。そのほとんどは、器面の状態が悪いものであるが、1例だけ底部(404)がある。底部は、平底で、しかも本格的な上げ底である。胎土は、均密で、黒雲母を僅かに混入している。器面の色調は、外面が褐色、内面が黒褐色を呈する。焼成は、不良である。この土器の上部の文様などについては不明であるが、胎土や色調などの特徴から、撚糸文の手向山式土器391と同一個体である可能性が高い。

塞ノ神式土器 (第135図405～第138図537)

塞ノ神式土器は、289点出土した。その分布は、山形押型文土器や手向山式土器などの分布の傾向に類似し、丘陵の谷部を中心に広がっている(第134図)。

出土した土器は、ほとんどが撚糸文を施文した土器にあたる。そこでまず、土器の特徴について、口縁部や胴部などの部位ごとにみていきたい。

405～408は、口縁部から頸部にかけて、貝殻の腹縁による押し引き文が施文されている土器で、その施文帯の本数は、405が4本、406が5本、408が3本以上である。この土器の胴部についてはわからないが、おそらく、貝殻の腹縁による条痕ないし条線が施されていると考えられる。411～416や420も同じようなものであろう。この種の土器の頸部は、比較的鋭い屈曲を示す。

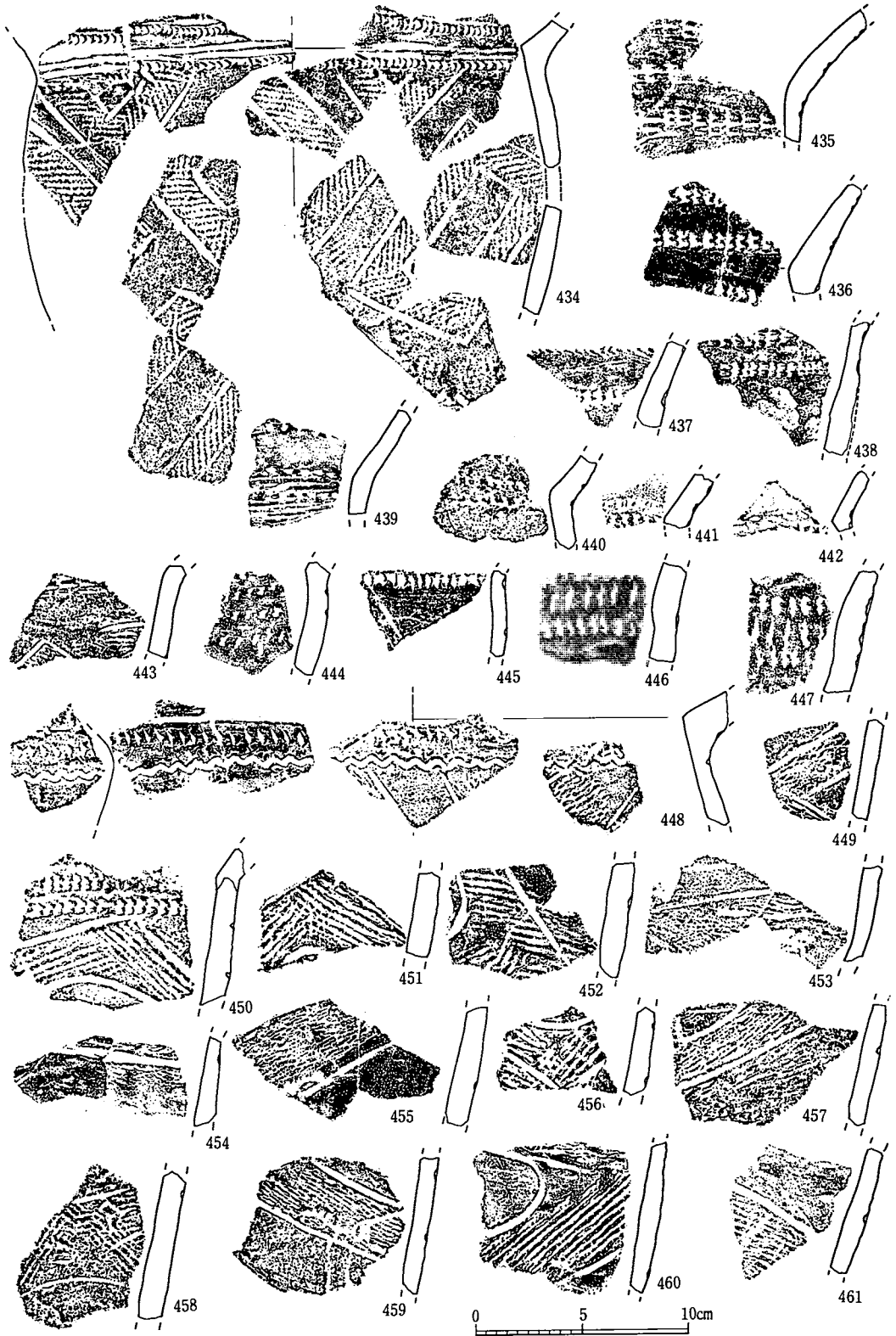
409や410も、口縁部から頸部にかけて、貝殻の腹縁の押し引き文が施文される土器である。しかし、その文様は、先に示しているものとは異なり、比較的軽く、しかも連続した状態をとっている。頸部の屈曲も弱く、緩い曲線をとっている。これに続く、胴部の文様についてはわからない。

上記した2種類の土器は、口縁端部が丸みを持って作られている。これに対して、427～430は、口縁端部に面がみられる土器である。口縁部から頸部にみられる押し引きの状態も、上記したものとは異なり、堅く、鋭く刻まれた感じを受ける。頸部の屈曲の状態については、わからない。

このほか、口縁部から頸部の文様では、さらに押し引き文と沈線文が併用される土器(417・418・421・422)や沈線区画の撚糸文を施文する土器(419)がある。胴部の文様は、沈線区画の撚糸文を持つものと考えられる。

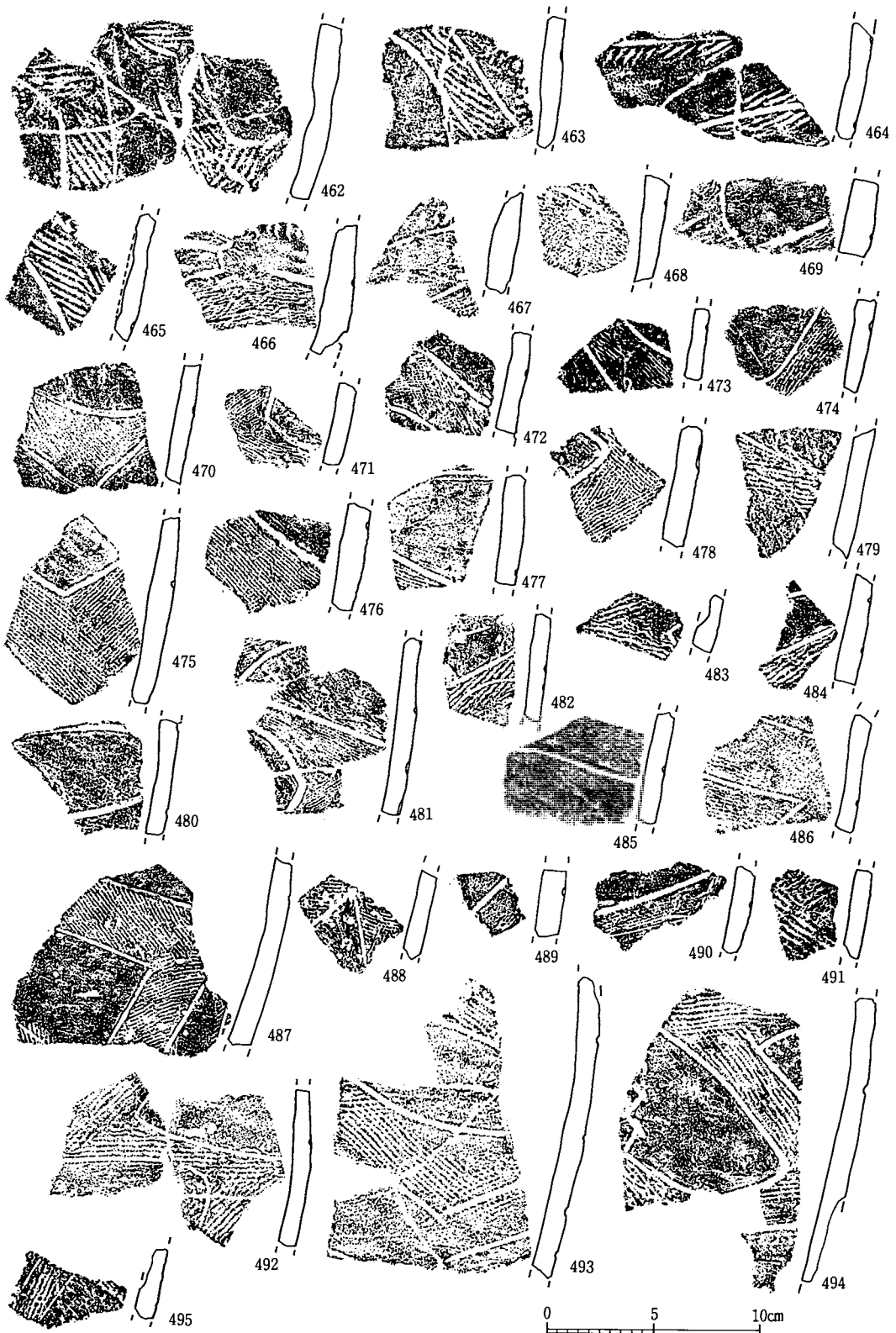
次に、胴部についてみてみよう。434は、その状態を良くつかむことのできる土器である。胴部は、球形に丸く脹らみ、その全面にわたって、V字形や四角形を単位とし、それぞれが交互に配される沈線区画の撚糸文がみられる。この土器の口縁部から頸部にかけての文様は、僅かに残った部分からすれば、沈線文と押し引き文の併用(417・418・421)と考えられる。こうした胴部文様の区画単位の展開については、他の資料でははっきりとはしないが、区画の形状には、曲線的なもの(460・469～471・481・492～494)もあるようである。

第三章 調査の成果

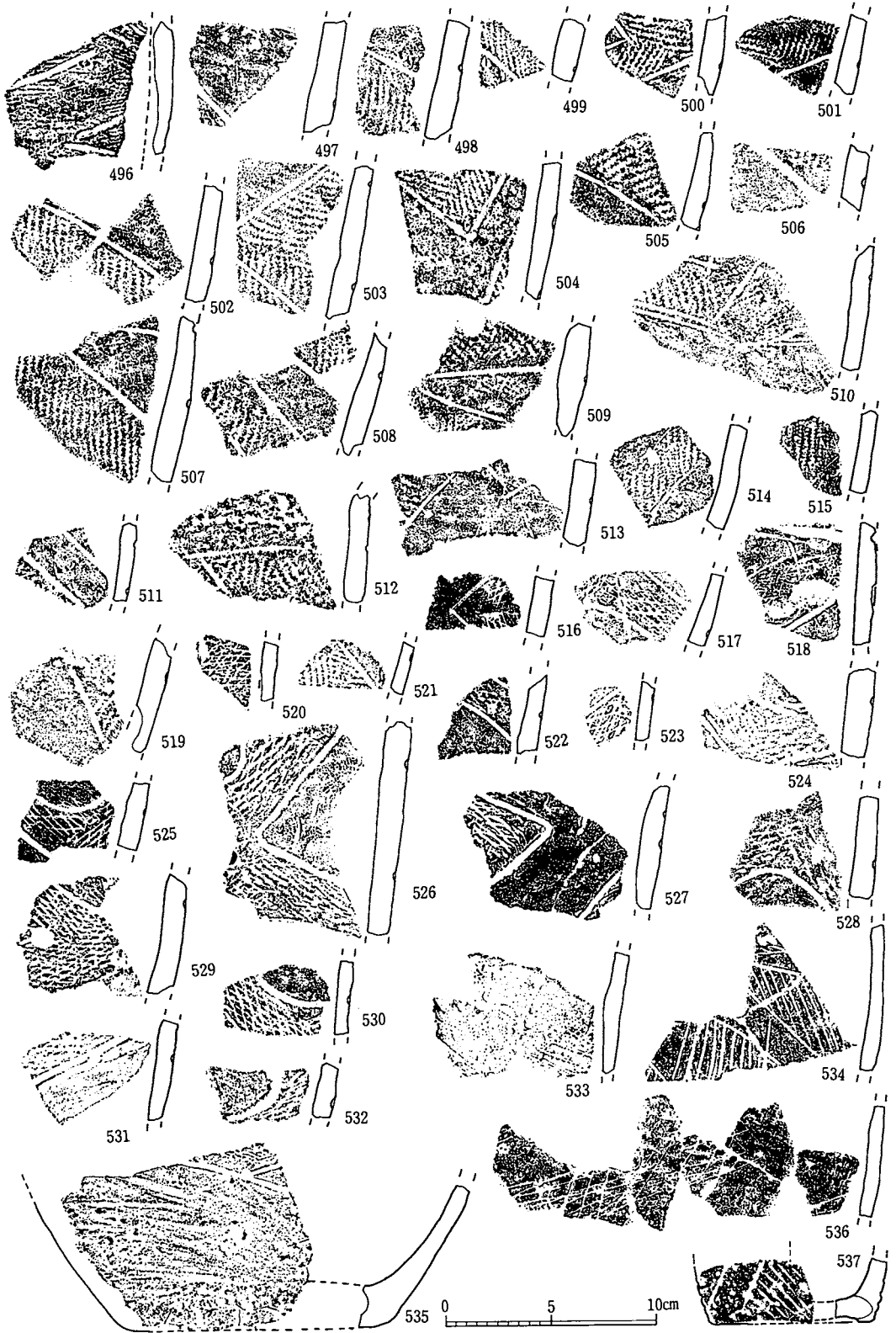


第136図 縄文式土器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第137図 縄文式土器実測図



第138図 縄文式土器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

胴部の文様は、すべて沈線によって区画されているが、文様の状態によって、4種類ある。それは、並行の捺糸文（449～498）、網目の捺糸文（516～518・520・525～532）、縄文（499～519・521）、そして沈線文（533・534・536・537）である。さらに、前3者には、捺りの状態で、捺糸文には、RとLの2種類が、縄文には、RLとLRの2種類がある。

胎土は、黒雲母や石英、長石を混入し、しかも均密である。また、焼成では、捺糸文、縄文そして沈線文を施文するものは良好であるのに対して、胴部に貝殻条痕を持つと考えられる土器（405～508、411～416、420）では、不良である。内面の調整は、すべて撫で調整がおこなわれている。

平椀式土器（第141図538～542）

平椀式土器は、5点出土した。その出土地点は、丘陵の中央部の南側にあり、1例だけは北側の谷部で検出された（第139図）。部位は、すべて隆帯部に棒状工具による刺突がみられることから、胴部上半と考えられる。施文された縄文は、RL（538・541）、LR（539・540）、L（542）がある。

胎土は、黒雲母、長石を含み、均質である。器面の色調は、内外面とも明褐色ないし褐色を呈し、焼成も良好である。内面は、撫で調整によっている。

縄文土器（第141図543～560）

縄文土器は、27点が検出された。その分布は、丘陵中央の南側と北側、そして、西側丘陵に分かれているようである（第139図）。

器形は不明であるが、口縁部が直口し、底部は平底をなしている。原体は、LR（543・547・548・550・552・553・555・556）、RL（545・546・549・551・554・557～560）、L（544）の3種類がある。

胎土は、黒雲母、長石を混入し、均密である。器面は、内外面とも褐色を呈し、焼成は、良好である。内面は、丁寧に撫でられている。

なお、この縄文土器の中には、平椀式土器の胴部破片も含まれているようだ。

捺糸文土器（第141図561～570）

捺糸文土器は、17点出土している。その出土地点は、散在的ではあるが、丘陵中央の北側、西側丘陵、東側丘陵に集まっている（第139図）。

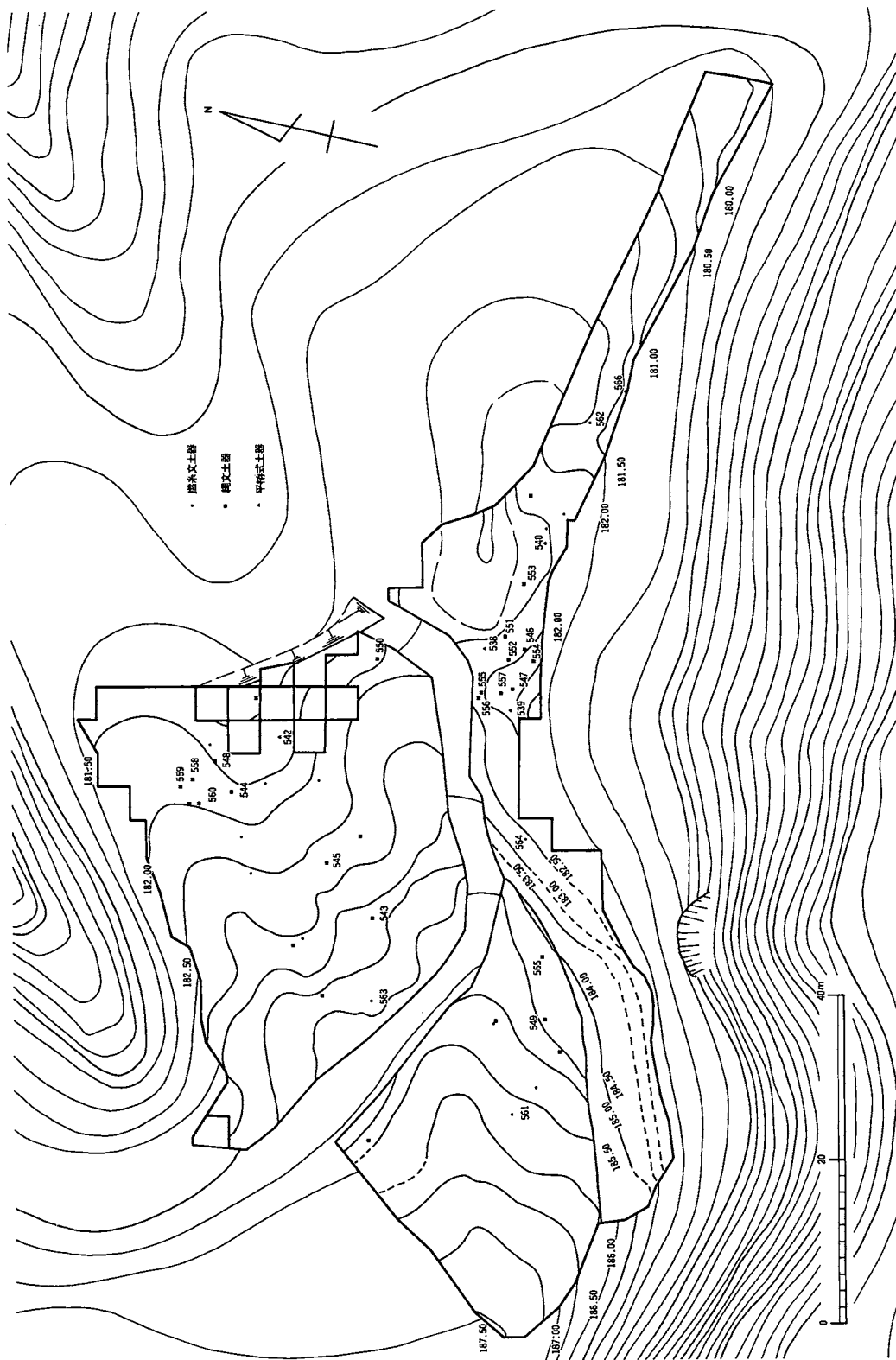
捺糸は、RL（561）、LR（562・563）、R（564）の3種類の原体がある。また、その文様の状態では、組織的なもの（561）もある。おそらく、石峯式土器に相当しよう。

胎土には、黒雲母や長石が混入している。器面の色調は、内外面とも暗褐色から褐色を呈する。焼成は、良好である。

隆起文土器（567）

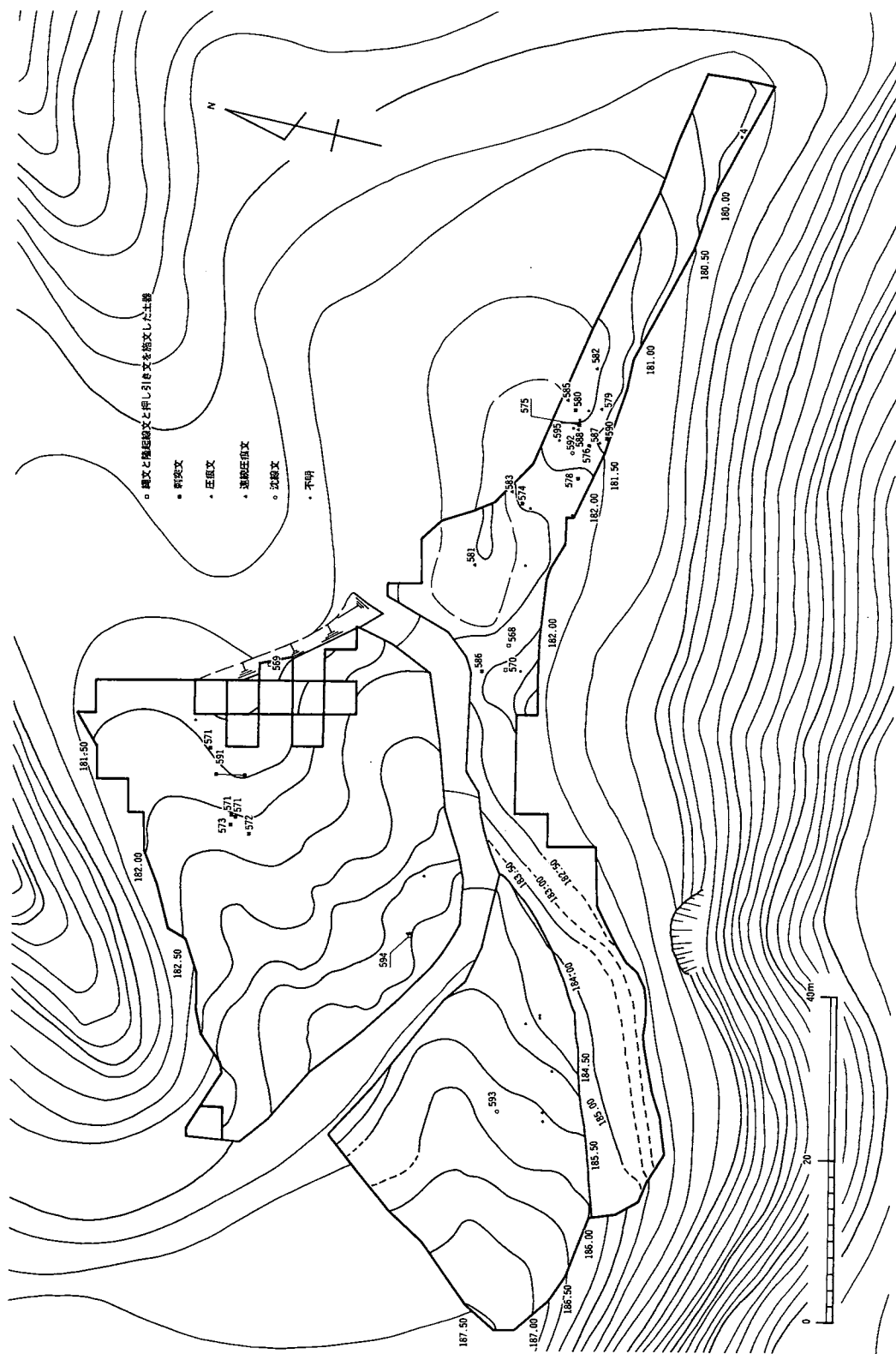
567は、口縁部直下に、粘土紐を張り付けた土器で、1条の隆起文がみられる。攪乱層から

第III章 調査の成果

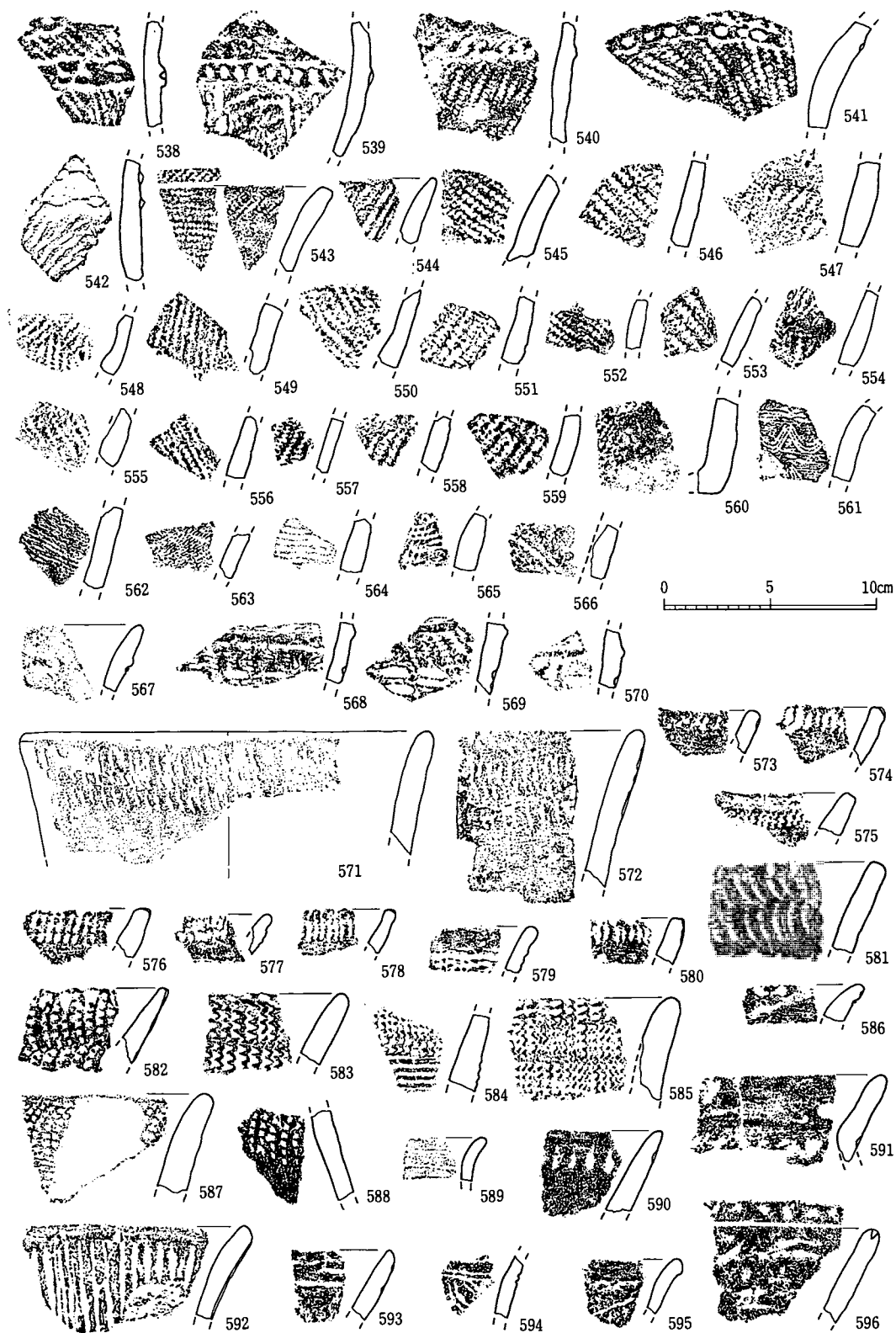


第139図 遺物分布図 (撚糸土器・縄文土器・平椀式土器)

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第140図 遺物分布図（その他の土器）



第141図 縄文式土器実測図

の出土で、出土地点ははっきりしないが、丘陵の西側（ⅧD-4）にある。

胎土には、黒雲母や長石、石英の他、1mm大の砂粒が混入し、粗である。器面の色調は、内外面とも褐色を呈す。焼成は、不良である。また、器面は、内外面とも、丁寧に撫でられている。

この土器と、第3節で述べた隆起線文土器との関係は、不明である。

縄文と隆起文と押し引き文を施文した土器（568～570）

568～570は、縄文（RLの原体）を地文として、その器面に、張り付けによる隆起文と棒状工具による押し引き文を施文した土器である。出土地点は、丘陵中央の南側の谷部と北側の谷部にある（第140図）。

土器は、いずれも同一個体で、相当する土器型式は、不明である。胎土は荒く、黒雲母や大きめの長石の粒子や砂粒を多く混入している。器面の色調は、内外面とも暗褐色を呈し、その面の荒れは激しい。焼成は、不良である。

刺突文土器・圧痕文土器（571～588・590・591・596）

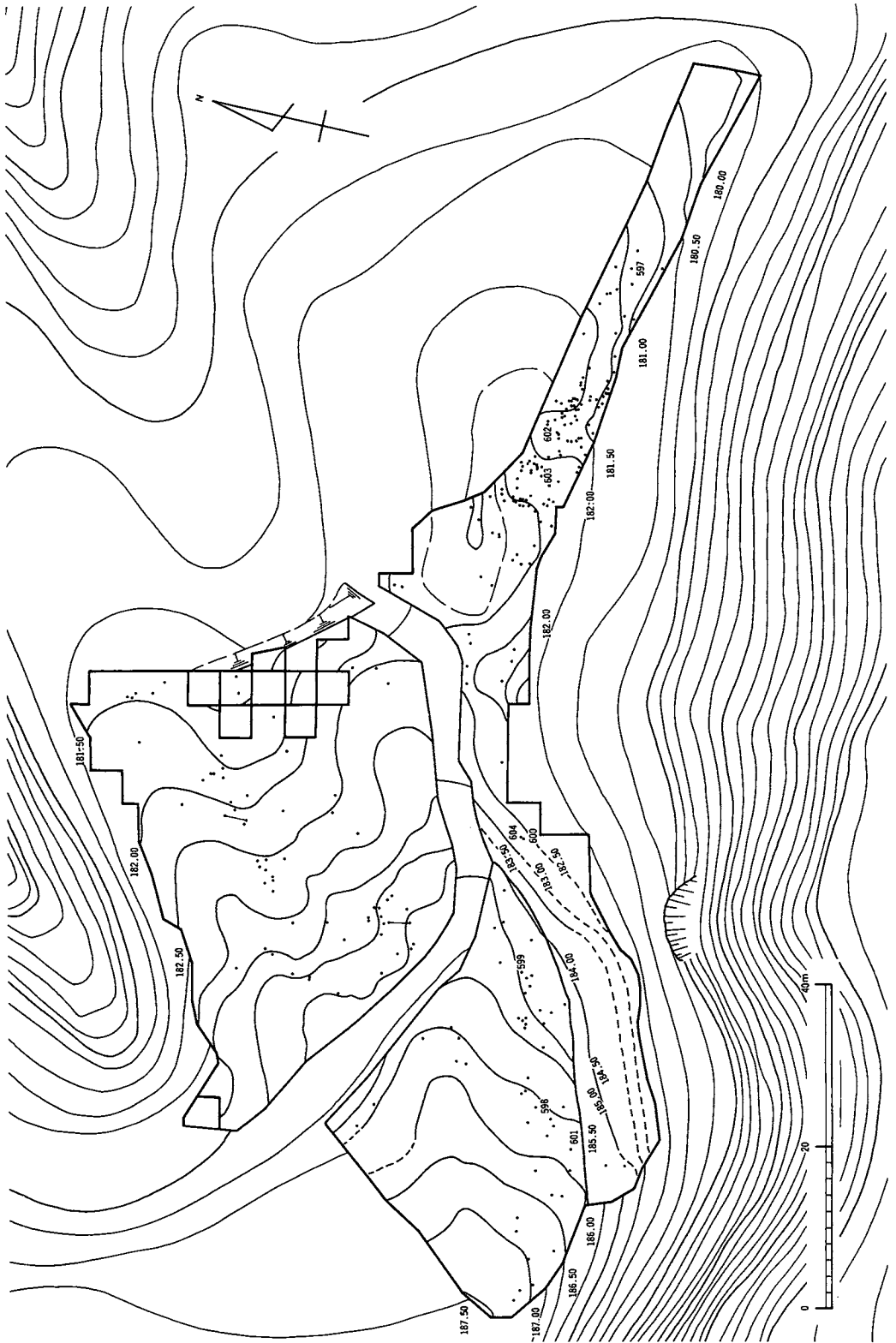
刺突文土器や圧痕文土器は、23点出土している。施文具は、棒状工具と貝殻腹縁とがあり、この中で、後者が圧倒的に多い。また、その施文の状態では、施文具を器面に対して、直角に押し付けるもの（刺突文土器）、斜めに押し付けるもの（圧痕文土器）、圧痕の行為を連続して行なうもの（連続圧痕文土器）がある。以下、その施文の状態ごとに説明を加えていくことにしよう。

刺突文土器（571～578・580・586・590・591・596）は、丘陵中央の北側の谷部と東側丘陵を中心にして、13点が検出された（第140図）。施文具には、貝殻の腹縁（571～578・580）と棒状工具（586・590・591・596）があり、その施文部位には、口縁部（571～578・580・586・590）、頸部の屈曲部（591）、口唇部（596）の3部位がある。

口縁部は、591を除けば、すべて直口している。おそらく、器形は、571のように、円筒形を呈するものと考えられる。胎土は、均密で、黒雲母や長石を混入している。器面の色調は、内外面とも褐色を呈し、焼成も良好である。器面は、極めて丁寧に撫でられている。

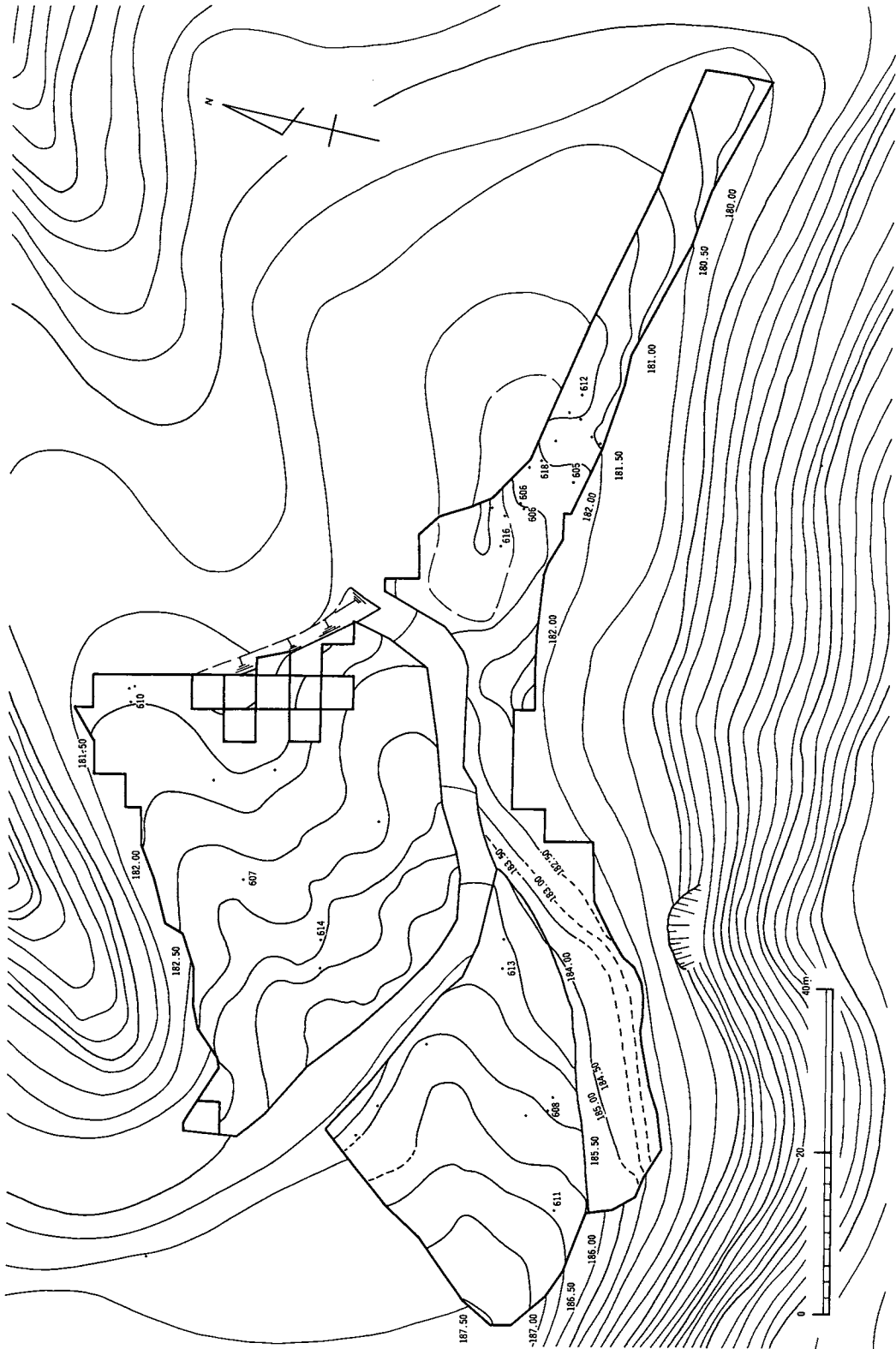
圧痕文土器（581）は、貝殻の腹縁を施文具とするものである。出土地点は、東側丘陵の平坦部にある（第140図）。直口した口縁部に文様帯があり、間隔を置いて施文された圧痕文が、2条観察される。胎土は、均密で、黒雲母や石英が混入する。器面の色調は、両面とも、褐色を呈し、その調整は、荒い撫でによっている。焼成も良好である。

連続圧痕文土器（579・582～585・587・588）は、東側丘陵で検出した土器で、口縁部に文様帯がある。文様は、すべて貝殻の腹縁の施文具で施される。円筒形条痕文土器に類似しているが、584のように、圧痕文の下位に条線文を施文するものがみられる点で、異なりをみせている。



第142図 遺物分布図（無文土器）

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

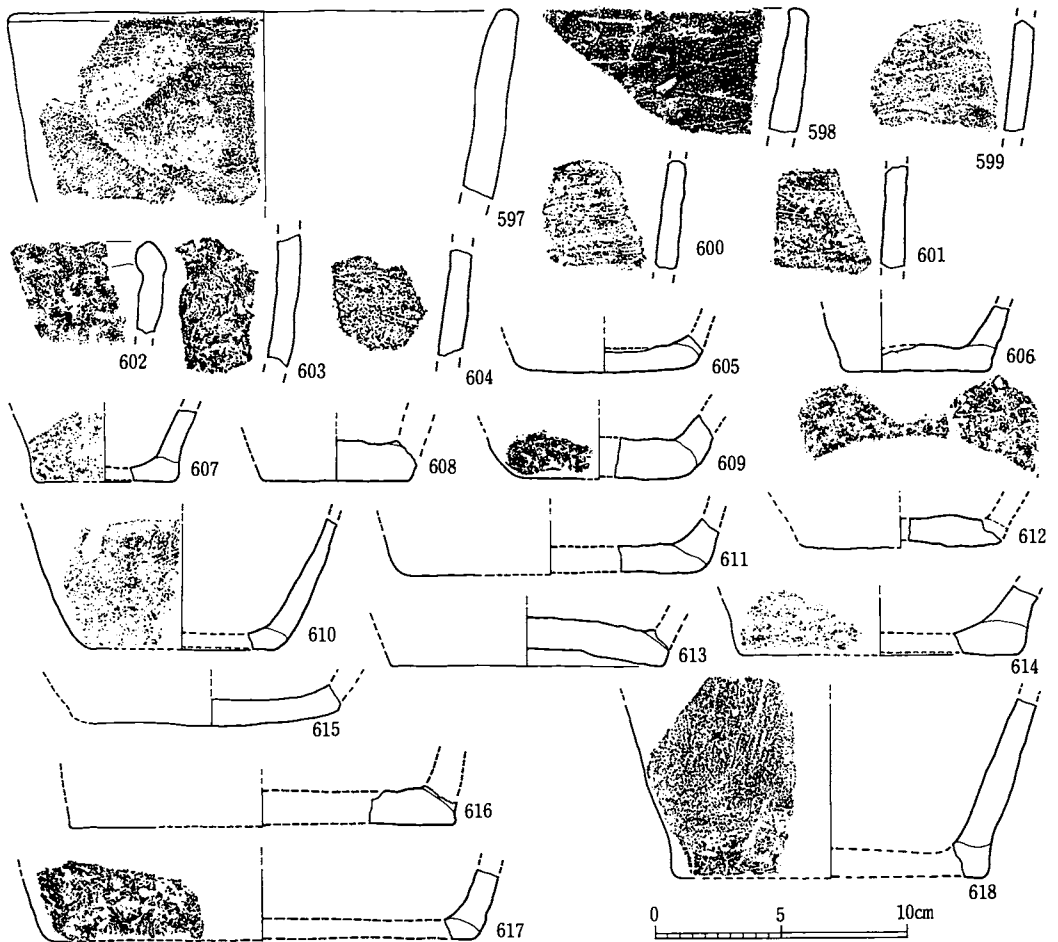


第143図 遺物分布図 (底部)

胎土は、長石が多く混入し、砂粒も多く、荒い。器面の色調は、暗褐色を呈し、その調整は、撫でによっている。焼成は、不良である。

沈線文土器 (598・592~594)

沈線文土器は、西側丘陵と東側丘陵に出土地点がある (第140図)。598は、外反する口縁部直下に3本の細線文がみられる。胎土は均密で、黒雲母や長石が混入する。器面は、丁寧に撫でられ、その色調は、外面が褐色、内面が暗褐色を呈する。焼成は、良好である。592は、東側丘陵で検出した土器で、沈線文は、胴部側から口縁部に向けて引かれている。胎土は、荒く、黒雲母が多く混入する。器面は、両面とも褐色を呈し、丁寧に撫でられている。焼成は、良好である。593は、口縁部直下に横位の沈線文がみられる土器で、西側丘陵で検出している。胎土は、均密で、黒雲母が多く混入する。器面は、暗褐色を呈し、荒く撫でられている。焼成は、良好である。594は、胴部の破片で、半裁の竹管による沈線文が施されている。出土地点は、西側丘陵にある。胎土は、荒く、黒雲母や長石が含まれる。器面は、外面が褐色、内面が暗褐



第144図 縄文式土器実測図

色を呈し、荒い撫でで調整されている。焼成は、不良である。

無文土器（第144図597～604）

無文の土器は、土器全体の分布の傾向に合致して、230点出土した（第142図）。しかし、その中には、少なからず無文部の土器片が含まれていると考えられる。したがって、ここで提示するものは、確実に無文土器と判断できる口縁部に限ることとする。

597は、東側丘陵の8号土坑から出土した無文土器で、円筒形の深鉢形の器形を呈する。口径20.4cmを測る。胎土は、均密で、黒雲母や長石を混入する。器面は、内外面とも、条痕整形の後、荒い撫でを加えて調整している。色調は、両面とも褐色を呈する。焼成は、良好である。

598～601・604は、同一個体の土器で、西側丘陵から検出された。器形は、円筒形の深鉢形を呈すると考えられる。胎土は、荒く、黒雲母や長石が混入している。器面は、丁寧な撫でによって調整され、明褐色の色調を呈している。焼成は、597に比べて悪い。

602と603は、同一個体である。出土地点は、東側丘陵にある。器形は、小型の深鉢形を呈すると考えられるが、その口縁部は正円形をとらず、端部の作り出しもいびつである。胎土は、均密で、黒雲母が混入している。器面は、比較的丁寧に撫で調整が加えられている。色調は、外面が褐色、内面が暗褐色を呈する。焼成は、良好である。

底部（第144図605～618）

ここに示している底部は、型式不明のものである。器面は、粘土板の縁边上から作り上げられている。また、底部径からすれば、大型のものと小型のものがみられる。

(2) 石器

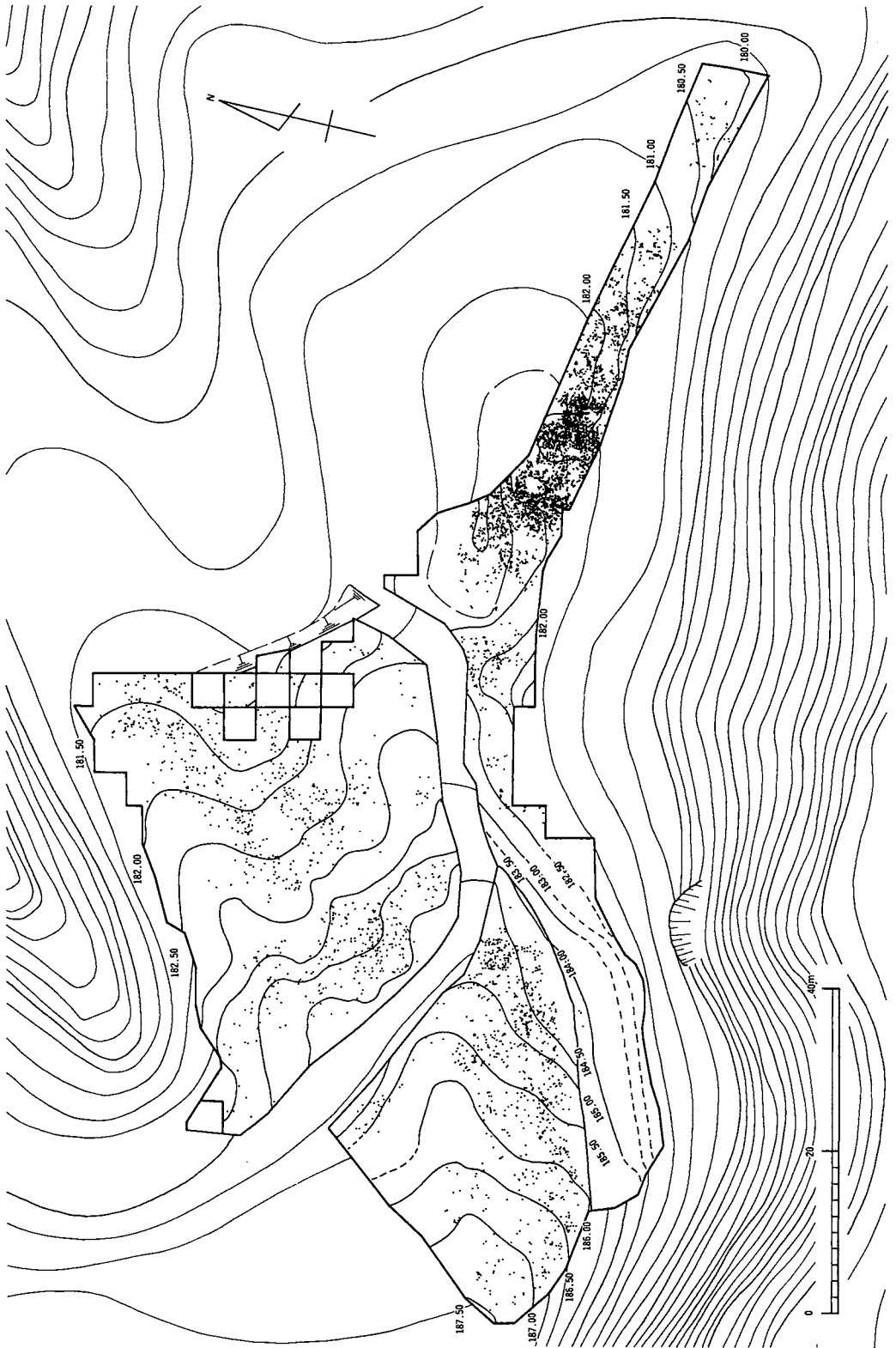
縄文時代早期に属する石器は、4700点が検出された（第23表）。その内訳は、石器653点、石核・原石280点、剥片・碎片3767点である。さらに、石器の中での内訳を示せば、石鏃153点、尖頭器4点、削器28点、石匙1点、挟入石器4点、石錐23点、打製石斧1点、磨製石斧3点、楔形石器4点、礫器4点、磨石・敲石205点、石皿・台石95点、使用痕ある剥片128点である。使用されている石材ごとでは、珪岩2570点、黒曜石1749点、砂岩336点、安山岩22点、頁岩1点である。

石器の分布は、主に、遺跡の谷部に広がっているが、その中でも、東側丘陵の谷部を中心とした部分に集中している（第145図）。こうした分布の傾向は、西側丘陵に、特に集中することを除けば、土器分布が示す状況に良く類似している。土器と同じように、丘陵内での生活廃棄物の投棄の状況を示しているものと推定される。

石鏃（第147図1～第155図148）

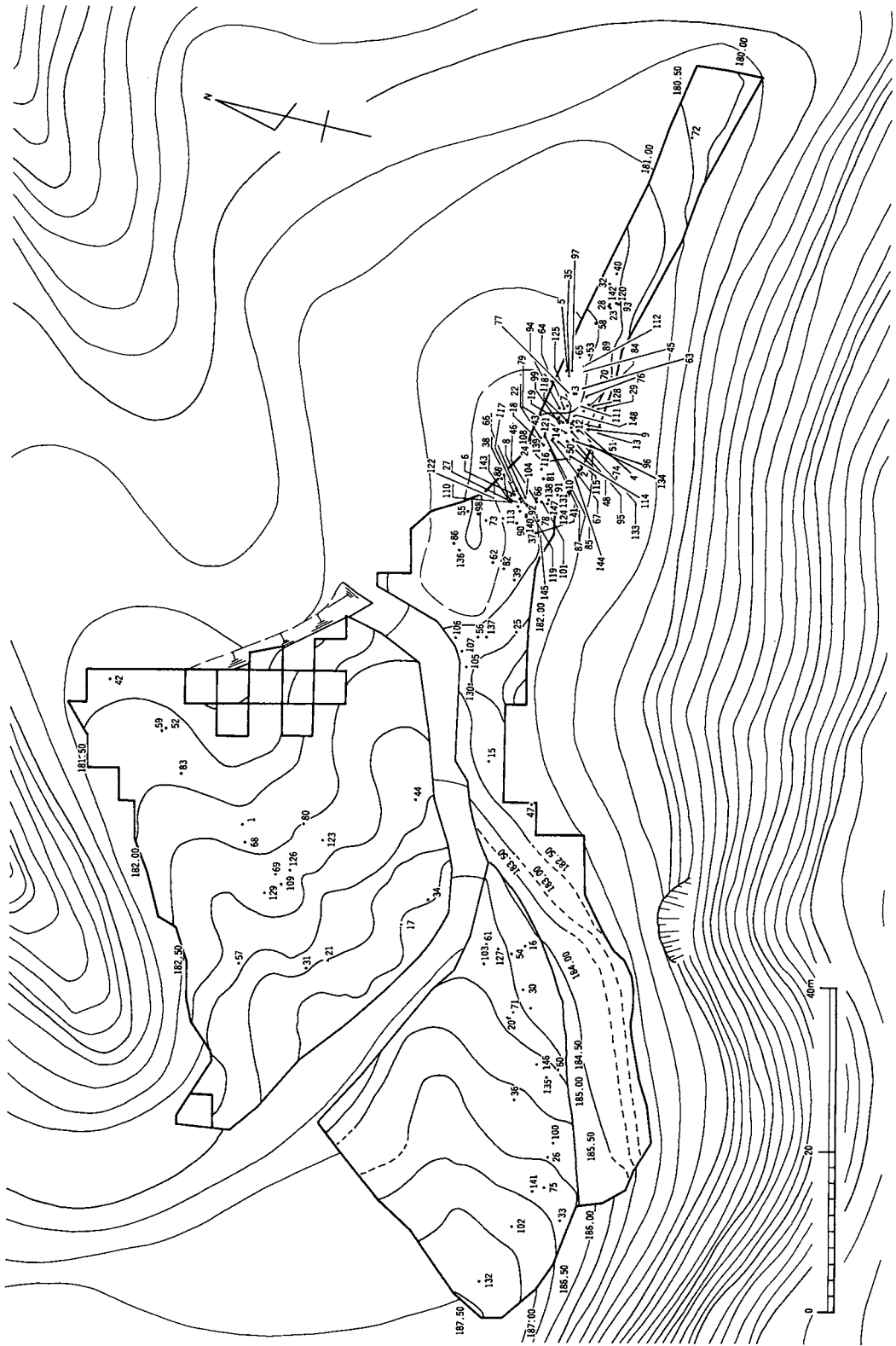
石鏃は、153点出土した。その石器組成に占める割合は、23%である。その石材ごとの内訳は、黒曜石75点、珪岩72点、安山岩6点で、黒曜石の使用頻度の高さが目立っている。

石鏃の分布は、大きく三つのまとまりに分けることができる。すなわち、東側丘陵の谷部



第145図 遺物分布図 (石器)

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第146図 遺物分布図 (石鏃)

第23表 縄文時代早期石器組成表

器種	計(%)	珪岩	黒曜石	安山岩	砂岩	頁岩
石 鏃	153 (23)	72 (47)	75 (49)	6 (4)	—	—
尖 頭 器	4 (0.6)	1 (25)	—	3 (75)	—	—
削 器	28 (4)	25 (89)	2 (7)	1 (4)	—	—
石 匙	1 (0.1)	1	—	—	—	—
抉 入 石 器	4 (0.6)	3 (75)	—	1 (25)	—	—
石 錐	23 (4)	19 (83)	2 (9)	1 (4)	—	1 (4)
打 製 石 斧	1 (0.1)	—	—	1	—	—
磨 製 石 斧	3 (0.4)	—	—	3	—	—
楔 形 石 器	4 (0.6)	1 (25)	3 (75)	—	—	—
礫 器	4 (0.6)	—	—	—	4	—
磨 石・敲 石	205 (31)	—	—	2 (1)	203 (99)	—
石 皿・台 石	95 (15)	—	—	1 (1)	94 (99)	—
使用痕ある剝片	128 (20)	104 (81)	20 (16)	4 (3)	—	—
石器総計	653 (14)	226 (34.6)	102 (15.6)	23 (3.6)	301 (46)	1 (0.2)
石 核	213 (5)	55 (26)	138 (65)	—	20 (9)	—
原 石	67 (1)	5 (7)	62 (93)	—	—	—
剝片・碎片	3767 (80)	2284 (61)	1447 (38)	—	36 (1)	—
総 計	4700	2570 (54.98)	1749 (37)	23 (0.5)	357 (7.5)	1 (0.02)

(東西に偏在している)、丘陵中央の北側谷部、そして、西側丘陵の浅い谷部であり、その中でも、特に東側丘陵で、多く出土している(第146図)。

出土した153点の石鏃は、石器の形状において、二等辺三角形(第1類)、三角形(第2類)、異形(第3類)に分類できる。さらに、前2者は、その基部の作り出しの状況で、平基のもの(a)、浅く抉れるもの(b)、V字状に抉れるもの(c)、U字状に抉れるもの(d)の四つに細分される。以下、類ごとに説明を加えていきたい。

第1 a類(1~15・17・18)

1 a類は、二等辺三角形を呈する平基の石鏃である。資料数は、17点である。出土地点は、3点の資料(1・15・17)を除けば、すべて東側丘陵で出土している。形状では、2~7の石鏃のように、側縁部がやや内側に入り込んでいるものもみられる。また、17のように、片面調整のものもみられる。

第1 b類(16・19~44)

1 b類は、二等辺三角形を呈する凹基(浅い抉り)の石鏃である。資料数は、27点である。出土資料は、東側丘陵の集中部に14点、その他の部分で13点とほぼ同数である。形状では、大型(16・19~23・26・42・43)、中型(24・25・27~36・38~40)、小型(37・41・44)がみられ、さらに26のような細みのものもある。32は、未加工品かもしれない。

第1c類 (45～66)

1c類は、二等辺三角形を呈する凹基（V字状の抉り）の石鏃である。資料数は、22点である。出土資料は、東側丘陵の集中部に15点、その他の部分で7点と、集中部に偏る傾向が強い。石器の形状では、抉りの状態で、深く入り込むもの（57～64・66）とやや浅い抉りのものがある。後者については、1b類との差がはっきりと判断できないものもある。

第1d類 (67～86)

1d類は、二等辺三角形を呈する凹基（U字状の抉り）の石鏃である。資料数は、20点である。出土資料は、東側丘陵で14点、その他の部分で6点と、東側丘陵の集中部へ集まる傾向が強い。石器の形状では、大型のもの（68～72・81・82・84・85）と中型のものがある。また、抉りの状態では、84～86のような荒い加工の状態を示すものもある。

第2a類 (87～96)

2a類は、正三角形を呈する平基の石鏃である。資料数は10点で、その出土数は、東側丘陵の集中部に8点、丘陵中央の北側谷部に2点であり、東側で多く検出している。形状は、比較的均一であるが、96のように側縁部が弱い弧を描くものがみられる。

第2b類 (97～106)

2b類は、正三角形を呈する凹基（浅い抉り）の石鏃である。資料数は、10点である。この内、5点が東側の集中部で出土している。なお、中央北側の谷部では検出していない。

第2c類 (107・108)

2c類は、正三角形を呈する凹基（V字状の抉り）の石鏃である。出土地点は、107が中央丘陵の南側谷部、108が東側丘陵にある。いずれも、小型の石鏃である。

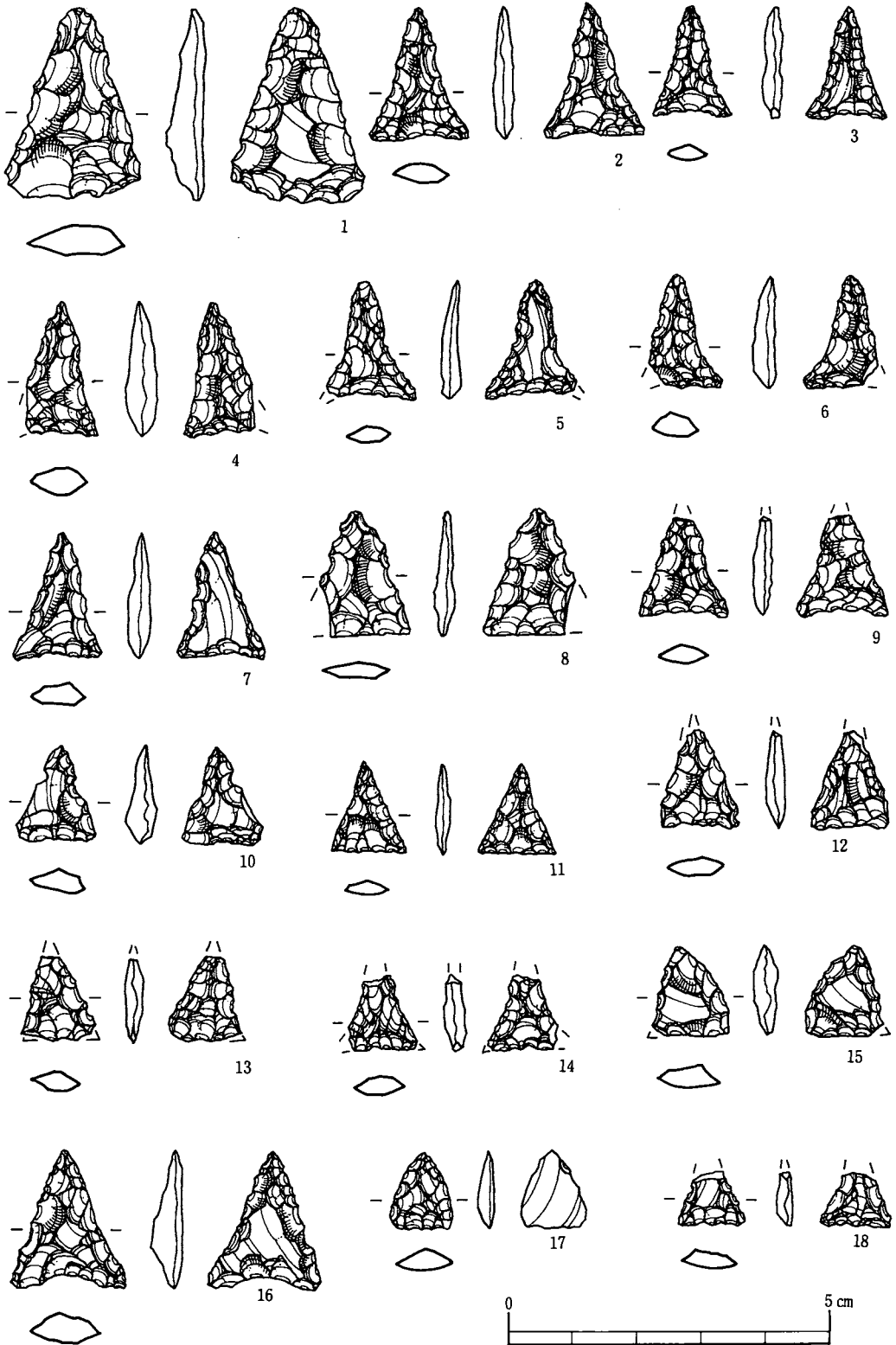
第2d類 (109～116)

2d類は、正三角形を呈する凹基（U字状の抉り）の石鏃で、8点が検出された。その出土地点は、1例の北側谷部を除けば、すべて東側丘陵に集中している。形状では、両側縁が直線的なもの（110・113・115・116）とやや丸みを帯びるもの（109・111・114）があり、また、大型（109～111）と小型（112～116）がある。

第3類 (117～119)

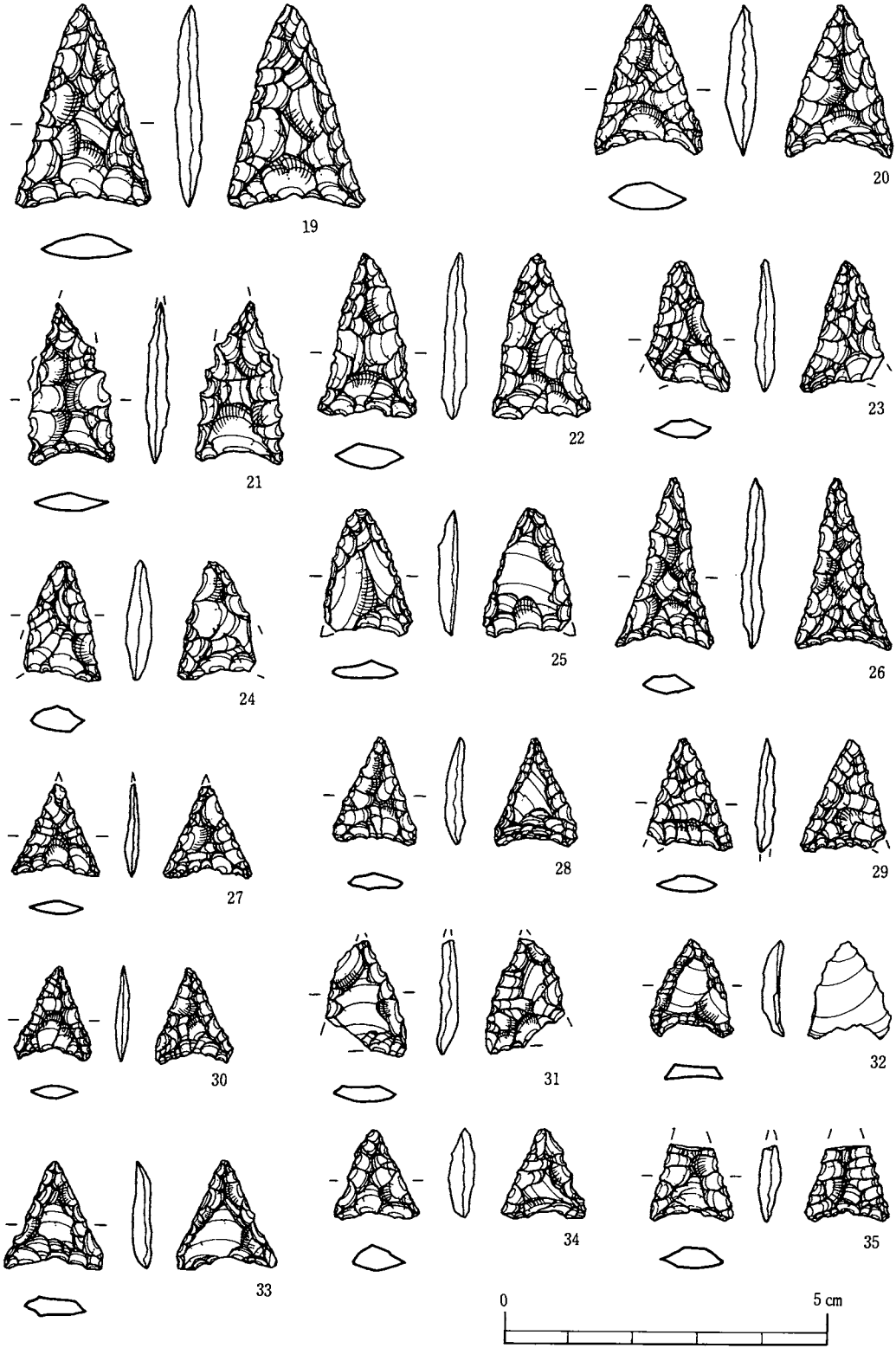
3類は、上記した二等辺三角形や正三角形を呈さない、異形の石鏃である。3点が出土した。その出土地点は、すべて東側丘陵の谷部にある。117は、雁股の石鏃と考えられるもので、細長い基部が作り出されている。珪岩製である。118は、基部が大きく外へ開いたもので、全体の形状は、五角形を呈している。直刃鏃かもしれない。珪岩製である。119は、安山岩製の石鏃である。形状は、118のように五角形を呈しているが、その基部側の両側縁に抉りがみられる。

第三章 調査の成果



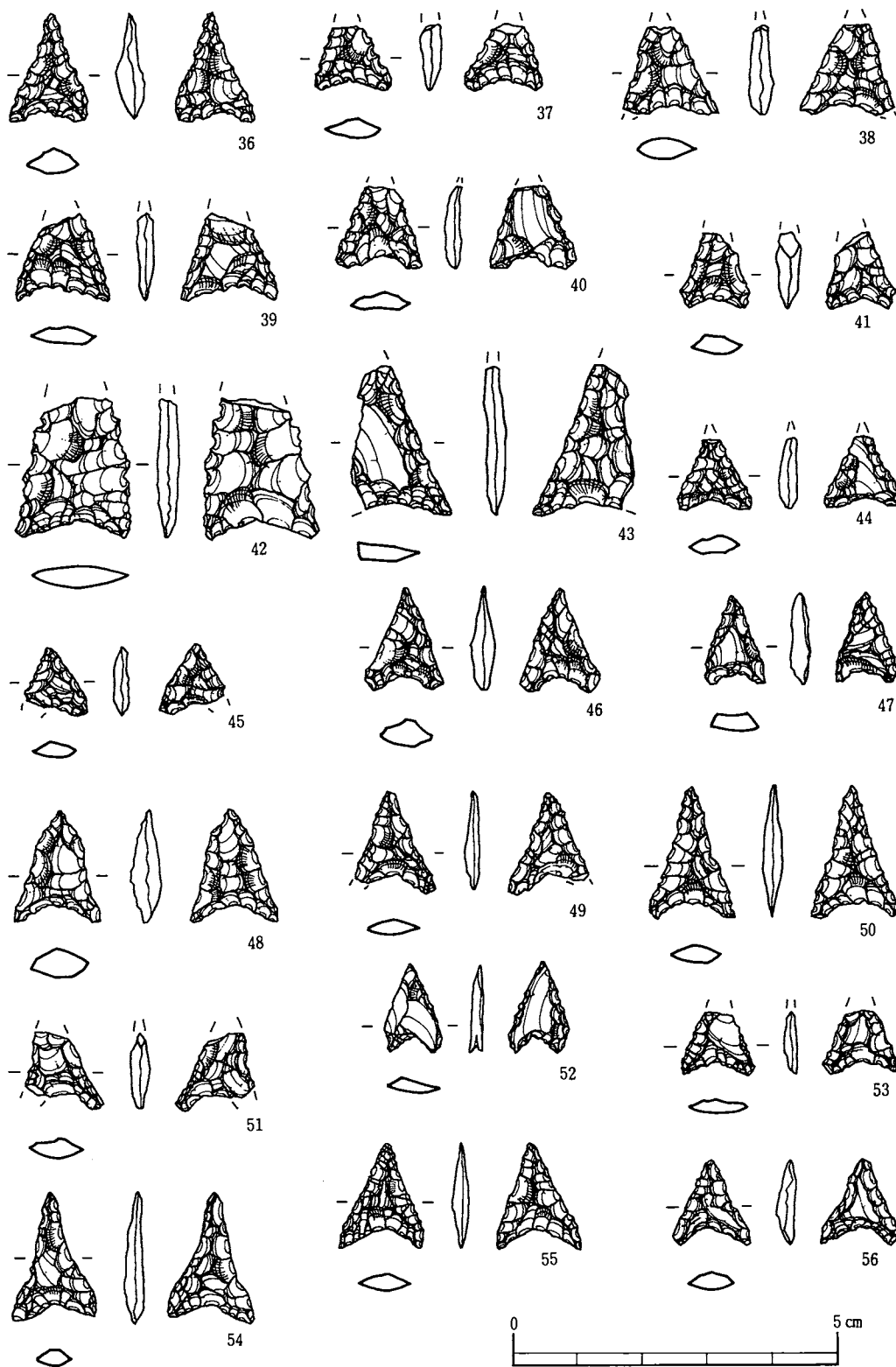
第147図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



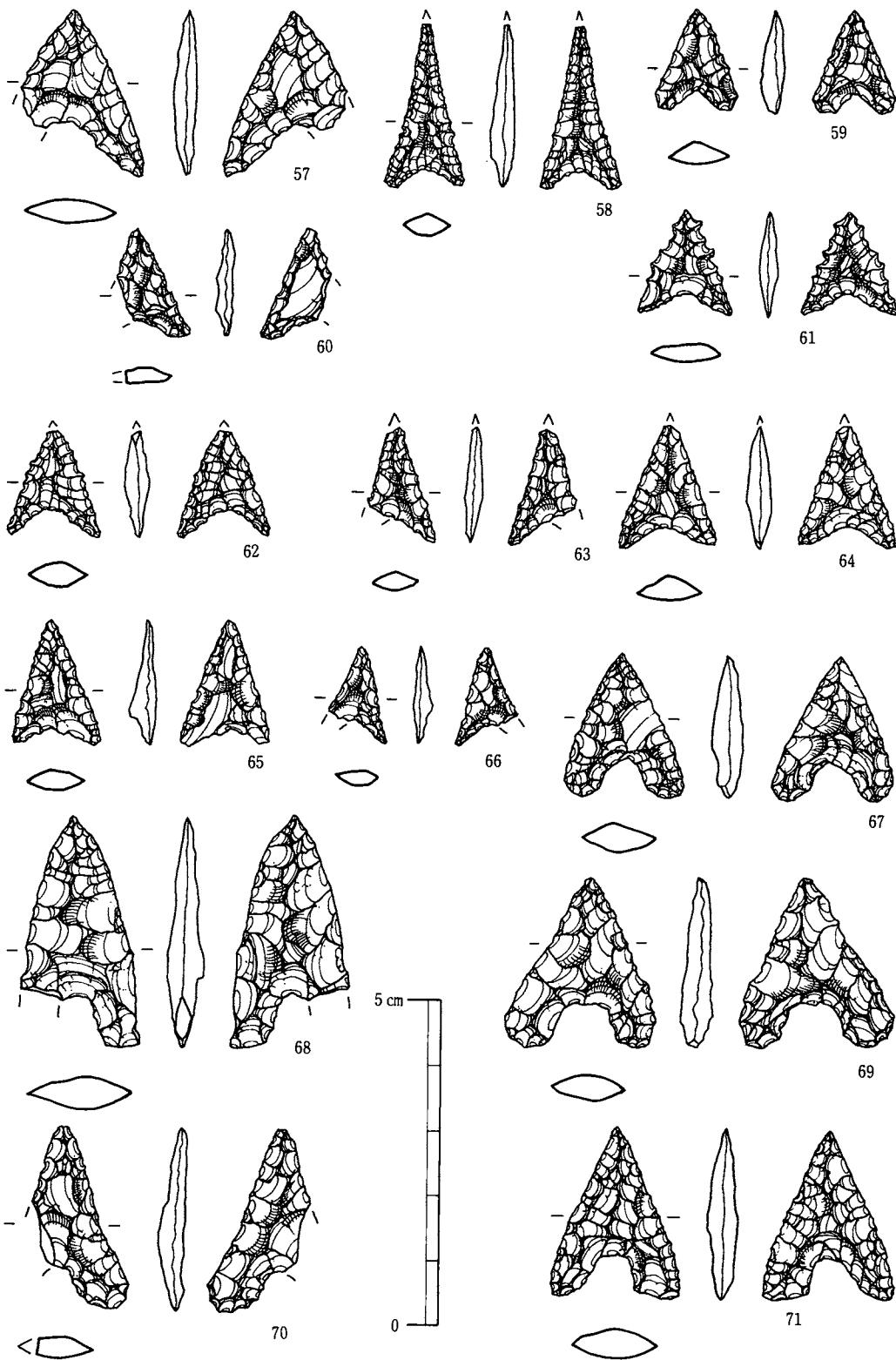
第148図 石器実測図

第三章 調査の成果



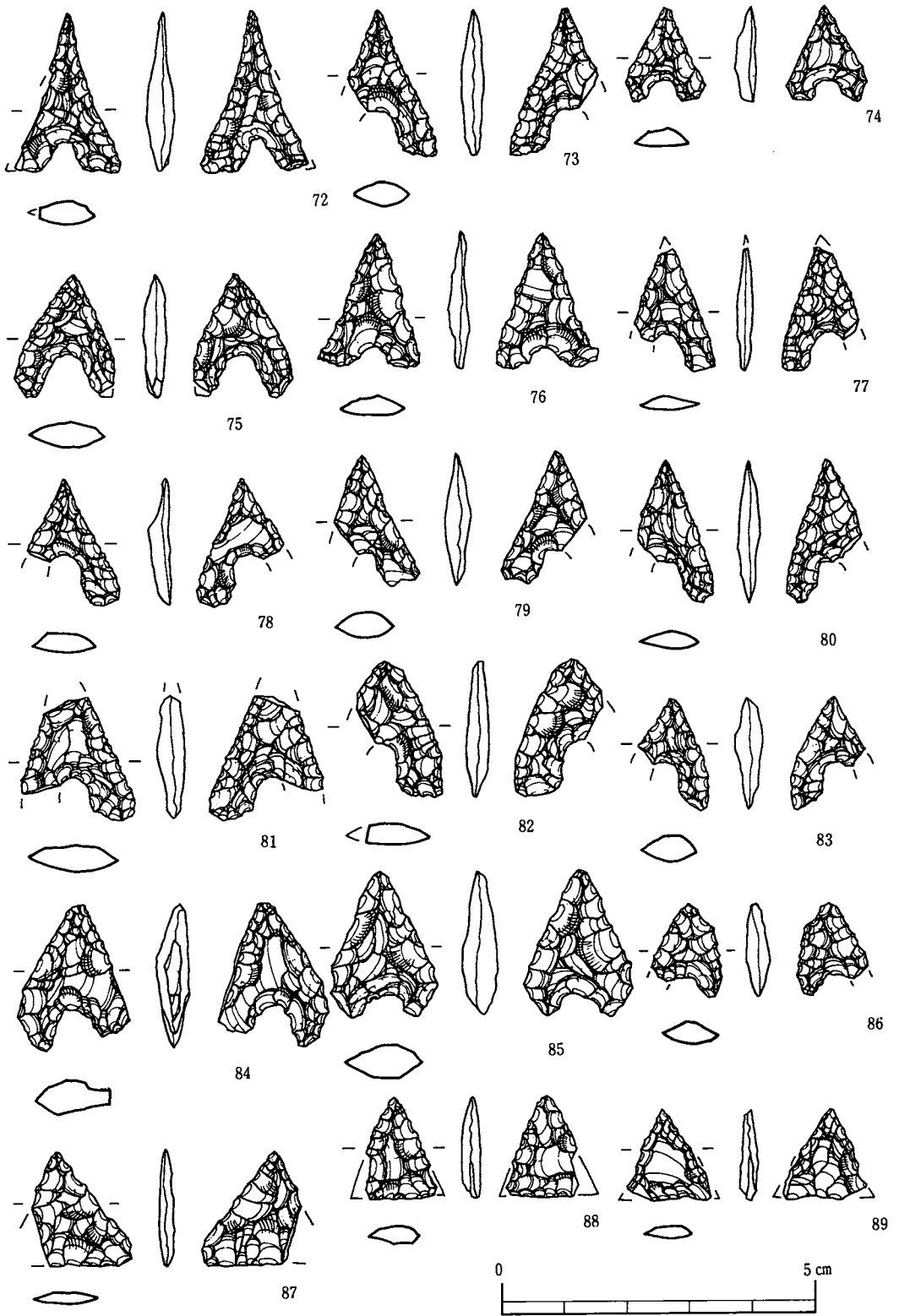
第149図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



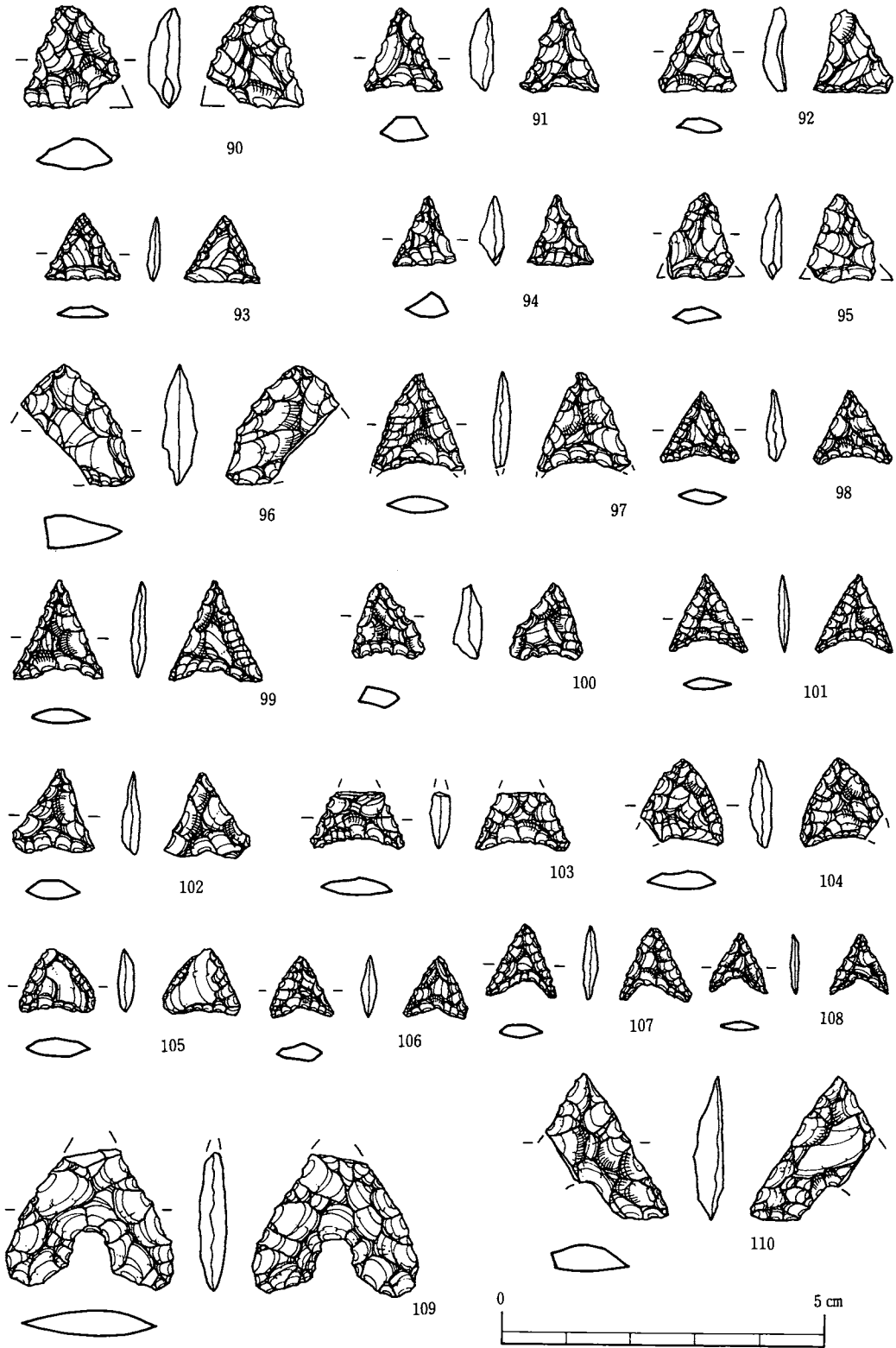
第150図 石器実測図

第三章 調査の成果



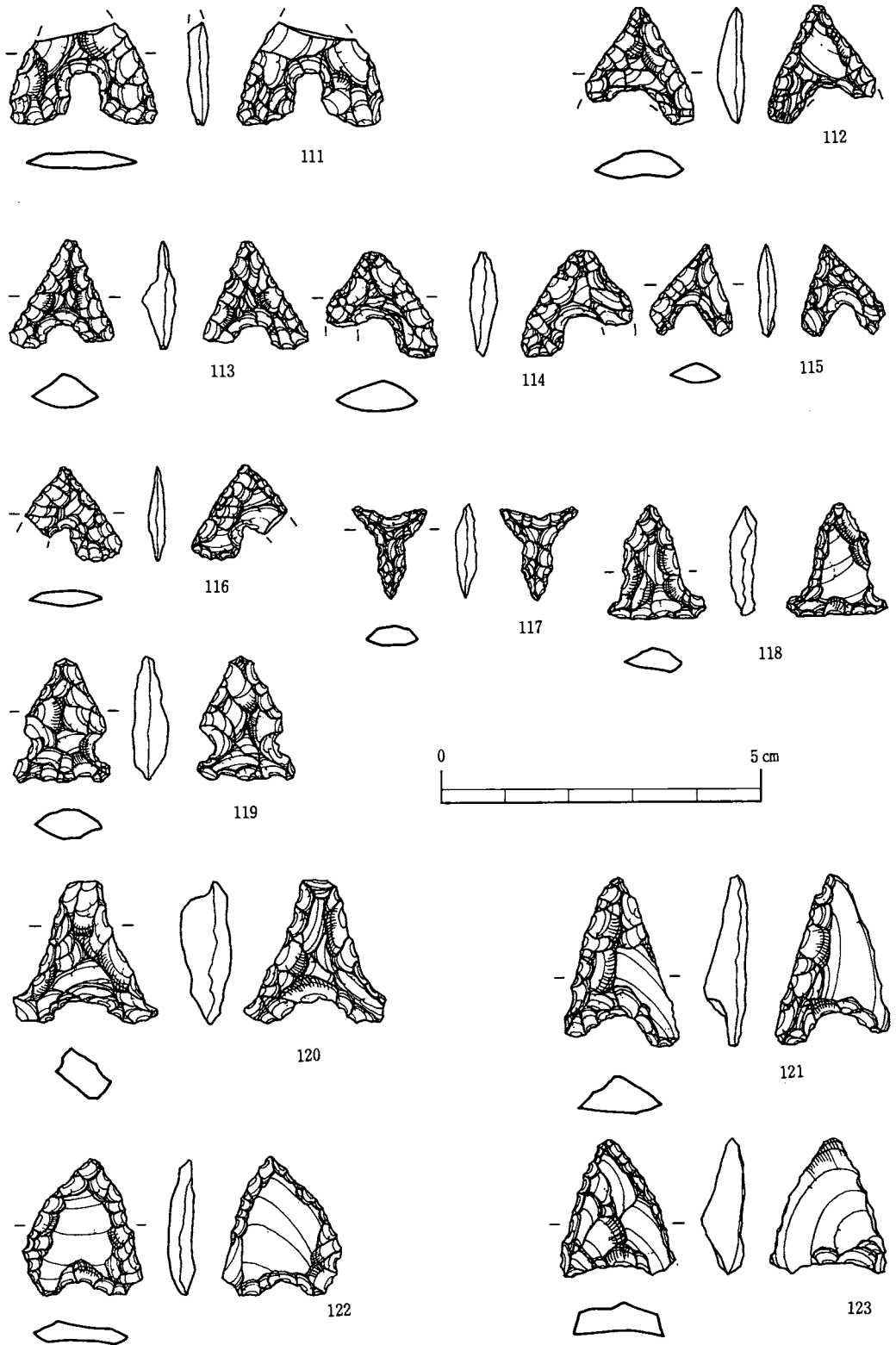
第151図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



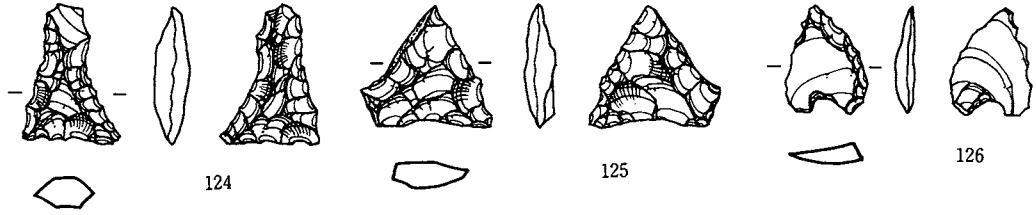
第152図 石器実測図

第三章 調査の成果



第153図 石器実測図

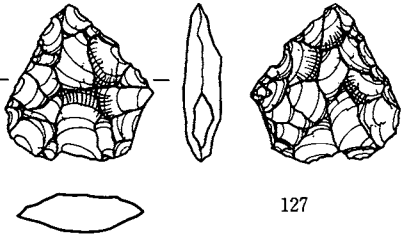
第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



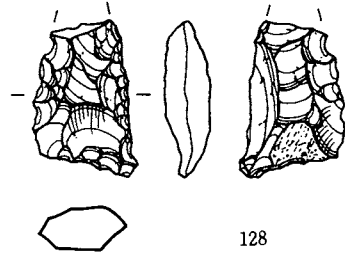
124

125

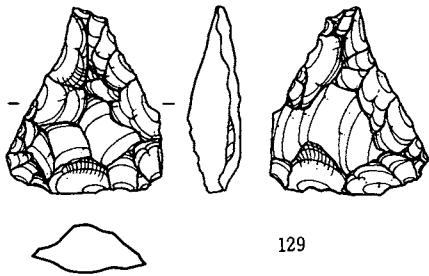
126



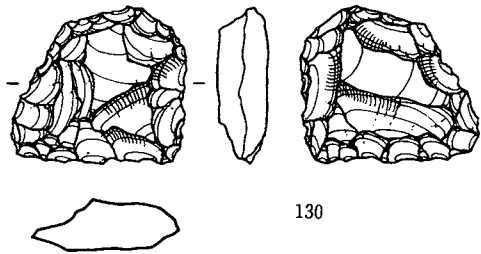
127



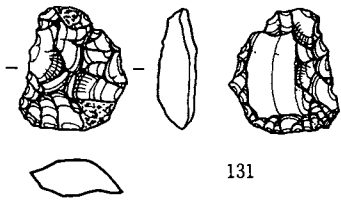
128



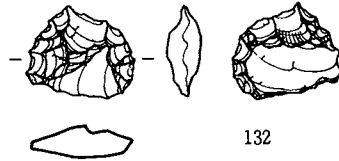
129



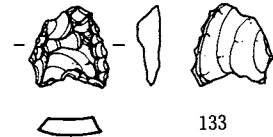
130



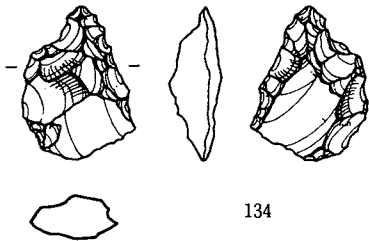
131



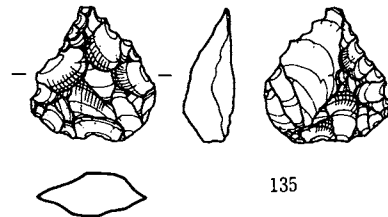
132



133



134

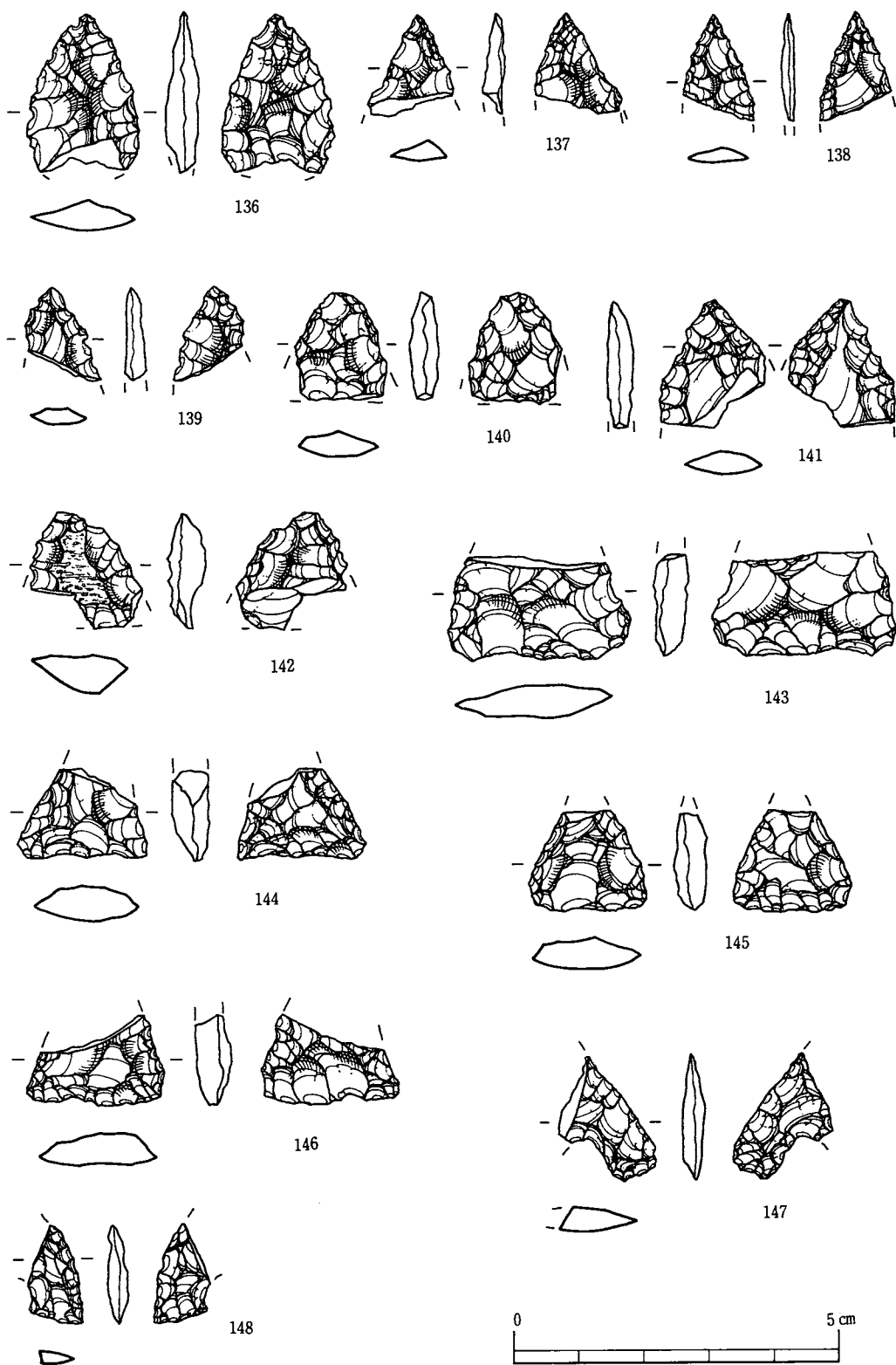


135



第154図 石器実測図

第三章 調査の成果



第155図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

第24表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
1	石	鍬珪岩	2.95	2.1	0.6	2.65	H30 NO.12
2	〃	黒曜石	2.03	1.53	2.02	0.6	IVD JL 607
3	〃	珪岩	1.7	1.25	0.34	0.4	IVD JL 1782
4	〃	黒曜石	2.07	(1.1)	0.5	(0.75)	IVD JL 945
5	〃	珪岩	1.82	(1.4)	0.3	(0.5)	IVD JL 1193
6	〃	黒曜石	1.71	(1.14)	0.4	(0.5)	IVD JL 77
7	〃	珪岩	1.92	1.3	0.36	0.7	IVD JL 1754
8	〃	珪岩	1.93	(1.4)	0.36	(0.75)	IVD JL 90
9	〃	黒曜石	(1.5)	1.4	0.33	(0.45)	IVD JL 1632
10	〃	珪岩	1.5	1.25	0.5	0.6	IVD JL 2141
11	〃	黒曜石	1.36	1.16	0.27	0.25	VD JL 131
12	〃	黒曜石	(1.5)	1.2	0.3	(0.4)	IVD JL 1571
13	〃	黒曜石	(1.26)	(1.1)	0.3	(0.4)	IVD JL 1697
14	〃	黒曜石	(1.14)	(1.1)	0.34	(0.2)	IVD JL 727
15	〃	珪岩	1.39	(1.2)	0.39	(0.65)	VIC JL 67
16	〃	珪岩	2.12	1.73	0.5	1.15	VIID JL 56
17	〃	安山岩	1.15	1.0	0.28	0.3	VIII JL 35
18	〃	黒曜石	(0.83)	1.1	0.27	(0.15)	IVD JL 1858
19	〃	安山岩	3.12	2.1	0.4	2.0	IVD JL 1450
20	〃	珪岩	2.3	1.67	0.49	1.3	VIID JL 173
21	〃	珪岩	(2.5)	1.35	0.36	(1.05)	VIII 5号住床面
22	〃	珪岩	2.52	1.5	0.4	1.0	IVD JL 677
23	〃	黒曜石	2.0	(1.28)	0.3	(0.65)	IIID JL 140
24	〃	黒曜石	1.81	(1.2)	0.4	(0.7)	IVD JL 642
25	〃	安山岩	1.97	(1.35)	0.3	(0.7)	VD JL 3
26	〃	黒曜石	2.59	1.48	0.35	0.85	VIID JL 43
27	〃	黒曜石	(1.39)	1.37	0.2	(0.25)	IVD JL 3
28	〃	黒曜石	1.67	1.3	0.37	0.5	IIID JL 141
29	〃	黒曜石	1.72	(1.3)	0.3	(0.5)	IVD JL 1139
30	〃	黒曜石	1.43	1.2	0.2	0.2	VIID JL 16
31	〃	珪岩	(1.74)	(1.25)	0.36	(0.5)	VIII JL 24
32	〃	黒曜石	1.5	1.28	0.33	0.4	IIID JL 154
33	〃	珪岩	1.7	1.55	0.33	0.65	IXD JL 84
34	〃	珪岩	1.4	1.34	0.4	0.5	VIII JL 121
35	〃	黒曜石	(1.2)	1.3	0.3	(0.45)	IVD JL 1194
36	〃	珪岩	1.63	1.2	0.44	0.55	VIID JL 93
37	〃	黒曜石	(0.98)	1.2	0.36	(0.3)	Q21-NO.10
38	〃	黒曜石	(1.33)	(1.46)	0.37	(0.6)	IVD JL 71
39	〃	珪岩	(1.3)	1.47	0.27	(0.4)	VD JL 17
40	〃	黒曜石	(1.22)	1.35	0.27	(0.3)	IIID JL 240
41	〃	黒曜石	(1.12)	1.02	0.4	(0.35)	IVD JL 10
42	〃	珪岩	(2.12)	1.78	0.35	(1.25)	VIA JL 86
43	〃	珪岩	(2.25)	(1.53)	0.35	(1.0)	IVD JL 671
44	〃	珪岩	(1.07)	1.15	0.3	(0.4)	N29 NO.11

第III章 調査の成果

No	器種	石質	計測値				登録番号	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
45	石	鍍	黒曜石	1.03	(1.0)	0.26	(0.2)	IVD JL 1231
46	〃		黒曜石	1.56	1.2	0.4	0.35	IVD JL 146
47	〃		黒曜石	1.37	0.93	0.3	0.3	VID JL 7
48	〃		珪岩	1.7	1.35	0.49	0.8	IVD JL 1470
49	〃		黒曜石	1.53	(1.22)	0.23	(0.4)	IVD JL 155
50	〃		珪岩	2.0	1.32	0.3	0.45	IVD JL 574
51	〃		黒曜石	(1.15)	(1.2)	0.3	(0.25)	IVD JL 904
52	〃		黒曜石	1.35	0.9	0.2	0.15	VIA JL 16
53	〃		珪岩	(0.95)	1.1	0.2	(0.3)	IVD JL 1287
54	〃		珪岩	1.98	1.3	0.3	0.45	VIII JL 39
55	〃		珪岩	1.6	1.3	0.27	0.3	VC JL 284
56	〃		黒曜石	1.3	1.22	0.3	0.25	VC JL 300
57	〃		安山岩	2.54	(1.9)	0.4	(1.05)	VIII JL 84
58	〃		珪岩	(2.48)	1.25	0.4	(0.75)	III JL 37
59	〃		珪岩	1.57	1.23	0.38	0.45	VIA JL 21
60	〃		黒曜石	1.65	(1.08)	0.3	(0.35)	VIII JL 295
61	〃		珪岩	1.58	1.44	0.3	0.45	P34-13
62	〃		珪岩	(1.63)	1.42	0.39	(0.6)	VC JL 176
63	〃		珪岩	(1.75)	(1.05)	0.28	(0.35)	IVD JL 1104
64	〃		珪岩	(1.9)	1.48	0.4	(0.8)	IVD JL 974
65	〃		珪岩	1.92	1.35	0.43	0.6	IVD JL 1252
66	〃		黒曜石	1.5	(0.93)	0.3	(0.25)	IVD JL 59
67	〃		黒曜石	2.2	1.87	0.49	1.0	IVD JL 1383
68	〃		珪岩	3.5	(1.8)	0.58	(2.35)	VIII JL 153
69	〃		珪岩	2.59	2.37	0.5	1.8	VIII JL 149
70	〃		珪岩	2.78	(1.55)	0.43	(1.1)	IVD JL 1327
71	〃		珪岩	2.64	1.99	0.49	1.65	VIII JL 145
72	〃		珪岩	2.5	(1.7)	0.45	(0.9)	II E JL 14
73	〃		珪岩	2.3	(1.4)	0.4	(0.75)	VD JL 101
74	〃		黒曜石	1.48	1.3	0.3	0.4	IVD JL 1494
75	〃		黒曜石	1.9	1.58	0.4	0.75	IXD JL 47
76	〃		黒曜石	2.1	1.6	0.4	0.7	IVD JL 1121
77	〃		珪岩	(1.95)	(1.25)	0.25	(0.5)	IVD JL 1033
78	〃		珪岩	1.98	(1.4)	0.37	(0.5)	VD JL 172
79	〃		珪岩	2.03	(1.36)	0.44	(0.7)	IVD JL 1491
80	〃		黒曜石	2.26	(1.18)	0.38	(0.6)	VIB JL 141
81	〃		珪岩	(1.93)	(1.81)	0.4	(1.4)	IVD JL 2080
82	〃		黒曜石	2.1	(1.4)	0.4	(0.85)	VC JL 197
83	〃		珪岩	1.7	(1.2)	0.5	(0.6)	VIA JL 107
84	〃		珪岩	2.25	1.8	0.57	1.5	IVD JL 1816
85	〃		珪岩	2.28	1.7	0.58	1.7	IVD JL 682
86	〃		珪岩	1.43	(1.1)	0.4	(0.45)	VC JL 254
87	〃		珪岩	1.82	(1.57)	0.26	(0.6)	IVD JL 496
88	〃		黒曜石	1.6	(1.17)	0.31	(0.45)	IVC JL 64
89	〃		黒曜石	1.41	(1.3)	0.3	(0.5)	IVD JL 1182
90	〃		黒曜石	1.55	(1.5)	0.5	(0.9)	VD JL 83

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

No	器種	石質	計測値				登録番号	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
91	石	鍬	黒曜石	1.28	1.2	0.39	0.4	IVD JL 261
92	〃		黒曜石	1.27	1.2	0.36	0.5	VD JL 124
93	〃		黒曜石	1.03	1.17	0.2	0.15	IID JL 171
94	〃		黒曜石	1.08	1.0	0.4	0.25	IVD JL 1740
95	〃		黒曜石	1.35	(1.05)	0.31	(0.35)	IVD JL 877
96	〃		珪岩	1.86	(1.75)	0.58	(1.15)	IVD JL 1655
97	〃		黒曜石	1.52	(1.47)	0.3	(0.5)	IVD JL 1210
98	〃		黒曜石	1.1	1.2	0.32	0.25	VC JL 127
99	〃		黒曜石	1.53	1.42	0.23	0.25	IVD JL 788
100	〃		黒曜石	1.16	1.15	0.48	0.45	VIII JL 36
101	〃		珪岩	1.2	1.19	0.2	0.2	IVD JL 2090
102	〃		安山岩	1.3	1.3	0.3	0.4	IXD JL 21
103	〃		珪岩	(0.88)	1.5	0.3	(0.4)	P34 NO.7
104	〃		黒曜石	1.34	(1.26)	0.37	(0.4)	IVD JL 136
105	〃		黒曜石	0.98	1.2	0.24	0.2	VC JL 361
106	〃		黒曜石	0.98	1.0	0.27	0.2	VC JL 309
107	〃		黒曜石	1.1	1.1	0.26	0.1	VC JL 372
108	〃		黒曜石	0.91	0.9	0.18	0.1	IVD JL 1702
109	〃		珪岩	(2.17)	2.6	0.45	(1.8)	VIII JL 104
110	〃		珪岩	2.21	(1.9)	0.49	(1.2)	IVD JL 4
111	〃		珪岩	(1.58)	2.27	0.36	(1.05)	IVD JL 1111
112	〃		黒曜石	1.8	(1.65)	0.42	(0.8)	IVD JL 1236
113	〃		珪岩	1.7	1.6	0.56	0.75	VC JL 19
114	〃		黒曜石	1.6	(1.74)	0.45	(0.85)	IVD JL 573
115	〃		黒曜石	1.43	1.3	0.28	0.4	IVD JL 1419
116	〃		黒曜石	1.45	(1.46)	0.27	(0.35)	IVD JL 436
117	〃		珪岩	1.43	1.18	0.33	0.25	IVD JL 33
118	〃		珪岩		1.55	0.43	0.8	IVD JL 1508
119	〃		安山岩	1.89	1.5	0.58	1.25	IVD JL 60
120	〃		珪岩	2.18	2.2	0.8	2.7	IID JL 168
121	〃		珪岩	2.58	1.78	0.68	1.75	IVD JL 697
122	〃		珪岩	2.1	1.89	0.4	1.5	IVC JL 102
123	〃		珪岩	2.12	1.8	0.7	1.9	VIII JL 120
124	〃		珪岩	1.88	1.3	0.45	0.85	IVD JL 2145
125	〃		珪岩	1.64	1.76	0.46	0.75	IVD JL 1507
126	〃		珪岩	1.43	1.12	0.25	0.3	VIII JL 101
127	〃		珪岩	2.07	2.0	0.4	2.0	P34 NO.34
128	〃		黒曜石	(2.1)	1.4	0.6	(1.5)	IVD JL 1141
129	〃		珪岩	2.6	1.1	0.7	2.6	VIII JL 141
130	〃		珪岩	2.1	2.35	0.7	4.0	VIC JL 30
131	〃		黒曜石	1.63	1.45	0.54	1.0	IVD JL 255
132	〃		黒曜石	1.24	1.43	0.47	0.7	IXC JL 41
133	〃		黒曜石	1.1	1.1	0.3	0.2	IVD JL 1564
134	〃		珪岩	2.07	1.53	0.7	1.45	IVD JL 1991
135	〃		珪岩	1.79	1.65	0.7	1.8	VIII JL 267
136	〃		珪岩	(2.4)	1.73	0.52	(1.9)	VC JL 237

第三章 調査の成果

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
137	石	珪岩	(1.53)	(1.37)	(0.36)	(0.35)	VC JL 297
138	〃	黒曜石	(1.62)	(1.1)	(0.25)	(0.2)	IVD JL 221
139	〃	黒曜石	(1.4)	(1.1)	(0.3)	(0.35)	IVD JL 443
140	〃	黒曜石	1.69	(1.44)	0.45	(1.0)	VD JL 204
141	〃	黒曜石	(1.92)	(1.6)	0.4	(1.1)	IXD JL 6
142	〃	黒曜石	(1.79)	(1.73)	(0.6)	(1.25)	IIID JL 145
143	〃	珪岩	(1.6)	2.82	0.52	(2.45)	IVD JL 1968
144	〃	黒曜石	(1.38)	2.0	0.6	(1.45)	IVD JL 578
145	〃	黒曜石	(1.53)	1.8	0.53	(1.25)	VD JL 189
146	〃	黒曜石	(1.37)	2.14	(0.56)	(1.2)	VIID JL 264
147	〃	珪岩	(1.9)	(1.5)	(0.35)	(0.65)	IVD JL 212
148	〃	黒曜石	(1.5)	(0.88)	(0.3)	(0.35)	IVD JL 916

未加工品 (120～135)

出土資料の中に、未加工品と考えられるものが、16点あった。その石材ごとの内訳は、珪岩12点、黒曜石4点である。出土地点は、東側丘陵の谷部に9例、丘陵中央の北側の谷部と西側丘陵に3例、中央の南側谷部に1例がある。

この16点の資料の中で、石器の素材とその使い方を知ることのできるものが、6例ある(121～123・125・126・133)。それによると、剥片は、先端部に広い縁辺を持つ横広の剥片や横長剥片が素材とされ、その打面部は、石器本体での側縁下部右位と左位、すなわち、左右いずれかの基部側に置かれている。このことは、剥片の先端部が石鏃の側縁に利用されるということを示している。その他、124の資料は、石鏃の先端部が未加工のまま残されているものであるが、125のように左側縁が未加工の状態のものもあり、その製作の手順には、統一的な規範はなさそうである。

所属不明の石鏃 (136～148)

欠損によって、類の認定にかかわる情報を知りえなかった資料がある。資料数は、18点である。その出土地点は、西側丘陵に2例、丘陵中央の北側谷部に1例で、ほとんどが東側丘陵に集まっている。

1類に属するものは、8例(136～139・141・142・145)、2類に属するものは、1例(140)がある。その他の資料は、不明である。また、a類に属するものは、4例(143～146)、d類に属するものは、2例(147・148)がある。

尖頭器 (第157図149～155)

尖頭器は、4点が出土した(149・152～154)。その石器組成に占める割合は、0.6%で、その石材ごとの内訳は、安山岩3点、珪岩1点である(第23表)。出土地点は、丘陵の西端に1例(154)と東側丘陵の谷部に2例(149・153)がある(第156図)。

第三章 調査の成果

これらは、その形状によって、3類に分類できるようである。

第1類 (149・150)

1類は、細身の柳葉形を呈する尖頭器である。調査では1例が出土しているが、調査以前に採集しているものが1例ある(150)。

149は、東側丘陵の谷部で出土しているもので、左右対称の比較的整った形状を呈している。調整加工は、両面とも階段状剥離で、その断面形は凸レンズ状を呈している。石質は、安山岩である。150は、左右対称の形状をとる珪岩製の尖頭器である。調整は入念である。断面形は、凸レンズ状を呈する。

第2類 (151~153)

2類は、幅広の尖頭器である。調査では、2点を検出したが、調査以前に1例が採集されている(151)。

151は、左右対称の整った形状を呈している。調整加工は、両面とも階段状剥離で、その断面形は、凸レンズ状である。基部のやや右側に素材となる剥片の打面部が残置され、素材は、横広の大型の剥片であることが推定できる。石質は、安山岩である。152は、調査時の採集資料である。基部が丸く作り出され、全体の形状は、151に比べて、やや寸詰りの感じを受けるが、左右対称である。調整加工は、階段状剥離で、断面形は、凸レンズ状を呈している。基部に剥片の打面の一部が残っているが、その素材を推定できる程ではない。石質は、安山岩である。153は、珪岩製の尖頭器で、胴部上半を欠損している。調整加工は階段状剥離で、断面形は、凸レンズ状を呈している。東側丘陵で出土している。

第3類 (154・155)

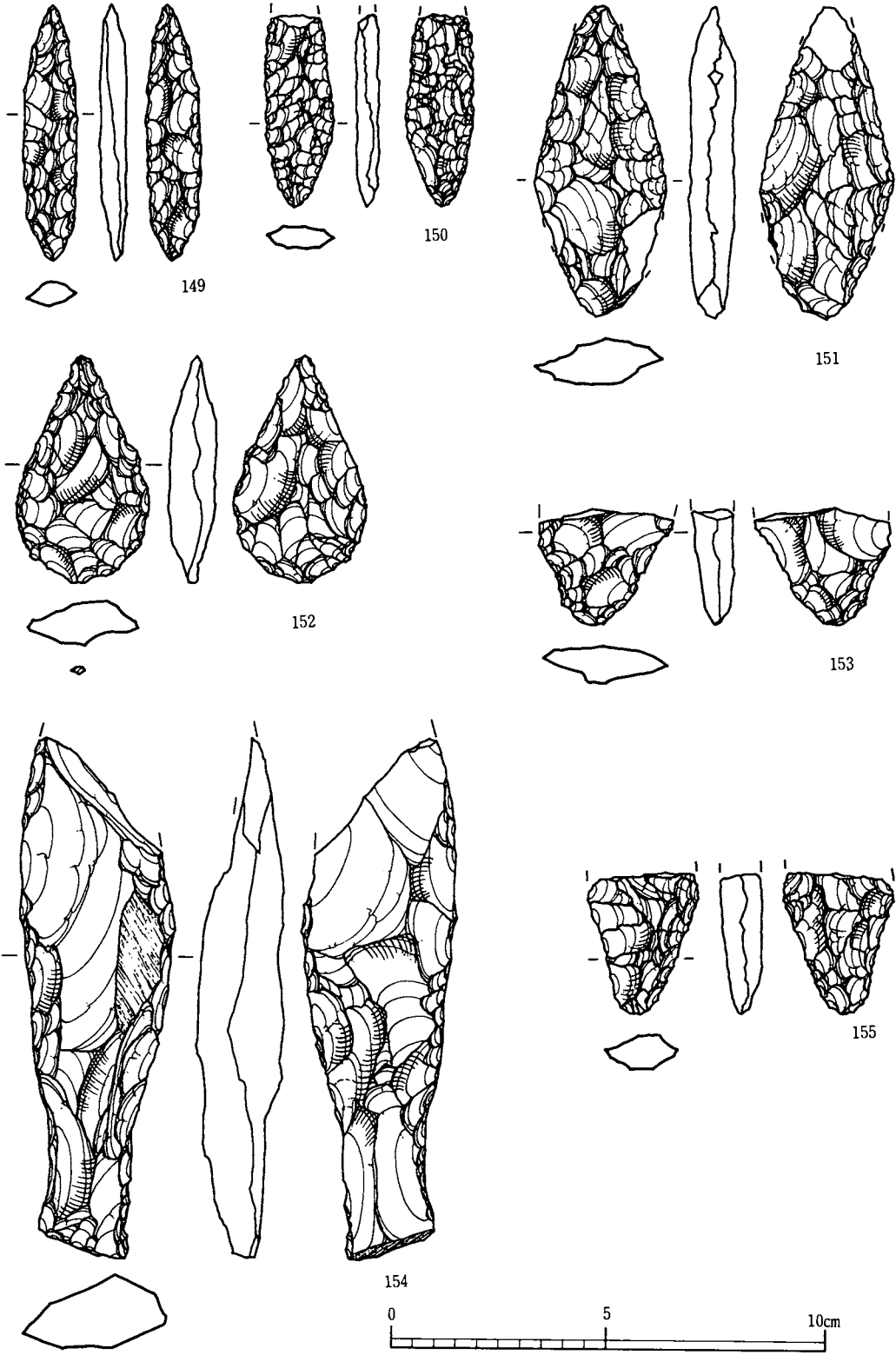
3類に該当するものとして、2例を提示しているが、この内、155は、調査以前の採集資料である。この類に属する尖頭器は、茎部が作り出されているものにあたる。しかし、本格的な有茎尖頭器と呼べるものではない。

154は、西側丘陵の西端で出土したもので、先端部を欠損している。茎部には、素材となる剥片の打面部が残置され、全体に荒い階段状剥離がみられる。断面形は、三角形に近い形状を

第25表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
149	尖頭器	安山岩	5.9	1.3	6.5	5.1	IVD JL 7
150	〃	珪岩	(4.4)	1.65	0.55		表 採
151	〃	安山岩	(7.1)	3.05	1.05		表 採
152	〃	安山岩	5.2	3.1	1.1	14.75	表 採
153	〃	珪岩	(2.7)	(3.15)	(0.95)	(6.55)	IVD JL 281
154	〃	安山岩	(11.9)	3.35	1.7	(61.85)	IXC JL 35
155	〃	安山岩	(3.25)	(2.55)	(0.95)		表 採

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第157図 石器実測図

とる。尖頭器の未加工品かもしれない。石質は、安山岩である。155は、安山岩製尖頭器の基部である。調整加工は、階段状剝離で、断面形は、凸レンズ状を呈する。基部は、茎状をとっているようである。

削器（第160図156～第162図182）

削器は、28点出土したが、石器組成に占める割合は、4％にすぎない。その石材ごとの内訳は、珪岩25点、黒曜石2点、安山岩1点である（第23表）。

石器の分布は、大きく3群にまとめることができる。それは、東側丘陵に広がる一群と中央部北側の谷部付近に集中する一群、そして、西側丘陵に散在している一群である。これらの分布の偏在は、それぞれの間広い空白部を持ち、しかもそれぞれの群の位置が丘陵内の谷部を異にしているという点で興味がある（第158図）。

削器は、刃部の状態によって、第1類～第3類の三つに分類される。以下、類ごとに説明を加えていこう。

第1類（156・157・165・166・170～174）

1類の削器は、素材となる剝片の一つの縁辺に、刃部が設けられているものにあたる。資料数は、9点である。その出土位置では、西側丘陵に4点、東側丘陵に5点で、東側と西側ではそれ程の差はない。剝片の打面は、単剝離面と複剝離面がある。

これらの削器は、分類の基準となった刃部の作り出しの状態において、さらに二つに細分できる。片刃（156・157・165・166・170・172・173・174）と両刃（171）である。また、この刃部と、素材となる剝片の打面との位置関係では、隣り合わせの関係（156・157・172）と対向関係（166・170・173・174）、そして同位置の関係（156・171・173）がある。

第2類（158・160・161～164・168・169・176・177・179）

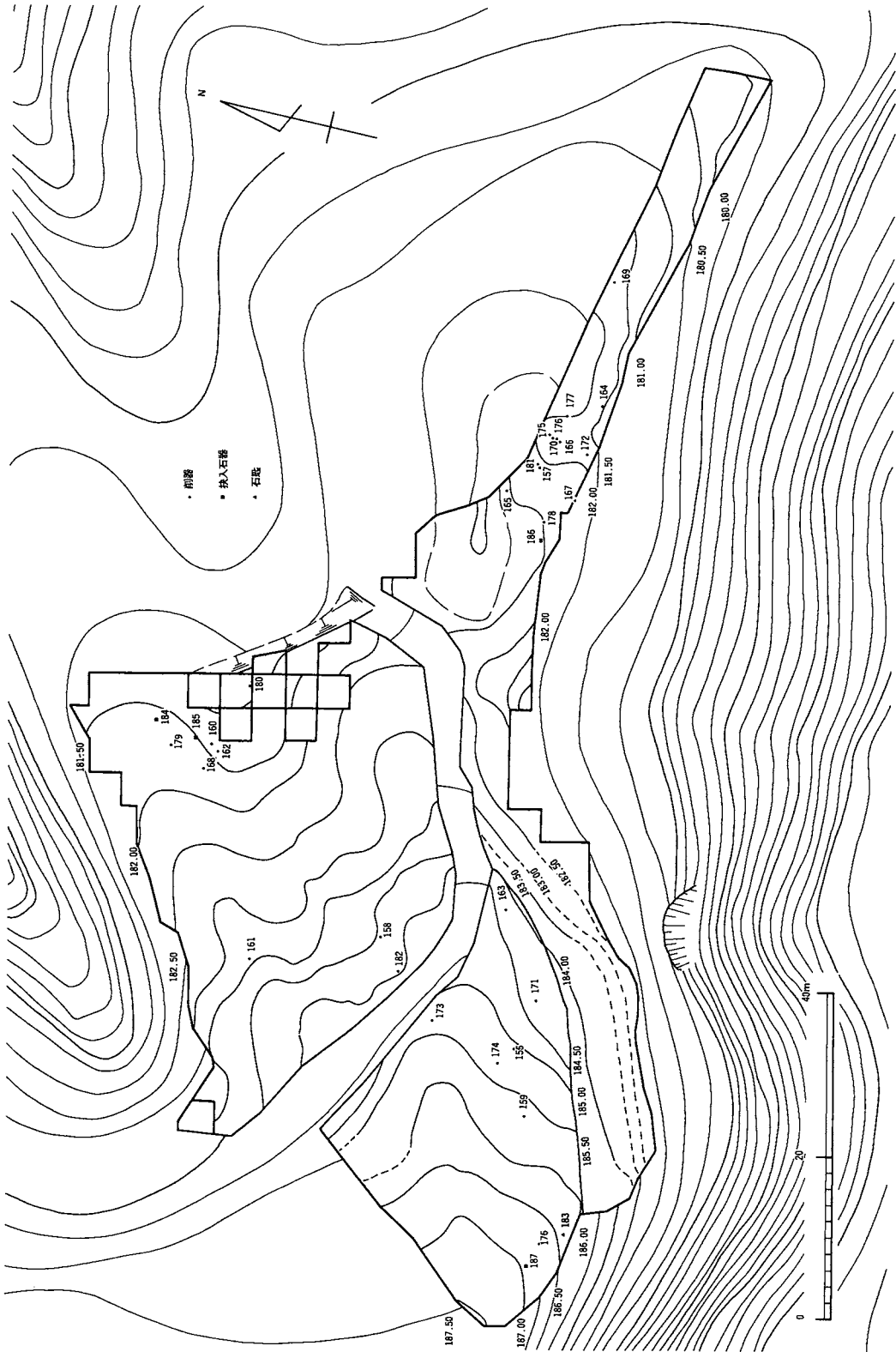
2類に分類される削器は、素材となる剝片の二つの縁辺に、刃部が作られているものである。資料数は、11点である。その出土位置は、西側丘陵に2点、東側丘陵に4点、中央部北側の谷部に4点と、西側丘陵と中央部北側の谷部を中心にみられる。剝片の打面には、単剝離面と複剝離面がある。

この11点の削器は、刃部の位置関係によって、さらに二つに細分される。その一つは、対向する刃部を持つもの（158・160・162～164・177）である。刃部の種類には、片刃2点、両刃1点、両者を併設するもの3点がある。また、もう一つは、隣り合わせに設けられるもの（161・168・169・176・179）である。その刃部の種類は、片刃4点、両刃1点である。

第3類（167・178・180～182）

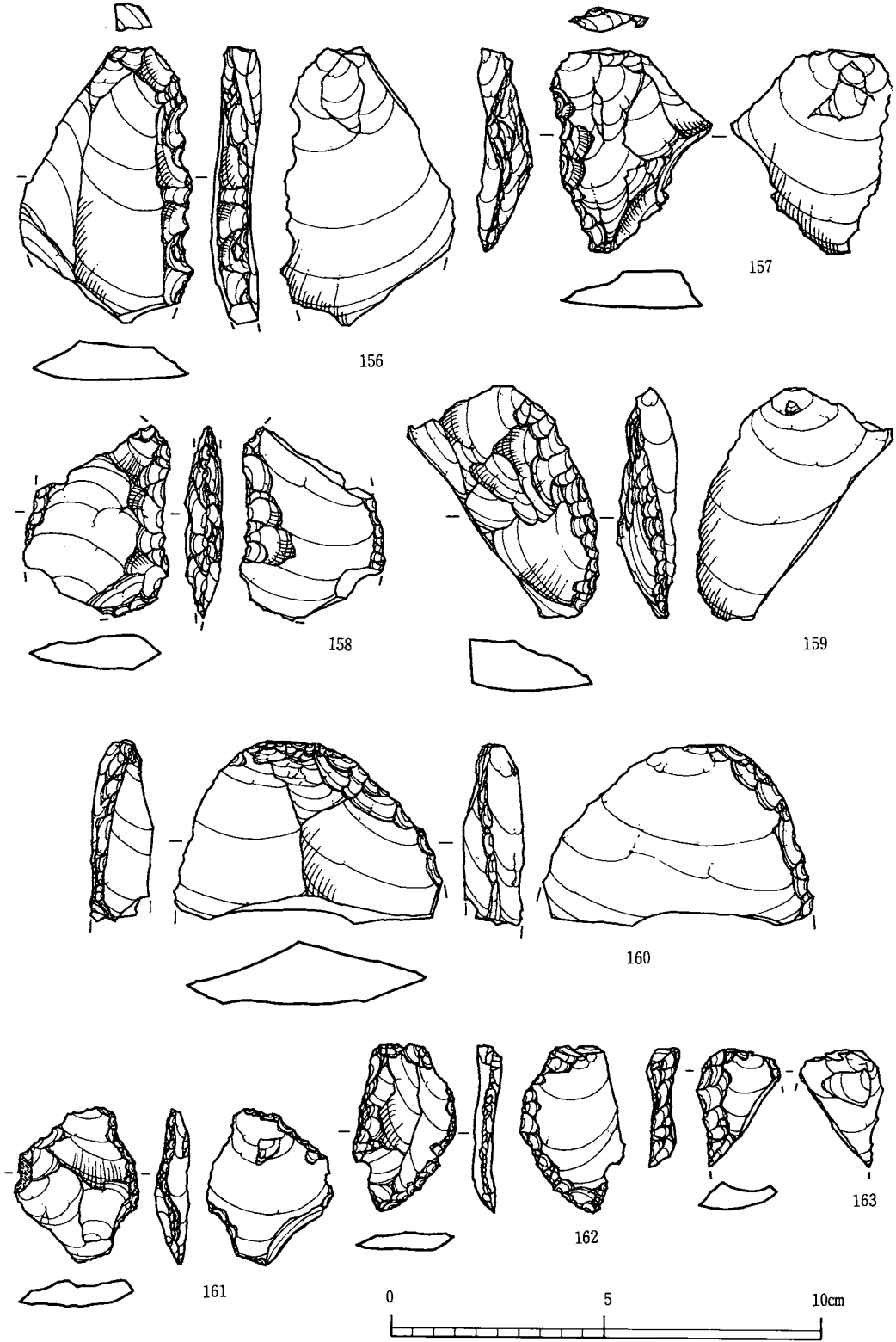
3類は、刃部が三つ以上の縁辺に設けられる削器にあたる。資料数は、5点である。これらの出土地点は、東側丘陵に3点、そして西側丘陵と中央部北側の谷部にそれぞれ1点がある。刃部の種類には、片刃（178）と両刃（167・180～182）がある。なお、この資料の中で、181

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



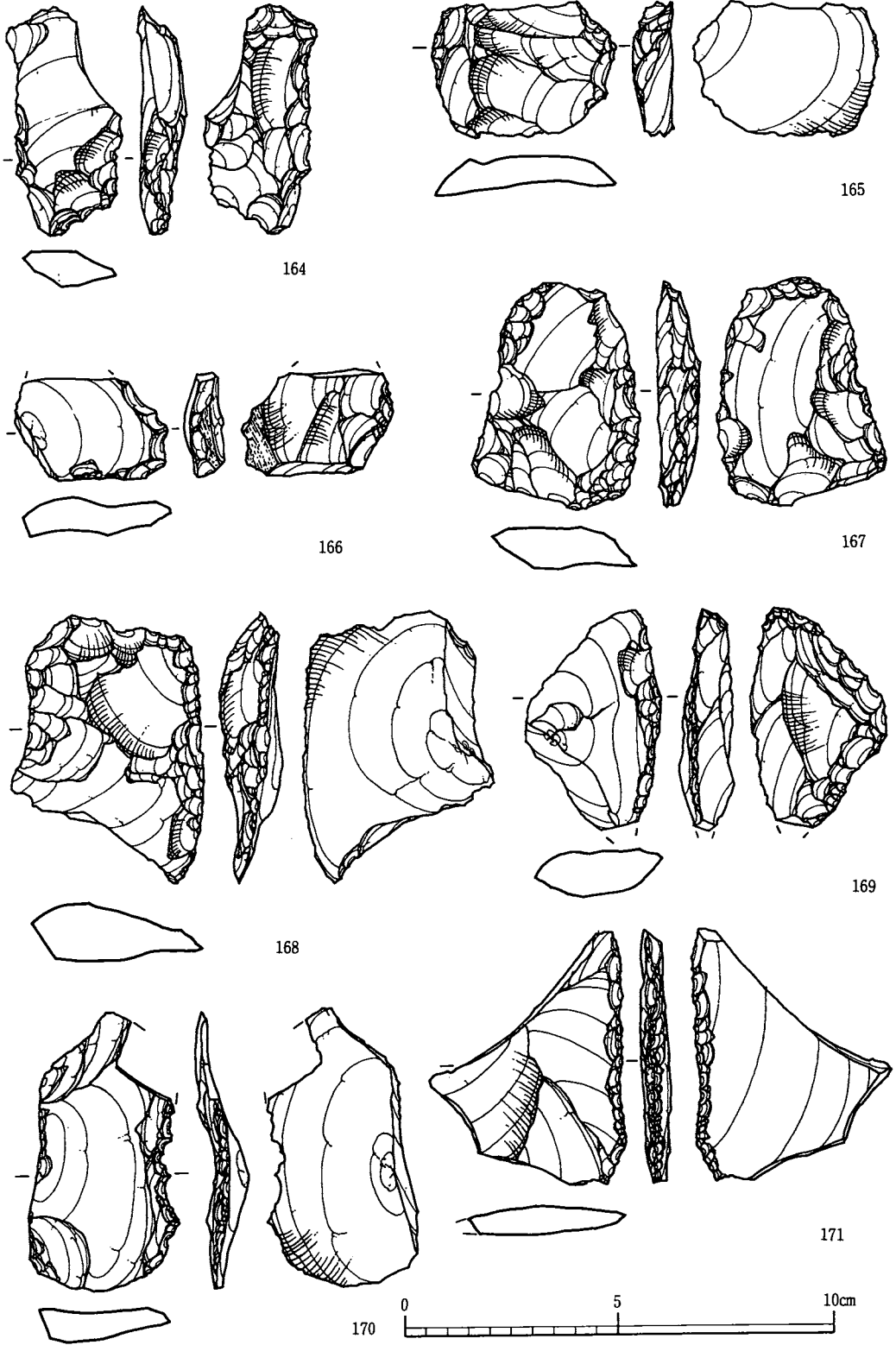
第158図 遺物分布図 (削器・挟入石器・石匙)

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



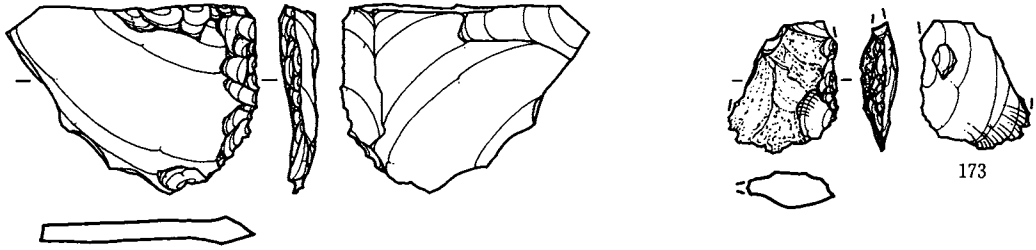
第160図 石器実測図

第三章 調査の成果



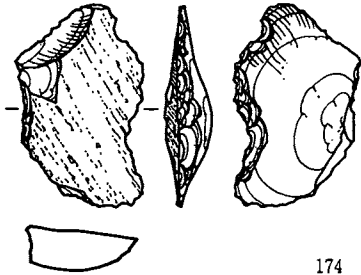
第161図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

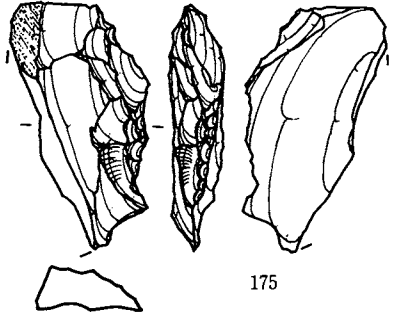


172

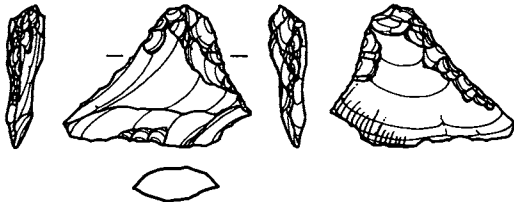
173



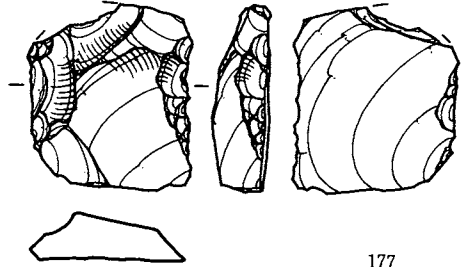
174



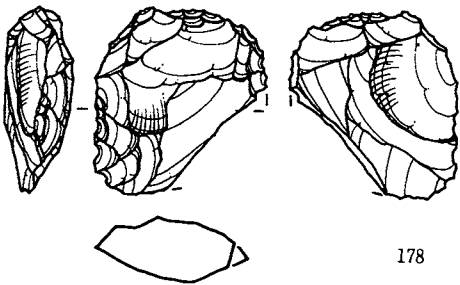
175



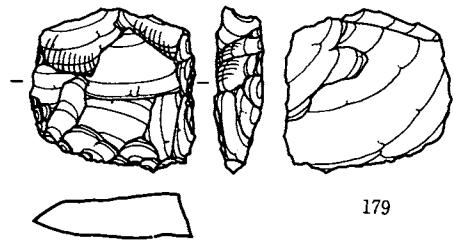
176



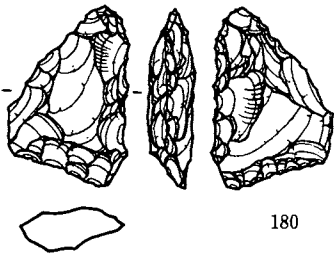
177



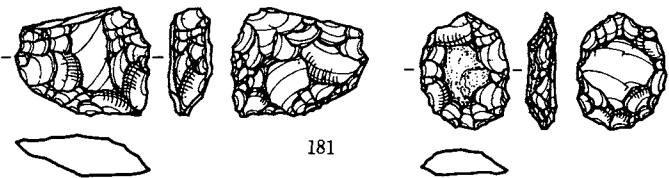
178



179

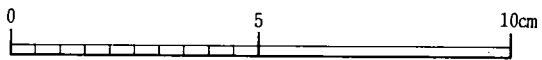


180



181

182



第162図 石器実測図

第26表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
156	削器	珩岩	(6.4)	4.1	1.15	(27.6)	VIII JL 131
157	〃	黒曜石	4.7	3.75	1.3	13.1	IVD JL 380
158	〃	珩岩	(4.4)	3.35	0.85	(12.6)	VIII JL 44
159	〃	珩岩	5.3	4.55	1.4	23.9	VIII JL 10
160	〃	珩岩	(4.2)	(6.25)	(1.5)	(34.0)	VIB JL 208
161	〃	珩岩	3.6	2.95	0.8	6.6	VIII JL 73
162	〃	珩岩	3.9	2.45	0.65	5.05	VIB JL 204
163	〃	黒曜石	(2.75)	(1.95)	(0.6)	(2.2)	VIII JL 234
164	〃	珩岩	5.3	2.65	1.1	11.45	IVD JL 1832
165	〃	珩岩	3.1	4.25	0.9	12.1	VIC JL 80
166	〃	安山岩	(2.35)	3.05	0.9	(8.0)	IVD JL 731
167	〃	珩岩	5.15	3.9	1.0	18.75	IVD JL 2165
168	〃	珩岩	6.2	4.5	1.45	33.0	VIB JL 210
169	〃	珩岩	(5.0)	3.1	1.3	(15.3)	III D JL 234
170	〃	珩岩	6.4	3.5	1.2	(15.3)	IVD JL 1365
171	〃	珩岩	(5.85)	(4.55)	0.7	(17.45)	VIII JL 1
172	〃	珩岩	3.75	5.05	0.8	14.05	IVD JL 1887
173	〃	珩岩	(2.6)	2.2	0.7	(3.2)	VIII JL 28
174	〃	珩岩	4.05	2.6	0.95	8.3	VIII JL 76
175	〃	珩岩	4.9	(2.8)	1.1	(13.2)	IVD JL 1367
176	〃	珩岩	2.8	3.75	0.8	5.15	IXD JL 105
177	〃	珩岩	3.7	3.2	1.0	15.2	IVD JL 1745
178	〃	珩岩	3.7	3.4	1.3	15.4	VD JL 208
179	〃	珩岩	3.3	3.2	1.0	12.1	VIA JL 101
180	〃	珩岩	3.6	2.4	0.9	7.0	VIB JL 241
181	〃	珩岩	2.1	2.7	0.8	5.4	IVD JL 377
182	〃	珩岩	2.3	1.7	0.55	2.55	VIII JL 105

と182は、楔形石器かもしれない。

所属不明の削器 (159・175)

所属不明の削器は、3点出土した。図示したものは、その内の2点である。資料ごとに説明を加えてみたい。

159は、西側丘陵で出土したもので、幅広の縦長剥片を素材としている。剥片の打面は、点状打面である。刃部は、片刃で、右側縁にあるが、左側縁を欠損しているため、全体の形状は不明である。第1類か第2類に属するものであろう。珩岩製である。175は、東側丘陵で出土したもので、横長剥片を素材とした削器である。刃部は、片刃で、素材となる剥片の先端部に設けられている。第1類に属する可能性が高い。珩岩製である。

石匙 (第163図183)

西側丘陵の西端で、珩岩製の石匙が1点出土した。その石器組成に占める割合は、0.1%で

ある。素材となる剥片の形状についてはわからないが、その打面部は、つまみ部の左側縁部に置かれている。調整は、表裏両面とも入念であるが、つまみ部の作り出しは弱い。刃部は、両刃である。

抉入石器 (第163図184～187)

抉入石器は、4点出土した。その石器組成に占める割合は、0.6%で、石質ごとの内訳は、珪岩3点、安山岩1点であった(第23表)。出土地点は、西側丘陵に1点、東側丘陵に1点、そして、中央部北側の谷部付近に2点である(第158図)。

184は、中央部北側の谷部付近で出土した石器で、抉入部と削ぎの刃部を併設している。抉入部の半径は、0.5cmである。珪岩製である。185は、横広の剥片の左側縁の一部に抉入部を持つ資料で、その半径は、0.4cmを測る。出土地点は、北側谷部にあたり、184の5m南側にある。石質は、珪岩である。186は、安山岩製の大型剥片の先端部に、抉入部を持つ資料で、東側丘陵から出土した。抉入部の半径は、0.4cmである。187は、西側丘陵の西端で検出された石器である。素材となる剥片は、珪岩製の縦長剥片で、その先端部近くに抉入部が作られている。その半径は、0.3cmである。

石錐 (第163図188～第164図210)

石錐は、23点検出されたが、その石器組成に占める割合は、4%にすぎない。また、石材では、珪岩19点、黒曜石2点、安山岩1点、頁岩1点という内訳であった(第23表)。

石器の分布は、大きく四つのまとまりに分けることができる。それは、西側丘陵の谷部、東側丘陵の谷部、そして、丘陵中央部の北側谷部の基部側と先端部側である。この四つのまとまりは、それぞれの間に空白部を持ち、占地が極めて独立的である点から、興味ある傾向と考えられる(第159図)。

この23点の石器は、つまみ部の有無によって、第1類と第2類に分類できる。以下、類別に、示していきたい。

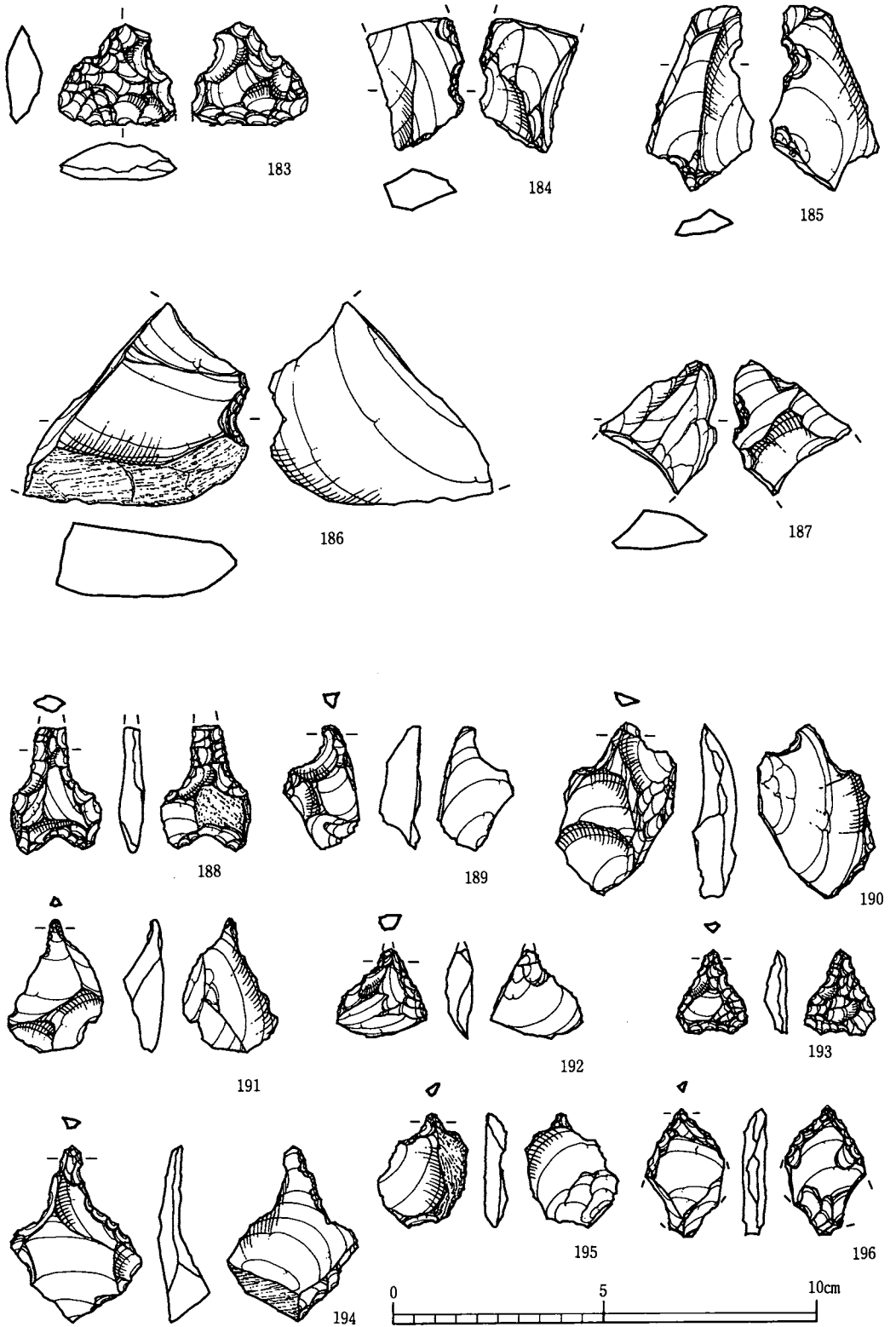
第1類 (188～198)

1類に分類されるものは、錐部の作り出しによって、つまみ部と錐部が明瞭に区別されている資料にあたる。資料数は、11点で、その内、東側丘陵が7点と最も多く、西側丘陵と中央谷部の基部側で、それぞれ2点づつが出土している。これらの資料には、その調整の状態によって、入念な両面調整のもの(188・193・197・198)と荒い調整のものがある。素材となる剥片は、横長ないし横広の剥片で、石器の錐部は、剥片の先端部に設けられているものがほとんどである(189・191～195・198)。

第2類 (199～210)

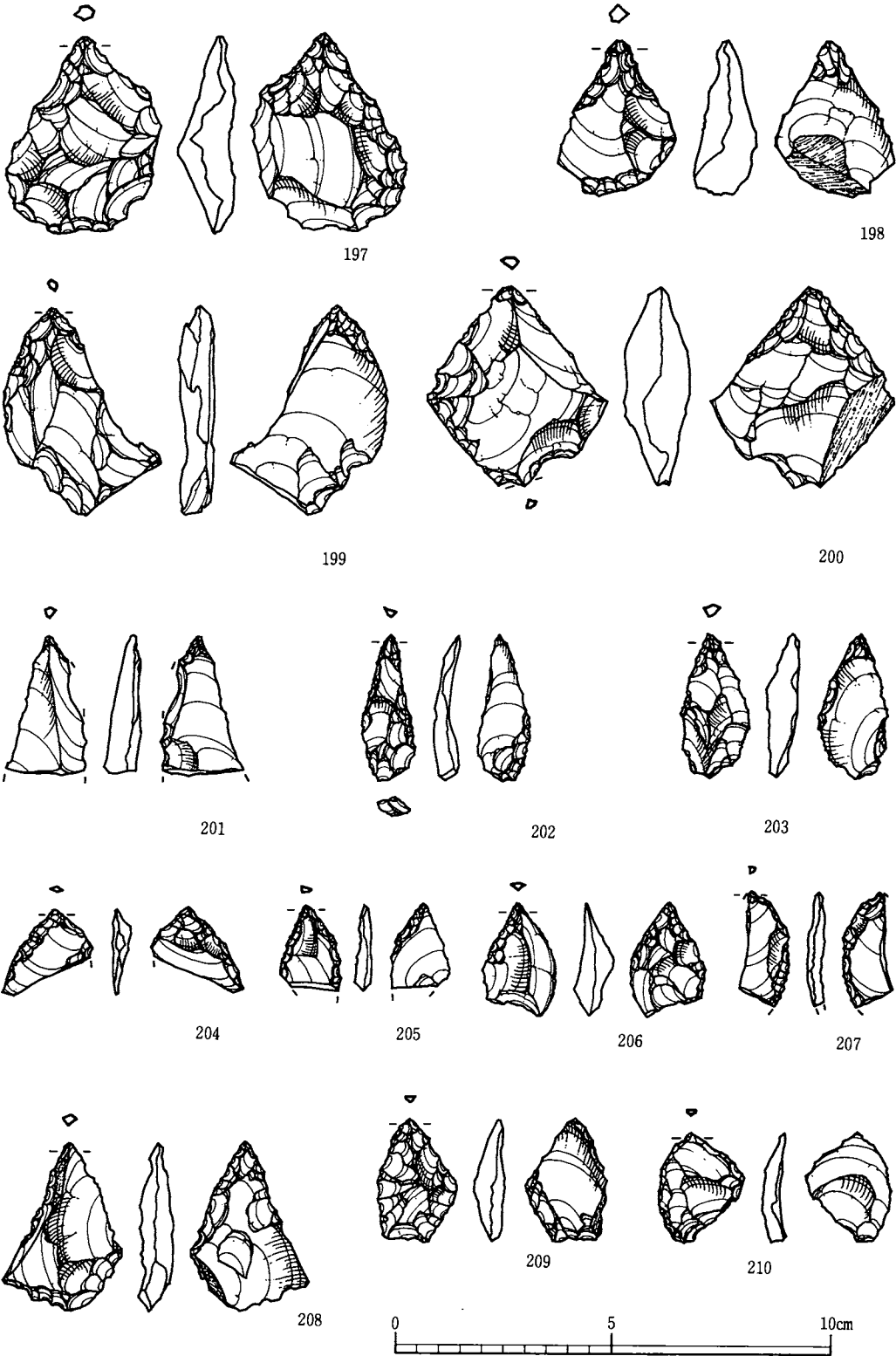
2類は、基部からそのまま錐部へ至り、明瞭なつまみ部を持たない石器である。資料点数は、東側丘陵5点、西側丘陵4点、北側谷部の先端部2点、同基部1点の計12点である。この12点

第三章 調査の成果



第163図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第164図 石器実測図

第27表 石器計測表

No.	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
183	石 匙	珪岩	2.35	2.75	0.9	4.75	IXD JL 87
184	扶入石器	珪岩	(3.1)	2.3	1.05	(6.15)	VIA JL 27
185	〃	珪岩	4.3	2.5	0.9	5.9	VIB JL 231
186	〃	安山岩	(4.75)	(5.3)	(1.8)	(39.5)	VD JL 54
187	〃	珪岩	(3.1)	(2.75)	(0.9)	(6.3)	IXD JL 28
188	石 錐	安山岩	(2.9)	2.1	0.6	(2.5)	VIII JL 64
189	〃	黒曜石	2.9	1.8	1.0	3.75	VIII JL 63
190	〃	珪岩	4.0	2.8	1.05	8.9	IVD JL 1772
191	〃	珪岩	3.1	2.2	0.95	3.5	IVD JL 603
192	〃	珪岩	(2.0)	2.15	0.65	(2.2)	VIC JL 18
193	〃	珪岩	2.0	1.7	0.5	1.35	VIB JL 128
194	〃	珪岩	4.15	3.1	1.2	6.6	IVD JL 431
195	〃	珪岩	2.7	2.2	0.6	2.8	IVD JL 1457
196	〃	頁岩	3.05	1.85	0.6	3.35	IVD JL 1234
197	〃	珪岩	4.5	3.55	1.3	16.5	IVD JL 2078
198	〃	珪岩	3.5	2.7	1.4	8.85	IVD JL 239
199	〃	珪岩	4.8	3.6	0.8	10.75	VIII JL 120
200	〃	珪岩	4.5	4.2	1.5	21.9	VIII JL 124
201	〃	珪岩	(3.1)	(1.9)	(0.8)	(3.15)	IVC JL 104
202	〃	珪岩	(3.1)	1.2	0.6	2.0	VC JL 186
203	〃	珪岩	3.3	1.55	0.75	2.6	VIII JL 57
204	〃	黒曜石	(2.0)	(2.1)	(0.45)	(1.0)	VIII JL 150
205	〃	珪岩	(1.95)	1.4	(0.35)	(0.7)	IVD JL 251
206	〃	珪岩	2.6	1.7	0.9	2.35	VIA JL 54
207	〃	珪岩	(2.6)	(1.15)	(0.35)	(1.0)	VIA JL 7
208	〃	珪岩	3.95	2.7	0.8	6.5	VC JL 240
209	〃	珪岩	2.8	1.8	0.7	3.1	VIB JL 35
210	〃	珪岩	2.5	1.95	0.55	2.1	VC JL 230

の石器には、その形状によって、縦長（201～203）と横広があり、さらに後者には、大型のもの（199・200・208）と小型のものがある。使用される剥片は、縦長剥片（199・201・202）と横広の剥片で、その錐部は、打面部側に設定されるもの（204・207）も僅かにあるが、剥片の先端部や側縁部に設けられるものがほとんどである。この他、東側丘陵の分布で、1類と2類の分布の中心が東西にずれていることは注目される。

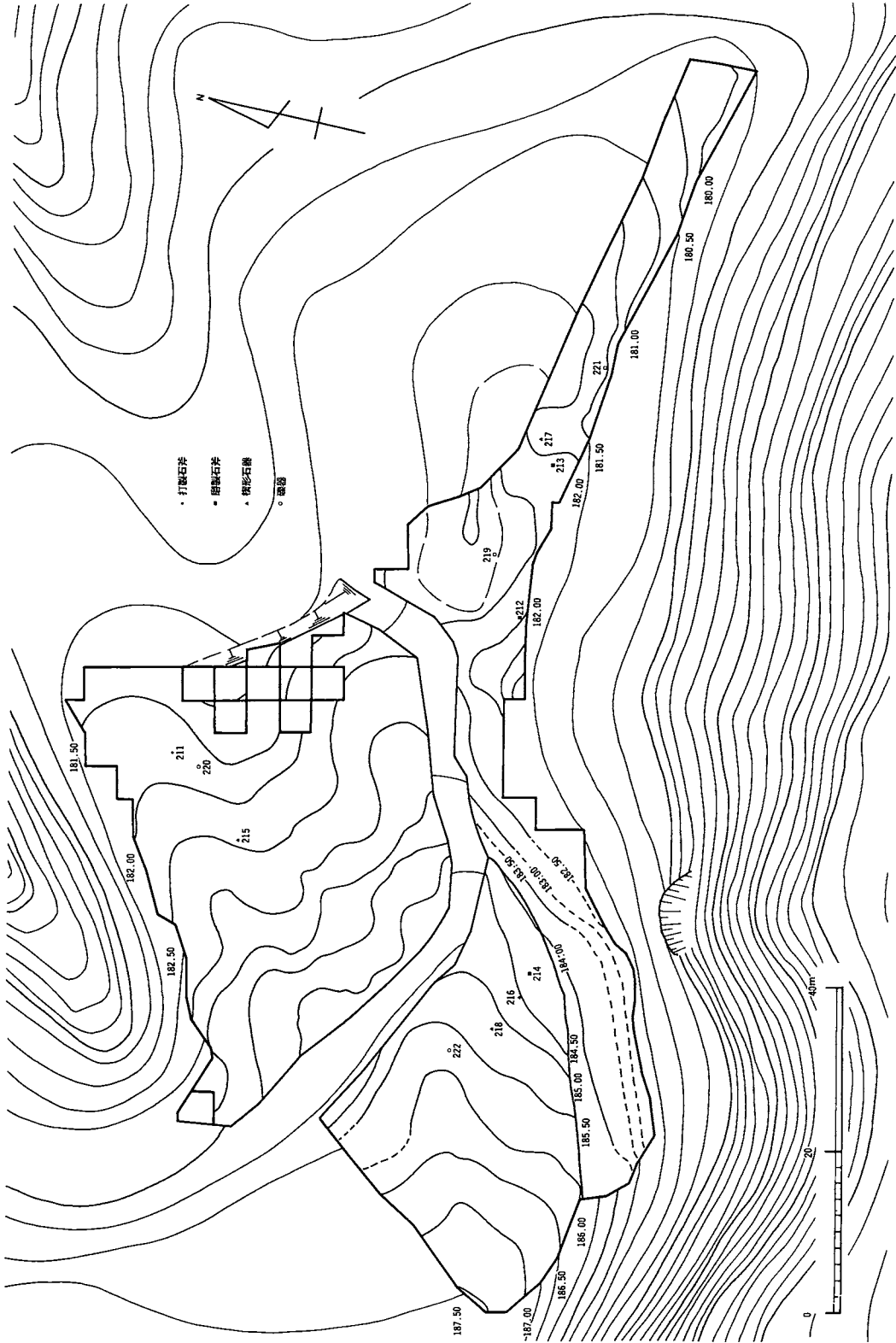
打製石斧（第166図211）

小型の打製石斧が丘陵北側の尾根上で1点出土した（第165図）。石質は、安山岩である。調整加工は階段状剥離で、全体の形状は撥形を呈し、刃部は直刃の両刃をなしている。

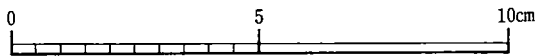
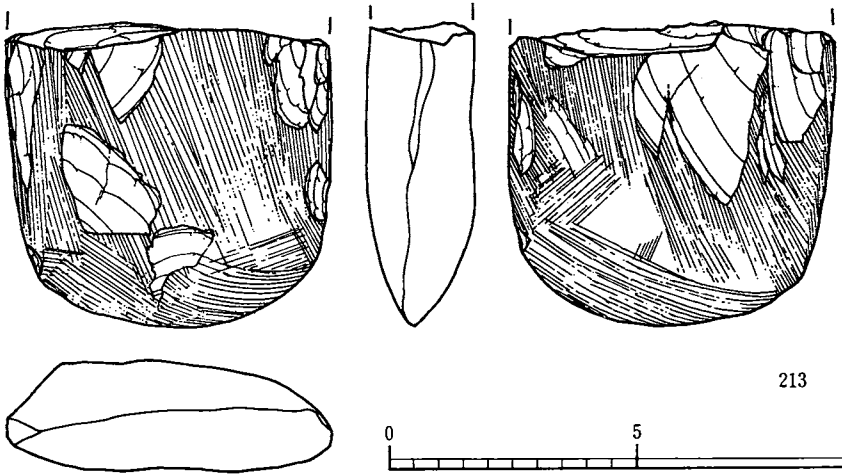
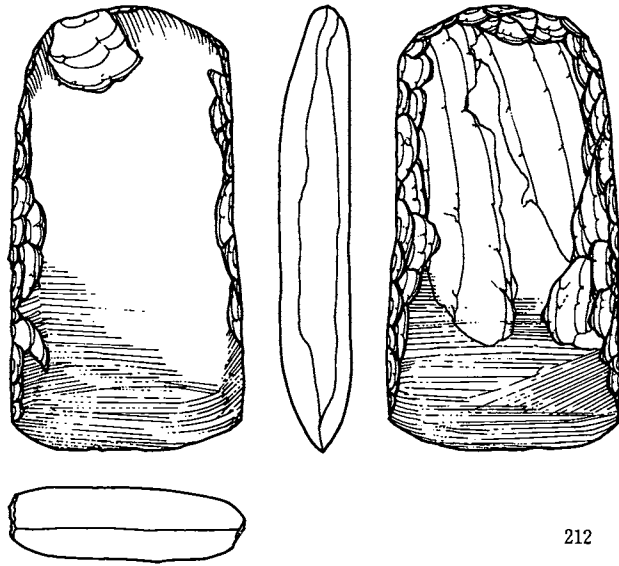
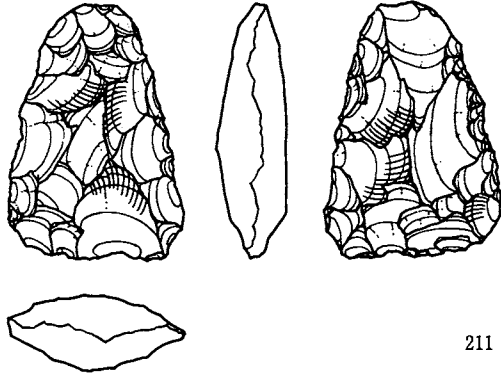
磨製石斧（第166図212～214）

磨製石斧は、1点の未加工品を含め、3点が出土した。石器組成に対しては、0.4%の割合である（第23表、第165図）。以下、資料ごとに説明を加えていきたい。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第165図 遺物分布図 (打製石斧・磨製石斧・楔形石器・漆器)

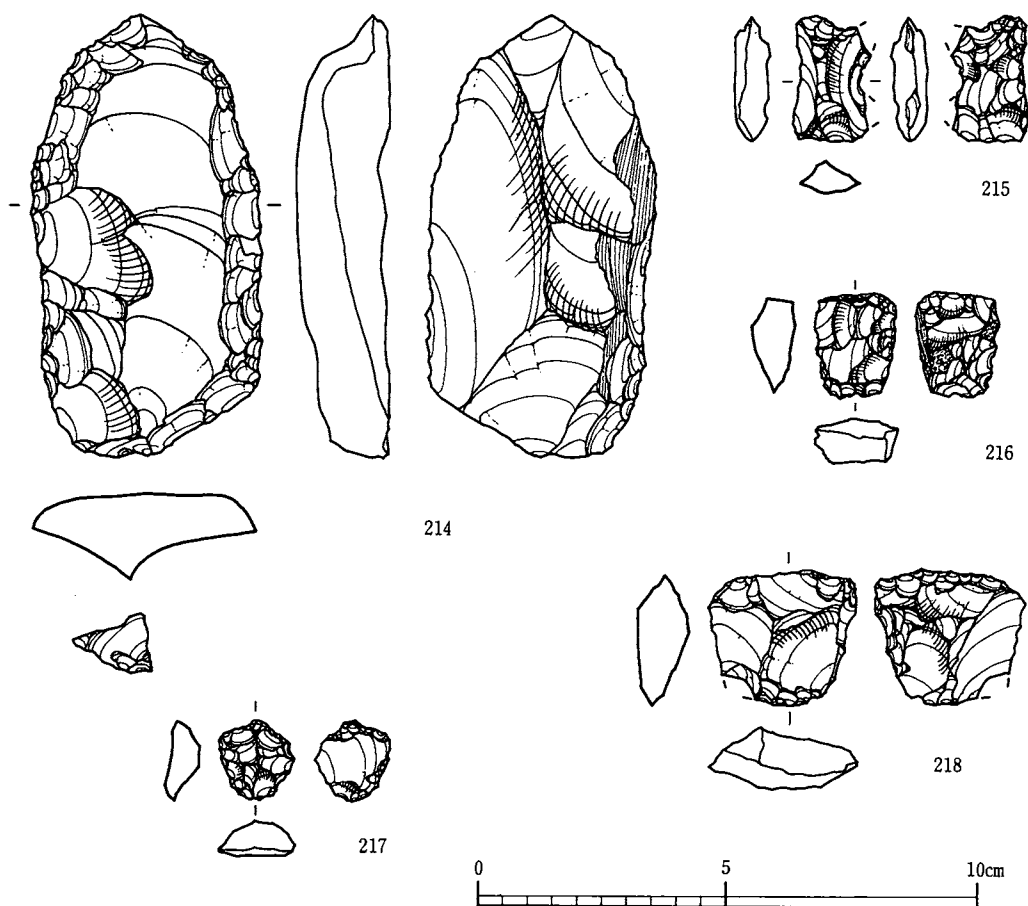


第166図 石器実測図

212は、丘陵中央の南側谷部周辺で検出した、安山岩製の磨製石斧である。素材となる剥片は、表面に自然面を持つ横長剥片で、その縁辺の表裏両面に細かい調整が加えられた後、刃部を中心に研磨されている。刃部は、両刃をなし、研ぎ直しによって、右側が擦り減っている。この状況から、この石斧は、縦斧と考えられる。213は、東側丘陵で出土した、安山岩製の磨製石斧の刃部である。表裏両面が丁寧に研磨されており、その素材となる剥片の形状は不明である。刃部は、丸みを帯び、両刃である。この刃部も右側が擦り減っており、石斧の形態は、縦斧と考えられる。214は、西側丘陵に出土地点がある石器で、一部に研磨痕が観察される。このことから、磨製石斧の未加工品と考える。素材となる剥片は、縦長剥片で、その裏面を中心に調整加工が観察される。

楔形石器 (第167図215~218)

楔形石器は、4点を検出した。石器組成に占める割合は、0.6%である (第23表)。石質ごとの内訳は、黒曜石3点、珪岩1点で、また、出土地点での内訳は、西側丘陵2点、丘陵中央の



第167図 石器実測図

第28表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
211	打製石斧	安山岩	5.05	3.55	1.45	24.3	VIA JL 103
212	磨製石斧	安山岩	8.8	4.7	1.5	101.8	VD-4一括
213	〃	安山岩	(6.0)	(6.5)	(2.2)	(132.8)	IVD JL 522
214	〃	砂岩	8.8	4.45	1.9	78	VIII JL 5
215	楔形石器	黒曜石	2.5	(1.5)	0.7	(2.35)	VII B JL 159
216	〃	黒曜石	2.05	1.6	0.9	2.95	VIII JL 164
217	〃	黒曜石	1.6	1.5	0.7	1.5	IVD JL 1856
218	〃	珪岩	2.65	2.95	1.3	8.35	VIII C JL 53
219	礫器	砂岩	9.15	11.4	4.6	410	VC JL 177
220	〃	砂岩	11.3	(10.3)	4.6	(600)	VIB JL 186
221	〃	砂岩	10.5	(11.3)	4.2	(500)	IVD JL 1319
222	〃	砂岩	16.0	12.4	7.45	1805	VIII C JL 121

北側谷部1点、東側丘陵1点であった(第165図)。

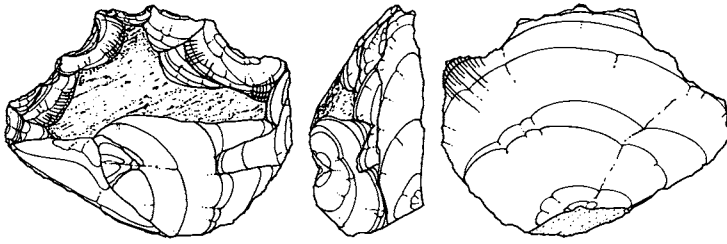
215は、中央の北側谷部周辺で出土した、黒曜石製の楔形石器である。この資料は、両側縁がややくびれ、一端に挟りがみられるもので、上下両端には対向する小剝離痕が観察される。糸巻形石器と呼ばれるものに相当する。216は、西側丘陵の浅い谷部で出土した石器で、石質は、黒曜石である。石器上端と右側面が平坦で、上部と下部とに対向する微細な剝離痕が観察される。217は、黒曜石製の楔形石器である。その出土地点は、東側丘陵の谷部にある。石器は、小型で、三角形に近い形状を呈し、その上下両端の表裏両面に微細な剝離痕がみられる。218は、西側丘陵で出土した、珪岩製の石器である。石器の上下両端に微細な剝離痕が観察される。

礫器(第168図219~222)

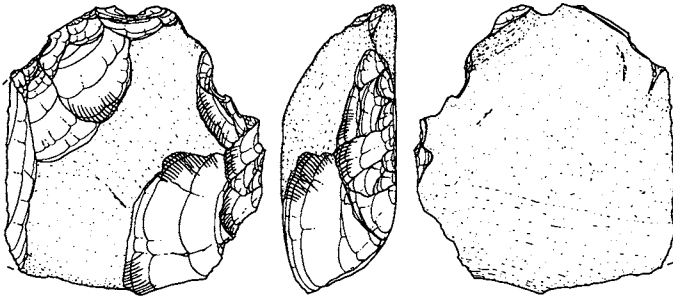
礫器は、4点出土し、石器組成に対しては、0.6%の割合を占めている(第23表)。出土地点は、東側丘陵に2点、西側丘陵と丘陵中央部の北側谷部にそれぞれ1点ずつ(第165図)、石材は、すべて砂岩である。以下、石器ごとに説明を加えていきたい。

219は、剝片素材の片刃礫器で、西側丘陵から検出した。素材となる剝片は、楕円形を呈する横広の剝片である。刃部は、その先端部に設けられ、11回の打撃によって作出されている。220は、丘陵中央の北側谷部で出土した、円礫素材の片刃礫器である。刃部は、23回以上の打撃によって作出され、石器縁辺の半分以上にわたってみられる。221は、東側丘陵で出土した礫器である。素材は、円礫で、その外周の半分以上にわたって刃部が作出されている。刃部作出のための剝離は、表面に13枚以上が確認されるが、裏面にも3枚以上がみられる。しかし、刃部の断面形態は、両刃をとらず、片刃である。222は、大型の礫器で、西側丘陵の尾根頂部付近で検出された。刃部は、長方形を呈する円礫の短辺に設けられ、9枚の剝離によって作出

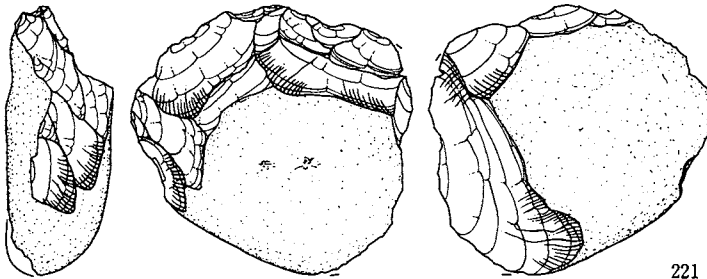
第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



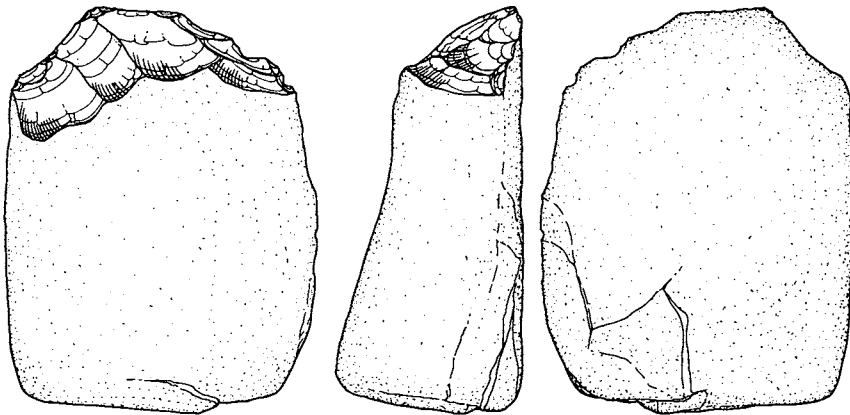
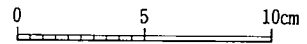
219



220



221



222

第168図 石器実測図

されている。片刃である。

磨石・敲石（第170図223～第179図306）

磨石・敲石は、205点（内、2例の接合資料があり、資料実数203点）が出土した。その石器組成に占める割合は、31%で、遺跡出土の石器の中で、もっとも高い数値を示している。石質は、砂岩203点、安山岩2点である（第23表）。

石器の分布は、丘陵のほぼ全域に広がっているが、その集中部は、丘陵の谷部を中心とした三つの部分にある。その集中部とは、西側丘陵の浅い谷部と中央北側の谷部、そして、東側丘陵の谷部の三つである。この三つの集中部は、石鏃のものと同じ傾向にあるが、それぞれの部分の石器量に差が無く、均一である点では、東側丘陵に集中する傾向のある石鏃の分布とは、少々異なりをみせている（第169図）。

出土した磨石・敲石は、その形状によって、第1類～第4類に分類される。以下、類ごとに説明を加えていこう。

第1類（223～264）

1類に属するものは、石器の形状が偏平な楕円形を呈する磨石・敲石にあたり、大型、中型、小型のものがみられる。分布には、まったく偏在の傾向はない。この類に属する石器は、その敲打痕の部位によって、さらに、四つに分類できる。それは、敲打痕が石器の縁辺部の全域で観察されるもの（223・224・229・233・239・240）、全縁辺と表裏面にあるもの（228・235・237）、縁辺の一部に認められるもの（225～227・232・234・241～243・245・246・253）、縁辺の一部と表裏面にあるもの（230・236・238・247～252・257～260・262）である。

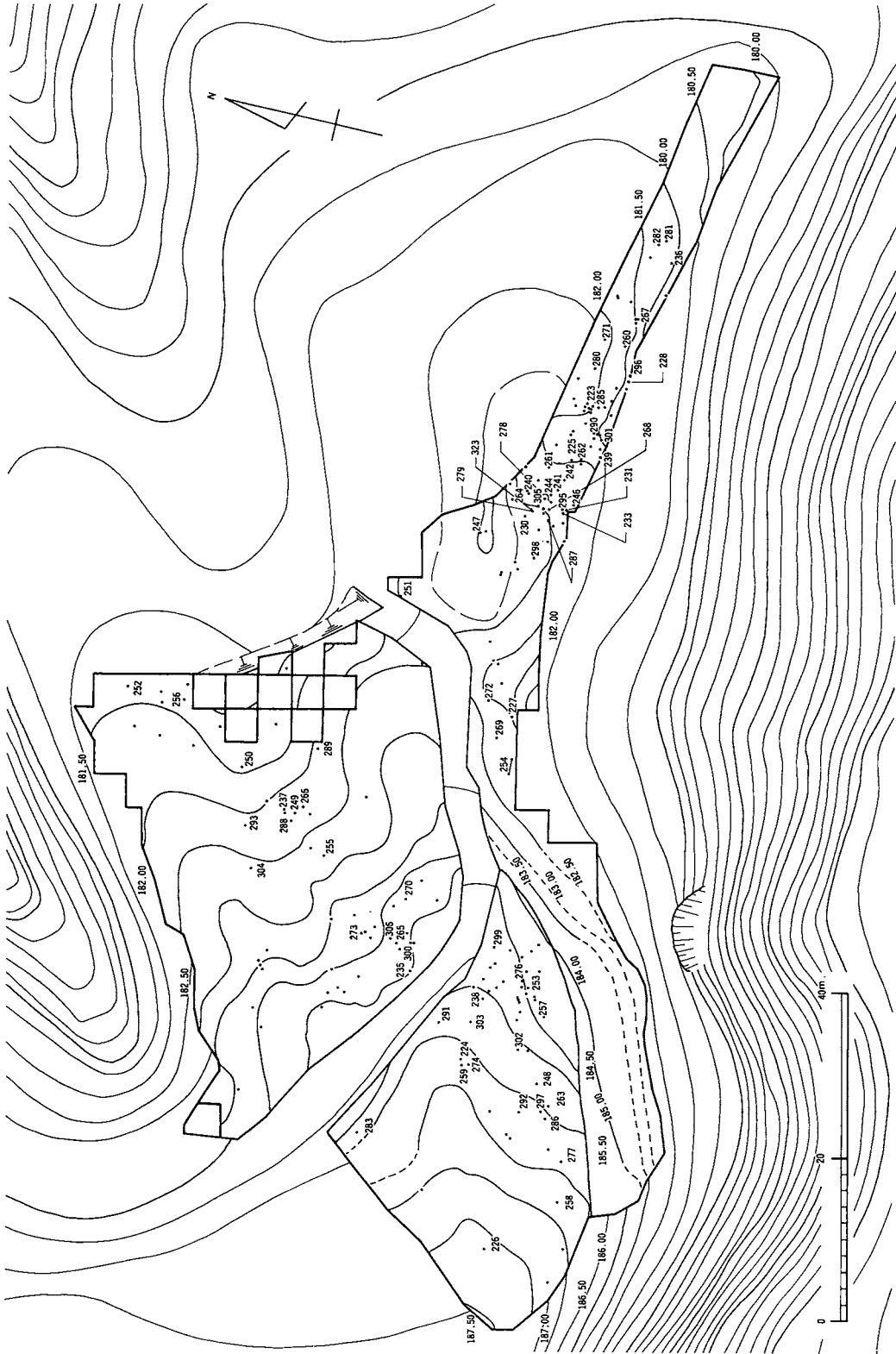
第2類（265～284）

2類に属する石器は、石器の形状が円形を呈する磨石・敲石である。大きさでは、大型、中型、小型がある。同様に、分布の傾向には特徴的なものはみられない。この石器は、敲打痕の部位によって、さらに、四つに分類できる。それは、敲打痕が石器の縁辺の全域に認められるもの（263・266・269～271・273～276・278・279）、全域と表裏面にあるもの（265・267・268）、縁辺の一部にあるもの（272・277・280・282・283）、縁辺の一部と表裏面で観察されるもの（281・284）である。

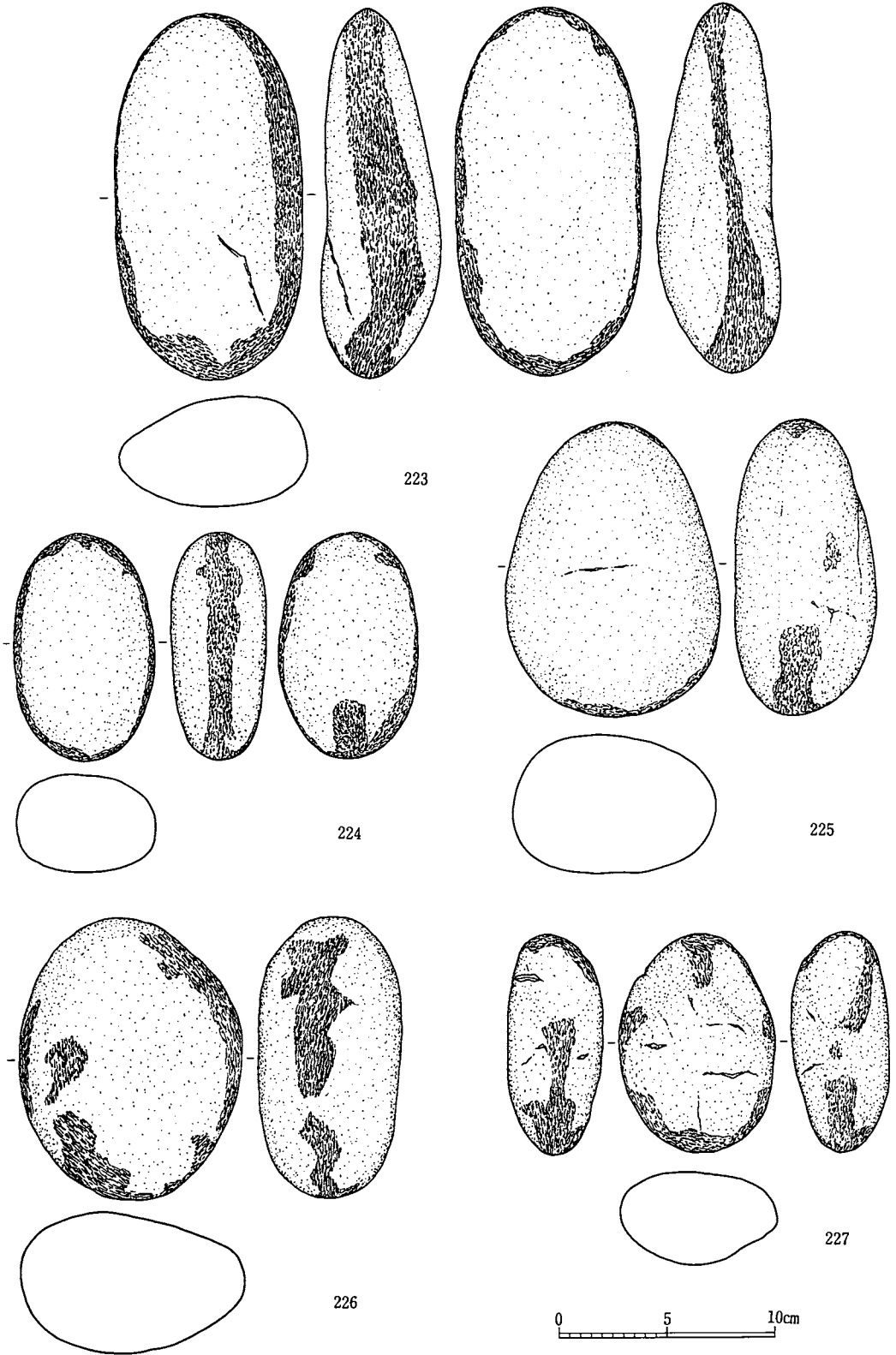
第3類（285～298）

3類は、その平面や断面の形状が不整形のもので、その形状には、不整の三角形や四角形、不定形があり、大きさに対して厚さがある。これらの石器は、その敲打痕の部位によって、さらに、縁辺の全域に敲打痕が観察されるもの（286・290・291・293）、全縁辺と表裏面にあるもの（297・298）、縁辺の一部に敲打痕があるもの（288・289・292・294～296）、縁辺の一部と表裏面にみられるもの（285・287）に分けられる。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

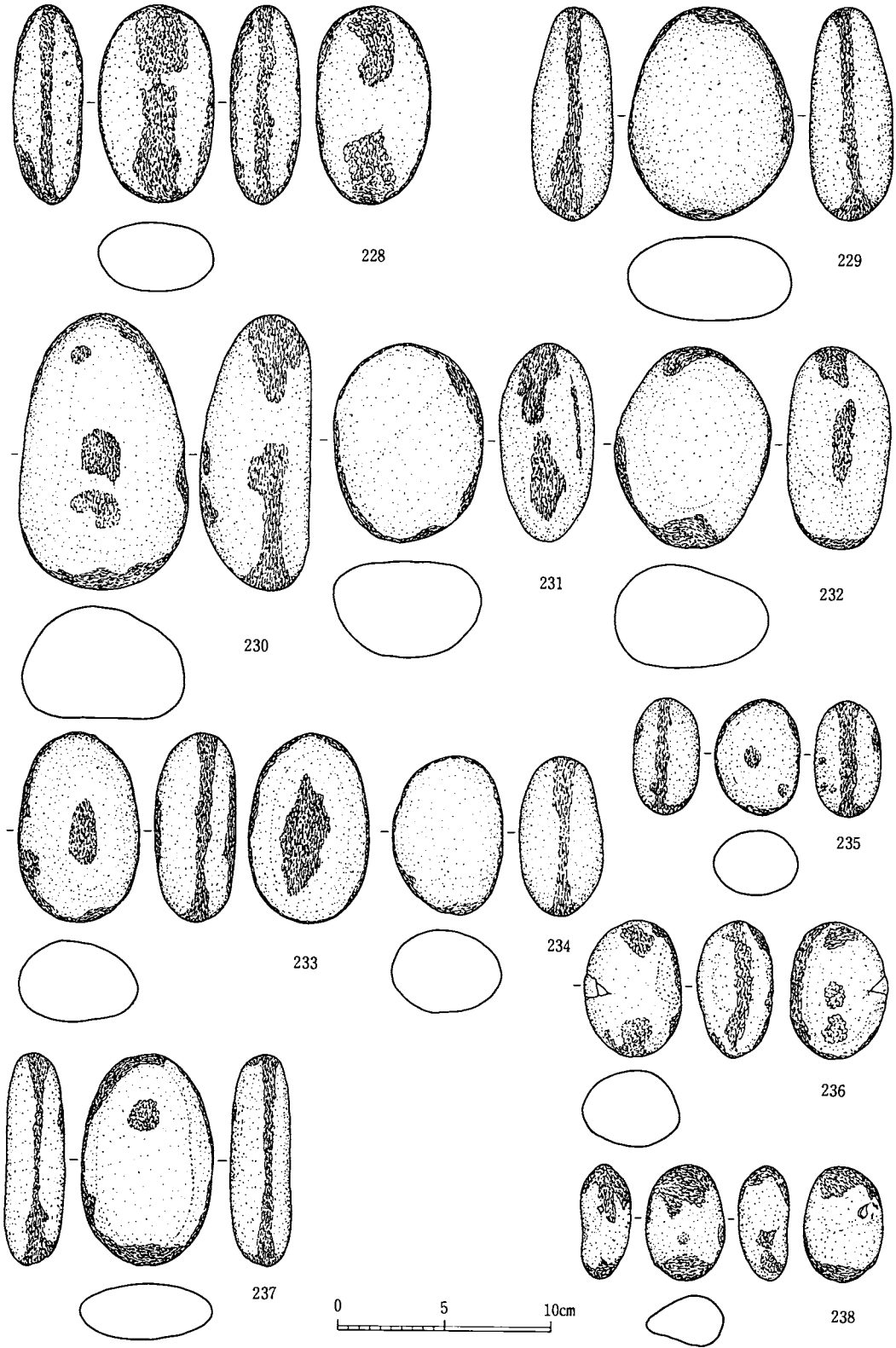


第169図 遺物分布図 (磨石・敲石)



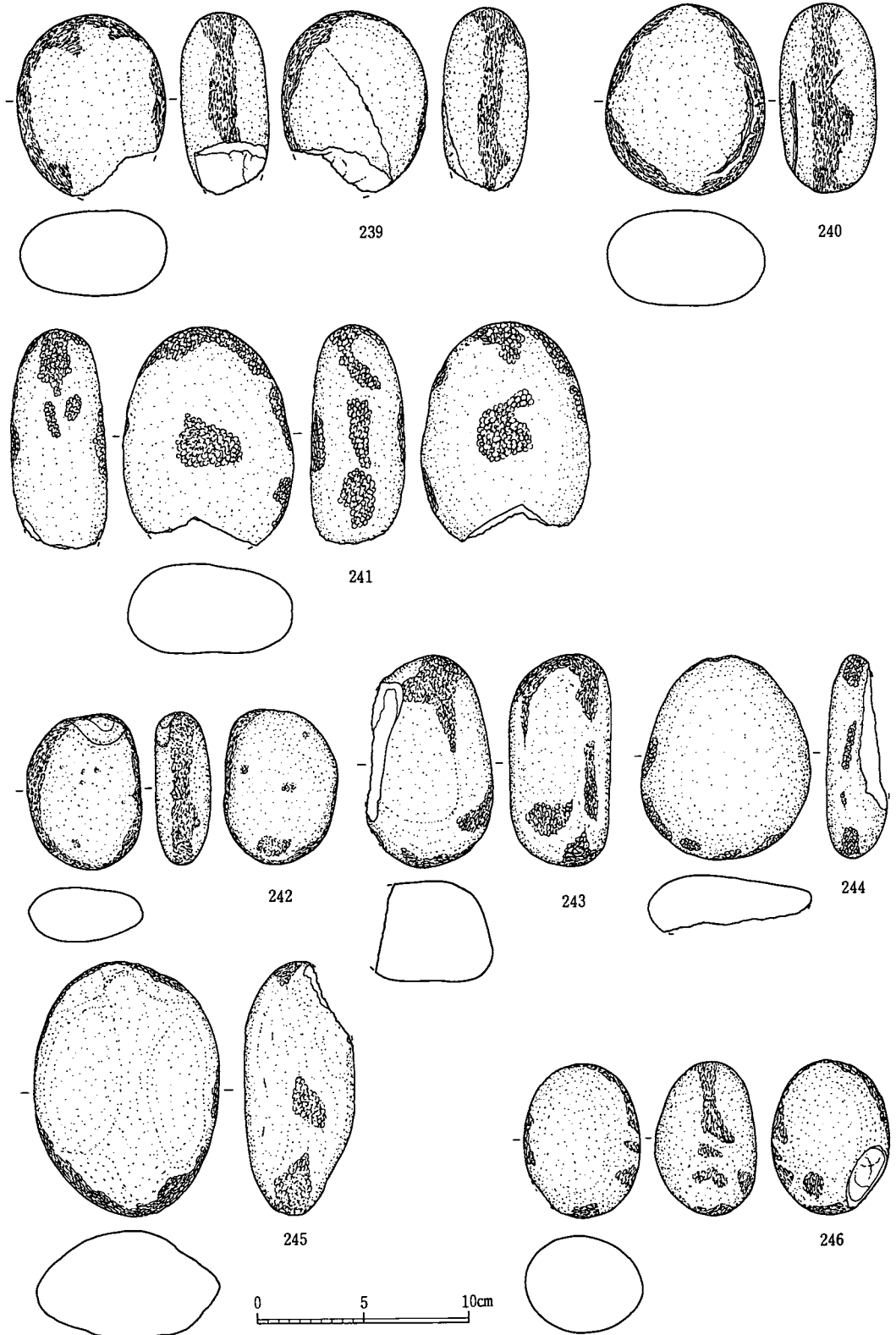
第170図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



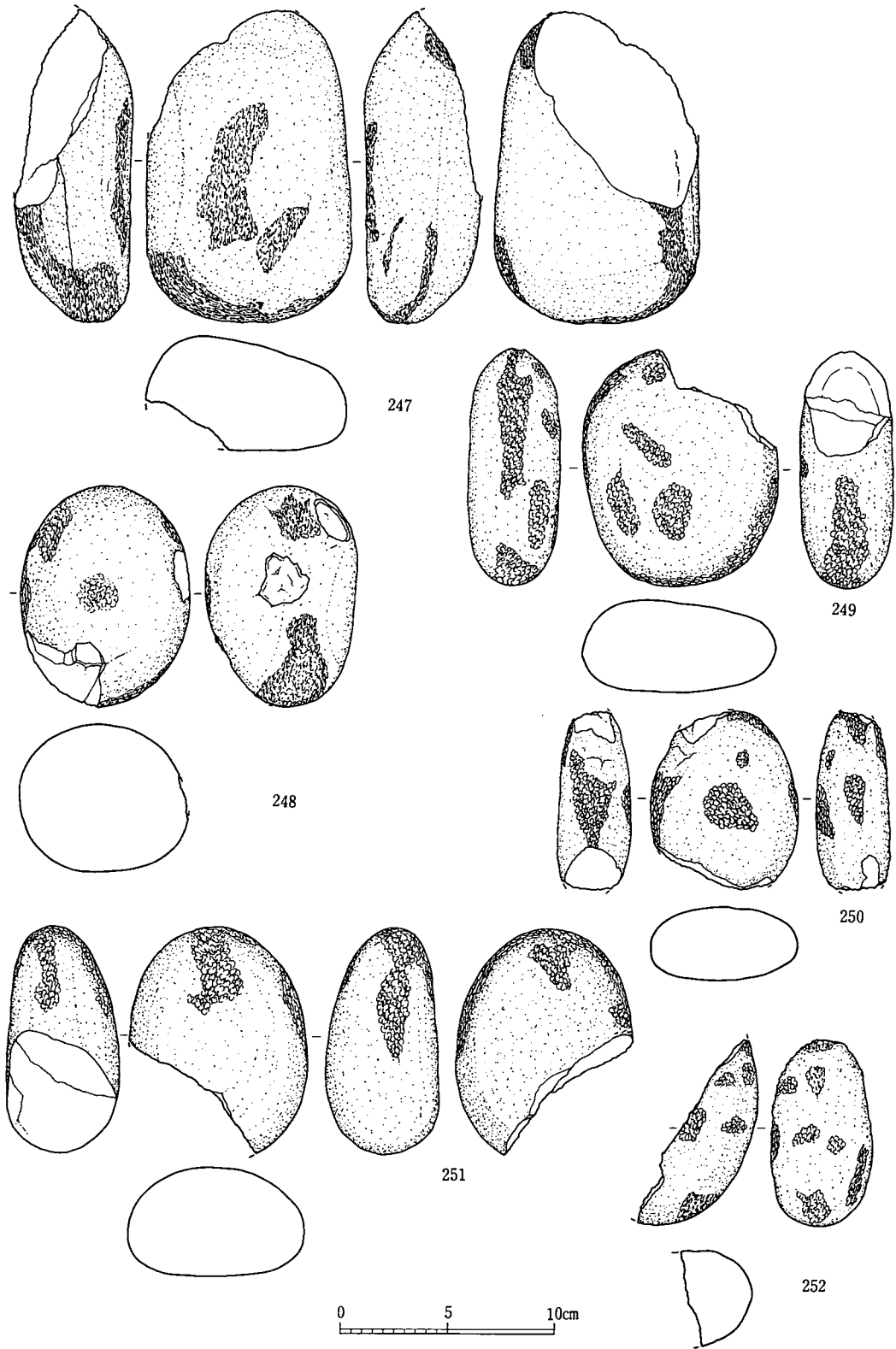
第171図 石器実測図

第三章 調査の成果

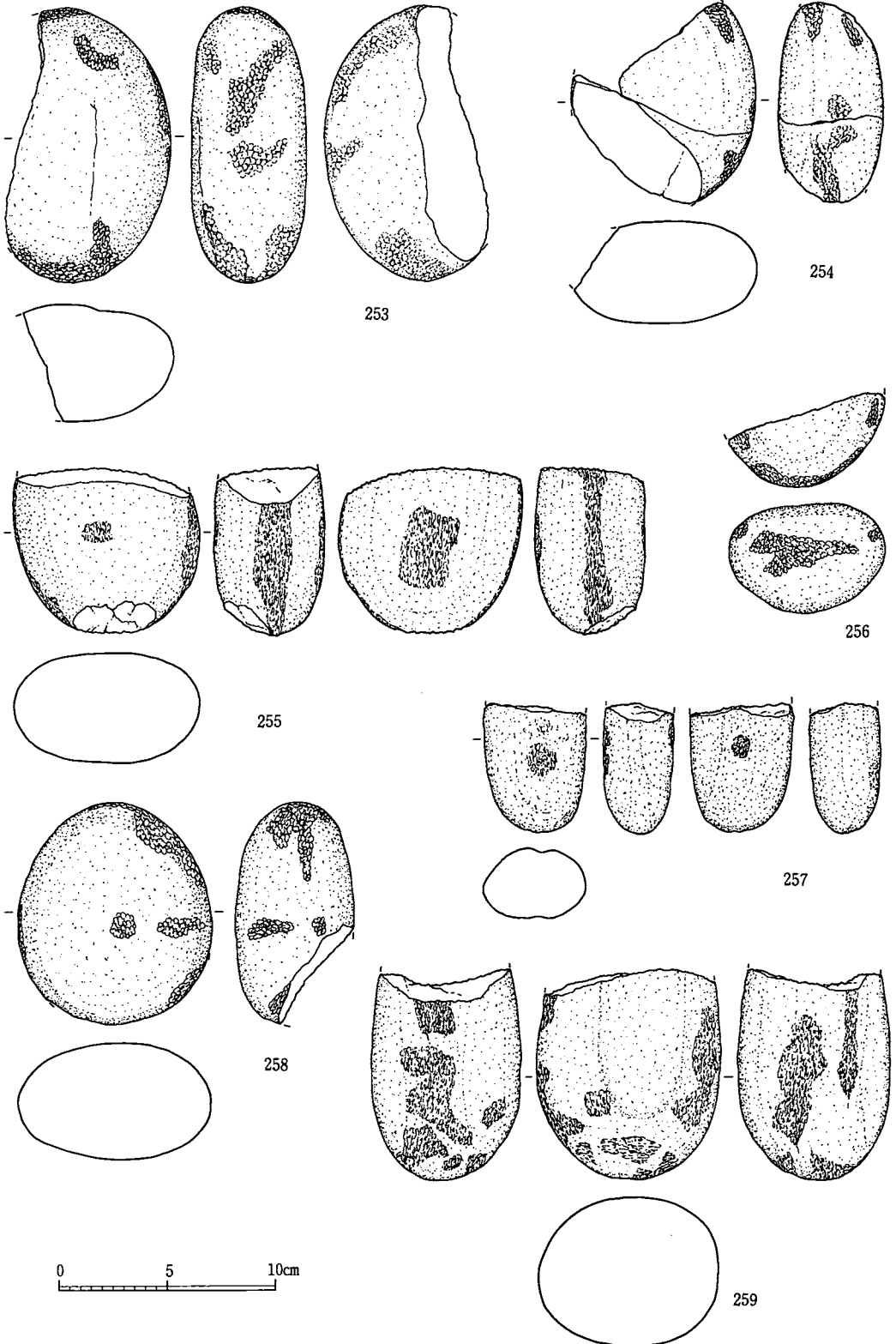


第172図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

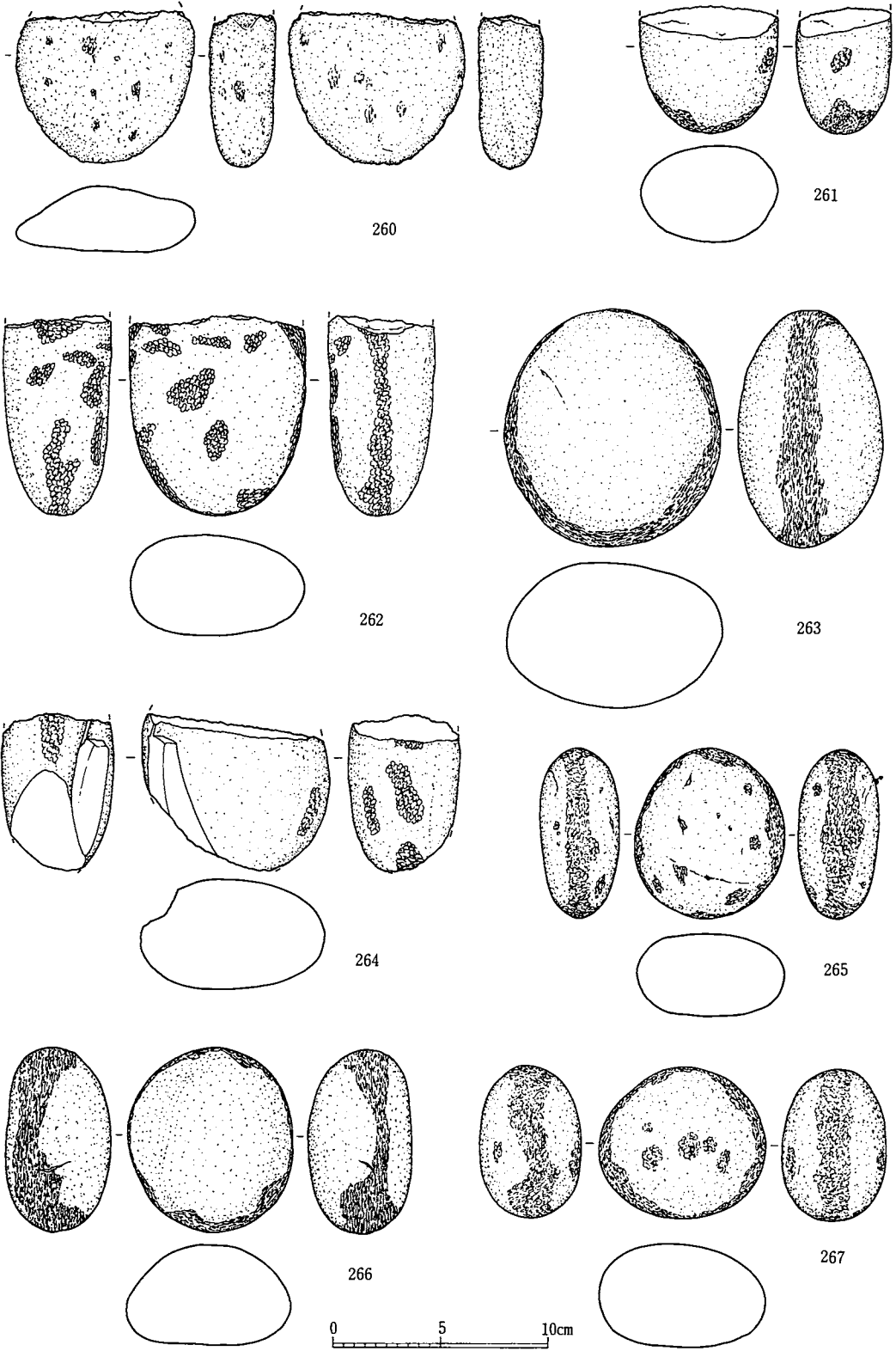


第173図 石器実測図



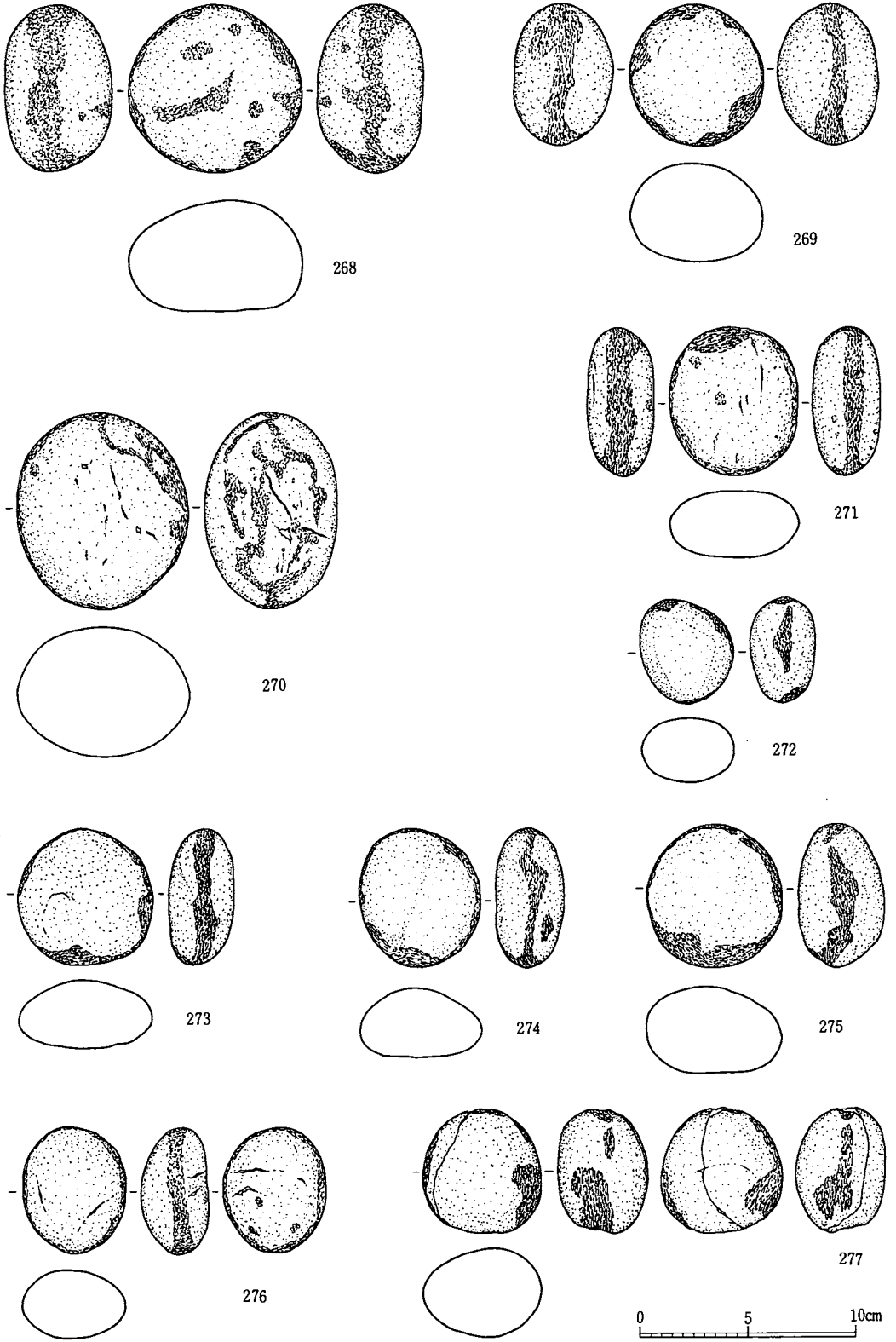
第174図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



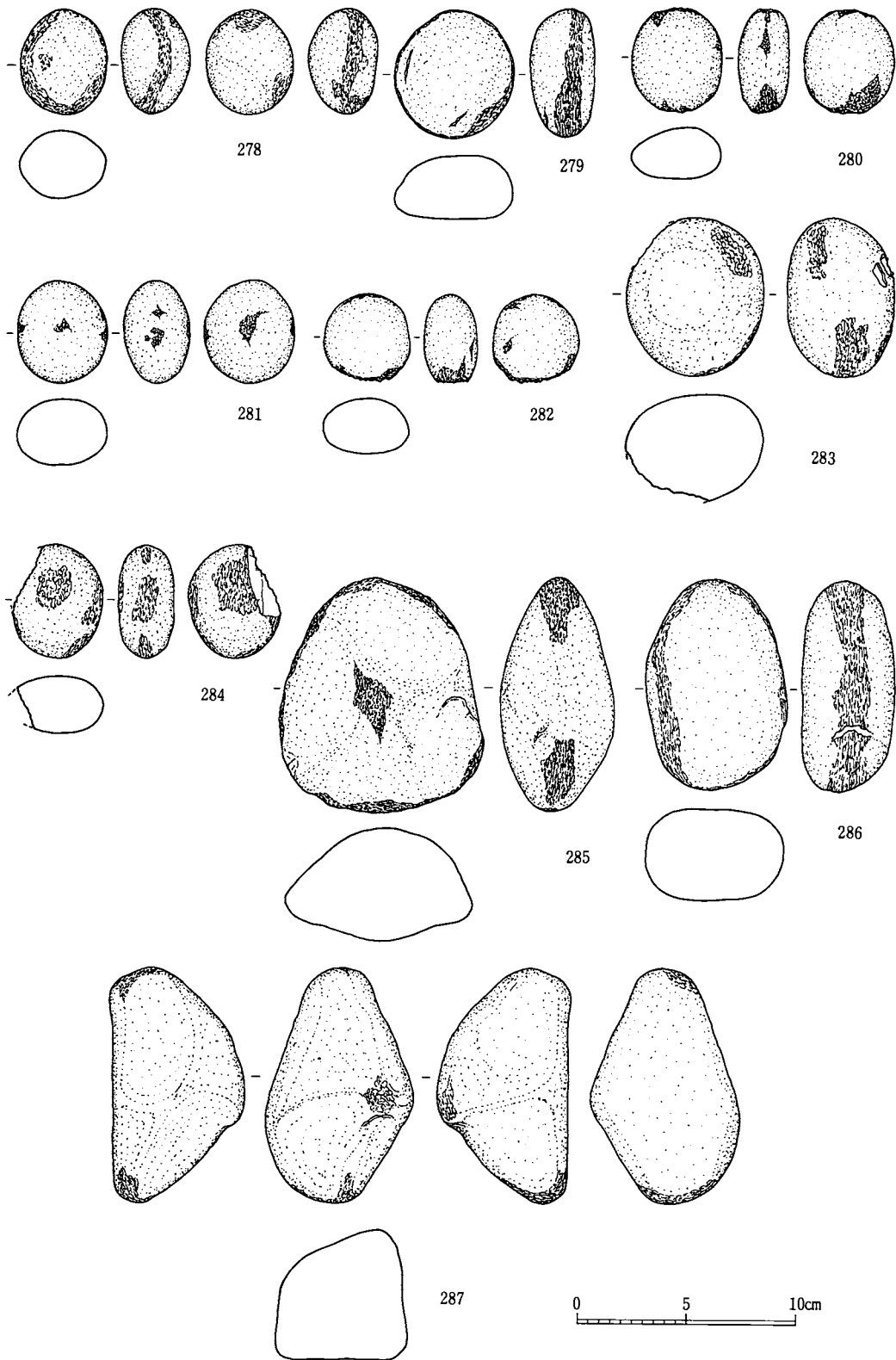
第175図 石器実測図

第三章 調査の成果



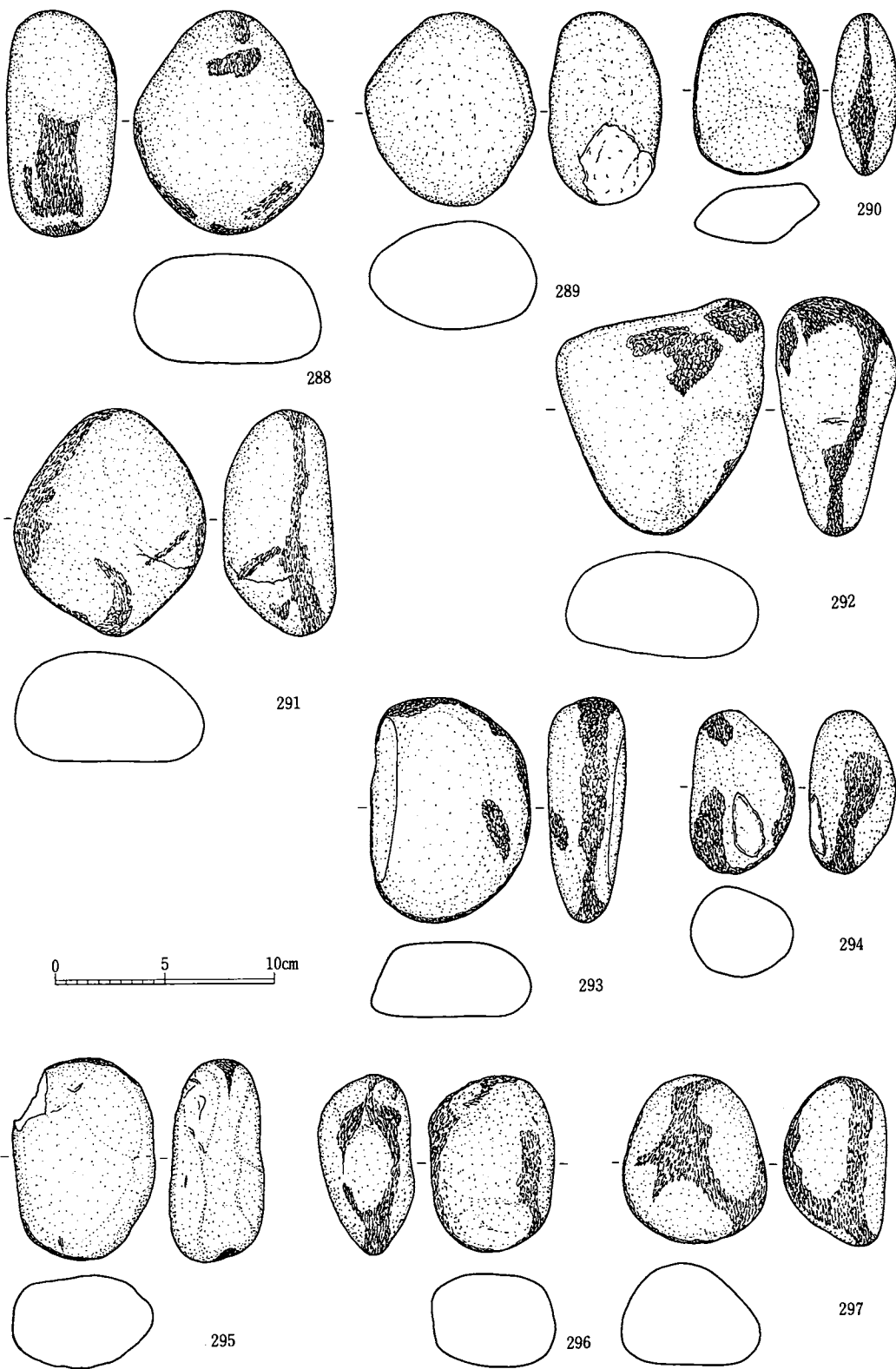
第176図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



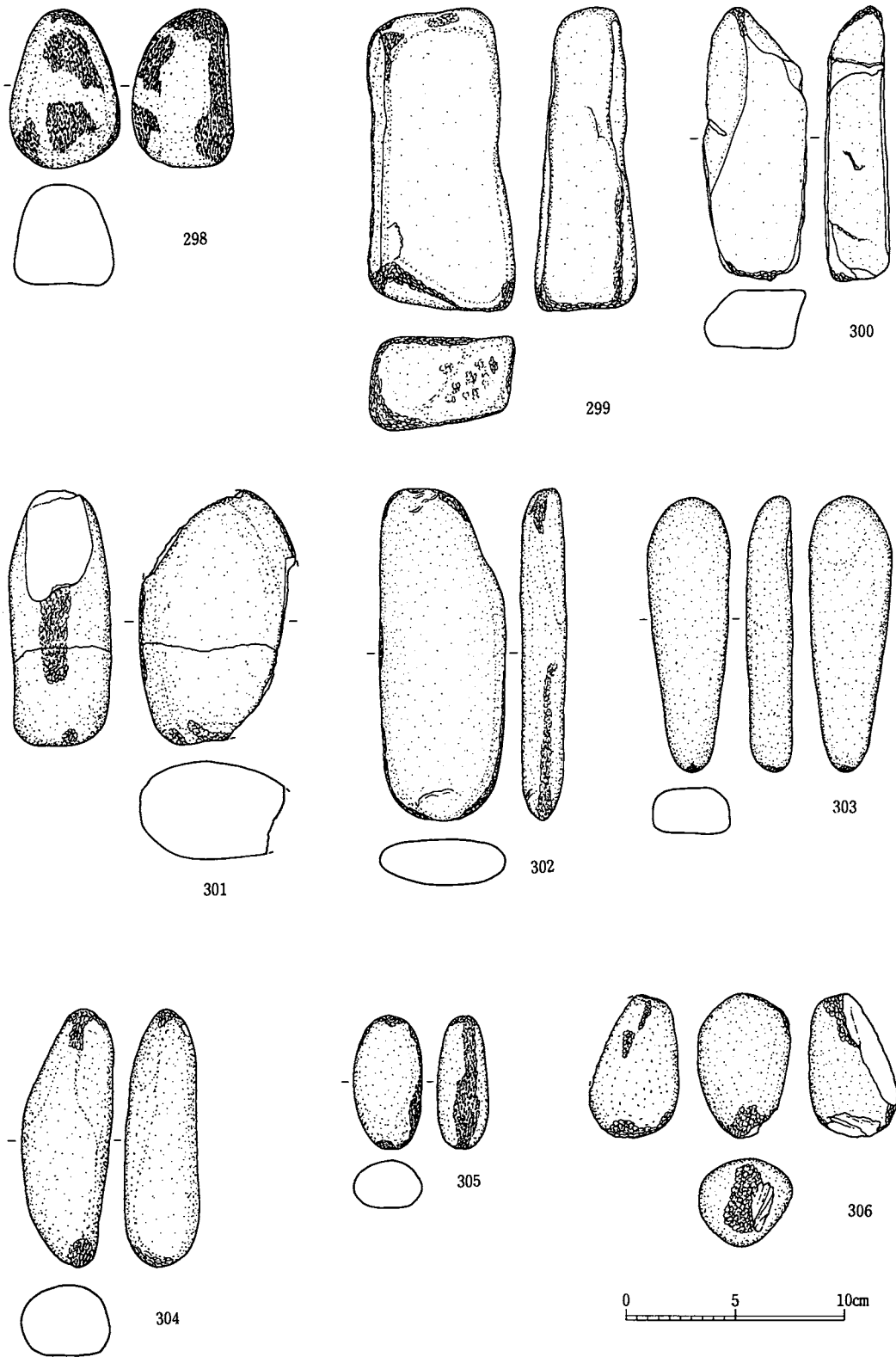
第177図 石器実測図

第三章 調査の成果



第178図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第179図 石器実測図

第三章 調査の成果

第29表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
223	磨石・敲石	砂岩	16.9	8.68	5.67	1080	IVD JL 1783
224	〃	砂岩	10.41	6.5	4.46	440	VIII JL 108
225	〃	砂岩	13.6	9.9	6.53	1230	IVD JL 773
226	〃	砂岩	13	10.3	6.73	1200	IXD JL 27
227	〃	砂岩	10.1	7.25	4.47	430	VIC JL 25
228	〃	砂岩	9.17	5.37	3.2	240	IVD JL 1328
229	〃	砂岩	9.8	7.58	3.88	400	IVD-4 一括
230	〃	砂岩	12.75	7.81	5.18	710	VD JL 145
231	〃	砂岩	9.2	6.96	4.43	390	IVD JL 216
232	〃	砂岩	9.24	7.19	4.76	420	VIII-1 1号集石
233	〃	砂岩	8.73	5.65	3.74	260	IVD JL 2117
234	〃	砂岩	7.3	5.11	3.93	200	VIII-4 一括
235	〃	砂岩	5.3	3.91	3.0	85	VIC JL 69
236	〃	砂岩	6.29	4.52	3.5	130	III JL 271
237	〃	砂岩	9.8	6.05	2.88	220	VIB JL 155
238	〃	砂岩	5.4	3.66	2.36	60	VIC JL 172
239	〃	砂岩	(8.43)	0.93	4.08	(320)	IVD JL 949
240	〃	砂岩	8.87	7.4	4.51	420	IVD JL 25
241	〃	砂岩	(10.19)	7.97	4.47	(510)	IVD JL 2066
242	〃	砂岩	7.2	5.39	2.53	140	IVD JL 458
243	〃	砂岩	9.8	(6.09)	4.82	(400)	VIII-1 1号集石
244	〃	砂岩	9.4	7.92	(2.56)	(250)	IVD JL 2051
245	〃	砂岩	11.87	8.65	5.2	(630)	VIII-1 1号集石
246	〃	砂岩	7.23	5.48	4.71	250	IVD JL 259
247	〃	砂岩	(14.39)	9.52	(5.39)	(920)	VC JL 268
248	〃	砂岩	10.16	7.86	7	(685)	VIII JL 111
249	〃	砂岩	(10.9)	9.0	4.31	(565)	VIB JL 153
250	〃	砂岩	8.2	6.78	3.43	245	VIB JL 198
251	〃	砂岩	(10.41)	(8.23)	5.22	(520)	VC JL 294
252	〃	砂岩	(8.59)	(5.49)	(4.45)	(160)	VIA JL 146
253	〃	砂岩	12.65	(7.63)	5.33	(690)	VIII JL 26
254	〃	砂岩	(9.16)	(8.53)	4.85	(340)	VIC JL 70 VIC JL 71
255	〃	砂岩	(7.61)	8.6	5.11	(490)	VIB JL 118
256	〃	砂岩	(4.29)	(7.2)	(5.3)	(120)	VIA JL 143
257	〃	砂岩	(5.9)	(4.8)	3.27	(120)	VIII JL 20
258	〃	砂岩	(10.18)	8.93	5.54	(640)	IXD JL 51
259	〃	砂岩	(9.72)	8.53	7.05	(870)	VIC JL 100
260	〃	砂岩	(7.0)	8.2	3.07	(220)	III JL 65
261	〃	砂岩	(5.9)	(6.38)	(4.33)	(175)	IVD JL 373
262	〃	砂岩	(9.15)	(8.1)	(5)	(565)	IVD JL 576
263	〃	砂岩	10.9	10.0	6.68	980	VIII JL 278
264	〃	砂岩	(7.2)	(8.62)	(5.18)	(410)	IVC JL 95
265	〃	砂岩	7.83	6.84	3.75	290	VIC JL 63

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
266	磨石・敲石	砂岩	8.5	7.53	4.83	420	VIB JL 54
267	〃	砂岩	6.95	7.64	4.8	340	IIID JL 118
268	〃	砂岩	7.78	8.06	5.18	440	IVD JL 145
269	〃	砂岩	6.57	6.19	4.68	250	VIC JL 26
270	〃	砂岩	9.05	8.0	6.19	590	VIC JL 30
271	〃	砂岩	6.86	6.0	3.06	200	IIID JL 23
272	〃	砂岩	4.83	4.34	3.03	90	VIC JL 41
273	〃	砂岩	6.3	5.23	3.07	170	VIC JL 81
274	〃	砂岩	6.42	5.7	3.25	160	VIC JL 94
275	〃	砂岩	6.59	6.29	4	210	IVD JL 96
276	〃	砂岩	5.9	4.8	3.2	120	VIIID JL 32
277	〃	砂岩	5.75	5.58	4.2	190	VIIID JL 33 VIIID JL 30
278	〃	砂岩	4.84	4.0	3.15	80	IVD JL 160
279	〃	砂岩	5.9	5.53	2.9	130	IVD JL 1979
280	〃	砂岩	4.78	4.1	2.32	60	IVD JL 1240
281	〃	砂岩	4.68	4.13	3	80	IIID JL 292
282	〃	砂岩	4.07	3.96	2.51	45	IIID JL 287
283	〃	砂岩	7.25	6.22	4.9	295	VIC JL 148
284	〃	砂岩	5.22	(4.19)	2.63	(70)	IVD-4一括
285	〃	砂岩	10.7	9.43	5.25	610	IVD JL 1123
286	〃	砂岩	9.6	6.45	4.2	380	VIIID JL 88
287	〃	砂岩	10.76	6.82	6.21	520	VD JL 110
288	〃	砂岩	10.17	8.6	5.04	640	VIB JL 154
289	〃	砂岩	8.74	7.88	5.16	(390)	VIB JL 113
290	〃	砂岩	7.29	5.69	2.98	130	IVD JL 1631
291	〃	砂岩	10.36	8.72	5.2	590	VIC JL 28
292	〃	砂岩	10.73	9.49	5.48	680	VIIID-1一括
293	〃	砂岩	10.19	7.43	3.54	420	VIB JL 163
294	〃	砂岩	7.4	4.75	3.9	170	VIIID-1 1号集石
295	〃	砂岩	9.29	6.51	4.3	(350)	IVD JL 213
296	〃	砂岩	8.05	5.85	4.46	280	IVD JL 1332
297	〃	砂岩	7.7	6.54	4.7	310	VIIID JL 5
298	〃	砂岩	7.26	5.06	4.69	215	VD JL 43
299	〃	砂岩	13.86	6.85	4.71	660	VIC JL 209
300	〃	砂岩	12.54	4.76	2.98	250	VIC JL 64
301	〃	砂岩	(11.65)	(7.14)	4.74	(510)	IVD JL 1640 IVD JL 1636
302	〃	砂岩	15.17	5.89	2.16	300	VIIID JL 130
303	〃	砂岩	12.85	3.79	2.12	136.85	VIC JL 34
304	〃	砂岩	11.96	4.25	3.46	250	VIB JL 187
305	〃	砂岩	6.04	3.2	2.36	60	IVD JL 123
306	〃	砂岩	6.55	(4.25)	4.04	(130)	VIC JL 43

第4類 (299～306)

4類の磨石・敲石は、その形状が棒状(303～305)、直方体(299～306)を呈するものを一括している。この類に属する資料は、敲打痕の部位によって、両端にみられるもの(299・300・304・306)、一端にみられるもの(303)、側縁(面)でも観察されるもの(301・305)の三つに分けられる。

最後に、磨石・敲石の欠損の状況について示しておく。欠損の状況による内訳は、完形品とそれに近いもの70点、欠損率が50%までのもの30点、60%までのもの42点、それ以上のもの61点であった。

石皿・台石 (第181図307～第182図314)

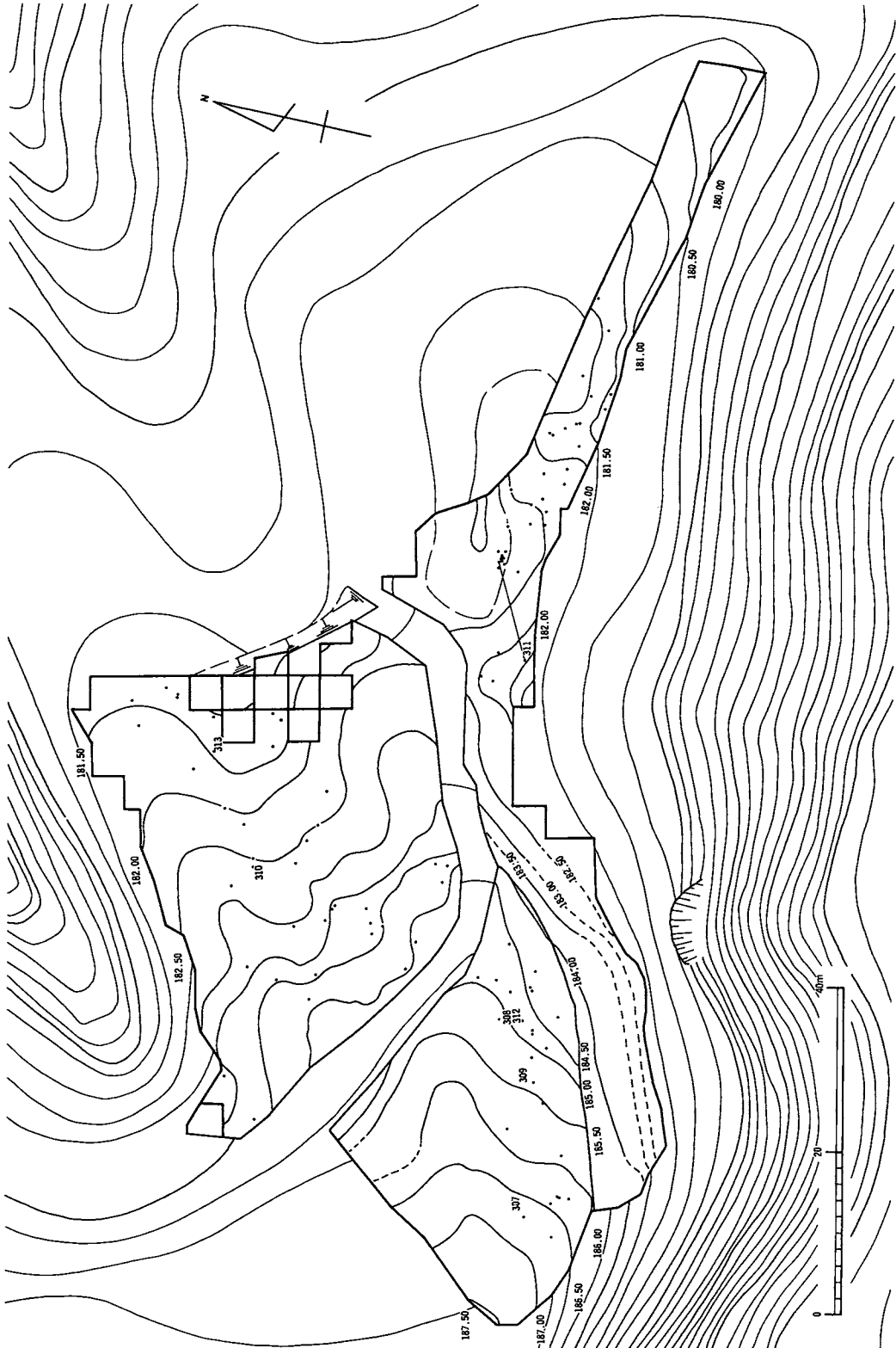
石皿・台石は、95点(接合例が1例あり、資料実数94点)が出土した。その石器組成に占める割合は、15%である。また、石材は、ほとんどが安山岩である(第23表)。なお、石皿・台石と磨石・敲石との数量関係をみてみると、1:3.2の割合にあり、単純には磨石・敲石が3個に対して、石皿・台石1個という関係が割出せる。

石器の分布は、それぞれの石器があまり近接せず、点在した状況をとっているが、その偏在の傾向が三つの谷部を中心にみられる。すなわち、東側丘陵の谷部、西側丘陵の浅い谷部、そして、丘陵中央部の北側谷部の三つである(第180図)。こうした分布の偏在傾向は、磨石・敲石の分布によく類似している。

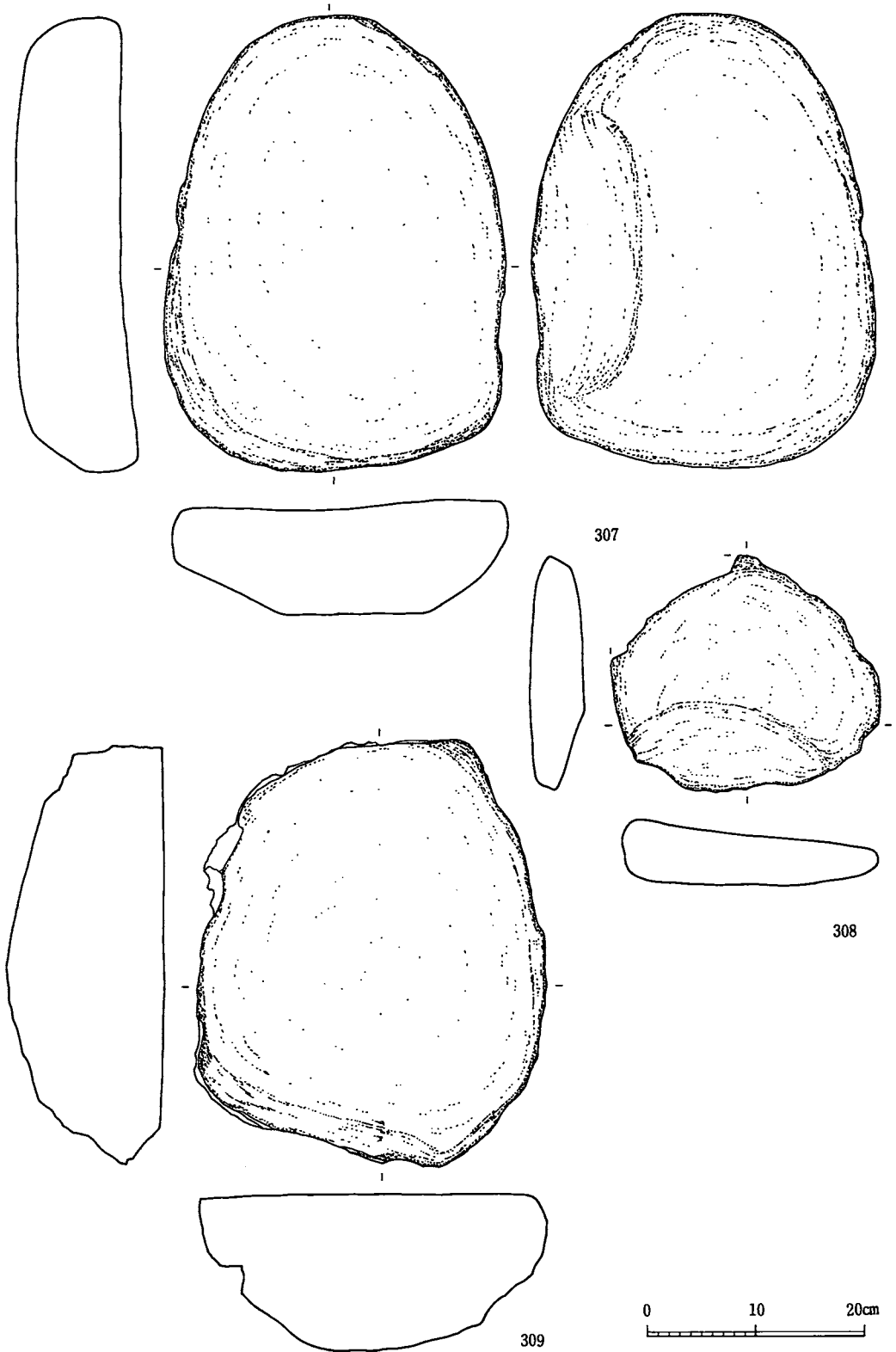
以下、石器ごとにみていくことにしたい。

307は、大型の安山岩製石皿で、1号配石土坑から出土したものである。重量は、19kg強である。作業面は、1面のみで、やや浅い窪みを持っている。308は、小型の石皿で、その重量は、3.11kg。出土遺構は、4号配石土坑である。石器の作業面は、1面で、縁辺部にあり、浅い窪みがみられる。使用されている石材は、安山岩である。309は、大型の石皿で、22kgを計る。出土遺構は、2号配石土坑である。石器の作業面は、1面で、ほとんど窪みを持っていない。安山岩製である。310は、丘陵中央の北側谷部で検出された石皿である。重量は、7.1kgを計る。作業面は、表裏両面に設定され、その状態は、比較的深い窪みを呈している。石材は、安山岩である。311は、石皿で、丘陵中央の南側谷部周辺で検出された2点の接合例である。石器の作業面は1面で、浅い窪みを持っている。石材は、安山岩である。312は、大型の石皿で、その重量は、13.91kgを計る。出土遺構は、4号配石土坑である。石器の作業面は、1面のみにみられ、その窪みは浅い。安山岩製である。313は、砂岩製の台石で、重量6.79kgを計る。作業面は、浅く窪み、そのほぼ中央部に敲打痕が観察される。出土位置は、丘陵中央の北側谷部にある。314は、西側丘陵で出土した、13.11kgの大型の石皿である。出土位置は、西側丘陵にある。作業面は1面で、浅く窪んでいる。石質は、安山岩である。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

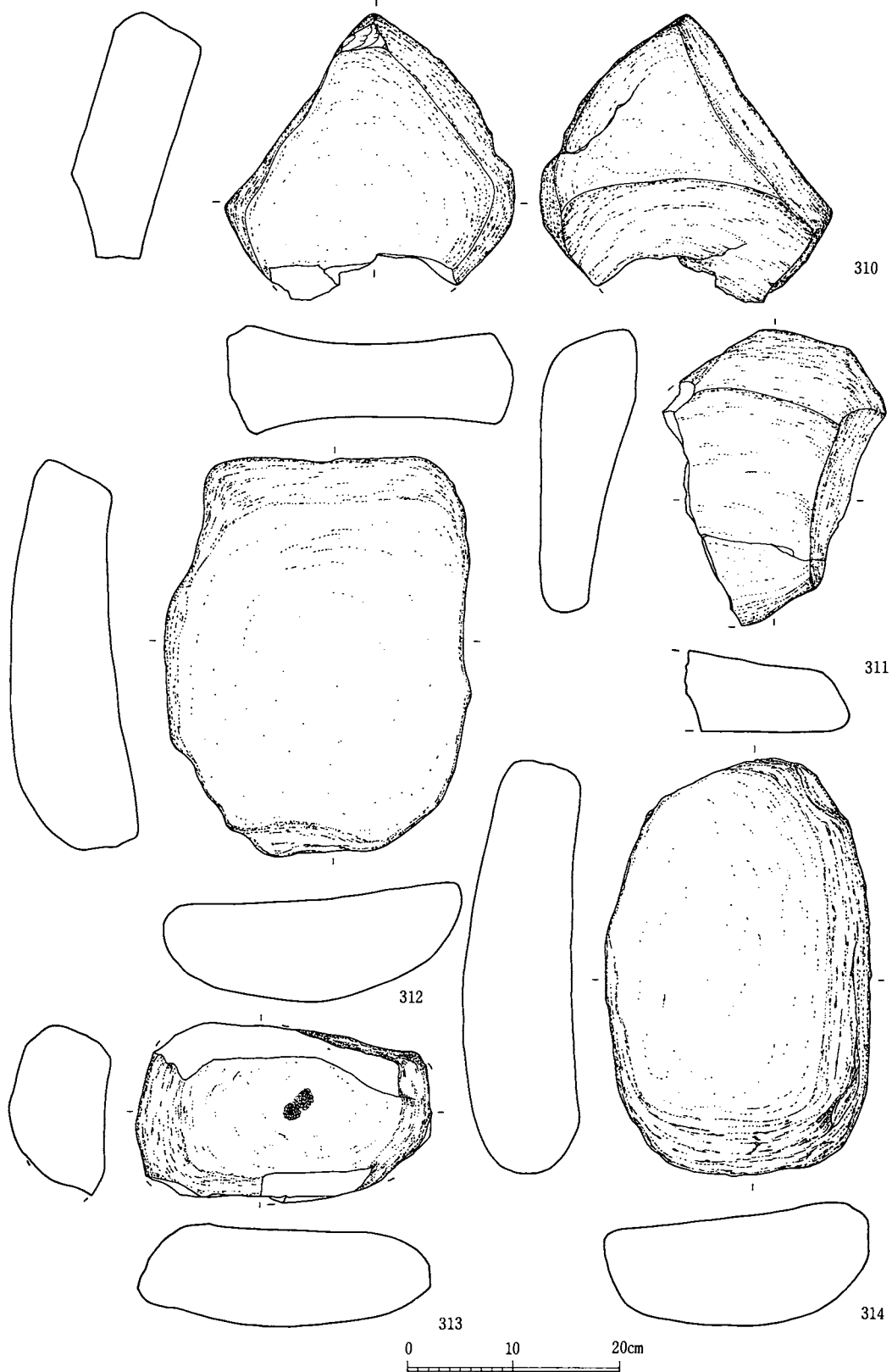


第180図 遺物分布図(石皿・台石)



第181図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第182図 石器実測図

第30表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
307	石皿・台石	安山岩	41.5	31.8	10.4	19690	9号土坑
308	〃	安山岩	(21.6)	24.7	5.5	(3110)	16号土坑
309	〃	安山岩	39	32.5	14.5	22000	6号土坑
310	〃	安山岩	(26.7)	27.2	12	(7100)	VII B JL 156
311	〃	安山岩	27.5	(20.8)	9	(4790)	VD JL 9 VC JL 175
312	〃	安山岩	37	28	12	13910	16号土坑
313	〃	砂岩	(17)	(25.6)	9.6	(6790)	VII B JL 209
314	〃	安山岩	39	22.5	11.6	13110	

使用痕ある剥片（第184図315～第188図368）

使用痕ある剥片は、128点が出土した。その石器組成に占める割合は、20%である。また、石材別の内訳は、珪岩104点、黒曜石20点、安山岩4点であった（第23表）。

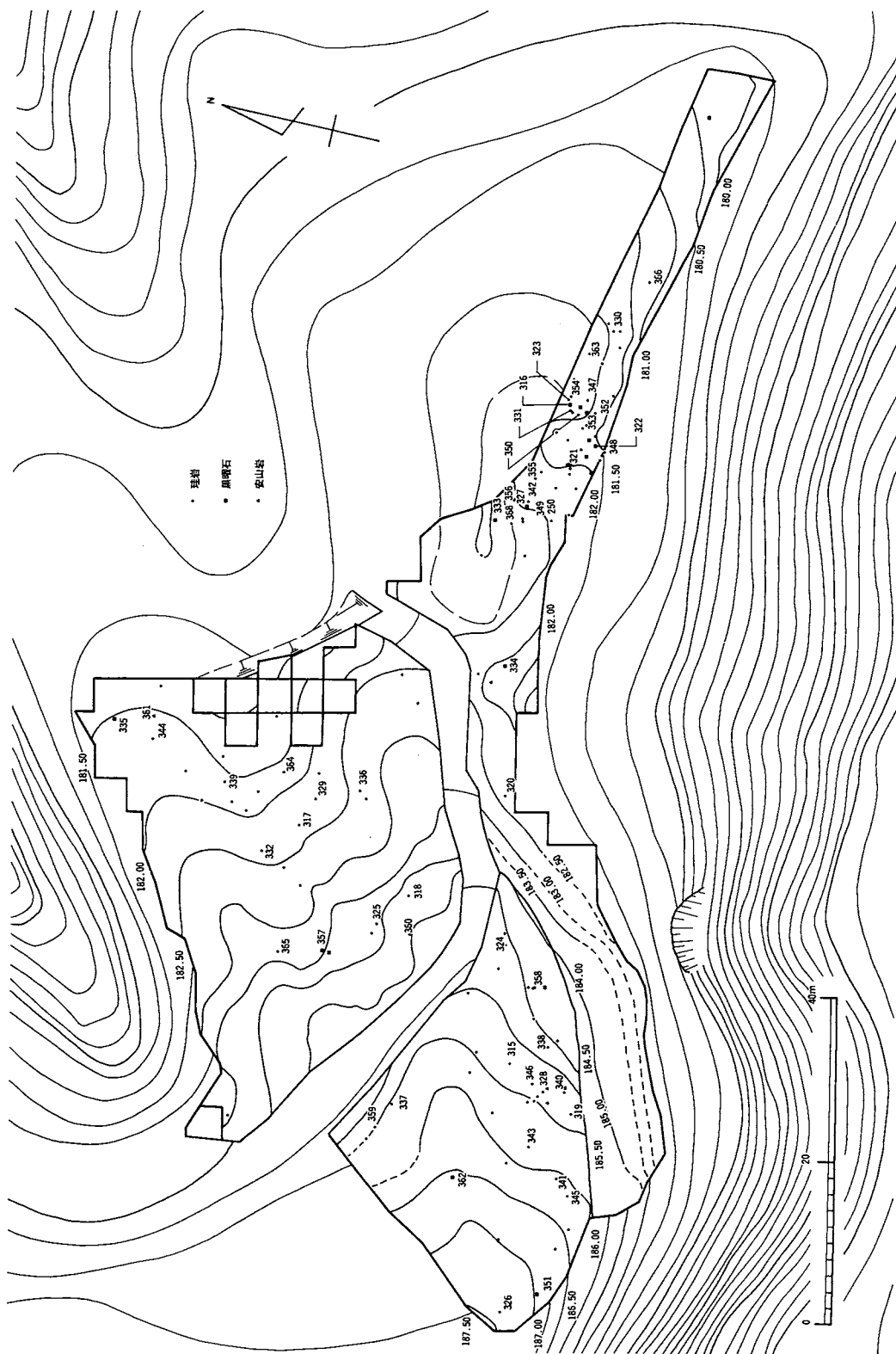
石器の分布は、丘陵内で、比較的散在した状況を呈しているが、その傾向をみれば、三つの谷部を中心に広がっている。その三つの谷部とは、すでに示しているように、西側丘陵の浅い谷部、丘陵中央の北側谷部、東側丘陵の谷部である（第183図）。

以下、資料を中心としてみていきたい。

315～335は、縦長剥片を使用した石器である。石材は、321、322、327、334、335が黒曜石で、他は珪岩である。

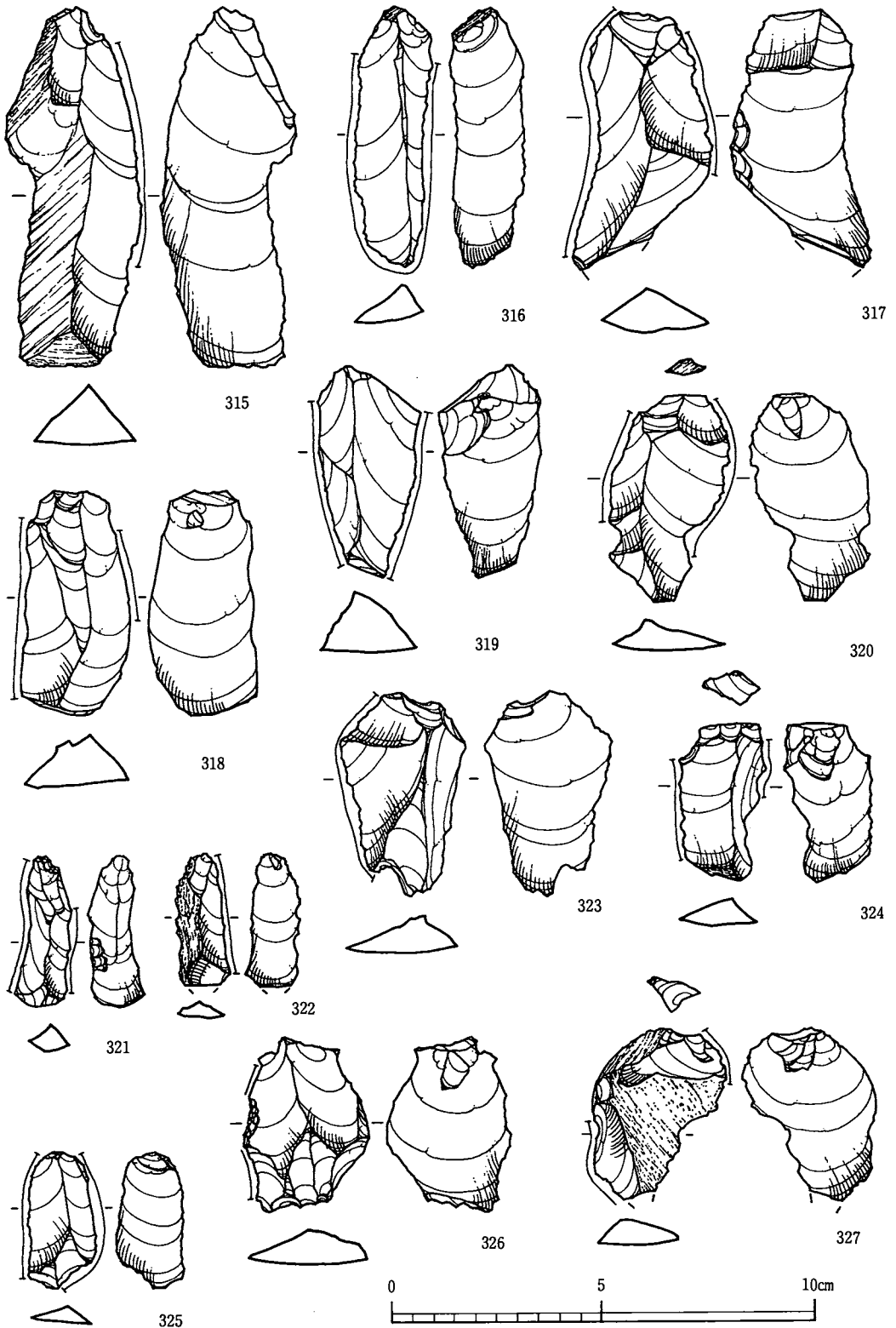
315は、刃器状剥片である。右側縁に刃こぼれ状の微細な剥離が観察される。表面には、掇理面が残る。316も、刃器状剥片である。微細な剥離は、側縁のほぼ全縁辺にわたってみられる。打面は、掇理面である。317は、先端部が左へ偏った縦長剥片が使用されている。微細な剥離は、両側縁にみられ、また、右側縁の裏面には、二次加工も観察される。打面は、点状打面である。318は、端整な形状を示す刃器状剥片で、その両側縁に微細な剥離が観察される。打面は、単剥離面である。319は、先端部が細くなったもので、両側縁に微細な剥離がみられる。打面は、単剥離面である。320は、両側縁に刃こぼれがみられる。打面は、掇理面である。321と322は、小型の縦長剥片で、その両側ないし右側縁に剥離がみられる。打面は、点状打面である。323は、その左側縁に剥離痕がみられ、点状打面である。324と325は、小型の剥片で、その両側縁に剥離痕がみられる。324は、単剥離打面である。326は、単剥離面を打面とした剥片で、その左側縁に小剥離と微細な剥離痕が観察される。327は、先端部が右側に寄った剥片で、その両側縁に微細な剥離痕がみられる。328は、点状打面の剥片で、その全縁辺にわたって、剥離痕が観察される。330は、単剥離面を打面とした剥片で、その両側縁に微細な剥離が観察される。また、右側縁には小剥離もみられる。329と331は、先端部を欠損した資料である。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



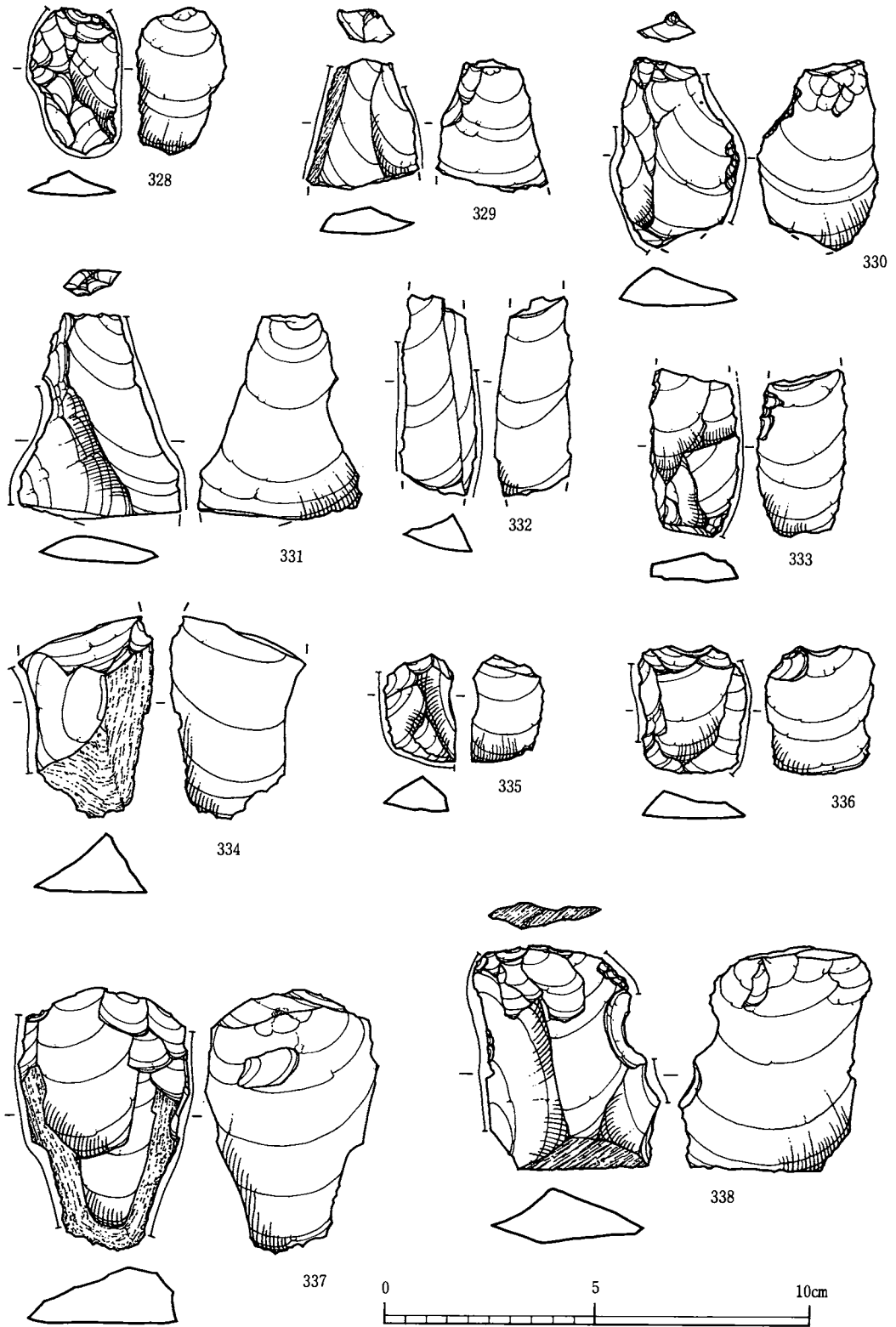
第183図 遺物分布図（使用痕ある剣片）

第三章 調査の成果



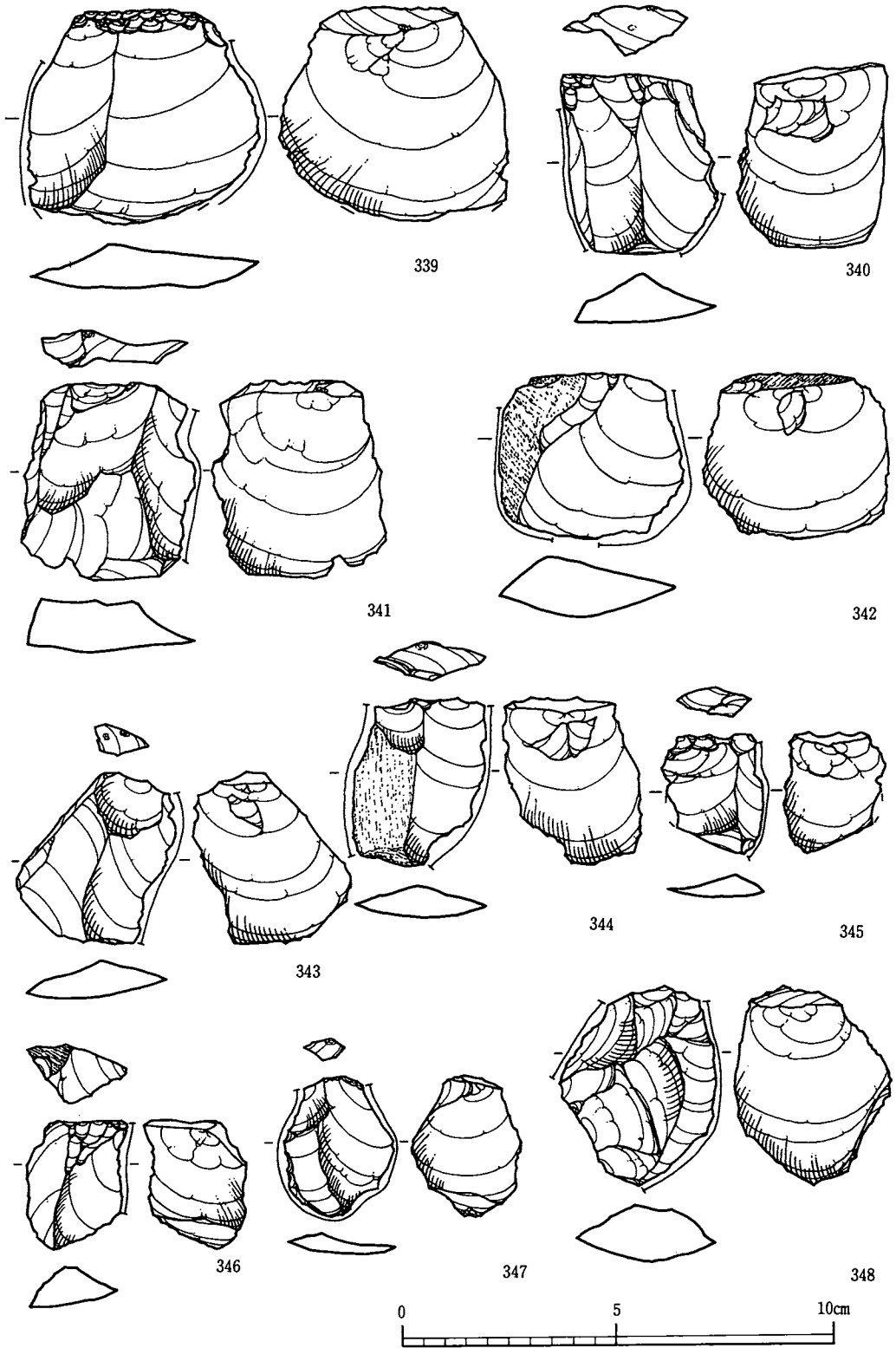
第184図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



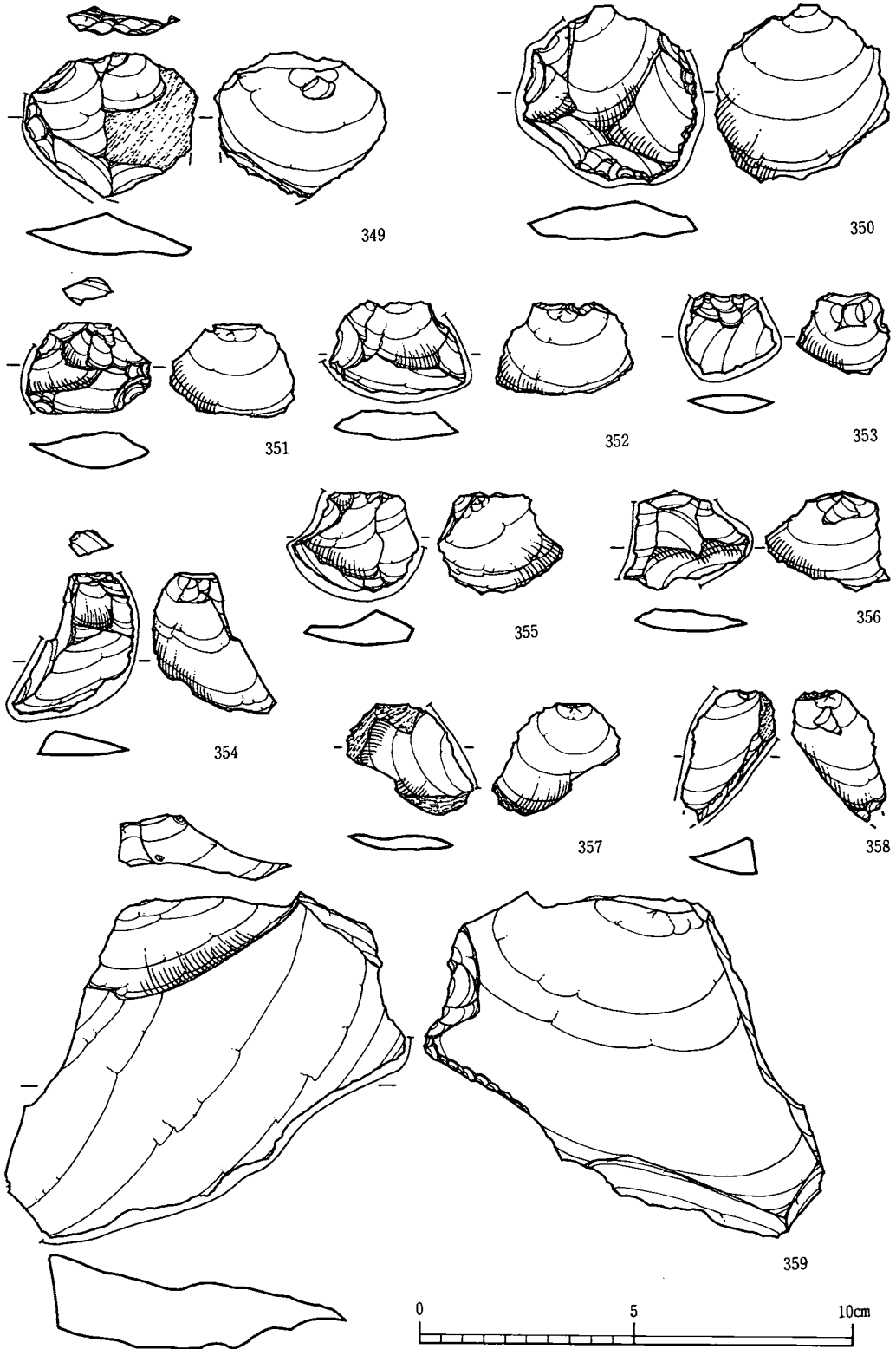
第185図 石器実測図

第三章 調査の成果



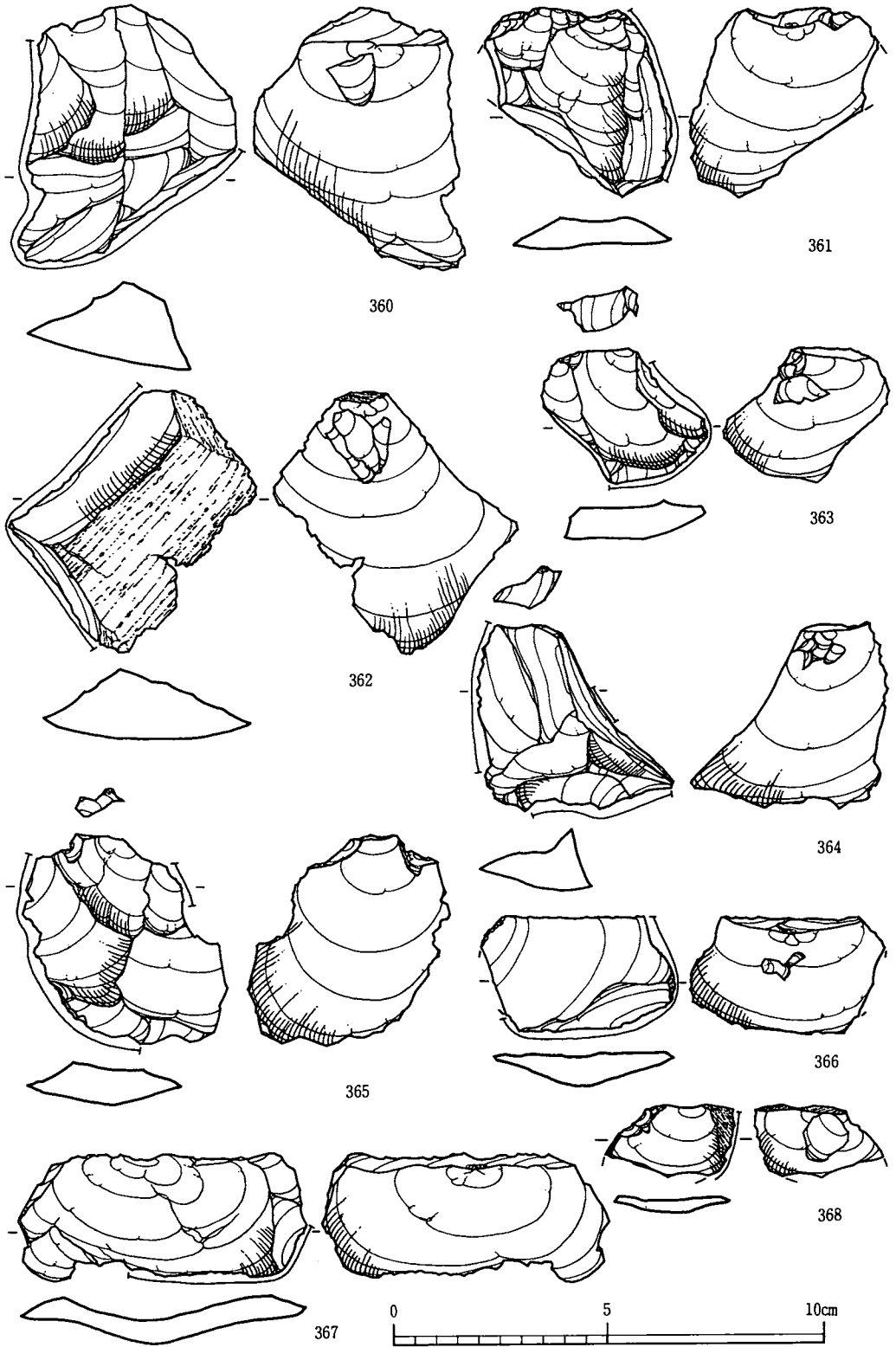
第186図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第187図 石器実測図

第三章 調査の成果



第188図 石器実測図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

第31表 石器計測表

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
315	使用痕ある剝片	珪岩	8.4	3.2	1.5	37.0	VIIIc JL 72
316	〃	珪岩	6.08	1.8	1.1	10.0	IVD JL 1738
317	〃	珪岩	(6.08)	3.3	1.2	(18.4)	VIB JL 149
318	〃	珪岩	5.27	2.58	1.4	16.6	VIIc JL 31
319	〃	珪岩	4.95	2.46	1.7	14.9	VIIIc JL 85
320	〃	珪岩	4.9	2.84	0.8	8.7	VIC JL 78
321	〃	黒曜石	3.5	1.3	0.8	2.4	IVD JL 549
322	〃	黒曜石	(3.1)	1.28	0.5	(1.5)	IVD JL 1642
323	〃	珪岩	4.7	3.0	1.0	9.2	IVD JL 995
324	〃	珪岩	3.7	2.1	0.9	4.7	VIIc JL 214
325	〃	珪岩	3.23	1.6	0.5	2.2	VIIc JL 12
326	〃	珪岩	4.1	3.0	1.2	10.35	IXc JL 49
327	〃	黒曜石	(4.0)	3.1	1.1	(8.5)	IVD JL 83
328	〃	珪岩	3.4	2.1	0.7	3.55	VIIIc JL 106
329	〃	珪岩	(3.1)	(2.65)	(0.8)	(7.0)	VIB JL 47
330	〃	珪岩	(4.45)	2.8	0.9	(10.5)	IIId JL 36
331	〃	珪岩	(4.8)	3.9	0.8	(10.5)	IVD JL 1732
332	〃	珪岩	(4.67)	1.8	8.7	(6.95)	VIIb JL 135
333	〃	珪岩	(3.9)	2.1	0.9	(7.8)	IVc JL 20
334	〃	黒曜石	(4.7)	(3.2)	1.8	(14.2)	Vc JL 325
335	〃	黒曜石	2.5	1.6	1.0	3.2	VIA JL 130
336	〃	珪岩	3.0	2.55	0.7	5.6	VIC JL 10
337	〃	珪岩	6.23	4.06	1.6	34.6	VIIc JL 130
338	〃	珪岩	5.25	4.48	1.6	31.4	VIIIc JL 239
339	〃	珪岩	(4.95)	5.36	1.3	(31.5)	VIB JL 176
340	〃	安山岩	4.2	3.59	1.5	19.5	VIIIc JL 266
341	〃	珪岩	4.5	4.03	1.2	23.5	IXd JL 43
342	〃	珪岩	3.81	4.3	1.45	20.6	IVD JL 73
343	〃	珪岩	3.9	3.7	1.0	10.9	VIIIc JL 4
344	〃	珪岩	3.87	3.18	0.9	8.75	VIA JL 38
345	〃	珪岩	2.8	2.37	0.75	4.25	IXd JL 125
346	〃	珪岩	3.0	2.35	1.3	3.8	VIIIc JL 122
347	〃	珪岩	3.2	2.55	0.7	3.5	IVD JL 1790
348	〃	珪岩	4.6	3.6	1.3	16.4	IVD JL 1893
349	〃	珪岩	(3.33)	4.0	1.05	(12.5)	IVD JL 118
350	〃	珪岩	4.1	4.0	0.9	13.7	IVD JL 1010
351	〃	黒曜石	2.1	2.85	0.9	3.85	IXd JL 35
352	〃	珪岩	2.15	3.2	0.7	4.5	IVD JL 1808
353	〃	黒曜石	1.9	2.15	0.5	1.75	IVD JL 1030
354	〃	珪岩	3.25	2.84	0.75	4.9	IVD JL 1002
355	〃	珪岩	2.3	2.9	1.05	4.15	IVD JL 315
356	〃	黒曜石	2.3	2.8	0.5	2.55	IVc JL 92
357	〃	黒曜石	2.5	2.95	0.5	1.95	VIIb JL 21
358	〃	珪岩	(3.0)	2.2	0.85	(3.6)	VIIIc JL 9

第III章 調査の成果

No	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
359	使用痕ある剥片	珪岩	7.97	9.25	2.5	120.7	VIII C JL 146
360	〃	珪岩	5.98	4.98	2.2	50.2	VII C JL 35
361	〃	安山岩	4.34	(4.4)	1.0	(15.7)	VIA JL 31
362	〃	黒曜石	6.0	5.75	1.6	31.8	IX C JL 1
363	〃	珪岩	3.1	3.85	1.05	9.35	IV D JL 1227
364	〃	珪岩	4.25	4.57	1.8	19.6	VIB JL 100
365	〃	珪岩	4.82	4.72	1.3	21.3	VII B JL 77
366	〃	珪岩	2.7	4.5	1.0	9.1	III D JL 257
367	〃	珪岩	3.0	6.7	1.3	16.6	IV D JL 142
368	〃	黒曜石	(1.7)	(3.0)	0.6	(1.8)	IV C JL 35

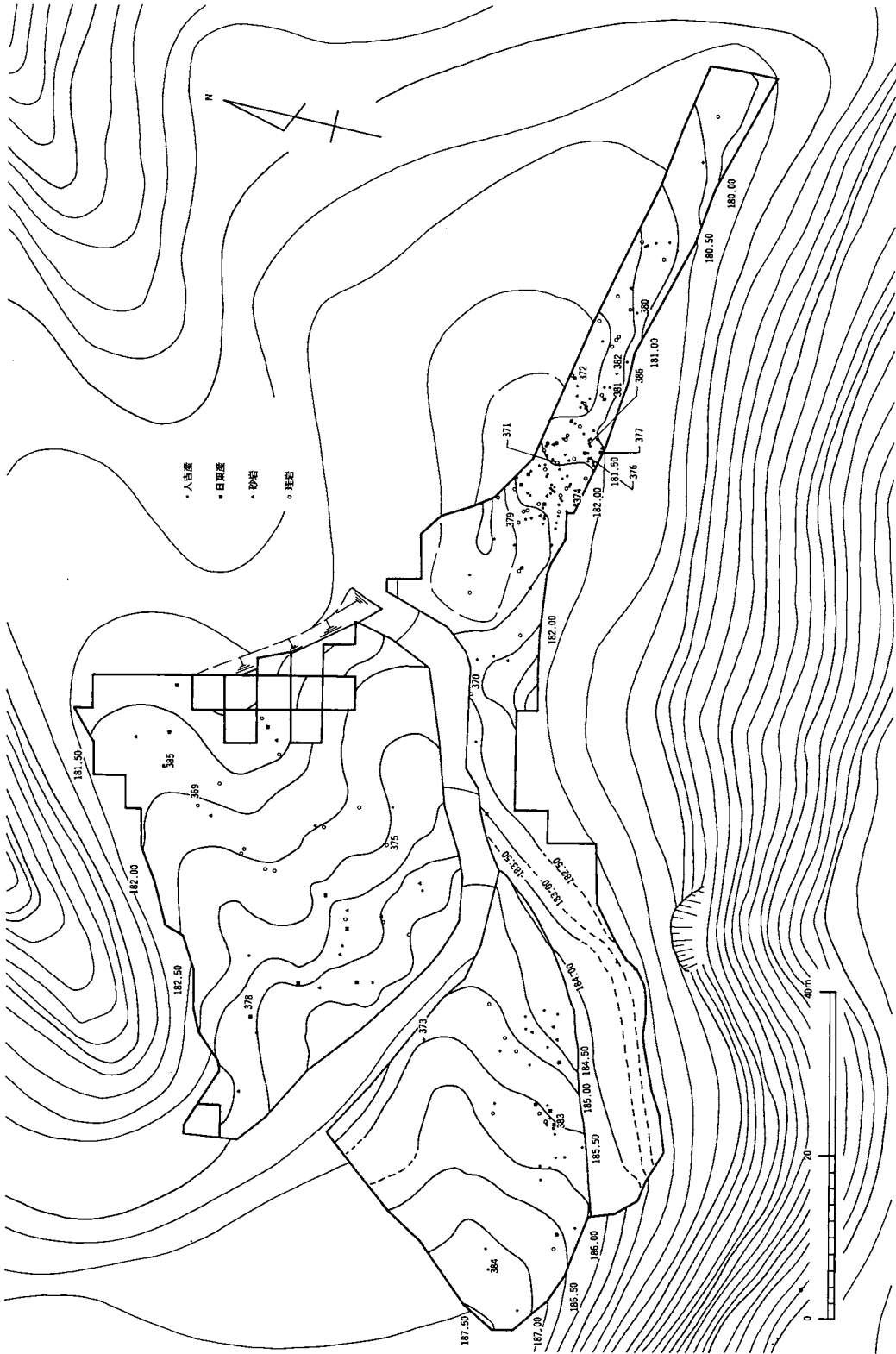
両側縁に微細な剝離痕がみられる。333～335は、打面部が欠損した資料である。333は、右側縁に、334と335は、左側縁に微細な剝離痕がある。332は、打面部と先端部が欠損した資料で、両側縁に剝離痕が観察される。

336～353、355、356は、幅広の剥片である。石質は、ほとんどが珪岩で、その他に、黒曜石(351・353・356)と安山岩(340)がある。

336は、単剝離面を打面とした剥片で、その両側縁に微細な剝離痕がみられる。337は、幅広の縦長剥片で、その両側縁に剝離痕が観察される。複剝離打面である。338も、同様の剥片で、両側縁に微細な剝離痕と小剝離がある。摂理打面である。339は、単剝離面を打面としたもので、その両側縁に微細な剝離がある。340は、幅広の縦長剥片で、打面は、単剝離面をなす。両側縁に剝離痕がある。341も、同様の剥片で、その右側縁に剝離痕がある。複剝離打面である。342は、摂理打面で、その縁辺のほとんどが使用されている。343は、先端部がやや開きぎみの剥片で、その右側縁に剝離痕がある。打面は、単剝離面である。344は、幅広の縦長剥片で、その両側縁に剝離痕がある。打面は、複剝離面である。345は、複剝離打面の小型の剥片で、その右側縁が使用されている。346は、複剝離打面で、その右側縁が使われている。347は、楕円形を呈する剥片で、そのほとんどの側縁に剝離痕が観察される。単剝離打面である。348は、単剝離打面の剥片で、その両側縁に微細な剝離がある。349は、楕円形を呈する剥片で、その左側縁に剝離痕がある。複剝離打面である。350は、円形を呈する点状打面の剥片で、そのほとんどの側縁が使用されている。351は、小型の剥片で、その左側縁に剝離痕がある。単剝離打面である。352も、同様の剥片で、その右側縁から下縁に剝離痕がある。複剝離打面である。353は、小型の剥片で、その全縁辺が使用されている。単剝離打面である。355と356も、小型の剥片で、そのほとんどの側縁が使用されている。

354と357～365は、先端部が大きく外へ流れた剥片で、石質は、珪岩と黒曜石(356・357・362)、安山岩(361)がある。

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第189図 遺物分布図（石核）

354、357、358は、小型の剥片である。微細な剥離痕は、357が右側縁に、354と358が側縁のほぼ全域にみられる。打面は、単剥離面（354）と自然面（357・358）である。359は、大型の剥片で、その下縁に剥離痕と小剥離がある。複剥離打面である。360は、単剥離打面で、その左側縁から下縁に微細な剥離がある。361は、複剥離打面の剥片で、その右側縁に剥離痕が観察される。362は、自然面を打面とした、菱形を呈する剥片で、その左側縁が使用されている。363は、複剥離打面で、その右側縁と下縁に剥離痕がある。364は、先端部が大きく開いた剥片で、その縁辺ごとに剥離痕がある。単剥離打面である。365は、単剥離打面の剥片で、その両側縁に剥離痕がある。

366～368は、横長剥片である。打面は、複剥離面（366）、単剥離面（367）、自然面（368）である。剥離痕は、下縁を中心にみられるもの（366・367）と右側縁のもの（368）がある。368は、黒曜石である。

石核（第190図369～第191図386）

石核・原石は、280点（内、石核は213点）が出土した。全出土資料に占める割合は、6%（4%）である。石材は、黒曜石200点（138点）、珪岩60点（55点）、砂岩20点という内訳であった（第23表）。また、これらの石器の分布は、丘陵内にある三つの谷周辺にある（第189図）。その谷部とは、先にも示しているように、西側丘陵の浅い谷部、中央北側の谷部、東側丘陵の谷部である。

出土した石核は、その剥片剥離の状態によって、第1類～第4類に細分される。以下、それぞれの類ごとに説明を加えていきたい。

第1類（369～371）

1類は、剥片や分割礫素材の偏平な石核である。その剥片剥離は、打面を石核の縁辺に沿って、頻りに転移させるという特徴があり、その結果、剥片剥離面には、求心的な剥離痕がみられる。仮称されている、柏原型石核に類似するものであろうか。珪岩である。

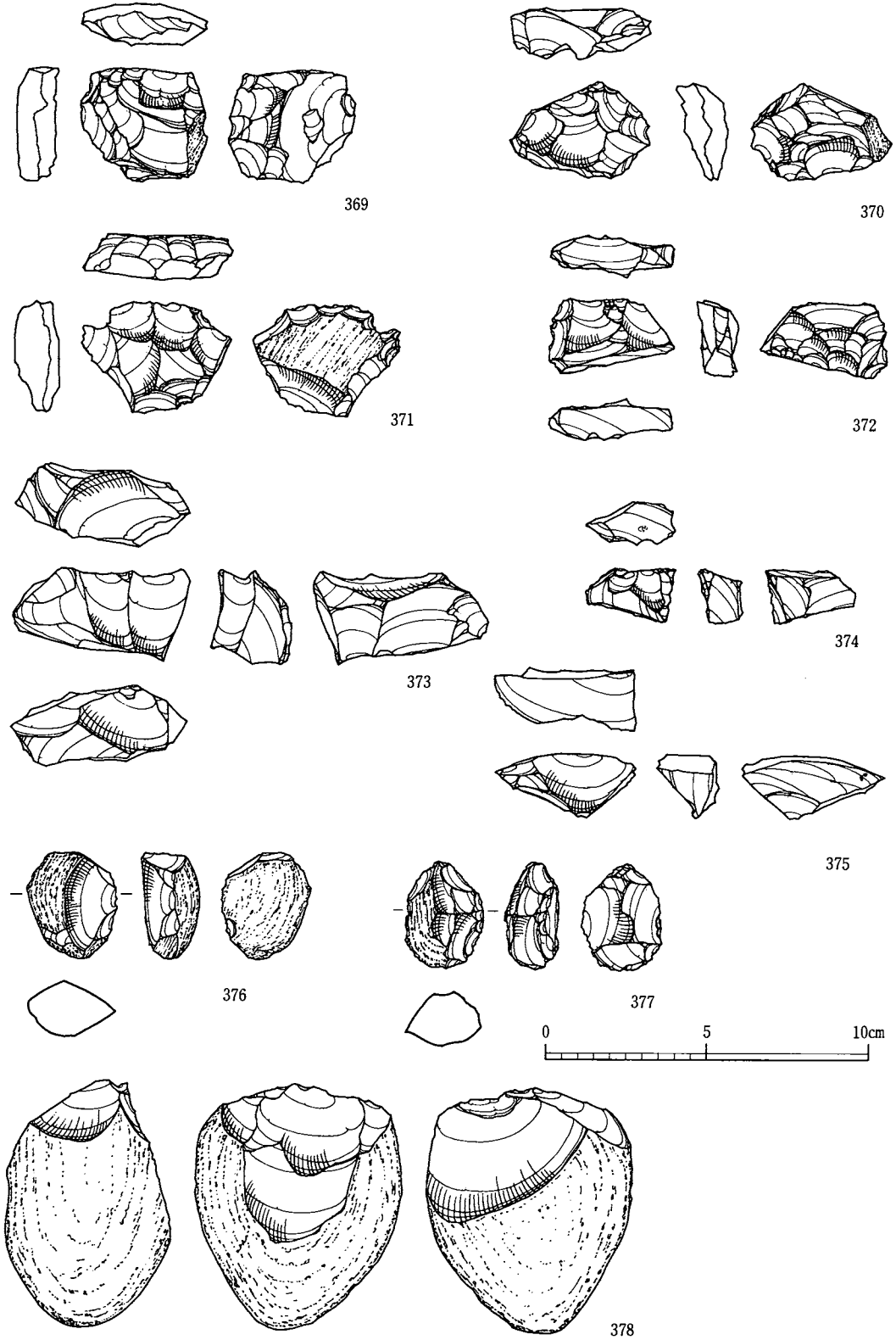
第2類（372～375・381～384・386）

2類は、偏平な石核である。その剥片剥離は、打面の転移をそれほど頻りに転移しないという特徴がある。したがって、石核原形の形状は、比較的良く保持される。石核の素材は、原石（381～384・386）や分割礫（372～375）があり、打面は、ほとんどが自然面や分割面である。打面転移は、対向しない180°のもの（372・383）、対向する180°のもの（384）、90°のもの（381・382・386）がある。遺跡の中で、もっとも一般的な石核である。石質は、珪岩（372～375）と黒曜石（381～384・386）である。

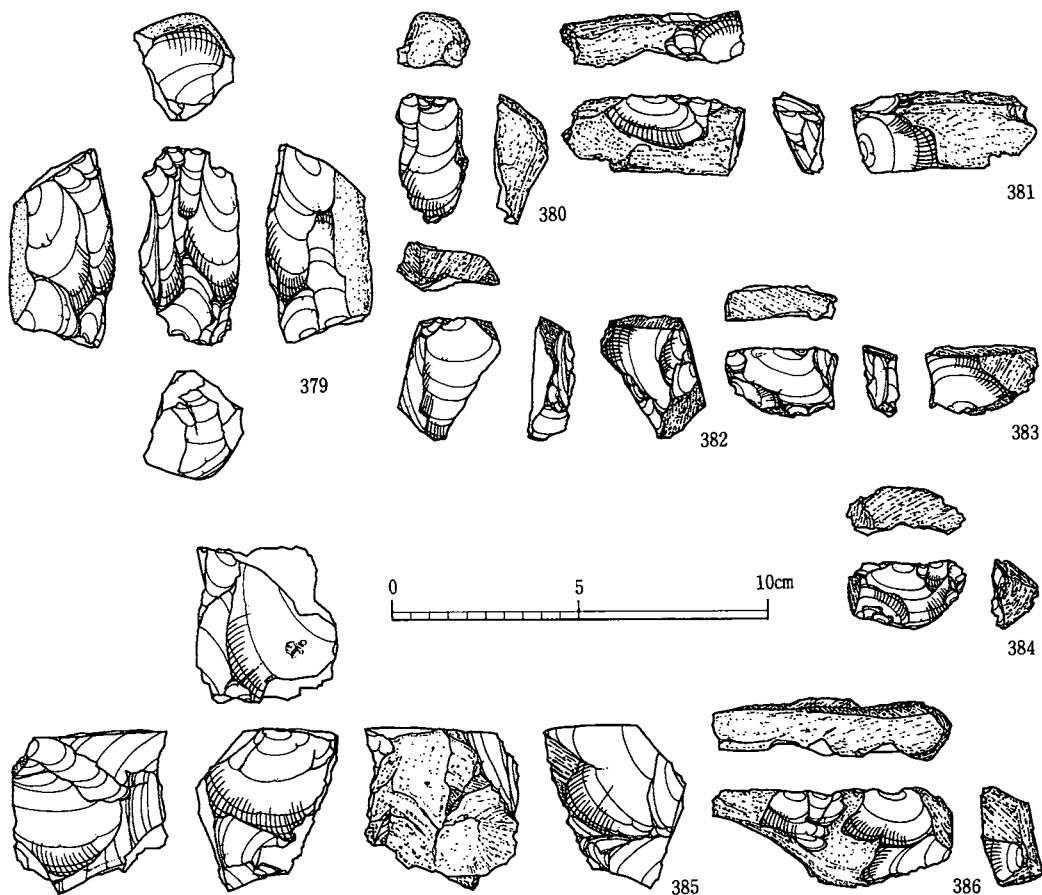
第3類（376～378）

3類の石核は、円礫が素材となるものである。打面は、基本的には石核の一端にある。そして、その剥片剥離は、両刃礫器の刃部作出剥離に似た状況を呈している。379は、大型のもの

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第190図 石器実測図



第191図 石器実測図

である。図示しているものは、すべて黒曜石であるが、砂岩製の石核も、この第3類に属している。

第4類 (379・380・385)

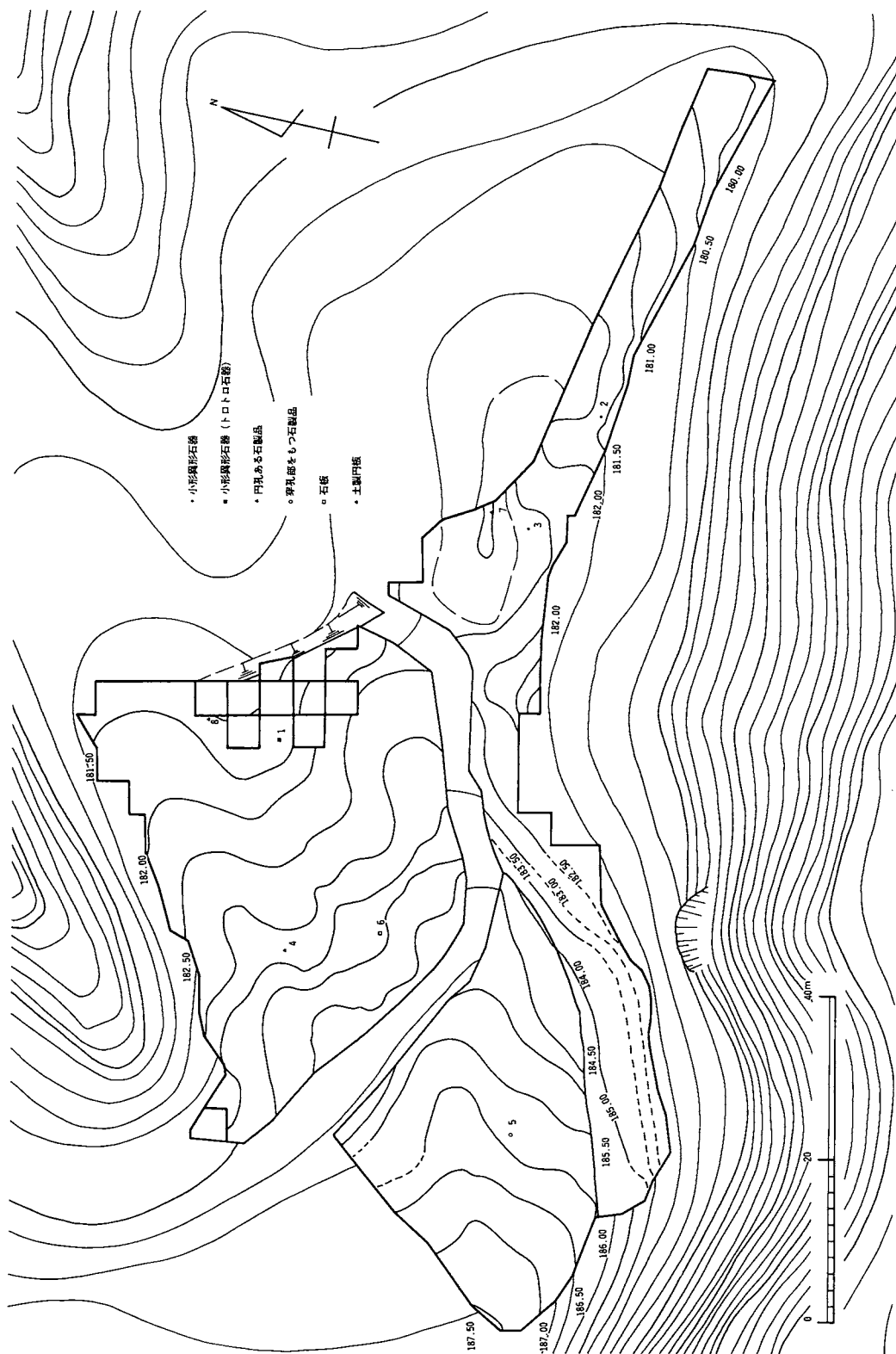
上記した石核以外のものを一括している。379は、珪岩製の円筒形を呈する石核である。打面は、上下にあり、単剝離面である。380は、黒曜石である。打面は、単設で自然面である。385は、珪岩製の立方体を呈する石核である。打面は、90°の転移があり、剝離面である。379と385については、先土器時代に属する可能性が高いが、出土層位は第IV層である。

(3) 石製品・土製品 (第193図1～8)

上記してきた土器・石器の他に、特殊な遺物として、石製品6点と土製品2点が出土した。以下、遺物ごとに説明を加えていきたい(第192図)。

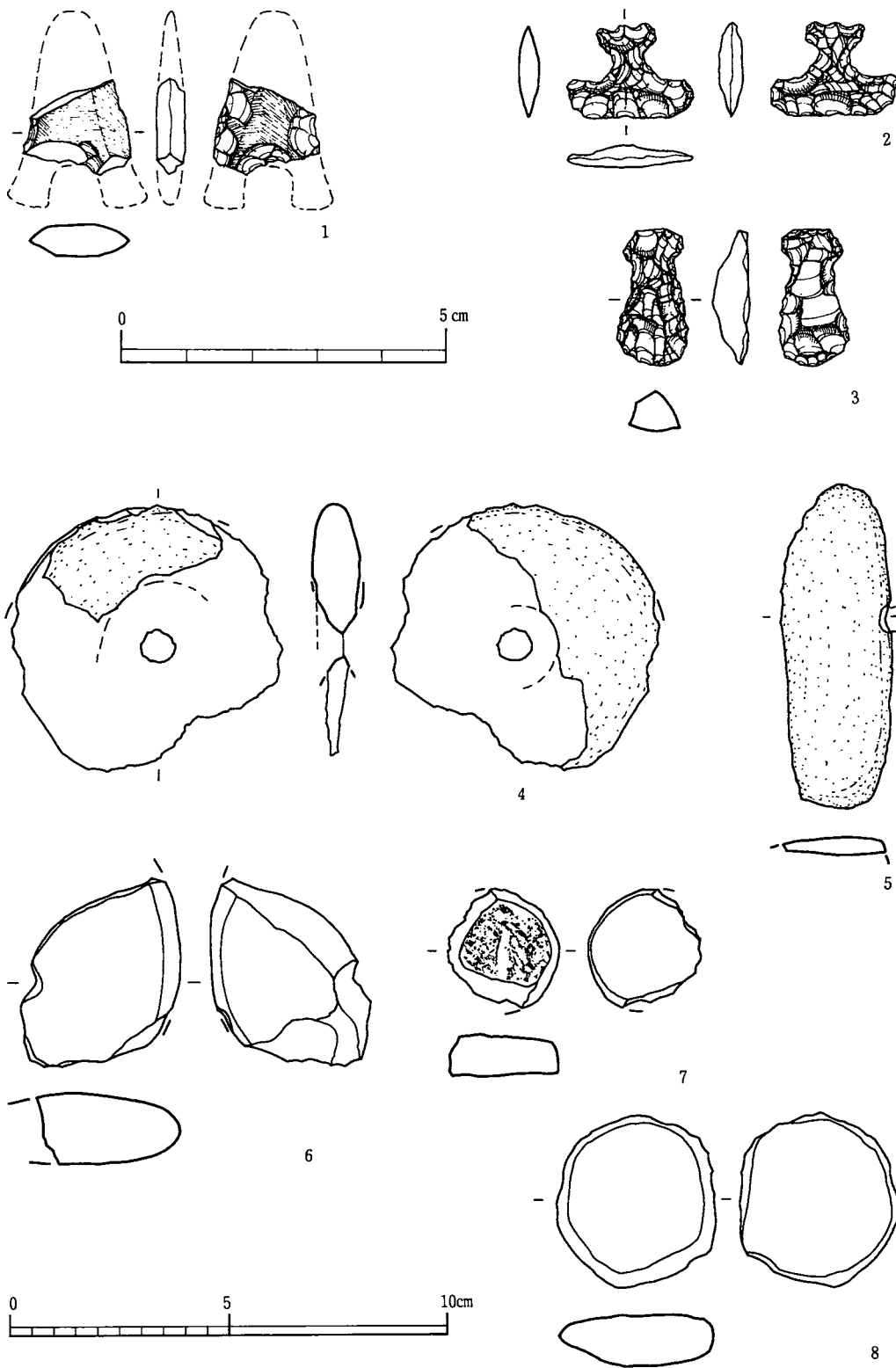
1は、異形部分磨製石器である。2と3は、小型の異形石器で、垂飾品と考えられる。2は、石匙の模造品であろう。4は、偏平礫の中央部を両面から穿孔したものである。垂飾品か紡錘車と考えられる。5は、偏平礫の一縁辺に、回転による溝を持つ石製品である。欠損品のため、

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物



第192図 遺物分布図 (石製品・土製品)

第III章 調査の成果



第193図 石製品・土製品実測図

第32表 石製品・土製品計測表

No.	器種	石質	計測値				登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
1	小型異形石器	珪岩	(1.45)	(1.6)	(0.5)	(1.3)	VIB JL 124
2	〃	珪岩	1.4	1.9	0.35	0.7	IVD JL 1139
3	〃	黒曜石	2.0	1.1	0.6	0.85	VD JL 76
4	円孔ある石製品	千枚岩	(6.05)	(6.15)	(2.35)	(39.4)	VIB JL 82
5	穿孔部をもつ石製品	千枚岩	(7.3)	(2.5)	(0.5)	(13.45)	VIC JL 15
6	石製板	砂岩	(4.2)	(3.6)	1.65	(18.9)	VIC-24 10号土坑
7	土製円板		(2.7)	(2.6)	0.9	(6.25)	IVC P 5
8	〃		4.0	3.6	1.2	14.9	VIB P 130

全体像は不明である。6は、石板である。線刻などの文様はみられない。7は、塞ノ神式土器の胴部を加工した土製円板である。表面には、沈線文と捺糸文がみられる。8は、無文の土製円板である。側面は、丁寧に擦られている。

3. まとめ

縄文時代早期は、アカホヤ火山灰層の直下である第IV層を主たる包含層とするもので、この包含層からは、これまで示してきたような、各種の遺構や遺物が検出された。こうした遺構や遺物は、厚く堆積したアカホヤ火山灰によって保護され、比較的良好な状態を保ち、しかもその内容は、縄文時代早期の集落の状態を復原できる程の情報を持っている。また、広域火山灰であるアカホヤ火山灰下の資料という点でも、他の地域との遺構・遺物の比較検討を容易にさせてくれるという利点がある。

遺構としては、竪穴式住居跡8基、集石(石組炉)9基、石皿を配した配石土坑4基、土坑10基が、それぞれ分布の傾向を異にして検出された。そこで、その状況を西側丘陵と中央部を中心にしてみたい。

西側の丘陵には、その中央を1本の尾根が通っている。遺構は、この尾根上にはみられず、尾根を介して南北に偏在している。そこで、この二つの偏在を南群、北群と呼んでおこう。北群は、8基の竪穴式住居と3基の土坑によって構成されている(群からやや離れて北に、1基の小穴を持つ土坑があるが)。これに対して、南群は、さらに二つの小群に分かれる。すなわち、3基の集石と2基の石組炉、それに3基の配石土坑の群とその西側にある配石土坑と土坑による群である。これらの遺構群は、それぞれに特徴がみられる。それは、居住を主たる目的とした遺構の北群と、食物調理関係の遺構による南群である。これをもって、集落内で、居住と食物調理の場が、明確に区分されていた事実が確認されよう。さらに、石組炉の炊き口部が、北西方向に設定されている事実は、風上が北方となる冬を中心とした季節に、この集落が営ま

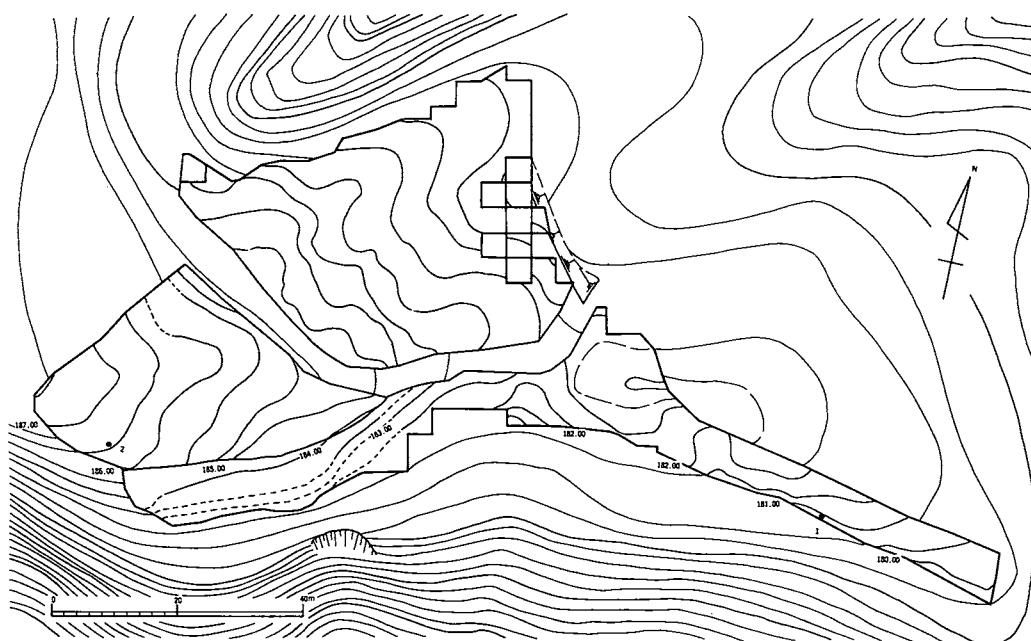
れていた可能性を示しているともいえる。この推定は、集落内の遺構の配置において、住居が調理場の北側にみられるという事実からも間接的に導き出されよう。

このような集落構成は、東側丘陵においても同様と考えられる。したがって、東側丘陵の北側未発掘部分に竪穴式住居跡などの遺構があるものと想定できそうである。

遺物では、1701点の土器と4700点の石器が出土した。その出土分布は、丘陵内に延びる尾根頂部には少なく、谷部、しかも尾根頂部と谷底面の境の斜面に集中するという傾向を示し、土器と石器、ともに同様な状況である。また、西側丘陵の遺物分布と南群の配置状況をみれば、遺構列が遺物分布のほぼ中央にあり、その列を介して、南側に遺物の出土量が増加するという傾向が伺われる。以上の状況は、食物調理や工作などの作業の際の生活廃棄物の投棄の結果とも考えられ、先に示しておいた集落内の場の利用に、廃棄の場が加えられる可能性を示しているともいえる。

ここに、狸谷遺跡の縄文時代早期における集落の景観が、居住と調理、作業と廃棄の場によって、構成されていた可能性を提示できよう。

遺物の特徴では、石器組成に注目されるものがある。石器組成の構成でもっとも高い出現頻度を示すものは、31%という磨石・敲石である。一方、石鏃も多く、23%という高い割合がみられる。この二つの石器は、使用が集落内で完結するものと、集落外にまで広がるものという、レベルの差がみられることから同一に扱えないが、両者は、石器組成において対時的である。この関係は、九州内における東九州（石鏃が石器組成の中心）と南九州（磨石・敲石が中心）



第194図 遺物分布図

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

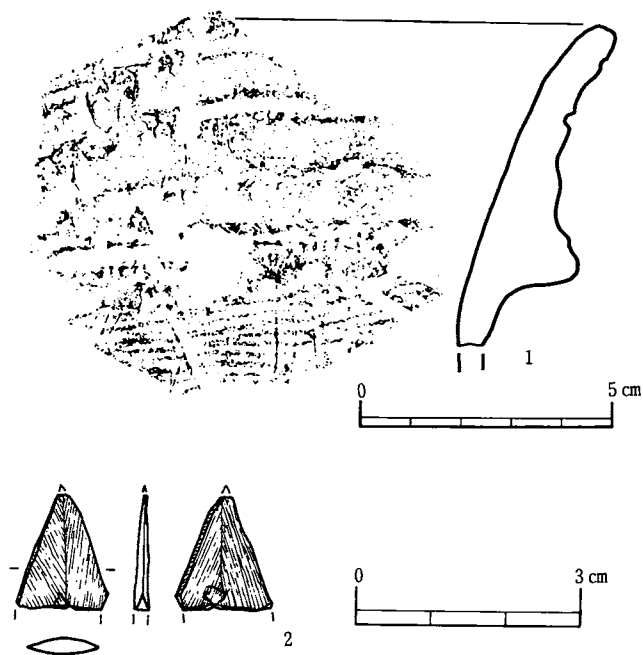
との対峙した状況と良く似ている。つまり、九州内の対峙の状況が、遺跡内に凝縮されているようでもある。このことは、押型文土器などの東九州系土器と、手向山式土器や塞ノ神式土器などの南九州系土器との、対峙関係が、この遺跡の中でみられることとも関係があるのかもしれない。これは、土器編年上の問題であろうか。

こうした石鏃と磨石・敲石との関係と同時に、尖頭器の存在が注目される。石器組成に占める割合は、0.6%、採集分を入れたとしても1%にすぎない。しかし、この石器は、西北九州で特徴的にみられるものであり、狸谷遺跡の石器組成の要素の中に、薄くはあるが、西北九州の傾向も加えなければならない。

このように、狸谷遺跡の石器組成の構造には、かなり複雑なものがある。

狸谷遺跡が立地する丘陵を舞台とした人々の営みは、この縄文時代早期をもって終わりとなり、その後の足跡は、僅かに第195図に示している資料のみである。

1は、縄文時代後期の市来式土器の口縁部である。東側丘陵の東縁辺部近くで検出された(第194図)。また、2は、弥生時代に属する磨製石鏃で、西側丘陵の山部近くで検出されている(第194図)。弥生時代の狩猟場となっていたのかもしれない。



第195図 遺物実測図

第IV章 総 括

発掘調査の結果、8枚の基本土層と、その中の3枚に含まれていた、遺構38基、土器1705点、石器9041点、土製品・石製品8点が確認された。包含層は、上位より第IV層～第V層、第VII層である。第IV層～第V層は、先土器時代から縄文時代の遺構や遺物が含まれているが、基本的には、第IV層は縄文時代早期の包含層で、第V層は先土器時代（ナイフ形石器文化）である。そして、この層間に縄文時代草創期の遺物が含まれている。また、第VII層は、先土器時代（ナイフ形石器文化）の包含層である。

ここに、狸谷遺跡は、先土器時代から縄文時代早期の四つの時期の遺構や遺物が上下に重なり合う、複合開地遺跡であることが判明した。

1. 縄文時代早期の集落について

縄文時代早期の遺構や遺物は、基本層位である第IV層から検出された。この層の上位には、鬼界火山を起原とするアカホヤ火山灰（第III層）が乗り、この火山灰を基準として他の地域との比較をも可能にしてくれている。

遺構としては、竪穴式住居跡8基、集石（石組炉）9基、配石土坑4基、土坑10基が検出された。これらは、すでに前章で述べておいたように、そのまとまり方を中心に検討すれば、大きく東西二つの遺構群に分けることができる。そこで、この二つの遺構群をそれぞれI群・II群と仮称する。

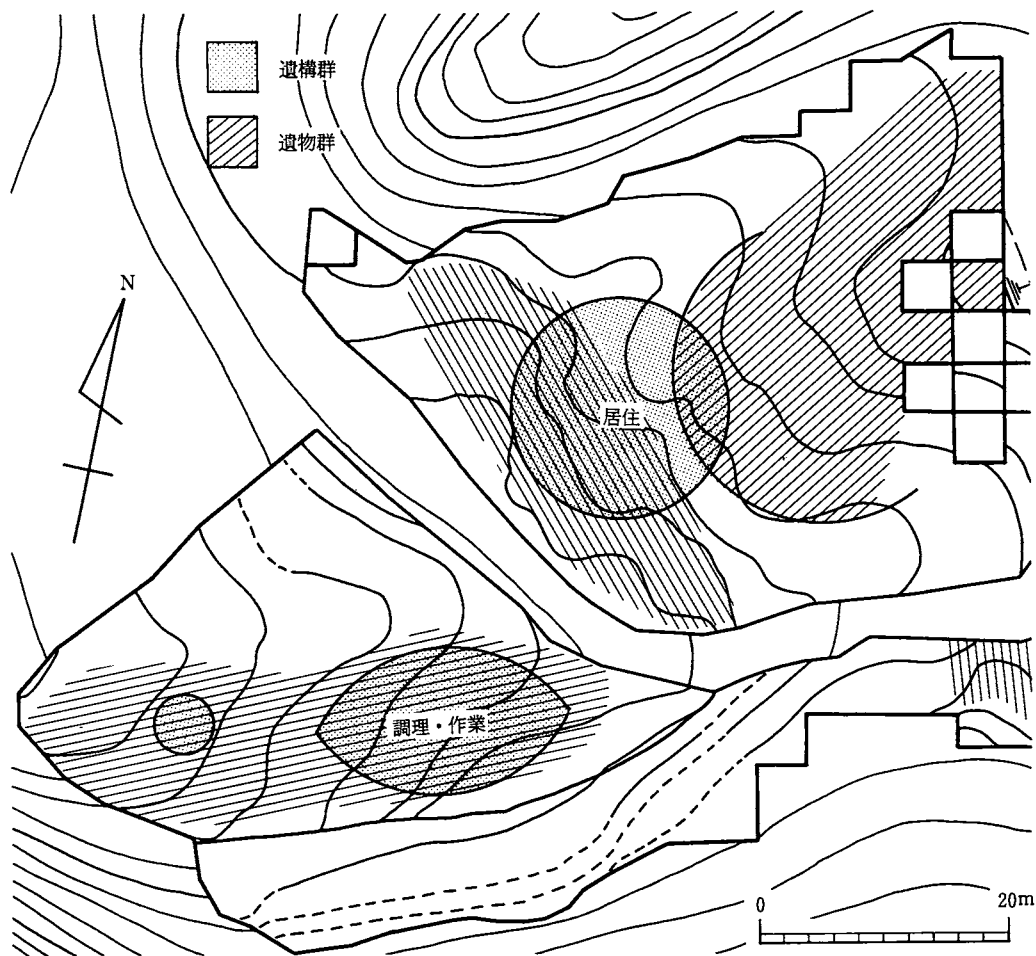
I群は、東側丘陵の南側縁辺にみられる遺構群で、丘陵のほとんどは未調査であり、その全容は不明である。遺構群は、集石4基、土坑5基によって構成されている。また、5基の土坑は、小型の土坑2基と大型の土坑2基、そして底面に小穴を持つ土坑1基に分けられる。遺構の広がりから検討すれば、未調査部分にも同様な遺構の分布がみられる可能性が高い（第103図）。伴出土器としては、塞ノ神式土器（6号・8号集石、7号土坑）、山形の押型文土器（6号土坑）、円筒形条痕文土器（7号土坑）、無文土器（8号土坑）がある。

II群は、丘陵の中央部と西側丘陵に広がる遺構群である。調査によって、そのほぼ全容が確認された。構成遺構は、竪穴式住居跡8基、集石5基（石組炉2基）、配石土坑4基、土坑5基（小型の土坑2基・深い堀り方の土坑2基・底面に小穴を持つ土坑1基）である（第103図）。時期は、伴出土器として、山形の押型文土器（4号住居跡、4号集石、1号・2号配石土坑）と手向山式土器（1号住居跡、1号～3号集石）と条痕文土器・円筒形条痕文土器（1号配石土坑）があることから、山形の押型文土器と手向山式土器の時期の可能性がもっとも高い（1号配石土坑は不明）。

この遺構群は、その配置の状況によって、さらに北群と南群に分けられた。

北群は、竪穴式住居跡8基、小型の土坑2基、深い掘り方の土坑1基によって構成されている。この中で、深い掘り方の土坑（2号土坑）は、埋土の状況が他の遺構とは異なり、小穴を持つ土坑に類似している。このことから、2号土坑は、他の遺構とは直接関係がなさそうである。したがって、北群には、竪穴式住居跡・小型の土坑による遺構群と、それとは直接関係のないその他の遺構がある。

竪穴式住居跡の切り合いは、3例みられる。それは、2基の住居跡によるもの2例（2号と3号、4号と5号）と3基の住居跡によるもの1例（6号～8号）である。こうした切り合い関係から考えて、8基の竪穴式住居跡は、最低でも3時期に分けることができ、それからすれば、住居の同時併存は、2基～3基ということになる。これに対して、小型の土坑は2基で、単純に3時期に対応させることはできないが、二つの時期に伴う遺構とすることがもっとも考えやすい。



第196図 縄文時代早期集落概念図

1. 縄文時代早期の集落について

南群は、集石5基（内、石組炉2基）、配石土坑4基、深い掘り方の土坑1基によって構成され、さらにその配置状況によって、集石と配石土坑3基の群、配石土坑と土坑の群に分けられる。この内、深い掘り方の土坑は、北群のものと同様に、埋土の状態が他の遺構とは異なっていることから、集石や配石土坑とは直接関係がなさそうである。ここに、北群は、配石土坑と集石・配石土坑による二つの小群と、それとは直接関係のない土坑によっていることがわかる。

集石（第108図・第109図）は、5基検出されたが、その形状などによって、1号と3号（石組炉）、2号（長楕円形の集石）、4号と5号（円形ないしそれに近い形状の集石）に分けられる。この内、前2号では手向山式土器が、4号集石では、山形の押型文土器が出土している。このことから、石組炉は手向山式土器、円形ないしそれに近い形状を呈する集石は、山形の押型文土器の時期とすることができる。配石土坑は（第111図・第112図）、1号と2号～4号で異なった構造を示し、また、その位置も前記のように、やや離れてみられる。このことから、1号配石土坑と他の配石土坑とは性格を異にしていると考えられる。土器は、2号配石土坑より山形の押型文土器が出土している。

以上の結果を基にして、II群の構造を整理してみよう。

II群は、すでに第三章で触れているように、居住の場（北群）と調理・作業の場（南群）によって構成されている。そして、その時期は、山形の押型文土器から手向山式土器にかけての3時期である。

同時併存の竪穴式住居は2基～3基で、それに伴って土坑がみられる場合もある。もっとも古い住居は、7号（第107図）と押型文土器を出土した2号（第105図）の2基で、それ以降は、3基ごとの併存が考えられる。例えば、3号・5号・6号は、住居の配列と規模からして、同時期の可能性が高く、切り合い関係から、もっとも新しい時期に属するものと考えられる。

集石では、石組炉が新しい時期の竪穴式住居跡に、押型文土器を伴う集石は、古手の住居跡に伴うと考えられる。また、該当する配石土坑は、3基あり、単純に考えて、1時期1遺構とすることができる。なお、この中で2号が押型文土器を伴い、もっとも古手の住居跡に対応している。

以上のように、狸谷遺跡における集落は、2基～3基の住居と1基の土坑、そして、1基～2基の集石（石組炉）と1基の配石土坑によって構成され、対面する居住域と調理・作業域、そして広場のような空白部と谷部を中心とした廃棄場とによる景観を持つことが明らかとなった（第196図）。ここに、狸谷遺跡の集落は、直径50mを測る範囲に設定できた。さらに、その中で生活する2～3世帯、10人前後の集団が想定され、この集団を、縄文時代早期におけるもっとも基本的で単位的な集団と認定できそうである。

2. 先土器時代について

先土器時代に属する石器文化は、2枚が検出された。その二つの石器文化は、入戸火砕流（シラス）という無遺物層によって、明確に区分されている。したがって、この石器文化間には、一切の混入関係も認められない極めて良好な遺存状態がある。

狸谷I石器文化は、ナイフ形石器、搔器、削器、抉入石器、彫器、揉錐器、礫器、磨石・敲石、石皿・台石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剝片による石器組成で、ナイフ形石器を主体とした石器文化である。石器組成の中で中心を占めるものは、ナイフ形石器（27%）と磨石・敲石（19%）、そして使用痕ある剝片（29%）である。ナイフ形石器は、茂呂（九州）型のナイフ形石器と部分加工のナイフ形石器が中心となり、これに切出し状のナイフ形石器が加わる形態組成をとっている。また、石器石材では、珪岩（58%）と黒曜石（30%）がそのほとんどを占め、それに安山岩（10%）や砂岩、頁岩がみられる。

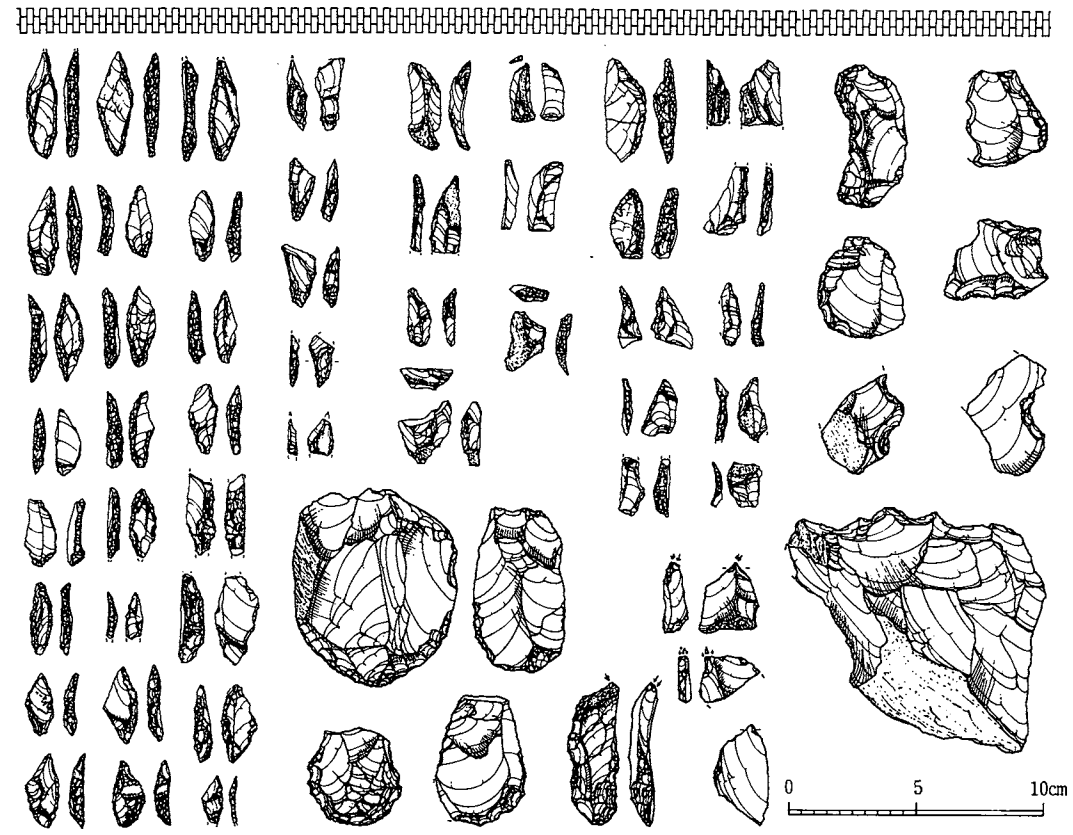
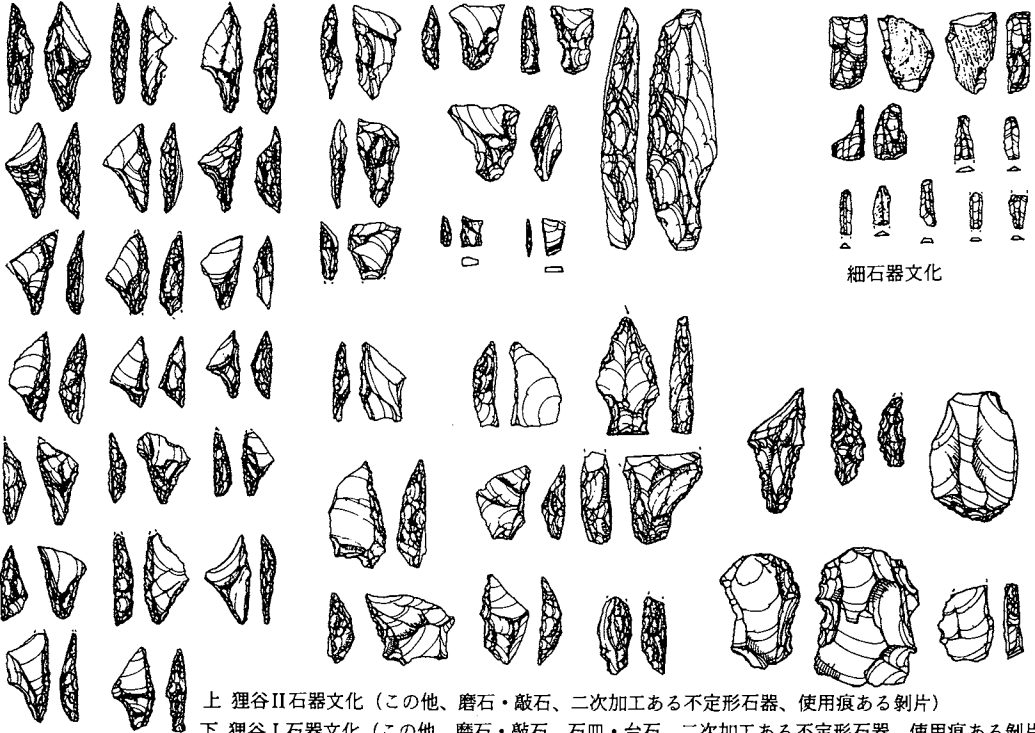
これに対して、狸谷II石器文化は、ナイフ形石器、三稜尖頭器、搔器、削器、彫器、楔形石器、磨石・敲石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剝片による石器組成をもった、ナイフ形石器を主体とする石器文化である。そして新に、三稜尖頭器（5%）が石器組成に加わっている。また、石器組成の中で中心を占める石器は、ナイフ形石器で、43%という高い数値を示し、その形態組成は、切出し状のナイフ形石器が中心をなし、それに台形石器や剝片尖頭器、一側縁加工のナイフ形石器が加わっている。そして、これに使用痕ある剝片（22%）と二次加工ある不定形石器（13%）が加わり、狸谷I石器文化で高い数値を示した磨石・敲石は、5%と大きく減少している。また、石器石材では、珪岩（82%）が中心となり、これに黒曜石（13%）や砂岩が加わるという状態で、黒曜石が高い割合を占めていた狸谷I石器文化とは、大きく異なっている。

このように、狸谷遺跡で検出された二つの石器文化は、石器組成や石材組成などの点で異なった様相を示し、この間に編年的段階の差をはっきりと認識できる。しかし、一方で、その剝片剝離技術は、刃器技法を持たず、縦長剝片から幅広の縦長剝片や横広の剝片を生産するという点で類似している。

次に、編年的な位置づけについてみてみよう。

二つの石器文化の関係は、茂呂（九州）型のナイフ形石器と部分加工のナイフ形石器が中心となり、それに切出し状のナイフ形石器が加わる石器文化と、切出し状のナイフ形石器や台形石器を持つ石器文化との関係である。この関係は、これまで示してきたように、前者が下位にあり、後者が上位にある。こうした上下の関係は、厚く堆積した層位を持つ南関東地方において、典型的にみられる状況である。すなわち、前者は、武蔵野台地第VII層上部から第V層下部にかけてみられる武蔵野編年第Ic期、相模野台地B2L以下にみられる相模野編年第II期後半に相当する石器文化で、後者は、第V層上部から第IV層中部にかけてみられる武蔵野編年第

2. 先土器時代について



第197図 編年図

II a 期、B 2 L から B 2 U にかけてみられる相模野編年第III期に相当する石器文化である。

このように、狸谷遺跡における二つの石器文化は、南関東を中心とした編年の中に、直接対比できる程、南関東に類似した様相をとり、しかも矛盾の無い上下関係をもっている。このことは、関東地方に比べてずっと遅れている九州の編年研究に対して、重要な基準を提示するものと考えられる。

そこで、九州の石器群について、簡単に対応関係を検討しておこう。その際、狸谷 I 石器文化と II 石器文化との間には、始良 T n 火山灰が介在していることから、A T 上位と下位の二つの石器群に分けてみてみたい。

確実に、A T の下位に位置することが判明している石器文化には、熊本県曲野遺跡、大分県駒方古屋遺跡、長崎県百花台遺跡で検出された石器文化がある。この中で、前 2 者の石器文化について検討してみよう。熊本県曲野遺跡では、第VI層という鳥栖ローム層上部に出土層順がある石器文化が検出された。石器組成は、ナイフ形石器、削器、敲石、台石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剝片である。また、出土地点は異なり、共伴関係は不明であるが、同じ層位から刃部磨製石斧が出土している。ナイフ形石器の形態組成は、台形石器と切出し状のナイフ形石器で、狸谷 I 石器文化とは異なる様相を呈している。この異なる二つの石器文化の関係については、層位的な出土例が無く、共伴関係なのか前後関係なのか、判然としない点がある。ただ、ナイフ形石器の持つ様相がはっきり異なる点、また同一の層位中から刃部磨製石斧が出土している点などを考え合せると、曲野石器文化は、狸谷 I 石器文化よりも先行する可能性が強く、武蔵野編年第 I b 期、相模野編年第 II 期前半に対応するものであろう。

大分県駒方古屋遺跡では、第IV層という黒色帯に出土層順を持つ石器文化が検出された。石器組成は、ナイフ形石器、「搔器」、彫器、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剝片である。ナイフ形石器の形態組成は、茂呂（九州）型のナイフ形石器と部分加工のナイフ形石器によっている。石器組成やナイフ形石器の数量などの点で、不十分な状況ではあるが、この駒方古屋石器文化は、狸谷 I 石器文化に対比できる石器文化と考えることができる。なお、この石器文化には、狸谷 I 石器文化でみられなかった刃器技法が存在している。このほか、長崎県堤西牟田遺跡の最下部の石器文化も狸谷 I 石器文化に対比できる。

確実に、A T よりも上位に位置する遺跡は、東九州、中九州（百花台遺跡も含む）、南九州で、多く調査されている。これによると、三稜尖頭器が石器組成の中に新に加わるという変化がある。また、ナイフ形石器の中で、剝片尖頭器が特徴的にみられるようになるという事実も見逃せない。こうした石器組成における変化をもって、九州先土器時代の編年上の大きな画期とすることが可能である。

九州の当該期の石器文化の様相は複雑で、剝片尖頭器が石器組成の中で主体をなすもの（熊本県大丸・藤ノ迫石器文化、大観峯石器文化）、ナイフ形石器（台形石器も含む）と三稜尖頭

3. 総 括

器が主体となるもの（熊本県下城Ⅰ石器文化、大分県岩戸Ⅰ石器文化、百枝Ⅱ石器文化）、台形石器が主体となり、それに多量の剥片尖頭器や三稜尖頭器が伴う石器文化（鹿児島県小牧ⅢA石器文化）などがある。しかし、こうした石器文化間に明確な時期差を示すだけの資料はなく、同一時期のものと考えられ、しかも、三稜尖頭器や剥片尖頭器、そして切出し状のナイフ形石器は、武蔵野編年第Ⅱa期、相模野編年第Ⅲ期を中心に特徴的にみられるものである。このことから、上記の石器文化はすべて1時期のもので、狸谷Ⅱ石器文化は、切出し状のナイフ形石器と台形石器、そして三稜尖頭器を主体とする石器文化としてこの時期に対比されよう。

（木崎）

3. 総 括

今回の発掘調査によって、狸谷遺跡は先土器時代・縄文時代（早期・後期）の複合遺跡で、集落跡であることがわかった。個々の具体的な内容については先述のとおり、時代・時期ごとにまとめてきたところであるが、本項では調査の成果と問題点について整理してみたい。

先土器時代 先土器時代の石器文化は狸谷Ⅰ、Ⅱ石器文化の二時期に区分することができる。第Ⅵ層（始良 Tn 火山灰）の間層をはさんで第Ⅶ層が狸谷Ⅰ、第Ⅴ層が狸谷Ⅱ石器文化である。

狸谷Ⅰ石器文化の石器組成はナイフ形石器、搔器、削器、抉入石器、彫器、揉錐器、礫器、磨石・敲石、石皿・台石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剥片などから成り、しかも遺物の分布状態に特色があることが判明した。つまり、散在的な分布（ナイフ形石器、磨石・敲石、石皿・台石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剥片）、点在的な分布（搔器）、環状分布（削器、抉入石器、石核）の三つである。このことは、居住地内での生活の仕方や石器の機能を把握するうえでの傍証資料として、今後の検討課題を提供するものといえる。

狸谷Ⅱ石器文化の遺物は、主に丘陵の西半分に帯状に分布するほか、配石遺構や礫群と共伴している。石器の組成はナイフ形石器を主体とし、ほかに三稜尖頭器、搔器、削器、彫器、楔形石器、磨石・敲石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剥片などから成っている。とくにナイフ形石器は全体の4割をしめ、1類（切出形、台形石器）、2類（剥片尖頭器）、3類（一側縁加工）に分類できる。その中で1類の切出形のナイフ形石器は幅広の縦長剥片や横広の剥片などの折断剥片を素材とするもので、ナイフ形石器の半数を占めるものである。

これら狸谷Ⅰ、Ⅱ石器文化の編年的位置づけは、まず狸谷Ⅰ石器文化ではナイフ形石器については茂呂（九州）型と剥片の一部に刃潰し加工が認められるものが主体となり、さらに切出し状のナイフ形石器を伴うことから判断して、調査担当者木崎康弘氏が指摘するとおり、相模野編年での第Ⅱ期後半、武蔵野編年での第Ⅰc期に対比でき、熊本県文化財調査報告第81集「熊本県旧石器時代調査報告書」（担当者江本直）の第Ⅱ期に比定できよう。

つぎに、狸谷II石器文化はナイフ形石器を主体とし、その中に切出形、台形石器、剝片尖頭器などが含まれ、さらに三稜尖頭器が加わっている。このような石器組成から相模野編年第III期、武蔵野編年第II a 期に対比でき、上記県報告第81集の第III b 期にあたり、昭和58年度に県教育委員会が発掘調査した大丸・藤ノ迫遺跡（熊本県文化財調査報告第80集、担当者木崎康弘）と共通する点が多い。

縄文時代早期 縄文時代早期の包含層はアカホヤ火山灰層の直下にある第IV層にあたり、第IV層の上部から遺構および遺物の出土する集落跡、下部から細石器および隆起線文土器が検出された。第IV層における上下の層は明瞭に区分できない状態である。

細石器文化の遺物は3点の隆起線文土器と数点の細刃器、細石核である。出土遺物も少なく包含状態もよくないが縄文時代草創期の資料としては貴重な資料で、とくに隆起線文土器と細石器の共伴資料としては県下初出の例である。

集落跡関係では、遺構として竪穴式住居跡8基、集石（石組炉）9基、石皿を配した配石土坑4基、土坑10基が検出された。これらの遺構の分布状態を分析してみると、中央の東西にのびる尾根を境にして南側と北側で差異が認められる。北群では検出され竪穴住居跡8基すべてがここに集中し、これに3基の土坑が伴っている。他方南群には竪穴住居跡がなく、石組炉、配石土坑、集石などのみで構成され、さらに東西2つの小グループに分かれている。東側では集石3基、石組炉2基、配石土坑3基、西側では配石土坑、土坑とに分かれている。これらの状況から推測すると北群が居住区、南群が食物調理区ととらえることができ、集落内における居住区と食物調理の空間が明確に区分されていたものといえよう。調査担当者木崎康弘氏は居住区と調理空間の関係のほか石組炉の炊き口部が北西方向に設けられていることに注目し、風上が北方となる冬を中心とした季節に、この集落を営んだのではないかと指摘している。

検出された遺物には多量の土器と石器がある。分布の状態は上記の尾根頂部に少なく、尾根頂部と谷底面との境の斜面に濃密である。これを遺構との関連でとらえると、南群においては遺構列が遺物分布のほぼ中央にあり、とくにその南側で多量に検出される傾向が認められ、食物調理や工作などの作業による生活廃棄の投棄との関連も考えられる。

出土土器は押型文土器と手向山式土器や塞ノ神式土器が主体であるが、前者と後二者との分布状態に差異が認められるので、集落の展開に編年上の問題を提起するものと考えられる。

石器としては、磨石・敲石、石鏃、尖頭器などが検出されており、磨石・敲石が全体の31%、石鏃が23%を占める。土器と石器組成の問題も今後の縄文時代早期の他遺跡の発掘調査成果を待ちながら、狸谷遺跡との関連も検討を進めねばならない。

（限 昭志）

The Tanukidani Site

SUMMARY

The *Tanukidani* Site is located in *Yamada*, *Kuma* County, *Kumamoto* Prefecture. The site is 179 to 189 meters above sea level with 24 meters of relative height from the alluvium. It is situated on the projecting part of the hill facing east along the *Nishigouchi* River, which is a branch of the *Yamada* (one of the *Kuma*'s tributary waters). The excavation took place from April, 1984 to March, 1985, due to the construction of the *Kyushu* Freeway which runs through the middle of *Kyushu*. The investigation was conducted mainly by the *Kumamoto* Prefectural Board of Education. The features and artifacts from the Preceramic Age to the Earliest *Jomon* Period were found in the natural layers in a fairly good condition as the result of the excavation. They are each described in the following paragraphs according to the cultural layer to which they belong.

1. Tanukidani I Lithic Culture

This particular Lithic Culture has been found in the culture layers of Layer VII just beneath Layer VI or the Ito Pyroclastic flow. The artifacts consist of 381 tools and 56 cores, as well as 3,783 flakes and chips. The tools have been itemized as follows: 105 knife blades, 14 end scrapers, 23 side scrapers, 15 notched scrapers, 3 gravers, 1 hand drill, 2 pebble tools, 71 cracking stones and hammer stones, 12 stone plates and anvils, 26 retouched flakes and 112 utilized flakes. The artifacts were found in extremely good condition, covered in the 0.6- to 1.3-meter thick, hard and firm Layer VI.

2. Tanukidani II Lithic Culture

The features and artifacts included in Layer V just above the Ito Pyroclastic flow are in this Lithic Culture. The feature is stone structured with a group of 8,252 pebbles (sand stones and charts) which can be classified into six different groups viewed from the condition of its distribution. It is obvious that most of the pebbles were once scorched, which indicates that they might have been used in cooking with the use of fire.

The total of 547 artifacts were found, namely 110 tools, 20 cores and 417 flakes and chips. The tools consist of 48 knife blades, 5 trihedral points, 5 end scrapers, 5 side scrapers, 1 graver, 1 *pièce esquillée*, 6 cracking stones and hammer stones, 15 retouched flakes and 24 utilized flakes. The tools are found distributed at and near the ridge of the hill, and they can be classified into seven different blocks (1 to 6 a, b) according to their distribution.

3. Microlithic Culture

As the result of the investigation, microliths were found accompanied with pottery in Layer IV and V. The limited number of such artifacts were found scattered in all parts of

the hill. However, most of them were found around its center. They consist of 13 items in all: 3 pieces of linear relief pottery, 3 micro cores and other related artifacts and 7 micro blades. The linear relief pottery is the oldest and the only example found in *Kumamoto* Prefecture. It is expected to be one of the important materials in the study of the Incipient *Jomon* Period in the future.

4. Earliest Jomon Period

The features and the artifacts were found in Layer IV right beneath the *Akahoya* tephra (*Imogo*). Such features and artifacts are varied and are believed to be precious clues in knowing what the village was like in the period.

The features include 8 pit-dwellings, 9 stone clusters, 4 stone-arranged pits and 10 pits. Viewed from the distribution these features are quite different from one another. For instance, at the west side of the hill, the features consist of the pit-dwellings and the pits in the north group, while they consist of the stone-arranged pits and the stone clusters in the south group. Thus, it can be said that they are divided into two different groups (the north and the south), the ridge of the central hill as its border. If the tendency of such centralization is taken into consideration, the restoration of the village to the original state is possible. The village is presumed to have consisted of the residence area in the north and the cooking and the working area in the south, with a dumping place attached to each. It can also be pointed out that the village might have been active during the winter time because of the fact that the fuel hole of the stone clusters are found in the north, while the cooking area is placed in the south of the residence.

As to the artifacts, 1,701 pottery and 4,700 tools were found. The pottery consist of *Oshigata mon doki* or pattern stamped pottery, *Senokan* type pottery, *Tamukeyama* type pottery and shell scraped pottery. It appears that the east *Kyushu* group (the pattern stamped and the shell scraped pottery) and the south *Kyushu* group (the *Senokan* type and the *Tamukeyama* type pottery) are placed face to face with each other. On the other hand, the tools (635 items in all) consist of 153 arrow heads, 4 points, 28 side scrapers, 1 scrapers (*Ishisaji*), 4 notched scrapers, 23 hand drills, 1 ax-like tool, 3 polished ax-like tools, 5 *pièce esquillées*, 4 pebble tools, 20 cracking stones and hammer stones, 95 stone plates and table stones, 128 utilized flakes, among which the arrow heads (the main components of the tools in east *Kyushu*) and the cracking stones and hammer stones (the main components of the tools in south *Kyushu*) are the chief tools.

Thus, as in the case of the pottery, the confronting relationship of the two areas is recognized in the distribution of the tools at the *Tanukidani* Site. Besides the relationship, the presence of the points, though they are rather thin, would be an important factor of the site, for they are the characteristic tools found in the west and the north of *Kyushu*. As mentioned above, the tool composition at the *Tanukidani* Site is believed to be made up of at least three different local factors, making the structure complicated.

参考文献

- 赤沢 威・小田静夫・山中一郎 1980 「日本の旧石器」 東京、立風書房刊
- 赤瀬 恵・椎葉文雄 1979 「村山遺跡調査報告書」 人吉市教育委員会
- 安蒜政雄 1973 「関東地方における切出形石器を伴う石器文化の様相」 駿台史学 第32号
駿台史学会 東京
- 〃 1979 「石器の形態と機能」 日本考古学を学ぶ 第2巻 東京、有斐閣刊
- 〃 1986 「先土器時代の石器と地域」 日本考古学 第5巻 文化と地域性 東京
岩波書店刊
- 江本 直 1983 「曲野遺跡 II」 熊本県文化財調査報告 第61集
- 〃 1985 「旧石器時代研究の現状と課題」 肥後考古 第5号 特集：熊本の旧石器
文化 肥後考古学会 熊本
- 〃 1986 「熊本県旧石器時代調査報告書」 熊本県文化財調査報告 第81集
- 緒方 勉・古森政次 1980 「下城遺跡 II」 熊本県文化財調査報告 第50集
- 小田静夫・伊藤富治夫・C.T.キリー・重住 豊編 「高井戸東遺跡」 東京
- 織笠 昭・松村明子、他 1978 「鈴木遺跡 I」 東京
- 貝塚爽平・成瀬 洋 1977 「古地理の変遷」 日本の第四紀研究 その発展と現状 日本第
四紀学会 東京大学出版会 東京
- 河口貞徳 1972 「塞ノ神式土器」 鹿児島考古 第6号 鹿児島県考古学会 鹿児島
- 〃 1985 「塞ノ神式土器と轟式土器」 鹿児島考古 第19号 鹿児島県考古学会 鹿
児島県
- 木崎康弘 1985 「大観峯遺跡」 肥後考古 第5号 特集：熊本の旧石器文化 肥後考古学
会 熊本
- 〃 1985 「狸谷遺跡」 肥後考古 第5号 特集：熊本の旧石器文化 肥後考古学
会 熊本
- 〃 1985 「遺跡の概観」 肥後考古 第5号 特集：熊本の旧石器文化 肥後考古学
会 熊本
- 〃 1985 「大丸・藤ノ迫遺跡の塞ノ神式土器について」 塞ノ神式土器 縄文研究会
熊本
- 木崎康弘、他 1986 「大丸・藤ノ迫遺跡」 熊本県文化財調査報告 第80集
- 熊本県 1985 「球磨川流域環境利用ガイド」 熊本
- 熊本県企画開発部 1982 「土地分類基本調査」 熊本
- 黒坪一樹 1983・84 「日本先土器時代における敲石類の研究(上)・(下)」 古代文化 第35
巻 第12号・第36巻 第3号 古代学協会 京都
- 椎葉文雄・松舟博満・菖蒲和弘 1985 「アンモン山遺跡」 人吉市教育委員会
- 柴田喜太郎 1984 「熊本県松橋町曲野遺跡の堆積物—曲野遺跡および関連地域の堆積物に含
まれる火山噴出物の検出と対比」 曲野遺跡II 熊本県教育委員会
- 〃 1986 「熊本県内旧石器遺跡の堆積物に含まれる火山噴出物の検討」 熊本県旧
石器時代調査報告書 熊本県教育委員会
- 清水宗昭 1973 「剥片尖頭器について」 古代文化 第25巻第11号 古代学協会 京都

- 清水宗昭・栗田勝弘・須田良平 1985 「百枝遺跡 C地区」 三重町教育委員会
- 新東晃一 1979 「南九州の火山灰と土器形式」 どるめん 第19号 東京
- 〃 1980 「火山灰からみた南九州縄文早・前期土器の様相」 鏡山猛先生古稀記念
古文化論叢 福岡
- 〃 1981 「中尾田遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告 15
- 〃 1982 「塞ノ神式土器」 縄文文化の研究 第3巻 縄文土器Ⅰ 東京 雄山閣刊
- 杉原荘介 1974 「日本先土器時代の研究」 東京 講談社刊
- 鈴木次郎・白石浩之 1980 「寺尾遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告 18
- 鈴木忠司・山下秀樹 1985 「広野北遺跡」 平安博物館 京都
- 芹沢長介・柳田俊雄 1978 「岩戸」 東北大学考古学研究室考古学資料集 第2冊 仙台
- 高橋信武 1986 「右京西遺跡」 荻町教育委員会
- 橘 昌信 1985 「駒方古屋遺跡 発掘調査報告書」 別府大学付属博物館 別府
- 橘 昌信・萩原博文 1983 「九州における火山灰層序と旧石器時代石器群」 第四紀研究
第22巻 第3号 日本第四紀学会 東京
- 戸沢充則・安蒜政雄、他 1974 「砂川先土器時代遺跡—埼玉県所沢市砂川遺跡の第2次調査—」 所沢
- 戸沢充則・安蒜政雄編 1983 「探訪先土器の遺跡」 東京 有斐閣刊
- 土壌調査研究会 1982 「あるいて見る 九州の土壌—土壌調査の方法と利活用」 福岡
- 中村喜代重・堤 隆、他 1983 「海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡 発掘調査概要報告書」
- 長友良典 1985 「堂地西遺跡」 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集
- 長野真一 1979 「小牧ⅢA遺跡の紹介」 指宿史談 創刊号 指宿
- 日本第四紀学会編 1977 「日本の第四紀研究 その発展と現状」 東京 東京大学出版会
- 萩原博文 1985 「堤西牟田遺跡」 平戸市教育委員会
- 肥後考古学会編 1984 「連合学会資料—免田式土器の諸問題」 熊本
- 古森政次 1982 「熊本県下新発見の旧石器時代遺跡について」 旧石器考古学 第24号 旧
石器文化談話会 京都
- 〃 1985 「中九州の火山灰」 考古学ジャーナル 第242号 東京
- 松藤和人編 1984 「百花台 1983」 同志社大学考古学研究室 京都
- 松舟博満・木崎康弘 1982 「熊本県球磨・人吉地方の先土器時代資料について」 肥後考古
第2号 肥後考古学会 熊本
- 松舟博満 1982 「永野の旧石器」 郷土 第10号 免田郷土研究会 免田
- 〃 1983 「消される遺跡地」 郷土 第11号 免田郷土研究会 免田
- 〃 1983 「シラスの下の文化層」 くまひと 第3号 人吉
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」 神奈川考古 第
1号 神奈川考古同人会 横浜
- 山崎純男・小畑弘己 1983 「柏原遺跡群 I」 福岡市埋蔵文化財調査報告 第90集
- 山中一郎 1975 「彫器研究法」 史林 第58巻 第3号 史学研究会 京都
- 〃 1976 「搔器研究法」 史林 第59巻 第5号 史学研究会 京都
- 米倉秀紀 1983 「縄文時代早期の生業と集団活動」 文学部論叢 第13号 熊本大学 熊本

写真図版

図版1 遠景・近景



1. 全景 (南方より)



2. 遠景 (東方より)



3. 近景 (東方より)

図版 2 土層



縄文時代早期

細石器文化



狸谷II石器文化



狸谷I石器文化



図版3 狸谷 I 石器文化の遺物

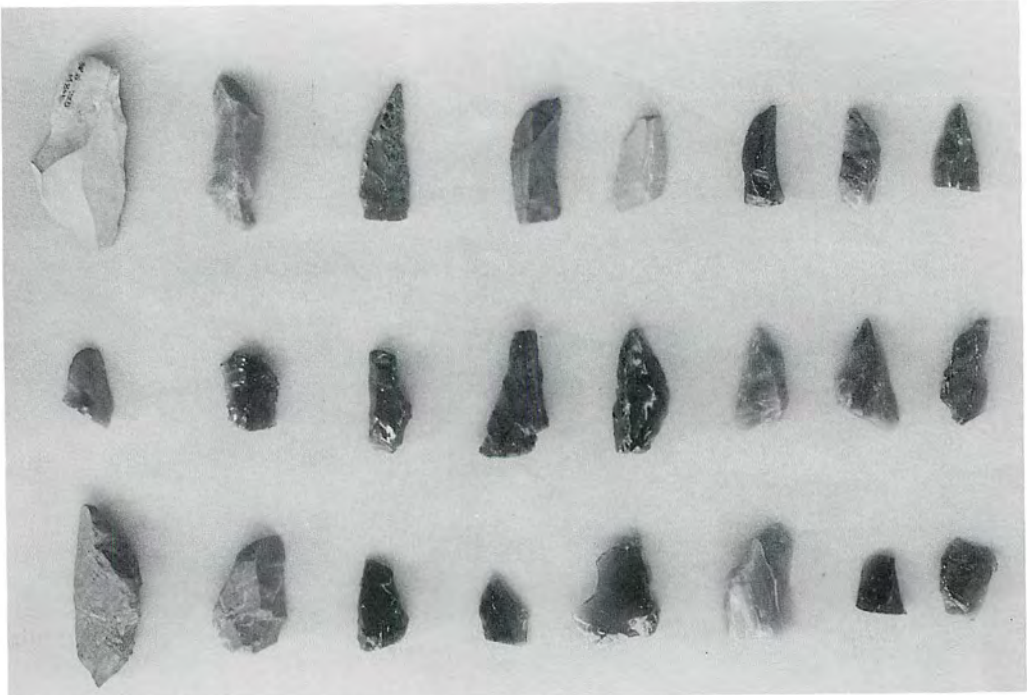


ナイフ形石器

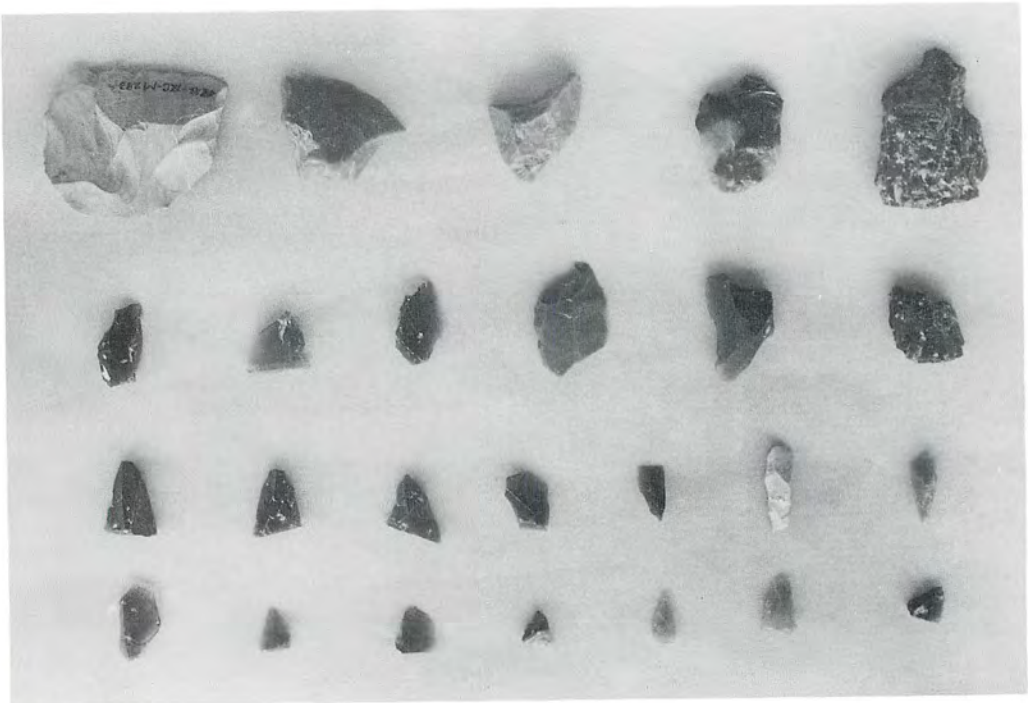


ナイフ形石器

図版4 狸谷 I 石器文化の遺物

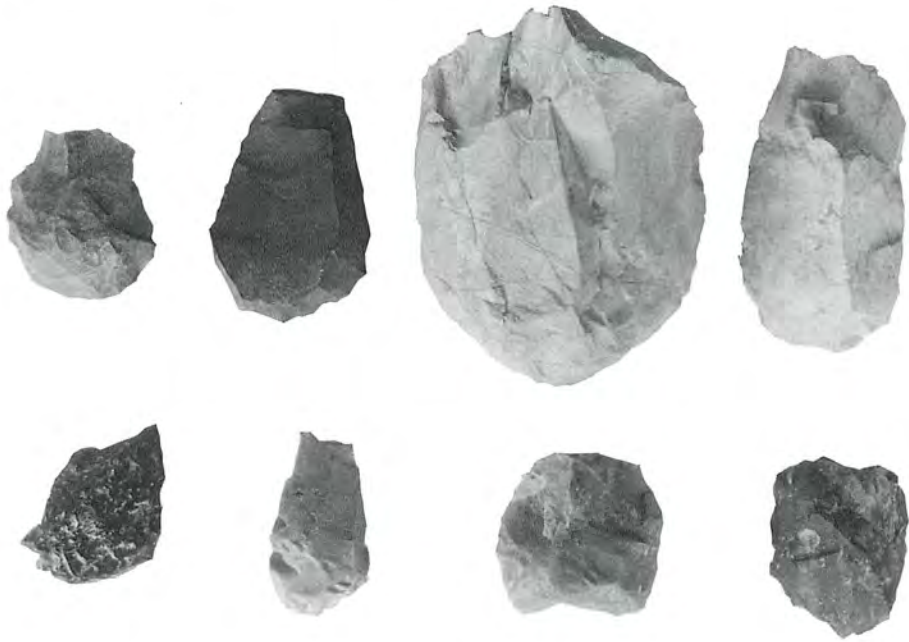


ナイフ形石器



ナイフ形石器

図版5 狸谷 I 石器文化の遺物



1. 搔器



2. 彫器 (左上2点)・揉錐器 (左下1点)・礫器

図版6 狸谷I石器文化の遺物



1. 磨石 (左1点)・敲石・台石



2. 磨石・敲石

図版7 狸谷I石器文化の遺物



磨石・敲石

図版8 狸谷II石器文化の遺構



配石土坑

図版9 狸谷II石器文化の遺物



ナイフ形石器

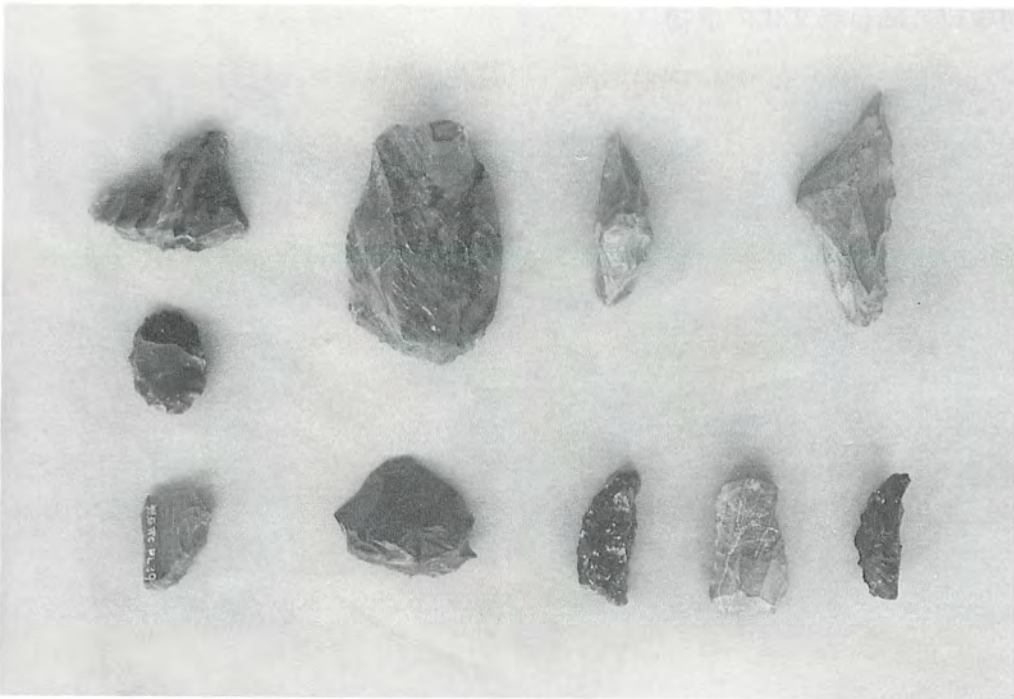


ナイフ形石器

図版10 狸谷II石器文化の遺物



1. ナイフ形石器



2. 三稜尖頭器 (右5点)・掻器

図版11 狸谷II石器文化の遺物

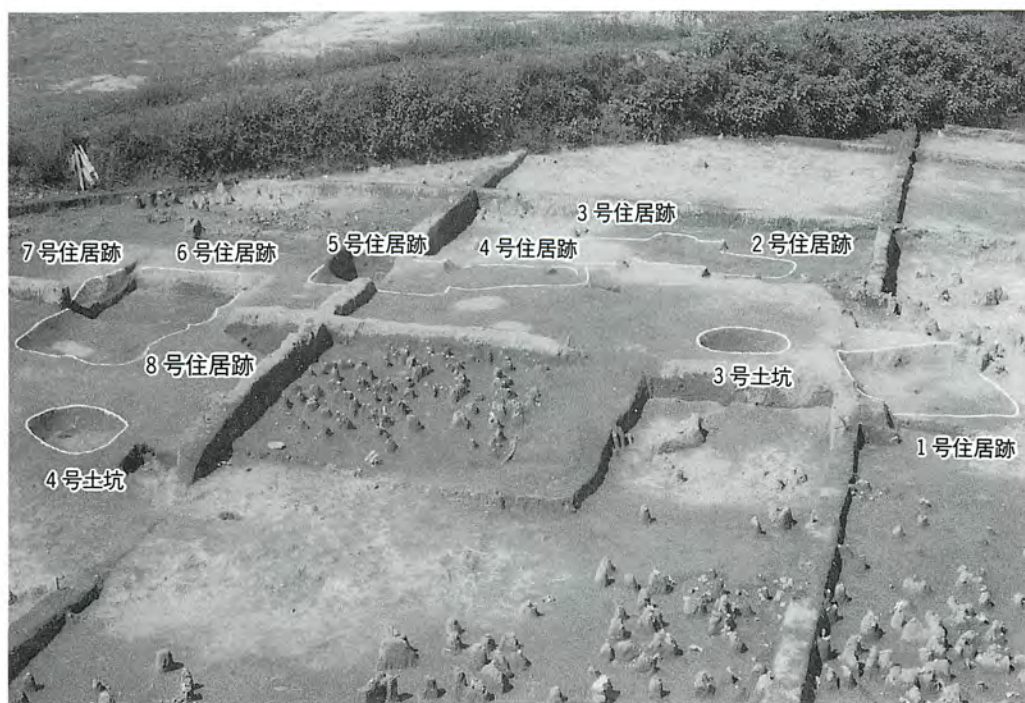


削器（上4点右下1点）・彫器・楔形石器（中央下左2点）・刃器（左下1点）

図版12 細石器文化の遺物



図版13 縄文時代早期の遺構



1. 1～8号竪穴式住居跡と土坑（東より）



2. 1号竪穴式住居跡（東より）

図版14 縄文時代早期の遺構



1. 2号竪穴式住居跡（西より）



2. 3号竪穴式住居跡（西より）

図版15 縄文時代早期の遺構



1. 4号竪穴式住居跡（西より）



2. 5号竪穴式住居跡（西より）

図版16 縄文時代早期の遺構



1. 6・7号竪穴式住居跡（西より）



2. 8号竪穴式住居跡（北より）

図版17 縄文時代早期の遺構



1. 1号集石（東より）



2. 2号集石（南より）

図版18 縄文時代早期の遺構



1. 3号集石（東より）



2. 3号集石（炊き口より）

図版19 縄文時代早期の遺構



1. 4号集石（南より）



2. 5号集石（東より）

図版20 縄文時代早期の遺構



1. 6号集石（東より）



2. 7号集石（北より）

図版21 縄文時代早期の遺構



1. 8号集石 (西より)



2. 9号集石 (北より)

図版22 縄文時代早期の遺構



1. 1号配石土坑（西より）



2. 2号配石土坑（南より）

図版23 縄文時代早期の遺構



1. 3号配石土坑（南より）



2. 4号配石土坑（北より）

図版24 縄文時代早期の遺構



1. 1号土坑 (北より)

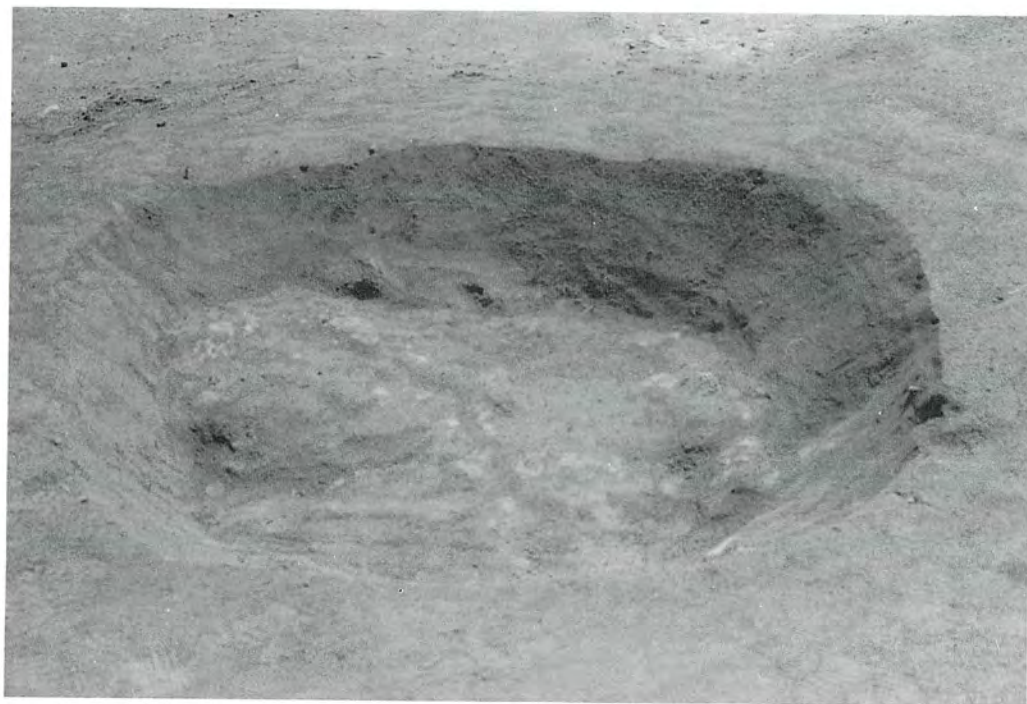


2. 2号土坑 (東より)

図版25 縄文時代早期の遺構



1. 3号土坑 (西より)



2. 4号土坑 (西より)

図版26 縄文時代早期の遺構

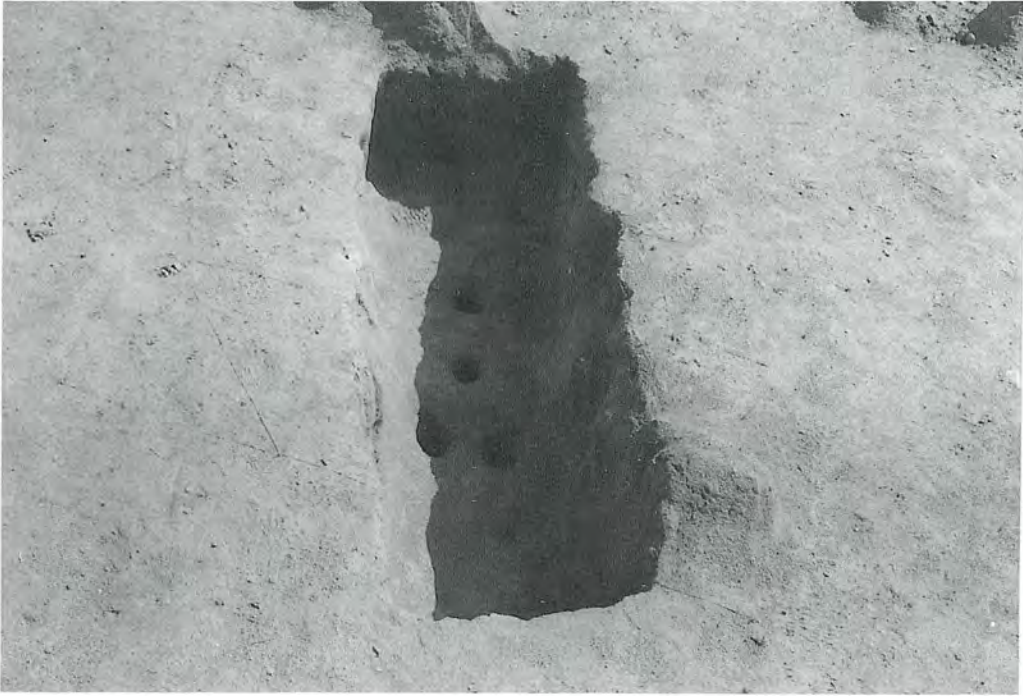


1. 5号土坑（東より）



2. 6号土坑（東より）

図版27 縄文時代早期の遺構



1. 7号土坑（西より）



2. 8号土坑（南西より）

図版28 縄文時代早期の遺構



1. 9号土坑（西より）

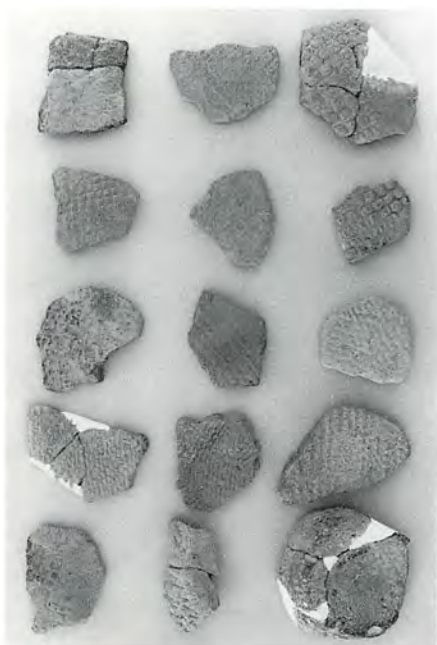


2. 10号土坑（北東より）

図版29 縄文時代早期の遺物



1. 押型文土器 (楕円文・格子目文)



2. 押型文土器 (楕円文)



3. 押型文土器 (山形文)



4. 押型文土器 (山形文)

図版30 縄文時代早期の遺物



1. 円筒形条痕文土器



2. 円筒形条痕文土器



3. 条痕土器



4. 手向山式土器

図版31 縄文時代早期の遺物



1. 手向山式土器



2. 塞ノ神式土器



3. 塞ノ神式土器



4. 縄文・燃糸土器・平椀式土器

図版32 縄文時代早期の遺物



1. 無文・刺突文土器



2. 尖頭器 (上右 4点)・抉入石器



3. 打製・磨製石斧



4. 石製品・土製品

あ と が き

ようやく、狸谷遺跡の調査報告書を発行することができた。整理期間と予算、そして整理要員の数に制限されての仕事であり、その枠の中で出来る範囲内の最大限のものしかここに提示できなかつた。整理の大半が遺物の実測にあてなければならないという状況では致し方無いものと思う。それだけに、報告の基本姿勢として、出来るだけ多くの資料を提示し、それに関する情報を示すということを心掛けてきたつもりである。

熊本県下の先土器時代研究は、熊本県教育委員会が当該時期を対象とした調査を実施したり、肥後考古学会でも特集号を組むなど、最近とみに活発化している。こうした情勢の中で、この調査報告書がその潤滑油となることを期待したい。

最後になってしまったが、発掘調査から報告書作成の間、お世話になった方々がいる。そこで、その方々のご芳名を記すことによって、感謝の意を表したい。

〔発掘調査〕

西英吾・田原高憲・松尾文夫・吉村時男・内田スミカ・岡元安子・久保山八重子・城子よしこ・高山静子・谷川佐千子・土肥美鶴・中村祐子・西川明子・福山イツ子・福山フクミ・松舟妙子・宮田れい子・宮原栄子・村田文字・矢棧間チク・柳瀬幸子・山下よしこ・吉村チエコ・米田ヤエ子・蕨野京子・蕨野トミカ

〔整理〕

吉永都美子・水本寿美子・宮本扶美子・永広絹代・淵上慶子・木下俊恵・前田志磨江・中村絹子・瀬丸延子・古賀ゆみこ

〔報告書作成〕

島津義昭・松本健郎・江本直・高木正文・野田拓治・大田幸博・西住欣一郎

熊本県文化財調査報告 第90集

狸 谷 遺 跡

昭和62年 3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行

〒862 熊本市水前寺 6丁目18番1号

印刷 白木印刷株式会社

〒862 熊本市九品寺 5丁目 9-35

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 90 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：狸谷遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日